

# S泊地の日常風景

夕月 日暮

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ソロモン諸島の片隅にあるS泊地。泊地の周囲にあるのは島の村落ばかり。

野菜が食べたきや畑を耕し、魚が食べたきや釣り上げる。快適な住居が欲しければ自ら建てる。

そんな泊地の日常は、深海棲艦との戦い以外にもいろいろなことに彩られていた――。

これは、そんな泊地の艦娘と周囲の人々の日々を綴った短編集。

※各エピソードは世界観こそ共有していますが、それぞれ独立した話です。気になるものだけでもお気軽にお楽しみください。

※作者の他の艦これ作品と世界観を共有しています。

※感想・評価お待ちしております。お気軽にお送りください。

※本作品は pixiv でも公開しています。

※同一世界観の「南端泊地物語」シリーズもよろしく願います。

# 目次

まとめ

登場人物まとめ

本編

かき氷を作ろう！（鬼怒）

島の図書館に行こう（鬼怒・磯波）

友達と遊ぶ約束をした（鬼怒・磯波）

作物防衛ライン（鬼怒・龍驤・赤城）

倉庫増設計画（1）（鬼怒・大淀・龍驤）

倉庫増設計画（2）（鬼怒・龍驤・那智・吹雪）

妖精さんの待遇事情（龍驤・加賀・瑞鳳）

彼女たちの本懐（駆逐艦多数・香取）

艦娘だつて風邪はひく（鬼怒・磯波・武蔵）

三年目の終わりに（叢雲・漣・曙・那珂・白雪・大淀・明石・間宮）

彼女たちの工廠（鬼怒・アクイラ・初春・夕張）

磯の風香る食卓（磯風・春雨・早霜）

四葉祭（1）——お祭り告知編——（第二十二駆逐隊・ウオースパイト）

伊26・アクイラ・叢雲

四葉祭（2）——お祭り企画編——（第二十二駆逐隊・望月・陽炎）

102 四葉祭（3）——お祭り準備編——（陸奥・第二十二駆逐隊・鬼怒・ウオースパイト）

四葉祭（4）——お祭り開催編——（第六戦隊・皐月・ウオースパイト）

スパイト

叢雲

112

107

1

四葉祭(5) — お祭り後片付け編 — (伊26・浦波・青葉・長門・

加賀・叢雲)

北方秋刀魚漁の夜(龍田・木曾)

とある古兵の一日(天龍・鹿島・夕張・初春・子日)

今昔輸送物語(鬼怒・浦波)

誰のための功名(江風・照月・夕立・時雨)

泊地内ギャンブル事情(若葉・荒潮・霰・隼鷹・飛鷹)

忘年会シーズンの一幕(間宮・伊良湖)

二年前のクリスマスの夜(長門・大和・武蔵)

蕎麦粉が足りない! (赤城・神通・鳳翔)

明けた年の一日目(夕雲・阿賀野型姉妹・ビスマルク・プリンツ

オイゲン・第六駆逐隊)

萩風と七草(第四駆逐隊)

おヒゲ騒動(朝潮型姉妹・日向・足柄)

地下の秘密基地には浪漫がある?(陽炎・不知火・黒潮・親潮・山

城・多摩)

節分はデンジャラス(神風・春風・朝風・祥鳳・羽黒)

島の迷い子(秋津洲・瑞穂・コマندانⅡテスト)

バレンタインの一幕(早霜・不知火・清霜・磯風)

神社でまったり(扶桑・山城・秋雲・瑞鶴・隴)

潜水ライフの過ごし方(伊13・伊14・伊168・伊8)

201

テスト前の戦争(深雪・卯月・涼風・朝霜・鬼怒)

悪気はなかった(瑞鶴・瑞鳳・若葉・初霜)

返礼は心を込めて(最上・扶桑・山城)

217 211 206

197 191 186 181 176 171 166 161 156 151 147 142 137 132 127 122 117

都会は遠い (五十鈴・名取・大淀)

222

馬鹿を見るのは誰だ (敷波・イタリア・ローマ・初風・天津風・時津風・吹雪・叢雲)

227

プロジェクトS 技術者たちの挑戦 (鈴谷・最上・初春・夕張・大鳳)

233

火傷しないよう気をつけな (雲龍型姉妹・時津風・春風・松風・藤波)

238

平凡な写真を (あきつ丸・長月・高雄・愛宕・まるゆ・呂500)

242

艦としてのこれまでと (長波・高波)

247

戦いの合間に (祥鳳・瑞鳳・多摩・木曾・綾波・ウォースパイト・伊勢)

252

帰還途中、東京にて (鬼怒・神威・那智・足柄・磯風)

256

静かな泊地の朝 (山風・白露・五月雨)

261

グラフと豆の木 (グラフ・ビスマルク・レーベ・マックス)

265

この世の理とは速さなのかもしれない (1) (長門・島風・秋津洲)

270

この世の理とは速さなのかもしれない (2) (鳥海・翔鶴・比叡・大

井・熊野)

275

この世の理とは速さなのかもしれない (3) (島風・長門・伊19)

280

世話好きのジレンマ (由良・名取・潮・夕張・鬼怒・阿武隈)

285

七夕祭りだ! (鬼怒・龍驤・五十鈴)

290

善意の運び手（大鷹・龍驤・蒼龍・飛龍）―― 295

ホラーハウスへようこそ（江風・海風・リベツチオ・風雲・照月）

300 目指せトップスター（阿賀野・能代・伊19・伊8・武蔵・那珂）

305 自分のイメージというのは大抵少しずれている（沖波・鈴谷・初月）

―― 310

嵐のフィッシング挑戦録（嵐・グラーフ・鹿島・舞風）―― 315

ローマでの休日（吹雪・叢雲・綾波・天霧・狭霧）―― 320

港町の少女（弥生・卯月・朝霜）―― 326

理髪店に行こう（鳳翔、扨捉、占守、国後、敷波）―― 331

姉いろいろ妹いろいろ（菊月、吹雪、球磨、千歳、金剛、アークロ  
イヤル）―― 336

釣りバカ対決 in 北方（響、暁、ガングート）―― 342

住めば都のS泊地（リシユリユ・コマندانIIテスト・速吸）

348 補佐官妙高の夜（妙高・羽黒・五月雨）―― 354

快適なインドアライフを求めて（望月・三日月・龍鳳）―― 359

流れものの即興曲（睦月・如月・霧島・比叡）―― 364

盤上のベースボール（1）（第十七駆逐隊・アイオワ・サラトガ・瑞  
鶴・衣笠）―― 369

盤上のベースボール（2）（第十七駆逐隊・アイオワ・サラトガ・瑞  
鶴・衣笠）―― 374

裏司令部の奇妙な仕事（深雪・電・木曾・天城・葛城）―― 379

発熱日和（天津風・雪風・島風・長良・初風・時津風・明石）

楽して儲けるにはそれなりの条件が要る (日向・伊勢)

389

はぐれ者の第一歩 (利根・旗風・松風・朝風・春風)

394

過疎地は辛いよ (三隈・最上・熊野・鈴谷・青葉・夕張)

400

力と集中力が必要なもの (雷・電・夕雲・卷雲)

405

決戦、おでん会! (朝潮型)

411

寝正月にご用心 (加古・衣笠・青葉)

416

急募・休日の過ごし方 (阿武隈・鬼怒・初雪)

421

龍田、逃げる (龍田・木曾・扶桑・伊19・伊168)

427

お化けたちが行く (白露、村雨、時雨、夕立、涼風)

433

艦娘式海上野営 (高雄・球磨・秋津洲・長波・子日・若葉)

不器用姉妹のバレンタイン (初春・雪風・霞・初霜)

443

思い出は掃除の手を止める (白雪・叢雲)

448

倉廩満ちて礼節を知れ (鬼怒・那智)

453

レイテ沖からの帰路 (赤城・加賀・三隈)

456

アイオワをさがせ (神風・春風・親潮・日振・大東・アイオワ)

儉約はつらいよ (佐渡・対馬・松輪・ガンビアIIベイ・磯風・浜風)

467

桜に合うお味はどれ? (タシユケント・ジャーヴィス・千代田・千

歳)

473

よみずいランドに行こう! (鬼怒・山城・北上・藤波・酒匂・ア

クロイヤル)

478

S 泊地業務日誌 (長門・吹雪・加古・蒼龍・あきつ丸・伊58・酒

匂)

こどもの日・日独仏版(神風・リシユリユール・ビスマルク)

487

493

良いものを作るためには諦めないことが肝要である(ウォースパイ  
ト・明石・瑞鶴・夕張)

498

趣味に没頭している人に質問をするときは覚悟しろ(涼風・イント  
レピッド・伊400)

503

摩耶様流離譚―ぼんやり編―(摩耶・伊8・鳥海)

507

ある夏の出会い(長門・レ級)

512

南の島のスケートリンク(夕張・舞風・子日)

518

理由のないこともある(鬼怒・大井・北上・天龍)

523

山川論争(古鷹・加古・青葉・衣笠)

528

策士は一日にしてならず(サミュエル・B・ロバーツ)

533

弾けるものができました(鳳翔・加賀・神威)

539

夢を見る泊地(岸波・鬼怒)

545

神鷹の疑問(神鷹・大鷹・龍驤・鳳翔)

556

ハロウインの流儀く半端なイベントはつまらんだらう(ローマ・

ガングート・ネルソン・アイオワ・朝潮・荒潮)

561

イモを焼く(風雲・リベツチオ・巻雲・マエストラーレ)

566

心地よい香りの誘い(皐月・ゴトランド・長月)

571

戦場と日常の喧騒(福江・ガングート・占守)

576

はじめてのオフ会(浜波・藤波・早波)

580

S泊地企画会議の風景(叢雲・木曾・加賀・瑞鳳・択捉・伊8・速

吸)

吸)

587

狐日和(風雲・峯雲・ジョンストン・日進・早波)

594



艦娘カード（矢矧・陸奥・愛宕・佐渡・若葉・あきつ丸）―― 601

その足で走り行く（長良・鬼怒・ゴトランド）―― 607

リングの意味（荒潮・満潮・天龍・龍田・名取・五十鈴）―― 612

センスが足りない！（卯月・弥生・朝霜・涼風・深雪）―― 616

軽巡コミュニケーション（神通・大淀）―― 621

不確かな言葉の形（夕立・山風・海風・神通）―― 626

右も左も分からないけど（秋津洲・漣）―― 632

混ぜて混ぜて目が回る（北上・隼鷹・飛鷹・大井・日向）―― 638

活気の集う場所―― 643

知らぬ母親（龍驤・子日・初霜）―― 648

昼下がりのうどん定食（白雪・磯波・ウォースパイト・吹雪）―― 652

とある鎮守府の奇妙な話―― 657

旅をする日記帳（プリンツォイゲン・朝雲・山雲・酒匂）―― 662

そろそろ寝ないと（最上・三隈・ルイージ・伊58）―― 667

虫の心を理解するためには（ジョンストン・舞風・大和）―― 672

S泊地人事評価（択捉・加賀・瑞鳳・古鷹）―― 677

歩む道は分かれても（海風・山風・江風・涼風）―― 682

閉ざされた場所にて（翔鶴・大鳳・アクイラ）―― 688

日々は続いていく（鬼怒・由良・コロラド・陽炎）―― 692

戦艦たちの忘年会（扶桑・日向・山城・伊勢・長門・陸奥）―― 697

顔は見えずとも（北上・大井・間宮・伊良湖・旗風）―― 702

霧の海の探偵さん（ジェーナス他）―― 706

## まとめ

## 登場人物まとめ

【登場人物】（着任順）

—— 艦娘 ——

### ● 叢雲

泊地副司令。提督が何度か替わっていること、泊地設立当初から所属していることから、事実上泊地の中心人物。

泊地の運営・管理を行う司令部の一員でもあり、普段は司令部メンバーが集まる司令部室に缶詰状態。

面倒見が良いが怒らせると怖い泊地の親御さんポジション。たまにノリの良い一面も見せる。

普段は表に出さないが、今もときどき初代提督のことを思い出しているらしい。

### ● 明石

泊地最古参組の一人。艦装が完成したのは2014年春。

泊地技術部の部長。ただ、研究は部員が好き勝手にやっており、彼女はそこで生じた問題の尻拭いをしていることが殆ど。

備品は大事にが motto で、モノを粗末に扱う輩にはきついお仕置きを据えることもある。

### ● 大淀

泊地最古参組の一人。艦装が完成したのは2014年夏。

泊地の資金面を管理している。慢性的な資金不足に悩まされているため、よく金策を練っている。

泊地のメンバーが何か企画を催す度に壁となって立ちはだかる存在。裏を返すと祭り好きの面子に悩まされる苦労人。

二代目の提督とは特に親しく、その関係性はさながら姉妹のようだったとも。

### ● 間宮

泊地最古参組の一人。現在は伊良湖と二人で間宮食堂を切り盛り

している。

衣食住のうち食を担っているため、ある意味泊地で最も重要な人材と言える。

美味しい料理と物腰の柔らかさから、多くのファンがいるとか。

鳳翔さんと並び「さん」付けされることが多い。

●漣

泊地最古参組の一人。

自由奔放な振る舞いが目立つが、仕事はきっちりこなす派。

潜水艦が苦手。

●曙

泊地最古参組の一人。周囲へのツツコミが冴え渡る。

釣り同好会にも所属しており、自作の釣り竿をいっぱい持っている。

潜水艦が苦手。

●那珂

泊地最古参組の一人。アイドル活動も実際に行っており、泊地の宣伝部長を務めている。

他の拠点の那珂ちゃんたちとNKC20というグループを結成しているらしい。

アイドル活動に関してはシビア。艦娘としての活動も割とシビア。

●白雪

泊地最古参組の一人。

叢雲にとっては頭が上がない相手。

●如月

魅力的なレディになるための努力は惜しまない。

睦月型が全員集合するときには彼女がまとめ役になることが多い。

●電

争いを好まない大人しい子。だがやるときはやるし言うことは割とハッキリ言う。

第六駆逐隊のメンバーと、毎年戦いで亡くなった人々の墓参りをしている。

深雪率いる裏司令部の一員でもあるが、これは裏司令部のストツパーになるよう叢雲に頼まれてのことである。

●五月雨

素直な性格。割と喜怒哀楽がハッキリしているが、善良な性質だからか怒は長続きしない。

朝の散歩が趣味。

●響（ヴェールヌイ）

マイペース艦娘其之一。

よく暁をおちよくっているが、それは親愛の裏返しでもある。

●吹雪

組立のスペシャリストで、建材を組み合わせていくのが得意。

叢雲のことを気にかけている。綾波からはボケ派と思われている節あり。

長女の会の一員。

●初春

泊地技術部の一人。初春型の艦装の問題を解消したいという思いから、艦装弄りが趣味になった。

夕張と組んで無茶な実験をすることが多く、その都度明石に注意されている。

●長月

文月の頼み事は断れない。

あきつ丸とはなんとなく気が合う間柄で、よく一緒に行動している。

●木曾

泊地司令部メンバーの一人。多摩曰く「姉使いの荒い妹」。

ナチュラルに周囲への気配りができるイケメン。个性的な姉たちを持つているからかもしれない。

●天龍

面倒見が良く周囲から頼りにされる古兵（ふるつわもの）。

朝に剣の素振りをするが日課。鹿島が着任してからは一緒に素振りをする仲になった。

● 朧

マイペース艦娘其之二。

泊地内の神社でごろごろしていることが多い。

● 龍田

おっとりとした性格だが、狼藉者には怖い一面を見せる。

勘が鋭い。料理は結構得意な方。

● 睦月

睦月型姉妹のムードメーカー。弾き語りの才を持つ。

菊月曰く、皆をまとめるよりも自分が先頭に立って引っ張っていくタイプのリリーダー。

● 摩耶

泊地内の図書館を管理している。

やたら自分に構ってくる愛宕がちよっと苦手。嫌いと言うわけではない。

● 多摩

のんびり屋に見られがちだが割と活動的。寒さに強い。

球磨型の艤装なしの肉弾戦では、大井と並んで勝率トップらしい。

● 千歳

長女の会の一員。酒はナチュラルに飲む派。気づいたら口にしているというのが本人の弁。

年末年始には、戦いで亡くなった人々の墓参りをしている。

● 村雨

釣り同好会の一員。駆逐艦の中では比較的座学の成績が高め。

やたらアダルトイナイメージを持たれるが、本人は別に意識してそのように振る舞っているわけではないとか。

実はお笑い好き。

● 暁

響におちよくられることが多く、それに対してツツコミを入れる姿がよく目撃されている。

目標とする大人なレディは何人かいるが、最近そこにガングートが加わったらしい。

●敷波

ちよつと素直になれない年ごろの女子。

嘘が苦手なので、エイプリルフールは人一倍警戒心を高めている。

●文月

天真爛漫な愛されキャラ。

文月に頼まれるとNOと言えない艦娘が多数いるため、泊地における陰の実力者ではないかという説がある。

●長良

トレーニング大好き。毎日のランニングは欠かせない。

ただの体力馬鹿ではなく、座学もきちんとかなす。赤点を取った鬼怒に雷を落とした。

●加古

寝ることとお酒を飲むことが日課。食べるのも好き。

きちんと目が覚めると有能。

年末年始は体重が気になるようだ。

●愛宕

鷹揚な性格の持ち主。よく高雄を弄っている。

構いたがりな性格なので、摩耶や鳥海からは若干避けられがち。

●川内

夜戦大好き。夜になると常人には想像もつかない動きをするらしい。

普段はあまりやらないが、料理はかなり上手。飲み物はコーヒー

派。

ホラー・FPSものからゲームにハマり、アクション全般を得意とするようになった。

●名取

人にあまり強く出れない気弱な性格。

由良と一緒に育成ゲームにはまる。

●満潮

艦艇時代仲間を失った経験から、一人になるのが苦手。

某怪盗三世の登場人物の中では、主人公の相棒が好み。

おでんはみそ派。お酒はあんまり強くない。

●夕立

戦いを本分とする武闘派。とにかく暴れて敵を攪乱させるのが良  
いと考えており、武装にはあまり拘りが無い。

戦時は勇猛果敢だが、平時は割と大人しい。

●時雨

冷静なツツコミで周囲の暴走を抑えるポジション。

幸運艦だしなんとかしてくれという頼みは全力で断るスタンス。

●綾波

ほんわかした性格だが何気に武闘派。武装に関しては主砲重視。

笑顔のままナチュラルに凄いことをやってのけることも。

●神通

厳しくも優しい駆逐艦たちの指揮官ポジション。

ただ、たまに天然と思いき言動を取ることがある。

ヒゲマニアの一角。

●五十鈴

芸達者で様々な技能を当たり前のように使いこなす。

天才肌ではあるが、人に物事を教えるのも上手く、先生ポジション  
が板についてきている。

●雷

第六駆逐隊のまとめ役。ただしまとめきれているかは微妙なところ。  
ろ。

困っている人がいると放っておけないタイプ。

人の昔話を聞くのが割と好き。

●菊月

睦月型の中では傍観者のポジションにすることが多い。

中心にはいないが、その分他の姉妹艦をよく見ている。

●不知火

釣り同好会の一員。

口数が少ないせいで誤解されがちだが、割と感情表現はストレート  
な方。

●妙高

司令部メンバーの補佐官を務めている。  
ルーチンワークは得意で、日々の業務に関しては司令部メンバー以上に優秀。

ただし臨機応変な対応はちよつと苦手。

那智や初風には「怒ると怖い」と恐れられている。

●潮

可愛い動物やモンスターを育てる系統のゲームが好き。

好きになったことには集中するタイプのため、かなりのやり込み勢である可能性がある。

●夕張

泊地技術部の一人。主にテスト計画の立案や実証実験を担当する。  
設計・開発はさほど得意ではない。

初春と一緒に無茶な実験をやることが多く、明石によく注意されている。

資格ゲッターでもあり、たまに本土に行つては様々な資格（主に免許）を取得している。

趣味はゲームとアニメ鑑賞。ゲームをやるときは集中して黙りがち。ジャンルは特にこだわらない。

●鳳翔

泊地内で小料理屋を営んでいる。優しく気立ての良い性格なので、多くの艦娘から慕われている。

ただし、滅多に怒らないものの怒ると空母の中でも一番怖いらしい。

間宮さんと並び「さん」付けされることが多いが、本人としてはちよつと複雑らしい。

●蒼龍

空母の中では割と緩い性格の持ち主。飛龍程ではないが、よく食べる。  
キャンパスライフに憧れを持っているらしい。

●由良



世話好きで鬼怒・阿武隈のことをよく気にかけている。  
潮から紹介された育成ゲームにはまる。

●磯波

読書好きで読んだ本に影響されやすい。

一見すると大人しそうだが、上官の球磨曰く「やるときはやる女」  
「怒らせてはいけない」らしい。

●足柄

礼号組で一緒だった霞・朝霜・清霜の保護者を自任しているが、構  
い過ぎるためか逃げられることも多い。

その言動から誤解されがちだが、割とまめな作業や臨機応変な対応  
が得意。ルーチンワークはちよつと苦手。

●青葉

たまに泊地の機関紙を作成したりしている広報担当。

報道に大切なのは誠実さだと考えており、不確実な情報は取り扱わ  
ず、取材も事前にアポを取ってから行うタイプ。

焼き鳥は断然塩派。

●山城

神社で扶桑と一緒にのんびりしていることが多い。

面倒ごとは苦手だが、頼まれると嫌とは言えない。

●雪風

泊地第一艦隊のエースの一角。明るい性格の持ち主だが、艦艇時代  
の経験からか、物事に対する考え方はかなりシビア。

ツッコミも割と辛辣なものが多いが、第一艦隊の面々は他人の話を  
あまり聞かない者が多いので、あまり効いていない。

●筑摩

利根と並んで泊地の航空巡洋艦の主力とされる実力者。

クリスマスのときに利根にサンタコスをさせようとしたらしい。

●衣笠

よく青葉に乞われて機関紙作成の手伝いをしている。

焼き鳥は断然たれ派。

泊地野球部の一員。ポジションはピッチャー。

●赤城

農業部の部長。農家の道雄さんから農業に関するノウハウを授けられているため、泊地の中でも特に農業について造詣が深い。

食への拘りは相当なものがあるが、食べ物が限られているときは駆逐艦を優先する等の自制心も持ち合わせている。

●飛鷹

隼鷹ほどではないが、それなりにギャンブルを嗜む。

華やかな生活に憧れているが、泊地が貧乏なので自分そんな生活は来そうにない。

●扶桑

山城と一緒に泊地でのんびりしていることが多い。

西村艦隊のお姉さんポジションで、頼りにされることが多い。

泊地技術部の一人。

●最上

悪気はないがたまにトラブルを起こしてしまううっかり八兵衛。

愛されキャラでもあり、最終的にはなんだかんだで許されている。

泊地技術部の一人。

●那智

何かに理由をつけて飲みたがる酒豪。一応、理由がなければ飲むのを抑えられる。

建築を得意とし、その中でも杭打ちに関しては泊地内で右に出るものがない。

●高雄

委員長気質な性格。生真面目な点を愛宕によくからかわれている。

長女の会の一員。長女らしく見られないのが最大の悩み。

●球磨

ハードボイルド小説好き。

個性的な妹たちに手を焼いているが、自分自身も個性的だという点は認めようとしなない。

長女の会の一員。

●伊勢

程良く緩くフランクな性格。どこか達観している節もある。料理は結構得意。

お酒はかなり飲む方で、周囲にも飲ませまくる。

●大潮

裏表のない素直な子。あれこれと考えるより行動する派。そのためか騙し合いは大の苦手。

ただ、騙そうとする相手に凄まじい罪悪感を（自覚なく）与えるため、騙されて泣きを見ることは少ない。

●羽黒

一見控え目そうに見えるが、割と言うことは言うしやるときはやる武闘派。

姉たちに対しては割と遠慮がない。

●荒潮

遊びとしてのギャンブルが好き。引き際は弁えている。成熟した大人な男性が好みらしい。

おでんは生姜醤油派。お酒はあんまり強くない。

●鳥海

泊地の図書館を管理している。

自他ともに認める知性派で腹芸も得意とする。

ただし思考の読みにくい相手やイレギュラーな事態への対応は少々苦手。

●陽炎

暇さえあれば泊地のある島を歩き回っている。

様々な集落で手伝いを買って出るため、お年寄りや中高年から絶大な人気を誇る。

●祥鳳

妹である瑞鳳にはかなり甘い。瑞鳳共々寒さにはあまり強くない。お酒はそこそこ嗜む。

●隼鷹

ギャンブル好き。思考の切り替えの早さと相手を騙すダミーフェイスが持ち味。

その気になれば完璧な淑女として振る舞えるが、本人曰く「面倒臭い」。

●日向

瑞雲は好きだが布教することは考えておらず、一人で楽しみたい派。

何かと自分を瑞雲狂にしようとする風潮に抵抗感を持っているらしいが、半ば事実なので否定もできないというジレンマ。

思考がとにかく読みにくいらしく、騙し合いでは他者が予想しない行動を取ることが多い。

●千代田

割と天然気味な姉の面倒をよく見る出来た妹。

千歳に対する思いは、尊敬の念半分対抗心半分。

●朝潮

しっかり者の長女として振る舞おうとしているが、個性的な妹たち相手だと今一つまとめきれない。

某怪盗三世の登場人物の中では、つまらぬものを切ってしまう人が好み。

対潜活動重視派。おでんの味付けは特にこだわらない。

●北上

球磨型の中では比較的常識人だが、姉妹艦をまとめたり抑えたりするのは面倒なのでやらない。

泊地内屈指の殲滅力の持ち主で、重要な作戦の際はよく駆り出される。そういうときは結構胃が痛いらしい。

●利根

筑摩と並んで泊地の航空巡洋艦の主力とされる実力者。だが泊地がある島の子からの渾名は「ナノジャ」。

クリスマスのとき筑摩にサンタコスさせられそうになっただけらしい。

●黒潮

陽炎型姉妹の影のまとめ役。

長女である陽炎は直感的に妹たちをまとめているので、黒潮がフオ

ローしないと話が進まなくなることがよくある。

●比叡

いつも気合十分な元気の子。料理は苦手で、周囲の不興を買うため自制している。

楽器の修理は得意。

●霧島

割と真つ当な知性派。ただ、回りくどいやり方は好まず比較的ストレートな手を打つことが多い。

金剛型姉妹の中では打楽器担当。太鼓の達人がやたらと上手い。

●金剛

周囲を自分のペースに巻き込んで盛り上げることに定評がある。

音楽はジャンル問わずいろいろ好き。

長女の会の一員。

●龍驤

気風のいい性格で周囲から頼られることの多いベテラン感のある軽空母。

人当りも良く交友関係も広い。一方で後輩空母たちからは「怒らせたいけない」と恐れられてもいる。

●古鷹

泊地司令部メンバーの一人。提督や叢雲のサポートを幅広く行っており、泊地でかなり重要なポジションにいる。

腹芸はあまり得意ではないようで、嘘をつこうとしても傍から見るとバレバレだったりする。

●初雪

インドア系艦娘の一角。プログラムに興味があるらしい。

自分が祭りに参加するのは面倒だから嫌だが、祭りを見るのはそんなに嫌ではない。

たまに絵を描くことがあるようで、結構上手い。紙とペンには何かこだわりがあるようだ。

●望月

インドア系艦娘の一角。自分で簡単なゲームを作る程度のプログ

ラミングスキルは持っている。

面倒は嫌いで、面倒が降りかかるならそれに見合う報酬が欲しいと思っっている。しかし大抵上手くないかない。

三日月には頭が上がらないようだ。

●涼風

泊地お馬鹿四天王の一角。

姉妹艦思いの良い子だが、後先考えずに行動する悪癖がある。

●若葉

ギャンブルマニア。勝ち負けには拘りがなく、負けは負けで「それもまた面白い」と思うタイプ。

感情表現があまり上手くない。自分の気持ちを的確に汲み取って通訳してくれる姉妹艦には感謝している。

●子曰

周囲から呑気だと思われがちだが、本人は実のところ結構いろいろ考えている。

ただ、それをあまり表に出さないだけである。

●初霜

普段は誰にでも分け隔てなく優しい人格者だが、勝負ごとになると目が据わる。

雪風にとっては心の清涼剤らしい。

●三日月

睦月型の真面目担当。イベントの前日は緊張して眠れなくなるタイプ。

望月を手玉に取っている節がある。

●大井

一に北上、二に魚雷、三四が姉妹で五に間宮さんという優先順位。甘味好きで間宮食堂の常連でもある。

言動は厳しいが相手を見捨てることはしない。良い人というのはもはや泊地で常識になりつつあるが、本人は否定している。

北上と並ぶ殲滅力の持ち主で、やはり重要な作戦のときはよく駆り出される。

●霞

心配性なあまり、いつも大声で誰かを注意しているお母ん系艦娘。末妹ということもあって朝潮型の姉たちからは基本可愛がられている。

礼号組からもやたらと愛されているが、本人としてはもうちよつと落ち着いて欲しいらしい。

ヒゲマニアの一角。

●皐月

普段は無邪気だがたまに大人びた一面を見せる。駆逐艦の中では結構食べる方。

細かいことを考えるのは苦手だが、人を動かすのは得意。

●霞

感情を表に出すことはないが、姉妹の会話に茶々をいれたり霞をかかったりギャンブルに興じたりと、行動はフリーダム。

頭の回転が速いうえに思考を人に読ませないので、泊地の中でもかなり腹芸が得意な方。

お酒はかなり強い。どれだけ飲んでも素面。

●加賀

司令部メンバーの一人。

いつも厳しめの表情をしているため誤解されやすいが、実際は優しい。というか周囲にはかなり甘い。

●島風

スピード狂。ただ、艦隊行動を乱さないようにするくらいの協調性はある。

普段は島風便なる郵便配達っぽいことをしているらしい。

艦種や艦型に囚われず、かなり幅広い交友関係を持っている。

●翔鶴

泊地内でもトップクラスの実力者だが、強気になれない性格のせいでそういう雰囲気あまりない。

将棋は相手の攻勢を受け流しながら機会を掴み取るスタンス。

●榛名

金剛たちとよくお茶会をしている。

ビスマルクが着任して間もない頃に教導艦を務めており、彼女とは現在も深い信頼関係で結ばれている。

●飛龍

マイペースでのんびり屋。しかしのんびりした言動のままいつまでも戦場で戦い続けられる気骨の持ち主でもある。

空母の中でも特によく食べる。

●伊168

潜水艦組のリーダー的存在。個性豊かなメンバーのとりまとめに苦労している。

普段は常識人だが、相手に舐められることだけは我慢ならぬらしく、無茶をすることもある。

●陸奥

多くの艦娘の悩みを解決に導いた『動く相談室』。彼女に憧れる艦娘は結構多い。

泊地最高戦力の一角でもあるが、本人はあまり戦いを好まない。

●阿武隈

姉である鬼怒が巻き起こす騒動を程良い距離からいつも眺めている。

秋雲に感心される画力を持つが、やや癖のある絵柄らしく「後世になつてから評価されそう」と評された。

ゲームはたまにやる程度で、そこまで得意というわけではない。

ヒゲマニアの一角。

●鬼怒

泊地内での様々な出来事に首を突っ込んだり、時には自分から事を起こしたりするイベントメーカー。

司令部の仕事をよく手伝っており、たまにその見返りでオイシイ思いをすることも。

かなり幅広い交友関係を持っており、泊地の外にも友人・知人がたくさんいる。

老若男女問わず誰とでも気さくに接することができる性格の持ち



主。ただ、姉たち（特に由良）には頭が上がらない。

絵は自他共に認めるくらい下手。ゲームはたまにやる程度で、そこまで得意というわけではない。

●深雪

泊地お馬鹿四天王の一角にしてリーダー。裏司令部の司令でもある。

敵に対しては割と容赦がなく、口上の途中でも必殺の深雪スペシャルを放つ。

●舞風

明るい言動で周囲を盛り上げるムードメーカー。

一方で、物事に対して達観している様子を見せることもある。

●長波

夕雲型のまとめ役。ストッパーともいう。

かなりの武闘派だが無用な争いは好まない。将来は教師になりたらしい。

●伊19

潜水艦組の中でも相当のうわばみ。しかし伊14の登場により『潜水艦一のうちうわばみ』の称号は譲り渡すことになってしまった。

潜水艦最速を自任しているが、それも伊26と同等。最近自分のアイデンティティについて悩んでいるとかいないとか。

土木系アイドルユニットSHLOMOのメンバー。

●能代

阿賀野型の良心。姉妹がそれぞれタイプの違い変わり者なため、自分も吹っ切れてしまおうかと思うことがある。

土木系アイドルユニットSHLOMOのメンバー。

●伊58

伊14や伊19ほどではないが、潜水艦組の中では結構飲む方。よく二日酔いになる。

土木系アイドルユニットSHLOMOのメンバー。

●熊野

最初は策謀を巡らせ、最後は力押しで攻めるのが好き。本人曰く

『智勇兼備』。

レディとして振る舞おうとしているが、どことなくズレている。

●伊8

司令部メンバーの一人。

読書マニアで、自室が泊地第二図書館と言われるような状態になっている。

土木系アイドルユニットSHLOMOのメンバー。

●武蔵

普段は飄々と過ごしている泊地最高戦力の一角。土木作業が滅法得意。

土木系アイドルユニットSHLOMOのメンバー。

夏のある時期になると深酒をする。いろいろとこの時期には思うところがあるらしい。

●初風

他の陽炎型や島風とよく一緒に遊んでいる。

妙高と一緒にときどき司令部の手伝いをしている。

●阿賀野

ポジティブシンキング。一見すると単なるお気楽娘に見えるが、たまに物事の本質を突いた発言をすることもある。

土木系アイドルユニットSHLOMOのメンバー。

●瑞鳳

司令部メンバーの一人。姉の祥鳳共々寒いのは苦手。

模型マニアで、自室はプラモが大量に飾られている。

人当りの良い性格で幅広い交友関係を持っている。特に瑞鶴とは頻繁に互いの部屋を行き来するくらい仲が良い。

初代提督を父、二代目提督を妹のように想っている。

●秋雲

神社に入り浸って静かに絵を描くのが好き。たまに人に絵を教えたりもしているらしい。

夏・冬に東京へ出向いている。

●鈴谷

最上型の常識人ポジション。天然気味の他三人にツツコミを入れつつなんだかんだで面倒を見たりしている。

距離感近めで人に接するため、引つ込み思案な艦娘からビツクリされてしまいがち。

●白露

ときどき五月雨に付き合っつて朝の散歩をしている。

妹たちについては基本放任主義だが、助けを求められた場合はきっちり相談に乗っつてあげる（解決するとは限らない）。

●瑞鶴

泊地技術部の一人。泊地空母組の中心人物でもある（リーダーとかトップとはまた別）。

将棋はガンガン攻めていくスタイル。

泊地野球部の一員。ポジションはピッチャー。

●巻雲

あまり次女に見えない夕雲型の次女。

本人としてはしつかりしているつもりだが、傍から見ると若干危なっかしく映る。

面白いことには全力で飛びついていくところがある。

●長門

司令部メンバーの一人。基本的には真面目。

着任当初は誰彼構わず勝負を吹っ掛ける問題児だったが、なんやかやで落ち着いた。

ただ、勝負好きかつ負けず嫌いという本質は変わっておらず、見所があると見た相手とは積極的に勝負したがる。

●伊401

最近の瑞雲勢力の隆盛に危機感を覚えつつある晴嵐勢力。他のメンバーは不明。

ただ、自身も晴嵐を持って作戦に参加することは滅多にない。技術部に晴嵐の対空性能向上依頼を出しているとか。

●夕雲

夕雲型の長女だが、姉というより母みたいだとよく言われる。

普段は誰に対しても分け隔てなく優しいが、身内が粗相をした場合心を鬼にする。

長女の会の一員。

●矢矧

真面目だが微妙にどこかズレている。

若干放浪癖があり、暇なときは島のあちこちを流離っている。

●三隈

お嬢様感溢れる立ち振る舞いから、暁の憧れのレディリストに加えられる。

温厚な性格で滅多に怒らないが、最上が変な贈り物（呪いつき）を誤ってしたときはさすがに機嫌を損ねたらしい。

流行には敏感で、ドラマや映画に興味津々。

●まるゆ

泊地の皆からマスコットの的な愛され方をしている。

木曾や呂500と一緒にいることが多い。

意外と偵察能力には定評があり、重要な作戦で敵陣の隙を発見することがある。

●大和

泊地最高戦力の一角。何でもこなせる優秀な人材だが、やや天然で言動に残念な点が見え隠れする。

結果的に誰かが何かしらの被害を被ることもあるが、本人に悪気はない。

●あきつ丸

長月とは気が合うようで、よく一緒にいる。

真面目そうに見えて意外とノリが良い。

●大鳳

泊地最高戦力の一角。

鈴谷や熊野にクロスボウの扱いを伝授したため、二人からは（親しみの意味を込めて）師匠と呼ばれている。

●弥生

表情が硬いこと・悪戯をする卯月を止めるポジションにしていることか

ら「怒ってる」「機嫌悪い」と誤解されやすい。

本当は心優しく滅多に怒ることはない。そのせいか、親しい相手には、本当に怒っているときも怒ってないと思われる。

英語が話せる。

●卯月

泊地お馬鹿四天王の一角。英語は無理。

場を盛り上げようと悪戯するものの、加減をしないためか本気で相手を怒らせることが多い。

●Z1（レーベレヒト・マース）

元気で明るいドイツ組のムードメーカー。

着任間もないころからコーヒーノキを育てていた。

●Z3（マックス・シュルツ）

普段は物静かだが、時折年相応な一面を見せることもある。

レーベと共にコーヒーノキを育てていた。まめな性格。

●ビスマルク

強い自尊心の持ち主だが、周囲への気配りもできる海外艦のまとめ役。

郷に入っては郷に従えの精神で、年始は神社に初もうでしに行く。

●浜風

料理が得意で、磯風に秋刀魚の塩焼きを伝授した。お疲れ様です。

泊地野球部の一員。ポジションはレフト。

●天津風

他の陽炎型や島風とよく一緒に遊んでいる。

近場にあるブイン基地にも友人がいるらしい。割と人見知り。

料理は普通にできる。

●酒匂

プリンツ・オイゲンとは馬が合うようで、間宮で女子会をしたりしている。

ただ、第三者にはなかなか理解しにくい内容となっている。

●谷風

第十七駆逐隊の食べる専門。お祭り大好きでイベントの計画立案

に手腕を発揮する。

浦風主催の泊地野球部の一員。ポジションはセカンド。

●浦風

浜風ほどではないが料理はそこそこできる。

野球大好きで野球部のキャプテンを務めている。ポジションはキャッチャー。人数は足りているが対戦相手がいない。

●龍鳳（大鯨）

潜水艦たちの優しい母親ポジション。

普段は潜水艦寮で生活している。

●春雨

料理には一家言あり。拘りが強くて妥協できないという一面あり。農業部の一員でもあり、稲に注力している。

護衛役として定評があり、民間からは結構な人気があったりする。

●清霜

大本営から『バトルシップ』の異名で呼ばれるほどの武闘派。磯風と並び駆逐艦トップクラスの練度を誇る。

普段は甘え上手で、いろいろな艦娘から可愛がられている。

過去の戦いで右腕を失ったため、現在はアガートラムと銘打たれた義手をつけている。

二代目提督の友達。

●時津風

同期である雲龍と仲が良く、しょっちゅう彼女によじ登っている。

子どもっぽい言動が目立つが、磯風に対してはときどき姉としての面を見せることも。

●雲龍

何気なく飲み始めたお茶にすっかりハマっており、自分で茶葉を育てたり茶器を焼いたりしている。

時津風の影響なのか、割と悪戯好きでもある。

●磯風

泊地の駆逐艦の中でもトップクラスの練度を誇る武闘派の代表格。現場指揮官としては優秀だが、戦術・戦略レベルの話には弱い。

料理が苦手だが克服しようと日々頑張っている。少しずつだがレパートリーが増えてきているらしい。

泊地野球部の一員。ポジションはファースト。

●早霜

あまり積極的な性格ではないが、心優しく気配りができるので、いろいろな人から好印象を持たれている。

戦時に無茶をする清霜を止められる一人。不知火への友愛の情が深い。

●伊良湖

お菓子作りを得意とする間宮さんの妹分。

猫の志摩によく餌をあげている。

●秋月

農業部の一員。育てた野菜を妹たちに食べさせるのが喜び。

駆逐艦の本懐は敵を倒すことではなく主力（戦艦・空母）を護衛することだと考えている。

●プリンツ・オイゲン

ビスマルクの妹分兼フォロー役だが、ビスマルクからフォローされることも多い。

酒匂と第三者には理解し難い会話を繰り広げる。

●野分

大人びた雰囲気を持ち主だが、本人としてはそういう評価をされることに若干複雑な思いがある。

舞風曰く「物言いがストレート」。飾らない性格の持ち主とも言える。

●朝雲

しつかり者で朝潮型姉妹のバランスー。

山雲と一緒に花を育てている。

おでんはからし派。お酒はあんまり強くない。

●山雲

植物系女子。朝雲と一緒に花を育てている他、農業部の一員として多種多様な野菜を育てている。

セクシーな女性に憧れているらしい。

内心、おでんに余計なものをつけるなど邪道だと思っている。

●U-511 (呂500)

潜水艦寮で暮らしているが、ドイツ組のところにもよく顔を出す。まるゆと並んで愛され系潜水艦という扱いをされているが、実戦でもかなり活躍する。

●香取

泊地内にある学び舎の先生を務めている。艦隊育成計画の責任者でもある。

良いことをした子はとても褒めるが、悪いことをした子にはきついお仕置きをするらしい。

香取神道流の型を使うが、正式に入門したわけではないので、対外的には我流で通している。森でたまに素振りしているらしい。

●朝霜

泊地お馬鹿四天王の一角。頭の回転は速いが記憶力がない。英単語が覚えられないので英語は苦手。

たまに人の名前を間違えるが、わざとではないかと思われる節もある。

四天王の中では比較的常識人。筋の通らないことは嫌いな性質。

なんだかんだで清霜に甘い。

●天城

雲龍に薦められてお茶にハマる。

怖い話が苦手で、ときどき朝霜や雲龍に怪談話を聞かされては悲鳴を上げている。

●葛城

姉たちに薦められてお茶を嗜むようになったが、実のところ姉二人ほどにはハマっていない。

可愛いもの好きで、同期の高波をよく可愛がっている。

●イタリア (リットリオ)

よく食べるがあまり太らないという恐ろしい体質の持ち主。農業部に参加し、自分オリジナルの素材を使ったイタリア料理を身



近な相手に振る舞っている。

釣り同好会の一員でもあり、やはり釣った魚を使って料理をしているらしい。

#### ●秋津洲

泊地技術部の一人。比較的常識人で、暴走しがちな技術部の中ではストツパーになることも多い。

身体は鍛えてるので、艤装なしでの勝負なら泊地内でも結構上位に食い込む実力を持っている。

泊地の雑務も器用にこなすため、司令部からの評価はかなり高かったりする。

#### ●ローマ

優等生気質できつちりした性格だが、ここ一番でうっかりをやらかしてしまうことが多い。

本人にそのつもりはまったくないのだが、リベツチオの保護者として見られるようになっていく。

#### ●高波

引つ込み思案な性格で、人間関係は深く狭い感じに築かれている。気を許した相手には年相応の一面を見せることも。

#### ●江風

武闘派の一人で武装は魚雷派。川内型は尊敬してるが、おつかないとも思っている。

勘が鋭い方でいろいろなことに気が付く。しかし、それによってトラブルに首を突っ込んでしまうこともあるとか。

#### ●瑞穂

水上機母艦のリーダー役。あまり押し強い性格ではないが、自然と相手をコントロールする術に長けている。

小物づくりが趣味で、神威着任後は一緒にいろいろなものを作っているらしい。

#### ●速吸

泊地司令部メンバーの一人。

大きな鞆を持って泊地内を散策し、困っている人がいたら鞆から役

立つものを渡してくれる。

あの鞆は四次元に繋がっているのでは、とまことしやかに言われているが、真相は不明。

●リベツチオ

泊地内の愛されキャラ。進水日は海風より早いのだが、同期の駆逐艦の中では妹的ポジションになっている。

対潜重視派。

●海風

2015年夏組の中ではかなりのお姉ちゃん力を持っており、江風だけでなく他の駆逐艦も妹のように思っている。

白露に対してだけはちよつと対抗心を燃やしているとかなんとか。

江風曰く「神通さん担当」とのことだが、本人は「無茶言わないで」と否定している。

●照月

突っ走りがちな江風をフォローしているうちに、なんとなく彼女の相方ポジションに収まっている。

周囲をよく見ており、状況判断能力に秀でているが、時折深海棲艦っぽい目つきになってハイになることがあるらしい。

●風雲

姉妹艦・2015年夏組の中でなぜか貧乏くじを引くことが多い。

本人としてはそういう状況をどうにかしたいと思う反面、それで不幸になる人が減るなら良いかなとも思っている。

●鹿島

泊地内にある学び舎の先生を務めている。姉である香取の補佐役。素直で誰にでも優しいため皆に好かれているが、特に親しい間柄の相手には小悪魔的な一面を見せる。

鹿島新富流の型を使うが、正式に入門したわけではないので、対外的には我流で通している。

朝に天龍と並んで素振りをするのが日課になっている。

釣り同好会には属していないが、それなりに釣りは嗜む。

●グラーフ・ツェツペリン

クールビューティ。周囲への的確なツッコミが持ち味。  
ビスマルクや赤城、アキラ等親しい艦娘相手には時折子どもじみた行動を取ることもある。

釣り同好会には属していないが、それなりに釣りは嗜む。

#### ●萩風

健康オタク。姉妹艦、特に同じ第四駆逐隊の三人のことをいつも気にかけている。

釣り同好会に属しており、釣った魚を使った健康的な料理を周囲に振る舞っているらしい。

また、農業部にも属しており大量の野菜を育てている。山雲とは結構話が合うらしい。

#### ●嵐

ちよつと男子っぽい言動が目立つが、内面は割と乙女。

同じ第四駆逐隊のメンバーに対してはええかつこしいというか見栄っ張りなどころがある。

#### ●初月

沖波をナチュラルにエスコートすることに定評があるイケメン魂の持ち主。

最初の頃は照月との距離感に戸惑っていたが、今はすっかり打ち解けた。

#### ●沖波

真面目なしっかり者として見られたいが、そそっかしく早合点しがちなところがある。

初月のような格好良い女性になりたいと思っているらしい。

#### ●ザラ

イタリア艦随一の苦勞人。

ストレスの発散が苦手で、日頃のストレスが一定量溜まると一気に爆発する。要注意。

#### ●神風

「やるときは徹底してやる」がモットー。

艦艇時代の経験を生かして艦装の性能の低さを補う立ち回りを得

意とする。

自らが戦果を挙げることは少ないが、彼女がいると艦隊は良い動きをするようになるとか。

●ポーラ

2016年春に突如降臨した酒神様。泊地内の数々の呑兵衛を打ち破りうわばみクイーンとして君臨した。

座右の銘は「すべての道は酒に通じる」。

ザラの主なストレス要因だが、同時にやる気の源でもある。

●親潮

好奇心旺盛で、地下の秘密基地というワードに浪漫を感じるタイプ。

秋月型姉妹とも仲が良く、時折島の外まで遊びに行くことも。

●春風

おっとりとした性格で、個性的な姉妹艦のフォローが上手い。

ただ、姉である神風と同様「やるときは徹底してやる」タイプでもある。

何気に情報通。

●アイオワ

見た目は派手だが中身は割と常識人。

かつての戦争での因縁から最初は周囲とギクシヤクすることもあったが、因縁のあった香取・舞風と打ち解けたこと、本人が極めてポジティブな性格をしていることから、自然と泊地に馴染んでいた。

意外と物事に対する考え方はシビアで、比較的リアリストな同期の神風とは馬が合うようである。

泊地野球部の一員。ポジションはサード。

●水無月

やる気はあるが、計画立案は苦手なので何か事を起こすというケースはあまりない。

若干適当な一面があるものの、多くのことをそつなくこなす器用人。

●アクイラ

溢れる母性と甘えたがりという相反する要素を兼ね備えた残念美人。

赤城やグラーフにライバル心を燃やしているが、二人がどの程度本気で受け取っているかは謎。

ビスマルクの証言によると料理は駄目らしい。

●伊26

怖いもの知らずでいろいろなことに首を突っ込む。

本人曰く「怖いものは怖い」とのこと。

伊58から恥ずかしい台詞禁止令を出されている。

●ウオースパイト

優雅な佇まいの裏に戦艦としての矜持を秘めた艦娘。

無用な諍いは嫌いで、戦いには誇りがなければ駄目だと考えている。

マーマイトは苦手。しかしジャーヴィス相手にそうとは言えず、嫌々食すことが多い。

●浦波

恩義を忘れない義理堅い一面を持つ。

割と妄想力が高く、些細な台詞からいろいろと想像を膨らませてしまうことも。

●山風

人見知りだが、気まぐれでアクティブに行動するところがある。

白露型の皆から愛されているが、本人としては江風や涼風にまで可愛がられるのが不服。

●コマンダン・テスト

場に流されず自分の意見をキツパリと言えるタイプ。それでも言い方がきつい感じにならないのは人徳か。

皆が困っているところでポンと思いがけない解決案を提示するところに定評がある。

●サラトガ

落ち着いた物腰と大人な魅力が持ち味。アイオワのお姉さんポジ

ションになっている。

日本文化に疎いところがあり、オイゲンからいろいろと間違った知識を教わっている。

お酒は酔わない程度に嗜む派。

泊地野球部の一員。ポジションはライト。

●朝風

朝型の代表格で、陽が沈むにつれてテンションが下がっていく。本人は否定しているが、熱くなると周りが見えなくなるタイプ。

●松風

天性の人たらし。本人曰く「すけこましではないぞ」とのこと。

女性のいろいろな面に対して「それもまた良し」と魅力を見出し続けている。

縛られるのは苦手なので、説教してくる朝風のことは避けている。しかし一定時間離れてると、物足りなくなっからかいかに行く。

●藤波

同期である松風が自由人なので、それにしよっちゅう振り回されている苦労人。

姉の風雲にシンパシーを感じているとかいないとか。

眼鏡をかけると索敵が得意になった気がするらしい。

●伊14

伊19から『潜水艦一のうちばみ』の称号をもぎ取った期待の新星。ポーラや那智、隼鷹たちとしよっちゅう酒盛りをしている姿が目撃されている。

●伊13

伊14の抑え役。ただしほとんど抑えられていない。

怒ると必殺のチョップを繰り出すが、あまり痛くない。極稀にクリティカルヒットするので油断は禁物だ。

伊8からときどき本を借りて読んでいる。

●国後

礼儀を重んじる真面目っ子。

最近曙から釣り同好会に誘われて入会した。

●占守

これと決めたことにはどこまでも愚直に臨むタイプ。響とたまに絡んでいることがある。割と占守の方が主導権を握ることが多いようだ。

●神威

アイヌ要素全開だが出身はアメリカ。アイヌ文化に精通しているが南方にあるこの泊地ではあまり生かす機会がない。

瑞穂と小物づくりに勤しんだり、アイオワやサラトガと一緒にハンバーガーを作ったりするのが日常。

●大鷹

艦艇時代の最後の記憶の影響であまり自分に自信を持てずにいたが、最近はずいぶん前向きになってきている。

鳳翔さんがやっている小料理屋の手伝いを始めたらしい。

●択捉

泊地司令部メンバーの一人。

しっかり者。感情が表に出やすく周囲からは何を考えているかわかれだったりする。

司令部の中でもその真面目さ故か可愛がられている。

●ガングート

北の国出身。祖国の革命とその後の顛末を知っているからか『国家』というものをどこか冷めた目で見ている節がある。

細かいことは気にしないおらかな性格だが、がさつというわけでもない。

『納得』は何より大事だと考えている。

●狭霧

誰にでも丁寧に接するが、切り込むところは切り込んでいくスタイル。

本番にちよつと弱い。

●旗風

姉妹（特に春風）への情愛が人よりちよつとだけ深い。夕張に誘われて技術部に入入りするようになった。

●天霧

サツパリした性格で、細かいことを考えるのは苦手。

筋トレが日課で長良と一緒にトレーニングをやっている。いつか駆逐艦腕相撲大会を開いて優勝するのが目標。

●リシユリユー

お洒落番長。南方泊地の湿度は辛いらしい。

見栄っ張りな一面もあり、そのせいで余計なピンチを招くこともある。

●松輪

人見知りが激しいが、一度懐いた相手にはとことん気を許す。同期の中では旗風やルイージと特に仲が良い。

リシユリユーやアークロイヤルにも可愛がられているが、松輪側としてはちよつと怖い。

●ルイージ・トレツリ

マイペース艦娘其之三。遠慮しない性格。

艦艇時代に各国を渡り歩いたからか、複数の言語を巧みに使いこなすという知性派な一面を持っていたりする。

●アークロイヤル

艦艇時代のビスマルクの戦いぶりに感銘を受けたらしく、彼女に深い信頼を置いている。

ただ、ビスマルクからは若干苦手意識を持たれているようだ。

潜水艦に対しては苦手意識を持っているが、克服しようと少しずつコミュニケーションを取るようにしている。

マーマイトは好きでも嫌いでもない。

●対馬

インドア系艦娘の一角。海防艦グループの中では事態を引つ掻き回すタイプ。

儲け話が好き。ただ守銭奴というわけではなく、稼ぐことが好き。

儲けた分は散在するタイプ。ただS泊地はそもそも金を使う機会が少ない。

●佐渡



悪ガキ様。元氣印のわんぱくな子だが、意外と知恵も回る。賑やかなことが好きで、泊地お馬鹿四天王とよくつるんでいる。都合の悪いときは狸寝入りを決め込む。

●伊400

しおおではない。しおんである。

妹に半ば無理矢理晴嵐勢にされたが、本人の関心はもっぱらバターライスに向いている。

バターを自作するために酪農を始めようかと検討中。

●涼月

カボチャと冬月に造詣が深い。

艦装の問題で戦線に参加できない冬月を気遣って、彼女の側にいることが多い。

雪風や初霜のペースに振り回されやすいが、かなり頑固なところもあり、譲れない部分に関しては妥協しない。

●日振

誰が言ったかミニマム古鷹。面倒見の良さのせいで苦労がち。

国後・択捉とはいろいろ通じるものがあるらしい。

ミカン大好き。

●ガンビア・ベイ

極度の方向音痴な護衛空母。護衛対象がそのまんま道案内役として機能していると言われることも。

自分にあまり自信がないタイプ。だが「自信があろうとなかろうとやるときはやるしかない」とも思っている。

割と口調はフランク。仲良くなると調子に乗りやすい一面を見せてくれるかもしれない。

●ジャーヴィス

全方位に影響振りまく英国少女。ナチュラルに最善手を打つタイプ。

物怖じしない性格で、着任してから短い期間で泊地内に大量の友人を作り出したコミュニケーションの魔物。

マーマイト肯定派。

●大東

誰が言ったかミニ深雪。佐渡と並び海防艦のフワード枠。特技は三線を引くこと。キングシー〇〇推しだがなかなか理解を得られないのが悩み。

着任早々深雪にスカウトされて裏司令部に加入した。

●浜波

ゲームマスター。

普段はとても大人しく人との会話でオドオドしてしまうが、ゲームコントローラーを握ると一変する。

得意とするのは格闘・パズル・アクション。

●タシユケント

爽やか生真面目。委員長タイプ。

何かに取り組む際は全力で臨むことを信条としており、普段の爽やかさからは想像できないくらいの熱血っぷりを見せる。

小さいものへの憧れがあり、他の駆逐艦や海防艦のことを羨んでいる節がある。

●イントレピッド

ビツクリするくらい裏がないポジティブアメリカン。

騙し合いをすると十中八九騙されるタイプ。策を弄する輩には弱いが真つ向勝負では無類の強さを誇る。

鳳翔さんに匹敵する母性力の持ち主でもある。

●サミュエル・B・ロバーツ

諸事情あって妙なタイミングで着任した護衛駆逐艦。皆からはサムと呼ばれる。謎のマスコットを連れている。

世話好きでガンビア・ベイの面倒をよく見ている。由良とは世話好き仲間として気が合うらしい。

ガムが好き。コーヒー味が至高だと思っているがもう売っていないので自作できないか目論んでいる。

●福江

真面目なのだが、ネーミングセンスがなかなか独特。

座右の銘は「郷に入らば郷に従え」。

口調のせいでぶつきらぼうな性格だと誤解を受けることが多い。

●岸波

サツパリした立ち振る舞いとは裏腹に意外と乙女度が高い。

一方で女性からモテたりもするので、本人としては些か複雑な心境らしい。

仕事は真面目にこなすタイプだが、必要以上に力むことはせず、良い意味で適当なところもある。

●神鷹

その場の空気に流されず疑問をきちんと口にできる系女子。

空母の末っ子組として先輩たちからは可愛がられている。

改名前の名前は紛らわしくなりそうなので使わないよう決めたのだとか。

●マエストラーレ

長女の会の存在を知り即加入を決めたミス長女。

別に偉ぶりたいわけではなく、長女として妹たちを引っ張っていく存在であらねばならないと信じているだけである。

当面の目標は妙高らしい。ハードルが高い気もするが負けるなマエストラーレ。

●ゴトランド

一つの物事にハマるとこだわってしまうタイプ。

アロマや家庭菜園、管楽器等多趣味。暇なときは決してぐうたらせず、大抵なにかやっている。

初期艦ではない。

●ネルソン

尊大な物言いからは想像しにくいだが、自分で率先してあれこれと動くタイプ。

自国のお菓子にはそれなりに愛着があるらしい。

ネルソンタッチのおかげで一部の艦娘から大人気だそう。

●峯雲

朝潮型おっとり系女子。

同じく朝潮型のぽやん系女子である山雲との間に挟まれた朝雲

によくツツコミを入れられている。

村雨を見かけると一日幸せになれるらしい。

●早波

藤波への執心度が高く「夕雲型の大井つち」とあだ名がつけられた。本人は気にしておらず大井は不服らしい。

甘いものには目がない。

●ジョンストン

世話好きで至って常識人な苦労性のアメリカンデストロイヤー。たまにポカをやらかすサムを放っておけず、サムはサムでガンビア・ベイを放っておけないので、二人の面倒を見る形になる。

天津風には謎の親近感を抱いているらしい。

●日進

幼い見た目に反して割と老成した一面も見せる広島っ子。

好きな武将は福島正則。好きな時代劇は忠臣蔵。ただし吉良上野介にも同情的。

呉市を舞台にした作品を追いかけているうちに、スケッチとカメラが趣味になった。

—— 泊地スタッフ ——

●伊勢新八郎

泊地初代提督。叢雲と出会い、ソロモン諸島の危難を目の当たりにして、これを解決しようと泊地を設立した。

モラルにうるさい堅物だったこと、和楽器が好きだったことが語られている。

康奈の後見人でもあった。

●丹羽一徹

大工の棟梁を務めていた老人。鬼怒や那智、龍驤等泊地の艦娘に建築のノウハウを叩きこんだらしい。

●伊東信二郎

工場長を務める壮年の男性。無精髭とバンダナが特徴的。部下の工廠妖精・建造妖精・開発妖精と共に工廠の設備を管理して

いる。

いつも好き勝手している技術部の面々には悩まされているらしい。父親は趣味で陶芸をやっているとか。

ごつい見た目の割に繊細な滑りをこなすスケート経験者でもある。

● 工場妖精

ちよつとニヒルなところのある工場の妖精たちのリーダー。

なんだかんだで人付き合いは悪くない。

電子タバコを嗜む。

● 流星妖精

待遇にちよつと不満がある妖精さん。

空母たちには一定の信頼感を置いている。

● 曲直瀬道代

医療室勤務のお医者さん。艦娘も病気になることがあるので、泊地にとって欠かせない人材の一人。

職業柄説教臭くなってしまいがちなのが悩みの種。本来は気さくで明るい性格。

学生時代はカメラをやっていたらしい。

● マスター（本名不詳）

娯楽室を訪れる人をもてなすナイスミドル。本名・経歴は不明だが誠実な人柄のため皆からの信頼を得ている。

艦娘同士の諍いの仲裁、農作業の手伝い、料理全般等様々なことをそつなくこなす。

● 北条康奈

泊地二代目の提督。新八郎の被後見人で新十郎の義妹。

磯風の料理に対して苦い顔を浮かべたことが語られている。

清霜の友達。

● 藤堂政虎

一級建築士の資格を持つ建築士。泊地のインフラ担当。非常に強い自尊心の持ち主で、周囲からは変わり者として扱われている。

ただ、根っここのところでは常識的なようで、天然相手には振り回されるらしい。

小さい頃に苦勞したからか、大人は子どもが楽しむために力を尽くすべしという持論を持っている。

相当なプラモマニアで瑞鳳とは同好の士。ただ、ある一件が原因で彼女相手にキレたことがある。

● 尼子歳久

泊地内の神社を管理している老人。七十を超えるが、年齢による衰えを全然感じさせない。

時折悪ガキじみた言動を取ることがある困った爺様だが、いざというときは年長者として周囲を的確に導く。

神社にたむろする艦娘相手にお菓子をあげたり将棋や囲碁をする日々。

● 小野小道

理髪店を営んでいる女性。髪フェチ。

言動が若干危ない感じもするが、相手の嫌がることはしないので特に問題にはなっていない。

エステやマッサージの心得もあるため、艦娘の間では密かに人気者だったりする。

● 伊東珠子

年齢不詳のシスター。泊地内の教会を管理している。

お菓子作りが得意で、泊地内外の人々にときどき配っている。

伊東信二郎は叔父。

泊地野球部の顧問を務めている。

● 板部江雪

泊地のシステム担当。泊地の学び舎で教師も務めている。

付き合いの良い性格で、艦娘たちから相談を持ち掛けられることも多い。

一方で、艦娘の巻き起こす騒動に巻き込まれて災難に遭うことも。

● 北条新十郎

泊地三代目の提督。康奈の義兄。

全身包帯のミイラ男のような風貌で、極度の面倒臭がり。

一方で仕事はできる人間だったらしく、泊地のネットワーク拡充等

を推し進めた。

磯風の料理を口にして、三日ほどお腹を壊したことが語られている。

●北川富士子

泊地四代目の提督。

新十郎提督の頃から艦娘の教導官として勤めていた。

厳しいことで艦娘たちに恐れられているが、厳しいだけの人でもないらしく、しっかりと慕われてもいる。

●北条イザナギ

泊地五代目の提督。元の名はナギ。北条の姓と新八郎の「イセ」を引き継ぎ改名した。レイテ海戦の最中に提督権限を継承。

欧州遠征の際、イギリス・ソロモン諸島両国の意向から形式的な投票を経て総督に就任。ソロモン王の称号を与えられる。

元来は快活などどこにでもいる少年だったが、深海棲艦との戦いで様々なものを得、また失い、迷いながら成長を続けている。

—— 泊地以外の人々 ——

●ウイリアム

ソロモン政府から船団の代表を任されることのある老人。

船団護衛を泊地に依頼することが多く、泊地のメンバーにとってはすっかり顔馴染み。

●二瓶道雄

南方拠点を回りながら農作物の輸送をしたり、農業のノウハウを伝授したりしている老人。

各地の拠点に弟子というべき者がおり、尊敬を集めている。初対面の人に挨拶代わりとして種や苗を進呈する癖がある。

●リーナ

画家になることを夢見る鬼怒の友人。

秋雲に絵を教わっているらしい。

●リチャード

強面の壮年男性。海賊の如き風貌だが、実際はショートランド島の

集落の長を務めている善良なおじさん。

愛称はリツチ。釣りが上手く、秋刀魚漁の際は船長として遠征に参加することもある。

若干ケチ臭い。

●ヘレネ

弥生たちがイギリスの港町で出会った少女。

友達。

●グスタフ

島の子どもたちの中で飛びぬけた才覚を持つ天才児。

ただ性格に難があり、他の子どもたちから浮いてしまっている。



## 本編

### かき氷を作ろう！ (鬼怒)

ふとカレンダーを見ると七月になっていることに気づいた。

日本から赴任してきて早一年半というところだろうか。この辺りの地域は一年通してあまり気候が変わらないので季節感は乏しいが、こうして暦を確認すると故郷の四季折々の風景を思い出す。

仕事が詰まっていたので少し息抜きしようと部屋から出ると、そこで見知った顔に遭遇した。

「あ、板部さんだ。どうしたの、死にそうな顔してるね」

長良型五番艦の鬼怒だ。

「よう鬼怒。そっちは元氣そうだな」

「なに、またシステムがトラブルでも起きたの？」

「使ってるOSSでいくつか脆弱性が発見されてな。影響が出るかどうかの調査をしてたんだが、ここのシステム継ぎ接ぎしながら肥大化してるせいでどうも面倒臭い」

とはいえ現状この泊地でシステム管理者としてのスキルを持っているのは俺と何人かの艦娘くらいだ。艦娘の本業は当然システム管理などではないから、こういうところでは俺が頑張るしかない。

と、そこで鬼怒が持っているものに気づいた。

「鬼怒。そいつはまさか……」

「ふっふーん、やっと気づいた？ そう、これこそ夏のお供！ かき氷機！」

高々とかき氷機を両手で掲げながら鬼怒がドヤ顔を見せつけてくる。暑苦しい。

だがムシムシする仕事部屋から出てきたばかりの俺にとって、かき氷というのは何とも魅力的に映った。

「なあ、どうしたんだそれ」

「遠征先で会ったお婆ちゃんに貰ったんだ。これから作るつもりだけど、板部さんも食べる？」

「いいのか？」

「ここで駄目って言ったらなんか死にそうだしね」

「すまん。しかしかき氷か。子どもの頃を思い出すな。俺はメロン派だった」

「鬼怒はイチゴが好きだな。そこは譲れないね！」

「そういえば氷は部屋の冷蔵庫にあるので良いとして、シロップどうすんだ」

「間宮さんのところで分けてもらうつもりだよ」

「ごめんね、今はシロップほとんどなくて」

「ええー！」

鬼怒の悲痛な叫びが甘味処間宮に響き渡る。

「そういえば先日かき氷売り出し始めたときに艦娘たちが殺到してましたね。もしかしてそれで全部？」

「ええ。去年を参考にして仕入れたつもりだったんですけど、予想以上に売れてしまつて……」

「何それ聞いてないよ!？」

「ちようど鬼怒は遠征でいないときだったからな。あのときはあまりのかき氷人気がぷりに食べるの早々に諦めたもんだ」

「くうー！ 熱い艦装背負つて、日陰も何もない大海原をようやく戻つて来たというのに！ うう、あんまりだよオー！」

なんだかそこまで言われると気の毒に思えてくる。

「まあ待て鬼怒。ないなら代わりを用意すれば良い」

「か、代わり……?？」

「要するにシロップのようなものがあれば良いってことだ。間宮さん、少し厨房見せてもらつても良いですか？」

「ええ、どうぞ」

間宮さんの許可を得て厨房の中を物色して回る。当然手を綺麗に洗つたうえでだ。

使えそうなものを見つけては間宮さんに使って良いか確認を取る。最終的に使えそうなのは砂糖、水あめ、他いくつかの材料だけだった。

「まあこれでも大丈夫だろう。適当に鍋に入れて水に溶けきるまで混ぜればそれなりにシロップっぽい感じになるに違いない」

「なんか今一つ不安だよ……」

「言うな。俺も婆さん家で昔作ったつきりでそんなに自信はないんだ。何も無いよりマシだろう」

こんなとき間宮さんのアドバイスをいただけるとありがたいがたかつたのだが、伊良湖と二人で夕食の準備に取り掛かっている。さすがにもう邪魔は出来まいと、俺たちは材料だけ貰って寮まで移動することにした。

この泊地はいくつかの艦隊で構成されており、艦隊毎に寮が分かれている。

俺たちがやって来たのは鬼怒が属する第三艦隊の寮、その台所だ。

「……そういえば艦娘は艦だった頃の記憶をある程度持つてることもあるって言うが、鬼怒は主計科に関する記憶とかはないのか？ あまり料理してるところ見た覚えがないんだが」

「鬼怒はあんまりそっちの記憶はないかなあ。いつも阿武隈にやってもらってるから困らないし。他の鬼怒はどうか分からないけど」

(うーん、この駄目姉)

まあ普段の様子を見る限り阿武隈も嫌々やっているようには見えないし、当人同士が良いと思っっているなら余計なことと言わない方が良いでしょう。

「熱い……けどもうすぐ出来そうだよ！」

「ああ。大分シロップらしい感じになってきたな」

鍋に入れた砂糖をはじめとする材料が大分溶け込んできた。普通のシロップと比べれば妙な味になるかもしれないが、何もかけないよりはきつとましなはずだ。

「あれ、鬼怒さん。何しとるの？」

もうすぐ出来上がりというところで、陽炎型駆逐艦の浦風が入って来た。

「あ、浦風ちゃん。実はかき氷のシロップを作ってるんだ！」

ふふーんと自慢げにかき氷機を見せつける鬼怒。

浦風は素直に「おお」と感心していた。よく見ると、浦風の後ろには他の駆逐艦たちの姿もある。皆の視線は鍋とかき氷機に向けられていた。

「……せつかくだし全員分作るか」

「ええの？」

「材料は少し多めに貰ってきたからな。今この寮にいるメンバーの分なら足りるだろ」

「自分たちだけで食べるのも気が引けるもんね！」

「ありがとの。それならうちらも手伝うけん」

「あの、私も……」

「この磯風に任せてもらおう！」

「谷風さんは食べる専門だよ！」

浦風の駆逐隊仲間たちがぞろぞろ入りこんでくる。

「なんだか甘そうな匂いがするクマー」

「HEY鬼怒ー、何か面白そうなおことしてますネー！」

浦風たちの声につられたのか、他の艦娘たちも姿を見せ始めた。

長丁場になりそうだが仕方ない。気分転換と割り切って楽しむことにしよう。

浦風たちが手伝ってくれたおかげもあって、思っていたより早く調理は終わった。

第三艦隊寮の食堂では、不在の艦娘以外が揃ってかき氷を頬張っている。

「味はなんかこう、いかにも手作り感があるな」

「でもかき氷って感じはするよ！　くうー、頭キンキンする！」

「アイスクリーム頭痛か」

「え？　アイスクリーム食べてないよ？」

「いや、あくまで現象名だからな」

「でもさ、現象名つけるならかき氷現象でも良くない？　なんでアイス？」

「そこまでは俺も知らん……」

首をかしげながらも鬼怒はぱくぱくと美味そうにかき氷を食べる。  
そして一定周期で頭を抱えていた。

## 島の図書館に行こう（鬼怒・磯波）

「この後図書館行くんだ」

「たまたま食事処で鉢合わせた鬼怒に付き合う形で、図書館に行くことになった。」

「板部さんはどんな本読んだっけ？」

「エンタメ小説が中心かな。特に面白ければジャンルは問わない」

「システムエンジニアの参考書とかじゃないんだ」

「仕事で必要なら読むけどな。プライベートは別よ別」

「ふーん。あつ、鬼怒はねえ」

「お笑い系の本かスポーツトレーニングの本だろ」

「えっ、なんで分かるの!？」

「そんなやり取りをしているうちに、目的地である図書館に着いた。泊地の中にあるので、大して時間はかからないのだ。」

「中に入ると涼しげな空気が出迎えてくれる。正直そこまでライナップが充実しているわけではないが、読みたい本がなくても涼みに来たくなることもある。」

「お、いらっしやーい」

「出迎えてくれたのは重巡洋艦の艦娘である摩耶だ。平時は姉妹の鳥海と二人で泊地の図書館を管理している。」

「鬼怒とエンジニアのおっさんか」

「摩耶さん、この間頼んでた新刊届いた？」

「あー……『月刊 E！ トレーニング！』だっけ。ありやあまだしばらく先になりそうだな。本土でもそんな部数多いもんじゃないみたいで、取り寄せに時間かかりそうだ」

「なんでみんなあの雑誌の良さが分からないんだろうなー」

「以前戯れに一読してみたことはあるが、あれを好むのはこの泊地でも鬼怒とその姉の長良くらいではあるまいか。長門とか神通あたりはどうだろう。」

「ちえー、と言いながらお笑い系のコーナーに向かう鬼怒と別れて、一人文芸コーナーに向かう。」

そこまで大きい図書館ではない。元々はこの泊地の初代提督が本好きだという理由で資料室を用意したのが前身だ。しばしば本が行方不明になったのできちんと管理しようと図書館にした、という経緯である。

文芸コーナーも本棚三つくらいのスペースしかない。置いてあるのはミステリーやライトな感じのエンタメ系、それから歴史・時代小説が少々。年頃の娘さんが多いからかエログロ含む内容のものはほとんどない。

数は少ないが、この島では貴重な娯楽の一つだ。

今回はそこに先客がいた。駆逐艦の磯波だ。

脚立に乗って棚の上の方にある本を探しているようだった。なんだかふらふらしていて危なっかしい。

とは言えここで声をかけたら驚いて逆に落ちてしまいそうな気がする。仕方ないので俺は少し距離を置いて、隣にある児童文学コーナーのタイトルを眺める作業に移った。

だが。

「わっ」

磯波の声が聞こえたかと思ったら、何かが——というか十中八九磯波が落ちてきた。どうも脚立を動かさず無理に身体を伸ばしていたらしい。

「うおっと」

慌てて落ちかけていた磯波の肩口の辺りを下から支えてやる。磯波は斜め四十五度の微妙な体勢で留まった。

「あ、あれ……せ、先生？」

「横着するな。ほれ」

ぐっと肩を押し上げて、元の状態に戻してやる。

「あ、あの……すみませんでした」

「謝らなくていいからもっと気をつけろ。つまらないことで怪我したら駄目だ」

「す、すみません」

「取り難いようなら取ってやろうか、どれだ」

「いえ、そ、それはいいです！」

磯波はなぜか慌てた様子で脚立から降りて、こちらに一礼すると駆け足で去ってしまった。自分が読んでいる本を他人にあまり知られたくない、というタイプなのかもしれない。今のはこちらが無神経だったか。

磯波が手を伸ばそうとしていたエリアに目を向けてみる。

「……お？」

そこに並んでいたのは、この泊地では割と珍しいハードボイルド小説だった。学生時代に読んだタイトルのものばかりだ。

ふと視線を感じたので横を見ると、顔を真っ赤にした磯波が本棚の陰からこちらを覗き込んでいた。

「……」

「……」

「……あ、あの。変……でしょうか」

「いや、別に良いんじゃないか。むしろ俺はちよつと感心したくらいだ。引っ込み思案な磯波がハードボイルド小説に興味を持つなんてなあ」

「わ、私も吹雪ちゃんや叢雲ちゃんみたいにもつと格好良くなりたいです。そしたら球磨さんが」

「また意外なところからの推薦だな」

てつきり天龍か木曾あたりの推薦だとばかり。

「先生は、何を読まれるんですか？」

「俺か。俺は面白ければ何でも良いって感じだから……。ここにあってハードボイルド小説なんかも学生時代一通り読んだぞ。ここにあるのでおススメなのは『色彩なき街』シリーズかな」

俺がハードボイルド小説にも理解があると知った途端、磯波の表情から力が抜けた。意外と分かりやすい。

「あの、この前読んだのは『荒野を旅する弾丸』なんですけど、あの主人公って他の作品にも出てきたりしますか……？」

「あー、確かジャニイ・ジャックランドだっけ。あいつ格好良かったよなあ。でもシリーズ化はしてなかったし他の作品には出てなかった



と思う。けど似たようなのが同じ作者の『崩れた街に棲む日々』って作品に出てたな。あの主人公も格好良かった」

「そ、それ、あるでしょうか……」

「あるみたいだぞ」

棚を見ると置いてあった。二十年近く前にベストセラーになった作品だ。取り寄せるのも難しくないのだろう。

磯波に渡してやると、嬉しそうな顔でぺこりと頭を下げて、

「これ、読んでみます……！」

今度は軽やかな足取りで、受付の摩耶のところに向かっていった。

「ほほう、なかなか良い先生っぷりですね！」

いつからいたのか、突然鬼怒が背後から肩を掴んでサムズアップしてきた。

「いやあ、磯波ちゃんも格好良くなりたいたい願望があったんだね！ 今度トレーニングに誘ってあげよっかな！」

「無理強いはするなよ」

「大丈夫大丈夫！」

簡単に大丈夫というやつの大丈夫は基本的に信用できない。

「こらー、図書館では静かにしろよー」

摩耶の気だるげな注意を聞き流しながら、俺は適当な本を物色するのだった。

数日後。

泊地内の学び舎で教室に向かって歩いていくときのこと。

「……それでも行く。俺は他の生き方知らん」

一応言っておくと、突然聞こえてきたこの声は俺のものではない。

人気の少ない階段の裏から聞こえてきたのだ。誰だと思って覗きこむと、そこにはポーズを決めながらいろいろと台詞らしきものを呟いている磯波がいた。

「夢。それを失ってしまえば俺は死体と同じだ」

ふつと悩ましげな表情を浮かべながら気合を入れて台詞を読み込む磯波。実に楽しげで結構なのだが、もうすぐ授業が始まる。

「……おーい、磯波さんや」

「ハッ!？」

こちらに気づいた磯波は、瞬間沸騰機とでも名付けたくなる程の勢いで顔を真っ赤にした。

「す、すみませんっ……!」

一目散に去っていく磯波を見送りながら、あれは確か『崩れた街に棲む日々』の主人公の台詞だったなあ、ということを読み出す。

「意外と本の影響受けやすいタイプなんだな……」

教室に行くべきか磯波を追いかけろべきか考えながらも、自分の学生時代を思い返してつい笑ってしまった。

## 友達と遊ぶ約束をした（鬼怒・磯波）

ちょうど泊地を出るところで、一人歩いている磯波ちゃんを見つけた。

「やつほー、磯波ちゃん。今暇？」

「あ、鬼怒さん。はい、特にやることなく散歩してたところですよ」

「お互い非番みたいだね」

「はい。同じ駆逐隊の子たちはちょうど遠征に行つてて」

「今回は磯波ちゃんがお休み枠つてわけだ」

うちの泊地は駆逐隊が少し多めの人数で構成されている。全員同時に仕事をしに行くことは稀で、何人かは泊地に残って休みを貰うことができるのだ。

駆逐隊の上官に当たる軽巡も二人から三人体制でローテーションを組んでいる。休みなしに遠征に駆りだされたらたまったものではない。

「鬼怒さんはどこかに行かれるんですか？」

「少し前にリーナから遊びに来てって言われてたから、今日行こうかなって」

リーナというのはショートランド島のある村に住んでいる女の子だ。以前深海棲艦から助けたことがあって、それがきっかけで友達になった。

「暇なら磯波ちゃんも行かない？ 遊ぶなら人数いた方が楽しいよ！」

「い、いいんでしょうか」

「リーナは人見知りするタイプじゃないし、磯波ちゃんだって何回か会つてるでしょ。大丈夫だーいじょーぶ！」

少し遠慮がちな磯波ちゃんの腕を引っ張って、泊地の外に歩き出す。

ショートランド島は今日も深い緑に包まれていた。

村に着いたは良いが、人の姿が見当たらない。

「ありや。もしかして教会かな」

シヨートランド島を含むソロモン諸島は、植民地支配をしていたイギリスの影響でキリスト教が浸透している。お祈りの時間になると村の人たちは皆教会に集まって祈りを捧げる。

「タイミング間違えたかなあ。教会に行ってもいいけど、リーナの家に行つて待つてようか。入れ違いになつても困るし」

「そうですね。……わ、あそこの豚大きくなりましたね」

磯波ちゃんが指差した先には、豚というには凶悪過ぎる面構えをした何かがいた。

「あー、ブルね」

「ブル？」

「猛牛猛牛。だつてあれもう豚じゃないよ！ どう考えても猛牛だよ！ つて意味で鬼怒が名付けたんだー」

勝手に名付けただけで、持ち主が誰かも確認してないけど。

そんなやり取りをしているうちにリーナの家の前まで着いた。

『ごめんください』

声をかけてみる。しかし反応はなかった。皆で教会に行つてしまったのだろう。

「コケーツー」

応じてくれたのはリーナの家で飼っている鶏だけだった。

「わあ、可愛いですね、この子」

明らかに威嚇していると思しき鶏をすくつと抱き上げる磯波ちゃん。普段おどおどしてるけど時折妙にたくましい。

この子の上官は球磨ちゃんだけど「磯波はやるときはやる女だクマー、怒らせたらいけないクマ」とか言つてたなあ。

『あれ、鬼怒じゃない』

鶏をしぼし戯れていると声をかけられた。振り返るとそこにはリーナと弟君たちがずらつと並んでいる。どうやらお祈りの時間は終わったらしい。

『遊びに来たよ！』

『あら、今日休みだったんだ。そっちの子は磯波だっけ。いらつしや

い』

『いらっしやーい！』

『こ、こんにちは……』

弟君たちが一斉に声をかけると、途端に磯波ちゃんはどこぎまぎし始めた。動物相手なら問題ないけど人間相手だと駄目なのか。

『で、鬼怒。遊びに来たってことは当然アレ持って来たんでしよう？』

『この間言ってたアレ？ うん、持ってきたよ』

前に遊びに来たとき偶々話題に上がって、リーナが妙に食い付いてきた代物。本土から取り寄せて、今日ちゃんと持ってきている。

『これよこれ！ ジャパニーズ浮世絵！』

それは江戸時代に描かれた浮世絵の画集だった。

『何が面白いの、これ』

『鬼怒。あなた本当に日本の艦娘なの？ この良さが分からないの？』

『えー、だって私江戸時代生まれじゃないし』

『そういう問題じゃないのよ！ ああ、素晴らしい、素晴らしいわ』

リーナはときどきこういう変なスイッチが入るのが困りものだ。

別に日本びいきというわけではなく、世界各国の様々な絵が好きなのだという。将来は画家になるのが夢だと言っていた。たまに泊地に来ては秋雲ちゃんにいろいろ教わっているようだが、リーナが描いた絵はまだ見せてもらったことがない。

『まあこんなところで立ち話もなんだし、二人ともあがっていきなさいな。これからチビたちにおやつ作ってあげるところだったけど、食べっていくでしょ？』

『んじやお言葉に甘えて』

磯波ちゃんの様子を見ると、弟君たちに取り囲まれてすっかり遊ばれているようだった。今は弟君たちが優勢のようだけど、何かの拍子に逆転しそうな気がする。

『しかし鬼怒がうちに遊びに来るようになってから、もう結構経つわよね。二年くらいだっけ』

おやつを御馳走になった後、村のあちこちを散策をすることになった。

リーナがそんなことを言い始めたのは、もう陽が暮れかかって帰ろうかという話になった後だ。

ちなみに磯波ちゃんは弟君たちに大分慣れたのか、小さい子を肩車してあげている。

『正直なところ、最初に日本の軍が駐留することになるって話が出たとき、最初はいろいろ不安もあったのよね。村長なんかも最初は渋い顔だったのよ』

『それは仕方ないよ。昔はいろいろあったし』

『あ、いや。そういうのもあるけど、艦娘っていうのがどんな感じなのか分からなかったから。今も正直その辺りはあんまり理解はできてない気はするけど』

カラカラと笑いながらリーナは言った。こういうことを言っても嫌な感じにならないのはこの子の人徳かもしれない。

『でも、少なくとも泊地の人たちには——日本人にも艦娘にも、いろいろ助けてもらってるからね。今はもう文句言う奴ほとんどいないよ』

『そっか。それは嬉しいね！ うん、嬉しいよ』

自分としては、泊地とこの島の人たちを守るために戦っているつもりだった。守ろうとしている人たちに嫌われてしまつては遣る瀬ない。

『あ、それじゃ私と磯波ちゃんはここからこのまま泊地に帰るね』

『ええ。暗くなるといういろいろ危ないから気をつけなさいね。艦娘だからって油断したら駄目よ』

『分かってる分かってる。じゃね、リーナ』

『あ、鬼怒』

手を振って別れようとしたところを、リーナに止められた。

『どしたの？』

『いえ。……また遊びに来なさいよ』

『うん、そのつもりだよ。じゃね、リーナ』

リーナは若干複雑そうな表情を浮かべながら手を振り返してくれ

た。

磯波ちゃんが、リーナたちに頭を下げてから追いかけてくる。

「鬼怒さん。今、多分リーナさん少し気を使ったんだと思いますけど」  
「んー、分かってる分かってる。心配性なんだよ、リーナはいろいろと」

「え、分かかって無反応だったんですか？」

少し意外そうにこちらを見上げてくる磯波ちゃんの髪をわしわしと撫でくり回す。

「そういうときは普段通りが一番って決めてるのよ、この鬼怒さんは」

「は、はあ」

「磯波ちゃん」

「はい」

「また遊びに行こうか」

「……そうですね」

「それで、門限を破ったと」

目の前には、泊地の風紀をはじめとする様々な事柄を取り扱う管理部の一員、そして私の姉である軽巡洋艦由良が立っていた。

「い、いやあ。つい盛り上がりまして」

「友達と遊ぶのは大いに結構。でもルールは守らないと駄目よね？」

「ご、御尤も……」

「遠征三連続コースかな」

「い、嫌だー！」

遊び過ぎには注意しようと思いに決めた夜でした。

## 作物防衛ライン（鬼怒・龍驤・赤城）

泊地の外は大雨が降っていた。

こんな日は室内で大人しくしているに限る。といきたいところだけど、この泊地ではそれも言つてられない。

「どーおー、龍驤さーん」

雨の勢いに負けじと声を張り上げる。

「あかん！ 排水路が何か所かぶつ壊れて作物が水に浸かつとる！」

「もう何日も降ってるし、修理するしかないかね！」

「うちらだけでやるのは無理や！ 鬼怒はまず応援呼んで来て！」

「アイアイサーー！」

それぞれの寮を駆け回って手の空いている子たちに声をかける。寮も一部雨漏り対策が必要なところがあつて来れないという人もいたけど、結果的に五十人前後の人数が集まった。

「畑のピンチは泊地のピンチ、放つておくわけにはいきません」

中でもやる気に満ちているのは赤城さんだ。赤城さんは泊地内の農業部の部長を務めている。農業と食材管理に関してはマジパナイのだ。

ちなみに私と龍驤さんは今日の畑当番だ。様子を見に来たら畑の浸水具合が酷く、調べてみると排水路が一部壊れていたことが分かった、という状況である。

「第二艦隊、第四艦隊、第五艦隊の皆さんはあの辺り一帯に臨時の排水路を用意してください。あそこから流すことができれば少し状況はましになるはずです。第三艦隊、第六艦隊の皆さんは私と一緒に排水路の修復を急ぎましょう。けど適当な修復では駄目ですよ。雨はまだしばらく続くそうですから」

大部分の畑は暗渠排水をしっかりと行っているけど、これだけの雨が續くと樂觀視はしてられない。

泊地の食糧や日用品は本土から取り寄せることが多いものの、深海棲艦の存在や予算の関係もあつて、それに頼りきりというわけにはいかない。



そのため泊地内では様々な施設や設備を設けて、何かあったときも自給自足できるようにしている。これは設立間もない頃に本土との連絡が取れなくて苦勞した教訓から出た方針らしい。その頃私はまだ着任してなかったから詳しいことは知らないけれど。

「鬼怒、見てみ。ここの辺り。雨のせいで土が崩れて畑の方に流れるようになってしまつとる」

龍驤さんが指し示しているのは、土を掘り返して作った排水路の一部だった。

「やつぱり石とか粘土とかで杵作らないと駄目なんじゃないかな」

「確か前もそういう話は出たんやけどねー……時間とか予算の関係で駄目つてことになったような気がする」

「でも今はそういうわけにもいかないよね。これ土を盛りなおしてもすぐ崩れちゃうんじゃないかな」

「せやなあ。何か硬いもんで固定するしかないけど、丁度良いのある？」

「さつぱりないよ……」

「多少不格好でも、当座が凌げそうなものであれば構いません。本格的な対策は雨が落ち着いたときにでも司令部に掛け合います」

赤城さんが力強く胸を叩いた。

「不格好でも……そや、バルジあつたやろ！」

「そういえば十個くらいストックしてたね。他にも正方形っぽい使つてない装備あればそれ使うつて手もあるかも……！」

「そういう発想に至ると思つて持つて来ましたよ！」

威勢の良い声とともに現れたのは、様々な道具を山ほど抱えた明石さんだった。

「ちなみにバルジは持つてきてません。代わりに板として使えそうなものとか、固定用の器具をいくつか」

「えー、バルジでええやん。あんなん必要ないやろ」

龍驤さんがぶーたれる。すると、明石さんは目を険しくさせて龍驤さんの鼻先に指を突き付けた。

「うちの泊地にある装備品はすべて大事な共有財産です。使用するも

廃棄するも決定権は提督にしかありません。無駄遣いや用途にそぐわない使い方はノーですよ。オーケーですか？」

「わ、分かった分かった！ 冗談や冗談！」

多分龍驤さんは本気だった気がするけど、それを言うと明石さんが鬼になりそうなので黙っておくことにする。赤城さんが農作物の鬼なら明石さんは装備品の鬼だ。明石さんの前で装備を軽んじる発言をしようものならきついお仕置きが待っている。

「それでは緊急工事に取り掛かりましょう。明日の美味しい食事のために全力を尽くすのです！」

赤城さんの声に皆が「えいえいおー！」で応じる。食料問題はこの泊地における重要事項なので、赤城さんに限らず皆の士気は高い。

勿論私も食事に食いつばぐれるのは御免なので、全力で取り掛かることにした。

それから三日後、私たちは畑のところに集まっていた。

農業について詳しい道雄お爺さんに畑の状態を見てもらっているのだ。

道雄さんは南方泊地を回って農業指導をしてくれる艦隊の民間協力者の一人だ。もう七十を過ぎているけど今も元気いっぱいなお爺ちゃんである。赤城さんをはじめとする農業部の人たちにとっては先生みたいなものだ。

「……うん、これくらいなら大丈夫だろう。けど排水路は全体的に見直した方が良さ。水を必要以上に吸ってるし、崩れやすくなってる。何かコの字型のものを設置して固めた方が良さだろうな」

一通り問題点を指摘すると道雄さんは船の積み荷を指した。

「まあ、今回は大変だったろう。ちようど本土から届いた物資があるから、何か作って食べようか」

道雄さんの言葉に周囲が沸き立つ。道雄さんは本土から届いた食料品を各泊地に届ける仕事もしているからだ。大半は泊地内の食事処や島の人々に提供されるのだが、一部は道雄さんが自ら料理して振る舞ってくれる。これを楽しみにしている艦娘も多い。

「そろそろ夏だと思って今回は素麺を大量に持って来た。以前竹を割ったろう。あれがまだあるなら泊地の皆を集めて流し素麺でもやろうと思ってな」

「鬼怒、急いで皆呼びに行くで！」

「あ、ちよつと待ってよ龍驤さん！」

こういうイベントごとが好きな龍驤さんは早速駆けだしていく。

私はそれを慌てて追いかけるのだった。

くう、とお腹の音が聞こえた。

私のお腹の音じゃない。隣にいた赤城さんのお腹の音だ。

「あ、赤城さん。もうちよつと食べても良いんじゃない……」

「いえ。私が食べ過ぎると下流の子たちが食べられませんので」

「でもさつきから……」

「何を言うのです鬼怒さん。一航戦たる私がそんなお腹を鳴らすなど

くうくうとお腹が鳴った。

下流の子たちもこちらを——赤城さんを見ていた。

赤城さんの我慢はそこから三分程続いたのだった。

## 倉庫増設計画（1）（鬼怒・大淀・龍驤）

「増設……ですか？」

「はい。お願いしますね、鬼怒さん」

執務室に呼び出された私を出迎えたのは、新しい命令だった。

泊地の倉庫を増設したい、というものだ。

「凶面は藤堂さんに用意していただいたので、後は我々で建てるだけという状況です。メンバーの人はお任せします。ただ、なるべく未経験者にも経験させてあげてくださいね」

「そういうわけだ。私の設計通りのものが建てられるかしつかりと見張らせてもらうから、頑張りたまえよ」

物凄くナチュラルに上から目線のこの人は一級建築士の藤堂政虎さん。腕は確かなんだけど気難しくて個人的には少し苦手なタイプだ。悪い人ではないのは分かってるんだけど。

「えーと、未経験者っていうと誰がいましたっけ。最後に工事したのいつ頃だったかなあ……」

「そこそこ大きな工事をしたのは今年の一月が最後ですね。島の各集落との道の一部を舗装したとき以来です」

「ってことは大規模工事未経験者は初月ちゃん、沖波ちゃん、ザラさん、ポーラさん、神風さん、春風さん、親潮さん、アイオワさんか。倉庫の規模ってどれくらいになります？ おー、これくらいならもうちよつと欲しいなあ。経験者からも何人が募った方が良さそうですね」

材料調達の手筈や施工期間、使える資金についても確認していく。資金面でのやり取りは大淀さんもなかなか苦しそうな顔をしていた。うちは最前線だけどそこまで重要視もされておらず、ほとんど大本営からの支援も期待できないので資金繰りで苦労することが多い。大本営との距離感が遠い分気ままに動きやすいというメリットもあるのだけだ。

「でも倉庫って大きいものだけでもう三つありますよね？ 増やす必要ありますか？」

「設計図をよく見たまえ鬼怒君。今回作るのは冷蔵倉庫だ。ただの倉庫ではない！」

うるさい顔で藤堂さんが力説する。

「現在泊地では食堂や各寮に冷蔵庫はありますが、泊地全体で使える冷蔵倉庫はありませんでした。今回は予算もどうにか確保出来たので作ってしまおうかと」

「冷蔵ってことは電力とか使うんですね。大丈夫ですか？」

「そこに関してはソロモン政府にご協力いただいて、現在よりも多くの電力を使えるようになる手筈になっています」

「今度菓子折り持ってお礼に行った方が良さそうですね」

うちは距離感や実際の仕事内容の関係上、ソロモン政府にいろいろと助けられることも多い。もしかすると大本営以上にお世話になっているのかもしれない。

「冷蔵倉庫が無事できれば食料品を大量買いして保存しておけるようになります。物資補給の選択肢が増えてより効率的にできるようになるんです！ それなりの出費にはなりますが、長期的に見ればコストダウンにも繋がるんです……！」

大淀さんが語り出した。大淀さんは普段泊地運営でいろいろ苦労している分、こうやって語り出すと長い。

「あつ、メンバー集めないとなー。それじゃ失礼します！」

わざとらしく言って執務室を後にする。大淀さんには悪いけど、長話は趣味じゃないのだ。

「はい、皆注目！」

プラスチックのコンテナに乗って集まったメンバーを見渡す。

最近入ったばかりの子たちはまだ状況を把握できてないようで、不思議そうな表情を浮かべていた。

「へい鬼怒！ これから何をするのかしら」

集まったメンバーの中で一番背の高い艦娘——アイオワさんが率先して質問をぶつけてきた。

「はい、アイオワさん良い質問です！ これから何をするのかという

と、ここに倉庫を建てます！」

事情を把握しているメンバーは面倒臭そうな顔をした。最近入ったばかりのメンバーはまだ戸惑いを隠せないでいるようだった。

「鬼怒、ちよつと言っている意味が分からないんだが」

ボーイツシユな口調の初月ちゃんが挙手をしながら言った。その隣では沖波ちゃんもうんうんと頷いている。

「よーし、じゃあもう少しはつきり言っちゃうぞ！ 私たちが、自分の手で、ここに、倉庫を、建てます！」

「私たちがっ!？」

神風ちゃんが驚きの声をあげた。他の子たちも声にこそ出さなかったけど、反応は似たり寄ったりだ。

「その、普通そーいうのは業者に頼むものでは……」

「そういうわけにもいかんのや」

春風ちゃんの疑問に答えたのは私ではなく龍驤さんだ。龍驤さんはこういう集団行動での仕切りが上手いので、今回の工事に副責任者になってもらったのである。

「薄々分かってると思うけど、うちの泊地貧乏でな。ここまで業者に来てもらって工事してもらうなんて資金は、ないんや……」

「工事に限った話じゃないけど、うちは基本自分たちで出来ることは自分たちでやる、というのがモットーなんだ。今ある寮とかも設計は建築士さんをお願いしたけど、直接建てたのはこの泊地の皆なんだよ」

「なんというか、凄い話ですね……」

親潮ちゃんが自分たちの暮らしている寮を眺めながら言った。

「あの寮とか建てたときは皆もうそれなりに土木作業には慣れとったからね。専門家のアドバイスとかも貰ってたし、良いもんできたと思ってる」

龍驤さんが自慢げに胸を張った。

その横では藤堂さんが自己主張の激しい顔をしていた。龍驤さんが言っている専門家というのは何も藤堂さんだけじゃないと思うんだけど。

ちなみに今ある建物は二〇一四年の秋頃に建てられたものがほとんどだ。あの年、夏に大きな大空襲を受けて泊地は一度壊滅状態に陥っている。ほぼまっさらな状態からすべてを建て直した結果が今の泊地なのだ。

「ま、実際艦娘の身体能力なら土木作業って言っても実際のところそんな疲れないよ。ということ皆、今日から大変だと思うけど頑張っ  
ていこう！」

「お、おー！」

戸惑いを残した子や面倒臭そうな子も何人かいるようだったけど、  
とりあえず趣旨は伝わったようだ。

「それじゃまず縄張りから始めるよ！ 分からないところがあつたら  
遠慮せずがんが聞いてね！ その場で聞き難いつて人は後からで  
も良いから質問しにくること！ それじゃあまずは——」

慣れてないであろう艦娘たちに説明をしながら工事を進めていく。  
今回も大変そうだけど、頑張ってやっっていこう！

「ところで藤堂さんってなんでいるんですか？ 設計図作るだけなら  
もう要らないんじゃないですか？」

「酷いことをさらつと言うな君は！ 工事監理者として必要なんだ  
よ、私は！」

藤堂さんが泣きそうな顔で両手を大きく広げた。

「好き勝手な改良したら許さんからな！ ここの泊地の連中はたまに  
私の設計を魔改造するから信用ならん！」

「あー……」

何人か心当たりがあるだけに、それ以上は何も言えなくなったの  
だった。

## 倉庫増設計画（2）（鬼怒・龍驤・那智・吹雪）

何事においても最初の段階でしっかりと土台作りをしておかないと、後々痛い目を見ることになる、というのは確か五十鈴姉さんの言葉だ。

建築において重要なのは縄張りと言ひ遣り方の二つ。敷地内でどこに何を配置するのかを示すのが縄張り、それを元に外側へ杭や板を張り巡らせるのが遣り方。

最初の頃、この二つを適当に済ませたばかりに問題になって作りかけの建物を最初から作り直すはめになったことがある。作業しながら考えを具体化していくタイプの人とか直感で動く人なんかはこの罫にハマりやすい。

何をすべきかは私や龍驤さんたち古参組が決めて、新しく入った子たちには実作業をしてもらうことにした。とは言え慣れてないから杭を立てたり板を張るのにも苦戦しているようだった。

「神風姉さん、その杭斜めになってます」

「あれ、本当!? うーん、これくらいなら大丈夫じゃない?」

「苦戦しているようだな」

神風ちゃんたちに声をかけたのは作業服姿の那智さんだった。

「少し手本を見せよう。いいか、杭というのはこうやって打つものだから斜めになっていた杭を一旦抜くと、手慣れた動きで打ち直していく。」

「慣れないうちはもう少し短い杭で仮打ちしておくといい。真っ直ぐに通る穴をあらかじめ空けておけば本打ちもしやすくなる。ずれなように杭を抑える役と打つ役、二人一組でやった方が良さだろうな」

おお、と周囲から感嘆の声。那智さんは本人の技量もさることながら、人に教えるのも上手い。きちんと相手によって教え方を変えることもできる。

「ありがとうございます、那智さん」

「なに、教えるのは嫌いではないからな。それよりも地盤掘削の方は



頼むぞ、重機マスター鬼怒」

「いやあ、マスターなんて言われるとこそばゆいなあ！」

「泊地内なら免許もなく乗れるというのに、わざわざ本土まで免許取りに行っただ。堂々とマスターを名乗ると良い」

ちなみに免許を取りに行ったのは私だけじゃないので、那智さん理論だとこの泊地には他にも何人ものマスターがいることになる。夕張ちゃんなんか大量に免許を集めるのが半ば趣味になっているらしい。今度マスターオブマスターと呼んでみようかな。

建築は一朝一夕で終わるものじゃない。

何日もかけて地均しを済ませた頃には、新しく参加した子たちも建物づくりに関心が向くようになっていた。

「土台作りをするだけでも覚えることが多くて、もう飲むしかありませんねえ〜」

そう言いながらグラスを傾けるポーラさんも、日中はあくせくと働いていた。ザラさん曰く「冷蔵倉庫ができれば冷えた酒を保管しておけるようになる」ということでやる気を出させたらしい。もしかして那智さんがノリノリで手伝ってくれてるのもそういう考えがあるのだろうか。

「でも実際覚えること多くて大変です……」

沖波ちゃんは食事中もずっとメモを見ていた。

ちなみに今は本日分の作業が終わった後の間宮での休憩タイムである。

「急いで全部を覚える必要はないんじゃないかな」

根を詰めやすい沖波ちゃんをフォローするのは初月ちゃんの役割になっていた。二人は同時期に着任したということもあって、よく一緒にいるのを見かける。

「そうだね。鬼怒たちも最初の頃は全然分からなくて、よく失敗してたな〜」

「そういえば、鬼怒さんたちは誰に教わったんですか？」

「丹羽さんっていうお爺ちゃんがいてね。棟梁さんやってたんだっ

て。最初の頃は島の人たちにも手伝ってもらって小屋とか建ててたんだけど、仮にも軍事拠点だしもう少し良いものを、ということでも本土から丹羽さん呼んで、いろいろ教えてもらったんだ」

「あの御老体も暇を持って余していたようだからな。ぶつくさ言っていたがこつちに來ることが決まって内心喜んでいたに違いない。あれはツンデレ爺という奴だ」

隣でチョコパフェを頬張りながら藤堂さんが補足した。藤堂さんは元々丹羽さんと仕事上の付き合いがあつて、その縁で丹羽さんが提督に紹介してからここに來るようになったという経緯がある。

「丹羽の爺様はめっちゃおつかなくてな。うちも那智もよく泣かされたわ」

「うむ。正直妙高姉さん以外にも怖い人がいるのだと、初めて思い知つた……」

「だけど、それだけ厳しい人に鍛えられたんだつたらあなたたちの腕前が凄いのも納得ね」

アイオワさんの言葉に他の子たちも頷く。

「いや、丹羽さん以外にもいろんな人にいろんなこと教えてもらったんだけどね。土作りとか壁塗りとか、木材・石材の作り方とか。私たちもまだまだ知らないことだらけなんだよ」

謙遜ではない。

自分たちのことを自分たちでやるというのは相当大変なことだ。最低限の生活を送っていればいいという立場でもないから尚更である。

「本当はもつと人増やせればいいんですけどね」

苦笑を浮かべるのは吹雪ちゃん。ちなみに彼女は組立のスペシャリスト。建材を組み合わせてがっしりと安定させることにおいては泊地随一の腕を持つ。

「それなら叢雲をどうにか説得するしかないな。頼むぞ吹雪」

「ええ……できるかなあ」

「あと大淀も説得せんと駄目やで。あつちは霞に任せるのがええかな」

話題は泊地司令部のことに移っていく。

まだ泊地事情に詳しくない子たちも皆興味深そうに聞いていた。

……こうやって少しずつ皆馴染んでいくんだなあ。

窓から射し込む夏の日差しを浴びながら、そんなことを思う午後の一時なのだった。

そうして建設開始から早一ヶ月。

どうにか冷蔵倉庫の完成を迎えることになった。

「さすがに感慨深いですね」

工事用ヘルメットに作業服姿の親潮ちゃんが倉庫を見上げながら言った。他の皆もそうだけど、こういう格好が随分と様になってきた気がする。

「シエルター、電源設備、気温調整の全テスト完了。問題なしね」

テスト担当の夕張ちゃんがすべての項目表にチェックを入れる。

これで完全に作業は終了だ。関係者全員が安堵の息を吐く。

「今回は一発オーケーでしたか……。運が良かったですね」

吹雪ちゃんが胸を撫で下ろしていた。古くからこの泊地にいる艦娘は大抵がやり直し地獄を味わっている。

「はいはい、皆お疲れ様！」

そこに、お祝い用の飲み物を抱えて村雨ちゃんたちがやって来た。

「あの、これは……？」

頭に疑問符を浮かべているザラさんの肩に腕をまわして、那智さんがサムズアップしていた。

「当然祝いの酒だ。ひと月頑張った我々に対する司令部からの労いというわけだ。今回ばかりは飲ませてもらうとしよう！」

「あく、賛成ですポーラは大賛成です。飲みましよう、皆でどんどん飲みましよう。なんと说着てもお祝いですから」

「ふふ、飲み比べならこのアイオワも負けるつもりはないわ！」

「あ、那智さんは最近飲み過ぎだからアルコール類駄目みたいですよ」

「な、なにいッ!？」

そういえば那智さんはこの前健康診断受けていた。それで何か良くない結果が出たのだろう。正直ポーラさんも結構危ない気がする。

「ふん、騒がしい連中だ」

藤堂さんも悪態をつきながらちやつかり飲んでゐる。

「まあまあ、藤堂さんもお疲れ様。おかげで良い倉庫出来ましたよ」

「当たり前だ。この俺が設計してお前たちが建てたのだ。良いものにならんはずがなからう！」

言つてから、自分の発言に気づいたらしい。少し気恥ずかしそうにしながら、

「ふん、今日は無礼講だ！ せいぜい浮かれてどんちき騒ぎでもすることだ！ フハハハハッ！」

と言つてその場を後にした。

「あのおつちちゃんも丹羽の爺様に劣らぬツンデレやねえ」

龍驤さんが呆れ顔を浮かべつつ、こちらに杯を差し出してきた。

「ほれ鬼怒。お疲れさん。一杯」

「ありがとうございます」

一杯頂戴しながら二人で出来上がった倉庫を見上げる。

「泊地の更なる発展に乾杯、つてとここですかね」

チン、と杯の鳴る音が聞こえた。

## 妖精さんの待遇事情（龍驤・加賀・瑞鳳）

「また新しい作戦が始まるって噂よ」

八月初頭。重苦しい顔つきで流星隊の妖精が言った。

「なんだよ、辛気臭い顔つきで」

「工廠妖精のあんたには分からないでしょうね。私たち艦載機妖精の辛さは……」

「悪かったな。言っとくけどこっちはこっちの苦労があるんだぞ」

「そうだったね。悪かったわよ、ほら」

お詫びの印のつもりなのか、焼き鳥の皿をこっちに差し出してくる。

それを頬張りながら、私はかねてからの疑問をぶつけてみた。

「実際のところ、撃墜されてから再生するまでの感覚ってどんな感じなのよ」

艦載機妖精は自らの腕を頼りに深海棲艦と戦う言わば妖精界隈の花形だ。それだけに危険も常に付きまとう。組んでいる艦娘からの霊力供給が断たれなければ本質的に死ぬことはないが、撃墜されればしばらくは消える羽目になる。

工廠妖精の身からすると、そういうときどんな感じになるのかは想像の外にある。

「そりゃ痛いに決まってるでしょ！ 無茶苦茶痛いよ！ 痛みもなく消えることもあるけどそんなの稀だよ！」

「お、おう。悪かったよ軽い気持ちで聞いて」

お詫びの印に温野菜の皿を差し出す。

それにかぶりつきながら、流星隊の妖精はビールをあっという間に平らげた。

「そもそも私たち妖精はちよつと軽く見られていると思うのよ！」

「そ、そうか……？」

「そう！ いくら身体が小さかろうと、人間からするとファンタジックな存在だろうと私たちだってここの従業員なんだから！ もうちよつとこう……待遇の改善を求めたいわ！」

「そこまで労働環境劣悪じゃないと思うけど」

有休も艦娘と同じ程度には貰えるし、寝床だって艦娘の寮の中にきちんと用意されている。こうして食事も用意してもらえるわけだし、衣食住には不自由していない。

しかし流星隊のはそれでは満足できないようだった。

「お給金が少ないのよ！ こっちは命賭けてるのよ？ もう少し多めに貰えても良いと思うの！」

「給料か……。まあ、そうなあ。前線で戦ってるあんたらは、なんかそういう手当あっても良いかもねえ」

「でしょ!？」

目をキラキラさせてこちらに身を乗り出してくる。しまった、ここは同意すべきじゃなかったか。

「早速明日陳情をしに行くわ！ 勿論ついてきてくれるわよね！」

「ええー、私もでござるかー?」

「突然キャラ変えて誤魔化そうとしても駄目よ。陳情では数が物言うの！ 一人で行ったってどうせ門前払いだわ！」

がしつと腕を掴まれた。

いやあ、明日は逃げられるかなあ。

「それでなんでウチのところ!?」

困惑の表情を浮かべているのは軽空母の龍驤だ。

「龍驤ならなんとかしてくれると思ってます」

「頼りにされるのは嫌な気がしますけど、ウチ司令部と違うんで？ 口添えは出来るかもしれんけど」

龍驤はこの泊地の第六艦隊総旗艦を任されているだけあって、実際頼りになる。

しかし待遇改善の話は司令部に通さないと意味がない。龍驤相手に訴えるのは筋違いというものだろう。

「司令部の空母やったら加賀にでも話してみたら？」

「か、加賀ですか……」

流星妖精は僅かながら目を逸らした。

「龍驤。こいつは加賀にも話を通そうとしたんだ。けど論戦できつぱり敵わなくてこつちに逃げ込んできたんだよ」

「あー……加賀はきちんと理由とか説明して納得させんと動いてくれんからなあ。んで説明できるだけの下準備してなかったんやな、自分」

「うっ」

余計なことを……と流星のがこつちを睨んできたが、事実なんだから別に良いじゃないか。

「こ、こういうのは理屈で説明しろと言っても難しいのよ！ そう思わない、龍驤！」

「まあそうやねえ」

龍驤は「うーん」と顎に手を当てて唸った。

「この手の話は瑞鳳通すのがええんと違う？」

瑞鳳は司令部メンバーの軽空母だ。加賀が正規空母代表の司令部メンバーなら、瑞鳳は軽空母代表である。

「瑞鳳は、ちよつと頼りない気がしません？」

「さらつと失礼なこと言ったね、流星の」

「あれで瑞鳳は頼りになるでー。伊達に司令部メンバーに選出されるわけやない。なあ、瑞鳳」

え、と振り返るとそこには今話題に上がっていた瑞鳳その人が立っていた。書類を抱えているということは偶々通りかかったということか。

表情は笑っている。しかしその笑顔はどこか硬い。

「あはは、流星の妖精さん。頼りにならなさそうでゴメンね？」

最後の「？」が怖い。流星のは顔を真っ青にしていた。

「い、いえ。あれはその……怖くなくて親しみやすいという意味です！」

「……ということは最初に相談された頼れる私は、怖い、ということかしら」

「うっ、その声は……」

瑞鳳とはまた別の方向から声が聞こえた。確認するまでもない。

声の主は加賀だ。

加賀の方も書類を抱えていた。

「二人揃って大した量の書類やね。例の作戦の件？」

「ええ。これから司令部で会議があるの」

加賀は穏やかな笑みを浮かべて龍驤に応じた。一見すると無愛想で怖い印象を受けがちだが、表情の作り方が下手なだけで、実際は全然そんなことはない。

「会議の席上で妖精さんから待遇改善の訴えがあつたことを議題にあげようか瑞鳳に相談していたのだけど——」

「これなら取り上げなくても良さそうですね？」

「い、いやいや！ ちょっと待ってください！ 加賀、瑞鳳！ ここは大人のレディ的な対応を要求します！」

慌てて二人の足にしがみついて、流星のが早口でまくしたてる。

「お二人さん、そろそろからかうの止めたげてもええんと違う？」

どっちみち議題に上げるつもりなんやろ」

「あはは、バレましたか」

「妖精さんには普段から助けられていますから。理由としてはそれで十分です」

瑞鳳と加賀が笑いながら流星の頭をわしゃわしゃと撫でる。「ぐわー」と声をあげながら流星のは抵抗するが、本気で嫌がつているという感じでもなさそうだった。

「やれやれ。だから面倒だったんだ。私がいなくても同じ結果になったろうに」

「あつはつは、あんたもご苦労さんやな」

「まあ良いよ。良いものも見れたしイーブンというやつだ」

空母二人と戯れる流星のを見て、思わず笑ってしまった。

妖精家業も楽ではないが、そう悪いものでもない。



## 彼女たちの本懐（駆逐艦多数・香取）

事の発端は、教室での江風の一言だった。

「やっぱ駆逐艦の本懐は戦闘だよな！」

話し相手は長波だったか清霜だったか。どちらもうちの駆逐艦の中ではかなりの武闘派だ。自然と戦闘談義で盛り上がったのだろう。

「特に魚雷！ 駆逐艦が一撃決めるのはやっぱ魚雷さ！」

「私は主砲の方が扱いやすいかな……。細かい立ち回りが求められることが多いから魚雷は少し扱い難いと思う」

新たな意見を投じたのは綾波だった。

「えー、やっぱ魚雷だよ！ なあ夕立の姉貴！」

「うーん、夕立は武器の種類には拘らないっぽい。夜戦で派手に暴れて敵を混乱させられれば後は流れでどうにかなるもの」

「夜戦だったら探照灯で囷役になって他の人たちのチャンスを作るのも大事なレディの仕事よね！」

「囷役じゃ敵倒せないじゃんか」

「でもあの神通さんだってそうやってチャンス作って勇猛果敢に戦い抜いたのよー！」

「う、神通さんの名前出されると何とも言えなくなるな……」

盛り上がる戦闘談義。

そこに、更なる一石が投じられた。

「そもそも敵を倒すことだけが駆逐艦の役割ではないと思いますが。例えば空母や戦艦の人たちの護衛とか」

秋月だった。対空能力に秀でている秋月型らしい意見である。

「単純な戦闘力と言えば空母・戦艦——重巡洋艦、航空巡洋艦といった方々の方がずっと上ですし。その戦闘力を削られないよう護衛に徹するというのが駆逐艦の本懐なのではないですか？」

「それは少々消極的ではないか秋月。我らとて戦う力を持っているのだ。倒せる敵がいるなら狙っていくのは悪いことではない」

磯風も会話に加わる。彼女もやはり武闘派だ。

「勿論叩ける敵がいるなら私も叩きます。しかし自分で戦うことに意

識を割くよりも、より強力な戦力の護衛をした方が結果的に艦隊としては良い戦果を上げられるのではないか——ということです」

「私も、どちらかというところと秋月の意見に賛成ね。護衛もまた戦いだと思おう」

初霜が秋月に同意する。他の秋月型や初春型も頷いて同意を示した。

「護衛というなら潜水艦の相手もできないと駄目じゃない？」

リベッチオが更なる意見を投じる。

「潜水艦は放っておくと怖いよ……？」

「うっ」

「潜水艦コワイ！」

曙や漣といった潜水艦に苦手意識を持つ子たちが反応を見せる。

「確かに潜水艦を放置しておくで大変なことになります。他の艦種の人たちが戦いに集中できるように潜水艦を掃討しておくというのも駆逐艦の重要な仕事ですね」

朝潮が対潜派の意見をとりまとめる。

「——皆肝心のことを忘れてるんじゃないか？」

あらかた意見が出たかと思っただが、まだ伏兵が残っていた。睦月だ。

「敵を倒したり護衛したりするのも大事だけど、そもそも私たちがそうやって戦うためには何が必要か？」

「何って……それは勿論燃料とか弾薬よね」

陽炎が睦月の問いに答える。睦月はそれに大きく頷いた。

「戦うためには燃料・弾薬が必要。修理には鋼材もあるし、空母の人たちの艦載機にはボーキサイトだって必要なんだよ。それを集めるのが第一！ なら輸送艦の護衛任務が一番大事なお仕事だよ！」

「確かに、これは燃費の良い駆逐艦ならではの役割ね」

「戦艦や空母じゃコストが高くつくしねー」

神風や皐月がこれに賛同する。

「けどそれだって制海権をある程度確保してないと難しいだろう？ まず戦いで敵を叩くところから始めないと！」

「それは戦艦や空母に任せれば良いんじゃない？」

「大型艦はいざというときに備えておいていただいた方が良いでしょう。できるだけ水雷戦隊で片を付けるのが望ましいと思います」

あちこちから様々な意見が飛び出してきて、段々收拾がつかなくなってきた。

「板部先生はどう思いますか？」

吹雪がこちらにキラークラスを投げしてきた。せっかく初雪と望月にプログラミング講座しながら知らぬ顔の半兵衛を決め込もうと思っていたのに。

「あー、そうだな。まず最初に言っておくと俺はどれも正解だと思う。少し言い方を変えると、駆逐艦と言っても皆はそれぞれ得意とするところが違う。島風みたいに速く海を駆け抜けられる子は他にいないし、秋月たちみたいに対空防御は他の艦型には無理だ。だから駆逐艦の本懐なんて曖昧なもんじゃなくて、自分の本懐というのを見つけ出すのが大事なことでぞ、うん」

「なんか正論だけどつまんない……」

ぼそつと初雪が毒を吐いた。

「先生の言いたいことは分かるけどさー、それでも駆逐艦って定義がある以上、それで何を突き詰めていくべきかは興味あるんだよな」

嵐が言うと、皆もうんうんと頷いた。どうも『大人な意見』を言つて済ませようというこちらの魂胆はバレバレで、それで納得するつもりはないらしい。

どうしたものかと悩んでいると、教室の扉が開いた。

「あら。何か盛り上がっているみたいですね」

「おお香取先生か」

練習巡洋艦香取。この泊地では俺のような人間のスタッフと一緒に becoming 習って学び舎の教員役を担っている。

艦娘たちも教員も自分の仕事があるので、日本の一般的な学校のようにきっちり時間割が決まっているというわけではない。一週間のうち数時間だけ必修科目の授業はあるが、他は教室を使った自由学習がメインだ。教員も暇を見つけて顔を出すだけで、常に教室にいると

は限らない。

香取も暇になったので顔を出しにきたのだろう。

「どうかされたのですか？」

「実は——」

駆逐艦たちの間で繰り広げられていた本懐談義について説明する。

香取は話を聴き終えると、にこやかに笑った。

「そうですね……駆逐艦と一口に言っても皆さん様々な特徴がありますし、ここで出た意見はすべて正解と言えます」

「でもそれじゃ——」

「はい。それで納得できないですよ。でしたらもう少し踏み込んで考えてみれば良いんじゃないでしょうか」

香取の言葉に俺含め全員が頭に「？」を浮かべた。

「駆逐艦は様々な長所もあれば短所もあります。そして、他の艦種にはない特徴があります。それはなんですか、雪風さん」

「え？ えつと……他の艦種にはない特徴ですよ。……あ、数、でしようか！」

「はい、正解です。他の艦種と比べて駆逐艦は低コストで数が多い。だからこそ、目的に合わせて様々な形で艦隊を組むことができます。例えば夕立さんや江風さんは夜戦での強襲を得意としていますが、昼に敵空母に襲われたらひとたまりもないですよ」

「う……確かにちよつと分が悪いつぱい」

「そんなとき艦隊に秋月さん、照月さん、初月さんがいたらどうでしょう。夕立さんたちを夜まで生かし続けられる可能性がぐつと上がると思いませんか？」

「確かに。空母相手なら秋月たちほど頼りになる味方はいないぜ」

「他にもいろいろな組み合わせが考えられます。潜水艦が多い海域では対潜水艦戦闘に優れた子がいなければ相手を倒しきれず後顧の憂いを残すことになります。けどその子だけでは水上艦の相手をする余裕はないですよ。そんなときは他に対水上艦に優れた子が一緒にいてサポートしてあげないと」

そこまで言って、香取は黒板にある言葉を書いた。

『One for All, All for One』

有名な言葉だった。俺でも意味は知っている。

一人は皆のために。皆は一人のために。

「目的を果たすため、それぞれの個性を生かし、互いの短所を補い合う。これが私なりの『駆逐艦の本懐』だと思いますが、いかがでしょう」

おお、と駆逐艦たちの感心の眼差しが香取に注がれる。一部こっちにしようがねえなあみたいなの視線も送られてきたが、今度こそ知らぬ顔の半兵衛を決め込むことにした。

「しかしさすがですね香取先生。なんというか、本物の教師みたいでしたよ」

「ふふ。これが練習巡洋艦としての私の本懐ですの」

香取は少しいたずらっぽく笑うと、駆逐艦の輪の中に入っていた。

彼女はとつくに自分の本懐を見つけているということか。えらいものだ。

俺の本懐はなんだろう――。

「板部先生、早くこの脆弱性の仕組み教えて……」

初雪に突かれて我に返る。

本懐と言えるかどうかは分からないが、俺はこうして今できることをやっていくしかなさそうだ。

「……ちなみに脆弱性の話なんか聞いてどうするつもりだ？」

「何かあったときに備えて大本営に侵入できるようにしておきたい」

「…………ちなみに脆弱性の話なんか聞いてどうするつもりだ？」

「何かあったときに備えて大本営に侵入できるようにしておきたい」

「わざわざ一回聞き直したおじさんの心境を察して欲しい」

「察したけど面倒だから無視する」

「初雪。子どもはもう少し大人に優しくしないと駄目だぞ」

「それ逆では……」

## 艦娘だつて風邪はひく（鬼怒・磯波・武蔵）

朝起きたら妙に身体がだるかった。

「念のため医療室で道代先生に診てもらった方が良いんじゃない？」

「うーん、そうだね……」

阿武隈が心配そうに言ってくるので、医療室に出向くことにした。

「症状からするとおそらく夏バテね。あと熱も出てるわ。三十七度八分」

診察後、道代先生からそう言われて、初めて自分が熱を出しているという実感が出てきた。

「うーん、まさか鬼怒が風邪をひくなんて……。毎日欠かさずトレーニングしていたというのに」

「トレーニングのし過ぎなんじゃない？ やり過ぎは却って身体に良くないわよ。ちゃんとトレーナーの先生とかついてる？」

「全部自己流」

「危険なパターンよそれ。まあ良いわ。あなた今日は出撃予定あつたっけ？」

「一応近海警備の予定が……」

「じゃあ司令部には私から連絡入れておくわ。阿武隈にも連絡しとくわね。あなたはとりあえずそのベッドで休んでおきなさい」

「はい」

大人しくベッドに横になることにする。

曲直瀬道代先生は本州から派遣されてきた本職のお医者さんだ。

艦娘は戦闘での怪我は人間よりもずっと早く治るけど、病気に関してはそういうわけにもいかない。だからこうして泊地に赴任してきてくれる先生の存在はとてもありがたい。

ありがたいのだけど、その反面厳しいことで有名で、下手に逆らおうものなら恐ろしくもありがたいお説教が待っているそうだ。病気が治ってから説教されるので、中には仮病を使つてずっと調子が悪い振りをしていた子もいたとか。ちなみに見破られて凄まじいお説教を受けたらしい。本人の名誉のために誰とは言わないけれど。

「あれ、鬼怒さんも風邪ですか？」

「おや、磯波ちゃん」

病室には先客がいた。磯波ちゃんだ。

「磯波ちゃんは風邪？」

「はい。三十八度出してしまつて……」

「むう。磯波ちゃんの方が重病か。お大事にね！」

「は、はあ。鬼怒さんもお大事に……」

あ、そうだ。私も病人だった。

「あれ？」

磯波ちゃんの更に向こう側、廊下側のベッドが膨らんでいる気がする。

「磯波ちゃん、他にも誰かいるの？」

「あ、はい。けど反応なくて……。多分寝てるんだと思うんですけど」  
「そっか。寝てるどころ起こしちや悪いね。鬼怒も大人しく寝ようつと」

どれくらい寝ていただろうか。

頭痛はすっかり治まったようだ。まだ少しぼーっとするが、これなら執務に戻ることも可能だろう。

ふと横を見ると、私 came ときには空だったベッドが二つ埋まっていた。寝ているのは磯波と鬼怒のようだ。鬼怒は風邪をひきそうにないイメージだったので少し意外だったが、それを言うなら私が医療室の世話になることも他の人からするとイメージし難いだろう。他人のことは言えない、というやつだ。

「あら、もう治ったの武蔵」

私の起き上がる気配に気づいたのだろう。道代先生が病室側に顔を出した。

「けど、酒ではめを外すなんてあなたらしくないわね」

「すまないな、今後は気をつける」

「去年の今頃も同じセリフを聞いた気がするけど……。まあ良いわ。あなたはここの最強戦力の一角なんだから、気をつけなさいね」



「ああ。肝に銘じておくよ」

ちなみに道代先生はかなりの酒豪で、時折那智や隼鷹たちと一緒に飲んでいるのを見かける。私は飲むとしても一人でちびちびやることが多い。

「鬼怒いますかー?」

と、そこで一人の少女が医療室にやって来た。確かこの島の住民で、何人かの艦娘と友人関係にある子だ。

「あら、リーナじゃない。あなたもどこか具合悪いの?」

「私はいつも通り健康体よ。それより鬼怒のところに遊びに来たら風邪で倒れたって言うじゃない。だからお土産に持って来たこれ上げようと思って」

リーナと呼ばれた少女が持っていたのは果物の盛り合わせだった。

「鬼怒なら今は寝ているようだ。しばらく待つか?」

「あ、いえ。あんまり暗くなる前に帰ろうかと思ってるので。お土産だけ置いて行こうかと思えます。……ところで、もしかして武蔵さんですか?」

意外なことに、リーナは私のことを知っているようだった。

「そうだが……よく分かったな」

「鬼怒たちからときどき話を聞いていたので。褐色肌で眼鏡かけてる大きくて強い人だって!」

「なるほど。それに該当するのはこの泊地では私くらいしかないな」

それにしたって他に言い様はないのかとも思うが。まあ鬼怒のことだから悪気はないのだろう。

「しかしこうして見舞いに来てくれるとは、鬼怒も良い友人を持った。本人はまだ寝ているようだから、代わって私から礼を言わせてくれ」

「いえいえ。鬼怒たちにはこつちもお世話になってるんで!」

「そうか。私たち艦娘は普通の人間と違うところもあるが……これからも手を携えあっていきたいと思っている。今後とも鬼怒たちと良い友人でいてくれると、私も嬉しい」

「は、はい。それはもちろん!」

と、そこで時計が視界に入ってきた。思ったより長く寝てしまっていたようだ。

「ではな、リーナ。道代先生。私は少し司令部に顔を出してくる」

「長門の説教喰らってまたダウンしないようにしなさいよ」

「はっはっは。あれは適当に聞き流すから大丈夫だ」

「……長門も苦勞するわねえ」

道代先生が少し遠い目をしていたが、それについては気にしないものとする。

「寝る前に渡しておいた薬、なくなるまでちゃんと飲み続けなさいよ」  
「相分かった」

ひらひらと手を振りながら保健室を後にする。

長門に何か手土産でも持っていくべきか。そんなことを考えながら、夕方の泊地を一人歩いた。

「……実は途中から起きてたけど、なんか出ていくタイミング逃しちゃったよ」

「武蔵さん、やっぱり格好良いですね」

磯波ちゃんはキラキラしていた。武蔵さんみたいなタイプが憧れなのだろうか。

「あら、鬼怒。起きたの？」

こちらの話し声が聞こえたのか、リーナが病室に顔を出した。

「磯波ちゃんも。二人揃って風邪？」

「まあそんなところ。そういえばリーナ、今日はどうしたの？」

「今度うちの集落で釣り大会開くから、何人か知り合いに声かけようと思って——」

不思議と悪くない感じのする気だるさを感じながら、ベッドで友達と語りあうというのも悪くないな、なんてことを思った。

三年目の終わりに（叢雲・漣・曙・那珂・白雪・大淀・明石・間宮）

今日もいつものように業務をこなした。

気づけばもうすぐ一日が終わろうかという時間帯だ。夜勤担当の初霜に後を任せて執務室を出る。

間宮さんのところに寄って行こうか第一艦隊寮にまっすぐ帰ろうか悩みながら司令部棟の玄関先に向かう。ふと視線を上げると、そこには二十一の文が箇条書きされた大きな掛け軸が飾られていた。

S泊地二十一カ条。

端的に言ってしまうと心構えを記してまとめただけのものだ。規則正しく生活しろ、他人に自らの欠点を指摘されてもすぐ怒るな、友は良き者を選べ、エトセトラエトセトラ。特に拘束力はないけれど、泊地の皆はこの二十一カ条を大事にしている。

「あれ、叢雲ちゃんだ」

玄関口が開いたかと思うと、那珂と曙、漣、それに白雪が入ってきた。

「あら。なんだか懐かしい組合せね」

「でしょー。ちようど叢雲ちゃん呼びに行こうと思ってたんだ、もう今日の業務終わった？」

「ええ。さつき終わったわ」

「それじゃ、間宮さんのところで一杯やろうよ！」

「別に良いけど、今日はどういう集まりなの？」

「アンタ忘れちゃったの？」

曙が呆れ顔を浮かべた。

「叢雲ちゃん、最近休みを取ってないから忘れちゃったのね。ヨヨヨ」

漣はわざとらしく泣く振りをしていた。

なんだか懐かしい。最近はこういうやり取りもご無沙汰だった。

「……あー」

そんな懐かしさと現在の状況の中に、一つの共通点を見出した。

「今日、八月三十一日か」

その言葉に白雪が頷いた。

「ええ。そして——」

「この泊地が発足してから三年っ！」

漣が指を二本立ててこれでもかと言わんばかりのドヤ顔を決めた。

「三周年の記念パーティーだよ！ 大淀ちゃんと明石ちゃんも間宮さんのところで待つてゐるっ！」

「ふふっ、そういうことなら断るわけにもいかないわね」

この泊地でもっとも長い付き合いの子たちに誘われれば、断るわけにもいかない。

騒々しくも懐かしい面子に囲まれながら、間宮へと足を運んだ。

「おっ、やっと来ましたね！」

時間が時間だからか間宮の中は大分空いていた。

テーブルに料理を運んでいた間宮さんと明石、大淀がこちらに手を振って来る。料理はいずれも参加しているメンバーの好物が取り揃えられていた。

「他に運ぶのは残ってる？」

「あ、それじゃ奥にもう二皿、あとペットボトルがあるので——」

てきぱきと準備を整える。昔はこうしてよく全員が集まって食卓を囲んだっけ。

今じゃ泊地も大所帯になったし、皆それぞれ艦隊が分かれたから、このメンバーで食事をする機会はほとんどなくなった。

「はい、それじゃせっかくなので叢雲さんから一言いただきましょうか」

準備を終えて全員が席に着いたところで、大淀がそんなことを言い出した。

「別に良いじゃない、そんなの」

「いえいえ、大事なことですよ。こういうの」

「そうですね。演説によって士気マックスにしてくださいな副司令！」

漣がいたずらっぽく追撃してきた。大淀にしたって面白がって振って来ているのは明白だった。昔はもう少し生真面目な感じだったのだけど、清霜や朝霜が来た辺りから良くも悪くも砕けてきた気がする。

「えー。仕方ないわね。それじゃ、皆。三年間お疲れ様！ この先どうなるかは正直全然分からないけど、今後とも精一杯やっていきましよう！」

杯を前に差し出す。

「乾杯！」

「かんぱーいー！」

コップを打ちつけ合う音が続く。

「けど、本当に大きくなりましたね、この泊地も。最初の頃はこの人数がどうにか入るかどうかってくらいの小屋しかなかったのに」

明石が感慨深げに言った。

「司令官なんか気を使って寝るときは外で寝てましたもんね。男女同じところで寝るのは良くないって」

白雪が少し懐かしむように言った。

「新さんはそういうところ堅物でしたね」

間宮さんがさり気なくそれぞれの皿に料理を運びながら笑みをこぼした。

「うちの歴代提督の中では一番口うるさかったわ」

「そんなこと言って、曙ちゃん裏では……」

「漣。余計なこと言ったらぶつとばすわよ」

「サーセン！」

てへぺろ、と舌を出す漣。この泊地もいろいろと変わったけど、こうして最古参のメンバーと話していると変わらないものもあるのだと実感する。

「ま、口うるさい説教好きだっていうのは確かね。だからあんな二十一カ条なんて作ったのよ」

「まあまあ叢雲さん。いいじゃないですか、あの二十一カ条。私たちが艦娘に人間らしく生きて欲しいっていうのが伝わってきて、私は好き

ですよ」

明石が言うと、大淀や間宮さんも頷いた。

「別に叢雲ちゃんも嫌いじゃないと思いますよ。ときどきあの二十一条の掛け軸見て笑ってるの見かけますし」

と、そこで白雪が爆弾を放り投げた。

ほほう、という視線がこちらに注がれる。

「叢雲ちゃん、なんか副司令になってからは遠い人になっちゃった感じがしてたけど、そんなことなかったね。那珂ちゃん安心っ！」

「いやいやいや。そんな、なんとというかアレな性格じゃないわよ、私！」

「どうかしら。叢雲って大人びてるところがあ一方でときどきすぐく子どもっぽいものね」

「曙、あなたには言われたくないっ！」

言い返されても曙はにやにやとしているだけだった。この流れは良くない。実に良くない。

「せ、せっかくこうして集まったんだし近況とか話しましょうよ」

「でも叢雲さん、ほとんど司令部に缶詰ですよ。話せるネタあるんですか？」

明石のさり気ない指摘に言葉を詰まらせる。そういえば最近は仕事ばかりで面白い話なんて全然なかった。

「……えーと。皆の方はどうかしら？」

「おっ。語ってしまっても良いのですかー？」

漣が生き生きとした顔で身を乗り出してきた。

「不肖この漣、面白おかしいネタを探すために生きてるみたいなのころがありました」

「あんたはもうちよつと真面目になりなさいよ……」

「失敬な！ 仕事はちゃんとやってますぞ！」

実際漣はこんな調子で人並み以上の仕事をこなす。それだけに曙や潮たちはいろいろと振り回されえているらしい。隴は割とマイペースにやっているらしいのだけだ。

「それでは先日工廠で繰り広げられた初春ちゃんと夕張さんによる口

ポットバトルのお話でも一つ……」

漣の話を聞きながらふと時計を見ると、ちょうど零時になるところだった。

三周年が終わり、四年目が始まったのだ。

「叢雲ちゃん」

「なに、白雪」

「また来年も、こんな風に集まると良いね」

「……そうね」

自然と笑みがこぼれる。

決して良いことばかりの日常ではないけど、こういう悪くない時間があるなら、そのために今後もずっと頑張っていけるような気がした。

## 彼女たちの工廠（鬼怒・アキラ・初春・夕張）

S泊地の離れには、大きな壁で囲まれた石造りの建物がある。

そこでは日夜装備の開発・修理が行われている。艦娘に支給されていない装備を保管しているのもこの場所だという。

また、艦娘の艤装の建造も行われているらしい。

そういう意味では、この泊地において司令部棟と同等の重要施設ともいえる。

そんな場所に足を踏み入れるのは、実はこれが初めてだった。

「指紋ガ一致シマシタ。入場ヲ許可シマス」

指紋認証を終えるとドアが自動で開く。まだここに来て日が浅いけど、指紋認証なんてしているのはここくらいではないだろうか。

中には、一足先に入っていた案内役のキヌが待っていた。

「お待たせ、キヌ。でも凄いわね、指紋認証なんて」

「最近は割と安価になってきてるって津田さん言ってたみたいだね。警備を厳重にするっていうよりも、誰が何を持ちだしたか確認しやすくするために設置したみたいだよ。ホラ、集団で使つてるときどき誰が何を持ちだしたか分からなくなって確認に苦労したりするから……」

「グラツチェ、勉強になるわ」

そう、これは勉強なのだ。

なぜ私が工廠に来ているのかというと、本日はこのアキラが泊地の秘書艦だから、なのだ。

この泊地では秘書艦は交代制になっている。これは泊地全体のことを皆が考えられるようにという意図によるものらしい。着任して日が浅い艦娘は泊地のことをいろいろと覚えるため、集中的にローテーションが組まれる。

キヌの後に続いて進んでいく。指紋認証で開いた扉の先にもいくつかの扉があった。全部オートで開いたけど、有事の際はここをロックすることもあるらしい。

「まあロックしたことはないんだけどね。する・しないとできる・でき



ないじや全然違うから」

そうして何度目かの扉の前に来たところでキヌが立ち止まった。

「ようこそ、うちの工廠へ」

キヌの言葉に合わせるかのように扉が開く。

途端、ゴウンゴウンと何かの機械音が聞こえてきた。ぶわつと熱気が増したような気もする。

「いやー、何重にも壁で囲んでるのはこの騒音対策もあるんだよね。とにかくうるさいから」

「た、確かに」

泊地は騒音の元になるようなものがほとんどなく、下手すると聞こえてくるのは波の音だけというくらい静かだ。けどここは違う。まるで異界に来てしまったかのようだ。

「おう、来たか」

低く、それでいてよく通る声が出た。

妖精さんを肩車した作業服姿の男性が立っている。無精髭とバンダナが印象に残るオジサマだ。

「俺は伊東信二郎。この工廠長をやっている。と言っても部下は妖精たちだけだが」

イトーは肩に乗せている妖精さんの頭をぐりぐりと撫でながら言った。

「そして私が工廠妖精。工廠には他にも妖精が多々いるけど工廠妖精といえは私だ。ここ重要だから間違えないように」

「……他の妖精さんと何が違うの？」

「工廠を統括してる妖精さんだから工廠妖精なんだって。他の妖精さんは職分に合わせた呼び方で呼ぶ必要があるんだ。建造妖精さんとか開発妖精さんとか……」

「うちの場合建造担当も開発担当も一人ずつしかいないから細かい呼び分けは考えなくて良いぞ。要するに俺とこいつと建造妖精、開発妖精の四人が工廠の全メンバーだ」

「うむ。実に寂しい職場だな」

「泊地が一つの企業だからなあ。ここってその一部署だろ。そう考え

るとそこまで少ないって感じもしないがな。あくまで専従メンバーがこの四人つただけで、兼任メンバーは他にもいるし」

「他というと……アカーシですか？」

泊地に着任してから何度か会ったことがある。彼女は確か工作艦と名乗っていた。

「ああ。明石はうちの技術部の部長で、立場的には俺の上司ってことになる。もっともあいつは物資管理や艦娘の応急修理なんかで忙しいから、実際のところそこまで工廠にいるわけじゃないけどな。だから俺がここの管理を任されてる」

長々と立ち話もなんだし早速案内しよう、とイトーが歩き出した。

彼の後を追いながら周囲に目を向ける。いろいろな機械が唸り声をあげているけど、何がどういう機械なのかはさっぱり分からない。

「基本的にここの泊地は貧乏だからだいたいのことは手作りで作ってしまうことが多いけど、この工廠の設備だけは別なんだ。艦娘の戦力に直結するものを取り扱っているわけだから、専門のプロが作ったものを取り寄せている。普段はケチくさい大本営もこればかりは必要不可欠だということが無償提供してくれた」

工廠妖精さんが説明をしてくれた。となるとこの泊地の人たちも工廠内の機械の仕組みについて詳細は把握していないのかもしれない。

「そんなわけだから迂闊なこととして壊すなよ。本来はえらく高価なものなんだ」

「……おいくらくらいで？」

「……知りたいか？」

「いえ。やっぱり良いです」

「賢明だ。知ればおそらく怖くなって工廠に近づきたくなくなる」

建造エリアの案内はほんの数分で終わった。

建造に使う機械の簡単な操作方法を教えてもらっただけ。注意事項とかは特にないらしい。素人が扱ってもトラブルが起きないような仕組みになっているそうだ。

続いて開発エリアに行くと、そこでは一人の艦娘が設計図を前に睨めっこしていた。

「初春ちゃん！」

キヌが呼びかけると、どこか優雅な佇まいのその艦娘はこちらに顔を向けた。

「おお、鬼怒ではないか。そちらはアクイラだったかの。工廠見学か？」

「そんなところ。初春ちゃんは例の新装備の開発？」

「うむ。かれこれ三ヶ月、何か掴めそうな気がするのじゃがもう一つ何か足りぬのじゃ……」

「……ハツハルは、技術者なの？」

「なんだかミスマツチな気がした。そもそも彼女は確か駆逐艦ではなかったか。」

「うむ。技術者の端くれとして技術部に属しておるぞ」

「技術部？」

「そういえば先程も話に出ていた。なんとなく名前から技術者の集まりということは分かるけれど。」

「明石を部長とする艦娘たちの技術開発部。工廠管理を任されているのが俺と妖精たちなら、工廠使って実際にあれこれするのが技術部だな。さつき言ってた兼任メンバーってのが技術部だよ」

イトーが補足してくれた。

「へえ。アカーシは工作艦だったからなんとなく分かるけど……」

「他にも夕張・扶桑・最上・瑞鶴・秋津洲がメンバーじゃな」

「思ったよりいろいろなメンバーがいるようだ。」

「秋津洲は工作艦の経験があるからと明石に引っ張り込まれておったが、他は皆自発的に技術部入りしておる。それぞれ理由は違えど、より良い装備を作って皆の勝利に——生還に貢献したいという思いは一緒じゃ」

「へえ。ハツハルはなんで入ったの？」

「うむ……。アクイラは知らぬかもしれぬが、わらわたち初春型は実艦だった頃に失敗作扱いされておつてな。艦娘としても役に立たぬ

であろうと言われておったそうなのじゃ。艦娘の運用が本格化する前の頃に生まれた最初の初春型は、実際他の駆逐艦と比べて航海時の安定性が低く戦闘では足手まとい扱いされておった」

しかし、その『最初のハツハル』はそれで諦めることなく、自分たちの艦装を少しずつ改善していったのだという。結果、初春型の問題は点はほぼ解消され、他の駆逐艦と遜色ない実力を発揮できるようになったそうだ。

「わらわはそれから少し経って生まれたのじゃが、この話を聞いて感銘を受けてのう。戦うこと以外にもやれることはあると思い、こうして技術部に入ったのじゃ。当然初春型だけでなく他の皆の艦装もよくしたいと思っておる」

こうした艦装改善の動きは他の鎮守府・基地・泊地でもあるらしく、ネットワークを通して情報交換が度々行われているのだという。実際に何人かの艦娘の艦装能力を向上させた実績もあるそうだ。所謂『改』『改二』と呼ばれる大規模改造にも貢献しているらしい。

「アクイラも自身の艦装に不足を感じたら技術部に相談してくりやれ。解決できるか確約はできぬが、できるかぎりのことはさせてもらうぞ」

「グラツチエ。まだ実戦経験あまりないからなんとも言えないけど……もし困ったことがあったら相談させてもらおうわね」

と、そこで内線の電話が鳴った。

「む、夕張からじゃな。機銃テストを頼んでいたのでその件かのう」

「邪魔して悪かったな」

「構わぬよ伊東。アクイラも、ゆっくり見学していっておくれ」

電話に出て何か話し始めたハツハルに別れを告げて、工場見学を再開する。

「あと残ってるのは装備テストエリアと管理エリアで——」

説明してくれるイトーの話を聞きながら、私はなんとなく先程ハツハルが言っていたことを思い出していた。

「戦うこと以外にもやれることはある、か……」

この泊地には技術部以外にも管理部や農業部、整備部等様々な部が

ある。皆それぞれ戦闘や訓練以外のことにも精を出していた。

「私は、どうしようかな」

部に所属するのは必須ではない。ただ、なんとなくどこかに入ってみたいなという気分になっていた。

「それで夕張、テストの方はどうだったかの？」

『いやー、それが改良版の機銃が暴発しちゃってテストルームの設備が一部壊れちゃったのよ。伊東さんや明石に見つかりと怒られそうだから、ちよつと助けてくれないかしら』

「……すまぬのう夕張」

『え?』

「今アキラが工廠見学に来ておつてな。じきに伊東はそちらに行くはずじゃ」

『ちよつ』

「南無阿弥陀仏。骨は拾っておくぞ」

『なに自分は無関係ですって感じになってるのよー! 言っておくけど設計図とテスト項目書は遵守したんだから、そっちにも責任はあるんだからねー!』

がちやりと電話が切れた。おそらくこれから大急ぎで隠蔽工作をするのだろう。とても間に合うとは思えないが。

「なにがいけなかったのかのう」

機銃の設計図を見直して首を捻る。

夕張の首根っこを押さえた伊東が怒鳴りこんできたのは、それから十分後のことだった。

## 磯の風香る食卓（磯風・春雨・早霜）

S泊地ではときどき同期会というものが開かれる。

同時期に着任した艦娘たちが艦種や部隊の枠を超えて集まるちよつとしたイベントである。特に開かなければならない決まりはないのだが、いろいろな同期会が開かれているので、なんとなく自分たちも……と開く艦娘たちが後を絶たない。

そんなわけで、今日も間宮の一角を借りて2014年夏組の同期会が開かれていた。

「今回は私が用意してみたの。皆どんどん食べてっ!」

春雨がテーブルに並べたのは鼻孔をくすぐる中華料理の品々だ。

「美味しそう……」

雲龍がうつとりとした声で言った。他の皆も期待に目を輝かせている。

しかしそんな中で一人だけ目を曇らせている艦娘がいた。磯風だ。

「あれ、磯風どうしたの？ 中華料理駄目だった？」

「いや、そういうわけではない。とても美味しそうで……それ故に羨望を抱いていた。同じ駆逐艦なのに春雨は料理が上手いのだな」

「磯風は全然料理駄目だもんねー」

悪気のない時津風の一言が磯風にぐさりと突き刺さる。

「姉さん、すまないが本当のことを言わないでくれ。今ちようどそのことで悩んでいるのだ……」

「どうかしたの?」

早霜が首をかしげながら尋ねた。

「うむ。実は昨日たまたま司令とここで同席してな……。そのとき、今度秘書艦になったときに料理を振る舞うと約束してしまったのだ」「えっ」

全員の視線が磯風に注がれる。「なぜそんな約束をしたのだ」と言いたげな視線だ。

「司令はご家族と離れて久しく、基本的には自炊で済ませているそう。だがここに来てからは秘書艦の手料理に触れる機会があつて、と

ても懐かしい気持ちになったと仰られていた」

最近の秘書艦は先日着任した水無月・アクイラ・伊26・ウォースパイトが日替わりで担当している。確かアクイラ以外は皆料理の心得があつたはずだ。

「それで、つい私も言つてしまったのだ。次の秘書艦担当の日には腕によりをかけて美味しいものを御馳走しよう、と——」

「なんでや」

時津風が冷えた視線でツツコミを入れる。

「多分磯風の負けず嫌いが発動したんじゃないかな。ほら、新しく来た子にできるなら私だつて……つて」

清霜の分析に、磯風は唸つた。確かにそういう負けん気が働いて、つい衝動的に言つてしまったような気がする。

「……私の方から司令にそれとなく言つておきましようか？」

「大淀。それはもう少し待つてくれないか。それは私の立つ瀬がなくなる」

「ですが、司令に体調を崩されても困りますし」

「ううっ」

何気に酷い言われようだが前科があるだけに言い返せない。

ちなみに大淀は泊地発足当初からの最古参だが、艀装が完全な形になつたのは2014年の夏なので、この同期会のメンバー扱いになつている。

「康奈司令には苦い顔をされ、新十郎司令は三日程お腹を壊されていたわね……」

「やめろ早霜、過去を振り返るな！ 今大事なのは次の秘書艦担当日についてだー！」

「ちなみに次の磯風の担当日っていつ？」

「……二週間後だ」

「微妙な期間だね」

全員が「うーん」と唸り声をあげる中、春雨が一人手をあげた。

「もし良かったら、私が料理教えようか？」

「い、いいのか!？」

「うん。私も人に教えられるほど上手いかどうか分からないけど」  
「なら、私も手伝うわ。フフツ、少しは覚えがあるから」

春雨に続いて早霜も手をあげた。磯風の表情が少しずつ晴れやかになっていく。

「それじゃ、磯風の問題も解決の糸口がつかめたってことで、そろそろ食べようよ。春雨の中華料理冷めちやうし」

時津風の言葉に全員が頷く。

それから、同期会はいつものような盛り上がりを見せたのだった。

「それで、どんな料理を作るつもりなの？」

同期会から数日後。

磯風の住む寮の厨房に、磯風・春雨・早霜の三人が集まっていた。  
「司令は魚料理が好物だと言っていた。なので秋刀魚の塩焼きをメインにしようと思っている」

ちなみに秋刀魚の塩焼きは昨年浜風たちに教わって完璧にマスターしていた。今も焼き魚は定期的に作っているのでそこは問題ない。

「ただ、それだけだと少し物足りないかと思ってな。他にもう一つか二つ出したい」

「……秘書艦って一日中やるけど、三食全部秋刀魚出すの？」

早霜の指摘を受けて、磯風の表情が僅かに硬くなった。

「——何か作らねばということばかり考えていて、三食ということを忘れていた。ど、どうする。想定の三倍料理を作らなければならないのか……!?!」

「品数少なくて済むものでまとめればいいんじゃないかな」

春雨が頭を捻る。

「例えば……朝はカレーにして、昼はその残りものでグラタンにするとか。それで夜に秋刀魚の塩焼きとご飯にお味噌汁、あとは適当なサラダにするとか」

「それなら難易度もそう高くはなさそうね」

「ま、待ってくれ。カレーもグラタンも、私はきちんと作ったことがな



いぞ」

「大丈夫だよ。少し手間はかかるけど、手順さえ守ればそんなに難しくはないもの」

「私たちが……しつかりと教えてあげる」

二時間後。

想定外の出来になった代物を見て、磯風はがつくりとうなだれていた。

「何が、何がいけないんだ……」

「どうも料理における感覚全般がずれているようね」

「そのうえものすごく感覚に頼って料理してるのが……」

早霜と春雨の言う通り、磯風は細かい点で感覚がずれていた。

火の強弱、煮込む時間の程度、調味料の入れ具合……。いずれの感覚も少しおかしいのだ。それが間違っていないという前提で料理をしているのだから、出来上がるものもおかしくなる。

秋刀魚の塩焼きが上手くできるようになったのは、感覚で覚えるくらい何度も練習を重ねた結果である。

そのとき磯風に料理を教えていた浜風たちも磯風が抱えている問題に気づいてはいたが、早急にどうにかする必要性がなかったので、長期的に改善させていこうということにしていた。

だが、今回は期限がある。あまり悠長なことを言っていられる余裕はなかった。

「必ずしもこのやり方がいいとは限らないけど——こうなったらとにかくマニュアル通りにやる戦法でいくしかないと思う」

春雨の目がぎらりと光る。春雨は実のところ料理には一家言を持つほどのこだわりを持っている。彼女にとって、教え子たる磯風が酷い料理を出して司令官をダウンさせるような事態は耐えられないものだった。

三十分程席を離れた春雨は、びっしりと文字が書かれたレシピノートを磯風に突きつけた。

「いい、磯風。料理に関する詳細を全部このノートに書いておいたか

ら、絶対にこれを守って料理をするの。火の強弱の判断基準はこの脇のところを書いておいたから。計量はきちんとしないと駄目よ。はい、時間計るためのストップウォッチはこれね」

「あ、ああ。春雨、分かった。分かったから少し離れてくれ……目が、目が怖い！」

「……春雨、まるで磯風のお母さんみたいね」

早霜のコメントが聞こえているのかいないのか。

半ば涙目の磯風に、春雨は徹底すべきルールを叩き込み続けるのだった。

「それで、結果はどうだったの？」

保健室でベッドの脇に座る道代先生が若干興味深そうに尋ねてくる。

「ああ。春雨と早霜の猛特訓のおかげもあって、司令にはそれなりのものを提供できたと思う……」

「その代わりあなたは無理して倒れたわけね」

「この磯風がこんな形で不覚を取るとは……」

寝る間も惜しんで特訓したからか、秘書艦としての任を終えてからすぐに体調を崩してしまった。

「ちなみにあんたが寝込んでる間に春雨と早霜が来てたわよ。さすがに無茶をさせ過ぎたって心配してたみたい」

はいおみやげ、と道代先生がクッキー入りの包みを差し出した。

そこには「おつかれさま」と書き添えられたカードが入っていた。

四葉祭（1）―お祭り告知編―（第二十二駆逐隊・ウオースパイト・伊26・アクイラ・叢雲）

「ねえむらっち、この四葉祭って何？」

聞き慣れない単語を目にして、水無月は眼前の叢雲に尋ねた。

ここは泊地に行くつかある多目的ルームの一つだ。今はここに先の作戦で着任した四人と、つい昨日着任したばかりの浦波が集められていた。

叢雲から配られた紙には、四葉祭開催要項という題が記載されている。

「クローバーフェスティバル、なかなか素敵なネーミングね」

「ありがとう、ウオースパイト。名付け親も喜ぶと思うわ。……この四葉祭は春と秋に行われるこの泊地のちよつとしたお祭りよ。当日は泊地の大部分を一般開放して催し物をしたりするの。島の人たちだけじゃなくて島の外の人たちも訪れるわ」

「へえ、それなら結構規模は大きそうだね」

ここに着任してから一カ月と少し経った水無月だったが、普段泊地に外の人が入りするのを見たことはほぼなかった。島の人たちはたまに艦娘やスタッフを尋ねてくることもあったが、わざわざ島の外から人が来たりするのを見たことはない。

「で、四葉祭は大きく分けて四つの部門で構成されてるの。艦娘は原則どれかに属して参加することになるから、明後日までに決めてもらいたいのよ」

改めて紙に書かれている内容を見る。

細かいことを省いて要点だけ抜き出すと、四つの部門というのは選挙・武勇・知謀・団体で、艦娘はそれぞれ参加部門のトップを目指して競い合うことになる。

選挙部門はもともと指揮艦として相応しい者は誰かを、武勇部門はもともと強い艦娘は誰かを、知謀部門はもともと知略に長けた艦娘は誰かを、団体部門はもともと良いチームワークを発揮する隊はどこか

を決めるのだという。

「ちなみに最初はとりあえず自信のある分野に挑んでみるのが良いと思うわ。大抵その自信へし折られるかもしれないけど」

「怖いこと言わないでよ」

「……ちなみに武勇部門、前はどなたが参加されていたのかしら？」  
ウォースパイトは武勇部門に興味があるのだろう。戦艦として個の強さを競ってみたいと思うのはそう不思議なことではない。

「武勇部門はだいたい重巡、戦艦、空母組の参加が多いわね。春のときは大和・大鳳・大井がトップ3を飾って隼鷹辺りがビッグスリーだとか騒いでいたわ」

性能面ではトップクラスの大和型に攻防揃った装甲空母、圧倒的な雷撃力を有する重雷装巡洋艦。確かに武勇部門のトップを飾るのに相応しいメンバーだ。

「さすがヤマトね……基本スペックもそうだけど、練度も非常に高い。私も正直まだ勝てる自信はないわ」

「私も、あの装甲は貫けそうにないなあ」

ウォースパイトと伊26が大和の実力について評した。水無月も演習で何度か見かけたが、二人と同じような感想を持っていた。この泊地で彼女に勝てる艦娘はそう多くはないだろう。

「あ、でも四葉祭は二回連続で同じ部門に参加することはできないから今言った三人は今回参加しないわよ。今回参加しそうなので優勝候補といえば長門、武蔵、赤城辺りかしら」

「ムサシもヤマトと同等の実力者よね……」

「長門さんもそれに引けを取らない強さだよ……」  
「アカーギも参加するの？」

赤城の名にアクイラが反応した。彼女はどこか赤城やグラーフを意識している節がある。もしかするとライバル視しているのかもしれない。

「多分ね。赤城は前回知謀部門に参加してたから、今回出るなら選挙か武勇だと思う。団体部門は空母組あんまり参加しないのよね」

説明書きを見ると、団体部門は何人かで集まってお店を出したりイ

ベントを開いたりするらしい。どちらかという企画力や計画性を問われる分野らしかった。

「純粋な戦闘力じゃ大型艦にはなかなか勝てないし、駆逐艦や潜水艦は知謀か団体に参加することが多いわね」

「ねえねえねえ、叢雲ちゃんは何に出るの？」

伊26が手をあげて質問した。叢雲は「私？」と聞かれてしばらく頭を捻った。

「前は団体部門で参加したからそれ以外ね。まだ決めてないけど、多分武勇部門になるかも」

「もしかして叢雲姉さんって戦艦並に強いとか……？」

「そんなわけないでしょ浦波。ただなか長門から武勇部門に出る出ろってしつこく言われてるのよ。散々模擬戦でやりあって八割方負けてるんだけどね」

「そうなんだ。……駆逐艦で戦艦に二割勝ってるって十分凄い気もするけれど」

叢雲は「いやいやいや、まぐれ勝ちよ」と手を振った。

「ま、あんまり難しく考えても仕方ないし迷ったらいろんな人に話を聞いてみると良いわ。一番大事なのは祭を楽しむことだから、一番面白そうだと思うたのに出れば良いと思う」

そう叢雲が締めくくって、その場はお開きとなった。

「あ、水無月ちゃん帰ってきたー！」

「お、ふみちゃんじゃん。どうしたの？」

寮に戻ってくると文月に長月、そして皐月が待ち構えていた。

「浦波たちと一緒に叢雲から呼び出されたと聞いてな。四葉祭の件だろっ？」

「ながなが鋭いね」

「その呼び方は……いや、いいか。ところで水無月、お前は何に参加するのかもう決めたのか？」

「うーん、全然。ただ武勇部門は参加しても一回戦負けしそうな気がするからやめとこうかなーって思ったくらい」

「ああ、うん。それはそうだね……」

皐月がうんうんと頷く。

「ボクも一度参加してみたことあるけど、だいたい運が良くても一回か二回勝つと戦艦か空母、重巡の人たちとぶつかるからね……。最初から夜戦前提ならどうにかなるかもだけど、あれはきついよ」

「でねー、水無月ちゃんもあたしたちと団体部門に参加しないかなって」

駄目かな、と文月に手を握られた。

……うーん、これはずるい。ふみちゃんにこう言われては断れるはずがないよ。

「分かったよふみちゃん。せっかく二十二駆全員揃ったんだし、このメンバーで何かやってみよっか!」

「ふ、やはり文月に乞われては断れないか。分かるぞ水無月」

長月が腕組みをしながらふふんと笑みを浮かべていた。

「それじゃ早速何やるか決めようか。団体戦は長丁場になるし、予算確保とか資材調達も自分たちでやらないといけないからね。早め早めに動いていこう!」

「お、さっちゃんやる気だね。それなら水無月も頑張るかな!」

二十二駆全員で「おー!」と掛け声をあげる。

このメンバーなら面白いことになりそうな、そんな予感がした。

「えー、お化け屋敷がいいよお」

「お化け屋敷は怖……いや、うん。そうだな……クレープ屋なんかどうだ?」

「いやいや、ここは射的だよ射的!」

各人の意見がぶつかり合う。かれこれ三十分はこの調子だ。

「もう、これじゃまとまる気がしないよ」

皐月の悲鳴が寮に響き渡る。

四葉祭開催まで、まだ少し時間がある日の光景だった。

## 四葉祭（2）―お祭り企画編―（第二十二駆逐隊・望月・陽炎）

「それで、何やるか決まらないからいろいろ偵察して回っている？」  
「ふらつとやって来た水無月たちを、望月が若干渋い顔で出迎えた。  
この面倒臭い来客をいかに手早く追い返すかを考えている顔だった。」

「もつちー、そんな顔しないでよ。姉妹艦の仲じゃないか」

「こつちも準備で忙しい……ああ分かった分かったそんな顔するな」

水無月たちが捨てられた子犬のような眼差しを向けると、望月も態度を軟化させた。

「あたしらがやるのはゲーム喫茶だ」

「ゲーム喫茶？」

「あたしの作った自作ゲームをやりながらのんびりしてもらうのがコンセプト。ゲームの得点によって価格がちよつと割引されるんだ。今あたしは絶賛開発中」

望月が自分の操作していたパソコン画面を指し示した。そこに映っていたのは四つのゲームを選択する場面である。見たところアクション・シューティング・パズル・クイズの中から一つを選択してプレイするらしい。

「人によって得意分野も違うだろうから、さつと遊べる複数ジャンル  
のゲームを用意してるんだ。これは弥生のアイディアだよ」

「おお。そういえば睦月たちは？」

皐月が周囲を見回して尋ねた。望月は睦月たちと組んでいるようだったが、この場には望月しかない。

「睦月と如月は設営のための資材集め。弥生と卯月は場所確保のために動いてる」

「皆もう動いてるんだねえ」

「というか皐月たちが遅いんだよ。もうちよつと急いだ方が良くない？」

「急がないとまずいの？」

四葉祭初参加ということで状況をよく分かっていない水無月が文月に尋ねた。

「うん。資材も場所も限りがあるから、あんまり遅くなると大変なことになるんだよ」

「最悪資材も場所もない状態でのスタートになるから……」

「それはそれで面白そうな気もするけど」

「……水無月、お前なかなかの強者だな」

「強者だよおー」

「そ、そうかなあ？」

てへへと照れる水無月。それを遠目に見ながら望月は皐月の肩を叩いた。

「あの調子だと大変そうだなあ」

「それは言わないでよ」

皐月は困ったような笑みを浮かべるしかなかった。

「あら、皐月じゃない。あなたは水無月だったわね、私は陽炎！ よろしくー！」

次に尋ねたのは陽炎型のネームシップである陽炎である。

部屋に入るなり颯爽と挨拶をされ、気づけば握手を交わしていた。

「参考用に私たちの企画を見に来たってどこかしら。ほら、遠慮せず見て行きなさい」

「か、陽炎。僕たちまだ何も言っていないんだけど」

「この時期に皐月が皆を連れて私たちのところに来るなら偵察目的だと思っただけで違った？」

「いや、違わないけど。相変わらず察しが良いなあ」

「ネタばらしをするね、さつき臙たちも来たのよ。あそこも意見がなかなかまとまらないらしくて」

「あー」

臙たちということは臙・曙・漣・潮なのだろう。皆意外と頑固なところがあからなかなか企画が決まらないのかもしれない。



陽炎は今回不知火・黒潮・親潮の四人で組んでいるようだった。他の三人は奥の方で何か作業をしている。

「陽炎たちは何をするんだい？」

「よくぞ聞いてくれました。私たちは釣りイベントを開催するのよ」  
言われてみると、部屋には釣り具や網が沢山置かれていた。

不知火たちは大きな布の補修をしているようだ。はつきりとは分からないが、どうも帆船の帆のようにも見える。

「釣った魚の調理は島の人たちにも協力してもらえる手筈になってるから、外から来る人たちにとっては興味深い企画になると思うわ。ちなみに島の人たちにはお礼に釣った魚の何割かをあげることにしてる」

「島の人たちからも人気ある陽炎ならではの企画だね」

臯月が感嘆の声をあげた。

陽炎は日頃から暇さえあれば島の集落を歩いて回っている。仕事の手伝いをよくしているそうで、特に高齢者や中年層から人気があった。同年代の友人も各地の集落に何人もいるらしい。

「そういえば今回は霞や霰とは一緒じゃないんだ？」

「霰はなんか知謀部門に出るみたいよ。思考が読めないから騙し合いの展開になれば結構面白いことになるかもね。霞は前回大淀さんたちと団体部門出たから誘おうにも誘えなかつたのよね」

「へえ。それじゃ今回は何に出るのかな」

「なんか足柄さんが選挙部門に出させようとしてるって霰が言ってたけど、どうなるかは分からないわね」

と、そこで陽炎は「いやいやいや」と手を振った。

「あんたたち雑談しに来たんじゃないでしょ。どう、何か思いついたの？」

「うーん、それがさっぱり」

「同じく」

「ふみい」

「水無月もさっぱりだよ」

「だ、駄目だこの姉妹……。そういえば菊月と三日月はどうしたのよ。」

あの二人はこういうとりまとめとか得意そうじゃない」

「二人は蒼龍さんたちに誘われて別のチームになってしまったんだ」

「あー、なるほど」

うーん、と陽炎は首を捻る。自分たちのチームのことではないのだが、なんとなく困っている仲間がいると見捨てられずにはいられない性質なのである。

「そういえば皐月、あんた結構な量のご飯食べるわよね。フードファイトなんてどうかしら」

「そういうのって大型艦の人がやりそうな気もするけど」

水無月の指摘に、他の全員が微妙な表情を浮かべた。

「いや、水無月。実際に前戦艦の人たちと空母の人たちが一回ずつやったんだ。でも結果は不評でね……」

「なんで？」

「戦艦・空母の食べっぷりは一般にも知られてるらしくて、みんな勝ってこないって参加してくれなかったんだよ」

一応戦艦・空母組の名誉のために捕捉しておく、彼女たちも決して暴飲暴食をしているわけではない。艦娘としての力を行使すると大量のカロリーを消費するので、それを補うために必要な分を摂取しているのだ。戦艦・空母のカロリー消費量は特に凄まじいが、他の艦娘もそれなりに消費するので、駆逐艦も普通の大人並には食べる。

「あー……。そうなるって駆逐艦ならどうにか勝てるかもって参加してくれる可能性があるってことか」

確かに勝ち目の見えない勝負に挑むのはよほどの物好きだけだろう。外から来た参加者に不評だったというのも頷ける。

「そういうこと！ どうよ皐月！」

「ボクは食べるの好きだから全然構わないけど、みんなはどう？」

「私は構わんぞ。スポーツのあとにということなら太る心配もあるまい」

「うう、体重の話されるとちよつと気になるけど……あたしも大丈夫だよ。甘いもの対決とかしてみたいなあ」

「水無月もオツケーだよ。あんまり体重にこないようなメニュー伊良

湖ちゃんに聞いておこうか」

反対意見なし。

皐月たちの企画はフードファイトで決まりとなった。

「いやー、さすがは陽炎。助かったよ!」

「……はっ。さては皐月、あんた最初から私に考えさせるつもりだったんじゃ」

「な、なんのことかな? ほらみんな行こう、まずは企画立案して司令部と予算交渉するよ!」

慌てて逃げる皐月たち一行。

陽炎はそれを「仕方ないわね……」と苦笑いを浮かべつつ見送るのだった。

四葉祭（3）―お祭り準備編―（陸奥・第二十二駆逐隊・鬼怒・ウオース・パイト）

「あらあら、美味しそうな蕎麦粉の香りがするわね」

祭りに向けて準備を進める水無月たちのところに、陸奥がひよっこりと顔を出した。

陸奥は長門型戦艦の二番艦だ。柔らかな物腰と聞き上手な性格から多くの艦娘に慕われている。

「皆のところはお蕎麦屋さんにするのかしら？」

「ちよつと違うよ。水無月たちのところは早食い競争するんだ」

「へえ。そうするとこのお蕎麦は……わんこそばかしら」

「ご名答！ 何で競うかいろいろ考えたんだけど、いっぱい食べるつてなるとやっぱりわんこそばかなつて」

なるほどなるほど、と陸奥は水無月たちが打っていた蕎麦の生地を覗き込んだ。

「でも、お蕎麦だと蕎麦粉アレルギーが少し心配ね」

「……あつ」

陸奥に指摘されて、水無月たちは一斉にしまったという表情を浮かべた。アレルギーの問題については考えていなかった。

「そうか、そういう場合どうしよう」

「お蕎麦だつてこと前提で予算組んで材料も発注しちゃったし、今から題材変えるのは無理だよ」

思わぬトラブルに頭を抱える四人に対して、陸奥はぴつと指を立てた。

「別に題材を変える必要はないと思うわ。わんこそば、とても良い案よ。でも間違つてアレルギーで倒れる人が出るといけないから、参加要項に注意書き足したり、万一アレルギー起こした人が出たときの対処方法は確認しておいた方が良いわね」

「確かに。なら参加要項は私の方で見直しておこう」

長月が胸を叩く。

「じゃあ、水無月は道代先生にでもアレルギーについて話を聞いてくるよー」

水無月が腕をまくつてみせる。任せなさいと言いたげなポーズだ。

「ありがとう、陸奥。ボクたちだけじゃ見落とすところだったよ」

臯月に礼を言われて陸奥は「あらあら」と笑みを浮かべた。

「ところで当日は私も参加していいのかしら？」

「えっ」

「うーん……」

「陸奥さんも戦艦だからかなり食べるよね……」

新しい難題に、水無月たちは揃って頭を抱えるのだった。

「おっ、陸奥さんだ。やつほー!」

水無月たちのところを辞して歩いていると、向こうから大きな荷物を抱えた鬼怒に声をかけられた。一緒にいるのは磯波、浦波の姉妹だ。

「あら鬼怒、磯波ちゃん、浦波ちゃん。三人も四葉祭の準備？」

「はい、黒豹ゲーム用の機材が届いたので」

「……黒豹ゲーム？ 皆で綾波ちゃんごっこでもするの？」

黒豹というのは磯波や浦波と駆逐隊を組んでいた綾波の異名だ。今回彼女たちは綾波や敷波と一緒に団体部門に参加する予定だったはずである。

「当たらずとも遠からずです。簡単に言ってしまうと真っ暗なワールドを使ったサバゲーみたいなものですね」

浦波が概要をかいつまんで説明した。まだ着任して日は浅いが、すっかり馴染んでいるようだ。

「本当は演習システムを使って本格的な夜戦シミュレーションゲームにしようと思っただけけど、そういうスキル持つてるメンバーの勧誘に失敗して」

「へえ。でもサバゲーって備品結構お金かかるんじゃない？」

鬼怒の持っていた箱の中を見てみると、何種類ものエアガンや暗視スコープが大量に入っていた。結構な額がしそうである。

「普段から司令部のお手伝いとかしてるから予算に多少色つけてもらったんですよ」

鬼怒がふふんと得意気に鼻を鳴らす。確かに鬼怒は司令部からいろいろ仕事を任されている。陸奥は「人が良いわねえ」などと思っていたのだが、案外多少の計算があつて手伝いをしていたのかもしれない。

「それじゃ、綾波ちゃんたち待たせてるんで。失礼しまーす!」  
「失礼しまーす」

三人は元気よく挨拶をして駆け去っていく。普段大人しい磯波も鬼怒と一緒にいると心なしかテンションが上がりやすくなるようだった。

演習場から砲声が聞こえてきたので何気なく覗き込んで見ると、ウォースパイトが砲撃訓練をしていた。

遙か彼方に設置された的に対してかなりの割合でヒットさせていた。彼女も着任してからそう長くはないが、艦娘としての練度はかなり高くなっている。

ウォースパイトが砲撃を終えると、海上に待機していたアクイラが新しうのを設置し直す。その繰り返しだ。

しばらくその様子を眺めていると、ウォースパイトが偶然こちらを向いた。

「あら、ムツじゃない。いたのなら声をかけてくれれば良いのに」

「集中しているようだったから、邪魔をしたら悪いと思つて」

「始めると止め時が分からなくなるの。自分でもよくないと分かつているのだけど」

ウォースパイトはアクイラに向けて手を振った。訓練はこれで終わりということなのだろう。

「そういうえばムツは今回何に出るのかしら」

「私? 私は選挙部門よ。だからこうしていろいろ歩きまわって、準備で困っている人を見つけてはアドバイスをしているの」

「随分と正直なのね、貴方は」

選挙部門は言ってしまうえば艦娘同士で行う人気投票だ。普通の選挙と違うのは、もつとも指揮艦として相応しいと思う人に対して投票する、という点である。

この四葉祭には娯楽イベントとしての側面もあるが、それ以外の狙いもいくつか散りばめられている。選挙部門に関して言えば、より優れた指揮艦を見出すための評価材料という側面がある。

「ウォースパイトは武勇部門にエントリーしたのよね。アクイラムも」  
「ええ。……この泊地が単純な強さ以外のことを大切にしているというのは分かっているつもりなのだけど、それでも私は戦艦だから。自分がどこまでやれるのか確かめてみたい——その欲求は抑えられないのよ」

「同じ戦艦として気持ちは分かるわ。こういうお祭りでなら、そういう欲求を無理に抑える必要もないと思う」

有事の際は別けどね、と付け加える。

「けど、貴方を見ているとここに着任したばかりの頃の長門を思い出すわね。あつちは貴方よりずっと問題児だったけど」

「……ナガトが？」

ウォースパイトがびっくりしていた。現在の長門は優等生そのもので、問題児たちを叱り飛ばす側だ。そんな彼女がかつては問題児だったと言われてもピンと来ないのだろう。

「長門は着任がちよっと遅くてね。長門が着任した頃にはもう金剛たちが戦艦組の主力として活躍していたし、私も十分な練度になっていた。加えて武蔵も着任済みで、相当な練度を誇っていたの。だから自分の居場所がないって感じたのかもしれないわね」

当時の長門はやたらと武に固執し、何度も武蔵に挑んでは返り討ちにあっていた。他にも実力者と見られる艦娘には一通り勝負を挑んでいたように思う。

「でもその後大きな作戦があつて、こっちの戦力を凌駕する凄い相手と共闘したり戦ったりすることになったの。その中で長門もいろいろ思うところがあつて、誰かれ構わず勝負を吹っ掛けるようなことはなくなつたわ」

「……ナガトにそんな過去があつたのね」

「それに比べればウォースパイトはしつかりしてるわ。多少の焦りはあるかもしれないけど、それを自覚して今できることをやっているんだもの」

面と向かつて褒められたからか、ウォースパイトは少し顔を赤らめた。

「ムツ。そういうことは面と向かって言うものではないわ」

「そうかしら?」

「そうよ」

コホンと咳をしながら視線を逸らす。

……照れ方もなんだか長門にそっくりね。

陸奥は微笑ましい気持ちになった。

彼女が今回武勇部門に参加することで何を失い何を得るのかは分からない。だが、長門のときと同様、おそらく悪い結果にはならないだろう。

そんな予感を抱きながら、陸奥はウォースパイトとアクイラに手を振ってその場を去つたのだった。

「へっくしー!」

司令部室に突如くしやみが響き渡る。

長門だった。

「なんだ長門、風邪か?」

「そんなわけないだろう、武蔵。久々にお前と一戦交えられそうなんだ。風邪など引いていられるか」

「やれやれ。大人しくはなつたが、勝負に情熱をかける性質は変わらないな」

「何事にも全力であたるのは私の性分だ、これは変えられんさ」

「お二人とも、お喋りもいいですが手は止めないでください」

パソコンで書類を淡々と片付けていた大淀に注意されて、長門と武蔵は揃って首をすくめ、仕事に戻るのだった。



四葉祭(4)―お祭り開催編―(第六戦隊・皐月・ウオースパイト・叢雲)

その日、泊地は珍しく多くの人で賑わっていた。

普段から常駐している艦娘やスタッフだけではなく、島の人や外から来ている人々が大勢いる。ソロモン諸島の人々、日本からやって来た人々。初めてここを訪れる人もいれば顔なじみになりつつある人もいるし、中には自衛隊や政府のお偉方もいる。

「賑わってますねえ」

雑踏の中、一人悠々と歩きながら青葉は愉快そうに周囲を見渡した。

彼女の役目は、祭りの写真を撮ってアルバムを作成すること。出来上がったアルバムは後日艦娘たちやスタッフには無償で、外部の人にはお手頃価格(自称)で提供することになっている。売上は泊地の運営資金になるので、貧乏泊地としてはそれなりにアルバム作成も重要視されていた。

「青葉ー、はいこれ」

どこかに行っていた衣笠が駆け寄って来て、青葉に焼き鳥を差し出した。

「おっ、塩焼き鳥とは分かってるねガサ。んー、美味しい!」

「そりゃ普段から塩塩言われてるからね。私としては断然たれ派なんだけどなあ」

衣笠の手にも青葉のものと同じカメラがあつた。一人だけでは祭りの写真を撮りきれないので、何人かに手伝いを頼んでいるのだ。衣笠もその一人である。

「この焼き鳥はどこで?」

「潜水艦の子たちが屋台出してたわよ。焼き鳥、焼きトウモロコシ、わたあめ等々。大型艦対策で購入数制限ついてたけど、もつと買ったかったなあ」

「ガサは食べるの好きだなあ。それなのにあんまり太らないというの

「はずるい！」

「いやいや、これでも食後の運動とかきつちりやってますから！」

二人でそんなやり取りをしながら祭りの中を歩き回る。

「おっ、青葉さん」

皐月の声があった。大部屋の前にある受付の机に鉢巻きを巻いた皐月の姿が見える。

早速そんな皐月の姿をパシヤリと撮る。

「どうも皐月さん。どうですか、調子は」

「盛り上がってるよ。二人も参加してく？」

皐月は自身の横にあるスコアボードを指し示した。

スコアボードには「一般・216杯」「艦娘（駆逐艦・潜水艦以外）：365杯」とあった。更にその横には皐月賞・水無月賞・文月賞・長月賞とある。

「二人は重巡だから艦娘コースになるね。今の最高記録はラバウルの大和さんだよ」

「勝てそうな気がしないので遠慮します」

「右に同じ」

「そっか。最高記録更新したら豪華景品、できなくてもボクたちの記録越えたら景品あげただけだなあ」

部屋の中を覗き込むと、水無月・文月・長月がせわしなくそばを配っていた。人の入りは結構ある。成功している部類と見て良さそうだ。「代わりと言ってはなんですけど、お写真撮らせてもらっていいですか？」

「どうぞどうぞ。とびきりいいやつお願いね！」

親指を立てて応じた皐月に、青葉は自身も親指を立てて返すのだった。

武勇部門は演習システム——仮想空間による戦闘——で行われる。

普段は艦娘のデータを使ったCPUと戦うのだが、今回は対人戦ということになる。その様子は外部端子からモニターに映し出されて観客にも見えるようになっていた。

対戦者はそれぞれトレーニングルームと呼ばれる部屋に入り、実際に海域へ出撃しているのと同じ感覚で戦闘を行うことができる。

痛覚のオン・オフも自由だ。実戦と同じ感覚で訓練することを重視する者はオンにするし、訓練ならではの無茶をしたい者はオフにする。四葉祭では観客を不安にさせないという配慮からオフで固定されるのだが。

武勇部門はトーナメント制で、今は準決勝が行われていた。

「やっぱ上位に残る連中は皆ちよつとおかしいくらい強いなあ」

加古が感心とも呆れとも取れるような眩きを洩らした。

「加古はあんまり興味なさそうだよね」

「敵を倒してのんびり寝たりお酒飲めればいいかなあ。古鷹だってそうだろう?」

「うーん、私はあんまりお酒は得意じゃないけど……確かにそこまで強さにこだわりはないかな。もう沈まないって決めたから、そのための強さは欲しいけど」

「あー、うん。生きるための強さなら要るねえ」

二人でそんな話をしてしていると、若干暗い表情のウォースパイトがやって来た。

「Hello, フルタカ、カコ。二人は見学?」

「はい、青葉に頼まれて撮影係です」

「ウォースパイトの雄姿もしっかり撮っておいたよー」

「ううっ……」

加古の言葉に、ウォースパイトは無念の表情を浮かべた。

「雄姿と言っても、一回戦負けです……。それも駆逐艦相手に負けるなんて」

「いや、あれは相手が悪かったよ。あたしだって清霜相手は嫌だ」

ウォースパイトは一回戦で清霜と戦った。決して悪くはない動きだったのだが、ぎりぎりのところですからすべて攻撃を避けられ、至近距離から魚雷を喰らって中破、最後に夜戦でとどめを刺されてしまった。

「うちの清霜ちゃんは大本営からも『バトルシップ』って異名を貰うくらいに武闘派だから……。練度も駆逐艦の中だと磯風ちゃんと並ん

で二位なんですよ」

「なるほど。その情報を聞いて少しだけ慰められました」

そうは言いつつもウォースパイトの表情は晴れない。

「その悔しさがあれば大丈夫よ」

そんなウォースパイトの肩をポンポンと叩いたのは叢雲だった。

「叢雲ちゃんお疲れ様。惜しかったね」

「ありがと古鷹。長門ったら初っ端から全力全開で仕掛けてくるんだもの。いきなり大破させられたら何もできないわ」

叢雲は一回戦でいきなり長門とあたり、猛攻に押し切られる形で敗退した。

その長門も二回戦で瑞鶴のロングレンジ攻撃に敗退している。トーナメント形式なのでどれだけ強かろうと組合せ次第ではあつさり敗退することがあるので、武勇部門は存外展開が読めない。

「勝負は時の運でもあるし、次は負けないって意気込みがあればいいと思うわ。さっきの試合だって、結果だけ見れば清霜のパーフェクト勝利だったけど、一発でも当てられてたら貴方の勝ち確定だったと思う。実際かなり際どかったわよ」

「……そうですね。落ち込んでばかりもいられません」

両手で頬をパンと叩き、ウォースパイトは気合を入れ直した。

自分に足りないもの、磨き上げていくべきもの。それを見直して次こそは勝つ。彼女の表情はそう物語っていた。

「はい、それじゃ気合入ったところでこれお願いね」

と、そこで叢雲はウォースパイトにデジタルカメラを渡した。

「……ムラクモ。これは？」

「撮影係用のカメラ。良いと思った写真適当に撮ってね」

「えっ、いえ、その」

突然のことに戸惑うウォースパイトを尻目に、叢雲は手をひらひらと振りながら去っていった。

「多分、気分転換にいろいろ見て回ったら、ということだと思いますよ」

古鷹がフォローを入れる。

「なんだったら、あたしらと見て回るかい？」

「え、ええ。そうしていただけると助かるわ……」

困った表情を浮かべてカメラを眺めるウォースパイトを見て微笑む古鷹と加古。

試合の展開に、観客席はますます盛り上がりを見せていた。

四葉祭（5）——お祭り後片付け編——（伊26・浦波・青葉・長門・加賀・叢雲）

四葉祭は大きなトラブルもなく終わりを迎えた。

純粹に祭りを楽しんだ者。自分の成果に満足した者、しなかつた者。要人の相手で疲れた者。様々な人々がそれぞれの思いを抱きながらその日を終えた。

「ニム、それはこっちに運んで」

翌日、伊26たち潜水艦組は屋台の解体作業を行っていた。普段屋台は使わないので、バラして片付ける必要がある。

伊26は伊58の後を追って倉庫までやって来た。

倉庫には他の後片付け組の姿もあつた。その中には伊26の同期である水無月や浦波の姿もあつた。

「あ、伊26だ。どうだった、そっちの屋台は」

「大好評だったよ。横須賀とか呉の提督さんも来てくれて絶賛してくれたんだ」

「あ、そっちにも行つたんだ。水無月たちのところにも何人か他の提督さん来てくれたよ。まさか来てくれるとは思わなかつたなあ」

「割と司令官たちは拠点間行つたり来たりして情報交換とかしてるみたいだよ。けど横須賀の提督カツコ良かったな」

「私は呉の人の方が良かったな。優しそうだったし」

普段泊地で見かけない人たちの話題で盛り上がる。日頃あまり島民やスタッフ以外と会う機会のない艦娘にとって、四葉祭は他所の人と話したりできる貴重な場なのだ。

「ニム、お喋りもいいけどまだ片付け残ってるよ」

「あ、そうだったゴメンゴメン。それじゃ二人とも、またね！」

「またね」

二人に手を振って伊58の後を追う。

「もー、ニムはすぐあっちこっちに興味移るんだから」

「ゴメンゴメン、まだ知らないことだらけでいろいろ気になっちゃう

んだよね」

着任してから約二ヶ月。身の回りのことや自分のことはだいたい理解できたが、まだまだこの泊地には知らないことが沢山あった。

所属している艦娘も知らない子の方が多いし、妖精さんやスタッフの人ともほとんど話したことがなかった。そういう未知のものを前にするとどうにもワクワクしてしまうのである。

「ニムはなんというか怖いもの知らずでちね……」

「そんなことないよ、怖いものは怖いよ。でもほら、ゴーヤもそうだけどこの泊地の人たちは皆いい人だから、怖がる理由なんてないよね？」

「……真顔で恥ずかしい台詞言うのはよすでちー！」

「恥ずかしくないよ〜」

「絶対恥ずかしいよー！」

顔を真っ赤にした伊58が早足で歩いていく。その後を、伊26はにこやかな表情で追いかけるのだった。

「おっ、浦波じゃん。お疲れ」

倉庫から磯波たちの元に戻る途中、廊下でコーヒー片手に休憩している川内がいた。

「お疲れ様です川内さん。休憩中ですか？」

「そんなとこ。さっきまで哨戒しててね。浦波たちは祭りの片付け中みたいだね」

「はい。そういえば川内さんは……何に参加してたんですか？」

「私は知謀部門だったけど、五位だったよ。霰にしてやられてさ」

知謀部門は毎回特定のルールで騙し合いを行い、目的を早く達した者が勝者となる。

「霰ちゃんは確か二位でしたっけ」

「うん。最後は日向に出し抜かれた形だね。どっちも思考が読み難くて私からするとちょっとやり難い相手だったよ」

川内はどちらかという我真っ当な思考のキレ者を翻弄するタイプだ。日向や霰は常人の想定の上をいく思考の持ち主なので、川内

の方が逆に惑わされてしまう。

「浦波たちは黒豹ゲームだっけ。いいなー、やりたかったなー」

「あ、あはは……」

若干恨めしそうな川内に浦波は乾いた笑みを返すしかなかった。

黒豹ゲームは生身で行うサバゲーなので、人間と艦娘が共同でやると不公平になってしまう。艦娘の身体能力は人間のそれよりも遥かに高いからだ。

そういう点を考慮して黒豹ゲームは艦娘の参加を禁止することにしたのだ。

ただ、結局当日他所の拠点からやって来た艦娘からの要望に押し切られる形で一回だけ艦娘オンリーでのゲームを開くことになった。そのとき川内はタイミング悪く哨戒任務中で参加し損ねたため、こうして恨めしげな声をあげているのである。

「結局その艦娘オンリーのゲームも他所の川内が上位を占め尽くしたっていうし、なんかズルイよねー」

「……あのー、もし良かったら片付ける前に一回だけやります?」

「いいの!?!」

先程までとは一転、目をキラキラと輝かせながら川内は浦波の手を取った。

「綾波たちとも片付ける前にもう一回やりたいねって話はしてたので……。鬼怒さんとか阿武隈さんも参加されるそうですよ」

「ほほーう、燃えてきたよ! 綾波もいるし相手に不足はないね!」

闘志に火がついたらしい。コーヒーの缶をゴミ箱に捨てると、川内は浦波の手を取った。

「それじゃ行こう、今すぐやろう! なんだったら神通と那珂も呼ぼうか!」

「え、いや、今すぐってわけじゃ……ま、待つてくださいーい!」

引き摺られながら悲鳴を上げる浦波。

どうやら彼女たちの祭りの終わりは、もう少し先らしい。

司令室では司令部メンバーが忙しなく動いていた。日々の業務に



加えて四葉祭の片付け指示もとりまとめなければならぬ。祭りの最中も各地の要人の相手をしたりして休む間もなかったから、全員疲労しきっていた。

それでも皆の表情は満足げだった。

大変なだけなら開催しなければいいのだ。司令部メンバーにはそうするだけの権限を持っている。

そうしないのは、この祭りに開くだけの価値を見出しているからだ。その価値についての実感が全員の満足げな表情に繋がっている。

「ありがとう青葉、おかげで機関紙も良いものになったよ」

「いえいえ。この青葉、古鷹の頼みは断りませんよ」

二人の側では加古と衣笠がぐったりと倒れていた。四葉祭の内容をまとめた記事の作成にかかりきりだったのだ。古鷹と青葉もそろそろ限界が近づいている。

「団体部門は潜水艦チーム、陽炎さんたち、皐月さんたちのところが特に盛り上がったみたいですね。親潮さんや水無月さんたち最近着任した方々も大分ここに馴染んできてるようです」

「うん。皆楽しんでくれてるならなによりだよ」

「私は消化不良だ……」

四人にお茶を出しながら長門がぼやいた。

「せっかく叢雲に勝てたのに瑞鶴にいいようにやられた感がしてならない……。おまけに陸奥はちゃっかり選挙部門で一位取っているし」「最近のあの子は成長著しいから。調子が良ければ私も危ないかもしれないわ」

差し入れの蕎麦をすすりながら加賀がぼそつと言った。

その言葉に司令部の全員が凍りつく。

「……か、加賀さんが褒めた!?!」

「明日は雨が降るかもしれないわね」

「どうしよう、明日の出撃編成見直した方が良いかしら……」

「——貴方たち散々な言い草ね」

あまりの言われように加賀が不服そうな声をあげる。

「私だって認めるべき人は認めるし、褒めるべきときは褒めるわ」

「冗談だって、ごめんごめん」

皆を代表して叢雲が謝罪し、自分の分の蕎麦をそつと加賀に差し出した。

「……ま、我々の泊地が皆少しずつ成長している実感を得られたし、今回も上々といったところだな」

長門の言葉に古鷹たちが頷く。

四葉祭は大成功で終わり、明日からはまた新しい日常が始まる。皆が少しずつ成長していく日常が、続いていくのだ。

## 北方秋刀魚漁の夜（龍田・木曾）

日本政府は深海棲艦に対する有効打を持たない——あるいは不足している近隣諸国に艦娘を派遣する役割を担っている。そのとき様々な条約を結んでいるのだが、その中には漁業に関するものもあった。

深海棲艦の出現によって漁業が受けたダメージは深く、漁船だけだと公海はおろか排他的経済水域内での漁も困難になっている。各拠点の尽力で排他的経済水域の安全性は大分ましになってきたが、各国政府は未だ護衛なしでの漁業の制限を解いていない。

漁船の護衛役を務めるのは各拠点の艦娘たちだった。遠征任務の中にはこういった護衛任務も多く含まれており、本国の支援が少ない拠点にとっては重要な資金源にもなっている。

艦娘の護衛をつける場合、その所属拠点に報酬を支払わなければならないが、その代わり日本の排他的経済水域内での漁も条件付きで認められる。他国の排他的経済水域内での漁に護衛をつけた場合、漁で獲得したものを報酬として貰うこともある。艦娘による護衛制度は、各国の漁業交流に一役買っており、単なる護衛以上の意味合いも含まれていたりする。

そんなわけで、S泊地の面々もソロモンの人々の護衛として秋刀魚がよく獲れる北方海域へとやって来ていた。

総勢十八名の護衛部隊、その旗艦を任されたのは龍田だ。漁業関係では他国と揉め事が起きることもある。そういうときに必要な判断力と交渉力を買われての人選である。

「今年もこの季節は秋刀魚狙いの漁船がたくさん来てるわね〜」  
「獲り過ぎには注意しないと。乱獲して秋刀魚絶滅なんてことになつたら目も当てられない」

応えたのは副官の木曾だ。泊地に三人しかいない重雷装巡洋艦の一人で、他二人よりも戦闘力はやや控えめだが、指揮官適性は上回るという評価を受けている。

二人が今いるのはソロモン政府が用意した大型漁船の甲板上であ

る。周囲を見渡すと無数の漁船が大海原に展開していた。大船団である。

「秋刀魚、美味しいものね。皆が食べたくなるのは分かるけど、先々のことを見据えて節度は守らないといけないわ」

甲板上では漁師たちが忙しなく動いている。その中に混じって駆け回っている艦娘たちもいた。自分たちの分の秋刀魚を確保するというのも龍田たちに与えられた役割の一つだ。護衛だけやっていればいいというわけではない。

秋刀魚は夜間に獲るのが一般的なので、昼のうちに辺りの深海棲艦を追い払い、夜間周囲に気をつけながら棒受け漁をするのが基本スタイルになる。

龍田と木曾も遊んでいるわけではない。手持ちのソナーで秋刀魚が近くに来ていないか探索中だ。秋刀魚が近づいてきたら探照灯で網の方に誘導する役割も担っている。

「どうだいお二人さん、近くにいますか？」

声をかけてきたのは、頬に大きな傷跡のある強面の中年だった。一見すると海賊のようにしか見えないこの男は、ショートランドのとある集落の長、リチャードだ。

「なかなか引つかからないな。場所を変えた方がいいかもしれない」

「なるほど。ならもう少し北に行ってみるか」

「大丈夫？　たくさん船があるし動きにくそうだけど」

「なあに、どこもテカテカ光らせてるし十分見通しはきく。気をつけながら移動すれば事故にはならんさ」

リチャードは太い腕を叩いてみせると、大声で船員たちに移動の準備をするよう告げた。船員たちは景気良くそれに応えるときばき動きだす。

「俺たちも船の外に出るか。事故りそうだったらフォローしないと」

「そうね。けど、今年はなかなか見つからないのが気がかりだわ」

元々今年は秋刀魚が減少気味だと言われており、提督からも昨年の八割程度獲ればいいと言われている。

実際、漁に来て見た感じだと昨年よりも目に見えて秋刀魚の数は

減っている。このままだと目標値である「今年の八割」すら達成できるか怪しい。

「あら……？」

漁船の右側に立って近くの状態を見てみると、何者かの視線を感じた。

ソナーの反応に変化はない。

「気のせいかしら。けど、こういう勘って無視すると痛い目にあうのよね」

ふと気になって上空を見てみる。すると、かなり遠方だが深海棲艦の艦載機らしきものが飛んでいるのが見えた。

どうもこちらの様子を窺っているようだ。

「こちら龍田。木曾ちゃん、どうもこっちを気にしてる深海棲艦がいるみたいよ」

『昼間追っ払った連中の残党か？』

「艦載機が一つだけ飛んでるのよ。今の時点では何とも言えないけど、放置しておくのは良くないわ」

『分かった。漁船の護衛は日向に任せる。俺とお前で様子を見に行こう』

数分すると対空機銃を手にした木曾がやって来た。艦載機がいたということと空母の存在を警戒してのことだろう。

「お前はそのままでもいいのか？」

「艦載機一機だけなら木曾ちゃんの装備でどうにかなるわ。少なくとも視認できる範囲では他に水上艦はいないみたいだし……けど潜水艦はいるかもしれないわね？」

「あー……ならそのままの方がいいか」

龍田は秋刀魚漁用にソナーと探照灯、ついでに爆雷を持っていた。潜水艦の相手をするならむしろ都合がいい。

二人は闇夜に紛れるようにして少しずつ艦載機へと近づいていった。

艦載機はこちらに気づいているのかいないのか、ぐるぐると同じような場所を回り続けていた。

「そろそろ射程距離に入るな。どうする、撃ち落とすか？」

「んー、どうしようかしら。なんだか敵意はなさそうだけど」

そんなやり取りをしていると、不意に艦載機が飛び去ってしまった。

「……なんだったんだ？」

「——あら」

罨の可能性を考慮してソナーを使ったところ、すぐ近くに想定していなかった反応があった。

「木曾ちゃん。ここ魚がたくさんいるわ」

「なにい？」

龍田のソナーを借りて確認してみた木曾が驚きの声をあげた。

「マジか……。潜水艦の反応は全然ないな」

「ええ。すぐにこちらへ船を回せば大漁ね」

二人はしばらくこの状況の意味を考えた。

「……深海棲艦にとっても秋刀魚は邪魔だったとか？」

「それなら蹴散らすんじゃないかしら。私は親切心から教えてくれたんだと思うわ」

「深海棲艦がか？」

木曾は怪訝そうな表情を浮かべたが、龍田はにこりと笑ったままだ。

「人間もいろんな人がいるし、艦娘にもいろんな娘がいる。深海棲艦にもいろいろいな深海棲艦がいるのかもしれないでしょ？」

「まあ、最近は和平派だか友好派だかつてのもいるらしいが……」

木曾は釈然としないようだったが、龍田の言を否定する根拠は見つからない。

「少なくともここは危険じゃなさそうだし、リッチさん呼びに戻らない？」

「ううん……そうだな。それじゃ、一旦戻るか」

二人は周囲を警戒しつつ、ゆっくりと漁船へと戻っていく。

それを彼方で見届けると、一機の艦載機は今度こそ夜の闇へと消えて行った。

「惜しかった……。嗚呼、これが日本でいうところのモツタイナイというやつか」

リチャードは甲板から海面を眺めつつ溜息をついていた。

龍田たちの報告で秋刀魚が大漁だったのは良かったのだが、獲れ過ぎて漁獲量の上限を越えてしまいリリースせざるを得なくなってしまうのだ。

「ガタイはいいのにリッチのおっさんは女々しいな。最大戦果をあげたってことだろ。満足しようぜ」

「分かっちゃいるんだが……。ン、美味そうな匂いが」

船上に香ばしい匂いが漂ってきた。見ると、皿の上に揚げ物に乗せた龍田が歩いて来るところだった。

「いっぱい獲れたから秋刀魚を揚げてみたんだけど、みんな食べる？」

「おおーっ！」

リチャードをはじめとする船員、艦娘たちが歓声を上げる。

龍田が置いた皿にたくさんの手が殺到する。

「ナイスタイミングだ龍田。辛気臭い雰囲気でソロモンまで戻るはめになるところだった」

「それは困るわね。せつかく大漁だったんだし、帰るときは意気揚々と帰りたいわ」

天龍ちゃんに心配かけたくないし——という言葉は口にはせず、龍田は木曾と並んで賑わう甲板の様子を見守るのだった。

とある古兵の一日（天龍・鹿島・夕張・初春・子日）

午前五時。

朝の静寂の中、微かに剣を振るう音がする。

振るっている人影は二人。天龍と鹿島だ。

二人の型はそれぞれ異なる。鹿島は鹿島新當流の型なのに対し、天龍は完全な自己流だった。

二人は並んで五十の素振りをする、その後向き合って十の素振りをする。二人揃って時間が取れるときは、こうするのが日課になっていた。

回数は少ないが、一回ごとに気を集中させて振り切るようにしていた。その方が効果的なのだ。天龍は思っていたし、後から着任してこの稽古に参加するようになった鹿島も反対はしなかった。

「今日も天龍さんの剣は気持ちの良い音でしたね」

「そうか？　自分で振っていると音はよく分からないな。ただ手元に残る感触は、良い感じだったと思うぜ」

振り終わった後はスポーツドリンクを一杯飲みながら雑談する。

朝の静かな時間帯のこういう時間帯が天龍は好きだった。

「香取はこういう稽古はやらないのか？」

「香取姉は森の中でやるのは好きみたいです。ときどき見かけますよ」

「どういう音を立てるんだらうな、あいつの剣は」

香取と鹿島はその名の影響を受けてか、武術に長じていた。他の拠点の香取や鹿島が皆そういうわけではないようだ。艦娘は提督や拠点の影響を受けて個性が出ることがあるというが、そのせいかもしれない。

「天龍さんはなぜ剣をやっているのですか？」

「艦隊戦で役立つものでもないし、艦娘としての力があれば剣をやらなくても荒事でそこまで困ることもない。……だからまあ、意味はない。強いて言えば趣味だな」

「趣味ですか」



「剣を振るうときの感覚が好きなんだ。何のためというわけもなく、ただ振る。その感覚がいいんだよなあ」

そんなことを話していると、遠くで食堂の前に伊良湖が立っているのが見えた。CLOSEDの看板がOPENになる。いつの間にか七時を回っていたらしい。

「朝飯にするか」

「そうしましょうか。今日の日替わりメニューはなんでしようね」

「確か海老フライとか言ってたような気がする」

二人連れ たつて食堂に向かう。こちらに気づいた伊良湖が手を振っていた。

午前中の近海哨戒任務を終えると、天龍はその足で工廠に向かった。

待っていたのは夕張と初春。この泊地が誇る改造馬鹿二人である。今日はその他に子日もいた。どうやら自分と同様呼び出されたらしい。

「で、夕張。今日は何の実験なんだ？ まあ、伊東のオッサンがいるってことは今日は真つ当な実験なんだろうけど」

夕張と初春の技術部実験コンビはときどき無茶をする。抑え役の明石か扶桑、伊東がいれば安全だと判断できるが、この三人がいないときは注意が必要だ。

「今日は潜水艦のステルス性強化実験に付き合っただけだよ。天龍と子日ちゃんが対潜哨戒任務をやるって体で」

「対潜？ 別にいいけど、五十鈴とかじゃなくていいのか？」

「五十鈴はもうちょっと実験の結果を見てからの最終検証とかじゃないよ……。初っ端からラスボスに挑んでボコられたらちよつとへこむっていうか」

「遠回しにオレたちを中ボス扱いしてるぞ子日」

「失礼だよねー」

「と言いつつ、対潜に関しては実際中ボスくらいの位置づけだろうな、と天龍は理解していた。それは子日も同じだろう。」

だからと言って不貞腐れるようなこともない。自分が必要とされているのなら、その役割を全うするだけだ。

夕張たちに連れられて、泊地正面の海域に出る。

「試作品を装備した潜水艦たちはもうこの海域に潜んでいる。オレがサインを鳴らしたら実験開始だ」

小型船に乗り込んだ伊東が説明する。天龍と子日は少し離れていた。潜水艦相手に固まっているのは得策ではない。

「開始だ」

ブザーが鳴る。海の雰囲気は少し変わった。

「子曰、お前は北の方を張れ。オレは西を張る」

「南と東は？」

「多分いない」

四式水中聴音機を使って音を聞き分けているが、嫌な感じがするのは北と西だけだ。厳密な説明はできない。この辺りは直感としか言いようがない。

ちなみに子曰は三式水中聴音機を持っている。アクティブ・ソナーとパッシブ・ソナー両方を相手にしたテストをしたいという夕張からの要請だ。

アクティブ・ソナーを相手にする以上じつとしていただけという選択肢はない。動かざるを得ないはずだが、動けばパッシブ・ソナーに引っかかる可能性が増える。そこをどうにかするのが試作品ということなのだろう。

天龍と子曰は、意識を海の音に集中させていった――。

夜半、天龍は食堂で子曰と一緒に親子丼を食べていた。なんでも本土から材料が沢山送られてきたらしく、食堂で割引対象商品になっていたものだ。

「お前はなんていうかいつも呑気そうでいいよなあ」

勢い良く親子丼を食べる子曰を見て、天龍はからかうように言った。

子曰としてはその評価は心外だったらしい。ぷうつと頬を膨らま

せた。

「子曰だっていつつも呑気してるだけじゃないよ。初春姉とか若葉・初霜のことで悩んだりするんだから」

「そうなのか？ 特に悩むほど複雑な仲には見えないけど」

「そういうことじゃないよ。初春姉たちが悩んでたら、それが子曰の悩みになるんだよー！」

「ああ、そういうことか」

中の良い姉妹だ。一見すると全然まとまりはなさそうだが、初春型姉妹の結束力には不思議な強さを感じることがある。いつもは皆全然違う場所にいるのに、一旦集まれば以心伝心といったところだ。

「あら、天龍さんに子曰ちゃん」

トレイに親子丼を乗せた鹿島が側を通りかかった。

「あつ、鹿島さんだー」

「隣いいですか？」

「ああ。今日はよく会うな」

「奇遇ですね」

何をしていたのかを聞かれたので、子曰と夕張たちの実験に付き合  
わされていた件について話した。

「天龍さんは夕張さんから頼りにされているんですね」

「……そうかあ？」

「初春さんが子曰さんを呼んだのと同じ理由で呼ばれたんですよね。きつと信頼されているってことですよ」

「そうだよー！ 初春姉は子曰を一番頼りにしてるって言うってたんだからー！」

「うーん……まあ夕張とは艦歴とか境遇とかも近いものはあるし、なんだかんだで縁もあったからな。使いやすいつてことなんだろうぜ」

「あ、天龍さん照れてますね」

「天龍照れてる？」

「う、うるせえ！」

二人の視線を払うようにしつしと手を振る。

悪い気はしなかったが、それを殊更に口にされるのはなんだかむず痒い。

「何を騒いでおるのじゃ、そなたらは……」

いつのまにか、若干呆れ気味の顔をした初春が立っていた。彼女が持っているのも親子丼だ。

「夕張は？」

「伊東の親父殿やイク、ハチと装備の調整中じゃ。わらわは実験のレポートをさつき司令部に提出してきたところでの」

子日の隣りに座りながら初春が説明する。

夕張が来ていないことに安堵の息を漏らす。今来られたら絶対鹿島たちにかからかわれることになる。

「そうそう、さつき叢雲から聞いたのじゃが、北方海域に秋刀魚漁へ行っていた船団が戻ってくるそうじゃぞ」

「おっ、そうなのか」

北方海域には龍田や木曾、雲龍三姉妹、日向に睦月型たちが行っていたはずだ。

「特に怪我人はおらず皆元気に戻って来れそうじゃ。良かったの」

「ああ、皆無事ならそれでいい」

全員そこらの深海棲艦に後れをとるような練度ではないが、いつなにか起きるか分からないのが海というものだ。

「戻ってくるのはいつ頃だつて？」

「二、三日のうちには戻ってくると言っておったの」

「分かった。なら何か上手いもんでも用意して出迎えてやるかな。海鮮物ばかりで野菜が恋しいだろうし、何か山の幸生かしたものでも拵えてやるか」

「うふふっ、それなら私もお手伝いしますよ」

「子日も手伝うー！」

人手が増えればできることも増える。

どうやって出迎えようか。

そんなことを考えながら、天龍の一日は暮れていくのだった。

## 今昔輸送物語（鬼怒・浦波）

ゆらゆらと波に揺られながら、ある船団が海を渡っていく。

その中心部にいるのは軽巡洋艦である鬼怒だ。船としての鬼怒の甲板上に、艦娘としての鬼怒の姿がある。

今の彼女は実艦モード中。甲板上にいる鬼怒の姿は投影されたものだ。

「いや、今のところは平和だねえ」

「油断は駄目ですよ、鬼怒さん」

鬼怒を囲むように海上を走る艦娘たちの一人、浦波が釘を刺した。

「油断はしてないよ。深海棲艦は神出鬼没だし、そういう意味じゃ昔のあの戦争のときより厄介だよ、輸送任務も」

「実艦状態だと小回りも利かないですし、気を付けてください」

「はい」

実艦状態だと艦娘状態のときより船体が大きくなる分砲撃の威力や射程距離が増したりするのだが、被弾しやすくなったり小回りが利かなくなるというデメリットがある。実艦モードだと自分一人では十分な操艦もできなくなるので、特に理由がなければ艦娘は実艦モードにならない。

今回は輸送任務で大量の物資を積む必要があったため、旗艦である鬼怒だけが実艦モードになっている。また、クルーとしてソロモンの船乗りたちが同乗していた。

「ウラナミといったか。あの子は心配性なようだな」

英語で声をかけてきたのはクルーたちの統括役であるウィリアムという老人だ。

「勿論用心することは重要だが、いつも気を張ってはいては疲れてしまわんかね」

「私もそうは思うんですけどね。昔の私たち、輸送作戦作戦中に沈んじゃったんで。気を張り詰め過ぎるなって言っても簡単にはできないと思うんですよ」

「成程。それはすまなかつたな。日本海軍の歴史には疎くてね」

「いえいえ」

S 泊地を始めとして、南方に位置する各拠点にとって輸送任務は日常風景の一つであり、同時にもっとも大切な任務の一つでもあった。

深海棲艦によって空路・海路が以前のような自由さを失ってから、島々で暮らす人々の生活はかなり厳しいものになった。そういった人々の生活を支えているのが艦娘たちによる輸送なのである。

「もうちよつと安全な海路を築くことができればいいんだがな」

「深海棲艦と和平協定でも結べればいいんですけどね。実際意思疎通できる個体もいますし」

「意志疎通できる個体とやらができない連中の手綱を完全に握れているならそれも考えたいところだ」

そこまで話したところで、遠くに島影が見えた。今回の輸送先である島だ。

上陸した後は積み荷を下ろして物資のやり取りを行う。

単純に支給するだけのときもあれば、物々交換を行うこともあるし、貨幣でのやり取りが発生することもある。浜辺が即席バザー会場のようになるのだ。

「皆楽しそうだね」

実艦の鬼怒の甲板上から浜辺の様子を眺めながら敷波が言った。

「なんだったら敷波ちゃんも行ってくれば？ お金持ってるでしょ？」

「ちよつとだけね」

S 泊地は表向き企業という体裁を取っており、スタッフや艦娘はこの社員という扱いになっている。当然それぞれ給与も出ている。S 泊地は常に資金難なので皆薄給なのだ。

「船なら鬼怒が見てるから皆で行ってきなよ。羽伸ばせるときに伸ばさないと疲れちゃうし」

「そうですね。磯波ちゃん、浦波ちゃんも行きませんか？」

「う、うん。行ってみよっか」

「鬼怒さんがいいなら……。あ、でもなるべく早く戻ってきます！」

「いやいいから。ゆつくりしてこないと羽伸ばせないでしょ」

どこか遠慮がちな駆逐艦の子たちを半ば押し出すようにしてバザー会場に送り込む。

護衛する側である彼女たちの方が精神的な疲労も大きいはずだ。休ませられるときに休ませてやらないと、却って帰りが心配になる。

「鬼怒は行かない?」

可愛らしい声をする。足元を見ると、物資を抱え込んだ大発動艇の妖精さんたちのグループがいた。

「鬼怒はいいよ。それより皆は?」

「物資目標分は確保済み」

「お菓子貰って来た」

「鬼怒もいる?」

「おつ、ありがと。……飴かな、これ。なんか不思議な色してるね」  
舐めてみると甘味の中に僅かな苦味が混じっているような気がした。

鬼怒に飴らしきものを渡すと妖精さんたちはテケテケと駆け去ってしまった。大切なパートナーたちではあるが、ときどき何を考えるのか分からなくなるフリーダムさを持っていた。

「私もリーナたちにお土産買っていった方がいいかなあ」

そんなことを考えているうちに、段々と眠気が増してきた。

「うーん……いい天気だし眠気マジパナイ……」

実艦モードだと、波に揺られる感じがちようどハンモックで眠るとき感覚と似ている。実に気持ちいいのだ。だから睡魔に負けるのも仕方ない。そう言い聞かせて、鬼怒は意識を放り投げることにした。

「鬼怒さん、起きてください」

ぺしぺしと叩かれるような感覚とわずかな寒気で目が覚めた。

最初に見えたのは浦波たちの顔と満天の星空だ。

「あー、もう終わった?」

「とつくに終わってますよ。鬼怒さんが起きないから皆待ってたんで

す」

「いやー、ごめんごめん」

身を起して状況を確認する。既に護衛艦娘やクルーたちの準備は整っていた。鬼怒が起きるのを待つだけ、という状況だったらしい。

若干の気恥ずかしさを覚えながらも、鬼怒は船を発進させた。

「あ、そうだ鬼怒さん」

「ん？」

甲板から降りようとしていた浦波が、思い出したかのようにポケットから何かを取り出した。

「これ差し上げます。航海の安全祈願用に」

浦波が差し出したのは木彫りの聖母像だった。

「え、嬉しいけどいいの？」

「はい。私の艤装を見つけてくれたのは鬼怒さんだって聞きました。そのお礼をしたかったのですが、なかなか機会がなくて」

そういえばそんなこともあった。大本営から浦波の艤装の発見報告が上がったときは夢中になって探したものだ。

「いいっていいって、私は浦波ちゃんにまた会いたかっただけだし。でも気持ちは嬉しいよ。これはありがたく貰っておくね！」

そういうと、浦波は少し顔を赤くして、

「恥ずかしいことさらつと言うのはやめてください！」

と言い、駆け足で海に降りて行ってしまった。

「あれ？ どうしたんだろ」

「……わしがいうのもなんだが、今のが分からないならちよつと女心的なものを学び直した方がいいぞ」

側にいたウイリアム老人が呆れ顔で言った。

その意味が分からず、鬼怒の頭にはクエスチョンマークが浮かび続けるのだった。

「それで鬼怒お姉ちゃん、浦波ちゃんから贈り物貰ってそれっきり？」

「え、うん」

「お返しとかしないの？」



「い、いやー。なにかいるか聞いたら要らないって言うし……」

「聞いた？ 由良お姉ちゃん」

「ええ。ちよつとこれは鍛え直さないと駄目ね……」

「え、なに。二人とも。ちよつと顔が、顔が怖いー！」

その数日後、泊地で上機嫌に手作りのミサンガを身につけて歩く浦波の姿があつたという。

誰のための功名（江風・照月・夕立・時雨）

「はあ……」

江風が何度目かの溜息をついた。

室内がそこはかとなく重苦しい雰囲気にも包まれる。

「江風、あのね」

照月が声をかけようとする、どんよりとした眼差しが突きつけられた。

「照月は敵艦載機をこっそり撃ち落とす大活躍だったそうじゃんか……」

「い、いや。そんなでもないよ？」

「謙遜はよしてくれよ。皆がベストな働きをしたんだろ。でなけりやアイツを倒せるわけないんだ……」

江風が言っているのは本土沖に迫って来た新種の深海棲艦のことだ。何体か指揮官級の個体が確認されたのだが、これが難敵でこちらの攻撃がなかなか通らない。周辺の深海棲艦の支援も得て相当な強さを誇っていた。

そこで総司令部は、先に周辺の敵を掃討する作戦を立案。S泊地も決戦用装備を取り揃えていたメンバーを一部変更し、掃討作戦に取りかかった。

取りかかったのだが――。

「こちとらずと待ってたんだ。もうすぐ決戦だと思つて魚雷の手入れもしつかりしてたんだぜ……」

変更された一部のメンバーというのは江風だった。

彼女に替わって周辺勢力掃討用に加わったのは比叡である。

比叡を加えた一行は予定通り順調に周囲の深海棲艦を蹴散らしていた。そこまでは想定通りだったのだ。

想定していなかったのは、周辺勢力を追っているうちに標的である指揮官級の個体と接近し過ぎてしまったこと――そして、必死に応戦しているうちにそれを撃破してしまったということだ。

他にも同様の個体の存在は確認されているが、ひとまずS泊地が総

司令部から命じられていた作戦はこれで一区切りついた形になる。

悪いことではないのだが、S泊地作戦支部で待機していた江風からすると寝耳に水だった。

以降、江風はずっとこんな調子なのである。

「でも、こんなに落ち込むとは思わなかったっぽい。夕立も活躍できなかったら悔しいけど、ここまでは落ち込まないよ」

「確かに……。いや、負けん気が強いのは知ってたけど」

江風から少し離れて夕立・時雨・照月がひそひそと話す。

「いや、多分……悔しいっていうのじゃなくて、提督に褒めて欲しかったんだと思う」

「提督さんに？」

夕立が首をかしげる。

「江風と提督さんでそんなに仲良かったっけ」

「うーん、表面上はそうでもないように見えるけど……」

今の提督は元々前の提督の頃から艦娘の教導官として泊地に常駐していた人で、その頃から江風はたつぷりと絞られていた。そんな提督に対して江風が悪態をつき、余計絞られる……というのはもはや様式美となっている。

それは今の提督が提督になってからも変わっていなかった。

「でも、この前江風指輪もらったとき嬉しそうに言ってたんだ。やっと認めてもらえた——って」

指輪というのは艦娘の力を引き出すための特殊装置だ。限界まで練度を上げた艦娘以外が装着しても効果はないため、指輪持ちというのは必然的に皆優れた艦娘ということになる。

それを結婚指輪に見立てて特別な意味を持たせる拠点もあるそうだが、S泊地の場合そういうことはなかった。だからか指輪持ちの艦娘の数も相当いる。江風だけでなく夕立・時雨・照月も指輪持ちである。

指輪持ちが複数いるからといってその価値が薄れるわけではない。指輪はたゆまぬ努力と提督からの信頼がなければ得られないのだ。S泊地の艦娘は皆指輪をもらうことを目標の一つにしているくらい

だ。

「江風としては、せつかく認められたんだし大手柄を上げたかったんだと思う。だからあんなに落ち込んでるんだよ」

「うーん、そうなるも僕たちでどうにかするのは厳しいかもね……。泊地に戻って提督にフオローしてもらうしかないかな」

「それまではずっとこのまんまっばい？」

「……仕方ないね」

肩をすくめる時雨に夕立がげんなりした表情を浮かべる。

このS泊地作戦支部は合同作戦の際に使う中型船の中に作られている。まだ作戦全体が終わったわけではないので、泊地に戻るの少し先になりそうだった。

そんなとき、ドアをノックする音が聞こえた。

照月がドアを開けると、そこに立っていたのは比叡と木曾だった。

二人とも船の中の別室で待機していたはずだ。

「ありやー、やっぱり落ち込んでるね、江風」

少しづつが悪そうな比叡に対し、木曾は溜息をついた。

「戦場では思ってもみなかったことが起きる。それは当然のことだ。

……とはいえ、まあさすがに今回は気の毒だったな」

「励ましになるかどうか分からないけど、これ渡しておいてもらえるかな。今私が行くと却って逆効果になりそうだから……」

と、比叡は封筒を差し出してきた。

「これは？」

「さつきちよつと司令と通信できたから江風のこと話して、ちよつと励ましの言葉をもらったの。それをメモしてきたんだ」

「通信回線使って雑談するなって高雄や霧島には注意されてたけどな」

木曾が苦笑を浮かべながら補足した。

「ま、そんなわけだ。どうするかは任せるよ」

そう言い残して比叡と木曾はそそくさと去っていった。

渡された封筒を時雨・夕立と三人で眺める。

「中身見てみる？」

「でも江風宛てなんでしょ？ 夕立たちが見るのはマナー違反っぽい」

「提督たまにすぐくきついこと言ってくるから、余計江風の心へし折らないかが心配だね……」

元教導官ということもあってか今の提督——お富士さんはかなり怖かった。決して厳しいだけの人ではないのだが、ミスに対してはかなり厳格で何が問題なのか本人がきちんと考えをまとめるまで逃してくれないところがある。

「さつきから三人でなにこそこそしてんだ？」

さすがに不審に思ったのか、江風がこちらを覗き込んでくる。

自然、その視線は照月が持っている封筒に向けられることになった。

「なんだその封筒？ 江風宛てって書いてあるじゃんか」

「あっ」

江風はひよいっと封筒を取ってしまった。

「なになに、提督から……？」

提督からと聞いて江風の表情に若干の緊張が走る。

だが、意を決したのか封筒の中の手紙をさっと取り出して目を通し始めた。

……大丈夫かな。

不安を感じながらも江風の様子を見守る。

「……」

江風は無言で手紙を読み終えた。予想に反して心なしか少し表情が明るくなっているようにも見える。

綺麗に手紙を畳んで封筒の中にしまおうと、江風はにやりと笑みを浮かべて三人に指を突きつけた。

「今回は三人とも大活躍だったらしいけど、次は負けないからな！

三人だけじゃなくて比叡さんや木曾さんにだって負けないぜ！」

「お、おう……っぼい」

「なんか急にすごいやる気出したね……」

「でも指で人指すのはあんまり良くないよ」

三人の反応を聞いているのかいないのか、江風は勢いよくドアを開けた。

「あれ、どこ行くの？」

「部屋でじっとしてるのも性に合わないから、ちよつとそこらを走つてくる！」

言うや否や江風は勢いよく駆け出していく。

残された三人はしばし呆然と開いたドアを見ていた。

「提督はいったい何を言ったんだろうね……」

「見ちやう？」

「やめとくつぽい。夕立たちがそれを見るのは無粋ってやつつぽい」「だね」

「そうしておこうか」

三人はそつと残された封筒を江風の引出しの中にしまうと、江風の様子を見物しに部屋の外へと行くのだった。

泊地内ギャンブル事情（若葉・荒潮・霰・隼鷹・飛鷹）

S 泊地にも娯楽はある。本土の拠点に比べればいろいろとないものも多いが、それならあるもので遊べばいいだけだ。

本が好きな艦娘は図書館に足しげく通うし、身体を動かすのが好きな子は島のあちこちに出向いてスポーツに励んだりする。

一方で——娯楽としてギャンブルに興じる艦娘も一定数いた。

「おや、若葉さん。こちらに顔を出すのは久々ですね」

間宮食堂と同じ建物の地下にある娯楽室。そこに顔を出した若葉を、髭のマスターが出迎えた。

ちなみにこの娯楽室は司令部公認のもので、決してやましい施設ではない。本土の拠点に比べると娯楽に乏しいことを考慮し、初代提督の頃に司令部からの発案で設立されたのである。『放っておいてもこういうことをやる場所というのはできるものだ。なら最初からこっちで作って管理する方がいい』とは当時の提督の弁だ。

若葉はマスターに会釈すると室内を見渡した。

「……若葉が最初か」

「おや、今日はどなたかと待ち合わせですか？」

「隼鷹、荒潮、霰と花札だ」

「総当たり戦ですか？」

「そうだ。2セットあるか？」

「ありますよ」

マスターはカウンターの奥にある棚から花札を2セット取り出した。この娯楽室で必要なものはマスターが貸し出している。貸し出したもの以外は使つてはいけないというのがこのルールだ。

「あらあ、若葉ちゃんもう来てたのね。荒潮が二番かしら」

若葉が札をチェックしていると荒潮が姿を見せた。若葉は荒潮に会釈して、すぐに札の確認に戻る。そんな若葉を荒潮はニコニコと笑いながら見ていた。

そのうち隼鷹と霰が連れ立ってやって来た。

「おつ、面子は揃つてるようだね。それじゃ早速始めようか」

「……ん」

四人が席に着いたタイミングでマスターがテーブルに飲み物を差し入れる。

「本日はこいこいの総当たり戦でよろしいですか？」

「いいよー」

「何かお賭けになられますか？」

「今日は畑当番権だ」

「負けた方が勝った方の畑当番を代わってやるって話だよ」

若葉の説明を隼鷹が捕捉する。

「どう、マスター」

「問題ないかしら？」

「ええ、問題ありません。では存分にお楽しみください」

言つて、マスターはテーブルを離れた。

この娯楽施設で賭博をする場合、賭けるのは現金であつてはならない。では何ならOKなのかというと、それは明文化されていない。なるべくトラブルの元にならないようなものが望ましいが、そういうものが妥当かはケースバイケースである。

なので賭博を実施する際は毎回マスターが対象の確認と承認を行う。もしまずそうであればストップがかかるわけだ。

いろいろと決まりごとがあつて着任したての艦娘にはとっつきにくいと言われることもあるが、存外規則としては緩めだし賭博絡みでのトラブルが起きたことはほとんどない。万一起きた場合はマスターが調停者として事態の収束を図ることになっている。

「まずは若葉と荒潮、隼鷹と霰でやるか？」

「いいんじゃない？」

反対する者もいなかったなのでその組合せでゲームを開始する。

この四人、それぞれカードゲームの類は結構強い。思考の読み合いが巧みなのだ。それぞれちよつとやそつとのことと感情を表には出さないし、相手の狙いを的確に読みぬく洞察力も持っている。

普段はお喋りでころころ表情を変える隼鷹もそうだ。勝負中、彼女



は表情をコロコロ変えるがそれはほとんどがブラフだ。ただたまにブラフでないこともある。わざと虚実織り交ぜているようで、相手としては非常にやり難い。

今若葉の前に座っている荒潮もそうだ。いつもニコニコしているが、それ以外の感情をなかなか覗かせない。

「荒潮」

「なあに？」

「相変わらず狙いを読ませないな」

「あらあ、そういう若葉ちゃんこそ」

手札と場札の組合せがない。こういうときが一番悩む。場に何を出すのが正解なのか……読み違えると一気に持っていかれることも多い。

荒潮の表情を見る。いつもと同じにこやかな表情だ。

「楽しそうだな」

「そういう若葉ちゃんも、とても楽しそうよ？」

「そうか？」

そんな表情をしていた覚えはない。

首をかしげる若葉に、荒潮は笑みを崩さぬまま言った。

「だって真剣そのものなんだもの。勝負を楽しんでなきやそんな顔はできないわ」

「……なるほど」

言われて、若葉もくすりと笑った。

「確かに。こういう勝つか負けるかという緊張感は悪くない」

「これだ、と思う札を一枚場に出した。」

「あらあ、ありがとう。これで三光よ」

「なにっ……!？」

若葉が出した札によつて荒潮が役を完成させてしまう。

「で、こいこいね」

「なんだと……!？」

まだ役を作れる自信があるというのか。

若葉は自分の状況を確認する。一応タネがもうすぐ出来そうでは

ある。一方で花見酒が作れる余地もなくはない。

「ふ、ふふふ……悪くない。まだ勝ったと思うなよ……?」

「なーんか盛り上がってるねえ」

隣の勝負の様子を見ながら隼鷹がケラケラと笑った。

今回彼女は手札にいいものが揃っていた。五光までいけるかもしれない。それくらいの手札である。

もうすぐ三光になるという状況で、勝負は決まったも同然だった。

「……いいの?」

「ん?」

「よそ見してて」

いつもと変わらぬ様子で霰が場札を取る。それは隼鷹が今まさに取ろうとしていた札だった。

次も、その次も同じようなことが続いた。

「……あれ。もしかして」

「隼鷹、五光狙い」

「うっ!」

「残りの札もだいたい狙いは分かっている。封じる」

「ちよ、ちよっ——!」

凄まじい勢いで狙った札をカス札で取られていく。やがてその勝負は霰のカスあがりで決着した。

「お、おおう……霰、相変わらずえげつないね、あんた」

「ぶい」

勝ち誇ったようにVサインをする霰。

「久々だからすっかり忘れてたよ……。あんたってなんかこう型にはまると無類の強さを発揮するよね」

「そんなことない。それに勝負はまだまだ」

「ああ、分かっているって。次はもうちよっとバレないようにするよ」

今回の敗北のことはとりあえず忘れることにする。そういう切り替えの良さが隼鷹の武器の一つだった。

「それで見事負けに負けて畑当番ほぼ肩代わりしたってわけね……」

勝負の日から一週間。作業服姿の飛鷹が呆れたような声で言った。「せめて一対一にしておけば良かったのに。あんたって勝つときはすごい勝つけど負けるときは大負けするんだから」

「今回勝てる気がしたんだよ。けど駄目だった。あたしには分かる。あの日は幸運の女神にそっぽ向かれてたんだ」

「分かっているのか分かってないのかどっちなのよ、それ」

肩をすくめる飛鷹に向かって、隼鷹はにやりと不敵な笑みを浮かべた。

「確かめたいなら今晚一勝負いってみる？」

それに対し、飛鷹も笑みを返した。

「最近ご無沙汰だったしいいわよ。じゃあ何を賭けようかしらね……。隼鷹がこの前買ったお酒なんかいいんじゃない？」

勝負の話に花を咲かせながら、二人は畑の手入れを進めていく。

今晚もまた、娯楽室は盛り上がりを見せることになりそうだった。

## 忘年会シーズン的一幕（間宮・伊良湖）

S泊地も師走になると忘年会が開かれるようになる。

同じ艦隊で集まってやることもあれば、気の合う者同士で集まってやることもある。

開催場所は大抵艦隊別の寮か間宮、あるいは鳳翔の店だが、趣向を凝らして野外で開くこともある。中にはシヨートランド島の集落に呼ばれて、そちらで住民と一緒にパーティを開く者たちもいた。

そんな忘年会シーズンの真ただ中、忘年会に参加する予定のない艦娘たちがいた。

「ふう、これで全部かしら」

「こつちも終わりました。お疲れ様です、間宮さん」

「伊良湖ちゃんもお疲れ様」

そう。食堂「間宮」のスタッフ間宮と伊良湖である。

二人は連日忘年会が開かれる間宮で忙しく働いているため、とてもではないが自分たちで忘年会をやっている余裕などないのだ。

元々日々の業務で忙しいいうえに忘年会シーズンともなると作業量が増えて、仕事をこなすだけでいっぱいになる。師走とはよく言ったもので、常に全力疾走しているような忙しさなのだ。

「まだしばらく忘年会も続くし、今日はもうあがって休みましようか。私たちが倒れたらいろいろと台無しになってしまうものね」

「そうですね。……あの、間宮さんくれぐれも無理はしないでくださいね」

「ありがとう。伊良湖ちゃんもね」

互いを気遣うようなやり取りをしながら厨房を後にする二人。

そのとき、たまたまその話を耳にした者がいた。

翌日。

「おーい」

いつも通り厨房に入ろうとした間宮と伊良湖を呼びとめる者がいた。

医療室勤務の曲直瀬道代だ。

「あら、道代先生。朝食ですか？」

「まだ食堂開くまで時間あるのにせがむほど飢えてないわよ。それより二人とも、これからちよつと医療室に来てくれない？」

「え、でも……」

「どうも最近流行り病が本土の方で広がってるみたいだね。念のため各拠点で艦娘の検査しろって大本営から命令がおりたのよ。となればまずは食堂やつてる二人を診ないと駄目でしょ」

道代の説明を受けて間宮と伊良湖は困った顔を浮かべた。確かに道代の説明はもつともなのだが、食堂を急に空けてしまつては困る者も多いだろう。

「ああ、食堂なら大丈夫よ。助っ人呼んでおいたから。ほら来た」

道代が示した方向から歩いて来る人影が三つ。伊勢、大井、川内だ。

「二人ほどじゃないがこの三人ならそこそこ料理できるから。三人いれば問題なく回せるでしょ」

「そこそこつて失礼な……。あ、いえ何でもありませんよ」

「ま、そんなわけだから気にせず検査行つてきてよ」

「……」

川内は朝方ということもあつてか眠そうだったが、無言でサムズアップをしていた。任せろということらしい。

「二人が病気にかかつてしまうところらとしても迷惑なので。しっかり診てもらってくださいね」

大井に背中を押されて、間宮と伊良湖は戸惑いながらも道代先生と一緒に医療室に向かうのだった。

何か仕組まれているような気配がしたものの、医療室では本当に検査が行われた。

道代先生が差し出したプリントを見ると、本土で流行り病が発生しているというのは嘘でも何でもないらしい。艦娘の中にも病にかかった者が若干名出ているそうだ。

ただ、検査自体は一時間もかからずに終わった。

「はい。これで一通り終わり。結果出るまで少し時間かかるからそれまでその辺で休んでいいわよ」

と言われて医療室から出たものの、何をどうすればという心境である。

とりあえず医療室前の待合席に座ってみたが、普段は食堂で客を迎え始めている頃合いだということを考えるとどうにも落ち着かない。

「……暇ですね」

「そうですね……」

「暇って、何かこう……暇ですね……」

「ええ……」

二人してそんな不毛な会話を続けていると、大きな弁当箱を持った隳と潮が通りかかった。

「あれ、間宮さんに伊良湖ちゃん」

「こんなところでどうしたんですか？」

「ちよつと医療室で検査を受けて、その結果を待っているの」

「そうなんですか。それじゃ今つてお時間空いてます？　これから特型駆逐艦で集まって中庭でピクニックするんですけど、一緒にどうかなって」

隳の問いかけに間宮と伊良湖は顔を見合わせた。時間は空いているが、検査の結果待ちなので勝手にあまり離れてはいけないのではないのか。

「行ってきていいわよ」

と、いつの間にか医療室から出てきていた道代先生が煙草をふかしながら言った。

「検査結果なら後で二人の部屋に届けとくから。島風便で」

「は、はあ」

「たまには外で食事してみるのもいいものよ。気分転換になっていいアイデア浮かぶかもしれないし」

と、今度は道代先生に背中を押される形で間宮・伊良湖は隳と潮についていくことになった。

その後も、特型ピクニックの最中に現れたイタリア勢に釣りに誘われたり、釣った魚を捌こうというところで艦隊寮のお邪魔したり、本土で好評を得た映画を観ようと視聴覚室に誘われたり、集落から遊びに来ていた子どもたちと鬼ごっこをしたりと、二人はめまぐるしくあちこち移動を続けた。

日が暮れる頃には、泊地にいる非番メンバーとほとんど顔を合わせたような気さえしていた。

最後は食堂に通されて、なぜか集まっていた提督や司令部の面々に囲まれて飲み会が始まってしまふ始末。飲み会は思っていた以上に盛り上がり、二人が食堂を後にする頃にはもう日が替わってしまっていた。

「なんだか今日は今年の忘年会を全部やってしまったような気がしますね」

自室に戻る道すがら、伊良湖がそんな風に一日を評した。

「そうね。多分、そういうことなんだと思うわ」

少し酔いが回ったのか、若干顔を赤くした間宮はクスクスと笑った。

「誰が考えてくれたのかは分からないままだったけど、感謝しないからね」

いい仲間を持ったなあ、と間宮はぼんやりする頭で泊地の人々のことを思い浮かべるのだった。

なお、散々連れ回されたせいか翌日二人はものの見事にバテて、食堂は二日連続で代理の面々が切り盛りすることになったという。

## 二年前のクリスマスの夜（長門・大和・武蔵）

ああ、よく来てくれた二人とも。

こうしてきちんと話すのは着任の挨拶のとき以来か。ここにはもう慣れたか？

今度ゆつくりと話がしたいな。食事なんてどうだろう。

おっと、話題が逸れてしまったな。この集まりについての説明をしようか。

既に概要は陸奥から聞いていると思うが、まあ要するにクリスマスの恒例行事だ。我々大人がサンタクロースになって、駆逐艦の子たちにプレゼントを配る。シンプルだろう。

プレゼントの費用は提督からどうにかもぎとったから問題ない。本土への手配も済んでいる。後はプレゼントが届いたら当日までそれを隠して、当日配る。それだけだ。

駆逐艦の子も増えてきているから配るのもなかなか大変だな。悪いとは思ったが二人にも協力を仰ぎたいというわけだ。

ん……毎年やってるのかだって？

いや、そうだな。確かあれは……ああ、うん。一年目のときはプレゼント配布はしなかったな。計画は練っていたのだが、いろいろゴタがあつてそれどころではなくなってしまった。

おまけにその後隠していたプレゼントが見つかってしまったな。

提督が……ああ、当時の提督が必死にごまかしていたな。私はその頃まだ司令部つきではなかったし計画にも関わっていないから、詳細は大淀か古鷹にでも聞くといい。

ともあれ、そういう経緯もあつてこの計画が実行されたのは二年目——つまり二年前からだ。

私もそのときは司令部つきになっていたから参加していたぞ。

ああ、あれはあれで大変だったな……。

うん？ 当時のことを聞きたい？

そうだな……参考になるかどうかは分からないが、聞きたいというなら話そうか。



秋に行われた渾作戦も終わり、泊地はすっかり普段通りの日常を取り戻していた。

暦の上では冬になるが、この辺りは相変わらずの気候である。ただ、キリスト教徒が多い国柄のため、クリスマスが近づいてくるとどこことなく空気が変わる。

泊地でも、食事を少し豪勢にしたり、司令部から各寮に特大のケーキが贈られたりするなどのサプライズがあつて、いつもよりも楽しいな雰囲気漂っている。

明石を筆頭とする技術部が総力を挙げて用意したクリスマスツリーは、日が落ちた今も泊地を明るく照らしていた。

時刻はフタサンマルマル。良い子ならそろそろサンタの到来を夢見ながら眠りにについている頃合いだ。

「……ううむ。まだ灯りが」

クリスマスツリーの照明から隠れるように潜み、武蔵は唸った。視線の先には灯りの見える窓。まだ起きている駆逐艦娘がいるということだ。

「仕事柄夜更かしに抵抗がない子も多いだろうし、ある程度は仕方ないと思つていたけれど……」

隣の大和が若干困惑した様子で寮を見ている。

ある程度なら仕方ないとは思つていたが、さすがに灯りのついた窓が多過ぎた。

ほとんどの駆逐艦娘が、寝ていない。

「これというのもないがサンタについてあることないこと言つたせいで。ごまかすのに必死だったのは分かるが、おかげで駆逐艦たちがサンタに凄まじい興味を示すようになってしまった。皆が起きてるのはそのせいだろう」

「武蔵、それは……ごめん、なんでもない」

愚痴る武蔵を窘めようとした大和も途中で言葉を濁した。

今日の夕食で聞いた駆逐艦たちの会話を聞いていると否定しきれないのだ。

曰く、サンタは空を飛ぶ。

曰く、サンタは分裂できる。

曰く、サンタは島風よりも速い。

曰く、サンタの装備スロットは無量大。

曰く、サンタは――。

いったいサンタについてどういう説明をすればそんな話が出てくるのか。

「愚痴を言ったところで始まらないだろう。どうする、待つのか？」

そう声をかけたのは藤堂政虎。建築や土木関係でこの泊地を支えるスタッフの一人なのだが――今は完全にサンタに扮していた。

司令部は各寮ごとにプレゼント配布チームを分けた。チームのメンバーは司令部つきの艦娘やその協力者である。泊地のスタッフである藤堂も協力者の一人だ。

偏屈者で知られる男だが、意外にも話を振ると協力を快諾してくれた。どうも小さい頃はいろいろと苦労することが多かったらしく、子どもが楽しむために大人は力を尽くさねばならないという持論を持つようになったらしい。

この三人が任されているのは第二艦隊寮だ。ここには睦月型の駆逐艦たちがいる。

「あの子らは意外と夜更かしするから持久戦は難しいかもしれないぞ。この時間帯で確実に寝ているとしたら弥生と文月くらいだろう」

昼間教師役も務めているだけあって、藤堂は駆逐艦娘の特徴を意外と掴んでいる。

「望月ちゃんとか、寝てたりしませんかね……」

「あいつは起きてるか寝てるか予測がつかん。生活が不規則だからな。徹夜もすれば早々に寝ることもある。三日月は基本規則正しいがイベントがあると緊張して寝付けないタイプだから、こちらも要注意だな」

他のメンバーも今日は皆まだ起きているだろうし、なかなか寝てくれないだろう、というのが藤堂の見解だった。

「私にいい考えがあります」

大和がここで一計を案じた。

「きつと皆はサンタの到来を心待ちにしていると思うんです。この時間、任務もないのに起きているのはその証拠。なら、その好奇心を刺激しましょう！」

「……大和君。もしかして君は私に囚になれとか言い出すつもりではあるまいか？」

嫌な予感がしたのか、藤堂が釘を刺した。

大和はきよとんとした様子で彼を見る。

「言い出してはいけませんか？」

「私は島風より速く走れないし分裂もできんぞ。一応言っておくが空も飛べん。装備スロット？ そんなもんじゃないわ！」

「でも格好はサンタですし」

「君たちがサンタの格好をして囚になれば良いだろう！ その方がまだ無茶もできるではないか」

「……藤堂さん」

抗議する藤堂の両肩に手を置いて、大和は言った。

「サンタさんは男性です。そして、この場にいる男性はあなただけです」

「……」

「……」

「……ああ、うん。それは、そうなのだが」

「お分かりいただけただけで良かったです。それではよろしくお願ひしますね」

そのまま藤堂の身体をぐるりと反対に向けさせて、思い切り寮の真正面に突きだす。

ツリーの照明に照らし出された藤堂サンタの姿が、第二艦隊寮から丸見えになった。

硬直する藤堂。

少し遅れて騒がしくなり始める第二艦隊寮。

状況を察した藤堂は、ええいままよと逃げ始めた。

その後を、部屋着姿の駆逐艦娘たちが追いかけていく。

「うん。うまくいったわね！」

「……大和。私はときどきお前が怖いよ」

「え？　なんで？」

不思議そうに武蔵を見る大和。

そんな姉の様子に溜息をつきながら、武蔵は持っていたプレゼント袋を肩にかけた。

「それじゃ藤堂のおっさんが尊い犠牲になっている間に、素早く片付けておこうか」

逃げ切れよおっさん。

そう祈る武蔵であった――。

こんな話が他の艦隊寮でも頻繁に発生してな。翌朝プレゼント配布チームの面々は半壊状態になっていた。

ああ、そんな心配そうな顔をせずとも今は問題ない。今は本物のサントから委託されて我々がプレゼントを配っている、という体でやっているからな。別に駆逐艦たちが寝静まるのを待つ必要はない。サントっぽい格好をして配るだけだ。

私はサントの格好をしないのか、だと？

いや、私はそういうのは――ほら、古鷹たちと一緒にとりまとめる役割だしな。

ん、待て陸奥。なんだそれは。なんでそんなものを――。

いらん。私はいらんぞ、そういうのは。ちよつと待て大和、おい。

武蔵、見てないで助ける！

ま、待て。待てと言っているだろう……！

この年もS泊地のクリスマスは盛り上がった。

それは、盛り上げるために一生懸命な大人たちの頑張りあつてのものなのだが――子どもたちは、自分たちが大人になるまでそれを知らない。

蕎麦粉が足りない！（赤城・神通・鳳翔）

十二月も暮れようとしている。S泊地もそこはかたなく年末モードで、いつもより空気が緩くなっていた。

そんな中、第一艦隊寮では例外的に緊迫した空気が漂っていた。

「蕎麦粉が足りません……」

沈痛な表情を浮かべた鳳翔の報告に、何人かが唸り声をあげた。

「それじゃ年越し蕎麦食べられないの？」

島風が不満そうな声を上げる。鳳翔の手作り年越し蕎麦はこの泊地ができてから毎年欠かせないものになっていた。

「まったくないわけではないので、それなりの量を作ることはできません。けど……」

「今うちの泊地に所属しているのはスタッフ合わせて二百人前後。そのうち食べられるのは半分くらいになります」

「安心してください島風さん。駆逐艦の皆さんには優先的に配りますから」

島風をなだめるかのように話す赤城だったが、親しい者には彼女の目から流れる血の涙が見えていた。

「雪風、時雨、なんとかならないっぽい？」

「いや、無理言わないでくださいよ」

「いくら僕らが幸運艦だからってないものをどうやって出せばいいのや」

夕立からの無茶ぶりに雪風と時雨が揃って手を振った。

「けど、なんで足りなくなったの？」

「輸送船が深海棲艦に襲われて……。幸い怪我人は出なかったそうなんですけど、蕎麦粉を積んでいた一部の船がやられてしまったんです」  
それを聞いて大井が立ち上がった。

「それなら話は簡単じゃないですか。襲った連中を見つけて出して奪い返せばいいんですよ？ うふふ、魚雷地獄に陥れてあげましょうか……」

「落ち着きなよ大井っち。どうやってその深海棲艦見つけるのさ

……」

北上の至極真つ当なツツコミに大井は「うう……」とがっかりした様子で腰を下ろした。

「おーい、見つかったぞー！」

と、そのときドアを勢いよく開けて深雪が飛び込んできた。

「深雪さん。なにが見つかったんですか？」

「蕎麦粉かすめ取った深海の連中だよ！ 伊168たちが必死こいて探し当てたらしいんだ。さつき司令部に報告があった！」

「……ほほう」

それまで沈痛な表情を浮かべていた第一艦隊の面々が一齐に立ち上がった。

「これはやるしかなさそうですね。一航戦の誇りにかけて蕎麦粉は取り戻します」

「私たち水雷戦隊も負けていられません。私たちの蕎麦粉に手を出したことを後悔させてあげましょう」

神通の一声に駆逐艦たちが一齐に声を上げた。

泊地の中枢を担う決戦部隊——第一艦隊が、蕎麦粉奪還のために立ったのだ。

『……何か大事そうなものだと思っていたのだが、これはなんだろうな』

一方その頃、蕎麦粉を奪った深海棲艦たちは孤島のアジトで不思議そうに積荷の中の蕎麦粉を見ていた。

ホ級は興味深そうに蕎麦粉をつまんでいる。チ級はくんと匂いをかいでいた。

『何か危ない粉だったりしないよな』

『あ、私聞いたことある。人間たちの中にはハイになる粉を使う奴がいるらしい。ただそれを使うと中毒症状になるから、手を出したら駄目なんだって』

『それ姫様の受け売りだろ。私も聞いたことあるぞ』

『む。それならこっちは聞いたことある？ 人間どもの間にはネンマ



は平和的に解決しようではないか！」

「平和的って、強奪者がどの口が言うんだ……」

時雨のもつともなツツコミをスルーして、ネ級は懐から巻物を取り出した。

あざやかに広げられた巻物の中身は、双六の盤になっていた。

「ここに双六の盤がある！　これで先に一着になった方が蕎麦粉を総取りということはどうだろうか——」

「深雪スペシャル！」

ネ級が言い終わるのとほぼ同時に、深雪が広げられた巻物を蹴り飛ばした。

「ああつ、なんとということをし！　人の話を聞いていなかったのかお前！」

「話を聞く必要があるのかな？　爆破するならしてみろっばい」

目がほんのりと朱に染まった夕立が危機迫る様子でネ級に迫る。

「こちらは大晦日の準備であまり悠長に時間を取ることができません。くだらないことに時間を割くくらいなら早々にケリをつけましょうか」

神通がゆっくりと主砲を構えた。本気の目だ。

「これも一種の遊戯ですよ。あなたがスイッチを押す前にその腕を吹っ飛ばせば作戦成功。吹っ飛ばせなければ作戦失敗。どちらにしてもあなたたちには鉄槌を下しますが……」

「早撃ちなら島風に任せて」

ぎらりと目を光らせた島風に呼応するかのように、彼女の周囲にいた連装砲ちやんたちが一齐にネ級の腕に照準を向ける。

「くっ、なんて話の通じん奴らだ。艦娘というのはどいつもこいつも物騒だな！　暴力は駄目だってお母さんに教わらなかつたのか！」

「人間襲ってる君らが言っても説得力皆無なんだけど」

時雨のもつともなツツコミをまたしてもスルーして、ネ級はスイッチを叩きつけた。

途端、周囲が煙で覆われる。

「ハッハッハ、こいつは爆弾のスイッチではなく煙幕弾よ！　さらば



だ艦娘ども！」

『ま、待ってよネ級』

『よならー』

神通たちの視界が遮られているうちにさっさと退散するネ級たち一行。

「くっ、見事な撤退です。引き際を弁えているとはなかなかの名将ですわ……！」

「ただの変人だと思えます」

感心する神通に対して雪風が辛辣なコメントを返す。

かくして、泊地に届けられるはずだった蕎麦粉は無事に取り戻せたのだった。

なお、泊地に戻った第一艦隊の面々を出迎えたのは、既に出来上がった年越し蕎麦を食べる他の面々だった。

「いえ、あの後皆で相談していたら『蕎麦がないならうどんやパスタを食べれば良いのでは?』とコマンダンテストさんから発案があつて……」

困ったような笑みを浮かべる鳳翔。

海外組は元々蕎麦よりパスタ派なのでこの意見に賛成。他にも蕎麦にそこまでこだわりがない子や蕎麦アレルギーの子もいたので、とんとん拍子で事態は解決してしまったのだという。

「わ、私たちの苦勞はいい……」

がつくりと項垂れる赤城や神通の肩に叢雲がポンと手を乗せ、優しい声で告げる。

「無断出撃の始末書、後で出しておいてね」

こうして泊地の一年は暮れていくのだった――。

明けた年の一日目（夕雲・阿賀野型姉妹・ビスマルク・プリンツⅡオイゲン・第六駆逐隊）

がやがやと賑わう泊地の一角。そこにあるのは小さな社——神社である。

年が明けて間もない時間帯だが、神社は参拝客が集まり始めていた。参拝客と言ってもこの泊地の面々ばかりなのだが。

「尼子さん」

「なんだね」

夕雲に呼ばれて、神主の老人は声のした方に足を運んだ。

そこにいたのは巫女装束を身にまとった夕雲・卷雲・風雲の三人だった。

「どうかしら、おかしくない？」

「よう似合ってるぞ」

「そう。それなら良かったわ」

「すまん、急に頼んで。伊勢や日向に頼んでいたのだが、急な出撃任務が入ったとかでどこかに行っちゃまってなあ」

「司令官さまからの呼び出しみたいだったので仕方ないですね。でも卷雲が来たからにはもう安心ですよ！」

どや顔で胸を張る卷雲の鼻先を、尼子老人は凄まじい勢いで突いた。

「ふぎやつ、何をするんですか！」

「いや、なんか卷雲のどや顔を見るとちよつかい出したくなってるな」

「いい年して子どもみたいな振る舞いをするのはどうかと思います！」

尼子歳久。今年で七十六を迎える老人だが、時折悪ガキじみた言動をとる困った性格の持ち主だった。

「卷雲姉を弄るのはそれくらいにしてください。けど、ここってこれだけの人が集まるんですね。ちよつと意外」

「普段は寂れておるからの。これだけ集まるのは初詣のときくらい

よ」

「そういえば風雲さんは昨年照月さんたちと一緒にどこかに行つてたわね。ここ、初詣のときは結構すごいのよ」

逆に言うところ初詣のとき以外は本当に寂れている。なので一年に一度のこの機会を逃すと、この神社に人が集まっているところなど見れなくなる。

「ま、何人か物好きな奴はときどきやって来てはわしの遊び相手になつてくれるがな。秋雲とかもここでよく絵を描いたり書をやつてつたりするぞ」

「あつ、そういえばその秋雲は？　秋雲には声かけなかつたんですか？」

「あいつを始めとする物好き連中には最初に声かけとる。境内の中で今頃働いてくれておるじやろ」

この神社は規模も小さく普段は尼子一人でやっている。そのため元旦のときは臨時の助っ人を頼んでいるのだという。

「ほれ、いつまでもくつちやべつとる暇はないぞ。わしもまだやることがあるからな。後で美味しい煮炊きやるから、しつかり頼むぞ」

「うふふ、お任せを」

「巻雲にどーんとお任せください！」

「ま、まあやれるだけやってみるわ」

三者三様の応じ様を見届けて、尼子老人は社の裏手の方に引つ込んでいった。

「あれ、オイゲンだ」

日が昇つてからしばらくして神社にやって来た酒匂たちは、そこでドイツの艦娘たちとぼったり顔を合わせた。

「ヤッホー酒匂！　オシヨウガツー！」

「オシヨウガツー！」

二人揃つてピースし合いながら挨拶を交わす。

「酒匂、その挨拶なに……？」

怪訝そうな表情を浮かべて尋ねる能代。

「ぴゃ？　これはお正月の挨拶だよ？」

「いや、そんな当たり前そうに言われても」

「まあまあ能代、細かいことは気にしない！」

オイゲンはさわやかな笑みを浮かべながらひらひらと手を振った。

「それにしても、あなたたちも神社に来るのね」

「郷に入らば郷に従えと言うでしょう」

不思議そうに言った矢矧に対し、ビスマルクが返した。

「まあ本国にいるビスマルクならまた違う考えなのかもしれないけど。私たちは日本の提督との契約に応じた艦娘だから、考え方が日本寄りになってるんでしょうし」

ちなみに泊地内にはカトリックの教会も設けられている。そちらも規模はこの神社と同程度だが、日頃から海外組の艦娘が通っている分宗教施設としてはきちんと機能していると云っていい。

ビスマルクたちも普段は教会の方で見かけることが多く、神社に来ているのを見たことはなかった。だから矢矧にとっては少し意外だったのだ。

「それに、ここは単なる宗教施設というわけでもないもの。一年の頭に挨拶くらいはしておかないと」

「なるほど。それはそうね」

普段人の集まらないこの神社は、かつて沈んだ数多の軍艦全般を祀る役割を担っている。そこで祀られている霊の分霊が様々な経緯を経て艦娘となる。そういう意味で、艦娘たちにとってこの神社は故郷の実家のようなものだった。

「オイゲン、せっかくだし一緒に行く？」

「いいよー。あ、でもサラたちとも一緒に行く約束してたんだ。サンパニー初めてだからいろいろ教えて欲しいって頼まれちゃって」

頼む相手を間違えてないかと内心思った能代だったが、それは口には言えないことにした。自分が教えなければ、正しい日本文化を守らなければ。

「……なら私たちも待ちましようか。阿賀野姉、いい？」

「いいよー」

レーベやマックスにじやれついて遊んでいる阿賀野は、妹の決意に気づく様子もなく緩い返事をするのだった。

泊地から少しだけ離れたところにある人目につきにくい岬。

そこには小さな墓があった。

墓の前では四人の艦娘が手を合わせている。暁たち第六駆逐隊だ。

「今年もこうして一年の挨拶ができて良かったのです」

ここに眠っているのは、かつて共に戦った仲間たちだ。艦娘もそうでない者もここに眠っている。

電の発案により、彼女たちは毎年ここで新年の挨拶をしていた。

第六駆逐隊だけではない。他にも何人もの人々がここを訪れているのだろう。贈られた花の数がそれを表している。

「……あつ、なんだかお酒臭いと思ったら本当にお酒が置いてあるじゃない！ 誰よこんなところにお酒置いたの」

「銘柄からすると多分千歳じゃないかな……」

暁がぶんすかする横で、響はじつくりと酒瓶を見ていた。

「これ、結構いいお酒だよ。大分奮発したんじゃないかな」

「響、あんたなんでそんなに詳しいのよ……」

「お酒はそう悪いものじゃないよ暁。吞まれて人に迷惑をかけるのが悪いんだ。お酒自体に罪はない。これはそう、粋、というやつさ」

「そ、そういうものなの？」

「そういうものさ。粋を理解してこそそのレディだよ」

「う、うん……？」

「また響のマイペース時空に暁が吞み込まれてるわ……」

二人の様子を半ば呆れ気味に見やる雷に、電は笑みを浮かべた。

「けど、いつも通りって安心するのです。日が変わっても、月が変わっても、年が変わっても——ずっとこんな風にしていたのです」

「ま、そうね。悪いものじゃないものね。こういうのも」

元日の日も暮れようとしている。いつもと変わらない日暮の景色だ。

「暗くなる前に帰りましょう」

「そうね。ほら暁、響、帰るわよ」

雷に引つ張られるようにして歩いて行く暁と響。そんな三人を目にして、電は一度だけお墓を振り返った。

「また、四人で挨拶に来るのです」

そう言い残して、駆け足で三人の後を追っていく。

少し——暖かい風が吹いたような気がした。

## 萩風と七草（第四駆逐隊）

寮の台所から楽しげな鼻歌が聞こえてくる。

萩風の声だ。なにをしているのかと顔を出すと、彼女はリズムカルに包丁で何かを刻んでいた。

「萩風、なにしてるの?」

「あ、野分」

こちらに気づいて手を止めた萩風は、少しだけ自慢げな表情を浮かべて刻んでいたものを見せてきた。

「これ、なんだと思う?」

「なにかの野菜に見えるけど……種類じゃないわね」

微妙に色合いや形状が違っているように見えた。

と、そこで明日が何の日か思い出す。

「もしかして七草粥作ってた?」

「正解!」

話を聞いてみると、萩風はこの日のためにわざわざ七草を自分で育てていたらしい。本土に注文しておけば手に入れられるのだが、それだとなんだか負けた気がするとのこと。本土に頼りっぱなしになるのを嫌がるのはこの泊地の特色のようなもので、これは萩風だけが珍しいというわけではない。

「この寮のみんなの分を用意してたの。もう少しで下準備は終わるから、楽しみにしててね」

「そっか、ありがと。ただご馳走になるだけだと悪いし、明日の朝は私も手伝うよ」

「そう? そうしてもらえると助かるかな。人数多いからお粥いっぱい炊かないといけないんだ」

萩風が刻んでいた七草の量を見る。確かに多い。この寮のメンバー全員が食べられるだけのボリューム感だ。

「……そういえば七草ってなにがあるのか、ちゃんとは知らないなあ」  
「興味ある?」

萩風の目がきらりと光る。もしかすると入れえてはいけないス

イッチを入れたのかもしれないが、興味があるのは本当だったので頷いておいた。

「セリ、ナズナ、ハハコグサ、コハコベ、コオニタビラコ、カブ、ダイコンの七つがベースだけど、実際は地域によって多少違うところもあるみたい。昔はこの七つを全部揃えるのが難しかった地域なんかもあるそうだから。食べ方もお粥に限らず、汁ものにするところもあるそうよ」

「そ、そう……」

突然早口になった萩風の言葉を頭の中で必死に咀嚼しながら相槌を打つ。七草の名前が覚えられない。なんだろうコオニタビラコって。呪文かなにかだろうか。

「由来は随分昔までさかのぼるみたい。なんでも平安時代に貴族たちが正月初めに若菜を摘んだりする野遊びをしたみたいで、摘んだものを食べて邪気を払おうとしてたんじゃないかって」

「平安時代……」

確か千年くらい前だったような気がする。だとすると確かに随分と古い。

「ちなみにその野遊びは『子の日の遊び』って呼ばれてたんだって」

「確かに邪気とは無縁そうな感じはするわね」

黒い邪気っぽいものを遊びながら払い落としていく子日の姿を思い浮かべる。はまり過ぎてて逆に感想が出てこなかった。

「でも、萩風が七草粥のために一生懸命な理由はなんとなく分かった気がする」

「あ、健康オタクだからこういうの好きそうだなーって思ったんでしょ」

「バレた？」

「ひどいなあ。みんなのことを思って普段から気をつけてるだけなのに。嵐も舞風もからかってくるんだもの」

「悪かったって。いつも萩風にはいろいろ助けられてるし本当に感謝してる」

「本当？」



「本当本当。嵐と舞風だって同じ気持ちだと思うよ」  
「……だといんだけど」

そこで萩風は、少し不安そうな笑みを浮かべた。

自室に戻ってから、萩風が見せた表情が気になった。

一人でうなつていると、「たっだいまー」と陽気な声で舞風が部屋に入ってくる。

「あれ、どうしたののわっち。難しい顔してる」

「うーん、ちよつとね……」

「なに？ 話せることなら話してみてよ」

寝間着に着替えながら問う舞風に、先ほどの萩風のことを話してみた。

「なるほど、のわっちは萩風の様子がちよつとおかしかったのが気になつてると」

「うん。あんな表情されたら気になるよ。でも心当たりもないし……」

「心当たりならないこともないけど……」

「そうなの？」

「うん。ほら、少し前の大規模作戦で嵐とのわっち一緒に出撃したでしょ？」

そのとき舞風と萩風は出発する二人を見送りに来ていた。

「二人の姿が見えなくなった後で、萩風ぼろつと呟いてたんだ。二人ともきちんと戻ってくるよね……って。多分、萩風はみんなのことがずつと心配なんじゃないかな。まだまだ深海棲艦との戦いは終わる気配もないし、段々敵も強くなってきてるし」

「……そんなに心配かけてたかな」

「のわっちたちが悪いってわけじゃないと思うよ。ただ萩風の気持ちも分かるんだ。昔のことを考えると、どうしてもね」

舞風はどこか遠くを見るような目で言った。

「けどその不安はすぐに消せるものじゃないし、どうこうできるものじゃないと思う」

「そうね。でも、なるべくあんな顔はさせたくないかな」

「そうだね。だったらその不安を忘れさせられるくらい楽しいことすればいいんじゃないかな」

「ダンスとか?」

「そのとーりっ」

「舞風は単純でいいなあ」

「のわっちひどい! のわっちはたまにストレート過ぎると思うよ言葉が!」

「そう?」

非難の声を向けてくる舞風をなだめながら、その日は眠りについた。

翌朝、野分が台所に行くところには萩風以外にもう一人先客がいた。

「おっ、のわっち。おはよう!」

「あ、野分。おはよう」

嵐だった。萩風とお揃いのエプロンをつけて準備に取り掛かろうとしている。

「おはよう。嵐も手伝い?」

「ああ。萩にだけさせるつても良くないし、一緒にやれば楽しいだろうと思うって」

屈託なく笑う嵐に、萩風は少し困ったような——少し嬉しそうな表情を浮かべた。

「私はいいつて言ったんだけど……」

「そうやって一人でやろうとするのは萩の悪い癖だぞ。もっと人を頼れ人を」

「それは同感」

「もう、野分まで」

「——ねえ、そろそろ作らないの?」

と、いつの間にか台所に入り込んでいた舞風が声を上げた。

「お、舞風。いつの間に」

「のわっちの後ろに隠れて最初から」

「なにしてるの舞風……」

「それよりそろそろ作らないと、みんな起きてきちゃうんじゃない？」  
舞風が時計を指し示す。確かにもうすぐ朝食時だ。

「おっし、それじゃ第四駆逐隊勢揃いしたし、ちやつちやとやりますか  
！」

嵐の掛け声に全員が「おー」と応じる。

萩風の表情に昨日のような不安の色はなかった。完全に消えたわけではないのだろうが——今はこれで良しとしておこう。

おヒゲ騒動（朝潮型姉妹・日向・足柄）

その日、とある艦隊寮ではちょっとした映画祭りが行われていた。艦隊寮のロビーにある大型テレビで、本土から取り寄せたDVDやブルーレイを流し続けるというものだ。娯楽の少ない泊地では、こうした催しが艦娘たちやスタッフの貴重な楽しみになっている。

「やっぱりあの大泥棒さんは格好いいわね〜」

映画が一つ終わったところで、荒潮がうつとりとした声をあげた。

「そうかしら。私は相棒のの方が良かったと思うけど」

満潮がそれに対して異を唱える。荒潮は「そっちもいいんだけど」と悩まし気だ。

「朝潮姉はどう？」

朝雲に問いかけられた朝潮は不自然なくらいにクールな表情を浮かべた。

「サムライっていいですよ。またつまらぬものをきってしまった……」

「なるほど、分かりやすい答えありがとう」

「私はあの女の人みたいになりたいわ〜」

山雲がセクシーポーズを取ってみせる。しかし朝雲の反応は淡泊だった。

「……まあ、そうね」

「朝雲姉え、なんでそんな日向さんみたいな反応するの〜！」

「私がどうかしたか」

名前を呼ばれて、近くでお茶を入れていた日向が反応する。

映画が一つ終わると休憩時間が十五分くらい入る。その間はこんな風に映画にまつわるトークが繰り広げられるのだった。

「霞、どうしたんですか？ さつきから顎を撫でて」

と、会話に参加していなかった霞に大潮が尋ねた。

「え？ あ、いや。なんでもないわよ。気にしないで」

「……霞は、ああいう顎鬚もいいかな、なんて思ってる」

霞のすぐ後ろから、ぼそつと霞が呟いた。

「ちよ、なに勝手なこと言ってるのよ！ そんなわけないじゃない！」  
「おお。霞はヒゲ好きですもんね！」

「大潮も納得しないであら！」

「霞のヒゲ好きは皆知ってる」

「やっぱり相棒の人推しなんですか？」

「だー、もう好き勝手なこと言わないで！」

大潮と霞に挟まれて霞がぎゃー、と悲鳴を上げる。

他では結構なしつかり者で通っている霞だが、朝潮型の輪の中に入ると案外弄られることが多い。なんだかんだで末妹として可愛がられている。

「やっぱりあの人の影響なんですかね、霞のヒゲスキーっぷりは」

「間違いない。この前も神通さんや阿武隈さんとヒゲ談義で盛り上がってた」

霞の報告に周囲を朝潮型一同が「ほう……」と声を上げる。

霞は顔を真っ赤にして「あーもうっ！」と叫ぶのだった。

「でも実際、ヒゲが素敵なオジサマは不思議な魅力があるわよね」

荒潮が自分の髪をヒゲのように口元に寄せながら言った。

「そうね。無精ヒゲみたいなのは嫌だけど、きちんと整えられてるヒゲなら古風な紳士って感じがしていいんじゃないかしら」

朝雲が同意する。

「そういえば……ヒゲといえばアレがあったな」

と、日向がロビーから一旦出ていき、そこそこの大きさの箱を抱えて戻ってきた。

箱を開けてみると、そこには大小様々な形の付けヒゲが入っていた。

「なにこれ……」

「筑摩からもらったんだ。クリスマスするとき利根にサンタをさせようと作ったのだが、興に乗って作り過ぎてしまったらしい」

作る方も作る方だが日向もなぜこれをもたらしてしまったのか——その場にいるほぼ全員がその疑問を抱いたが、口に出す者は誰もいな

かった。筑摩も日向も普段は真面目のだが、時折俗世の者には分からない考え方を垣間見せることがある。それに対しああだこうだ言っても詮無きことなのだ。

「どれ、まず私が試してみるか」

日向が無造作に顎鬚タイプの付けヒゲを選び取ってつけた。

「……なんだか妙に威厳ありますね」

「どことは言わないけど、ある国の昔の大統領みたいだわ」

「瑞雲の瑞雲による瑞雲のための……とか言い出しそうね」

「こらそこ、私をなんだと思っている。言っておくが私は瑞雲を気に入っているがそこまでフリークというわけではないぞ」

べり、と付けヒゲを外しながら日向が呆れ顔で言った。どうやら近頃自分を瑞雲狂いにしようとする風潮にちよつと抵抗を覚えつつあるらしい。

「霞もつけてみたらどうですか？」

「う、うーん……。そうね。この流れでつけないっていうのも駄目よね」

ぶつぶつ言いながらも霞は迷わずカイゼルヒゲをつかみ取って口元につけてみた。

「ど、どう？」

「……可愛い」

「可愛いわね」

「可愛いけど、なんでかしら。違和感がないというか妙に見慣れた感じが……」

「こういう妖精さんどこかで見たことある気がするわ」

「さっすが霞ね！」

と。そこでこれまでその場になかったはずの者の声がした。

「げっ、足柄！」

「なによー、げっ、はないでしょ」

「あ、あんた妙高さんたちと買い物行くなって言っただけだ！」

「そうよ。でも天気悪くなりそうだから少し早めに切り上げて来ちゃった」

見ると、足柄の後方には他の妙高型三人も揃っていた。全員コメントに困ったときのような顔をしている。

「せっかくだし大淀や朝霜、清霜たちにも見せに行きましょうよ」

「絶対嫌よ！ 絶対この先ずつと弄られるじゃない！」

「あ、そう？」

言いながら、足柄はとても自然な動作で懐から携帯を取り出してシャツターボタンを押した。

「な——」

「見せに行きたくないっていうなら仕方ないわね。私が代わりにこの写真見せに行くわ！ だって三人とも見たいはずだもの！」

「やめなさい、その携帯をよこしなさい！」

霞は足柄から携帯を取り上げようとするものの、ひらりひらりと避けられてしまう。

「さて、それじゃまずは司令部室の大淀のところに行ってくるわ。アディオス！」

「ま、待ちなさいってば……！」

駆け足で去っていく足柄とそれを追っていく霞。

二人が出ていくのを見送りながら大潮が「あつ」と声を上げる。

「霞、付けヒゲしたまま出ていきませんでした？」

「あつ……」

残された者たちの間に微妙な空気が漂う。

「ま、まあいいんじゃない？ 可愛かったし」

「そ、そうですね」

「まあ、そうだな」

自分たちにできることはない。

そう割り切って、朝潮たちは妙高たちと一緒に次の映画鑑賞を始めるのだった——。

後日。

この騒動の顛末を耳にした一部の艦娘の間でこっそりと付けヒゲをするのがなぜかブームになったというが……それはまた別の話で

ある。



地下の秘密基地には浪漫がある？（陽炎・不知火・黒潮・親潮・山城・多摩）

あまり大つぴらにされてはいないが、S泊地には地下施設があるらしい。

司令部棟の一階の片隅にある『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた扉の先にはその施設に繋がる階段があるというのだ。施設には強大な秘密兵器が隠されているとも、規格外の力を持った艦娘が隔離されているとも、深海棲艦の捕虜がいるとも言われている。

「——なんて噂になってたのよ」  
煎餅をかじりながら陽炎が言った。

先日村の集落へ遊びに行ったときに聞いた話だ。

「……一応聞いておくけど、余計なこと言わなかったでしょうね」  
やや疑うかのように問いかけたのは山城だ。彼女も陽炎と同じく煎餅をかじっている。

ここは陽炎たちの寮のロビーだ。ここではよく非番のメンバーが何の気なしに集まって雑談する。

「言っていないですよ。というか言おうにもあそこの近況私もよく把握してないですし。山城さん知ってます？」

「私もあまり詳しくは知らないわね……。ちゃんと開発進めているのかしら」

「地下設備自体はあるんですか？」

疑問符を頭に浮かべながら問いかけたのは親潮だ。

「そういえば親潮が着任した頃にはもうほとんど話題に出なくなってたっけ」

「ってことはもう結構な期間放置されてる可能性があるわね……。なんか同情するわ」

「地下施設があるっていうのは半分本当で半分嘘や」

回答になってない回答をする陽炎・山城に代わって黒潮が補足した。

「以前M I作戦のときにこの泊地も急襲喰らって痛い目見てな。そういうときの備えについて地下を作ろうって話になったんや」

「ただ、着手したって話はあったんだけどしばらくしてから全然話題に出なくなっただのよね」

「少なくとも完成したという話は聞いていませんね」

と、不知火が補足する。

「なるほど、それで半分本当半分嘘、と」

「実際あのとき以来ここが襲われるようなことってなかったし、優先順位下げられてるのかもね。私たちだって日々の業務とかあるしインフラ部は他で手一杯みたいだから」

この泊地にはインフラ業務を優先的に振られるインフラ部が存在するが、だいたい忙しそうにしている。新しくこれを作ってほしいという要望もあれば、既存のものが壊れかけてるのでメンテして欲しい、といった要望もある。インフラ部だけでは手が回らなくなることもあるため、他の艦娘が駆り出されることも珍しくない。

「けど、いざ話題になってみると少し気になってくるわね」

山城がぼつりと言った。

「確かに」

「……それなら行ってみるにや」

と、それまで黙々とストレッチをしていた多摩が口を開いた。

「百聞は一見に如かず」

「けど、勝手に入ったら怒られないかしら。私は嫌よ怒られるの……」

「問題にやい。木曾に許可もらっておく」

及び腰になる山城に向けて多摩がサムズアップする。木曾はこの泊地の司令部に所属している。彼女の許可を取り付けておけば後々問題になることはないだろう。

口数は少ないが多摩は割とアクティブである。すぐに携帯で木曾に連絡を取って、許可を取り付けた。

「半年くらいは誰も入ってないから気を付けろ、だそうにや。あと少し掃除しとけて言われたにや。……姉使いの荒い妹にや」

「まあまあ。けど地下施設探索ってなんかワクワクしますね！」

「ええ。なんだかドキドキします」

ノリノリの陽炎に同意して頷く親潮。

こうして、一行は司令部棟に向かうことになった。

司令部棟の一階には客室や重要な書類をまとめた事務室などがある。

そうした部屋と部屋の隙間に一つだけ『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた扉があった。もつとも施錠されているわけではないので、入ろうと思えば誰でも入ることはできる。

「そ、それじゃ開けるわよ」

禁止と書かれているものを開けることに抵抗があるのか、山城は少しずつ慎重に扉を開けていった。

中は薄暗い。ただいかにも整備されていなさそうな階段があるのは分かった。

「灯りをつけながら進みましょう」

不知火が懐中電灯をつける。ようやく周囲の状況が分かるようになった。

階段に見えたのは、階段というか、掘った土を階段らしき形にしただけの代物だった。

「……なんかこれだけで『未完成です』って感じが滲み出てるわね」

陽炎が素直な感想を口にした。

「立ち入り禁止ってなっとつたのは、迂闊に入ると危ないから入るなーって意味みたいやね」

足元に気を付けながら一行は地下に降りていく。慎重に降りているからか、やけに長く感じた。

「あ、終わった」

降り終えた陽炎が不知火から懐中電灯を借りて周囲を見渡す。

中は割と広い。床板や壁板も割と張り付けが済んでいる。ただ埃っぽい。しばらく手入れされていないというのは本当のようだ。

「随分と埃っぽいわね。それにいろいろ中途半端じゃない」

一部板が張り付けられていない部分もある。もしかするとあの辺

りはまだ掘り進める予定だったのかもしれない。

「なんにもないですね」

やや落胆した様子の親潮。確かにここはなにもなかった。ものを配備する前に工事を中断してしまったのだろう。

「……にや。なんかあるにや」

暗がりの中にある何かを多摩が見つけたらしい。彼女が指し示した方向に全員で向かうと、そこにはやけに古い木箱があった。

「多分違うんだろうけどなんかお宝に見えるわね」

「期待しないほうがいいわ……。どうせ開けたところで期待外れのものが出ってきて『不幸だわ』っていうオチになるのよ」

「山城はん、そういうのは先んじて言っちゃ駄目や」

「とりあえず開けてみましょうか」

親潮が木箱を開ける。中に入っていたのは——図面だった。

「これ、この地下の図面かしら」

「そのようですね。地下設備計画図とあります。……ただ、誰かがいろいろと落書きしているようですが」

きちんと書かれたであろう図面の上に、別の誰かが書いたと思しき落書きが複数あった。

外部から水路を引いて銭湯を作ろうだのゲームセンターを作ろうだのといった奇抜なアイデアもあれば、どこかで見たような人型兵器の絵もある。

「ここに人型兵器を格納するつもりだったのかしら」

「というかそんなもの作れないわよ……。技術的には頑張ればいけるのかもしれないけど、うちにそんなお金ないし」

「世知辛いにや」

「というかこれただの落書きやと思うし、そんな真面目に考えんでも」  
この場に明石や夕張でもいればまた違った意見も出たのかもしれないが、あいにく陽炎たちはそうした技術的浪漫を持っていなかった。

「……これなんかはいいかもしれないにや」

と、多摩が図面の端の方を指さした。

そこには『泊地の建物同士を繋ぐ地下通路作らない?』というメモがあった。

この地域は雨が多い。建物の間を移動するたびに雨具を使わねばならないことを面倒に思っている艦娘は結構多かった。

「……地下設備の工事再開しようって上申してみます?」

陽炎がぼつりと言う。

「やめておきなさい。叢雲が嬉々として『こういうのは言い出しつペがやる法則よね?』とか言ってくるのが目に見えるようだよ」

「おお……容易に想像がつく」

その様子を頭に浮かべて陽炎は頭を抱えた。地下通路は欲しいが自分でやるのは面倒くさい。

「ここをどうするかは置いておいて、とりあえず掃除に専念するつもりでしょうか」

一同は不知火の言葉に頷き、各々理想の地下設備を思い描きながら掃除を始めるのだった――。

その頃、司令部室では叢雲が木曾から電話で地下設備の件について連絡を受けていた。

「そう。ええ、分かった。問題ないわ。むしろなかなか余力がないから助かった」

木曾からの電話を切った後、叢雲はふと各艦娘の予定表を確認した。

「……ここも結構人増えだし、そろそろあの地下設備の件再開してもいいかもしれないわね。せっかく興味持ってくれてるみたいだし陽炎たちに頼んでみようかしら」

後日――叢雲からの無茶ぶりを受けた陽炎は持ち前の人脈と不屈の精神によつてこの地下設備を完成させることになるのだが、それはまた別の話。

節分はデンジヤラス（神風・春風・朝風・祥鳳・羽黒）

泊地には艦娘以外にも人間のスタッフがいる。艦娘が日頃の任務を心置きなく遂行できるのは彼らのサポートがあつてのものだ。

「そういえばもうすぐ節分だな」

間宮で食事している最中、ふと思ひ出したかのようにインフラ担当の藤堂政虎が言った。

「……俺、有休取つてホニアラに行つてこようかな」

システム担当の板部江雪がぼつりと呟く。

「なんじゃいだらしない。逃げるのか？」

と、泊地内の神社の神主である尼子老人が板部に言う。

「尼子の爺さんは巻き込まれる心配がないからそんなこと言えるんだ。一度あれ味わつてみるよ」

「以前一度参戦してやろうかと思つて申し出たんだが司令部の連中に止められたんだよ。あなたに何かあつたら困るつて」

「……あのう」

と、近くで男三人の会話を聞いていた神風が恐る恐る会話に入ってきた。その傍には姉妹艦である朝風や春風もいる。

「節分……の話ですよね？」

「節分の話だ」

「なんだか話を聞いているとかなり物騒な行事のように聞こえるんだけど」

「ああ……君たちはまだここに来て一年経つていないのだったな。ここでは節分の際にちよつとした催しがあつてな」

朝風の疑問に藤堂が答える。

「催し……豆まきと、恵方巻以外に何かされるのですか？」

「豆まきの発展型だな。ここは艦隊別に寮が分かれてるだろ。で、寮ごとの豆まき対抗戦を行うんだ」

各寮では鬼役を三人ずつ決める。鬼役は時間いっぱい逃げ続ける。泊地から出ない、建物の中に入らないというルールさえ守れば後は自由で動いて良い。

鬼役以外のメンバーは自分たちの寮以外の鬼役を探し出して豆をぶつけるとポイントが獲得できる。また、鬼役以外のメンバーにも豆をぶつけて良い。当たり判定の場所（通常は胸当て）に豆が直撃したら行動不能になってしまう。

最終的にもっとも多くの鬼役を仕留めた寮が勝者となり、司令部からちよつとした報酬をもらえる――。

「なんだ、楽しそうじゃない」

話を聞いた神風たちは安心した様子で表情を柔らかくした。

ただ、男たちの表情は晴れない。

「泊地内で艦娘が全力で豆投げ合うんだぞ？ 一般人からすれば物騒極まりないだろ」

「あー、それはまあ、その、頑張つて？」

板部の言葉に対して適当な返事をする朝風。物騒と言われてもどうしようもない。

艦娘は基本的に通常の人間よりも数段高い身体能力を有している。比較的小柄な体躯の駆逐艦や潜水艦ですら筋骨隆々とした成人男性と腕相撲で良い勝負ができるくらいだ。板部や藤堂なんかはヒョロイので神風たちでも簡単に勝てそうだ。

「でも結局豆でしょ？ 当たつても別に死にはしなれないと思うけど」

「まあ死にはしないさ。ただめっちゃ痛い。俺は一昨年鬼怒の投げた豆に被弾したがしばらく痣が残った。軽巡であれなら戦艦連中の喰らってたらどうなっていたことか……」

「全治一週間くらいでしょうか……大変です」

春風が憂いの表情を見せた。

「でも、それなら部屋なりなんなり引きこもってればいいんじゃないの？」

朝風が当然の疑問を口にする。

「いや、当然無用な出歩きはしないようにしてるんだけどな」

「我々の部屋にはトイレも風呂もないし食事もできない。それらの際はどうしても出かけねばならんだ」

板部と藤堂が揃ってため息をつく。

「わしは神社の中に一通り揃ってるから安心だがな。食事もある程度はもの置いてあるから困らんし、あの辺は艦娘も戦場にしようとはせん」

「……なら尼子さんの神社のところに行けばいいんじゃない？」

「馬鹿言え。こいつら引き受けたら他のスタッフもこぞって来るだろう。あの神社そこまで広くないぞ」

ブンブンと手を振る尼子を恨めしそうに見る板部と藤堂。

「ま、そんなわけだ。お前さんたちも豆まきの際は周りに気を付けてやってくれるとありがたい。熱くなると周りが見えなくなるタイプの艦娘も結構おるからな」

「春風君は心配なさそうだな」

藤堂がぼつりと呟く。

「……藤堂さん？」

「私と神風姉は？」

神風と朝風の圧を受けても、藤堂は知らぬ顔の半兵衛で食事を続けていた。

そうして日にちが過ぎて節分当日。

あの日藤堂たちから聞いた通りの内容で今年も豆まき対抗戦が開かれることになった。

「豆まき中は予期せぬ事故が起きないよう気をつけてくださいね」

神風たちの寮のリーダーである祥鳳の注意喚起を聞きながら、神風は周囲の空気がいつもと違っていると感じていた。

……この泊地はたまにテンションおかしくなるときがあるけど、今回もそれなのかしら。

側にいた初霜の様子を窺ってみる。普段の初霜は誰にでも分け隔てなく優しい、頼れる仲間だった。

ただ、今の彼女からは若干の鬨気が漂っている。なんとなく声をかけるのがためらわれる空気感だった。

「ね、ねえ初霜……？」

『それではこれより——豆まき対抗戦を開始する！』



そんな神風の声をかき消すかのように、豆まき対抗戦の開始を告げる声がスピーカーから響き渡った。

「うおおおおっ——！」

その場にいたほとんどのメンバーが勢いよく寮の外に飛び出していく。

初霜も姉妹艦たちと一緒に飛び出ていってしまった。

そのノリに乗り切れなかった神風たちは取り残される格好になる。

「神風ちゃん」

と、同じく残っていた羽黒が声をかけてきた。

「な、なに羽黒?」

「この対抗戦の景品は結構豪華だから、みんなやる気なんだ。……だからその、やるなら徹底してやる、やらないなら徹底して身を隠すつてしないと危ないよ?」

「……」

「あ、それじゃ私は行くね」

ひらひらと手を振りながら出ていく羽黒。そんな彼女の周囲に蒼白い炎が見えたのは気のせいだろうか。

既にあちこちから「ぎゃー!」とか「ぶほあっ!」とか何かを碎くような音とかが聞こえ始めていた。

「……どうしますか、神風姉様」

春風の問いに神風はしばらく逡巡した。

が、すぐに思考を切り替える。

「やるなら徹底してやってやるわよ! 神風型の矜持、見せつけてあげるわ!」

「それでこそ神風姉!」

「では——私も本気で挑みましょう」

性能だけ見れば駆逐艦の中でも低めの神風型だが、彼女たちは他の駆逐艦にはない『経験』という武器がある。

やるなら徹底してやる。そういう状況になったときにこそ見せられる強さを存分に見せつけてやろう——。

不敵な笑みを浮かべながら、神風たちは寮の外に足を踏み出すの

だった。

「……それで勝ち進んだのはまあいいけども」

節分の翌日——病院のベッドで横になりながら板部がぼやいた。

「勢いあまつて豆を散弾銃みたくぶちかますのはどうかと思うんだ、おじさんは」

「わ、悪かったわよ……」

ベッドの横には見舞いに来た——怪我を負わせた張本人である神風たちがいた。

その手には優勝景品として贈られた超豪華菓子セットがある。

「全治一週間……すみませんでした」

「他人事みたいに言ってるけどお前も同罪だからな。あとそこまで重傷じゃない」

申し訳なきような顔をする三人に板部はため息をついた。

「まあ半ば事故みたいなものだし、無茶したことについては反省してるようだし、俺からはもう言うことないよ。優勝したんだつたら辛気臭い顔してないでもっと素直に喜んでけ。……ああ、美味しいなこれ」  
もらった菓子を摘みながら板部が言うと、ようやく神風たちの表情が少し明るくなった。

「どうせなら対抗戦の詳細聞かせてくれ。来年以降身を隠すときの参考にするから」

板部に言われて、神風たちは自分たちの武勇伝を語り始める。

天気の良いかな午後のことだった。

島の迷い子（秋津洲・瑞穂・コマンダン・テスト）

「子どもがいなくなった……ですか」

泊地の一角にある相談室。そこでは泊地内外からの様々な相談を受け付けている。

今日そこを訪れたのは島のとある集落の壮年の男性だった。この泊地ができてから日本語を覚えた一人で、彼のように日本語を使える人はよく連絡役としてここを訪れる。

「母親一人で子ども四人を育ててる家の長男坊なんだが、昨日いつの間にかいなくなっていたんだ。昨晚から探してるんだが全然見つからなくてな……」

言いながら男は一枚の写真を差し出した。写っているのがいなくなった子なのだろう。活発そうな少年だ。

「それで泊地の力をお借りしたいということですね。承知しました」  
受け答えしているのは瑞穂だった。

「探し物なら私たちにお任せください。こちらで見つけたらそちらまで送り届けます」

「助かる。こちらもずっと探し続けるのが難しくてな」  
礼を述べて男は去っていった。

「さて、話は聞いてましたね秋津洲さん、テストさん」  
受付の奥で雑談していた二人に声をかける。

「聞いてたよー。大艇ちゃんたちなら準備万端かも！」  
「私も問題ありません。早く見つけてあげましょう」

元気の良い秋津洲と落ち着いた雰囲気のコマンダン・テストがそれぞれ応える。

今日はこの水上機母艦三人が相談室の担当だった。搜索系の任務なら得意とするところである。

「ではまず我々三人で探しましょう。一時間後に見つけられなかったら千歳さんたちにも応援を頼むということ」

「了解かも！」

「D, a c c o r d !」

相談室近くから偵察機が飛び立ったのは、そのすぐ後のことだった。

それから三十分ほどしたところで、秋津洲が「あ」と声を上げた。三人は相談室の屋上から偵察機を出して、そのままそこで様子を見ていた。偵察機とは視覚情報を意識的に共有させることができるのだが、間に壁があったりするとうまく共有できなかつたりする。なので偵察機を出している間は基本的に屋外待機が原則だ。

「どうしましたアキツシマ」

「海沿い崖の途中の出っ張ったところに子どもが一人座り込んでる！

写真の子かもー！」

「すごいところで発見しましたね……。けどこれで村に帰らなかつた理由も分かりました」

秋津洲の報告を受けて、三人はそれぞれの偵察機に帰還命令を出した。数分もしないうちにすべての偵察機が戻ってくる。

「けど、あの様子だとすぐ助けに行つた方がいいかも。昨日からずっとあの状態だと疲れてるだろうし」

「そうですね。では秋津洲さんは現場に行つていただけますか？ 私は村に報告に行きますので。テストさんはここで待機をお願いします。また村の人が来るかもしれないですし、他の依頼もあるかもなので」

「分かりました。アキツシマ、お気をつけて」

「大丈夫だよ。秋津洲は艀装が戦闘向けじゃないだけで、身体はきちんと鍛えてるからそこそこ自信はあるかもー！」

「そこは『かも』をつけずに言い切つて欲しいところですけどね……。まあ、大丈夫だと思つてますが」

二人に別れを告げて、秋津洲は一旦海に出た。海上移動した方が艀装の推進力を活かせる分移動は速い。

しばらく島の側面を移動し続けるうちに目当ての場所に着いた。

「あ、良かった」

男の子がいるのは崖の中腹だ。秋津洲は崖に手をかけると艀装を

解除し、軽くなった身体ですいすいと崖をよじ登っていく。

『おーい、生きてるー?』

登りつつ秋津洲が声をかけると、男の子はぴくりと反応した。

『……か、艦娘さんだ』

『そうそう艦娘さんだよ』

よいしょ、と手をかけて男の子がいる出っ張りの隣に登りきる。

『大丈夫? 怪我してる?』

『足が痛いんだ……』

『どれどれ?』

出っ張っているところが崩れないよう確認しつつ秋津洲は腰を下ろして男の子の足を見た。

『折れてはいないね。けどちよつと捻っちゃってるかも』

『うう……』

『大丈夫大丈夫、お姉さんに任せるかも!』

そう言っつて秋津洲は男の子に背中を向けて、おぶさるよう促した。

男の子は少し逡巡しながらも、秋津洲の首にがっしりと腕を回して背中に身を乗せた。

『最近俺少し重くなつたつて母ちゃん言つてたけど大丈夫かな……』

『これくらいなら全然大丈夫かも。艦娘のパワーなら平気へっちゃらっ!』

そして男の子を背負ったまま、今度は崖の上に向けてどんどん登っていく。海から帰っても良いのだが、海面に降りる際に艦装を再展開しなければならぬ。艦装の展開時は多少の衝撃があるので、怪我人を背負ったままやるのは良くない。

『お姉さん、村の人に頼まれて俺を探しに来たの?』

『そうだよ』

『そっか……』

男の子は落ち込んでいる様子だ。あの状況では帰れないのは仕方ないと思うのだが。

『君はなんであそこに落ちちやつたの?』

『妹が風邪で寝込んでるんだ。それで、大人たちが身体に良いつて

採ってる草があったの思い出して探してたんだけど……』

『妹さんのためなんだ。偉いじゃない』

『けど、結局見つけられなかったんだ。どれがその草かもうる覚えで……』

子どもゆえの無鉄砲な行動だったということなのだろう。ただ、このまま村に送り届けるだけではかわいそうな気がした。

秋津洲に姉妹艦はいない。ただ、泊地の仲間は皆それと同じようなものだと思っている。誰かが風邪で苦しんでいたらどうにかしてあげたいと思うだろう。

『——家族のための行動と聞いたら黙ってられないかも。それに風邪引いた子がいるって聞いてそのまま放置するのは秋津洲流の正義に反するし。ちよつと寄り道していくけどいいかな？』

『え、うん。いいけど……』

『よし、それじゃ行くよー！』

そうして、秋津洲は駆け足で泊地に向かった。

『本当にありがとうございます。なんとお礼を言えばいいのか……』

何度も頭を下げる母親に、秋津洲たちは揃って気にしないよう答えた。

あれから——秋津洲は特急で泊地に戻り、保健室に飛び込んだ。

そこで男の子の怪我の具合を診てもらい、さらにその後先生をここまで連れてきて男の子の妹も診てもらったのである。

『この島にも病院はあるのですが、なかなか時間が取れず連れていくことができなくて……。いえ、言い訳しているようでは母親失格ですね。ただ、皆さんには本当に感謝しています。本当にありがとうございます』

『ありがとうございます』

男の子と、その下の兄弟たちが揃って頭を下げた。

このままだとお礼を言われ続けそうだったので、秋津洲たちはきりの良いところで村を後にした。

「まったく、突然の予定というのはあまり好きじゃないんだけど……」

「ここまで連れてこられた道代先生が若干ぶーたれた様子を見せた。でも秋津洲的に事は急を要する感じだったかも。仕方ないかも……」

「はいはい。でもこれで貸し一つだからね。今度何か奢りなさいよ」

「なら私はクレープがいいです」

「なんでさらっと瑞穂にまで奢る流れになってるかも!？」

「冗談ですよ冗談」

クスクスと瑞穂が笑う。

「でも今日はいっぱい動いたしお腹減った……。コマちゃんも誘って後で間宮に行くのはいいかも!」

「そうですね。戻る頃には相談室も閉める時間帯でしょうし、四人で間宮さんのところに行きましようか」

「なんだ、テストにも奢るの？ 秋津洲は太っ腹ねえ」

道代先生にお腹を突かれた秋津洲の「ひゃあ、やめるかも!」という叫びが茜色の空に響き渡る。

良いことをしたという実感があつたからだろうか。その空はいつもより少しだけ澄んで見えた。

## バレンタインの一幕（早霜・不知火・清霜・磯風）

この泊地にもバレンタインの習慣はある。

日頃の感謝や親愛の情を伝えるためにチョコレートを渡す艦娘の姿があちこちで見受けられる。

ただ、日頃前面に出さない想いを出す日ということもあって、この季節はいろいろなことが起こる。

今回紹介するのは、そんなエピソードの一つである――。

「……どうしたの早霜姉さん、さつきから」

そわそわしている様子の早霜が気になって、清霜は寝台から身を乗り出した。

見ると、早霜の手には包みがある。

「あ、もしかしてチョコ？　なに、清霜にくれるの？」

「あ、うん……。あ、でもこれは違うの……。夕雲型の皆の分はこっち」

と、早霜は足元に置いてあった大きな袋から一つ箱を取り出して清霜に差し出した。

「わあ、ありがとう！　えっへっへ。……あれ、でもそれじゃそっちは？」

「これは……」

早霜は若干照れくさそうに視線を逸らす。早霜がそういう表情を浮かべるときのパターンを清霜は把握していた。

「分かった、不知火さんでしょ！」

「……」

沈黙がそのまま答えだった。

「渡すのが照れくさいの？　だったら清霜が代わりに渡してきてあげよっか」

「い、いい。……でも一人で行くのもちよつと怖い」

「それじゃ一緒に行つてあげるね。チョコもらつたお返しつてことで」



ぴよんと寝台から身を乗り出した清霜に、早霜はふとした疑問を投げた。

「清霜はチョコを作ってあげたりしないの?」

「いやー、用意するの忘れちゃって」

そう言つて清霜は「てへ」と舌を出すのだった。

「あつ、清霜!・早霜!」

寮を出て不知火を探している二人のところに、霞が駆け寄つてきた。

「ちようどよかった。はい、あんたたちにも」

と、霞は持つていた手提げ袋から小さな包みを清霜たちに渡した。

「ありがとう!・これチョコ?」

「そうよ。ありがたく食べなさいな」

「うん!・……でもちよーっと物足りないなあ」

もう一つまみを袋から取ろうとする清霜の手を、霞はぺしつとはたいた。

「やめなさいってば。ほら、他にも皆に配ろうとする人もいるでしょ?・そういう人たちから全部受け取って食べたら糖分過剰摂取になるじゃない。だから控えめにしてるのよ」

「さすが霞……気配り上手ね」

「褒めても何も出ないわよ」

と言いつつ霞の顔が赤くなっているのを二人はしっかりと捉えていた。

「あ、そうだ。霞ちゃん、不知火さん見なかった?」

「不知火?・確か陽炎たちと一緒に集落の方に遊びに行ってるはずよ。島の人たちにもチョコを振る舞うみたい」

「そうなんだ。ちよつと出遅れちゃったかなー。あちこち回つてそうだし、見つけるのは難しそう」

「不知火にチョコ渡したいなら帰ってくるのを待ってた方が得策じゃない?・それじゃ悪いけど私はもう行くわね。他にも配らないといけない人多いから」

駆け去っていく霞と残された二人。

目当ての人物は現在外出中——ともなると、しばらくやれることがなくなってしまう。

「どうしよっか。一旦部屋に戻る？」

「そうしよっか？」

と、二人が踵を返しかけたそのとき。

「二人とも」

いつのまにか、気配もなく、すぐ側に雲龍が立っていた。

「あ、雲龍さんだ。こんにちは」

「こんにちは」

普通に応答する二人に、雲龍は少しだけ物足りなさそうだ。

「二人とも驚かないのね」

「雲龍さんの登場が突然なのは今に始まったことではありませんし」

二人と雲龍は同時期に泊地に着任した同期なので、他の艦娘よりも付き合いが深い。だから雲龍がときどき気配を消して人を驚かせることも承知していた。

「それよりどうしたの？」

「磯風を見なかったかしら。春雨と時津風が探していたのだけど」

「見てないけど、磯風どうかしたの？」

「なんでも姉妹に配るためのチョコを春雨監修で作っていたらしいんだけど……」

「また失敗したとか？」

また、とはひどい言い草だがそのことについて兎角言うものはいなかった。悲しいがそれが三人の磯風に対する認識である。

「何度か失敗したけど最終的には成功したらしいのよ。それで配りに行ったらしいのだけど……包みに間違えて失敗したときのものを入れて行っちゃったみたいで。春雨がそのことに気づいて青い顔になって探してたのを、遊んでた私と時津風が見つけて」

「探すのを手伝って今に至る、と」

「でもそれなら時津風のところにいずれ来るんじゃない？」

「その前に他の姉妹が撃沈されないといいけど……」

雲龍の懸念に二人も「うーん」と渋い顔になる。磯風は結構融通の利かないところがある。こういうときは長女から順にと考えてもおかしくはない。

「随分探したけど見つからなくて。もしかすると泊地の外に出て行ったのかもしれないわ」

「大変だ！」

陽炎たちを探しに行ったのだとすれば、一緒にいる不知火も当然その被害にあう。

下手をすれば島の人たちも巻き込まれて、泊地と現地の人々の信頼関係にひびが入る恐れもあった。

なにより、そんな事態になれば磯風自身責任を感じてどういう行動に出るか分からない。まさか腹は切らないだろうが――。

「それなら私たちも探しに行きましょう。陽炎さんや不知火さんたちの、島の人たちの、そして磯風のためにも」

そうして泊地から出て島を駆け回ること数時間。

「行く先々で陽炎さんたちと磯風の話は聞けたけど……一向に追いつかないね」

もう島をぐるりと一周したような気さえする。艦娘の足とは言えさすがにこれだけ歩く疲れてくる。

諦めて帰ろうかと思ったとき、坂の下で話し込んでいた陽炎たちの姿が見えた。磯風も一緒だ。

磯風に勧められて陽炎たちがチョコを口にしようとしている。

「ちよつと待ったアツ！」

思わず清霜は叫びながら坂から飛び降りて、陽炎たちのすぐ側に着地した。突如現れた清霜に陽炎や磯風たちはぎよつとした表情を浮かべている。

「ど、どうしたのよ急に。って清霜じゃない」

「なんだ清霜、私のチョコだからと言って危険物扱いするな。これは春雨も太鼓判を押した出来だぞ」

「それは太鼓判を押したやつじゃないの！」

清霜が事情を説明している間に早霜もゆつくりと坂を下りてくる。

「おや、早霜も一緒でしたか」

彼女に気づいた不知火が声をかけてきた。

「ええ……。ちよつと、放っておけなくて」

「早霜は姉妹思いですね」

放っておけなかったのはどちらかというところ不知火なのだが、どうも不知火は清霜のことを放っておけずついて来たを受け取ったらしい。訂正するのも恥ずかしいので早霜は何も言わなかった。

「なんだと……!? ではこれはあのときの失敗作だったのか……!」

「そういうこと。ほら、成功作は春雨が持つてるらしいから、泊地に戻ってから渡そ」

「ううむ……。そういうことならそうするしかないな。すまない、助かった」

清霜に背中を押される形で磯風が泊地に向けて歩き出す。

ちよつと集落を一通り回り終えていた陽炎たちも、それに並んで歩き出した。

早霜と不知火は一行の最後尾になる。

これは渡すチャンスではないかと、早霜は意を決した。

「あの、不知火」

「なんででしょう?」

「……こ、これを」

と、ポケットに入れていたチョコを渡そうとして——異変に気付いた。

柔らかい。

日中、ずっとポケットに入れたまま島中を駆け回っていたせいで、溶けてしまったのだ。

「……」

取り出しかけたチョコをそつと戻す。

「いえ、なんでもないわ」

「……そうですか。残念です、チョコをもらえると期待したのですが、不知火は早霜が手にしていたものに気づいていたらしい。」

「……ごめんなさい。あげようとしたのだけど、溶けてしまっていたの」

「そうですか。不知火は別に気にしません」

「私が気にするの。——だから、改めて作り直して渡しに行くわ。今度は、私の方から」

「……それでは、楽しみに待つとしましょう」

力強く言う早霜に、不知火は笑みで応えた。

後日。

清霜は、意を決して部屋から出ていき、戻ってきてきてベッドの中でゴロゴロと転げ回る早霜の姿を目撃することになったという。

また、磯風の成功作は御礼ということで二人にも贈られたが——存外美味しいものであったそう。

神社でまったり（扶桑・山城・秋雲・瑞鶴・隴）

泊地の片隅にある寂れた神社。

ここは艦の御魂を祀る役割を担っている神社だ。

艦娘の在り様にも関わる重要な施設なのだが、存在そのものが重要であって普段何かするような場所ではないため、一部の時期を除けば人気はほとんどない。

ここにいるのは神主の尼子老人と、何人かの物好きな常連くらいである。

「なんだかここにいと、日本にいるような気分になるわね……」

そう言いながらお茶をすすめるのは扶桑だ。あの否応なく目立つ艤装は引っ込めている。私服で縁側に腰を掛けているその姿は、どこかこの神社の巫女のようにも見えた。

「これでもう少し涼しければ言うことはないんですけど……」

扶桑の横で団子をかじっているのは山城だった。

「そうね……。あ、でも東京の方がむしろ暑いときもあるって言うわよ？」

「東京はコンクリートジャングルだと横鎮の山城が嘆いていました。

真夏の軍艦の密集地帯を思い浮かべろって……」

「なんでそんなところに皆集まっているのかしらね」

「そこは順序が逆なんじゃないですか？ 人が集まるからそんな風になったんじゃない」

と、二人の会話に入り込んできたのは少し離れたところで絵を描いていた秋雲だ。

「そういえば秋雲は東京に行ったことがあるそうね」

「夏と冬は行ってますよー。あれはもうやばいですね、どこに行っても人目がある感じ」

「常に監視の目が光っているのね……。なんだか恐ろしいわ」

そんな他愛もない話をしていると、ふすまが開いて瑞鶴が顔を出した。眉間にしわを寄せて苦々しい顔をしている。

「どうだった？」

「勝ったわ。勝ったけど……いろいろと納得がいかないというか、勝たされた感じがするとかいうか」

一方、奥の間では尼子老人が戸棚から煎餅を取り出ししていた。先ほどまで二人で将棋を指していたのだ。

「尼子さん、わざと負けたんですか？」

「そんな酔狂な真似する阿呆はおらん。だがまあ、なんか面白そうな手が思い浮かんだんで、ちと挑戦はしてみたが」

「道理で無茶苦茶な指し方だと思った……」

尼子老人から煎餅をもらって食べながら瑞鶴がぶつぶつと何かつぶやき始めた。先ほどの対局を反芻しているらしい。一勝負の後はいつもこんな感じだ。

「瑞鶴はガンガン攻めてくるから受け流し方がいろいろ思いついて飽きんわ」

「この間は翔鶴さん相手に『受け流し方上手いからいろいろ攻め方思いついて面白い』って言ってなかった？」

「受け攻めどちらもそれぞれの面白さがあるものよ」

「……ほう？」

秋雲が何かに反応を示したが、尼子老人はそれに気づかず竹箒を片手に神社の裏手に行ってしまった。

「秋雲……今のに反応するのは節操なさ過ぎじゃない？」

「おや？ 山城さんは今のが分かったってことかな？」

「——ゴホンゴホン！」

わざとらしく咳をしてごまかす山城をにやにやと眺めながら、秋雲は筆を進めていく。

「なに描いてるの？」

ひよっこりと顔を出したのは臃だった。彼女も割とよく神社に来る方である。

「今回は風景画だね。今日はなんかいつもよりここが綺麗に見えたからかい」

秋雲の描いている絵は、現実の神社をよく写しつつも、やや淡白な形に仕上がっていた。手抜きではなく、あえて余計なものを排したよ

うな感じに見える。

「おく、上手い上手い」

「……朧はいつも上手いって言うからあんまり有難味ないなあ」

「そう言われても、具体的にどう上手いか言えるほど詳しくないし」  
絵を確認すると朧も縁側に腰を下ろしてゆっくりと横になった。

「ここは陽当たりもちょうどいいから昼寝するには最適の場所……」

「それは同感ね……」

扶桑が相槌を打つ。既に彼女の瞼は半ば閉ざされていた。

「あ、でも寝る前に伝言」

と、朧が起き上がって瑞鶴の腰を突いた。

「わっ……あれ、朧じゃない。いつの間に来たのよ」

「さつき。それより伝言。寮の掃除当番だろって」

「……あ、忘れてた」

瑞鶴の表情が若干青くなつた。

「ちなみに言つてたの誰だった？」

「龍驤さん」

「……伝言ありがとう。すぐ帰るわ」

冷や汗を浮かべた瑞鶴が駆け足で去っていく。

龍驤はあれで怒るとかなり怖い。後輩空母たちからすると、あまり怒ることのない他の一航戦組より怖い先輩なのだ。

ちなみに鳳翔さんは滅多に怒らないが怒らすと一番怖い。赤城や加賀は龍驤ほどではないがそれなりに怒ることもある。ただし割と甘い。

「あれはこつてり絞られるねえ」

「秋雲も他人事じゃないかもよ。伝言は頼まれてないけど、なんか矢矧さんが探してた」

「え？ 特に予定は入ってなかったと思うけど……。最近は何もやらかしてないはずだし」

「緊急の出撃か遠征が入ったのかも」

「あー、今はいくつかの隊が本土に出向いてるからね。そういうこともありそうだ」



仕方ない、と秋雲は腰を上げててきぱきと画材を片付けた。

「んじや、秋雲はこれで退散しますよ。早めに戻った方が風雲に小言を言われずに済みそうだからね」

「気を付けてね」

駆け足で去っていく秋雲に手を振る扶桑。そんな彼女にぽつりと山城が呟いた。

「私たちは今回出番ないんでしょうか」

「今回は伊勢と日向が選ばれたし、輸送作戦がメインだというから……おそらく出番はないわね」

「……まあ、のんびりできるからそれも悪くないですね」

「ええ。物事は捉えようよ山城。一時期は忙しかったものね……」

鳥の鳴き声が聞こえる。何事もなく時間が過ぎていく。今もどこかで深海棲艦との戦いが起きている、ということのを忘れそうになるくらいなのどかさだ。

「……また面子が入れ替わつとるな」

裏庭の掃除を終えた尼子老人は、戻ってくるなりそうぼやいた。

「臚、何か食うか？」

「お煎餅食べたい」

「はいはい」

まるで孫と祖父のようなやり取りに扶桑と山城が口元を綻ばせた。よっこらせ、と尼子老人は竹箒を立てかけて部屋の中に入っていく。

この神社は決して賑やかな場所ではない。人気もあまりしない。だが、大抵の場合誰かしらがのんびりとしている。

## 潜水ライフの過ごし方（伊13・伊14・伊168・伊8）

この冬、泊地に新しい潜水艦娘が二人着任した。伊13と伊14だ。

昨晩はそんな二人の歓迎会ということで、潜水艦寮は飲みや歌えやの大騒ぎだった。

特に伊14は盛大に飲み明かし、最後は伊19との飲み勝負に打ち勝って『潜水艦一のうわばみ』の称号まで獲得した。

それだけに、翌朝は酷い有り様である。

「ううう。頭が痛い……」

「もう、イヨちゃんあんなに飲むから」

はい、と二日酔い用の薬を差し出す伊13。先ほど伊8からもらってきたものだ。伊19や伊58がよく二日酔いになるので、潜水艦寮でも常備するようにしているらしい。

「おはよう。イヨはさすがにまだ調子が悪そうですね」

ロビーに顔を出すと、新聞を読んでいた伊8が声をかけてきた。

「出かけるのは午後からだから、それまでに調子戻しておいてくださいね」

コーヒーとライ麦パンを味わいながら新聞のページをめくる様は、なんだかヨーロッパの紳士チックだった。ちなみに陸上なので当然水着姿ではない。緑をベースにした大人しめのファッションだ。

伊8は個性派揃いの潜水艦組の中では参謀役的ポジションらしい。リーダーの伊168があたふたしながらも皆をとりまとめる役で、それを側でフォローするのが伊8のようだ。

「その、はっちゃんさん」

「はっちゃんでもいいですよ。敬語使われるとなんだか照れます」

「その……はっちゃん」

「はい」

「出かけるというと、どんな……？」

「簡単な定期哨戒任務です。他の水上艦組も勿論哨戒してるけど、海の中から見えるものはまた少し違うので。実際戦闘になることは滅多にないですよ」

「今日は私とはっちゃん、それから二人の四人で行くからねー」

と、台所で調理中の伊168が会話に入り込んできた。

「昨日は艦隊全体と潜水艦寮での挨拶が中心だったから、この泊地での本格的な生活は今日からよね」

「はい」

「ちよつと大変かもしれないけど、今日はこの泊地で潜水艦が普段やってること一通り説明するつもりだからよろしくね」

言いながら伊168は手招きした。それに応じて伊13が覗き込むと、香ばしいベーコンの香りが漂ってくる。

「ということでは早速だけど、台所の使い方から説明するわね。潜水艦は割と単独任務多いから、寮は一人でそれぞれ使いこなせるようにならないと駄目よ。いや、大鯨が掃除とか洗濯はやってくれるんだけど……」

伊168からてきぱきと説明を受けてメモを取る伊13。

その間に伊14がなにをしていたかというところ――。

「うろう、あーたーまーがー」

横になりながら、頭を抱えて悶えていた。

「よーっし、早く行こうよー」

午後になるといつの間にか伊14はけろっと回復していた。

「二日酔いにはなるけど立ち直りは早いのね」

「いやー、立ち直れないくらい酔うならお酒にはまってるよ」

豪快に笑い飛ばす。伊168と伊8は「おおー」と妙な感心の仕方をしていた。

四人はそれぞれ艤装を展開すると、泊地脇の棧橋から海に飛び込んだ。

「それじゃ行くよ」

伊168が先導する形で海中に潜り込む。他の三人もそれに続い

た。

泊地近海の海中は綺麗だった。エメラルドの海の中には大小様々な生き物が暮らしている。水上艦が目にするこのない世界だ。

全員が潜航したことを確認すると、伊168は海中を進み始めた。一定時間進むと浮上して休憩を取る。そして再び潜航する。潜水艦の哨戒任務は基本的にこの繰り返しだ。

「ポイントは浮上時するとき敵に見つからないような場所を選ぶところね。泊地近海のお勧めポイントは今日一通り教えるから覚えて」

「お、覚えられるかなあ」

伊14がこれまで教わったポイントを思い出しながら不安そうに言った。

「割とどこも特徴があるから覚えやすいですよ。それに厳密に覚えなくてもほしいの場所が分かれば問題ないです」

「そうね。そのときの状況次第で少しポイントずらすこともあるし。どちらかというど何故お勧めなのかを覚える方が大切かな」

「……ところでイムヤ。もつと大切なこと、そろそろ二人にも教えてあげないと」

と、そこで伊8がにんまりと笑みを浮かべた。

「もつと大切なこと？」

「な、なんででしょう……」

様子の変わった伊8に、伊13と伊14は警戒の色を見せた。

「はっちゃん、変な顔しないの。二人とも驚いてるじゃない」

伊168に平手チョップを受けて伊8は頭を押さえた。

「いたた。冗談ですよ。そんな怖いことじゃないです。むしろ『オイシイ』ことです」

「これを使って魚を捕まえるの」

と、伊168が腰に下げていた袋から取り出したのは網と銚だった。

「ただ海中哨戒するだけじゃ退屈だからってゴーヤとイクが言い出して、任務のついでに漁もすることにしてるの。ソロモン諸島の許可を

得てやってるから取り過ぎには注意だけど」

「沢山取れたら島の人とトレードしてるんですよ。たまに島の外の人に売って現金化することもあります」

「はっちゃんの書籍購入資金ってほしいコレだもんね」

伊8の趣味は読書で、潜水艦察の彼女の私室は泊地第二図書館と言われるくらいの書物があるらしい。

「へえ。それじゃいっぱい捕まえたらお酒いっぱい買えるかもしれないね」

「……イヨちゃん」

「な、なにさー。別に良いじゃん、自分で働いて得たお金で何買ったって。姉貴だって好きなもの買えるんだよ?」

「あはは、イヨは乗り気ね。けど——任務のついでだからって、漁は簡単じゃないわよ?」

伊168が不敵な笑みを浮かべる。

「お、そう言われたら私は燃えちゃうよ!」

腕まくりのポーズをする伊14。そんな妹を心配そうに見つめる伊14。

「それじゃ、今日はこの辺りでトライしてみよっか」

伊8がのんびりとした調子で言った。

「なんの成果も得られなかった……」

夜。潜水艦察に戻ってきた伊14はソファで横になりながらぐだっていた。

「魚たちは意外と警戒心が強く動きも鋭敏で、こちらが近づくとすぐに逃げてしまうのだった。」

「どうにかこうにか取ってやろうと奮闘したのだが、結局上手くいかないまま終わってしまった。」

「まあまあ。はい、これあげるわ」

一方、伊168と伊8は慣れた様子で小魚からそれなりの大きさの魚を取っていた。

今差し出したのは、そうした魚の刺身である。

「漁に関してはゴーヤとイクが凄く上手いから、二人から教わるというわよ。今日は遠出してていないみたいだけど」

「いつかりベンジする……。あ、これ美味しい」

刺身を一つ口にしたら途端、伊14の表情が綻んだ。

そこに何冊か本を抱えた伊13が戻ってきた。

「あれ、姉貴それどうしたの?」

「はっちゃんから借りてきたの。本を大事にするならいつでも貸してくれるって」

「へえ。今度私も貸してもらおうかな」

「……イヨちゃん、本は大切にね?」

「な、なにさ。大切にすって。本当だよ?」

「あえて念押しすることで一気に胡散臭くなったわね……」

「なにをう、イムヤまで!」

ぶう、と膨れる伊14。そんな彼女を見てクスッと笑う伊13。

他の水上艦とはやや異なるが——彼女たち潜水艦組も、日々こんな感じでそれなりに楽しくやっているのだった。

## テスト前の戦争（深雪・卯月・涼風・朝霜・鬼怒）

S泊地では人間のスタッフや練習巡洋艦が教師役を務める学校がある。

学校といつても、必修科目は一週間のうち数時間だけで他は自由学習だ。どちらかという塾に近いスタイルである。

そんなスタイルでやっているから、自然とやる気のある者ない者で学力差が開いてくる。

「……えー、そんなわけで。現状皆の学力がどの程度なのかを調べるためにテストを行う」

その日の教師役である板部の発表に、ざわついていた教室が静まり返った。

この学校制度が始まって何年も経つが、テストは数えるくらいしか実施したことがなかった。

皆それぞれ自由に学力を伸ばしてくればそれでいいと思っていた——というのは勿論建前で、教師役が問題を作るのが面倒だったから、というのが主な理由である。

「そんなのやらなくていいじゃん……先生たちだって面倒でしょ」

望月がぶーたれながら反対意見を述べる。板部は何とも言えない表情を浮かべた。

「提督からの指示なんぞな。皆がどれくらいの学力か確認しておきたいんだよ。あまりに低いと戦後の身の振り方に困ることになるだろうからな」

「むう」

「そんなわけで観念しろ。ちなみに点数が基準点未満だったら補習だ」

「えー、横暴だ。日頃の任務はどうするのか」

「補習を受けるときは有休扱いにしておく」

「ええええ」

「基準点以上を取ればいいんだよ。ちゃんと勉強してれば十分取れるラインにしておく」

「基準点って何点ですか？」

村雨の質問に、板部は渋い顔をした。

「これも提督の指示だが基準点は事前に公表すると言われてる。言ってしまうとギリギリ基準点取ればいいやってなる奴が出てくるだろうから……だそうだ。まあ、俺が学生の頃とか実際そんな感じだったからな。反論できんかった」

「お富士さん厳しいわねえ」

しかめっ面の提督の顔を脳裏に浮かべて、教室にいる全員が溜息をついた。

「科目は国語・数学・英語・理科・社会の五つだ。大まかな範囲はそれぞれ担当の先生から発表がある。テスト開始は一週間後だからそれまでに復習しつかりとやつとけよ」

「はい」

真面目に復習しようとする者、補習でもなんでもいいよと投げやりになっている者など反応は様々だった。

その夜。

とある建物の片隅の小部屋にこっそりと集まる四人の艦娘がいた。

「よく来てくれた。同志諸君」

なぜかサングラスをかけている深雪。

「なんか集まった面子から、これがどういう集まりかなんとなく分かったびよん……」

「いやー、見事に馬鹿ばかり集まったな！」

深雪の両隣には卯月と涼風。

「それで、どうすんだい。今から必死こいて勉強でもすんのかい？」

深雪の正面に座っているのは朝霜だ。

「絶対に合わない。次の畑当番賭けてもいいびよん」

「まーそうだろうな。それで深雪よ、どうすんだ」

この四人の中では深雪がどうやらリーダー格のようだった。

「決まってるだろ、先生たちから問題用紙をゲットするのさ！」

「やっぱりな。けどどこに問題用紙あるのか知ってるのか？」



「さあ。けど仕事部屋が私室にあるんじゃないの？」

「それくらいしか思いつかないよな。職員室と違ってうちにはないし」

「今の時間帯、私室は危ないぴよん。皆休んでるかもしれないし」

「だな。ということでもまずは仕事部屋に潜入するぜ！」

方針が決まったところで全員が立ち上がり、深雪以外の三人も揃ってサングラスを着ける。

「テストなんてものには縛られないのさ……行くぜ、反逆の時だ！」

「おー！」

やる気に満ちた声が響き渡る。

静かにしなくていいのかとツツコミを入れる者は、ここにはいない。

「そんなわけでもまずは香取と鹿島の仕事部屋だ！」

司令部棟にある練習巡洋艦用の仕事部屋までやって来た深雪たち。

普段香取たちはこの部屋で艦隊の育成プランや学校で使うテキスト作成等を行っている。おそらく二人の担当科目の問題用紙はここにあるだろう。

「……今更だけどちよつと怖くなってきたな。香取とかにバレたら凄いいお仕置き待ってない？」

涼風が若干及び腰になっていた。無理もない。香取は良いことをしたらとても褒めてくれるが、悪いことをしたらとてもきついお仕置きをしてくることで有名である。

「う、うーちゃんもうおやつ一週間抜きは嫌ぴよん……」

「正座一時間は勘弁だぜ……」

「どうしたんだよ皆、ここで怯んだら補習確定だぞ！ そうなったらどっちみち香取からはきつい説教が来るんだ！」

深雪の喝に怯みかけていた一同が「ハッ」となった。

「そうだった。どのみちあたいらに退路はなかったな……！」

「進むしかないなら行ってやるよ！」

「突撃するぴよん！」

「よし、行くぜ！」

勢いに乗って仕事部屋のドアノブを回す。

ただ、そこで一つ大きな問題が発生した。

「あ、鍵かかっている」

当たり前だった。

「……鍵ってどこにあると思う？」

「そりゃ、香取たちが持つてるんじゃないか？」

「こつそり取ってここの扉開けて気づかれないうちに元に戻す……い

いやいや、無理だつて。無理ゲーだつて」

いきなり計画が頓挫した。

「誰かピッキングできる人」

「そんな技能持つてる人この泊地にいるのか？」

「じゃあ壁通り抜けられる人とか」

「もつとありえないぴょん！」

このままでは補習コース待たなしである。そうなれば有休が無駄に消費されてしまう。お説教も間違いなしだ。

どうにかしなければ——必死に思いを巡らせる。

「どうやらお困りのようだね」

そこに、新たな人影が一つ加わった。

「あ、アンタは……鬼怒！」

「そう！ 前回見事に補習をくらって長良姉と五十鈴姉に説教をくらった鬼怒さんだよ！」

高らかな宣言と共に現れた鬼怒は、手にじやりりと鍵束を持っていた。

「それは、まさか……」

「ふふん、司令部棟の鍵だよ。今日の見回り当番は鬼怒だからね、持っていて当然なのさ」

そう言つて鬼怒はニヤリと悪い笑みを浮かべる。

「それじゃあ探索といこうか」

「鬼怒もワルだなあ！」

部屋の鍵を使って、ゆつくりと扉を開ける。

「……」

中には、ヘッドホンをつけながら業務に勤しむ香取と鹿島の姿があった。

二人とも目の下にはクマが出来ている。どうやらパソコンで何かを作成しているところらしい。

そういえばテストの件を伝えた後、板部が言っていた。「しばらくは試験問題作成で残業続きかなあ」と。

ヘッドホンをしているからか、二人がこちらに気づいた様子はない。

「……お邪魔しました」

ボタン、と扉をそのまま閉める。

「……真面目に勉強しようか」

「そうするぴよん」

「やっぱ悪いことはできねえなあ」

「駄目で元々、やってやるか」

「だな……」

深い後悔とともに、四人はその場を後にした。

以下、今回の後日談。

五人は一念発起して勉強に勤しんだ結果、どうにか基準点ギリギリの点数を取ることに成功した。

ただ、無理をして勉強したせいか体調を崩し、結局有休を使って休むことになってしまったという。

「日頃から勉強しておくんだっ……」

うなされながら後悔する深雪なのだったが——それから彼女が真面目に勉強するようになったかどうかは定かではない。

悪気はなかった（瑞鶴・瑞鳳・若葉・初霜）

「瑞鳳いる？ ちょっとこの前の件で確認したいことがあるんだけど」

その日は司令部の活動について確認したいことがあったので瑞鳳の部屋に足を運んだ。

泊地の司令部は各艦種から最低一名ずつ選出されたメンバーで構成されている。空母では正規空母の加賀さんと軽空母の瑞鳳が選ばれていた。加賀さんは二航戦と一緒に買い物に行っているので瑞鳳の元を訪れたのだ。

「ず、瑞鶴!? い、いるよう。ちょっと待って」

中からドタドタと物音がする。何をしているのだろうか。

言われるがまま大人しく待っていると、やがて息を切らした瑞鳳がドアを開けた。

「お待たせ……」

「何かしてた？ もし邪魔ならまた出直すけど」

「大丈夫。大丈夫よ」

あははと空々しい笑みを浮かべる瑞鳳。その様子が気になったが、問題ないというならここで帰るのも変なので入室する。

瑞鳳の部屋は相変わらず物がごちゃごちゃと置かれていた。同居人の祥鳳のエリアは綺麗に片付いているが、瑞鳳エリアは雑誌やらプラモやらで埋め尽くされている。

「もう少し整理したら……?」

「整頓はしてるんだけど」

「祥鳳もよく怒らないわねコレ」

「……ときどき注意はされるんだけどね」

視線を逸らしながら瑞鳳が呟く。

祥鳳は随分と瑞鳳に甘い印象があるが、さすがにこの部屋の惨状は目に余るのだろう。

「で、どうしたの瑞鶴」

「この前の治水工事の件だけど、島の北西エリアって誰担当かな。司

令部がメンバー調整して連絡するって言ってたけどなかなか来ないから」

「あ、ごめんごめん。私もまだ確認できてないんだ。工事って明日からだよ。すぐ司令部行って確認してくるから待ってて」

しまった、という表情を浮かべて瑞鳳は慌てて飛び出していく。司令部棟に向かったのだろう。

自分も行こうかと思ったが、瑞鳳は既に駆け去ってしまった。仕方ないので部屋で待機する。

「けど、本当にいろいろあるわね」

艦載機のものをはじめとして様々な種類のプラモが並んでいる。

「私たちのプラモまであるわね……」

赤城・加賀を筆頭に空母のプラモが綺麗に並べられていた。サイズが違うだけで本物同然の出来栄であった。

「こういうのって高いんだろなあ。迂闊に触って壊さないようにしないと——」

慎重に覗き込む。もし壊したら瑞鳳は間違いなくキレる。キレるを通り越して泣くかもしれない。それはいろいろな意味で勘弁願いたいところだ。

そのとき、ヴウーンと何かが震えるような音がした。

思わず身体がびくつと反応してしまう。

「な、なに？ ってスマホか……。瑞鳳忘れていったのね」

しばらくスマホは震えていたが、やがて静まった。

「……ふう。急に鳴るから驚いたじゃない——」

と、自分の周囲の状況を確認して、あることに気づく。

驚いて少しだけ身体を動かした方にあった紫電改のプラモが、欠けていた。

「……」

主脚がポツキリと折れている。

「の、のりはどい!?!」

大慌てで室内を探し回る。

工具箱があったので安堵したが、開けてみるとのりは入っていない

かった。

「なんでのりないのよーッ！」

瑞鳳がどれくらいで戻ってくるかは分からないが、あまり悠長に構えてはいられない。

部屋の中が駄目なら部屋の外だ。扉を開けて廊下の様子を見る。

ちようどすぐそこで初霜と若葉が談笑していた。

「若葉、初霜！ のりない!? 部屋とか！」

「お、おお？」

「ず、瑞鶴さん？ 部屋にありますけど……」

希望が見えた。思わず表情が綻ぶ。

「少しもらっていい!？」

「ど、どうぞ……。あ、持ってきます」

「急いで！ 最大船速でお願い！」

「は、はい！」

初霜が慌てて部屋からのりを持ってくる。

「最高、二人とも愛してる！ 今度いいもの奢ってあげるわ！」

「は、はあ」

二人は戸惑ったままだったが、詳しい経緯は説明できない。

初霜から受け取ったのりを手に瑞鳳の部屋に戻る。瑞鳳はまだ戻ってきていない。

「合体イ——！」

鮮やかな手つきで主脚をくつつける。

なんとか形は元に戻った。見た目も不自然ではないように思う。

「これならバレないでしょ……バレないわよね。バレない。うん、多分、大丈夫」

ヒーヒー言いながら一仕事終えたような達成感に浸る。

ちようどそのとき「ただいま」と瑞鳳が戻ってくる。間一髪だった。

「お、おかえり……」

「あれ、どうしたの？ なんかすごい疲れてるみたいだけど」

「い、いえ。なんでもないので。オホホホ」

「……なーんか怪しいなあ」

瑞鳳が疑わしげな眼差しをこちらに向けてくる。

……大丈夫。バレない。バレないってば。

自分に言い聞かせつつ、瑞鳳から治水工事メンバーが書かれた書類を受け取る。

「ところで瑞鶴、なんでさっきからそのポジションを堅持してるのかな？」

無意識に紫電改を隠すような位置取りをしていたらしい。それが却って瑞鳳に不審がられてしまったようだ。

「い、いや……ナンデモナイヨ」

これ以上隠すのは無理だ。バレるかもしれないが、そこは祈るしかない。

そろりそろりと足を動かしながら移動する。

「……んう？」

と、瑞鳳が紫電改に鋭い視線を向ける。

心臓がバクバクと悲鳴を上げている。これほどドキドキしたのはいつ以来だろう。

だが、瑞鳳の口から出てきたのは意外な言葉だった。

「あれ。直ってる」

「——はい？」

瑞鳳が「いやー」とぼつの悪そうな表情で説明した。

「これ実は藤堂さんのなのよ」

藤堂というのは泊地のスタッフだ。本業は建築士だがインフラ関係全般を支えてくれる有能な人である。ただ偏屈なところがあって慣れないと付き合にくい類の人だが。

「あの人もプラモ好きなんだ」

「私とはキャリアが違うよ。プレミアものもいっぱい持つてるからときどき見せてもらったり借りたりしてるの。けど……その、さつき寝ぼけてて、つい」

「やってしまったと」

「のりもなくてどうしようかと思ってたところに瑞鶴が来たのよ」

部屋に入る前にドタバタしたのはこのことだったのか。

「……なによ、心臓に悪い。瑞鳳を怒らせるか泣かせるかするんじやないかって冷や冷やしたのに」

「あはは、ごめんごめん。でもこれならどうにか——」

「——誤魔化せそう、かね？」

不意に扉が開き、噂の藤堂が姿を現した。

「と、藤堂さん!? 返却期限は明日だったはずじゃ……!」

「本土に戻る用事ができたから実家に持って帰ろうと思ったのだ。だから早めに取りに行くと、先ほどメールをしたのだがね」

さつき瑞鳳のスマホが鳴っていたのは藤堂からのメールが原因らしい。

「ところで君たちの声はよく通るな。うん？ 盗み聞きするつもりはこれっぽっちもなかったのだがね。どうも良くない話が聞こえた気がするのだが——」

「あ、あっはっはっは」

「ハハハハ」

藤堂が笑いながらどこからともなくドライバー類を取り出して構えた。

「解体してやる。なに、壊しはせん。それはモデラーとして恥ずべきことだからだ。ただ、全部一から作り直さないと駄目な状態にしてやる! あとついでにパーツ混ぜ合わせてどれがどのパーツが判別困難な状態にしてやる——!」

「きやあああ、それはやめてええ!」

藤堂の奇声と瑞鳳の悲鳴が寮に響き渡る。

何事かと部屋の様子を見に来た若葉と初霜の肩をそっと抱いて部屋を後にした。

「ず、瑞鶴——! 助けて——!」

「瑞鶴、あれはいいののか?」

「……いいのよ。あれは。それより約束通り間宮で何か奢ってあげるわ。行きましょ」

美味しいおやつが待っている。



今はそのことだけを考えようと心に誓うのだった。

返礼は心を込めて（最上・扶桑・山城）

「このままじゃ最上型存続も危ういんだよ」

沈痛な面持ちでそう呟くのは最上型のネームシップである最上その人だった。

ここは鳳翔さんが営んでいる小料理屋である。最上の正面に座っているのは扶桑と山城だった。

「ええと……何があつたの、最上？」

扶桑たちの頭上には、はてなマークが浮かんでいた。最上から相談があると言われてここに来たばかりである。いきなり存続の危機と言われても状況がよく分からない。

「実は三隈たちを怒らせちゃったんだよね……」

「何したのよ、あなた」

「結論だけ先に言うと、ホワイトデーのお返しに失敗したんだ」

理由を口にした途端、扶桑たちの眼差しに非難の色が加わった。

「それは最上が悪いわ」

「ちよつと待ってよ、少し言い訳もさせて欲しい。実はボク、ホワイトデー当日は護衛任務で泊地を離れてたんだ」

それは扶桑たちも知っていた。食堂に居合わせた鈴谷たちが話しているのを聞いたのである。

「で、護衛任務で立ち寄る予定だったところで何か買おうと思ってたんだけど、なかなか良いのが見つからなくて」

「それで何も買わずに手ぶらで帰ってきたと」

「いや……今思えばその方が良かったのかもしれない」

そう言つて最上はポケットから何か形容しがたい人形を取り出して見せた。

「何か買わなきゃと思つて適当に選んだんだけど……」

「これ選んだの？」

「なんか呪われそうなデザインね……」

「実際そういうものだったらしいんだよ」

最上が困つたように頭をかく。

「なんか面白い形してるなーと思って買ったんだけど、これどうやら呪いのアイテムらしくてさ。見た目だけでもドン引きされたんだけど、たまたま居合わせた島の人に『それ持ち主に不幸をもたらす道具だから早く捨てなさい』って言われちゃって……」

そんなことがあったのでは誰だつて怒る。

「最上に悪気があったわけではないとしても、これは何かアフターケアが必要ね」

「そうなんだよ。けど、こういうときどうしたら良いか分からなくてさ……」

「それで相談に乗って欲しい、ということだったのね」

とは言え扶桑たちもそこまでこの手の話に強いというわけではない。

「うーん……やっぱり普通に、お返しのリベンジをするしかないんじゃないかしら」

「リベンジか……。そうだよ。なんかもう後がないから怖い気もするけど」

「よっぽど変なものを選ばなければ問題はないと思うけど。最上は何か案持つてるの?」

山城の問いに最上は頭を振った。

「キャンディ・クツキー・マシユマロとかそういう定番のしか思い浮かばない」

「別に奇をてらう必要もないしその中から選べばいいんじゃない?」

「そっか。何かプラスアルファを用意した方が良いのかなと思ったけど」

「その手の配慮は余計な失敗を生むだけだと思うの」

少なくとも、一度失敗している現状そんなリスクを抱え込むのは得策ではない。

「分かった。それじゃキャンディを用意しよう!」

「では折角ですし三隈さんたちの顔が描かれたキャンディを作ってみましょうか」

突然の提案に最上たちの動きが止まった。

ここは教会の側にある台所である。普段はここで教会を訪れる人々や艦娘のためのお菓子や料理を作っているという。

最上たちはここでシスター・伊東珠子にキャンディの作り方を教えてもらっていたのである。

「……えーと。それって簡単にできるの？」

「意外と簡単ですよ。大丈夫です、私がお手本を見せますので」

シスター珠子はとても若々しいが、様々な事柄に詳しい。お菓子作りもお手の物で、てきぱきと手を動かしてあつという間に最上の顔が描かれたキャンディを作ってみせた。

「はい、こんな感じですよ。簡単でしょう？」

「ま、まあなんとかできそう……かな」

出来上がった自分の顔のキャンディを眺めながら最上が頷いた。

「綺麗に描けたら三人とも喜びますよ」

「うぐっ……」

無自覚にプレッシャーをかける珠子に最上は胸を押さえた。意外とプレッシャーには弱いのである。

「こんなことなら秋雲に絵の勉強教えてもらっておけば良かったかもしれない」

「大丈夫よ最上」

「そうよ、なんとかなるわ」

「完全に他人事モードになってるよね二人とも!？」

扶桑と山城は最上とは別に独自のキャンディを作っていた。

「私そこまで器用ではないけど、こんなのが出来たもの」

そう言って扶桑が披露したのは扶桑型の艦橋を模したキャンディだった。妙に精巧な作りをしていて、むしろ食べるににくい。

「では最上さんもチャレンジしてみましよう」

「が、頑張ります……」

とにかく変な形にならないように——それを徹底的に心掛けながら時間をかけて作業を進めていく。

やがて日が暮れる頃、どうにか三人分のキャンディが出来上がった

た。何度も念入りに確認してみたが、描かれた顔に不自然な点は見受けられない。

「お疲れさまでした、バツチリですね」

「ありがとうございます……。あとはどうやって渡すかだなあ」

あれ以来、三隈たちとは顔を合わせにくくなってしまっている。直接渡すよりもこっそり置いておく方が良いのではないか、という気もしていた。

しかしそんな最上の考えは、その場にいた全員に却下された。

「駄目よ最上、そこはきちんとして真正面から渡さないよ」

「姉様の言う通りよ。きちんと謝らないよ」

「皆さんも直接渡してくれた方が喜ぶと思いますよ」

退路が完全に塞がれる形になり、最上はお腹を押さえた。どうやら胃が痛くなつたらしい。

「うう……で、でも確かに三人の言うことはもつともだ。直接渡さないと駄目か……」

うん、と頷いて頬を叩いて気合を入れる。

「ありがとう、それじゃ三人に渡してくるよ！ 今回のお礼はまた今度ね！」

そう言つて最上はキャンディを詰めた袋を持って駆け出していた。

「まったく、世話が焼けるわね……」

そう言つた山城の表情には、どこか安堵の色が見えた。

「青春つて感じがしますね」

珠子がニコニコしながら言う。

「それじゃ山城、私たちも行きましょうか」

と、扶桑が大きめの袋を掲げる。

「……姉様、それは？」

「扶桑型艦橋キャンディ、とりあえず西村艦隊皆の分を作ってみたの。皆喜んでくれるかしら」

「なにしてるんですか姉様」

以下、今回の後日談。

一生懸命作ったキャンディをプレゼントしてもらったことで、最上型分裂の危機はどうか避けられた。

一方、なぜか泊地ではしばらくの間、様々な種類の艦橋キャンディが流行ったという。

## 都会は遠い（五十鈴・名取・大淀）

「また三越と組んでのPRね……」

泊地内に貼り出されたポスターを見て五十鈴が溜息をついた。

そこに映し出されているのは榛名である。もつともこの榛名ではなく、横須賀の榛名だ。同じ艦の艦娘ではあるが、顔つき等細かいところに違いがある。

「私もたまには東京行ってお洒落な買い物でもしてみたいわ……」

「相当長い有休もらうか飛行機手配するかしないと駄目だね」

名取が残念そうに言った。

飛行機なら乗り継ぎの待ち時間にもよるが、片道数日程度で東京まで行ける。夏冬それぞれ東京に行っている秋雲が使っているルートがこれだ。ただし深海棲艦の存在によって空の旅も安全とは言えなくなっており、その影響で料金が深海棲艦出現前と比べてもべらぼうに高い。

安上がりで済ませるなら自力で海路に行く方法だ。しかしパプアニューギニアや台湾を経由して日本に行こうとすると片道だけで十日以上かかってしまう。往復することを考えると一カ月近く休みを取らないといけない。私用でそこまで休みを取って東京まで行く艦娘は今のところ皆無である。

「ここも悪くないんだけど、なんかずつとこう大自然の中にいると、たまに都会の喧騒が恋しくなるのよね」

「逆に横須賀の子たちはこっちの自然に憧れてるみたいだね」

「ないものねだりってことは分かっているのよ。でも憧れるのよ！」

五十鈴が拳をわなわなと震わせる。

「基本うちは『ないものは自分たちで作れ』がモットーだけど……さすがに三越は持ってこれないかな」

「無理無理。海外出店してるって聞いたことはあるけど、こんな人の往来が少ないところに誘致するなんて無茶だわ」

泊地ができる前に比べれば格段に人の往来は増えたいが、それでも店を構えてやっていけるほどではない。

「そもそも人ってどうやって来てくれるようになるのかな？」

「そりゃ、それこそPRいっぱいしてこの泊地が良いにいいところかを宣伝していくしかないんじゃない？」

「良いところ……」

名取が首を傾げる。外部の人にお勧めできるようなポイントが思いつかばないらしい。

「住むには良いし会社としても悪くはないと思うけど……第三者にアピールできるところってあるかなあ」

「強いて言えば間宮食堂と居酒屋鳳翔だけど……あんまり客増やして負担かけさせたら悪い気もするのよね」

どちらも外部の客まで想定した規模ではない。あくまで泊地内の人々をサポートすることを想定した施設だ。

「PR活動、面白い試みだと思います」

と、そこに突如大淀が顔を出した。

「びっくりした。いつから聞いてたのよアンタ」

「割と最初から。ところで五十鈴さん、名取さん。実は私もこの泊地は常々アピールが欠けていると考えていたのです」

「は、はあ」

二人は眼鏡をきらりと光らせる大淀に圧された。

彼女は提督や叢雲と並んでこの泊地の運営の中心人物で、特に資金管理・運営を主な担当としている。決して潤沢とは言えない資金のやり繰りには常々苦勞しているようで、時折飲み仲間と深酒をしている姿が目撃されていた。

「そもそも横須賀がPR活動に勤しんでいるのは、艦娘という存在を人々に受け入れてもらおうという表向きの狙いの他に、企業とのコラボレーションで収入を得ようという裏の目的もあるのです」

「そ、そうなの？」

「そうに違いありません。でなければあんな贅沢な施設が、設備が揃えられまじょうかー！」

大淀は肩を震わせた。

「そんなわけで私も何かとコラボしたいと考えていたのです。なぜか



歴代の提督や叢雲さんには毎度却下されていましたが」

「え、なんで？」

「他にもっとやることがあるから、だそうで」

確かにこの泊地は常にやることが山積みだった。深海棲艦との戦い、近海の防衛、日頃の訓練は当然として、泊地の設備拡張、島の人々の支援、ソロモン政府からの依頼遂行等。なかなか広報活動までしている暇はなかったのだろう。

「しかし最近はお泊地の設備も十分なものになってきてますし、ソロモン政府からの急ぎの依頼なんかもありません。艦隊の練度も大分高水準になってきましたし、そろそろ資金面の安定化を狙って本格的に動いていくべきだと思います！」

「わ、分かった。分かったから！」

落ち着けどうどうと五十鈴が興奮気味の大淀を宥める。

日頃よほどストレスが溜まっているのだろう。今度久々に飲みにつき合ってやった方が良さだろうかと考えてしまう。

「でも企業と組んでのコラボって、大分お金とかかかるんじゃないですか……？」

「大々的なものは無理ですね。うちの予算じゃそんな大それた企画は展開できません」

大淀がずばつと言いつつ切った。定期的に予算状況は泊地内の艦娘に知らされるが、確かに赤字になるかならないかというケースが多かったような印象がある。

「まずはお金をほとんどかけずに工夫でどうにかなりそうなところから攻めていくのが良いですね」

「それが簡単にできれば苦労はしないわよ……って言ったら話が進まないか。そうねえ」

五十鈴も唸りながらいろいろと思案してみるのが、これといった案は出てこない。

「あつ、珠子さんをお願いしてみるのはどうかな？」

名取がポンと手を打った。

珠子というのはこの泊地内の教会のシスターだ。

「珠子さん、ときどきお菓子作って島の人たちに配ってたりするでしょ？ ホニアラに行くときはそっちでも配ってるって言っし。それをもう少し本格的にやってみる、とか」

「なるほどお菓子ですか。この泊地オリジナルのお菓子とか作れば知名度向上にも繋がりますし、そこまで予算もかからないので良いかもしれませぬね」

「その代わり経験は必要だけどね」

本格的にやっつていくなら相応の人数でお菓子作りに挑まねばならないはずだ。

お菓子作りの経験がある者がある程度揃えなければならぬ。

「ちなみにお二人は？ あ、私はさっぱりです」

「私もあんまりできないわよ」

「わ、私は少しなら……」

「おおー」

控えめに言った名取の手を、大淀ががっしりと掴んだ。

「では早速他のメンバー探しといきましょうか、名取さん。あ、今お時間空いてますか？」

「え？ あ、はい」

そこで空いてないと言えない辺りが名取の性格を表していた。

「では五十鈴さん、妹さんを少しお借りしますね」

「あー、はいはい。あんまりこき使っちゃ駄目よ」

「善処しますー！」

すっかり乗り気になってしまった大淀に引きずられていく名取を見送りながら、五十鈴はぼつりと呟いた。

「名取一人だけじゃ潰れそうだし、後で由良と阿武隈も派遣しておくべきかしら……」

以下、今回の後日談。

大淀プロデュースで作られた泊地煎餅は物珍しさもあってソロモン諸島内でそれなりに高評価を得た。

ただ、見た目は完全に普通の煎餅だったためPR効果は薄く、泊地

を訪れる人の数はさして変わらなかったという。

馬鹿を見るのは誰だ（敷波・イタリア・ローマ・初風・天津風・時津風・吹雪・叢雲）

月が切り替わった日の朝。

敷波はやや緊張の面持ちで寮のリビングに降りてきた。

「あら敷波、おはよう」

最初に気づいて声をかけてきたのはテーブルで食事中のローマだった。

向かいにいたイタリアもすぐに気づいて手を振ってくる。

……うーむ。

表面上はにこやかに手を振り返る敷波だったが、内心では二人の一举一動を警戒していた。

なにせ今日は四月一日——即ちエイプリルフールだ。いつ誰が自分を騙そうとしてくるか分からない。

と、そこで敷波は妙な点に気づいた。イタリアたち席にあるのがコップではなく湯呑なのだ。

中身は緑茶らしい。

……これは、ツツコミ待ちからの嘘というパターンかな。

迂闊に「あれ、お茶好きでしたっけ」と声をかけようものなら「そうなの」と返されるかもしれない。

よく見ると二人とも若干そわそわとこちらの反応を待っているようにも見える。

……ふっふっふ、その手には乗らないよ。

内心で勝利の笑みを浮かべながら、敷波は湯呑には触れず、

「二人は今日は演習なんだっけ」

と、まったく別の話題を振った。

「ええ。最近入った子たちの教導艦ということだ」

イタリアたちは二人とも所謂『指輪持ち』だ。既に十分な練度に達しているを見て良い。そういった艦娘は他の艦娘の指導を務めることも多い。最近入った伊13・伊14・松風・藤波の担当は二人が務

めていた。

「ところで敷波、あなたは何を食べるの？」

「んー、今日は残り物のサラダと目玉焼きでいいかな。この後少ししたら出かけないといけないし」

「そ、そう。飲み物なんかはどう？」

「飲み物？ 特に決めてないけど」

イタリアの質問そのものに意味はない。ただ質問に合わせてローマがこれ見よがしにお茶をすすり始めた。興味を引きたいのかもしれない。

……悪いけど、あたしは馬鹿にはならないよ。

視線を二人から外して黙々と冷蔵庫を漁る。

「おつはよー。今日も良い朝だね〜」

そこに陽気な声の時津風が顔を出した。初風と天津風も一緒だ。

ちなみに、かつて彼女たちと同じ駆逐隊を組んでいた雪風は泊地の切り札とされる第一艦隊所属で、寮が違う。

「おはよう皆、三人揃って出かけ？」

「はい。今日は非番なので、第一艦隊の島風と雪風を誘って五人でブイン基地に遊びに行くんです」

「ブインに？」

ブインはここから一番近い艦娘たちの拠点だ。距離だけで考えるならソロモン諸島の首都であるホニアラよりもずっと近い。

それだけに互いの交流は頻繁に行われている。向こうから遊びに来る子もいれば、その逆もまた然り。

……本当っぽい話だけど、無条件で信じると痛い目を見る。

天津風の証言に警戒しながら、敷波は朝食の準備を済ませてテーブルについた。

「でも第一艦隊ってしばらく忙しそうにしてなかったっけ。年度末だからってやること多いって吹雪がぼやいてたよ」

「二応一区切りつけることはできたみたいよ。まあ司令部付きの叢雲たちはまだ大変そうだけど」

初風が補足してくれた。これも嘘ではなさそうに思える。

「あれ、ローマさんお茶好きだったっけ？」

と、そこで時津風がローマの異変に気付いたらしい。

ローマの表情が若干嬉しそうに綻んだ。

「ええ、最近少し——」

「お茶はいいよねえ、心が癒されるよー。結構雲龍が凝っててさー」

ローマが言い切る前に時津風の早口が炸裂した。

「ときどき変な試作品作ってくるのが玉に瑕だけど基本美味しいからさ、今度一緒に飲みに行こうよ」

「えっ……そ、そうね」

「約束だよー。雲龍にも話しておくね」

あまり時間がないのか、三人はそのまま出かけて行ってしまった。

「……本当のところお茶得意なんですか？」

ぼそつと敷波が尋ねると、ローマは何とも言い難い表情を浮かべた。

「嫌いではないけど、そこまで好きでもないというか……」

「でも、今からじゃ嘘でしたって言い難いわね」

イタリアが困ったような表情を浮かべる。

「ま、まあでも少し付き合うくらいなら大丈夫よ」

強がるローマに内心ドンマイと声をかけつつ、敷波は朝食を進めた。

今日は少し用事があるのだ。

「お待ちせー」

寮から出て向かった先は司令部棟だった。

そこには吹雪型・綾波型・暁型の面々が揃っている。

ただ、叢雲だけがいなかった。

「叢雲は？」

「休憩中。最近働き詰めだったから古鷹さんに連れ出してもらったところ」

吹雪が状況を説明する。予定通りということらしい。

「それじゃ早速着替えようか」

数分後、そこには叢雲と同じ制服姿のメンバーが揃っていた。

否、制服だけではない。全員カツラを装着して、見た目も叢雲そっくりになっている。背丈等々異なる部分も沢山あるが、さすがにそこはどうしようもない。

発案者の吹雪曰く「偽叢雲ちゃん大量発生で本物に休んでもらおう計画」らしい。ネーミングがそのまま過ぎるが、発想自体は悪いものではなかった。

この泊地は何度か提督が変わっていることもあって、最古参かつ歴代提督の補佐役だった叢雲に頼る部分が非常に大きい。それだけに叢雲は年中忙しそうにしていた。

そんな妹を見かねた吹雪が企画したのがこの計画である。当然他の司令部メンバーには根回し済みだ。

「叢雲もビックリするだろうね。帰ってきたらこの状態だもん」

敷波がそう口にしたとき、ちょうど扉を開けて叢雲が部屋に帰って来た。

「……」

部屋に入ってこちらを眺めた叢雲は、不思議なものを見るような目で一同を見渡す。

計画が上手くいったと思った吹雪たちが笑みを浮かべて説明をしようとした、そのときだった。

「——皆さまは、どなたですか？」

「……え？」

普段の叢雲からは想像もつかない口調だった。

「あの、なぜ私と同じような恰好をされているのでしょうか。もしかして私のことご存知なのでしょうか？」

「む、叢雲……？」

思わぬ反応に全員が戸惑った。

そのとき、叢雲の後ろに古鷹が現れた。

「古鷹さん、叢雲がなんか変なんだけど……」

「実は、休憩に連れていこうとしたら途中で叢雲ちゃんが倒れて……。意識は戻ったんだけど、こんな調子に……」

「あの、すみません。なにか……ご迷惑をおかけしているみたいで……」

叢雲が申し訳なさそうに俯く。

「何も、覚えてないの……？」

「そうみたい。自分のことも、私のことも——」

古鷹が辛そうな表情で視線を僅かに逸らした。

「そんな……！ 叢雲ちゃん、お姉ちゃんだよ！ 私、吹雪だよ！」

「あ、あたしは妹……みたいなもの敷波だよ！ 割と付き合い古いんだぞー！」

吹雪と敷波が両サイドから叢雲の肩をがしつと掴んだ。

「そ、その……ごめんなさい。思い出せなくて」

「そんな……」

「嘘だろ……」

「——嘘よ」

と、そこで叢雲の声色と表情が百八十度変わった。

吹雪や敷波たちが「へ？」という声を上げるのと同時に、何人かが堪えきれずに笑い出した。

「安心しなさい、嘘だから」

「そんな、ひどい！」

「そうだそうだ！」

「ふっふっふ、私を出し抜こうとしてたみたいだから古鷹にも協力してもらってカウンターを仕掛けたのよ。何人かは気づいてたみたいだけどね」

見ると、白雪・磯波・綾波・電はちよつと申し訳なさそうに笑っていた。他はこちらと同様に驚いている者が大半である。初雪と響だけは何とも読み取りがたい表情だったが。

「そっか、見破られちゃってたか……」

がつくりとする吹雪に、叢雲はコホンと咳払いをした。

「偶々よ。なんか長門と古鷹がコソコソやってるなど思ったから。知らなかったら私も驚いてたかも」

「ごめんねー、私のせいだったみたい」



古鷹が頭を下げる。

「まあ正直ビックリはしたんだけどね。この企画力。……で、今日はこれで仕事手伝ってくれるんでしょ？」

「え、うん。そのつもりだったけど」

「これだけいるなら早めに片付けられるかもね。それ終わったら久々にどこか遊びにでも行きましょうか」

叢雲からの提案に、一同は笑って頷いた。

……ま、馬鹿を見るのも悪いもんじゃないのかな。

互いに笑い合う吹雪と叢雲を見て、そんなことを思う敷波なのだった。

プロジェクトSの技術者たちの挑戦（鈴谷・最上・初春・夕張・大鳳）

ソロモン諸島、S泊地。

その一角には嚴重なセキュリティで守られた工廠があった。

そこでは艦装の改修、装備の開発といった定常業務と——新たな一歩を踏み出すための挑戦が行われていた。

艦娘たちの新たな可能性を生み出すための、艦装改造案の作成である。

艦装は艦娘が現世で受肉する際に必要となる依代であり、彼女たちのコアとも言えるものだった。単なる基本兵装ではない。

艦娘に何ができるのかは艦装によって決まると言っても過言ではない。どれだけ射撃能力が優れていても駆逐艦の艦装では長距離射撃は行えない。自分の艦装とマッチしない艦載機は絶対に扱うことができない。それくらい艦装は重要なものだった。

改造というのは、その艦装をベース部分から変えてしまおうという行いである。部分的な修正を行う改修とはまるで違う。改修が成長であるならば、改造は転生と言っても過言ではない。

リスクは高いが、リターンも大きい。

そして、改造案を作成する技術者たちの役割は、そのリスクを限りなくゼロに近づけることなのだった。

「……うん、いや、それは分かったんだけど」

目の前で熱く語る技術部員・最上に対し、鈴谷は若干戸惑いがちの表情を浮かべた。

「結局、私はなんで呼び出されたの？」

この泊地には様々な技術の発展を志す技術部という部が存在している。鈴谷にとって姉とも従姉ともいえる最上はその一員だが、鈴谷自身はそうではない。

「実は鈴谷に第二改装の話が来てるんだ」

「え、マジっ？」

「うん。それでどういう風に改造すべきか各拠点の技術部で話し合っ  
ててき。いろいろと鈴谷にも協力してもらいたいんだよね」

「なるほど。そりゃ自分のことだしね。協力するのは全然オツケーだ  
よ」

S 泊地の艦娘にはいくつか憧れの対象が存在する。第二改装、通称  
『改二』はその一つだった。

「改造案のテストとかそういうやつ？」

「いや、まだその少し前の段階なんだ。これは最上型の第二改装がな  
かなか来なかった理由の一つなんだけど……ほら、鈴谷たちは改造案  
のときに僕に合わせて航空巡洋艦に艦種変更しただろう？ その影  
響もあつてか航空巡洋艦としてスペックの底上げがなかなか大変で  
ね。どうせやるなら利根や筑摩に匹敵するくらいの性能が欲しいだ  
ろう？」

現状航空巡洋艦の切り札とも言える両名の名前を出されて、鈴谷は  
「そうだね」と頷いた。利根と筑摩は比較的早い時期に第二改装が施  
されており、それからはずっと航空巡洋艦の二大エースとして扱われ  
ている。

「その辺りはどうにかこうにか実現できる見込みが立ったんだけど、  
その過程でちよつと妙な方向に話が広がってね。それについて鈴谷  
本人の意見も聞きたいなって」

「妙な方向？ 阿武隈みたいに甲標的取り扱えるようにするとか？」

「いや……ある意味もつと妙かもしれない」

そこに技術部の一員である初春が図面を持ってきた。

「鈴谷よ、これを見るが良い」

テーブルの上に広げられた図面を見る。そこには想像していたの  
と違うものが記されていた。

「飛行甲板……ちよつと大き過ぎない？」

「うむ」

「これ鈴谷の改造設計案なんだよね？」

「うん、そうだよ」

「これだと主砲とかろくに扱えなさそうなんだけど」

「その通りじゃ」

「いや、その通りって」

と、そこで鈴谷は図面の端に記載されている文言に気づいた。

『鈴谷・軽空母改造案』

完全に予想外だった。しばし思考がフリーズする。

「んんん〜？」

「いや、『これなあに？』的な顔を向けられてものう」

「一応かつての戦争のときも空母改装案出たでしょ？ 利根や筑摩に對抗するならいつそのこと艦載機運用に全力投球するのもありなんじゃないかって」

「誰発案よ」

「各地の夕張」

「私も提案者の一員よ！」

グツとサムズアップする夕張。鈴谷は迷わずその頭をがっしりと掴んで持ち上げた。

「痛い、痛いつてば！ ギブ、ギブ！」

「いきなり軽空母っていくらなんでも無茶でしょ！ 航巡とじゃ扱う艦載機だって全然違うじゃん！」

「そ、そこはホラ……努力でなんと——あだだだッ」

無責任なことをのたまう夕張を完全に沈黙させる。

そんな鈴谷の肩を叩く者がいた。

「鈴谷さん、それくらいで。空母の艦載機については私がレクチャーしますよ」

そこにいたのは大鳳だった。泊地でも数少ない装甲空母として頼られている艦娘の一人だ。

「あれ、大鳳って技術部じゃないよね？」

「ええ。ただ今回の鈴谷さんの改造案ではこれを使ってはどうかという話があつて、それで呼び出されたんです」

そうやって大鳳が見せたのはクロスボウだった。

「空母の艦載機は弓もしくは術式で扱いますが、どちらもきちんとして取得するには時間がかかります。ただ、このクロスボウなら幾分か扱い

やすいので、これを使って鈴谷さんの空母適性を見ようという話になっただけです」

「なるほど」

大鳳から渡されたクロスボウを様々な角度から眺めてみる。

「……見ただけじゃ分かんないなあ」

「それはそうでしょう。実際に使ってみないと」

そうして——そこから鈴谷の挑戦が始まった。

「違います。もつとしっかり相手を見てください！」

時には大鳳の叱責を受け。

「艦載機の妖精さんとの同調が安定しないね。今度一緒に食事でもして親交を深めてみる？」

時には最上の提案で仲間との絆を深め。

「これはもう駄目かもしれんのか……。いや、そんな顔をするでない。そなたが諦めないならわらわも付き合おう」

時には壁にぶつかり諦めそうになりながら。

「——よし、良い感じ良い感じ。これなら最終テストまでいける！」

鈴谷は、軽空母への適性試験に臨んだのだった——。

「よっしゃー！」

最終テストの結果を見て、鈴谷は柄にもなくガッツポーズを決めた。

見たのは『合格』の二文字。仲間たちとの挑戦は無為ではなかった——その証明だ。

「他の拠点の鈴谷たちも合格したみたいだし、軽空母への改造はいけそうだね」

「当然じゃん、鈴谷やれば出来る子だしっ！」

ふっふーんと胸を張る。

そんな鈴谷を見ながら、それまで鈴谷の特訓を見守っていた技術部の部長——明石が口を開いた。

「では鈴谷さんは軽空母側への第二改造希望ということで良いですか

？」

「…………へ？ 軽空母側？」

首を傾げる鈴谷に、工廠の長である伊東信二郎が「ん？」と声を上げた。

「なんだ鈴谷、お前聞いてなかったのか。お前の第二改造は航空巡洋艦と軽空母のコンバート方式だぞ」

「…………聞いてないんですけど？」

ぐるりと首を動かして最上たちを見る。

「い、いやあ。言つてなかったっけ？」

「軽空母必須だと思つてたから死に物狂いで頑張つてただけど」

「ま、まあまあ。貴重なデータも取れたんだし鈴谷の軽空母としての技量も上がったんだし…………あだだだっ!？」

鈴谷に頭を掴まれて悲鳴を上げる夕張。それを見て最上と初春は一步退いた。大鳳はよく分かってない様子で立ち尽くしている。

「はっはーん。さてはテストデータ取りたいからあえてそういう方向に持つていったなあ？」

「す、鈴谷よ。そう怒るでない。これは決して興味本位とか私利私欲ではなく…………いや、まったく興味がなかったというわけでもないのじゃが」

「そうそう。いやー、鈴谷、そんな怒らないで。可愛い顔が台無…………あだだだっ!」

「やかましいわー!」

最上と初春の頭を掴んで振り回す。

そんな鈴谷を見て、大鳳はぽつりとこぼらした。

「今回一番磨かれたのってアイアンクローの威力なんじゃ…………」

なお、その後鈴谷は無事正式に軽空母となったため、特訓の成果は無駄にならなかったという。

火傷しないよう気をつけな（雲龍型姉妹・時津風・春風・松風・藤波）

S泊地はできるだけ自給自足することを目標の一つにしている。本土からの輸送が途絶えても、ある程度自分たちだけでやっていけるようにする必要があるからだ。

そんなわけで農業・畜産・漁業・林業等を持ち回りで行っている。最初のうちは悪戦苦闘する艦娘たちだったが、慣れてくると普通の人間を上回る身体能力を持っているだけに余裕が出てくる。

そして、余裕が出てくると遊び心が湧いてくる。「茶葉を育てて自作のお茶を作ってみた」というところから、

「自分で茶器を焼いてみたい」

「茶器を焼くには窯がいる」

「窯を作ろう」

という発想になるのは自然なことだった。

そんなわけで泊地の片隅にある空き地に集まった艦娘たち。

中心にいるのは雲龍だった。今回の件の発起人は彼女である。最近お茶にはまっているらしい。

時津風が肩車されているが、そのことについてとやかく言う者は誰もいなかった。この二人はだいたいこんな感じである。

「……それで、窯を作るんだって？」

やや面倒くさそうに尋ねたのは工廠の長である伊東信二郎だった。今日は休暇ということで煙草をふかしながらダラダラしていたのだが、雲龍に捕まってここまで引つ張り出されてきたのである。

「そう。そうすればいろいろな茶器が作れる……」

「こういうモノづくりは藤堂でも呼べばいいだろうに」

藤堂というのは設計士を生業とする泊地のスタッフだ。泊地にある建物をはじめとするインフラのほとんどに関わっている。

「藤堂さんは最近ハードワークで死にそうだから……。それに伊東さんは実家で陶芸やってると聞いた」

「誰だ余計なこと言ったのは……。まあいいか。適当なこととして火傷でもされたら困るからな。監督役はしてやる」

「せっかく広いんだし大きい窯作りたいな」

時津風の言葉に伊東は周囲を見渡して頷いた。

「今後他の連中が使う可能性もあるし、作れるならその方がいいな。耐火レンガはそれで全部か？」

「はい。さすがに耐火レンガまで自作するのは大変そうでしたので、本土から取り寄せました」

「いざ使ってみてレンガの出来に問題があったら目も当てられないしね」

トラックに積み上げられたレンガを指して天城と葛城が答えた。

「……天城と葛城は雲龍の手伝いってことで分かるとして、お前たちは？」

伊東は視線を春風・松風・藤波に向けた。

「私、雲龍さんと一緒によくお茶をしてみました」

「春風の姉貴だけに力仕事をさせるわけにはいかないからね」

「松風に引つ張られて来たのよ。夕雲姉さんたちも『いい経験だから』って言ってたから逃げられなかった……」

藤波からはそこはかとなく苦労人オーラが漂っていた。同期の松風が自由人なので日頃から振り回されているらしい。

「んじゃ、まずは土台作りだな。それから骨組みだ」

「レンガを積むんじゃないの？」

不思議そうに尋ねてくる藤波に、伊東は頭を振った。

「完成したときのイメージを持たずに作り始めてもロクなことねえぞ。そういう意味でも土台作りと骨組みはしっかりやっておかないと駄目だ」

「骨組みは何使えばいいかしら」

「竹とかでいいだろ。確か倉庫にいくらか余ってたはずだ」

そんな調子で地面をならし、設計イメージを固めながら竹で骨組み



をしていく。

こういう作業はさすがに経験豊富な雲龍たちの独壇場だった。松風や藤波はどうすればいいか把握しかねているようで、春風や時津風に話を聞きながら少しずつ作業を進めている。

「正直俺も専門家じゃないから自信はないがな。とりあえず駄目元で作ってみるって感じた」

「伊東の旦那、意外と弱気だね」

「陶芸は奥が深いんだぞ、松風。いや、俺も詳しくは知らないが親父にはガキの頃からずっとそう言われて育ってきた。窯は陶芸のベースになる部分だからな。形だけ整えても駄目だ。火加減だとか頑丈さだとかいろいろクリアしないといけない課題も多い」

「ふうん」

松風はレンガを積み上げている最中で、あちこち汚れていた。普段身なりを整えているだけに、こういう姿は少し意外である。

「こういうのも悪くないな」

ただ、よく見るとその視線は裾をまくって窯づくりに勤しむ天城に注がれている。

「和服美人が一生懸命何かに勤しむ姿、いいね」

「駄目ですよ、集中しないと」

ポカリと春風が松風にチョップを喰らわせていた。

そんなこんなで数日かけて作業を進めていき、どうにか完成に漕ぎつけた。

「こうして形になると『やった!』って感じになるわね」

作業着で汗を拭きながら藤波が言った。この数日ですっかりその恰好が似合うようになっていいる。

「隙間もないし、煙突の位置も悪くない……と思うんだがなあ」

「親方さん、もうちょっと自信持ってよ。私まで不安になるじゃない」  
葛城に肘で小突かれて、伊東は「ううむ」と唸った。

一同が息を呑む中、雲龍が窯に薪を入れていく。

しばらく様子を見ていたが——そのうち窯に亀裂が走り始めた。

設置した温度計をじつと見るが、思っていたほどの温度になっていない。

「これは駄目かなー」

時津風の言葉に一同が溜息を漏らす。

「やっぱ専門家に話を聞いておくんだったな……。強度も熱量も足りてない」

「残念」

「まあまあ雲龍さん、そう落ち込まないで」

松風が慰めの言葉をかける。だが、そういう松風自身も幾分か残念そうな表情を浮かべていた。

一方、雲龍は案外と平気そうな顔をしていた。

「大丈夫。こういうのはよくあることだから」

「よくあるの？」

藤波の問いかけに天城が頷いた。

「割と失敗だらけよ。一度で成功する方が少ないかも」

「見張り台作ろうとして一気に倒壊したときが一番の衝撃だったわね」

「ええ……」

葛城の経験談に、松風と藤波は若干引いているようだった。

「ま、今度本土行ったときに実家で話聞いて来てやるよ。そうしたらまた修繕するなり作り直すなりすればいい」

「そのときはまた呼んでよ。なんか失敗して終わりじゃすつきりしない」

「同感だね。仕事を途中で諦めたら朝風の姉貴に何言われるか分かったもんじゃない」

意気込む二人を見ながら、伊東は『こいつらもすつかりここに染まったなあ』と思うのだった。

なお、窯は紆余曲折を経て半年程後に無事完成し、それ以降泊地でちよつとした焼き物ブームが起きるのだが——それはまた別の話である。

平凡な写真を（あきつ丸・長月・高雄・愛宕・まるゆ・  
呂500）

休憩時間、保健室から出て煙草を吸っていると、カメラを持ったあきつ丸と長月が通りかかった。

「おや、道代先生。休憩時間でもありますか」

「そんなところ。二人は写真撮影？」

「そんなところだ」

長月が心なしに自慢げにピカピカのカメラを掲げてみせた。どうやら給料を貯めて新品のカメラを買ったらしい。コンパクトなデジタルカメラで、小柄な長月が持っているとなんだか可愛らしい印象を受ける。

一方のあきつ丸は使い古された感のある一眼レフカメラを持っていた。かなりの年代物に見える。

二人は何か波長が合うらしく、時折一緒に行動しているのを見かけることがある。

「長月殿が新しいカメラを試したいというので泊地内のあちこちを回っているのです」

「せっかくだから道代先生も撮っておきたいが、いいだろうか」

「ん、別に構わないわよ」

煙草を灰皿に押し当てて、白衣をぱつと伸ばす。

二人のカメラがそれぞれシャッター音を鳴らす。

「あとで写真ができたらお送りするであります」

「ちなみに青葉とかに提供求められたら渡しても構わないだろうか」

「別に構わないわよ」

青葉は定期的に新聞やSNSの記事を作成している。そういうところで写真を使っているかどうかということだろう。これまでも何度か使われているし、今更隠すようなものでもない。

「けど、写真か……。懐かしいわね」

「道代先生も写真撮影していたのか？」

「若かりし頃にね。大学の頃とか友達と一緒にあちこち旅行に行つて風景とか撮つて回つてたわ」

「そういうことなら、せっかくだし一緒にどうでありますか」

「うーん、そうね。今保健室にいるのは二日酔いの隼鷹くらいだし……放つておいても問題はないか」

一応保健室前に不在であることを示す紙を貼り付けておく。携帯番号も記載しておいたので問題はないだろう。

「それじゃ、泊地撮影隊出発よー！」

「おー！」

「おー、でありますー！」

何か狙いがあるというわけでもないのに、適当に泊地内をぶらぶらと歩いて回る。

広場に足を運ぶと、そこにあるベンチですやすやと寝息を立てているまるゆと呂500の姿があった。当然陸地にいるので水着姿ではなく私服姿だ。

「遊び疲れてそのまま眠ってしまったという感じでありますな」

「なんか子どものこういう姿見ると平和って感じがするわね」

戦いを生業とする艦娘ではあるが、せめて陸地にいるときくらいは平々凡々な生活を送つて欲しい。この泊地を最初に作った提督はそんなことを願っていた。

「無許可だけど写真撮っちゃおうか」

「いいのか？」

「だつて起こして許可取ったら寝顔は取れないじゃない。それに起こすのも悪いし」

「それはそうではありますが……」

いいのかどうか躊躇う二人からカメラを借りてシャッターを切る。

あきつ丸の方は分からないが、長月のカメラはすぐにどんな風に撮れたか確認できる。我ながら良い写真が撮れた。

「皆さん集まつて何をしているんですか？」

そこに重巡姉妹——高雄と愛宕が通りかかった。

「ちよつと平和の象徴を形に残しておこうと」

そういつてデジカメの画面を二人にも見せる。

「わあ、可愛いわね」

愛宕には好評のようだったが、高雄は若干苦い顔つきをしている。

「駄目ですよ、寝顔を無断で撮るのは」

「ええー、ちゃんと二人が起きたら許可は取るわよ。消せって言われたらちゃんと消すつもりだもの」

「二人は嫌とは言わないでしょうけど、寝顔を撮られるのはあまりいい気分ではないと思います」

高雄の顔つきは説教モードのときのものになっていた。こうなると高雄はうるさい。

「分かった分かった、消しておくって」

長月のデジカメからデータを削除する。あきつ丸の方は後で写真を現像する際に処分すればいいだろう。

「んじゃ、せっかくだし二人撮らせてくれない？」

「え？」

まさか自分に矛先が向けられるとは思っていなかったのか、高雄はきよとんとした表情になった。

「あら、いいわね。高雄、せっかくだし撮ってもらいましょうよ」

「わ、私はいいわよ。その、撮ってもらえるほど今お化粧とかしてないし……」

「別にすっぴんでもいいじゃない。そのままでも美人なんだから」

皮肉でも何でもなく本心からそう思う。

が、言われた高雄は急速に顔を赤くしてしまった。

「み、道代先生！　そういうことをさらつと言うのはナシです。反則ですー！」

「なに照れてるのよ、愛宕を見習いなさい。全然動じてないわよ」

愛宕はニコニコとしながら高雄の様子を見守っていた。一応高雄の方が姉のはずだが、たまにどちらが姉か分からなくなる。

「ほらほら高雄、先生の方を見て」

「い、いいわよ。愛宕だけ撮ってもらえばいいじゃない」

「……まどろっこしいなあ。あきつ丸、長月」

「ラジャー」

「ラジャーであります」

二人はさつと高雄の両脇を固めた。更に後ろから愛宕に抱き着かれて、高雄は完全に身動きが取れなくなってしまう。

「あ、ちよつと！ やめなさい、離れなさいってば……！」

「おーい、高雄ー」

「な、なんですか！」

高雄が真つ赤な顔をこちらに向けた瞬間、シャッターを切った。

写真を撮られてポカーンとした顔をしているところも、すかさずもう片方のカメラで撮る。

「見せて見せて」

愛宕がせがむのでデジカメを渡してやる。

「わあ、高雄可愛い」

「やめて！ 言わないで！」

「ちなみに、この写真は消さなくてもいいかな」

「消してください！」

高雄はブンブンと頭を振る。

しかし写真に入っている他の三人は「消さないでおこう」と言ってきた。

「多数決なら仕方ない。取っておこう」

「う、うう……」

高雄が膝をついてしまった。

さすがにちよつと気の毒に思えてきた。自分も少し悪ノリし過ぎたかもしれない。

「……ほ、本当に嫌なら消すけど」

「別にいいです。ただ青葉への譲渡は勘弁してください」

「分かった分かった」

そんなことを言い合っている間に、まるゆと呂500が起きてきた。

「あれ、あきつ丸さんたち……どうしたんですか？」

「道代先生、カメラ持ってらるですって！」

カメラが珍しいのか呂500が食いついてきた。まるゆも興味深そうにこちらを眺めてきている。

「長月、ろーちゃんたちに見せてもいいかな？」

「ああ、いいぞ」

長月からデジカメを受け取った呂500は沢山ついているボタンを物珍しそうに見ていた。

考えてみればこの泊地ではカメラを扱う者はほとんどいなかった。珍しがるのも無理はない。

「私たちは今泊地のあちこちを撮影して回ってるのよ。どう、二人も来る？」

「いいんですか？」

「行ってみたい、ですって！」

新たな隊員を加えて、泊地撮影隊が行く。

平々凡々な日常の写真を見て、いつか懐かしむ日が来るのだろうか。

ふと、そんなことを思った。

## 艦としてのこれまでと（長波・高波）

教室に来てだらだらと過ごす。

今日は授業日ではないので、特に教壇に立つわけでもなく、適当に空いた席で技術誌を読んでいるだけだ。仕事部屋は最近サーバーがすぐに熱くなるので読書できる環境ではない。その点ここはオープンで風通しもいい。

「板部先生、暇そうだな」

教室の入り口からひよつこりと長波が顔を出してきた。夕雲型の一員で、妙に男気溢れる子だ。

「まあな、暇してるぞ」

「だったらちよつと来てくれよ。力を貸して欲しいんだ」

「別に構わんが」

雑誌を閉じて腰を上げる。

「珍しいな、長波でも手に余る事態か？」

「ちよつとな。どうしたらいいか分からないんだよ」

長波に引っ張られていくと、浜辺の岩に腰を下ろしてぼーっと彼方を見ている高波がいた。

「……どうかしたのか？」

「それが分からないんだよ。あたしが何言っても生返事っていうか」「ほう」

長波と高波は同じ夕雲型の中でも取り分け仲の良い印象があった。特に高波の長波への懐きようは凄い。

そんな高波が長波にほとんど反応しないというのは奇妙な話だった。

高波の隣に腰を下ろし、一緒になって空を見上げてみる。今日は快晴で陽射しが強い。インドア派には少々暑かった。

「暑くないか」

「……大丈夫かもです」

「かもつてことは、大丈夫じゃないかもしれないのか」「かもです」



「……」

「……」

まいった。会話が流されている。

「高波、なんか悩みでもあるのか？ おじさんで良ければ相談に乗るが」

そういうと、高波はゆっくりとこちらを見た。

「板部先生は……何歳ですか？」

「俺か。俺は三十三歳だな」

「何歳くらいのとときに、将来のことって考えましたか」

将来のことというのは進路とかそういう話だろうか。

改めて自分の人生を振り返ると、そのときそのときで適当にやってきた記憶しかない。きちんと将来のことを考えたことなど一度もなかったのではあるまいか。

「う、うーん……。十四とか十五の頃かな。あの頃はIT業界が盛り上がってるように見えたから、俺もいつか社長になってやる、とか思ってたかもしれない」

記憶を必死に掘り起こしながら答えを無理矢理捻り出した。さすがに一切考えてなかったとは言えない。

高波はコクコクと頷いて「十四とか、ですか」と呟いた。

「……もしかして将来のことで悩んでるのか？」

反対側に腰を下ろした長波が尋ねると、高波は遠慮がちに首肯した。

「少し前の遠征で、他の駆逐艦の子たちと話をしたんです。皆、この戦いが終わったらどうしたいかしっかり考えて……でも、わたしは何も考えてなくて、高波は何かやりたいことあるのって聞かれても、上手く答えられなかった、です」

それで将来のことを考えていたというわけか。

なんというか、真面目で誠実な高波らしい。

「そんなに焦らなくてもいいと思うぜ。だってあたしたちまだ数年しか生きてないし。艦艇だった頃含めても十に満たないだろ。将来のことを考えるのも大事だけど、考えられるようにするためにはまだまだ

だ学ばないといけないことが多いんじゃないか？」

長波の言葉に、少しはつとさせられた。

艦娘としての姿をしているから普段は意識していないが——この子たちが生きてきた期間というのはとても短い。

人間とまったく同じように考えるのは少し違うかもしれないが、そんな彼女たちが人間を守るために命を賭して戦っているというのが痛ましく思えてしまった。そして同時に、戦いが終わった後、この子たちがどうなるのかということに不安を抱いてしまう。

「……まあ、そうだな。長波の言う通りだと思う」

内心の動揺を悟られないよう意識しながら話す。

「高波なんて三歳にもなっていないんだろ。だったら将来のことなんか気にするよりも、今は目についたものに何でも飛び込んでいくくらいでいいのさ。将来のことを考える時間はまだまだある」

「でも、何も決められないままこの戦いが終わるかもです。戦いが終わるのは嬉しいけど……そのとき、わたしはどうなってるんだろうって思うと」

「子どもがそんなこと不安に思うもんじゃない。皆が将来を決めるための時間は、俺たち大人が作ってやる」

「へえ」

長波がニヤリと笑った。

「な、なんだよ」

「いやー、板部先生が珍しくちよつと格好つけてんなーと思って」

「うっさい」

しつしと手を振る。実際格好つけたので気恥ずかしかった。

「ま、先生もこう言ってるし、泊地の他の人たちもそういう風に考えてくれている人は多いと思うし、あんま気にするなよ。なーに、決められなかったらこの長波様が養ってやるって」

なぜだろう。

頼もしきで長波に完敗したような気がした。

「……二人とも、ありがとうございます。そうですね。悩むより今はいろいろやってみる、です」

高波は小さな拳を握り締めて気合を入れる。  
先ほどまでのぼんやりとした様子は、もう見受けられなかった。

それから数日後。

サーバーの熱気が漂う仕事部屋に、長波がやって来た。

「この前の御礼言ってなかったと思ってるよ」

そう言って長波は扇子を持ってきた。なかなか洒落た意匠だ。

「遠征先で面白そうだから買ってきたんだよ。先生いつも部屋暑いつて言ってたろ。……うん、これは実際暑いな」

ぐへえ、と言った顔つきの長波を、もらった扇子で扇いでやる。

「そういえば高波にはああ言ってたが、長波には何か将来の目標とか夢ってあるのか？」

「ん？ ああ、あんまり具体的なビジョンはないけど、なってみたい職業はあるぞ」

「へえ、どんなんだ？」

「教師！」

びしつとこちらを指差して高らかに宣言する。

確かに長波は面倒見も良さそうだし、子どもたちからは好かれそうな教師になりそうだな。

「言っておくけど、俺みたいにはなるなよ。俺は専門じゃないしあんまり参考にならないぞ」

「分かってるよ、板部先生は反面教師にするから」

「うまいこと言ってたつもりか」

お後が良いのかどうなのか、判断に苦しむところだった。

「……早くそんな日が来るといいな」

「来るさ。時間は良くも悪くも止まってないんだぜ？」

「時間はな。戦いはいつ終わるか分からんだろう」

「そこはあたしたちの頑張りどころだな」

「じゃーな、と手を振って去っていく」

高波も長波も、将来の夢をきちんと考えている時点で十四の頃の自分よりずつと立派だ。

「夢。夢ねえ」

将来の夢——というには年を取ってしまった気もするが、今はあの子たちの将来を見守りたい、というのが夢かもしれない。

そういう夢も悪くはない。そんな気がした。

戦いの合間に（祥鳳・瑞鳳・多摩・木曾・綾波・ウオー  
スパイト・伊勢）

「寒いわね……」

そうぼやいたのは祥鳳だった。普段と異なりコート姿で身を固めている。

彼女がそんな恰好をしているのには理由があった。ここは彼女にとって住み慣れたソロモン諸島ではなく、北海道の北端にある前線基地なのである。

冬ではないので想像を絶する程の寒さというわけではないのだが、南方から来た身としてはどうしても寒く感じてしまう。

「私たちは艦艇時代含めて南方が主な活動場所だったもんね」

白い息を吐きながら同意したのは祥鳳の妹・瑞鳳だった。彼女も普段より厚着である。

「北方にある拠点の子たちと話すと『これくらいでだらしない』って言われるのよねえ」

「南方に來ても同じこと言えるのかしらね……」

二人が今いるのは野営用のテントだ。前線基地と言っても緊急事態に対応すべく急造したもので、ほとんどの艦娘はテントで寝泊まりしている。

姉妹揃って寒さに耐えていると、そこにひよっこりと多摩が顔を出した。

「その様子だと大分寒さに参ってるようにや」

「寒いよう」

「昼間とはかく夜間は結構冷えるもの」

「同じようなことを他のテントで既に何回も聞いてるにや」

そういう多摩は割と平気そうだった。彼女は艦艇時代方作戦に参加していたこともあるし、そういう縁もあって艦娘になってからも頻繁に北方へ派遣されていた。寒さには慣れているのかもしれない。

「寒いときはこいつをやると良いにや」

多摩は持っていた徳利を掲げてみせた。

「もしかしてその中身は熱燗?」

「(明察にや)」

日本酒好きな祥鳳と瑞鳳はゴクリと喉を鳴らした。同じ軽空母の隼鷹や千歳の飲みつぷりのせいであまり目立たないが、この二人もお酒はそれなりに飲む。

三人それぞれ器に注いでグイと一杯飲み干す。この寒さの中で身に染み入る暖かさだ。

「ま、身体冷やさない程度に抑えておくのが大事にや。まだこの作戦が完全に終わったわけじゃにやいし、酔っ払ったままだと大変なことになるにや」

「さすがにそんな艦娘は——」

否定しかけて瑞鳳は言葉を止めた。何人か思い当たる節がある。

「でも、お酒の飲み過ぎはともかくこういう場には何か美味しいお肉が欲しくなるわね」

「あー、それは分かる。なんというかお肉たつぷりの鍋を食べたくなるね」

「さすがに鍋は持参してないにや……」

多摩が肩をすくめてみせた。

そこにコートを羽織った木曾が顔を出した。

「なんだ、多摩姉ここにいたのか」

「どうかしたにや?」

「大湊の提督から鍋の材料もらったんだよ。せっかくだからウチから出向してきてるメンバー集めて鍋パーティでもやろうぜ」

噂をすればなんとやら。

木曾の提案を断る理由はどこにもなかった。

幸い天気は問題なかったもので、S泊地のメンバーは互いのテントの中心部で鍋をすることにした。

今回北方に派遣されてきた人数は五十名を超える。鍋パーティもそれなりの規模になっていた。

「あ、祥鳳さん。瑞鳳さん。お疲れ様です」

丁寧な挨拶をしてきたのは綾波型のネームシップである綾波だ。今日の日中、作戦行動をともしたばかりである。

綾波の周囲には他にも伊勢、ウォースパイトや最上・三隈といった今日の作戦の参加メンバーがほとんど揃っている。

「叢雲ちゃんや利根さんたちもさつきまでいたんですよ。入れ違いになっちゃいましたね」

皆鍋の誘惑には勝てなかったということらしい。

「いつもと違うメンバーでお鍋を囲むというのも悪くありませんね」

そう言いながら美味しそうに肉を頬張っているのはウォースパイトだった。ただもつきゆもつきゆ食べているだけのはずなのだが、よく分からない気品を感じる。作戦行動中は凛々しく頼りになるのだが、こういう姿を見ていると戦艦の艦娘であることを忘れてしまいうだ。

「お、祥鳳たちも来たんだね。どう、もうちよつと飲まない？」

伊勢の顔はかなり赤らんでいた。既にそこそこ飲んでいるらしい。

その横では阿武隈がぐったりと横になっていた。伊勢にしこたま飲まされたようである。

「もう、駄目ですよ伊勢さん。ほら、少し酔い覚ましにお野菜どうぞ」

綾波が白菜山盛りの器を伊勢に差し出す。

「いやあ、食も酒も進む。こういうのもいいよね」

「同感ね。私としてはウイスキーがあればより嬉しかったけれど

……」

「そこまで贅沢言うな。大湊の提督の財布が大破する」

木曾が窘めるように言う。

「けど、ウチの泊地じゃこうやって鍋囲む機会はあまりないから寒いのも悪くないって気はするわね」

早速取り分けてもらった肉を食べながら祥鳳が言った。

S泊地は南方にあり、一年を通してあまり気候が変化しない。基本的に高温多湿なのであまり鍋を食べることはなかった。

「さつきまで寒いのが辛いつて言ってたのに。結構ちやつかりしてるん

だから」

そう言いつつ瑞鳳も綾波からもらった肉や野菜を食べる。たつぷりと沁み込んだ鍋の味。先ほどの熱燗と相まって身体がポカポカと暖まる。

「ん、最高。働いた後のご馳走は格別ね」

「ある意味艦娘になって一番良かったことかもしれないわね。艦艇時代じゃ味わえなかったし」

「そう言っていただけだと嬉しいですね」

「あら、大湊の提督さん」

ひよっこりと現れた大湊の提督に、慌てて祥鳳たちは敬礼した。既に酔いが回っている伊勢と潰れている阿武隈は例外である。

「楽になさってください。今回私は皆さんに助けていただいている身ですから」

大湊の提督は物腰柔らかな壮年の男性だった。妻子持ちで、ときどき娘さんがお弁当を警備府に持ってくる様が微笑ましい、というのが大湊の艦娘たちの評である。

現在大湊以北に大規模な深海棲艦の群れが集まっており、事態を重く見た大湊提督の要請でS泊地の面々も助っ人として呼ばれたのだ。現在も作戦は継続中で、単冠湾にある泊地の面々とは合流できたものの、幌筵とは断片的にしか連絡が取れていないという状況である。

「私は直接深海棲艦と戦う術を持ちません。ただ、皆さんのコンディションをベストな状態に持っていく努力はできます。この食事もその一環ですので、遠慮なさらず」

「そういうことなら」

祥鳳は手にした徳利から熱燗を注いで、大湊の提督に杯を渡した。

「お互い、明日からも頑張っていきましょう」

「そうですね。よろしくお願ひします」

共に戦う仲間として短い乾杯を済ませる。

戦いがどう転ぶかは分からない。ただ、この場にいる者たちに不安そうな表情を浮かべる者はいなかった。



帰還途中、東京にて（鬼怒・神威・那智・足柄・磯風）

空を見上げても見界に入り込むビル群。

道路のあちこちを駆けていく車。

迷路のような駅、そして路線図。

「これが……東京……！」

それは誰が発した言葉だろう。

誰が言ってもおかしくない。それだけS泊地の面々にとって東京という都市は遠い存在だった。

北方での大規模作戦が無事完了し拠点に戻る途中、日頃の慰労も兼ねてS泊地の面々は東京に数日間滞在する許可をもらった。

ただし迷子になってもまずいので、東京に来たことのあるメンバーを班長にして、班単位で行動するよう厳命されている。

「なんか漫画で見たことのある修学旅行みたいだね」

にこやかに笑いながら歩く鬼怒の後ろには、北方作戦で合流したばかりの神威がいた。

「着任早々こんな感じで良いんでしょうか」

「いいんじゃない？ 滅多にこつち来れる機会なんかないし、今はエンジンジョイすることだけ考えようよ」

班長に任命された鬼怒も、東京に来たのはほんの数回程度である。正直迷子にならないか些か不安があった。

ちなみに鬼怒班の面々は既に渋谷・新宿を回って衣類を大量に買い込んでいた。作戦行動中の制服や普段泊地で着ているものとはまた違うファッションで身を包んでいる。それは神威も例外ではない。普段彼女はアイヌの民族衣装らしきものを身にまとっているが、今は周囲の女子と同じような恰好になっている。

「それに泊地に残ってる皆へのお土産も買い込めたしね。いやー、神威のバッグがあつて助かったよ」

そういつて鬼怒は神威からもらったバッグを掲げてみせた。

「これはサラニプと言って、木の皮を使って作るんですよ。良ければ今度作り方お教えしましょうか」

「おつ、いいねえ。最近新しい工芸品何かなくなってると思ってたんだ」  
「でも鬼怒。これどう見ても編み物の類だけど……こういうのあんた  
苦手じゃなかった？」

横合いから鋭い指摘をしたのは足柄だった。

「に、苦手なだけで嫌いじゃないですよー！　そういう足柄さんはどう  
なのさー！」

「残念だが鬼怒よ、こいつは意外とまめな作業が得意だ」

「知ってるよう那智さん！　負け惜しみだつてのは分かっているんだー  
！」

うわーん、と大袈裟に泣くジエスチャーをする鬼怒。

その様子を見てオロオロとする神威の肩を、磯風がポンと叩いた。

「気にする必要はない。いつものことだ」

「そこっ、その説明じゃ鬼怒が情緒不安定みたいに思われるよっ！」  
「……？」

違うのか、と言わんばかりに首を傾げる磯風に、鬼怒がスリーパー  
ホールドを仕掛ける。

なんとも賑々しい光景だった。

「しかし、神威はなんというかそういう格好も様になってるな」

喫茶店に腰を落ち着けて注文を終えた那智が、改めて神威の姿を見  
ながら言った。

神威はアメリカンカジユアルなファッションで身を包んでいた。

アイヌ民族の衣装とは印象が全然違うのだが、不思議と違和感がな  
い。

「私、一応アメリカ出身なので……その影響かもしれませんね」

「あら、そうなんだ。それじゃ金剛とかと同じ帰国子女なのね」

「意外だね。金剛さんと違って喋り方普通だし」

「イギリスだからなのか金剛だからなのか……」

鬼怒と磯風が「ううむ」と揃って唸る。

「金剛のキャラについては深く考えるだけ無駄だ。しかしアメリカ出  
身ということは、実は米よりもパン派だったりするのか」

「どちらも大好きですよ。特に好き嫌いはありません」

「うむ、いいことだ。泊地はいろいろと自給自足しなければならぬからな。好き嫌いが多くと苦労する。好きなものだけ買って食べるということとは出来ん」

「自給自足なら得意です。川での漁とか狩りならお任せください！」

「あ、あはは。内陸部は島の人たちの生活圏だから、私たちはあんまり立ち入らないかなー」

「そうですか……」

あからさまにがっかりとした様子を見せる神威。大人しそうに見えるが、意外とハンタータイプなのかもしれない。

「ただ、泊地は娯楽が少ないから皆趣味に飢えている。神威のアイヌに関する知識は皆に喜ばれるだろうさ」

那智の励ましを受けながらも、神威はコーヒーやケーキを食べ続ける。

「……結構食べるんだね、神威」

「アメリカ出身だからだろうか」

「アイオワやサラに偏見と怒られるぞ」

鬼怒と那智の言葉に、思わずツツコミを入れる那智なのだった。

「……あれ？」

スカイツリーや浅草を見て回り、後は集合場所に戻るだけ——というタイミングで、鬼怒が異変に気付いた。

「磯風ちゃんがない」

鬼怒の表情が一気に真っ青になる。

周囲は相変わらずの人ばかりだ。この中から磯風を探し出すのは至難の業のように思われた。

「ど、どうしよう。こういうときは……ええと、迷子センターだっけ。交番だっけ」

「落ち着け鬼怒。携帯で連絡取ればいいだろう」

「はっ、そうだった！」

那智に指摘されて携帯を鳴らそうとする鬼怒。しかし携帯は何度

鳴らしても繋がらなかった。どうも向こうの携帯が電波の届かないところにあるか電源が入っていないという状況らしい。

「どどど、どうしよう〜！」

「おお落ち着きなちやい鬼怒ー！」

「どつちも落ち着け」

慌てふためく鬼怒と足柄を宥めながら、足柄も険しい表情を浮かべていた。

磯風は見た目こそ子どもだが艦娘だ。何かあっても大概のことはどうにかできるだろう。

それでも心配なものは心配だった。

「探しにいきましょう」

神威の言葉に全員が頷く。

ミイラ取りがミイラになっても問題なので、那智と足柄、鬼怒と神威に分かれて探し出す。

と言っても、全員土地勘はほとんどないので今まで来た道の近辺を探し回るくらいしかできなかった。

最初は不安になっていた鬼怒だったが、神威が思いの外落ち着いていたからか、少しずつ冷静になってきた。

「もしかして神威って、搜索とかのエキスパートだったりする？」

「いえ……経験はありますが、前は上手く見つけることができませんでした」

神威の表情が曇る。本当は彼女も不安に思っているのかもしれない。

「だからこそ、今度こそ諦めません。絶対見つけます」

「……うん。そうだね。絶対見つけよう！」

磯風はあつさりと見つかった。

なぜか人力車に乗って浅草の町を走り回っていたのである。こちらが探し出すまでもなく、向こうが見つけて声をかけてきたのだ。

「ははは。風を受けて町並みを駆け回るといいうのもなかなか爽快だったぞ」

「へえへえそうかいそうかい」

いつもと変わらぬ調子の磯風に、思わず鬼怒は冗談とも言えない冗談を返してしまった。

なお、携帯は電源が切れていたらしい。

「あ、あはは。見つかって良かったじゃないですか」

神威の笑みも若干引きつっている。

「……そういえば」

と、そこで神威の表情が再び硬くなる。

「那智さんたちとの待ち合わせ場所って、決めてましたっけ……」

「あっ」

慌てて携帯を取り出す。しかし無情にも画面は真っ暗なままだった。どうやら鬼怒の携帯も電源切れらしい。神威に至っては着任間もないということもあつて携帯自体持っていない。

「……」

「Oh, No!」

都会の真っ只中で、鬼怒の絶叫が響き渡った。

## 静かな泊地の朝（山風・白露・五月雨）

日が昇り始める。

この泊地の者たちが本格的な活動を開始する時間帯だ。

薄暗い中、小さい影がひよこひよここと歩いていく。あれは妖精たちだろう。

「あ、志摩だ」

連中はこちらに気づくとわしやわしやと頭や顎を撫でてくる。鬱陶しいと意思表示してみるが、一向に通じない。

仕方ないのでされるがままになる。私は寛容なのだ。悪意なき戯れであれば付き合ってやることにしている。

一通り撫で回して満足したのか、妖精たちはそれぞれの職場に散っていった。

次に顔を出したのは間宮と伊良湖の二人だ。料理の仕込み等もあるのだろう。この二人はいつも朝が早い。

こちらに気づくと、伊良湖は「ちよつと待つてね」と言つて奥に引込んだ。

待つことしばし。やがて伊良湖が良い匂いのするものを持ってきた。私の朝食である。

うむ、今日も美味しい。大儀である。

「いっぱい食べますね。良かったあ」

こちらが満足そうな表情を浮かべると伊良湖も嬉しそうに笑った。他者の喜びを己のことのように喜ぶとは、天晴れなことだ。

頭を下げてその場を後にする。腹が満たされて若干眠くなってきたが、ここで寝ては墮落してしまう。食後は泊地一周の散歩をしなければならぬ。それが私の流儀だからだ。

優雅な足取りで朝の散歩を楽しんでいると、前方のベンチに座っている人影が見えた。

あれは——確か、山風とかいう娘だ。

一人で退屈そうにしている。そういう者を見たら放っておくなど

教わった。

ベンチに飛び乗り、山風に向かって挨拶をする。山風はびくつとしたが、こちらに気づくと大きく息を吐いた。

「あ、志摩だ……」

私を見つけた山風はじつとこちらを見つめてきた。

こちらにも負けじと見つめ返す。私は博識なので知っている。これは睨めつこというやつだ。

「はあ」

やがて山風はため息をついて目を逸らした。どうやら睨めつことをしていたというわけではないらしい。

どうかしたのか、と聞きたいが山風とこちらでは言語が異なる。仕方ないので山風の背中に飛び乗り、頭までよじ登ってみた。

「お、重いよ志摩」

失礼な奴だ。私の肉体は駄肉を含まぬ。そんな重いはずはない。……重くないはずだ。重くないよね？

「なんで鳴き声が段々自信なさげになつてくの……」

いや、私とて常に自信満々気合満々というわけではないのだ。

ときには自信なくすこともある。だつて生き物だもの。

頭に乗られるのは嫌なのか、山風は私の身体を掴んで膝の上に移した。

「……最近、泊地静かだね」

沈黙に耐えかねたのか、山風がほつりと言った。

確かに最近この泊地は静かである。多くのメンバーが出かけてしまっているからだ。何でも北の方に出かけているらしい。北は寒いらしいがどういふところなのだろう。私としても興味深いところではある。

山風は寂しがり屋だ。そろそろこの静かさが辛くなってきたのかもしれない。

仕方ない。ここは私が一肌脱いでやろう。

山風の膝から飛び降りて、彼女の前であおきのかくし芸——私が最高に格好いいと思っているポーズを試してみせた。

抱腹絶倒間違いなし。子どもから大人まで大絶賛間違いなしの芸である。

「……なに、その変なポーズ」  
な、なんだとう!?

まったく受けていない。なんだこの娘、笑いのセンスがおかしいのではないか。

私がこんなポーズをするなどおかしいではないか。笑うところだぞここは。

「そんな訴えるように鳴かれても……」

リアクションは相変わらず薄いままである。なんだか悲しくなってきたのでポーズを解いた。

もういい。私が山風にしてやれることは何もなさそうだ。ならさっさと消えるでしょう。

「あ、待って……」

立ち去ろうとしたところで、またしても山風に身体を掴まれた。また膝の上に乗せられる。

「あつたかいから……もうちよつとこうしてたい」

なんだ、特に何もしなくても良かったのか。

まったく他者の考えることはよく分からん。

ただまあ私はジェントルマンであるからして、頼まれれば付き合つてやるのが義務である。

決して散歩でちよつと疲れていたとか、そろそろ休みたくなっていたとか、そういう理由ではないのである。

朝の散歩は気持ちがいい。そう言うと隣で歩く白露姉さんは「そうだね」と同意してくれた。

姉妹が勢揃いしている白露型だけど、この早朝の散歩に付き合ってくれるのは白露姉さんや海風くらいだった。他の皆はどちらかという夜型なので、この時間帯はまだ眠っていることが多い。

この時間帯の泊地はいつもと少し違う顔を見せてくれる。剣の素振りをする天龍さんと鹿島さん。



ランニングをしている長良さん。

花壇の花に水をあげている朝雲ちゃんと山雲ちゃん。

そして、ベンチで眠っている山風。

「つて、なんでここで寝てるの山風……」

「多分早くに起きちゃって、海風起こすのも悪いし、部屋でじつとしてるのも暇だして感じが出てきたんじゃない？」

白露姉さんの分析はおそらく当たっている。

山風は一見すると引っ込み思案で大人しそうに見えるけど、実際は割と気分屋でアクティブなところもある。

「あ、志摩さん」

山風の膝の上で、しゅつとした体躯の猫が横になっていた。

志摩さんは若干助けを求めるような感じの声で鳴いていた。下手に動くと山風を起こしてしまうので、動くに動けなくなった——という状況のようだ。

「あはは、毛布がわりにされちゃったね」

笑っている場合か、と言いたげな眼差しで志摩さんが白露姉さんを見ていた。

「ごめんね志摩さん、もうちょつとだけ我慢して……」

頭を下げてお願いすると、志摩さんは「仕方ない」という感じの溜息をついてじつと動かなくなった。

なんだかときどき志摩さんが人語を理解しているのではないか、と思ってしまう。それくらい志摩さんは聞き分けが良かった。

そのとき、白露姉さんの携帯が鳴った。

「夕立からだ」

「どうかしたって?」

「東京お土産何がいいかってさ。もうすぐ帰ってくるみたいだよ」

「そうなんだ。——また賑やかになりそうだね」

ふん、と志摩さんが鼻を鳴らした。

賑やかになるのを嫌がっているような、そうでないような——どちらとも取れそうな表情を浮かべているように見えた。

グラーフと豆の木（グラーフ・ビスマルク・レーベ・マックス）

「うむ……。十分に実がなっているな。改めて思うが、大したものだ」  
泊地の一角にある艦隊寮。

その側面にある農園で、グラーフ・ツェッペリンが感嘆の声をあげた。

彼女が見上げているのはコーヒーノキだ。三年前ビスマルクたちがこの泊地に着任した頃からコツコツと育ててきたのである。

コーヒーノキはコーヒーチェリーと呼ばれる果実をつける。その果実の中に含まれているのがコーヒー豆だ。

「ここまで毎日手入れ大変だったね」

「そうね。でもこうして無事実って良かったわ」

レーベとマックスも嬉しそうだった。コーヒー豆の栽培をしようと思ひ立ち、一番面倒を見てきたのがこの二人である。

「それじゃ収穫始めましょうか」

ビスマルクの号令でドイツ艦娘たちが農園に散っていく。各自の担当エリアは決まっているので、それぞれの動きはスムーズだ。

コーヒーノキは寒い地域だと育たない。日本でも育てられる地域は限られているという。そういう意味で、南方の泊地に着任できたのは運が良かったと言えるかもしれない。

「おや、収穫時期ですか」

果実を手作業で取っているグラーフに、泊地の娯楽室のマスターが声をかけた。

髭がトレードマークの温和な男で、娯楽室では様々な飲み物を提供している。料理も嗜んでいるようで、マスターの出すもの目当てで娯楽室に行く者もそれなりにいる。グラーフもその一人だった。

「ちようどいいところに来た、マスター。もし手が空いているなら少し手伝ってくれないか。今日はユーとオイゲンが不在でな。手伝ってくれるとありがたい」

「よろしいですよ。その代わり取れたコーヒー豆でコーヒーを淹れさせていただけますかな。どういう出来になるのか興味がありますので」

「勿論。マスターに淹れてもらえるならこちらとしても嬉しい」

グラフやビスマルクたちも自分でコーヒーを淹れることはあるが、本職のマスターが淹れたものと比べるとやはり味が違うような感じがする。

ビスマルクが淹れたコーヒーには苦い顔をしていた金剛も、マスターのコーヒーについては美味しいと言っていた。

「ではちやっちゃんとやってしましましょう」

マスターはウェイター服のまま袖をまくって実を掴み始める。動きに迷いが全くなかった。

「もしかしてマスターは以前コーヒー農園でもやっていたのか？」

「育てるのはやったことないですね。一つの場所に長く留まることがあまりなかったもので。ただ収穫のお手伝いは何度かしたことがありますよ」

穏やかな物腰だからか普段意識されることはないが、このマスターはいろいろと経歴不詳なところがある。

新たに発覚したマスターの経歴に、グラフは「ううむ」と唸るのだった。

一通り収穫を終えた一行は、グラフたちが所属する艦隊の寮へと戻ってきていた。

台所ではマスターが慣れた手つきでコーヒーを淹れている。その様子をビスマルクたちが感心しながら見ていた。

コーヒー特有の香りが漂い始める。鼻腔をくすぐる良い匂いだっ

た。

「マスターから見てこの豆はどうかしら」

マックスが少し不安そうに尋ねる。育てたのは初めてなのでどう

いう出来かは気になるところだった。

マスターはしばし無言で香りを確かめると、ニッコリと笑みを浮か

べた。

「私もその道の専門家ではないので偉そうなことは言えませんが……とても良い香りだと思います。私は好きですよ」

「おおー、やったねマックス！」

「そうね、レーベ」

レーベとマックスは互いの手を取って嬉しそうにピョンピョンと跳ねていた。レーベはともかくマックスのこういう姿は珍しい。

ビスマルクやグラーフは微笑ましげにその様子を眺めていた。

「結構な量が取れましたし、せっかくだからこの豆を使ってお菓子でも作ってみましょうか」

「お菓子？ コーヒー豆でお菓子を作るの？」

ビスマルクの問いにマスターは「ええ」と頷いた。

「挽いた豆をちよつと加えるといつもと違う風味に仕上がるのですよ。クッキー、ゼリー、ケーキ、いろいろなものに合います」

「ふむ」

グラーフが視線を向けると、ビスマルクは黙って頷いた。

「……レーベとマックスは何が食べたい？」

「僕はケーキが食べたいな」

「私も」

「ならそれで決まりね。マスター、最高の出来のものを頼むわ！」

「ビスマルクさん、なかなか難しい注文を仰いますね」

そう言いながらもマスターは台所からボウルや薄力粉、ベーキングパウダー等を取り出す。どうやらお菓子作りにも長じているらしい。

「たまに思うが、この泊地のスタッフの選考基準はお菓子作りの腕前にあるのではないか……？」

「そういえば皆なんだかんだである程度作れてるわよね……。なんで三人とも私を見るのかしら」

グラーフ、レーベ、マックスの視線を受けてビスマルクがたじろいだ。

ちなみにこの面子の中で唯一料理が駄目なのがビスマルクである。この場にいないオイゲンやユーこと呂500もある程度は嗜んでい

るが、ビスマルクはその点さっぱりだった。

「べ、別にいいでしょ。比叡とかアクイラだつて駄目じゃない。私だけじゃないもの！」

普段ならオイゲンがフォローに入るところだが今はいない。ビスマルクはムキになつて頬を膨らませることしかできなかった。

「まあビスマルクが料理できないのはどちらかというところとオイゲンのせいな気もするがな」

「それは言ってる」

グラーフの意見にマックスも同意する。

ビスマルクも過去何度か料理に挑もうとしたことはあるのだが、その度にオイゲンがあれこれと世話を焼いて、結局ほとんどオイゲンがやってしまうことが多い。

「ま、まあビスマルクはその分戦闘で大活躍してるし」

「いいのよレーベ。今フォローしてもらうのは逆に辛いわ」

「そういえば新しくやって来たガングートは料理もお手の物らしいな」

「……」

ビスマルクが無言でグラーフの頬を左右に引っ張り始めた。

グラーフもそれに対抗してビスマルクの頬を引っ張り始める。大型艦二人の大人げない応酬である。

「あれは止めなくていいのでしょうか」

「いいんだよ、マスター。あの二人はあれで仲が良いんだ」

レーベがひらひらと手を振りながら言った。

そんなやり取りをしているうちに、コーヒー豆を混ぜ込んだカップケーキが出来上がった。

コーヒーよりも控えめではあるが、ケーキの甘い香りにほんのりとコーヒー豆らしき匂いも含まれている。

「少し多めに作ったので寮の皆さんにも配りたいのですがいいでしょうか？ もし評判が良ければ娯楽室のメニューに追加したいのですが」

「いいわよ。マスターのレパートリーが増えるのはこちらとしても

願ったりだわ」

「それじゃ、僕たち皆を呼んでくるよ。行こう、マックス」

レーベがマックスの手を取って寮の二階へと向かっていく。他の皆を呼びに行ったのだろう。

「では我々は皆の分のコーヒーとケーキを並べるとしようか」

「そうね。ケーキはオイゲンとユーの分も取っておいてあげましょう」

「あの二人もコーヒーノキを一生懸命育てていたからな」

二人の分のカップケーキを容器にしまうグラーフたちを、マスターは穏やかな表情で見守るのだった。

この世の理とは速さなのかもしれない（1）（長門・島風・秋津洲）

「……艦娘対抗レース？」

掲示板に貼り出されたチラシを見て、思わず足を止めた。

主催者のところを見ると当泊地の司令部になっている。つまり提督および司令部の面々公認のイベントということだ。

「板部先生、そのチラシが気になるかな？」

いつの間にか長門が横に立っていた。司令部の代表格の一人だ。

普段は凛々しい感じの顔つきなのだが、今はこのレースについて話したい様子がありありと見て取れる表情である。

「ここ最近艦装の改修が進んで速度調整が可能になっただろう。それを活かして皆でレースを試みようという話が持ち上がったな」

「ふうん、発起人は島風か？」

「いや、私だ」

道理でやたら楽しげなはずだ。

「けど、速度調整ができるからって有利不利はあるだろうし参加者集まるかねえ」

「単純な速さだけを競うというわけでもないからな。なるべく速度の有利不利が解消できるようなルールにはしてある」

チラシをよく見ると、確かに「実戦形式なので妨害行動あり」「装備の使用は自由」「他の参加者と協力行動も可」と書いてある。物騒過ぎやしないだろうか。

レースとしての勝敗は至極単純で、指定のポイントを通過しつつ最終的にゴールへ最初に突入したものが勝者という扱いらしい。コースはこのショートランド島一周とのことだ。

「長門は参加するのか」

「当然だ。今の私は島風の如し、と言ってもいいだろう！」

「言葉の意味は分らんが凄い自信だ」

楽しそうで何より。

少なくとも今回俺は巻き込まれずに済みそうなので、高みの見物と洒落込むかな。

当日、泊地の空き地に設置された中継会場にはそこそこ人が集まっていた。

リチャードを初めとする島の人もあるし、ウィリアム爺さんのような他所の島の人もいる。挙句の果てにはなぜか他所の提督までいる始末だ。暇なのだろうか。

「あ、板部先生」

頭に猫を乗せた望月がこちらを見つけて手を振って来た。隣には初雪もいる。

二人の後ろの席が空いていたのでそこにお邪魔することにした。

「やっぱり二人は参加しないのか」

「するわけないじゃん、こんな疲れそうなの」

「私もやだ……」

長門が聞いたなら泣いてしまいそうなくらい酷い評価だった。

『さアーツ、いよいよレーススタート間近ですよー!』

実況席ではマイク片手にノリノリな青葉が全身を動かしていた。こういうイベントごとになると妙に生き生きするのが何人かいる。青葉もその一人だった。

『実況は私青葉が務めさせていただきます。そして解説にはこの御方、当泊地古参の一人、何言ってもこの人ならまあいいかって感じになって後腐れが残らなさそうな人徳の持ち主！ S A Z A N A M I さんです!』

『えー、今日はですね。皆さんの頑張りを見せてもらえらることを、えー、期待しております』

相変わらず漣はキャラがよく分からない。今のは誰かのモノマネなのだろうか。

中継所の真ん中に設置された大型モニターには、スタート地点で待機する選手たちの姿が映し出されていた。



優勝候補筆頭、速いといえばこいつしかいない、最速の駆逐艦——  
島風！

二式大艇を活かして空中戦を挑むのか、戦闘以外じゃ割と有能——  
秋津洲！

タービンマシマシで最速を手に入れた負けず嫌い、日本が誇る戦艦  
——長門！

高速戦艦の名を背負い、気合十分元気の子——比叡！

その特性を生かせるのか、予想外の展開を見せて欲しい——伊19  
！

大量に搭載された魚雷を何に使う気だ、笑顔が怖いぞ——大井！

早い駆逐艦は島風だけじゃない、特型改二の意地を見せるか——吹  
雪！

軽空母になって優雅なレディっぷりに磨きがかかったか——熊野  
！

その策謀をもってレースの流れを支配するのか——鳥海！

空の覇者としての力をどう振るうのか、その馬力は伊達ではないぞ  
——翔鶴！

青葉の熱のこもった参加者紹介が続く。

思ったより参加人数は多めだった。皆意外とイベント好きなのか  
もしれない。

「二人は誰が優勝すると思う？」

「ん……特型としては吹雪に勝って欲しいけど、やっぱり島風かな  
……」

「あたしは長門さんだと思うねえ。あの顔、負けることを微塵も考え  
てない顔だよな」

「長門はいつもそんな感じじゃないか」

二人とそんなことを話しているうちに、レースの開始時間になっ  
た。

レース開始のときに流れるような壮大な曲が聞こえてくる。

『それでは——スタートです！』

青葉の掛け声と共に、スタート地点に並んだ艦娘たちが一齐に主機を稼働させた。

スタート直後に集団から飛び出た影は二つ。

島風と秋津洲だった。

「ふっふー、おっそーいー！ スロウリィー！」

島風は元々艦娘随一の速力を誇っている上に、タービンを積んで更に速力を増しているようだった。いつも以上に速い。艦隊行動を取る際はこれだけ速いと突出してしまい逆に問題になるが、レースならそんなことを気にする必要はなかった。

「二式大艇ちゃんの速さは泊地一イイ、かもっ！」

一方、秋津洲は二式大艇にしがみついて空を駆けるという荒業に出ていた。これは二式大艇の大きさを生かした奇策である。

『島風さん、秋津洲さんが他の参加者を大きく引き離れたアー！』

『秋津洲さんはコレもう母艦ってなんだろうなって感じですね』

とは言え秋津洲の作戦は功を奏している。ただ、その快進撃をそのまま許すほど優しい連中はいなかった。

「させません……！」

「落ちてくださいっ！」

「か、かもっ!？」

吹雪の対空射撃と翔鶴の艦戦が秋津洲を乗せた二式大艇を襲う。蜂の巣とはこのことか、哀れ二式大艇は秋津洲を乗せたまま高度を下げて明後日の方向へと落ちていく。

「こ、これで勝ったと思うなかもー！ 絶対修理してまた追いつくんだからー！」

断末魔の叫びを響かせながら秋津洲がモニターから姿を消していく。

更に、そんなことをしている間に後続のメンバーたちも少しずつ速度を上げてきた。

「待っている島風、重量級はスタートダッシュこそ劣るが最高速度はなかなかのものだぞ……！」

「それゲームの話じゃないの!?!」  
徐々に追いつきつつある長門に若干怯えながら島風が叫ぶ。  
まだまだレースは始まったばかりだった。

この世の理とは速さなのかもしれない（2）（鳥海・翔鶴・比叡・大井・熊野）

始まって間もなく秋津洲が叩き落とされるというデンジャラスな展開を見せ始めた艦娘対抗レース。

ショートランド一周というそこそこ長めのコースであることを意識してか、秋津洲脱後は各メンバーともに鳴りを潜める形になった。途中補給ポイントは何か所か設けられているが、何も考えずにバカスカやり合っていたらあつという間に身動きが取れなくなる。

今のところ島風が先頭をキープしているが、後続集団との距離はそこまで離れていない。何かあれば追い抜かれる可能性は十分にあった。

『さて、ここで第一補給ポイントです。担当の神威さんたちが待機中です』

青葉の紹介を受けて補給担当の面々がモニターに手を振った。ここだけ見ると何とも微笑ましい。

『おおっと、最初の補給ポイント前で比叡さんが前に出ました！ 長門さん、翔鶴さんも速度を上げています！』

『おそらく大型艦故に補給で時間がかかるからでしょうな』  
次々と補給ポイントに入り洋上補給に取り掛かる。

『おっと、これは……!?!』

補給ポイントからいち早く飛び出したのは鳥海だった。

『鳥海さん、どうやら補給よりも先行することを優先したようです！』

補給は必要最低限に留めた様子！』

『他の参加者たちの表情からは焦りと困惑が見えますねえ。補給を続けるか自分も出るべきか、揺さぶられているようです』

『これも鳥海さんの策なのかー!?!』

漣の指摘通り、他の参加者の脳裏には迷いが生じたようだった。動じていないのは島風と長門くらいか。二人は最後まで補給すると固く決めているらしい。

単独トップに躍り出た鳥海はというと、意外にもこれまでのペースを維持する安定した走りを見せた。ここで一気に他の参加者を引き離すこともできそうなものだが、そういうつもりはないらしい。

「無理にペースを上げずとも問題ありません。まだ先は長いですから」

鳥海は十分なプランを練って参加しているようだった。プランへの自信が安定した走りに繋がっているのだろう。

それに引きずられて早々に補給を終える者、最後まで補給を続ける者に分かれたため、第一補給ポイント後の順位は大きく動くことになった。

先頭は鳥海。それに少し遅れて吹雪、熊野。先ほどまで先頭にいた島風は順位を大きく落とすことになった。

『さあ、次の目的地は島の北西部にある第二補給ポイント！ しかし実は、そこに至るまでの間に障害物エリアがあったりします！』

青葉の宣言に参加者たちがぎよつとした表情を浮かべた。どうやら知らされていなかったらしい。

『あ、苦情は青葉じゃなくて司令部の皆さんにお願いしますね。海上移動はサプライズだらけ、安全なコースをただ走って得る一位なんて意味はない——そうやって障害物エリアを設けたのは司令部の方々なのでっ！』

『DSですねー。お富士さん発案なのか、叢雲ちゃん辺りの発案なのか』

『そんなわけでここでの障害物は——魚雷地獄です！』  
ぱつとモニターが切り替わる。

そこには多数の魚雷を装備した北上と木曾、それに参加していない潜水艦たちの姿があった。

「いやー、大井っちには悪いけどこれも仕事だからね」

「そんなわけで——行くぜ！」

一斉に参加者たち目掛けて放たれる魚雷たち。どう避ければいいんだと言わんばかりの量だった。

「くつ、これは想定外です……！」

鳥海たち先頭グループは速度を最高まで上げて魚雷から逃れる方法を選んだ。一方後続にいたグループは一旦速度を落とし、迂回することで魚雷を避けようと試みる。

『さあ、ここで貧乏くじを引かされたのは真ん中辺りにいるグループ！ 先にも行けず後にも引けず、さあどうする！』  
「こうしますー！」

青葉の言葉に応じるかのように翔鶴は真上で艦載機を放った。よく見ると、艦載機には糸がついている。その糸は翔鶴の身体に伸びていた。

『おおっと、翔鶴さん——これは艦載機によって自分の身体を引っ張り上げているウー!?』

『秋津洲さんと違ってそのまま進むには無理があるけど、短時間の間魚雷を避けるならこれで十分というところですか』

『あっと、しかしこれは……！』

宙に浮かびかけた翔鶴の腰元に、なんと比叡が抱き着いていた。

「一人だけ助かろうなんて薄情じゃないですかあ、翔鶴さん！」

「ちよ、離してください！ ず、ずり落ちちゃいます！」

比叡がしがみついているせいで翔鶴の袴が落ちかけているようだった。

『こいつはやばい！ 別の意味で翔鶴さんが大ピンチです！』

『観客には男性陣もいるのでやばいですねー。ということで映像チェンジ！』

漣の合図と同時に映像は大井へと切り替わった。心なし観客席の男性陣が肩を落としていたようにも見えたが、スルーしておく。

「ふふふ、魚雷の撃ち合いっここですか？ 構いませんよ、北上さん……！」

映像に映し出された大井は自分が大ピンチなのにも関わらず相当ハイになっているようだった。正直顔が怖い。

そういえばアイツは相当な魚雷フリークでもあった。今の状況はもしかすると大井的には最高の状況なのかもしれない。

「行きますよ、ホラホラホラ！」

自分に迫りくる魚雷目掛けて大井はカウンターとして魚雷を撃ち放つ。それは寸分違わず北上たちの放った魚雷に命中し、大井に当たる前にすべて相殺される形になった。

「うわあ、さすが大井つちだね」

「こうなる予感はしてたけどな……」

北上と木曾も、これには苦笑するしかないようだった。

魚雷エリアを越えて第二補給ポイントに向かう艦娘たち。

何人かはダメージを受けたが、脱落到に至る者はまだ出ていない。

ただ、魚雷を避けるために加速したツケか、鳥海の手度は少しずつ落ちてきていた。

少しずつ追い上げてきているのは島風と長門、それに伊19だった。伊19は魚雷エリアを潜航して突破したので、他の参加者と比べてペースが乱れていない。

一方、魚雷でダメージを負ったからか翔鶴や比叡は少し遅れ気味になっっていた。

「あちゃー、先頭からは大分離されちゃったな……」

「うう、比叡さん酷い……」

「わ、悪かったつてば」

袴の位置を確認しながら涙目で訴える翔鶴。

そこにススツと近寄る影があった。

「このまま先頭集団に引き離されたままというのも面白くありませんわ」

「その声は……熊野！」

「なんですよ、その大袈裟なりアクションは」

比叡に対しやや呆れ顔を浮かべる熊野。

「……何か策でもあるんですか？」

「ええ。そのためにはもっと仲間を集める必要がありますけれど」

そう言って熊野は怪しげに目を光らせた。

「戦場において速さだけでは目的地に辿り着けない——そのことを教

えて差し上げますわ！」



この世の理とは速さなのかもしれない (3) (島風・長門・伊19)

艦装も身体も、良い感じに温まってきた。

途中アクシデントがあつたりもしたが、それくらいは許容範囲だろう。

「純粋な速さじゃ私が一番だしっ」

「ははっ、言うではないか島風！」

「潜水艦最速の看板背負ってるからには負けられないのね！」

意外にも食らいついてきているのは長門と伊19だ。

『ちなみに最速を自称してるイクちゃんですが、ニムたんも同じ速さらしいでござる』

「こ、このタイミングでそういうことは言わなくていいのね！ 嘘じゃないしー！」

伊19が速度を上げてくる。純粋な速度ならこちらの方が上だが、伊19は数々のアクシデントを潜ることで避け続けてきた。一番自分のペースを維持できている。

そんな伊19がペースを上げてきたのには理由がある。

『さて、ここで後続の参加者たちも一斉に追い上げてきました。——もうすぐです！ ゴールが間近です！』

青葉の言葉通り、レースは終盤に差し掛かっているのだった。

「……なんか島風、楽しそうだな」

モニターに映し出される様子を見て、そんな言葉が口から出ていた。

「普段は少し気怠そうにしてる印象が強かったが」

「島風があんだけ全力で走れる機会なんてまずないからねえ」

「作戦行動のときは他の艦に合わせた速力にしないといけないから……。島風にとっては窮屈なのかもしれない」

望月と初雪がポップコーンを頬張りながら言った。

ずっと走り続けているからか、参加者たちの表情には疲労が表れていた。

それでも皆どこか楽しそうに見える。

『おおっと、ここで後続集団が大きく動いたー!』

先頭の島風、長門、伊19から引き離された集団——熊野たちが動きを見せた。

「これは速さを競うだけの勝負ではありませんわ……! 最初にゴールを越えた者。それが勝者であり真のレディですよ!」

熊野が一斉に艦載機を発射する。今回は軽空母として参加しているようだった。

「むっ……!」

熊野の元から放たれた艦載機の多くは艦爆だった。容赦ない爆撃が先頭集団を襲う。

「ば、爆弾は勘弁なのね!」

特に被害を受けたのは伊19だった。艦爆の攻撃は潜って避けるというわけにはいかない。

島風と長門はギリギリのところまで避け続けていたが、伊19はとうとう捕まってしまうらしい。雨あられのように降り注ぐ艦爆のこうげきを受けて、艦装が大破してしまった。ここまでくると速度もがた落ちである。

「ぐぬぬ……。む、無念なのね……。!」

親指を突き立てて海中に潜っていく伊19。意外と余裕はありそうだった。轟沈しないよう調整してるからかもしれないが。

「攻勢に出たな、熊野! だが艦載機をこれだけ繰り出しては、走ることに集中できまい……。むっ!?!」

長門が熊野の姿を見て顔をこわばらせた。

熊野は比叡・翔鶴の二人に縄で引っ張られていた。曳航されている形になる。

「熊野さんのサポートは、私たちで……。!」

「艦装の調子が悪い分は、気合で補います!」

先頭集団への攻撃は熊野が担当し、走りは比叡たちがカバーする。

「なるほど、他の参加者との協力もありとルールにはあったな。だが、この長門は負けんぞ！」

「島風だつて！」

「——私たちのことも忘れてもらっては困りますね！」

そこで、先頭と後続の間にはいた島海と大井が速度を上げてきた。

後続集団の出方を見極めてから出るつもりだったのだろう。彼女たちにとっては、後続集団の攻撃が先頭集団に集中している今が最大の好機とも言えた。

「魚雷は全部出し尽くしたから攻撃はできないけど……その分身軽になつてるのよねえ！」

猛追する島海・大井・熊野たち。

熊野の攻撃の手が尽きた頃には、彼女たちも島風や長門たちと並ぶようになつていた。

『さあ、ここからは地力の勝負か！ ゴールは目前だあ！』

青葉の言葉通り、島風たちの前にはもう余計な障害物はなく——彼方にはゴールが見えていた。

全力で走ろうとするといつも止められた。

皆はそんなに速く走れない。少し抑えろ、と。

だから、艦隊行動中はいつもモヤモヤした思いを抱えていた。

本当はもっと速く走れるのに。そうしてはいけないなら、この速さは何のために備わっているのだろう。

別に他の皆が意地悪でそう言っているわけではない、ということはお分かつていた。

ただ、それでも全力で走ってみたいという欲求は常に心の中にあつた。

ほとんど休みなしで全力疾走し続けていたからだろう。身体はもう疲れ切っていた。最初の頃と比べるとスピードも落ちてきていることだろう。

それでも、今はとても気分がいい。

皆が全力で走っている。一番は自分だと、負けず嫌いの顔をして

走っている。

「ははは、やはり速いな島風——だが速度を最高まで上げたこの長門から逃げ切れるかな!?」

「なんでそんなに速くなってるのよ! 訳分かんない!」

長門なんて普段はとでも遅いのに。

自分には絶対追いつけないと思っていたのに。

今は不思議と食らいついてくる。

ゴールは目前だった。

自分の順位とか、他の人がどこにいるかとか気にしている余裕はなくなってきた。

絶対に負けたくない。自分が一番になるんだと、そのことだけを考えるようにする。

青葉と漣が何か言っている。聞こえてはいるが、もう頭には入ってこなかった。

それでも。

ゴールを通過したとき、自然と腕が大きく振り上がった。

「私には——誰も追いつけないんだから!」

そうして、勢い余って前のめりに海面へ激突することになった。

意識が飛んでいたのはどれくらいの間だろう。

気づけば、長門に抱きかかえられていた。

「あれ、私……」

「白熱し過ぎて意識が飛んだみたいだな。普段のお前からは考えられないくらい熱くなっていたぞ」

周囲を見ると、他の皆も全力を出し尽くしたのか各々休んでいるようだった。

「私、勝った?」

「ああ。やはり速さでお前には敵わないな」

そう言って長門は頭をわしゃわしゃと撫でてきた。

「ちよ、もう。やめてよ——!」

「照れるな照れるな」

そうではなく長門の力が強すぎて頭がシイクされるのだ。  
ひとしきり撫でて長門は満足したのか、愉快そうに笑っていた。

「島風」

「な、なに……？」

「——楽しかったか？」

自分は楽しかったぞ、と言わんばかりの笑みを浮かべて長門は言う。  
う。

つまらないことを聞くものだ。

そんなこと、答えるまでもないではないか。

世話好きのジレンマ（由良・名取・潮・夕張・鬼怒・阿武隈）

物凄い雨音で目が覚める。

起き上がってカーテンを開けてみると、外は豪雨に見舞われていた。

「……なんだか、すごい雨みたいだね」

上のベッドで休んでいた名取姉も起きてしまったらしい。

時計を見ると、まだ時刻は四時になるかならないかといった頃合いだった。

「長良姉や鬼怒たちは今日も走ってるのかしら」

「多分走ってると思う。私が知る限り天候を理由に二人が朝のランニングを休んだことないし」

恐るべき姉妹である。何がそこまであの二人を駆り立てるのだろうか。

「なんだかもう一回寝るには目が冴えちゃった。由良はどうする？」

「私もこの雨音聞きながらまた寝る自信はないかも……」

かと言って、朝ご飯を食べるにはまだ早い。

どうにも半端な時間に起きてしまったものだと後悔する。

「とりあえずやることないしロビーでテレビでも見ようか」

「そうだね」

それぞれの私室とロビーには多少の距離があるので、よほど大音量にでもない限り私室まで音は届かない。まだ寝ているであろう他の子たちの迷惑にはならないはずだった。

着替えて一階のロビーへ向かうと、そこには先客——潮ちゃんがいた。

「あ、お二人ともおはようございます」

「おはよう。潮ちゃんも寝られなくなったの？」

「はい。曙ちゃんはまだ寝てたし、部屋にいてもやることないのでここで本でも読もうかと……」

話している最中、落雷の音が周囲に響き渡った。雨だけでなく雷まで鳴るとは、よほどの悪天候なのか。

「雷が鳴ってるならテレビはつけない方がいいかもね」

「万一落雷して壊れたら悲しいもんね……」

しかし、それなら何をして過ごそう。

「あ、いいものありますよ」

潮ちゃんがラックから何かを取ってきた。小型のゲーム機のようなだ。

「少し前の世代のゲーム機らしいんですけど、可愛いソフトがあるんです」

潮ちゃんがカセットを差し替えて電源を入れる。

すると、愛らしい犬や猫が映っているタイトル画面が表示された。

「わ、可愛いね」

「ペットを育てるゲームなんです。七駆の他の皆はあんまりこういうのやらなくて……でも、お勧めです！」

潮ちゃんが珍しく語気を強めていた。よっぽどこのゲームが好きなのだろう。

「普段ゲームはやらないんだけど……そんなに難しくないならやってみよっか」

「そうだね」

名取姉と一緒に潮ちゃんのリクチャーを受ける。

このゲームは、家庭で飼えるようなペットの中から一種類選んで育てていく育成ゲームらしい。

最初にプレイヤーの名前を決めたらペットを選んで名前をつける。そして家に迎え入れてから日常生活を過ごしていく。

日頃の振る舞いによってプレイヤーやペットのステータス変動していき、それによって出来ることやペットのリアクションも変わったりしていくらしい。

「結構、作り込まれてるんだね」

意外に奥深そうな内容に興味が出てきた。

画面の中から向けられてくるつぶらな瞳から、目が離せなくなつて

いく——。

「夕張、相談があるの」

休みのとき、私室で映画を見ていたら由良が訪ねてきた。スプラッター映画を慌てて止めて迎え入れると、由良は何やら深刻そうな表情を浮かべながらそう切り出してきたのだった。

「どうしたの、由良が相談なんて珍しいじゃない」

由良はしつかり者かつ控え目な性格だから、甘えるのがかなり下手だ。人に頼るといふことを滅多にしない。

自分から相談を持ち掛けてくるなどよっぱどのことだ。

「何かあったの？」

「……うん。私の教育方針、何か間違つてないかって不安になつて」

教育方針ということは、旗下の駆逐艦の子たちのことだろうか。あるいは鬼怒や阿武隈のことかもしれない。

「私もあんまりそういうのは強くないから自信ないけど、何が不安なの？」

「自立値が全然伸びないの」

「……ん？」

なんか怪しげな単語が聞こえたような。

「自立心？」

「うん。自立値が全然伸びないの。きちんときどき叱ったりもしてるんだけど……」

「由良。それ何の話？」

どうも認識にずれがありそうだった。由良の話を一旦止める。

由良は神妙な面持ちで少し前の携帯ゲーム機を取り出した。

「ゲームの話かっ！」

「げ、ゲームかもしれないけど、私は真剣に悩んでるんだから……！」  
由良は口をへの字にして抗議してきた。こういう由良を見るのは珍しい。

ゲームの状態を見ると、確かにペットのステータスの中で自立のパラメーターが妙に低かった。



続けてプレイヤーのステータスを見ると、世話好きのパラメーターが最高値になっていた。厳しさとかもそれなりに高いのだが、それを上回る世話焼きっぷりである。

「……由良、ちよつと構い過ぎなのでは？」

「えっ……。で、でもトイレとかお風呂とかはきちんとお世話しないと駄目よね」

「そこはそうなんだけど……。履歴見るとしよつちゆう散歩連れてったり遊んだりしてあげてるみたいだし。悪いことしたら叱ってるからしつけのパラメーターは十分だけど……。これじゃちよつと自立心は育たないわねえ」

こちらの指摘に由良はかなりショックを受けているようだった。

口元を手で押さえて、辛そうな表情を浮かべている。

「そんな……。駄目なの？ とても可愛いからつい構ってしまいましたくなつてたけど……」

「ときには距離を置くことも大事なんじゃないかなー」

それはゲームに限らず、そういうものではなからうかと思う。

私だって、由良みたいなお世話好きがずっと構い続けてきたら駄目になってしまいそうな気がする。

「……分かったわ。私、少し考えを改めてみる。ありがとう、夕張！」

こちらの手をがしつと握って由良は頭を下げた。

「う、うん。まあ程々にね」

「分かったー」

比叡さん並の気合を見せて去っていく由良を見送りながら、大丈夫かな、と少し不安を覚えるのだった。

それから更にしばらく経ったある日。

今度は鬼怒と阿武隈が揃って部屋にやって来た。

「最近、なんか由良姉や名取姉が妙によそよそしくてき……」

「夕張さん、由良お姉ちゃんと仲良いし何か知らないかなーと」

由良がそうなった原因に心当たりがあるだけに、盛大なため息が口からこぼれ出る。

おそらく名取は由良経由で同じような状況になっているのだろう。  
「あんたたち姉妹は世話が焼けるわね、まったく……」

結局——由良と名取が元に戻ったのは、ゲームでペットが天寿を全うするのを待たねばならなかったという。

七夕祭りだ！（鬼怒・龍驤・五十鈴）

「何か夏っぽいことしたい」

かき氷をしゃくしゃくと食べながら鬼怒がそんなことをのたまった。

「……お前、今この上ないくらい夏っぽいことしてるだろ」

「チツチツチ、分かってないね板部さん。鬼怒はもっとビッグなことをしたいんだよ」

「ついこの前由良の改二祝いと称して無茶苦茶騒いでただろう」

「……今日は今日の風を吹かしたいの！」

子どもかこいつは。

こうなると鬼怒は実際に動くまで落ち着かないだろう。何か適当な提案をするしかない。

「そうだなー、七夕近いし短冊でも飾り付ければいいんじゃないか」

それなら手早く済ませられるだろうと思つての提案だったが、鬼怒はこちらの斜め上をいった。

「七夕……なるほど！　七夕祭りだ！」

「は？」

「泊地の皆で七夕祭りをやるんだよ！　さすが板部さん、ビッグなこと考えるう！」

「……お、おう」

曲解されたとは言え一応こちらから提案した形になるので、俺には領くことしかできなかった。

「最近増えてきたしちようどええな」

龍驤が竹林の様子を眺めながら言った。

他にも阿武隈に磯波や浦波、不知火や早霜などが集められている。全員作業着姿で、竹を切るためのノコギリを持っていた。

「はーい、それじゃ皆事前に通達した分だけ切ってねー！」

鬼怒の号令に全員が応じて散会していく。動きに一切迷いが無い。竹は伸びるのが早いので定期的に切る。皆にとっては定例行事なの

だろう。

一見するとこういう作業に慣れてなさそうな磯波や早霜もテキパキと切っていく。艦娘は対深海棲艦のプロなはずだが、そのことを忘れてしまいそうになるような慣れっぷりだった。

こちらはというと、慣れない肉体労働で早速腕と腰が痛んできた。

「なんや先生、体力ないなあ」

「俺は皆と違って若くないんでね……」

「そんなんじゃないよあかんで。今度体力のつくもの食べさせたげようか？」

「……龍驤の馳走はなんか粉もの多めになりそうだな」

美味しいことは美味しいのだろうが、なんか胃にもたれそうな気がする。

こつちが苦戦している間に他の皆はさっさと切り終えてしまっていた。結局俺が切り倒したのは一本だけで、他は磯波たちにやってもらう形になってしまった。

「しかし、皆生き生きとしてるな。こういうイベント大好きだねえ」

「それもあるかもしれないけど、やることがあるってのはそれだけでええもんやと思うよ。いや、うちの本分は深海棲艦との戦いやけど……やっぱり殺伐としとるし。命の危険もなく、皆で一緒に何かやれることがあるってええやん」

「深海棲艦とやり合うよりこういうこととしてた方がいい、ってところは同意する」

俺は皆で一緒に何かするより、一人でだらだらしている方が好きだ。

「短冊に書く願い事は『だらだらしたい』にするかな」

「やめんかい。初雪や望月辺りが見たらどうすんの」

「駄目か。仕方ない」

竹を抱えて麓に降りていく。その途中、大量の和紙を抱えた集団に遭遇した。

「あら、もう竹切り終わったのね」

集団を率いているのは五十鈴だった。

「和紙、そんなにいるか？」

「皆で書く分だけじゃないわよ。どうせなら豪勢に飾り付けたいじゃない」

何を作るつもりなのだろう。大都市でやる七夕祭りみたいな飾り付けでもする気だろうか。

視線を麓に向けると、泊地の中心部の広場に何か櫓らしきものが出て来つつあった。

「……あれは何してんだろうな」

「夜に皆で踊るためのステージ用意するって大和さんと武蔵さんが張り切ってたわね。藤堂さんも駆り出されてるみたい」

「屋台も開くって言ってたね。珠子さんやイタリアたちが中心になって駆逐艦の子たち集めてたよ」

次から次に泊地の艦娘やスタッフの名前が出てくる。

こちらが気づいていなかっただけで、かなりの大事になっているようだった。

「よくこんだけ大規模な催しを大淀が許可したな……」

普段から赤字ギリギリで回しているのがこの泊地だ。その財布を握っている大淀は、この手の大規模イベントに乗り気でないことが多い。

「霞たちに説得されたみたいよ。たまにはいいでしょうって」

霞・朝霜・清霜の三人は大淀の泣き所として有名だった。おそらく先にその三人を落として、最後に本丸である大淀を攻め落としたのだろう。企画側にもなかなかの策士がいるようだ。

「ま、島の人たちや外部の人たちも呼ぶらしいから元手はどうか取るつもりなんですよ」

「近場の提督さんたちも来るらしいよ。この前四葉祭で盛り上がったばかりなのに、皆元気あるよね」

「言い出しっぺのお前がそれを言うのか……」

その場にいた全員に突っ込まれて、鬼怒は明後日の方向に視線を逸らすのだった。

それから数日経った七月七日。

泊地は、普段と比べ物にならないくらい賑わいを見せている。俺はというと、泊地の学び舎の屋上でぼんやりとその賑わいを眺めていた。

賑わっている景色を見るのは好きだが、その渦中に飛び込むのは苦手だった。これくらいの距離感がちょうどいい。

同じような考えの艦娘もいるようで、建物の屋上にも人はそこそこいた。

「やー、疲れた疲れた」

そんなことを言いながら鬼怒が屋上にやって来た。さつきまで櫓の周りで踊りまくっていたからだろう。さすがに少し疲労の色が見え隠れしていた。

「お疲れさん」

「お、板部さん。さてはずっとここでぼーつとしてたねえ？」

「ご明察。当てた褒美に飴ちゃんをあげよう」

「おっ、ありがと。……つて、これ塩飴かー。鬼怒黒飴が良かったよ」

「我儘だなあ。汗かいたなら塩分補給しとくのがいいんだぞ」

「知ってるよー。海上移動のとき散々舐めてるから飽きてるの」

それは知らなかった。道代先生辺りが勧めたのだろうか。

屋上の柵にもたれかかりながら、鬼怒は「ふー」と大きく息を吐いた。

「そういうえば鬼怒は短冊に何か書いたのか？」

「書いたよ。また来年もこうして皆で何かやれますようにって」

「……そうか。そいつはいいな」

「いいでしょー」

なんとなく、去年かき氷を作ったときのことを思い出す。

泊地にいる間は皆割とのんびりと過ごしているが、この一年の間にも何度か大きな戦いはあった。命懸けの戦いだ。

そういうものを経ての一年間だ。「また来年も」という言葉は軽いものではない。

「板部さんは何か書いたの？」

「似たようなもんだ。来年まで皆息災でありますように——つてな」

息災であれば、後はやる気次第でどうにかなる。

「叶うといいね」

「どうだろうなあ。織姫と彦星じゃあ頼みとするにはちと頼りない気もする」

「それは確かに」

太鼓の音が勢いを増していき、皆の踊りが一層活気づいてきた。

「さーて、休憩終わり。そろそろ戻ろうかな」

「……待て。なんで俺の腕を掴んでるんだ」

「一回くらい踊らにや損だよ」

「いや、俺は別に……いただ、離せ、同行拒否——！」

艦娘の力にインドア系中年男性が敵うはずもなく——楽園たる屋上が遠ざかっていく。

その後、鬼怒だけでなく武蔵や長門にまで捕まり、朝まで踊ったり飲まされたりすることになったのだが——それは特に語るようなことでもないので、割愛させていただきます。

## 善意の運び手（大鷹・龍驤・蒼龍・飛龍）

その日は、訓練を終えてから初めての護衛任務だった。

S泊地では近海を行き来する船の護衛任務を請け負っている。制海権は確保しているものの、深海棲艦はいつどこから現れるか予測がつかないので油断できない。そのため余程のことがない限り艦娘による護衛が必要になるのだった。

「おや、新しい顔だな」

護衛対象の船に乗っていたお爺さんは、こちらの顔を見るなりそんなことを言ってきた。

一目見て新顔かどうか分かるということは相当馴染みのある人のだろうか。

「おおー、そういえば大鷹は初めてか。この人は道雄さんって言って、この辺りの各拠点の農業の先生や」

一緒に護衛を請け負っている龍驤さんが説明してくれた。

「二瓶道雄だ。農業の先生なんて言われてはいるが、たまたまお前さんたちと縁を持った普通の農家の爺とでも思ってくれ」

「はじめまして、大鷹と申します。護衛空母の艦娘です」

「ご丁寧にも……ふむ、礼儀正しいお嬢さんだ。鳳翔に似た雰囲気がある」

道雄さんはそう言いながらゴソゴソとポケットを探っていた。よく見ると服には大量のポケットがついている。

「お、あったあった。こいつは挨拶代わりだ。折を見て育ててみなさい」

渡されたのは小さな袋だった。中には種らしきものが入っている。

「えつと……これは？」

「大根の種だ。比較的作りやすいから初心者でも問題ないだろう」

「受け取るとき。道雄さんは初対面の人に何かしら種とか苗とかを呈する癖があるんや」

「あ、ありがとうございます」

少しビツクリしたけど、ありがたく頂戴することにした。



「もし不安があるなら赤城にでも助言を聞けばいい。あいつには一通りのことを教えてある」

赤城さんは泊地にある農業部の部長を務めていた。そんな赤城さんの農業の先生だったのだろうか。もしかすると凄い人なのかもしれない。

「道雄さんの船の積荷は美味しい食べ物が多いから守り甲斐があるのよね」

「食はすべてのやる気の源だもんねえ」

「蒼龍・飛龍、あんたらはもうちよい公平にやる気出さんかい」

「えー」

龍驤さんに注意されて、蒼龍さんと飛龍さんが頬を膨らませた。

美味しい食事がないと気力が損なわれてしまう——というのは否定できない。

実際、今回の護衛任務に空母が四隻も割り当てられているのは、それだけこの積荷を重視しているからなのだろう。

「お前さんたちの拠点も、最初の頃は大分食糧難で参ってたらしいからな。食うものに困るといっなのは辛いもんだ」

道雄さんの言葉はちよつと意外なものだった。

今のS泊地は結構大きな農園があったりして、ある程度の期間なら自給自足していけそうなくらいの余裕はある。食べるものに困るような状況というのは、ちよつと想像し難かった。

「私が着任する少し前までは島全体が飢饉に見舞われてたって聞いたな。深海棲艦のせいで輸送のままならないから、本当にまずい状況だったんだって。それを見かねてどうにかしようとしたのが泊地の起こりだって聞いたような……」

そう言ったのは、この中で一番古株の蒼龍さんだった。

「ような……って適当ね」

「仕方ないじゃん、当時のこと皆あんまり話したくないみたいでさ、ちよつと聞き難いんだよ」

それだけ苦労があったということなのだろう。

「今はこうして海上輸送が出来とるからええけどな。もしこれが出来

なくなったら大変やで。……そういうわけやから、きつちりお仕事しようなー」

龍驤さんが手をパンパンと叩くと、蒼龍さんと飛龍さんは「はいはい」と船の後方に下がっていった。

道雄さんの船は結構な大きさで、積荷も相当な量があった。

あちこちの島に立ち寄っては積荷を降ろし、その土地の人たちと物々交換をしたり配給したりする。

どの島でも共通しているのは、道雄さんの船を見つけた人々が歓迎ムードになるという点だ。

「道雄さん、どの島でも歓迎されてましたね」

休憩時間、甲板の上で道雄さんにそのことを話してみた。

「歓迎されているのは俺じゃないよ。積荷さ」

道雄さんはどこか誇らしげに言った。

「この積荷は血と汗の結晶だ。それに——作り手の善意が込められている」

「善意、ですか？」

「農家つてのは自分で作るものに愛情を込めて育てるものだ。大きくなってほしい。美味いと言ってもらえるよう成長して欲しい。そういう善意がたっぷり詰まってるのがこの積荷なんだよ」

得意げに積荷の箱を見上げながら道雄さんは言う。

自分の仕事に誇りを持っている人なのだ、という感じがした。

「少し羨ましいです」

「ふむ？」

「私は——かつて最後の任務で失敗をしてしまいました。守るべきものを守れなかった。だからか、そんな風に自分の仕事に自信を持つことができなくて」

夜間に雷撃を受けて沈んでしまった。その後、護衛対象である船団は大損害を被ったと聞く。人も大勢亡くなった。

「……お前さんたちの仕事は大勢の命に関わることだから同列には語れんと思うが、俺たち農家も失敗は何度もする。こちらに落ち度がな

くとも起きてしまう失敗もある。それでも、生きている限り腹は減るから、食うものはどうにかしないといかん。どうにかしようとなまた食うものを作り始める。その繰り返しだよ」

「諦めなければどうにかなる……ということでしょうか」

「どうにかなるという保証はないなあ。それでも、やらないといかん、というものがある」

道雄さんの言わんとすることは、少し分かり難かった。

「私には、まだよく分かりません」

「ゆつくり考えていけばいい。お前さんはまだ若いからな」

話している間に、次の島が見えてきた。

「……言っておくがな、大鷹」

「はい？」

「俺の船が歓迎されるのは、作り手たちの善意が込められた積荷があるからってだけじゃない。その善意をお前さんたちが守ってくれるからだ。運んでくれとるからだ。今はとりあえず——それを覚えておいてくれ」

言われて、改めて船を見上げる。

船の周囲で守りを固めている龍驤さん、蒼龍さん、飛龍さんたちを見る。

確かに——このうちの何が欠けても、島の人たちのあの笑顔はなかっただろう。

「ありがとうございます。前は上手くいきませんでした——艦娘として、もう一度自分の務めを頑張って果たしたいと思います」

「おう。ただ、あまり気負うなよ。蒼龍たちの緩さも少し見習っておくといい」

「あれ。道雄さん、呼びましたー？」

自分の名前が聞こえたのだろう。蒼龍さんがこちらに手を振ってきた。

それがなんだかおかしくて——道雄さんと二人、思わず吹き出してしまう。

「あれ、なんで二人して笑ってるのよー！」

蒼龍さんが抗議の声を上げる。  
確かにその様子は良い感じに緩そうで、思わずまた笑ってしまいそ  
うになるのだった。

ホラーハウスへようこそ（江風・海風・リベツチオ・風雲・照月）

S 泊地の駆逐艦娘たちの元に招待状が届くようになった。

『〇月×日フタフタマルマル、地図の場所まで来ること』

中に入っていたのはその手紙と地図だけ。差出人の名前はなかった。

ただ、駆逐艦によって日付が若干違っており、ちょうど非番の日が指定されていることから、おそらく時折ある司令部の催し物だろう、と噂されていた。

「見事に同期組勢揃いって感じだねえ」

その日、地図に記された場所にやって来た江風は、集まった面子を見て機嫌良さそうに口笛を吹いた。

その場に集まっていたのは、江風と同時期に着任した駆逐艦娘——海風・風雲・リベツチオ・照月たちだったのだ。

「勢揃いって言っても、割とよく一緒にご飯食べてるから久々な感じはしないけどね」

「そう言うなよ風雲——」

風雲のつれない言葉に江風が口を尖らす。

「でも、これからどうすればいいんだろう」

照月の言葉に、全員がある方向へ視線を集中させた。

「それは、やっぱりあれに入るしかないんじゃないかな……」

海風がおずおずと言う。

五人の目の前にあるのは木造の小屋だった。入口のところにはおどろおどろしく「ようこそ」と書かれた看板がある。

ただ、小屋の中に人の気配はない。

「リベ知ってるよ、こういうのお化け屋敷って言うんでしょ！ 肝試しやるのかなー！」

「お化け屋敷……なのかねえ。ちよつと判断つかないけど」

五人揃って「うーん」と声を上げながら小屋を眺める。  
誰も入ろうとはしない。

「……海風の姉貴、ここは先を譲るぜ」

「え、なんで!？」

「だってこの中じや一番姉っばいじゃんか。年長者がこういうときは先に行くもんだぜっ」

「そ、そういう理屈なら私よりリベツチオの方が早いわよ?」

「リベはほら、こういうの得意じゃないし! 動じなさそうな風雲が  
良いと思うよ!」

「わ、私……!？」

流れ流れて指名を受けた風雲はどうしようかと逡巡したが、やがて  
意を決したように一步を踏み出した。

「分かったわ、やってやろうじゃない……!」

「さすが風雲さん、ファイトー!」

無責任な照月の声援を背に、風雲は小屋の扉を恐る恐る開いた。

中は酷く荒れていた。どうも長年放置されていた建物らしい。一  
歩動いたびに床が嫌な音を立てて軋む。

風雲の後に続く形で他の四人もそろそろと入ってくる。

「なあ、その壁に何か貼られてないか?」

「あら、本当ね」

江風が指し示した貼り紙を海風が回収する。

そこには、真っ赤な字で「モウ戻レナイ」と書かれていた。

直後、激しい音を立てて扉が閉まる。

「うわっ……え、ちよ、開かない!」

慌てて照月とリベツチオが扉を開けようとするが、妙なことに扉は  
びくともしなかった。人間を凌駕する身体能力を持つ艦娘ですら開  
けられないとは、どんな扉なのだろう。

「江風が余計なもの見つけるから……」

「えー、あたしのせいにかよ照月。仕方ないじゃんか、こうなったら早く  
奥行こうぜ」

「現時点で他に選択肢はなさそうね」

五人は封じられた入り口を前に、やむなく奥へと進む決心をするのだった。

電気もなく薄暗い中、少し進んでいくとリビングらしい場所に出た。

テーブルがいくつか並べられており、奥には台所もあるようだった。

五人が足を踏み入れた途端、ぼーん、ぼーんと古時計が音を鳴らした。

「……びびってなんかないぜ？」

「リ、リベも平気だよ……」

「足震えてるわよ二人とも」

海風の冷静なツツコミに、二人は明後日の方向を見て乾いた笑いを浮かべるしかなかった。

「海風は意外と冷静だね」

「私も苦手な方だけど、なんか皆を見守らなきゃって思ってたら……」

「お姉さんパワーだ……」

妙なところに感心する照月だった。

「皆、ちよつとこつち来て！」

風雲が何か見つけたらしい。四人が彼女の元に行くと、そこにはテーブルに乗せられたケーキがあった。ケーキにはクリームで文字が書かれている。

『油断しましたね』

どこかで聞き覚えのあるフレーズだった。

「なあ姉貴、これもしかして——」

江風が何か言おうとした矢先、リビングの外の方でぼうつと白い光が生じた。

「——」

全員が言葉を失い、動きを止めた。

きい、きい……そんな風に床を軋ませながら、何かがゆつくりとりビングへ近づいてくる。

何か——とても良くないものが来ている。

「ぜ、全員退避——！」

照月の号令に全員が我を取り戻し、白い光とは別方向目指して一斉に駆け出して行った。

「し、死ぬかと思った……」

「何か知らないけど、捕まったら大変な目に遭う予感がしたんだぜ……」

ぜえぜえと息を切らしながら、一回は小屋の奥にある廊下までやって来ていた。

「ねえ、あれもしかして出口じゃない？」

リベツチオが廊下の先にある扉を指し示した。裏手口か何かだろう。

「やれやれ、やっと出られるのね」

「……そんな簡単に出られるとお思ひかな？」

「何よ、まだ何かあるって言うの？」

風雲が振り返る。

そこにいたのは——真っ白なマフラー、黒いサングラス、若干汚れたトレンチコートを身にまとった謎の人物だった。

「……」

「このまま帰すわけにはいかないよう……」

ひっひっひ、とわざとらしく邪悪な笑みを浮かべる。

「帰りたくば！ 私と夜戦をしないと駄目だ——！」

「どう考えても川内さんじゃねーかアア！」

江風の絶叫と同時に五人は出口に向かって駆け出す。

しかし、どういう動きをしたのか——謎のサングラス女は瞬時に出口の前まで移動していた。

「くっ、相変わらず夜になると意味不明な凄さを発揮する人ね……！」

「風雲、後ろ……！」

リベツチオが風雲の裾を引っ張った。

いつの間にか、後方には死装束をまとった女性が現れていた。『訓



練は嘘つかない』という文字が書かれた鉢巻を額につけている。片手には小さな探照灯——ではなく懐中電灯を持っていた。

「姉貴どうすんだよ！ 神通さんだよ絶対アレ！ 神通さんなら姉貴の担当だろ!?!」

「そんな無茶を言われても……」

「なかなか大変な状況だと思いますが……実戦だと思って、頑張ってください」

「そうそう。夜戦で挟み撃ちされることもあるからね！ さあ、覚悟を決めて一戦交えようか」

じりじりと前後から二人が迫ってくる。

その様子はお化けのそれではなく、どちらかというところとホラーゲームの敵キャラのそれだった。

「こ、これじゃ肝試しじゃなくてサバイバルゲームだよー!」

こうして——リベッチオたちの悲鳴が、虚しく響き渡ることになったのだった。

目指せトップスター（阿賀野・能代・伊19・伊8・武蔵・那珂）

こここのところ、S泊地ではある噂が流れていた。

司令部が何人かの艦娘を集めて芸能界に乗り込もうとしている、というものだ。

突拍子のない話——というわけでもない。深海棲艦と戦う艦娘は、その超常的な力のせいで恐れられたり忌避されたりすることもある。そのため、艦娘を支持してもらおうとこれまでも様々なアプローチが行われていた。

各拠点の那珂ちゃんを集めてNKC20というアイドルグループを結成したり、大手企業やテーマパーク等と共同でイベントを開催したりしたこともある。そのため芸能界入りというのもあり得ない話ではないのだった。

「……芸能界かあ。良いなー」

枝豆を摘まみながら、阿賀野は遠い都会のスタジオを思い浮かべていた。

ここは鳳翔が営んでいる店。周りにいるのは能代や武蔵、伊8に伊19である。この五人は同時期に泊地に着任した同期組で、時折飲み会を開いているのだった。

「阿賀野は夢見過ぎなの。芸能界は伏魔殿に違いないのね」

「えー、イクこそゴシップとかに毒され過ぎだよ。本当にそんな酷いなら皆辞めていくと思うんだけどな」

「那珂ちゃんに聞いてみたら何か分かるかしら」

「それは前やってみただけど駄目だったわよ、能代。それは禁足事項だから口外できないんだ……って」

「なんだそれ。ハチ、あいつそんなキャラだったか？」

そんな風にとりよめのない会話をしていると、店の扉をガラガラと開けて長門と加賀が現れた。

二人は盛り上がっている五人に軽く会釈をすると、近くのカウン

ター席に腰を下ろして注文を頼んだ。

「テレビとかに出てる人たち楽しそうだし、阿賀野も出てみたいなー。きらりーんってやって、歌って踊って、クイズ大会とか出て豪華景品貰って世界旅行行ったりとか！」

酔いが回ってきたのか、阿賀野は饒舌になつてきていた。他の四人はその様子を生暖かく見守っている。いつものことだからだ。

ただ、阿賀野の言葉に反応を示す者たちがいた。近くに座っていた長門と加賀である。

「……阿賀野。貴方、芸能界に興味があるのかしら」

会話へ加わってきた加賀に、阿賀野は「もっちゃん！」と答えてピースをした。

「私が目指すのはトップスターだよ！ 那珂ちゃんにだって負けないんだから！」

「ほう。なかなかの気概だな」

「何を感じているんだ長門。阿賀野のこれを本気にしているのか？」

半ば呆れ気味に尋ねる武蔵に対して、長門は真面目な顔で首肯した。

「酔った勢いというのはあるだろうが、思ってもいないことを口にすることはあるまい。阿賀野の心意気、確かに感じたぞ」

「そうね。決してこれを口実に貴方たちを芸能界入りチームに仕立て上げようなどと考えてはいないわ」

「なんか加賀さんから本音出てるのね」

伊19の指摘に動じた様子も見せず、加賀は淡々と告げた。

「もし芸能界入りを目指す気があるなら、明日のヒトヨンマルマルに司令部棟の会議室まで来るといいわ。いいえ、来なさい」

「拒否権なし？」

伊8の問いに、大真面目な顔をした長門が頷いた。

「結局来てしまったけど……」

翌日、指定された場所にやって来た五人を出迎えたのは、「審査員」

と書かれた紙をたらした机に陣取る長門と加賀——そして那珂ちゃんだった。

「一応聞いておきたいんだけど、何やるの?」

「愚問ね、能代。貴方たちが芸能界に挑戦するに足る器か、私たちが審査させてもらうわ」

「帰っていい?」

「それは困るわ。人員確保してと大淀に泣きつかれているのよ。ああなると彼女は怖いわよ」

どう怖いのか能代たちにはさっぱり分からなかった。ただ、加賀たちにも退くに退けない事情があることだけは理解できた。

「さーて、それじゃ那珂ちゃんが皆のことをしっかりと見極めちゃうよー!」

「見極めるって言っても、具体的に何をすれば……?」

「皆には五人組の歌って踊れるユニットとしてのデビューを目指してもらうことになる。即ち——歌と踊りだ!」

伊8の問いかけに対し、くわつと目を見開いて謎の決めポーズをする長門。

「こんな風に、びしつと決めてみせろ!」

「なるほど……つまり格好いいポーズを取ればいいということだな!」

対抗するように珍妙なポーズを取る武蔵。長門も武蔵も表情は大真面目だった。

「……うーん、二人とも三十点かな。ださい」

「ぐふっ……」

容赦ない採点を下す那珂ちゃんだった。

「踊りは自分が悦に入るだけじゃ駄目だよ。皆に楽しんでもらうことを念頭に置いて、その上で全身全霊をぶつけなきゃ」

そう言っって那珂ちゃんはカセットを流しながら、これが見本だと言わんばかりに一曲歌いながら踊りきってみせた。

実際に芸能活動の経験があるので、那珂ちゃんは一挙一動が様になっている。その場にいた全員が思わず見惚れてしまうレベルだっ

た。

「むむむ……阿賀野だつて負けないんだから！」

「阿賀野姉、無理しない方が……」

「私だつてやればできるよ！」

那珂ちゃんの歌舞を見終えた阿賀野が、対抗心を燃やして舞い始める。

最初はたどたどしい動きだったが、意外にも少しずつキレが良くなっていく。

「なんか阿賀野が輝いて見えるのね！」

「審査員たちの反応も、意外と悪くない！」

伊8の言う通り、長門や加賀はじつと阿賀野の動きを注視していた。

「……ふむ」

那珂ちゃんもやや感心したかのように、じつと阿賀野の動きを見つめ続けていた。

やがて阿賀野が一曲舞い終わると、那珂ちゃんはその肩をがっしりと掴んだ。

「阿賀野ちゃん、やるね。磨けば光るタイプだよ……！」

「ほ、本当？」

「この那珂ちゃん、歌と踊りに関して無責任なことは言わないよ。その気があるなら、みっちりレクチャーしてあげるけど……どうする？」

「もちろん、お願いするよ！」

阿賀野は、那珂ちゃんをまつすぐ見据えながらその手を掴んだ。

「任せて！ 那珂ちゃんが皆をきっちり磨き上げてみせるから！」

那珂ちゃんと阿賀野が握手を交わすのを見て、能代たちは「もしかして私たちもやる流れ？」と嫌な予感を募らせるのだった。

それから数カ月後。

『さて、今日はここ最近少しずつ注目を集め始めているソロモンの艦娘たちによるグループユニット・SHLOMOのところにお邪魔して

いまーす!』

元気のいいレポーターが、緑深き森を訪れている。

レポーターの側には阿賀野たち五人が並んで立っていた。

『土木系ユニットという異色の集まりですが、皆さんとても生き生きとされてますね! 地元の人からの人気も凄いか!』

『そうなんですよー。今、村の人に頼まれて家を建ててるんです。設計はハチが、縄張りは能代やイクが、力仕事は武蔵がやってくれてるんです』

にこやかに受け答えする作業着姿の阿賀野。

そんな様子をテレビで見ながら、加賀がぼつりと呟いた。

「これは、成功と言っているのかしら……」

「分かん……!」

大真面目な顔で応える長門。

その後もSHLOMOはコアなファンを少しずつ増やし続けていき、泊地の収入をちよつとだけ潤すことになったという。

自分のイメージというのは大抵少しずれている（沖波・鈴谷・初月）

近頃S泊地ではMastodonと呼ばれるものが流行っていた。これは短い文章を投稿するためのソーシャルネットワークサービスの一種で、気軽に自分でサーバーを立てられるのが特徴だ。

S泊地もネットワークは通っているが、外部へのアクセス速度はかなり遅く、ストレスフリーというには程遠い有り様だった。そのせいで、世に数多あるソーシャルネットワークサービスも、このS泊地では早々に廃れてしまっていた。

しかし、Mastodonは泊地内にサーバーがあるのでアクセス速度の問題はなかった。あくまでローカルネットワーク限定のサービスとして管理しているが、S泊地の艦娘にとってそれはさほど問題ではないらしい。それ以上に「これがSNSか」と気を引かれているようだった。

無論、この手のサービスに慣れていない子たちばかりなので、いろいろとハプニングが起こることもある。

これは、そんなハプニングの記録の一つである。

その日、夕雲型十四番艦・沖波は珍妙なものを目撃していた。少なくとも、これまでの彼女の知識にはないものである。

それは、最上型三番艦の鈴谷が、そこそこ長い棒の先に携帯電話をくつつけて、ああでもないこうでもないと言っている様であった。……何してるんだらう。

沖波には、わざわざ携帯電話を棒の先にくつつけている意味がまったく理解できない。

「あの、鈴谷……さん？」

「おっ、沖波じゃーん。ちーっす」

沖波が恐る恐る声をかけると、鈴谷は普段通り快活に挨拶を返した。

「それ、何してるんです?」

「ん、自撮りだよ自撮り」

「地鶏……? あの、それスマートフォンですよね」

「そうだけど」

「……?」

沖波の中で混乱が激しくなった。鶏のモノマネでもしてるのか、いやいやそれにしたって似てなさ過ぎるような、ああでも地鶏は美味しそうだし食べたいな、などと思考が空回りしていく。

「こうやって棒の先にスマートフォンを置いて、良い感じに自分を撮るんだよ」

「え? あ、自分で撮るんですね。そっか、それで自撮りなんですか……!」

「うん?」

「いえ、なんでもありません。また変な勘違いを……」

慌てて取り繕う沖波に、今度は鈴谷が首を傾げた。沖波の勘違いにまったく気づいていなかったのである。

「けど、大変じゃないですか? そうやって棒持ち歩くの」

「艤装に比べれば全然軽いし気にならないけどなー。それに誰かと一緒にいるときとか、自分も一緒になった写真を良い感じに撮れると結構嬉しいもんだよ」

ほれほれ見てごらん、と鈴谷がスマートフォンを沖波に見せる。

スマートフォンには、様々な艦娘と一緒に写っている鈴谷の自撮り写真がたくさん保存されていた。

姉妹艦とは仲睦まじそうに写っているが、利根や龍驤なんかはあからさまに面倒臭そうな顔をして写っている。

鈴谷自身はどの写真でも楽しそうな表情を浮かべていた。

「自撮りに限らないけど、最近はスマホで撮ったいろんな写真をMastodonにアップすのがマイブームなんだよね。何でもないものでもつい撮っちゃうんだ。どうよ、沖波も一枚」

「そ、それでは是非……」

今までされたことのない誘いだったので、沖波はやや緊張しながら



鈴谷の前に立った。

「そうそう、その辺に立ってて。ちよつち準備するから」

鈴谷はそう言つてスマートフォンを自撮り棒に取り付けて、位置を調整し始めた。

「ほらほら、沖波もうちよつとりリラックススリラックス」

「そう言われましても……」

「……むむ。その緊張しつつも赤らんだ顔、これはこれでありな気がしてきたな」

真面目な顔をしてスマホの状況を確認しつつ、鈴谷はシャッターを切った。

保存された写真データを二人で覗き込む。

「な、なんだか恥ずかしいですね……」

「どうする、もし納得いかないなら撮り直す？」

「いえ、納得いかないなんてそんなことは……！ このままで、このままでお願いします！」

何度トライしてもおそろく大して変わらない——むしろ余計緊張して酷い顔になるだろう、ということをお波は自覚していた。

「鈴谷ー。どこにいるんですのー？」

そのとき、遠方から熊野の声が聞こえてきた。どうやら鈴谷を探しているらしい。

「ありや、どうしたんだろ熊野。悪いね沖波、私ちよつと行ってくるわ。さっきの写真アップしといていい？」

「はい、私ので良ければ……」

「私の写真結構皆からコメントもらえるんだよねー。どんな感想来るか後でちよつとチェックしてみなよ」

んじゃね、と鈴谷は駆けていく。

残された沖波は、その場で駆け去っていく鈴谷の背中を眺めていた。

「……あれ？」

鈴谷の姿が見えなくなった頃、ふと側の壁に例の棒——自撮り棒が立ってかけられているのを見つけた。

「鈴谷さん、忘れていったのね……」

沖波は自撮り棒を手に取ってまじまじと眺める。どうやって使うのか、分かるようで今一つ分からなかった。

……さつき鈴谷さんはどうやってたかな。

楽しそうな鈴谷に触発されたのか、沖波はポケットから自分のスマートフォンを取り出して、自撮り棒に取り付けてみた。

「ええと、これをこうして……こんな感じかしら」

構えだけは先程の鈴谷と同じような形になった。ただ、ここからどうやってシャッターを切るのかがよく分からない。

「……沖波、何をしているんだ？」

自撮りの構えを取ったまま沖波が途方に暮れていると、そこにランニング中の初月が通りかかった。

二人は同時期に泊地へ着任した同期ということもあり、普段から親しくしている。

ただ、この状況での遭遇は沖波にとって不意打ちである。普段初月の前では割と優等生のように振る舞っていたから、こういう姿を見られるのは非常に気恥ずかしいものがあつた。

「は、初月……。いえ、これは違うのよ」

「違うと言われても、何と違うんだ？」

「と、とにかく違うのよー!」

妙な気恥ずかしさに耐えかねて、沖波はスマートフォンを付けた自撮り棒を手にしたまま駆け出した。

「あつ、おい沖波! そんな長い棒抱えたまま走ると危ないぞ!」

心配になつて初月が沖波の後を追いかける。

「なんで追いかけてくるの!?!」

「いや、それを言うならそっちこそなんで逃げるんだ!?!」

「いいから放つておいてばー!」

自分の真面目な子というイメージを崩したくない一心で駆け続ける沖波。

彼女自身が思っているほど初月は沖波を真面目一辺倒な子だとは見ていなかったのだが、それは沖波の知るところではなく——結局二

人の不毛な追いかけっこは、それから三十分ほど続いたという。

なお、鈴谷と沖波の写真には後日いくつかの反応があった。

その中に初月のコメントもあったのだが、それに沖波が気づいたかどうかは定かではない。

## 嵐のフィッシング挑戦録（嵐・グラーフ・鹿島・舞風）

朝起きると萩の姿がなかった。

今日は休日だったはずだ。どこかに出かけたのだろうか。

「おはよー、嵐」

部屋を出たところで舞とぼったり出くわした。

「萩風？ それなら不知火姉たちと釣りに出かけたよ。今日は沖の方に船出して釣るって言ってた」

そういえば、萩は泊地の釣り同好会のメンバーだった。不知火姉さんや曙、村雨たちが主要メンバーに入っていたはずだ。最近では国後も加わったと聞く。

「この前も Mastodon にアップしてたよ。楽しそうだねー。あたしも今度連れてってもらおっかなあ」

スマホを取り出して、萩のアカウントを見てみる。アップロードされている写真のうち何割かは釣り同好会のものだった。どれも楽しそうに映っている。

釣り。正直今まで興味なかったが——そんなに楽しいものなんだろうか。

「釣りを教えて欲しい？」

グラーフは、こちらの話を聞き終わると目を丸くして言った。

食堂でグラーフと鹿島が食事しているのを見つけて、釣りの指南を頼んだのだ。

二人は釣り同好会のメンバーではないが、空き時間を使って釣り糸を垂らしているのを見たことがある。

「それなら私たちではなく萩風に聞けばいいではないか。あいつは釣り同好会のメンバーだし、私たちより上手いと思うぞ」

グラーフの指摘はもつともだ。

もつともではあるんだが——。

「駄目ですよグラーフさん。嵐さんが私たちに頼んできた、その意図を汲み取ってあげないと」

「意図？」

「嵐さんは萩風さんに、実は釣りができた自分、というのを見せたいんですよ！」

グツと拳を振り上げて解説する鹿島。

やめてほしい。お前は見栄っ張りだと公衆の面前で暴露されている気分だ。事実なだけに余計恥ずかしい。

「そうか、すまなかつた嵐……」

どこか悟ったような表情のグラーフが肩にポンと手を置いた。

「なに、もういい？　おい、待て待て。食事の後でいいなら付き合うぞ。そう拗ねるな」

「そうですよ嵐さん、そういう見栄っ張りなところも嵐さんのチャームポイントだと思いますよ」

グラーフは若干天然が入っている気がするが、鹿島は絶対面白がっている。親しい相手にはたまに小悪魔っぷりを発揮するのだ、こいつは。

どうにも頼むのは尺だが——釣り同好会のメンバー以外で教えを請えそうなのはこの二人しかいなかった。

グラーフたちに連れられてやって来たのは、島の中の方にある大きな池だった。

「あまり知られていないが、ここは島の人たちも使う釣りのスポットでな。私や鹿島もたまに使わせてもらっている」

「あんまり新鮮味はないですけど、気を落ち着けながら釣りをしたときはおススメの場所なんです」

実際、何人か島の人たちがのんびりと釣り糸を垂らしているのが見えた。中には見知った顔もいる。

「ん、珍しい組み合わせだな」

こちらに気づいて声をかけてきたのは、ある集落の長を務めているリチャードというおっさんだった。頬に大きな傷跡があるせいではっと見海賊か何かに見えるが、実際は奥さんの尻に敷かれている普通のおっさんである。

よく漁で船を出しているイメージがあるので、こういう場所にいるのは少し意外な感じもした。

「いや、海での漁は仕事なんだよな。こっちは趣味。仕事ばっかだと疲れるわけよ。たまにはこうやって糸垂らしながらぼーっとしていたいっていうか」

今日は妙に口数が多い。これは大抵奥さんか娘さんに叱られて家を追い出されたってパターンだ。間違いない。

「ほら、嵐。我々も始めるぞ」

釣り竿は持ってなかったの、鹿島の予備用のものを借りることになった。

グラーフのも鹿島のも市販の釣り竿だ。良し悪しは正直さっぱり分からないが、持ってみた感じ割と手にしっくりくる。

ちなみに釣り同好会のメンバーは自作の釣り竿を使うという徹底ぶりらしい。萩も三つくらい持っていたが、曙なんかは十を超える数の釣り竿を作っているんだとか。

鹿島に教わりながら、どうにか池に糸を垂らすことに成功する。

「それじゃ、後は待ちましょう」

鹿島に言われるがまま待つ。

しかし、それから随分と待ってみたものの、一向に餌に魚が食いつく気配がなかった。

一方、他の三人のところにはちよいちよいと魚が行っているようだった。慣れた手つきでそれぞれがバケツの中に魚を入れていく。

もしかして、ただ垂らしているだけでは駄目なのか。餌が生きているように見えるよう細かいアクションを取った方が良いのか。

「……嵐さん、そんな忙しなく動いていたら魚に逃げられてしまいますよ」

こちらの様子を見ていた鹿島から指摘が入った。

「というか、随分前に餌取られてるようだったぞ。一度上げてみる」

グラーフに言われて釣り竿を引っ張ると、確かに餌がなくなっていた。

「ぼんやりとしながら集中できるようにならんな。余計な気配を出

すと魚は逃げるから自然体でいろ。で、魚の気配は絶対逃がさないようにする。基本はそれだけだ」

さらつとりチャードのおっさんが横から口を挟んできた。というかそれは基本ではなく極意というのではないか。

「魚が食いつきそうだったら教えるから、もう一度チャレンジしてみよう」

グラーフが再び餌をセットしてくれた。

まずは一匹。それを目標に、再び釣り糸を垂らした。

その一匹が釣れたのは、日が暮れそうな頃になってからだだった。

しかも、グラーフや鹿島の全面的なフォローを得ながらの成果だから、純粹に自分の力で釣れたわけではない。

「まあ、落ち込むな。最初からそんな完璧にいくはずもない」

「そうですね。私なんか最初は香取姉から『鹿島はちよつと駄目ですね……』って言われたくらいですし」

そんな評価を受けながら、よく今でも釣りをする気になったものだ。

「だって、何だかんだで釣れた瞬間は嬉しかったですし。嵐さんはどうです？」

確かに悪くないと思った。

ただ釣り糸垂らして魚を引っ張り上げるだけだ——なんて思っていたが、実際やってみると奥が深い。

自分のバケツの中にいる魚は一匹だけだが、今度はもう少し増やしてみたい。

「んじゃ、リリースするぞ」

と、いきなりリチャードのおっさんがバケツの中の魚を池に戻してしまった。

「ん？ え、いや、そう怒るなよ。グラーフたちから聞いてないのか？」

「あ、すまん。言い忘れていた。……嵐、ここはあくまで趣味用の釣り場だから、釣った魚は帰るときにリリースする決まりなんだ」

なんてこった。釣った魚を食べるというのを楽しみにしていたというのに。

「それなら心配ないですよ。萩風さんが今朝出かける前に、今日は釣った魚でござ馳走するって言ってましたから」

なら良いか——という問題じゃない。自分で釣って自分で食べる。それが楽しみだったのだ。

「なら、練習して自分で釣れるようになってから外に釣りに行くしかないな」

グラーフがポンと肩に手を置く。

どうやら、俺の釣りライフはまだまだ先が長いらしい——。



ローマでの休日（吹雪・叢雲・綾波・天霧・狹霧）

「そんなわけでローマ観光だよー！」

拳を握り締めて声高に宣言したのは吹雪だった。

その側には「わー」と手を叩く綾波と、疲労が表情に滲み出ている叢雲、そしてどうリアクションを取るべきか戸惑っている天霧・狹霧の姿があった。

「……なあ、叢雲姉。吹雪姉はいつもあんな感じなのか？」

「普段は真面目なんだけどたまにテンション高くなるとああなるのよ。今日は私疲れてるからツツコミはあんたに任せるわ」

「ええー……」

唐突に叢雲から無茶振りを受けて、天霧は困惑の声を上げた。

ここは彼女たちの拠点であるS泊地——ではなく、そこから遠く離れたイタリアの古都ローマだった。

八月、日本は欧州からの救援要請を受けて未曾有の大艦隊を編成した。S泊地の面々もその一員として欧州まで来て、先日まで深海棲艦の大軍勢と死闘を繰り広げていたのである。

現在、日本から来た艦娘たちは大遠征の慰労のため休暇を与えられていた。そこで吹雪が皆を誘ってローマまで引っ張って来た、というわけである。

「疲れてるって意味じゃなー。あたしらも数日前まで暁や朧たちに連れ回されてドイツ観光してたんだぜ……」

「あら。それは楽しそうでいいわね。……私はずっと戦後処理で忙殺されてたんだけど、今度変わってみる？」

叢雲は笑顔だった。

ただ、その笑顔は見てはいけない類のものだ。これ以上余計なことを言えばただでは済まない。

「すみませんでした。本日はあたしがツツコミを担当させていただきます」

「よろしい」

「……いや、ツツコミって担当決めてやるものなの？」

狭霧が二人のやり取りに疑問の声を上げる。それを受けて叢雲は「プツ」と吹き出した。

「そうそう、ツツコミはそうやるものよ。天霧、あんたまだまだね」

「えっ、今あたしテストされてたの!？」

「45点」

「うおー、なんだその中途半端な点数!？」

頭を抱えて悲鳴を上げる天霧と、それを見えますますおかしそうに笑う叢雲。そんな二人を見て吹雪が頬を膨らませた。

「ほらそこ！　なんでローマに来たのにツツコミ談議なんかしてるの!？」

「まあまあ吹雪。うちでは必須スキルだから……ボケ役の人以外は」

「えっ、私そんな話聞いたことないよ?」

「……あつ」

「な、なにその反応。綾波ちゃん！　ねえ!」

気まずそうに視線を逸らす綾波の肩を掴んで迫る吹雪。

それを見ながら狭霧がポツリと呟いた。

「吹雪姉さんは、ボケってことでしょうか」

「天然のね」

「ああ、ありや天然だろうな……」

叢雲の回答に天霧が頷く。

それが聞こえていたのか、吹雪はくわつと目を見開いて抗議の声を上げた。

「天然じゃないよ!」

説得力皆無だった。

一行がまずやって来たのは、通称「スペイン広場」と呼ばれる場所だった。

すぐ側にはスペイン階段と呼ばれる映画で有名になった階段もある。

周囲一帯は人々の往来が激しく、とても賑わっていた。観光客ということで目を引くのか、一行に声をかけてくる者もいる。

だが、もつとも一行の目を引いたのは広場の中央にある噴水だった。

「……船が沈みかけてますね」

狭霧が率直な感想を述べた。

スペイン広場の中央にある噴水には小舟のオブジェクトがあるのだが、半ば沈んでいるように見えるのだった。

「川で氾濫が起きたときに漂着した船がモデルになってるんだって。少し前に暴動があつて傷つけられちゃったみたいだけど、今は修復も終わったみたいだね」

ガイドを片手に吹雪が解説する。

「一応漂着したなら私たち的にはセーフかな……？」

「大破でギリギリ拠点まで戻ったって感じですね」

「いや、綾波姉、狭霧。自分たちに照らし合わせて見なくていいだろ。素直に見て楽しもうぜ」

「うーん、それは分かるんだけど……」

「どうしても意識してしまうというか……」

噴水に釘付けになっている四人に対して、吹雪と叢雲は視線を早々に切り替えていた。

周囲には出店含め様々な店が並んでいる。特にファッション系のショップは艦娘にとつても魅力的に映るものが多かった。

幸い、今回の欧州遠征に対する報酬ということで艦娘たちには夏のボーナスとも言える多額のお金が支給されていた。現金で持つと危ないからということ、各艦娘にはそのボーナス分だけ利用可能なカードが渡されている。

戦場にいるときは規定の制服、普段は泊地の活動に合わせた動きやすい服を着ている彼女たちだが、たまに町へ行くとき用にお洒落な恰好をしたという願望は持ち合わせていた。

「——叢雲ちゃん、どうしようか」

「泊地に戻っても使い道あまりなさそうだし、私は行くわよ吹雪」

「そうだよ。お金は天下のまわりもの。使うときに使わないと駄目だよ」

意見の一致を確認するかのよう握手を交わす二人。

「なあ、綾波姉。あれは止めなくていいのか？」

「楽しめるときは楽しんだ方がいいと思うし、別にいいんじゃないかな。泊地に戻ったらシヨツピングなんてする機会ないし、私たちも行っておこつか」

そう言つて、綾波はポンと天霧と狭霧の背中を押すのだった。

装いを改めた女子五人が次に向かったのはテレビの泉だった。

宮殿の壁とそこに立ち並ぶ像の前に広がる大きな噴水である。先ほどのスペイン広場の噴水と比べて格段に大きい。

「ここはコインを投げ込むと願いが叶うことで有名な泉だよ！」

「吹雪姉さん、ガイドを指指してるんですか……？」

「ノー！」

狭霧の指摘に勢いよく腕でバツテンを作る吹雪。観光にシヨツピングで大分テンションが上がっているらしい。どことなく金剛のよくな口調になっていた。

「後ろ向きに投げると叶う、だって。投げる枚数によつて叶う願いの種類も変わるみたいだよ」

「一枚だとローマに戻つてこれる、二枚だと大切な人とずっと一緒にいられる、三枚だと恋人や伴侶と別れられる……つて三枚目なんだこりゃ」

「昔キリスト教が離婚禁止してた頃の名残りらしいね」

「それだけ離婚したいって人が多かったのか。なんつーか結婚つてもつとこうロマンあるもんだと思つてたぜ……」

知りたくなかった現実を知ってしまったような顔を浮かべる天霧だった。

「私たちは二枚投げてみよつか。ずっと皆で一緒にいられるようにつて」

綾波の提案に異を唱える者はいなかった。

もつとも、すぐに投げられるわけではない。この泉は観光名所としても有名で、泉のまわりは人で溢れかえっている。市の警察官らしき

人が観光客を誘導したり整列させたりするのに苦戦している様子が見えた。

「人が多いとそれはそれで大変だね……」

「泊地を観光地化できないかって大淀が考えてたみたいだけど、この様子を伝えたら考えを改めるかもしれないわね」

S泊地で留守を任されている大淀のことを思い浮かべながら、叢雲が肩を竦めてみせた。

やがて一行の順番になった。

先頭に立っていた天霧から順番に、二枚のコインを泉に向かって後ろ向きに投げる。

「ど、どうだ？」

「ちゃんと入ってたよ」

「そうか……。着任早々これで外してたら縁起悪すぎだもんな」

ほっと胸を撫で下ろす天霧に続いて、緊張した面持ちの狭霧がコインを投げる。

緊張していたせいか、二枚のうち一枚が泉から外れそうになったが——なぜかそのコインの軌道がいきなり逸れた。泉から外れそうになったコインが、無事泉の中へと落ちていく。

「ど、どうだった？」

「お、おお。なんかよく分からないが……入ってたみたいだぞ」

「よ、良かったあ」

安堵する狭霧の肩を、天霧が笑いながら叩く。

一方、吹雪と叢雲は綾波に視線を向けていた。

「今軌道修正したのって……」

「綾波、あんた今何か狭霧の投げたコインにぶつけたでしょ」

「え、そんなことないよ？」

穏やかな笑みで「あはは」と笑う綾波。

その笑みには「これ以上追及するな」という意思が見え隠れしているようだった。

「——ま、いつか。私たちも投げましょ」

「そうそう」

他の観光客も待っているので、三人は一斉にコインを投げた。

ずっと一緒にいられますように——そんな願いが込められた六枚のコインが、綺麗な弧を描きながら泉の中に落ちていく。

「……」

それを確認して、叢雲が少し遠い眼差しを——何かを思い出しているかのような表情を浮かべた。

「叢雲ちゃん！」

「わっ!?!」

そんな叢雲に、吹雪が背後から飛び掛かる。

「ほら、次はフォロ・ローマーノだよ！ あとコロッセオも行かないと！」

次に行く方向を指差しながら吹雪が高らかに宣言した。

そんな姉の様子に苦笑交じりの溜息をついて、叢雲は「はいはい」と応じた。

「じゃれついてないで早く行こうぜ、見るところいっぱいあるんだろ？」

「姉さんたち、行きましょう」

「そうそう。まだまだ回らないと」

せっかくの機会なのだから、全力で楽しもう。

そう切り替えて、叢雲は吹雪を背負ったまま三人の後を追って駆け出した。

ローマの休日、まだまだ終わりそうにない。

## 港町の少女（弥生・卯月・朝霜）

その日も弥生はドーバー市の海沿いを歩いていた。  
最近の日課である。

というより、他にやることがない。

欧州大遠征を終えた艦娘たちは思い思いにヨーロッパ観光を楽しんでいた。

弥生も他の子たちと同様フランスを回っていたのだが、帰国に遅れてはいけないと少し早めに集合場所——ここドーバー市に戻って来ていた。しかし思ったより早く着いてしまい、帰国の日まで退屈を持って余している。

ドーバー市内の観光名所と呼ばれる場所はすべて制覇してしまったので、最近はおつぱら散歩が趣味になっていた。

「今日も相変わらず寂れてるぴよん」

「仕方ないさ、ここは港町として栄えてたんだからな」

一緒に歩いていた卯月と朝霜が、町の様子を眺めながら面白くなさそうにぼやいていた。

このドーバー市は深海棲艦たちの一大根拠地にされていたので、港町としての機能は長期間失われていた。人々は少しずつ戻って来ているが、本格的に復旧するにはまだ時間がかかりそうなのが実情である。

「……ん」

海沿いの道を歩いていると、ベンチに一人の女の子が座っているのが見えた。

年の頃は弥生たちとそう変わらなさそうに見える。肩口で切り揃えられたブロンドの髪が綺麗な子だった。

「……あの子」

弥生の視線に卯月たちも気づいたらしい。二人もベンチの少女に目を向けた。

「一人つきりみたいだな」

「……道にでも迷ったぴよん？」

「かもな。……あ、弥生」

いつの間にか弥生は卯月たちから離れ、少女の側に寄っていた。驚かせないよう慎重に近づいていき、静かに「こんにちは」と声をかける。

「……？」

しかし、少女は突然声をかけてきた弥生に首を傾げるばかりだった。

「弥生。日本語で話しかけても伝わらないだろ」

「あつ」

朝霜の指摘に弥生は顔を赤くしてあたふたした。

こほん、と咳払いをして英語で改めて挨拶をする。

『こんにちは。私は弥生。ここには観光で来たの』

『……こんにちは。私はヘレネ』

『あなたは一人なの？』

『うん』

ヘレネは弥生の後ろにいる卯月と朝霜に視線を向けた。

『お友達？』

『うん。でも、英語話せないの』

『そうなんだ。日本から来たのかしら』

『……分かるの？』

『なんとなく』

何が面白いのか、ヘレネはクスクスと笑いながら静かに立ち上がった。

『遠いところからようこそ。良かったらこの町を案内しましょうか』

『いいの？』

『ええ。ここは私の町だもの』

ヘレネは町を見上げながら——どこか寂しそうに言った。

ヘレネに連れられて、弥生たちは都市部を回った。

玩具屋で人形やぬいぐるみを見て回ったり、洋服屋で可愛い服を試着してみたり、少し大人っぽい雰囲気のカフェで昼食を取った



り。普段と比べると町は賑わいに欠けている、本当はこんなものじゃない、とヘレネは市民を代表するかのように言った。

「サンドイッチは美味かったが……なあ、あたしまだこれ着てなきや駄目なのか」

洋服屋でフリフリの服に着せ替えられた朝霜が、居心地悪そうに尋ねてきた。

『朝霜は何て言ってるの?』

『可愛い服を着るのが恥ずかしいんだって』

『そうなの? 似合ってるのに』

『似合ってるんだから文句を言うなって』

「本当にヘレネはそう言ってるんだろうな? 弥生、お前誤訳してないだろうな」

「概ね間違ってる……はず」

弥生が視線をヘレネに向けると、彼女は分かっているのかいないのか、力強く頷いてみせた。

「仕方ねえな……。夕雲姉たちには見つからないことを祈りたいところだぜ」

「どっちみち後で Mastodon に上げておくびよん」

「卯月——お前と友達でいんのも今日までだ」

そんな軽口を叩き合いながら、四人は都市部の西へと向かっていった。

ドーバー市の西には高地がある。そこから見る海の景色がおススメなのだ。ヘレネは言った。

『私はパパに教えてもらったの。ママと喧嘩して家出したときは、いつもこの道を走って登って行ったわ。結局、パパかママが見つけないんだけど』

『ヘレネは腕白だったの?』

『そんなことないわよ。……でも、よく人からはそう言われてたかも』  
そのときのことを思い出したのか、ヘレネはどことなく不服そうな表情を浮かべていた。

高地への道は舗装されていたが、周囲は木が多く今自分がどの辺り

にいるのかが意外と分かり難い。ただ、緑が多い風景は弥生たちにとって居心地の良さを感じさせた。

やがて、開けた場所に出た。

駐車場のようだが、車は一台も止まっていな。その先へとヘレネは駆けていく。

弥生たちも後を追いかけて——それを目にした。

「おお、これは絶景びよん！」

「確かに、こいつは良い眺めだぜ」

卯月と朝霜が感嘆の声を上げる。弥生も同意するように頷いた。

この高地からは港の様子が一望できる。少しずつ戻って来た民間船、往來を行く人の姿、そういったドーバー市の姿がよく見える場所だった。

『——弥生』

ヘレネが弥生の側に寄って声をかけた。

『ありがとう。貴方たちのおかげで私たちの町は——また生き返ることができた』

『……私たちのこと、気づいてたの？』

その質問に対し、ヘレネは微笑むことで回答した。

弥生たちが艦娘であり、このドーバー市を救うために日本から来ていたことを、この少女はいつから気づいていたのだろう。もしかすると最初から気づいていたのかもしれない。

『……ごめん。全部を、皆を助けることができたわけじゃない』

『いいのよ。そういうこともあるもの。好きだったものが無事だっただけでも、私は十分だつて思ってるから』

そう言つてヘレネは弥生の手を取つた。

『ありがとう。この場所に来て、この景色を見れて、本当に良かった』  
『ううん。……こつちこそ、いろいろ案内してくれて、ありがとう』

弥生がぎこちなく笑うと、ヘレネはおかしそうにクスクスと笑つた。

『弥生は笑うのが下手ね。もっと上手に笑う練習しないと。そんなじゃ友達作れないわよっ。』

『……大丈夫。今のままでも。今日も、一人……友達、できたから』  
『——そっか。大丈夫か』

若干照れくさそうな表情を浮かべながら、ヘレネは自分の頬をかいた。

そのとき、海から一際強い潮風が吹いた。

弥生が閉じていた目を開けると——そこには、もう誰の姿もなかった。

ただ、風の音と一緒に、ありがとう、という声が聞こえたような気がした。

「……行っただか」

朝霜と卯月も気づいたらしく、弥生の元へ駆け寄って来た。

「ヘレネはきちんと言ったぴよん？」

「行けたと思う。迷ってたとしても……お父さんかお母さんが、見つけに来てくれるはず」

「そっか」

弥生の肩に手を置きながら、朝霜が明るく言った。

「それじゃ、そろそろ帰ろうぜ。あたしらまで迷子になってちゃ仕方ないしな」

「もうすぐ暗くなるぴよん。迷子になったらやばいぴよん！」

「……うん。けど、朝霜はその恰好のままでもいいの？」

「あつ、そうだ……。悪い、どっかで着替えて行っていいか？」

「どっちみち後でアップロードして皆に見せるぴよん……。あ、データはもうクラウド上に保存してるからうーちゃんの携帯壊しても無駄ぴよん、やめるぴよん！」

いつものようなやり取りを再開する卯月と朝霜を見て、弥生は自然な笑みを浮かべた。

守れたものも守れなかったものもあるが——彼女たちの日常は、相変わらずの調子で続いていきそうである。

理髪店に行こう（鳳翔、択捉、占守、国後、敷波）

その日、いつものように泊地近海を哨戒していると、前にいる択捉ちゃんが時折髪をつまんでいるのが見えた。

海防艦であるこの子たちが着任してから、もう数カ月が経過している。よく見ると髪の毛が結構伸びていた。

「択捉ちゃん、そろそろ髪切りますか？」

こちらが声をかけると、択捉ちゃんは少しびっくりしたような表情で振り返った。

「鳳翔さん、なんで私が髪の毛を気にしていると分かったんですか？」

「いや、択捉結構しよっちゅう髪の毛弄ってたじゃない。あたしも気づいてたわよ」

と、択捉ちゃんの隣にいた国後ちゃんがビシツとツツコミを入れる。

「占守は全然気づかなかったす！」

「姉さんはもうちよっと周囲に意識を向けた方が良いわよ」

「まあまあ」

占守ちゃんはこれと決めたことに一直線なのが魅力なのだと思う。

皆それぞれ違った良い点があるのだ。

「でも、私自分で髪の毛を切ったことがないので自信が……」

「あら、自分で切るの？」

「え、皆さん自分で切ってるんじゃないんですか？」

択捉ちゃんだけでなく、占守ちゃんと国後ちゃんもきよんととしていた。

どうやら皆、あの場所のことを知らないらしい。

「目立たない場所にあるから気づかないのかもしれないけど、うちの泊地にも理髪店はきちんとありますよ。そうだ、戻ったら案内してあげましょうか」

こちらの提案を受けて、三人の瞳が心なしかキラキラし始めたような気がした。

S 泊地の理髪店は、司令部棟の一階の奥にある。

この辺りは資料室や物置等が多いので、用事がないとなかなか来ることはない。

「けど、なんでこんなところに理髪店があるつすか？」

「髪を切りたいうて要望が多くて、今の司令部棟を作ったときに早速入れようってことで、空いてた部屋を割り当てたんです。そこをそのまま今も利用しているんですよ」

一部の器用な人は自分で切ったりしていたが、皆が皆そうできるわけではないので、理髪店は多くの艦娘が必要としていた。

当時の提督もその重要性は理解してくれたので、本土から専用のスタッフを呼んでくれたのである。

「こんにちは」

声をかけて理髪店の中に入る。

「いらっしやい……」

中にいたのは、目元が隠れるくらいの前髪が特徴的な一人の女性だった。

「ふふふ……鳳翔さん、お久しぶりです……。そろそろ来る頃だと思っていました……。可愛らしい新規のお客さんも来るというのは予想外でした……」

少し低めの声で話す女性に、択捉ちゃんたちは少し警戒心を見せていた。私の後ろに隠れて、じつと様子を窺っている。

「怖がらなくてもいいのよ……。私は小野小道。少し髪の毛が好きなだけで、悪い人間ではないわ……。あつ、怪しいかもしれないけどそこはごめんなさい……」

ふふふ、と笑いながら挨拶をする小道さんに対して、択捉ちゃんたちは余計警戒心を強めたようだった。

「大丈夫よ、皆。小道さんが悪い人ではないのは確かだから」

「で、でも自分で言うのは変っすー！」

「そこは、まあ」

否定しようとしたが、どう言えばいいのか迷ってしまった。

「いいんです。変なのは自覚しているので……。大事なのは、貴方た

ちがここを訪れたということ。……髪を切りに来たのね？」

頷くべきか迷っている三人に、小道さんはパンフレットを渡した。そこにはいくつもの種類の髪型の写真が載っている。

「この中から希望の髪型があれば選んでちょうだい……。もちろん、載っていない髪型でも受け付けるわ。大事なのはその人を今一番幸せにする髪型にすることだから」

そう言っつて小道さんは奥に戻っていった。どうやら先客がいたらしく、作業を再開したようだった。

作業中の小道さんは職人らしい顔立ちになって、普段とは別人のように見える。そんな彼女の様子を見て、択捉ちゃんたちも少し警戒心を解いたようだった。

三人がパンフレットを見て話し込んでいるうちに、先客の散髪が終わったらしい。髪を切り終えてこちらにやって来たのは敷波ちゃんだった。

「あ、鳳翔さんたちも切りに来たの？」

敷波ちゃんの髪型は普段とほとんど変わっていない。ただ、不思議と表情が輝いて見えるような気がした。髪が伸びるとどうしても整わない部分が出てきてしまうが、小道さんのカットのおかげか、そういう部分が今はまったくなくなっている。

敷波ちゃんらしさを損なわず——むしろ普段以上に敷波ちゃんらしさを感じさせる形に整っている。

「なんか、敷波さんが眩しいっす……！」

「え、そう？ そんなことないと思うけどなー」

そう言いつつ、敷波ちゃんは満更でもなさそうに頬を赤くしていた。

「もうすぐアタシの妹たちが来るって言うからさ、ちよつと良い感じにしておきたかったんだよね」

そういえば、そろそろ欧州に行っていたメンバーが戻ってくる頃合いだった。

戻ってくるメンバーの中には、今回の欧州救援作戦で合流した敷波ちゃんの妹たちも含まれていたはずだ。

「姉妹艦ってことだと、確か択捉の妹も来るんだよね。ここでバッチリ決めてお迎えしてあげると良いんじゃないかな」

「は、はい！ そうしたいと思いますー！」

生真面目な表情で頷く択捉ちゃんは、少しばかり興奮しているようにも見えた。

そういえば、これまで択捉ちゃんは姉妹艦がいなかった。初めて姉妹艦をお迎えするということで、身だしなみが気になっていたのかもしれない。真面目な子だから、お姉ちゃんとしてちゃんとした格好で出迎えないと——と考えていたのだろう。

「ふふふ……それじゃ、次は誰の髪を切りましょうか……」

「あ、まだ選んでなかったっすー！」

「ちよ、ちよと待って……！」

「私も、少し待ってください……！」

ひよつこりと顔を出した小道さんに、三人は慌ててパンフレットの確認を始めるのだった。

欧州に行っていたメンバーが戻って来たのは、その翌日のことだった。

水平線の彼方に皆を乗せた船が見える。長期間の遠征で久しく会っていなかったからか、何人かは待ちきれず艀装を出して船に向かっていったようだった。

「択捉ちゃんはいいの？ 松輪ちゃんをお迎えにいかなくて」

「はい。私があまり浮かれていると松輪も困ると思うので」

そう言いつつ、択捉ちゃんは服装をバッチリ決めていた。髪型も大きな変化こそないものの、昨日カットしてもらったからか粗がなく綺麗に整えられている。

なんだか、見ていると微笑ましい気持ちになる。

「あら」

見ると、船の先頭の方でこちらに手を振る小さな人影が見えた。

択捉ちゃんと同じ服装の小柄な子だ。択捉ちゃんの方もそれに気づいたらしい。控えめに、ぎこちない所作で手を振る。

「択捉ちゃん、もつと思いい切り手を振ってあげましょう。そうしないと歓迎の気持ち伝わらないですよ」

「そ、そういうものでしょうか……」

「そういうものです。ほら、ここうやって……おーいっ！」

こちらが率先して手を大きく振ると、それに倣って択捉ちゃんも声を張り上げて大きく手を振り始めた。

「おーいっ」

「おおーいっ！」

それから船が栈橋に着くまで——小さな姉妹艦は、ずっと手を振り合っていた。



姉いろいろ妹いろいろ（菊月、吹雪、球磨、千歳、金剛、アークロイヤル）

休日、暇潰しがてら散歩をしていると、中庭でテーブルを出してお茶会をしている一団が目に入った。

一瞬金剛姉妹かと思つたが、面子は大分違つている。金剛はいるのだが、他は球磨・千歳・吹雪・アークロイヤル等、艦種も艦型もバラバラの集団だつた。

「珍しい組み合わせだな」

「あ、菊月ちゃん」

声をかけると、吹雪がにこやかに手を振つて来た。

「これは、どういう集まりなんだ？」

「長女の会だクマ」

湯呑を手にお茶をすすりながら、球磨が答えてくれた。よく見ると各々が持っているものもバラバラだ。金剛は紅茶、球磨はお茶、吹雪は牛乳、千歳は——まだ真昼間だというのに酒である。

しかし、長女の会というのは初めて聞く。私もこの泊地では古株な方だが、そんな集まりがあるのは知らなかつた。確かにこの場にいる面子は全員長女だが——。

「会と言っても、泊地できちんと認められてるものじゃないのよ。長女同士で集まつて姉妹のことを相談することがあつて、それが何回か繰り返されて、たまにこうやつて集まるようになっていったつてだけで」

千歳が補足してくれた。既にほんのり顔が赤い。

「今日はアークロイヤルの歓迎会ということで、暇そうにしてる長女を集めたんだヨー」

金剛がアークロイヤルの肩に手を置きながらサムズアップした。

「突然金剛に拉致されたときはどうしようかと思つたが……。いや、ここは素直に礼を言うべきなのだろうな」

「ソーダヨー！ 人間、素直が一番ネ！」

「金剛は案内の仕方を反省すべきクマ。連れて来られたアークロイヤルの狼狽えっぷりに、こっちまで狼狽えてしまったクマ」

ジト目でツツコミを入れる球磨に、金剛は頬に手を当てながら「ソーリー！」と返す。反省してるんだかしてないんだかよく分からない。

「菊月ちゃんはどこか行くところ？」

「いや、ただの散歩だ。長月はあきつ丸と島の奥地にカメラ持って出かけてしまったし、三日月や望月たちも留守で暇だったんだ」

「睦月ちゃんたちも今は遠征中だしね……。あつ、それならどう？」

と、自分の隣の席を指し示した。

「いいのか？ 長女の会なんだろう？」

「別に構わないわよ。さつきも言った通りちゃんとした会じゃないし、入会規則なんてないもの」

「長女という意味では、私も少し微妙なところだ。姉妹艦はいないからな」

千歳の説明に、アークロイヤルが肩を竦めて見せた。そういえば空母アークロイヤル級は同型艦がないのだったか。

「で、そんなアークロイヤルに『姉妹艦がいるというのはどういう感じなのだ』と聞かれたので、姉妹のエピソードを披露してたところだったクマ」

「今日は睦月が欠席なので、菊月が代わりに睦月型のエピソードを語るデース！」

どうやら完全に参加する流れになっているようだった。

ここで断るというのも感じが悪い。誘いに応じて吹雪の隣に座ることにした。

「しかし睦月型のエピソードと言っても……。私たちに限ったことではないと思うが、姉妹の数が多いと逆にあまり姉妹っぽさがなくなってくるというか」

「あ、それなんとなく分かるかも。私たちも姉妹というかクラスメイトみたいな感じだし」

吹雪がうんうんと頷いた。

「皆で一緒に何かすることってあんまりないの？」

「ああ、大抵は何人かのグループに分かれて行動することが多いな。もつとも、グループはあまり定まってないが……。そのとき捕まえられそうな面子を捕まえて一緒に何かする、という感じだ。……。何かやろうと切り出すのは睦月か皐月、文月辺りが多いかな」

あの三人は睦月型の中でも特にアクティブだ。水無月や卯月なんかも活発ではあるが、周囲を巻き込んで何かしようというタイプとはちよつと違う。

「確かに睦月型全員揃ったら大人数になるネ。あれだけの人数をまとめるのは私でも難しいヨ」

「まあ、全員集合することもたまにあるがな。そういうときは大抵如月が上手くまとめている」

「あ、そこは睦月ちゃんじゃないんだ」

「睦月はまとめるタイプではなく引つ張っていくタイプだからな……。同じ長女でも吹雪や初春とはちよつと違う」

「長女にもいろいろあるのね」

感心したようにアークロイヤルが言った。

「球磨たちのところはどうかなんだ？　こう言ってはなんだが、全員相当癖があるだろう」

「遠慮ゼロで突っ込んでくるクマね……。否定しようもないのが悲しいところだクマ。球磨以外揃いも揃って変な奴ばっかクマ」

さり気なく自分を除外したぞこの長女——というツツコミは口に出さないでおく。

「あの面子をまとめるのは土台無理な話クマ。基本姉妹同士で意見が割れたら、何らかの形で勝負して勝った者に従う決まりになってるクマ」

「なんか緊張感漂う姉妹関係ですね……」

「いやいや吹雪。これはこれで後腐れなくなるから案外良いんだクマ。勝負方法も公平なものにするから勝率もそんなに偏らないクマよ」

球磨型姉妹は互いに譲り合うような性格には見えない。さつさと

公平な勝負で事を決して、後に尾を引かないようにした方が効率は良さそうだ。

「勝負方法ってどんなのが多いの？」

「んー、時間がないときはじゃんけんとかあっち向いてホイとかクマ。時間かけてやった方が良さそうなときは適当な場所用意して艤装なしで取っ組み合いすることもあるクマね」

睦月型は平和なのだろう。そういうのは、やりそうでやったことがない。

「ちなみに艤装なしだと誰が一番勝率高いデース？」

「そりやもちろん球磨に決まってるクマ……と言いたいところだけど、実際は多摩と大井のツートップだクマ。多摩はなんか動きがズルイクマ。あんなん読めないクマ。大井は勝ちへの執念が強くてやりにくいクマ……」

なんとなく勝負している光景が想像ついた。案外、球磨の勝率はあまり高くないのかもしれない。

「ふっふっふ、アークロイヤル。こういう姉妹のことを表現するのにピッタリの言葉があるデース。分かりマスカー？」

「……喧嘩するほど仲がいい、か？」

「ノンノン。互いに割り切ってやる勝負は喧嘩とは違いマース。……ここで相応しい言葉は『所詮この世は弱肉強食！』デース！」

どこかで聞いたことのあるフレーズだった。そういえば金剛、最近電子書籍端末を買っていたような……。

「まあ確かに喧嘩とは少し違う感じするクマ。いろいろ割り切ってるところ多いし、ある意味うちはドライな関係クマね」

仲が悪いわけではないが、必要以上にべたべたしない関係性ということか。確かに約二名除いてそんな印象を受ける。

もつとも、連帯感はあるしそうな気がする。もし共通の敵が現れたら凄まじいコンビネーションを發揮して迎撃しそうな、そういう感じだ。

「仲が良いって意味だと千歳のところは凄く仲良さそうクマ。喧嘩とかけたことないクマ？」

「普段はあんまりしないかな。……ああ、でも私が一人で軽空母に改装して千代田が機嫌悪くしちゃったことはあるわね」

千歳はこの泊地の軽空母の中では一番の古株だ。

最初は水上機母艦だったが、改装を重ねていくことで軽空母に艦種変更している。今は予備で水上機母艦としての艤装も持っているから、必要に応じて切り替えているようだが。

「千歳さんが軽空母に改装したのって、もう大分前じゃありません？」  
「そうね、アイアンボトムサウンドの作戦前くらいかしら。私も提督もあまり深く考えず、改装できるようになったから改装しようってやっちゃったんだけど……千代田にとっては、置いていかれたような感じがしたんでしょうね」

その気持ちは分からなくもない。睦月や如月、皐月に文月と、睦月型も第二改装を終えた者たちが増えてきている。姉妹艦が改装する度に、置き去りにされたような気分になるのだ。

「……それで、千代田とはどうなったの？」

「その後でね——」

アークロイヤルの問いに千歳が答えようとしたとき、ちょうどその千代田がこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

「千歳お姉！ やつと見つけた！」

「あれ、千代田。どうかしたの？」

「どうかしたの、じゃないわよ！ 今日はこの後島の北側にある水上基地の点検に行く予定だったじゃない……って酒臭っ」

息を切らしながら説明する千代田に、千歳は「あつ」と声を上げた。どうやら今の今まで忘れてたらしい。

「もう、急いで準備してよね。あとお酒臭いから歯磨いて口の中綺麗にしておくこと！」

「はい」

こちらに「ごめん」のポーズを取りながら、千代田に引きずられる形で千歳は去っていった。

結構飲んでいたが大丈夫なのだろうか。

「……千歳が提督に頼んで、千代田の練度が上がりやすくなるよう演

習や遠征のメニューを組み直したのデス。千代田本人がそのことに気づかないよう調整しながらやってたネー」

「千代田、軽空母になったら真つ先に千歳のところへ行ってたな。一番最初に見せたかったんだろう」

「千代田さんが機嫌悪くしちゃってたのは——千歳さんと一緒に良かったから、なのかもしれないですね」

常に一緒にいたい。並び立ちたい。そう思い合うのも、姉妹艦の一つの在り方なのかもしれない。

「……姉妹艦の関係性も、いろいろタイプがあるのね」

アークロイヤルは感心したような声を上げて、紅茶を口にした。

「ふっふっふ、アークロイヤルも姉妹艦欲しくなったデスカー？ もし良かったら私の妹分になりマス？」

金剛の突然の提案に、アークロイヤルはしばし黙考して頭を振った。

「……すまんが遠慮しておこう」

「振られマシター！ これでもお姉ちゃん力高いと自負しているのに！」

「実際高いのかもしれないが、自分で言ったら胡散臭く思われるだけだと思っぞ……」

「ノオー！」

こちらのツツコミに金剛が頭を抱えて悲鳴を上げる。

「だったら菊月、貴方の理想のお姉ちゃん像はどんなものデスカ！

参考にさせてもらいマス！」

「え、そういう流れに持っていくのか？」

「あ、でも私も気になるな。ここにいてのって皆長女だから、妹視点の意見も聞いてみたい」

吹雪まで金剛サイドについていた。球磨は何も言っただけだが、ニヤニヤしながらこちらを見ている。

アークロイヤルも「私も興味があるぞ」と言いたげな視線をこちらに送って来ていた。

どうやら——まだまだこのお茶会は終わりそうにないようである。

## 釣りバカ対決 in 北方（響、暁、ガングート）

今年も秋刀魚漁の季節がやってきた。

毎年秋に行われる秋刀魚漁支援——それは二年前に始まり、なぜか艦娘や民間業者にも好評を得て毎年続くようになった謎のイベントである。新たに着任した艦娘たちは「なぜこんなことを？」と疑問を口にし、古参の艦娘も「なんでだっけなあ」とうまく答えられない——そんなイベントだった。

本来は各国間での漁業に関する取り決め等から生まれたイベントなのだが、実際に参加する人々でその辺りの事情を正確に理解している者は一割にも満たない。

S 泊地のメンバーも、例年通り秋刀魚を獲りやすい北方海域へと出向いていた。

だが——。

「響だよ。今年はさっぱり秋刀魚が獲れず、このまま戻るかもうちよつと粘るかで船内でも意見が割れているよ」

「誰に説明してんのよ……」

突然語りだした妹に暁がすかさずツツコミを入れた。

「嫌だな暁、まるで私が突然独り言を呟くキャラみたいじゃないか。今のはレコーダーに記録しておくための台詞だよ」

「レコーダー？」

首を傾げる暁に、響は手にしていた小型のレコーダーを見せた。

「余り物を組み合わせて夕張と初春が自作したものでね。テスターに任命されたんだ」

「また妙なものを……」

S 泊地には技術部という様々なものを開発・改良する部門がある。夕張と初春はその一員なのだが、たまにこうした「なぜ作った」と言いたくなるようなものを開発することがある。

「けど、本当にどうするのかしら。せつかく新品のパーカーを用意したのにボウズは嫌よ」

「うちの漁船では多少獲れてはいるみたいだけどね。あと私もそれな

りに釣ったよ」

「え、もしかしてボウズなの私だけ……？」

「いや、あそこにも一人いるようだ」

響が指差した先には、甲板から釣り糸を垂らしつつ貧乏ゆすりをしている女性の姿があった。

暁はその背中を見て、響の背中にさつと隠れた。どうやら女性のこととが少し怖いらしい。

一方、響はまったく物怖じせず女性に近づいた。

「へいガングート、調子はどうだい」

「……ちっこいのと、その姉か。見ての通りだ、サツパリ釣れん。北の海は私の味方だと思っただがな……」

呼びかけられたガングートは面白くなさそうに鼻を鳴らした。

彼女はロシアの戦艦の御魂を持つ艦娘であり、北の海には縁がある。味方だと思っていた——という発言はそれに基づくものだ。

響は日本の駆逐艦の御魂を持つ艦娘だが、彼女の起源とも言える駆逐艦・響はかつての大戦の後でロシア改めソ連の所属になったという経歴を持っている。艦艇だった頃に両者が面識を持っていたかは不明だが——本人たちもその辺りは記憶が曖昧らしい——泊地に着任してからは、自然と交流を持つようになった。

「そうか、大変だな。ちなみに私はこんな感じだったよ」

響が差し出したバケツを暁とガングートが覗き込む。そこには大量の魚が入っていた。

「どこがそれなりなのよー！」

「喧嘩売ってんのかちっこいのー！」

双方に突っ込まれて、響はやや照れたように頬を掻いた。

「そう褒められても困るじゃないか」

「褒めてない！」

「——お前さんたち、響の嬢ちゃんにからかわれてるってことに気づけよ……」

そこに顔を出したのは、漁船の船長を務めているリチャードという男だった。



ガングートも艦娘の中では比較的強面の部類に入るが、この船長はそれに輪をかけて恐ろしい面構えをしていた。元々ごつい顔つきなのに加えて、大きな傷跡が顔に残っているのがその要因だろう。

実際はシヨートランド島にある集落の長で、別段恐ろしい人ではない。

「船長、漁を続けるかどうか結論は出たかい？」

「さらっと話題を変えたな……。いや、まだ船員や艦娘の意見もまとまってなくてな。ちよつと膠着状態になったんで会議を中断したつてわけだ」

深いため息をつくりチャード。船長というのも楽ではないらしい。

「なら、気分転換になるようなことでもしようか」

「気分転換？」

「そう。これだ」

響はどこからともなくホワイトボードを取り出して、ささっと何かを書いた。

『北方海域ワクワク企画、釣りバカ対決〜真の釣りバカはどっちだ〜』  
その下には可愛らしくデフォルメされた暁とガングートらしき絵が描かれていた。

響の唐突な企画にリチャードが「他にやることねえし好きにしな」と許可を出したことで、なぜかこの釣りバカ対決は実現する運びとなってしまう。暇を持て余していたのか、他の艦娘や船員たちがギャラリーとして二人の周囲に集まってきている。

「なんでこんなことになってるのかしら……」

「お互いちっこいのはめられた感じがするな」

釣り糸を垂らしながら、ガングートはウイスキーを飲んでいた。その様子を暁がちらちらと窺っている。

「なんだ、お前も飲みたいのか？ 欲しいなら分けてやるぞ」

「ち、違うわよ。それだけ飲んでよく平気だなんて思ったただけだし」

「ああ——まあ、身体温めるのにちょうどいいってところだ。北の海は、よく冷えるからな」

艦娘たちは海の寒さに耐性を持っている。どういう理屈なのかは各拠点の技術班も解明できていないが、寒いところの海で活動する際に支障が出ないように持たされた耐性なのではないか、と言われている。

ただ、それは海に接しているときの話だ。今みたいに船の上にいるときは、普通の人間よりも若干寒さに強いという程度である。

二人はそれから集中して釣りに臨み始めた。

じつと、静かに釣り糸を垂らしながら獲物を待ち続ける――。

「二人とも、もうちよつとトークしてくれないかい。ギャラリーが飽きてしまう」

ギャラリーを整理させていた響から注文が入った。

「いや、ちつこいの。トークしてたら釣りに集中できないだろ」

「そうよ、これは真剣勝負なんだから」

「二人とも分かってない……。これは真剣勝負じゃない！ 暇潰し企画なんだよー」

くわつと目を見開いて力説する響。そんな響に二人は揃って「えー」と言いたげな顔を浮かべた。

「なら私がお題を用意しよう。はい、まずはこれ」

と、響が再びホワイトボードを取り出した。

『敗者にしてもらいたい罰ゲーム』

「……え、罰ゲームありなの？」

「それなら事前に決めておけよ」

そのとき、暁の釣り竿が微かに震えた。

「きた、きたわっ……！」

竿を引くと、そこには確かに一匹の魚がかかっていた。

「どう、これがレディの実力よー！」

「やるじゃないか。このガングートも本気を出さざるを得ないようだな……！」

ガングートは自らの頬を両手で叩き、気合を入れて意識を釣り竿に集中させた。

暁もそれに負けじと再び釣り糸を垂らす。

「……では、ここでCMです！」  
スルーされた形になった響は、気を取り直すかのようにそう宣言するのだった。

その後、ガングートも何匹か釣ることに成功し、両者は一進一退の攻防を繰り返していた。

暁とガングートはあくまで真面目に取り組んでいるので、ギャラリィが飽きないようにと響があの手この手で場を繋げるといふ珍妙な光景になっていたが。

「あ、言い忘れてたけど残り時間五分だよ」  
「えっ」

対決を開始してから二時間弱。響による唐突の終了宣言に慌てたのは暁だった。

現在の成果はガングートが十匹なのに対し、暁は九匹。これまでのペースから考えると、逆転できるかどうかはかなり怪しい。

「対決に制限時間あったの？」

「いや、そろそろ場を繋げるのがしんどくなってきた」

「自分勝手な理由だった——!?!」

暁は腕時計をちらちらと見ながら釣りに臨んでいたが、それで魚が食いついてくれるはずもなく——やがて、そのまま勝負は終了となつてしまった。

暁とガングートのバケツが並べられる。響がその中にある魚の数をカウントし始めた。

「うん。暁が九匹、ガングートが十匹だね。となるとこの勝負はガングートの勝ちだ」

「……負けちゃった」

肩を落とす暁。そんな彼女の頭をポンポンと叩きながら、ガングートはバケツを指し示した。

「おい、ちっこいの。いつ魚の数で勝敗を決めると言った？」  
「ん？」

「重さで決めよう。釣れた種類もバラバラだしな」

「……まあ、私はどちらでも良いけど」

「秤ならあるぞ」

リチャードが船室から秤を持ってきた。バケツの重さをそれぞれ計ると——僅かだが、暁のバケツの方が重くなった。

「大物狙いで勝負を決めるとは駆逐艦らしい。なかなかやるじゃないか」

「……なんだか、勝ちを譲られた気がするけど」

「別に譲るつもりで言ったわけじゃない。単純に疑問に思っただけだ。個人的には楽しめたし、悪くない時間だったぞ——暁」

じゃあな、と言ってガングートはそのまま船室に入っていた。欠伸をしていたので、仮眠にでも行ったのかもしれない。

そんなガングートの背中を見送りながら、暁がポツリと呟いた。

「ガングートさんて、格好良いわね」

「ああ、あれでいて可愛いところがあるんだ」

「……え、可愛い？」

響にはガングートがどう映っているのか。少し気になる暁だったが、深く突っ込むのはやめておくことにした。

以下、今回の後日談。

暁とガングートの勝負を見ているうちに船員たちはやる気を取り戻したらしく、秋刀魚漁は継続することになった。その結果、例年ほどではないにしろある程度の収穫を得ることができたという。

ちなみにガングートは、響がレコーダーに録音していた暁の「格好良いわね」を聞かされ、恥ずかしさに身悶えしたという。

## 住めば都のS泊地（リシユリユー・コマンダンⅡテスト・速吸）

「暑いわ……」

間宮のテーブルに突っ伏しながら、リシユリユーが呻いた。

本来は凜とした佇まいの彼女だが、着任して日が浅いということもあってか、ソロモン諸島の気候には馴染めずにいた。

「コマ、ここは秋冬になってもずっとこんな感じなのかしら」

「ええ、私が知る限りではそうね。厚着を身に着けるのは北方に行くときだけよ」

「くっ……なぜリシユリユーは南方拠点に着任することになってしまったのかしら……」

ぐったりとしているリシユリユーを見て、コマンダン・テストは昨年のことを思い返した。

自分や、それより少し先に着任していたウォースパイトも大分この暑さには参っていた。たまに熱中症で倒れる艦娘もいる。

季節はとつくに秋になっているのだが、ここでは夏とほとんど変わらない。日本では秋にも残る夏の暑さを指して「残暑」というらしいが、ここは年中暑さと隣り合わせだ。この隣人を愛することは難しい。

「あの、もし良かったらこれ要りますか？」

そんなリシユリユーに、スポーツドリンクを差し出した艦娘がいた。補給艦・速吸だ。

補給作業と主要任務とする艦娘で、泊地内にいるときは常に大きなカバンを背負っている。困っている人を見かけると、そのカバンの中から役立つものを取り出して分けてくれるのだ。

「ありがとう、速吸……だったわね」

「はい。こうしてきちんと言葉を交わすのは初めてですね、リシユリユーさん」

泊地も大分大所帯になってきたので、普段あまり接点のない艦娘同

士だと数カ月までも言葉を交わさない——ということも珍しくはない。仲の良し悪しではなく、単純に顔を合わせる機会がないのである。

「海外艦の皆さんは、ここの暑さに慣れるまで時間がかかってしまうことが多いみたいですね。元々の生活圏の違いによるものでしょうか」

「そうですね。艦娘としてフランスで過ごしたことはほとんどないけれど——どうしても『母国』が基準になってしまっているところはあると思うわ」

「うーん、でも慣れるまで我慢し続けるというのも大変ですよ。……そうだ、泊地内の涼しめのスポットをご案内しましょうか」

「そういうところがあるの？」

「ええ。リシユリユーさんにとって快適かどうかは分かりませんが、暑さに弱い人たちが良く集まるところがあるんですよ」

「にこやかに告げる速吸。後日、リシユリユーはその姿がまるで女神のように見えた、と語ったという。」

「それで真つ先にここに来たんですか」

ゴウン、ゴウンと機械の動く音が響き渡る中で、明石が若干呆れたように言った。

速吸がリシユリユーとコマンダン・テストに案内したのは、泊地の一角にある工廠だった。

外と比べると格段に涼しい。理由は単純で、ここは冷房が良く効いていた。

「なるほど。ここは、クーラーをつけないと機械がオーバーヒートしてしまうものね」

「それもありますし、作業員が熱中症で倒れますよ。以前クーラーが故障したことがありますけど、そのときは地獄でしたね」

思い出すのも嫌なのか、明石はしかめっ面を浮かべた。

「作業の邪魔にならないところでなら涼んでも別にいいですけど、ご覧の通りここはうるさいですよ」

ちなみに、さつきから一同は全員声を張りながら会話をしている。それでもしないと良く聞こえないからだ。

常に機械がガシヨンガシヨンとうるさく音を立てる。場所柄仕方がないと言えど仕方ないのだが、静かに涼みたいという場合はあまり向いてなさそうだった。

とは言え、速吸がお勧めするだけあって、実例はあるようだった。何人かぐだーつとしていいる艦娘の姿が見受けられる。

その中には、海外艦筆頭のような扱いのビスマルクの姿もあった。「……あら、意外ね。ビスマルク、こんなところでぐだつとするタイプではなさそうに見えたけど」

「ああ——あれは、実験に付き合わされて力尽きてるんですよ。涼みに来たのとはちよつと事情が違います」

「実験？」

そのとき、首を傾げるリシユリーの肩を叩く者がいた。

「おぬし、確かフランスの戦艦リシユリーじゃったな」

小柄な艦娘だった。おそらく駆逐艦だろう。どことなく佇まいに高貴さを感じさせる。

「わらわは初春という。工廠に興味があるなら、いろいろと案内してやろうか」

言葉だけなら親切そうなのだが、どことなくその提案に乗るのは危険そうな気がした。直前に倒れているビスマルクの姿を見てしまったからかもしれない。

「い、いえ。今日は遠慮しておくわ。……速吸、他の場所も案内してちょうだい！」

半ば逃げるようにその場を後にする三人。

「なぜかしら。あそこであの子の誘いに乗っていたらビスマルクのようになつていた——まったく理屈では説明できないけど、不思議とそんな確信があるわ」

ある意味、少しヒヤツとすることはできた。

続いて案内されたのは図書館だった。

工場ほどはつきりと涼しさを感じるわけではないが、十分過ぎや  
すい温度・湿度である。

おまけに中はとても静かだった。何人かいるものの、皆大人しく本  
を読んでいる。

「あ、リシユリユーだ」

そんな中、無遠慮にリシユリユーを指差してくる子がいた。イタリ  
アの潜水艦娘・ルイージだ。

リシユリユーとは同時期に着任したので、泊地においては同期とい  
うことになる。基礎訓練は同期皆で受けるのがこの泊地の暗黙の  
ルールになっているため、艦種や国の違いがあっても、親交は深まり  
やすい。

「ルイージ、珍しいわね。貴方が読書なんて」

「読書なんてしないよ、涼みに来ただけ。リシユリユーも同じでしょ」

「……そ、そんなことないわよ。このリシユリユーがそんな理由で図  
書館に足を運ぶわけないじゃない」

と、凶星を突かれたリシユリユーは、なぜか見栄を張ってそんなこ  
とを言ってしまった。

それは誰の目にも分かる見栄っ張りだったようで、速吸やコマンド  
ン・テストだけでなく、ルイージすら「えー」と疑惑の眼差しを向け  
ていた。

「じゃ、何読むのさ」

「……そ、そうねえ」

適当にぶらつく素振りを見せながらも、リシユリユーは意識を集中  
させて本棚に目を走らせた。

そして、そのとき致命的な問題点に気づいてしまう。

「……この本——全部日本語ッ……！」

日本の艦隊に属することになる以上、リシユリユーとて日本語はあ  
る程度使える。ただ、あくまである程度だ。本格的に書籍を読み込む  
ほど得意なわけではない。

タイトルを見てもサッパリ意味が分からないものが多い。どんな  
本か見当もつかない。その中から何を選べというのか。



こちらをじーつと見てくるルイージ。迂闊な行動を取れば、その顛末は同期の中であつという間に広まってしまうだろう。醜態をさらすわけにはいかない。

「そ・う・ね……ど・う・し・よ・う・か・し・ら」

いかにも本を選んでいますという雰囲気演出しつつ、必死に頭を働かせるリシユリユー。

そのとき、そんな彼女の肩を叩く者がいた。

「何を読むのか悩んでいるなら、これお勧めですよ！」

そこにいたのは、日本の潜水空母——伊401だった。

彼女が差し出してきた書籍の表紙には、水上機らしい機体がプリントされている。

「えつと、これは……？」

「晴嵐さんです」

「……えつと」

「お勧めですよ」

「……そ、そう」

なぜか気圧されるものを感じて、リシユリユーは頷くことしかできなかった。

「読んだら是非感想聞かせてくださいね！ もし良かったら積んでみるのもお勧めですよ！」

そう言い残して、伊401は去ってしまった。

「……リシユリユー、これ積めたかしら？」

初めて聞いた機体名に、リシユリユーは首を捻ることしかできなかった。

以下、今回の後日談。

その後も速吸にいろいろなスポットを案内してもらったリシユリユーだったが、行く先々で個性的な面々に振り回され、落ち着ける場所を発見することはできなかったという。ただ、それがきっかけで様々な面子に絡まれることが増えて、暑さを感じるような暇はなくなっただとか。

「速吸。もしかして最初からそれが——リシユリユ—と皆を引き合わせるのが狙いだったのでは？」

後日、コマンダン・テストにそう聞かれた速吸は、ただ困ったような笑みを浮かべたという。

## 補佐官妙高の夜（妙高・羽黒・五月雨）

その日、妙高は泊地の司令部室で書類仕事に追われていた。

提督が直接執務を行う執務室の隣に設けられた部屋で、ここには普段司令部に属するメンバーが集まって仕事をしている。妙高は司令部直属のメンバーではないが、メンバーの補佐を行う補佐官の一人だった。今日は重巡代表として司令部に属している古鷹が休暇で不在のため、代理として妙高が詰めているのである。

「ふう、だいたい片付いたわね……」

この泊地も、艦娘・スタッフ合わせて二百名を超える構成員がいる。日々様々な仕事が発生するので、司令部のメンバーに暇はなかなか訪れない。

仕事が一区切りついたと思ったら、既に日は暮れていた。司令部メンバーも当直の妙高以外は皆帰っている。

「……うーん、これからどうしようかしら」

自分で用意してきた夕食を口にしながら、交代時間まで何をして過ごすか考える。

何かあったときに対応するため待機していること——当直に求められているのはそれくらいで、基本的に何をして過ごしても文句を言われることはない。仮眠する者、趣味に時間を費やす者、明日以降の分の仕事を片付ける者等、この時間の過ごし方は十人十色である。

隣の執務室を覗いてみたが、そちらにも人影はなかった。

「提督がいらしたら将棋でも、と思ったのだけど……。当てが外れたわね」

何か適当に司令部室にある本でも読んで過ごそうか——そう考えた矢先、司令部室の扉をノックする音が聞こえた。

「はい、どうぞぞ」

「失礼します」

控えめな声と共に入ってきたのは、姉妹艦の羽黒だった。その後ろには駆逐艦五月雨もくつついている。

「羽黒、それに五月雨も。どうしたの？」

司令部室に誰かが来るということとは、大なり小なり何かあったということだ。

「妙高姉さん、涼風ちゃんを見かけなかった？」

「一緒に夕食を食べる約束してたんですけど、全然来なくて……。携帯も繋がらないんです」

涼風は五月雨と同じ白露型駆逐艦の艦娘だ。活発な子で、時折妙なトラブルを巻き起こすことがある。

「今日は見えてないわね。少なくともここには来てないわ」

待ちぼうけを喰らっていた五月雨に羽黒が声をかけて、今は二人で涼風を捜索しているとのことだった。

泊地あるいは島から離れる場合、この艦娘は司令部に届けを出して許可を得る必要がある。そのリストを確認してみたが、涼風からの外出申請は出ていなかった。

「涼風はフリーダムなどところがあるけど、規則を破るような子ではないし、多分島のどこかにはいると思うわ」

とは言え、泊地があるこの島もそれなりに広い。一人一人を探し出すのはなかなか難しいだろう。

「五月雨。涼風の今日の予定について何か聞いていることはない？」

「えっと……今日は休暇で、午前中は深雪ちゃんや卯月ちゃんたちと一緒に島の探検に行ってくるって言ってました」

「物凄く不安になる名前が出てきたわね……」

深雪・卯月・涼風、そして朝霜を加えた四人は、この泊地の駆逐艦の中でも特に何かを仕出かすことが多いメンバーだった。悪い子たちではないのだが、頭で考えるよりとりあえず行動してみるというタイプで、結果的にトラブルを引き起こすことが多い。

「とは言え手掛かりにはなるわね。ちよつと待ってて」

妙高は自分の携帯を取り出して、深雪に電話をかけた。

『はい、もしもし。妙高さん、どうかしたの？』

さほど間を置かず深雪が電話に出た。

「深雪。涼風と今一緒だったりする？」

『涼風？ いや、夕方までは一緒だったけどその後のことは知らない』

な。なんか工場に行くって言うってたけど』

「そう。もし涼風を見かけたら、五月雨が探してるから連絡するよう  
に伝えておいて」

『りょーかい』

電話を切つて事情を羽黒と五月雨にも説明する。

「工場は電波遮断してるから、涼風もそこにいるのかもしれないわね。  
様子を見に行ってみましょう」

司令部室の扉に『退席中』と書かれた札を貼り付けて、三人は工場  
へと足を運ぶことにした。

工場の中はいつもと変わらず機械の音で溢れ返っていた。

ただ、人の姿はない。いつもなら技術部の誰かか工場長である伊東  
というスタッフがいるのだが、今日は誰とも遭遇しなかった。

工場の中をしばらく歩き回って見つけたのは、工場妖精一人だけ  
だった。

「伊東なら那智たちと飲みに行つた。技術部の奴らは昨日まで米艦載  
機の改修でアレコレやって力尽きたみたいで、今日は見てないな」

電子タバコを嗜みながら工場妖精は淡々と答えた。常にクールな  
態度を崩さない妖精さんなのである。

「あの、涼風はこちらに来ませんでしたか？」

五月雨の問いに、工場妖精は「うーん？」と首を捻っていた。

「……ああ、涼風なら夕方頃、明石の部屋に入つていったな。出てきた  
ところは見てないから、まだ中にいるのかもしれない」

この工場の中には、明石の許可なく立ち入ることのできない部屋が  
ある。ある程度方法が確立された装備改修を行うための専用の部屋  
だ。改修する際、その装備の使い手が細かい調整をするために助手と  
して呼ばれることはあるが、それ以外に明石以外が立ち入ることは滅  
多にない。

「でも、涼風ちゃんが装備改修の助手として呼ばれたことってありま  
したっけ……」

「少なくとも私は聞いたことないわね。五月雨は何か知ってる？」

「すみません、私も……」

「ここで議論するより、行ってみて確認すればいいんじゃないか」

工場妖精の言う通りだった。三人はその足で明石の改修部屋の前に向かう。部屋の扉には「作業中」という札が掲げられていた。

ただ、作業中なら何か物音がしそうなものだが、中からは何の音も聞こえない。

「明石。ちよつと良いかしら」

「んー、どうぞー。鍵は開いてますよー」

ノックをしたところ、中から明石の声が聞こえてきた。

扉を開けると、そこには作業着姿の明石と、毛布にくるまれた涼風の姿があった。

「ありや、皆さんどうしたんですか。あ、涼風ちゃん探しに来たとか？」

五月雨の姿を見てなんとなく状況を察したらしい。明石はすっかり眠りこけている涼風を見て、困ったような笑みを浮かべた。

待たされた仕返しか、五月雨が涼風の頬を突き始める。「うーん、やめろお」と涼風が寝言を口にした。

「明石。涼風はここで何を……？」

そんな微笑ましい光景を見ながら、妙高は明石に疑問をぶつけた。

「島で珍しい石を拾ったから姉妹艦に加工してプレゼントしたいーって来たんですよ。作業開始して程なく寝ちゃったんで中断してますけど」

「探検してたから疲れたのかもしれないわね」

遊び盛りの子どもみたいだった。

「むう」

と、五月雨が涼風の頬から手を離れた。事情を聞いて待たされた不満をどうすれば良いか分からなくなったらしい。

「……明石さん、私ここで少し待っていていいですか？」

「いいわよー。退屈かもしれないけど」

「ありがとうございます。涼風が起きたら、一緒にプレゼント作ろうかって思ってます」

涼風の頭を優しく撫でながら、五月雨は姉の顔を見せるのだった。

「なんにしても、何事もなくて良かったわ」

羽黒と二人工廠から出たところで、妙高が安堵の息をこぼした。

「……まあ、眠りこけていたのは良くないと思うけど。待たされた五月雨が許すのなら私たちがとやかく言うことではないわね」

「あ、あはは……。まあ忘れてすっぽかしたってわけではないみたいだし」

羽黒がフォローするように言った。

「そうだ、羽黒。この後時間あるかしら」

「時間？ うん、空いてるよ」

「だったら少し司令部室にこない？ 一人で退屈していたから、将棋の相手でもしてくれると助かるんだけど」

将棋、というキーワードに対して羽黒が若干表情を曇らせた。

「姉さん、勝つまでやめないから将棋はちよつと……」

「大丈夫よ、三戦まででいいから」

「この前足柄姉さんにそう言って挑んで十回やってなかったっけ……」

「あら。大丈夫よ、私だっていつまでも下手の横好きじゃないんだから」

やや渋る妹を必死に説得しながら、妙高は司令部室に戻っていく。  
まだまだ夜は長そうだった。

## 快適なインドアライフを求めて（望月・三日月・龍鳳）

近頃、駆逐艦望月には悩みがあった。

「ジトジトし過ぎだろ……」

手にしていた携帯ゲーム機から視線を逸らし、自室を見回す。

至るところに、洗濯物がかけられている。部屋に干せるものは全部干してやろうという鋼鉄の意志を感じさせる光景だ。

重い腰を上げて部屋の扉を開けてみる。しかし、湿度はちつとも緩和されなかった。部屋の外——艦隊寮の廊下にも様々な洗濯物がかけられていた。

「まるで寮全体がプールになったようだ」

このS泊地がある地域は高温多湿で雨が多く、外で洗濯物を干しにくいという悩みを抱えている。そのため部屋干し自体は珍しくないのだが、今回の部屋干しのポリウム感たるや、普段が丙なら甲というべき凄まじさである。

「仕方ないよ、もつちー。ここ最近雨がずっと続いてるんだし」

「分かる。分かるよミカ。だけどこれは流石にどげんかせんといかん」

「なんで宮崎弁」

「実際は鹿児島弁らしいよ。ソースはネット」

「はいはい。でもどうするの、天候なんてどうにもできないよ?」

窓の外を見ると、今日も相変わらずの雨模様だった。程良い雨具合なら眠気が増すくらいで良いのだが、最近のはちよつと酷い。

天候を操作することができれば万々歳だが、それは神の御業である。

「乾燥機ないんだっけ」

「多少はあるけど、寮全体の洗濯物をカバーするだけの数はないなあ」「そっか。今から注文したとしても、来るのは結構先になりそうだな……」

現在この寮にあるものでやれることは一通り三日月がやっているのだろう。



三日月がやらなさそうなことで、何かできることはないか。望月は頭を捻った。

「……寮の中で焚火して乾かせない？」

「真顔で何言ってるのもつちー。火事になったらどうするの」

「ならないよ大丈夫だよ根拠はないけど」

「却下ね」

「うー」

両腕でバツ印を作る三日月の前に、無力な望月が倒れ伏した。単にやる気が尽きただけとも言える。

「万策尽きた……。あたしはもう駄目だ。ミカ、睦月たちによろしく伝えておいてくれ……」

「また大袈裟な……。あれ？」

三日月が窓際に近づいて、外の様子をじっと見ていた。

「どったのミカ。深海棲艦でも攻めてきた？」

「それは洒落にならないよもつちー。じゃなくて、煙が」

「煙い？」

のっそりと起き上がった望月も窓際からその様子を眺めた。

確かに、雨にもかかわらず煙が昇っている。

「万一火事になったらまずいし、様子見に行った方が良いかな」

「えー、いいよ。雲龍たちがまた茶器でも焼いてるんじゃないの」

「違うかもしれないでしょ。ほら、行くよ！」

「いーやーだー」

力のない声を上げながら、望月は三日月に引っ張られていくのだった。

合羽を着こんだ二人が煙の発生源のところに向かうと、そこには工廠長を務める伊東と軽空母の龍鳳がいた。

煙はいくつか並べられているドラム缶から出ていた。どうやら何かを蒸し焼きしているらしい。

「あの、何をされてるんですか？」

声をかけると、伊東が「おう」と少し驚いたような声を上げた。

「三日月と望月か。雨音のせいかな全然気づかなかった」

伊東はがっしりとした体躯の壮年の男性だ。普段は工廠にこもっていることが多いが、たまに外に出て何かを作ったりすることもある。

「竹炭を作ってるんですよ」

龍鳳が三日月の疑問に答えた。

「潜水艦寮の湿気が酷くて、どうにかしようと思ひまして。明石さんたちに相談していたところ、伊東さんが『竹炭なら湿気対策になる』と」

「竹なら割と有り余ってるだろうから、ドラム缶使って蒸し焼きすれば竹炭にできるしな」

「なるほど。潜水艦寮は、いろいろと大変そうですね……」

この泊地は艦種ではなく、いくつかの艦隊ごとに寮が分かれている。ただ、潜水艦は水上艦と生活サイクルがかなり違うということから、例外的に潜水艦寮という専用の寮が用意されていた。

龍鳳は水上艦だが潜水母艦大鯨という別名を持っており、潜水艦と縁が深い。そのため普段は潜水艦寮で生活をしている。潜水艦たちの母艦ということもあってか、優しい母親的ポジションになっていた。

「普段着だけじゃなくて、任務で使う水着とかもいっぱい干さないといけないから……」

「建物自体海側に面してるからか、なんかじとつとしてる感じもするんだよな、あの辺」

扇子で龍鳳や三日月・望月たちを扇ぎながら、伊東がげんなりした表情を浮かべた。人間にとっても最近の湿度はきついらしい。

「湿気対策か……。洗濯物が乾きやすくなるかどうかはともかく、室内の不快感は軽減できそうだな」

「そうだね。うちの寮の分も作ろうか」

伊東曰く、使う竹の見極めや火加減の難しさはあるが、工程自体はさほど複雑なものではないらしい。ただ、炭になるまでそれなりに時間がかかるそうなので、その間ここで見張っている必要がある。

「……やっぱやめようか」

「諦めるの早いよもっちー！」

引き上げようとする望月の裾を、三日月が慌てて掴んだ。

「数時間雨の中で代わり映えないドラマ缶見続けるなんて、一種の拷問じゃないか」

「……もう」

はあ、と溜息をついて三日月は手を離す。

「分かったよ。それじゃもっちーは先に戻ってて。私やってくから」

「……お、おう？」

自由になった手をぷらぷらさせながら、望月は戸惑いの表情を浮かべた。

てつきり強引に付き合わされるものかと思っていたのに、拍子抜けした——そんな顔をしている。

「……それじゃ、あたしは帰るぞ」

「うん」

「ほんとに帰るぞ」

「うん、分かった」

三日月は特に怒っているわけでもなさそう、淡々と望月の言葉に応じていた。

望月はそんな三日月をしばらくじつと見ていたが、やがて頭を掻きむしりながら「あー」と唸り声をあげた。

「分かった、分かったよ。付き合うよ」

「え、いいの？」

「ミカだけに任せるのも悪いしな……」

「そっか、ありがとう。もっちーならそう言ってくれと思うってたんだ」

にこやかに言われて、望月は面白くなさそうに口を尖らせた。

「……なんか、掌の上で転がされてる気がする」

「よくできた女房と駄目亭主の構図みたいだな」

「うるさい」

余計なことを口にした伊東に膝カツクンを仕掛けながら、望月は顔

を赤くするのだった。

それから小一時間。

「……望月ちゃん、そんなに作るの？」

望月たちが準備した竹入りのドラム缶の数を見て、龍鳳が驚きの声を上げた。

「なんでも、竹炭をまとめて生産して他の寮に売りさばくんだそうで……」

三日月が苦笑しながら龍鳳の疑問に応える。

一方、望月は既に頭の中で勘定を始めているのか、ぶつぶつと何か数字を口にしていた。

「あ、あはは……。商魂たくましいんだね」

「あたしはただ働きは嫌いなんだ」

大量のドラム缶を前に、望月はドヤ顔で拳を握り締めた。

以下、今回の後日談。

意気揚々と大量生産した竹炭を売りさばこうとした望月だったが、意外と成果は芳しくなかった。

なぜなら、売ろうとする相手の大半が「あ、それなら自分で作る」という反応だったからである。

「理解できない……。タイムイズマネーじゃないのか。なぜ皆面倒なことを進んでやろうとするんだ……」

大量に売れ残った竹炭を前に、望月はがつくりと肩を落とす。

「で、どうするのこれ……」

「……どうしようか」

結局、処分するのも勿体ないということで、泊地の司令部に贈呈することになったとか。

世の中、そう簡単には儲からないものらしい。

流れものの即興曲（睦月・如月・霧島・比叡）

その日、駆逐艦睦月・如月は他の皆と一緒に近場の浜辺で掃除をしていた。

大きな嵐が去った後などは、浜辺に大量の漂着物が溜まっていることがある。それを片付けているのだった。

「今回も大分溜まってるわねえ……」

「よく分かんない生き物の死骸とかも転がってるね」

げんなりした様子で睦月が呻いた。

今回は結構な長期間大雨が続いた。いつもより漂着物も多い気がする。

使えそうなものは分類してまとめておかなければならないし、この掃除は結構大変なのである。今回はとりあえず十人前後で来ているが、もうちよつと応援を呼んだ方が良いかもしれない。

「近場で貨物船でも沈んだのかしらね。いろいろと積荷っぽいものが多いけれど……」

折り畳み式の箱が結構目につく。他にも娯楽用のオモチャと思われるものがいくつも見受けられた。

「あら。これ……」

オモチャの中に紛れて、弦楽器らしきものが転がっていた。

細かいところは破損しているようだが、全体として見るとそこまで酷い状態ではなさそうに見える。

「およ。それギター?」

「私もあまり詳しくはないけど……」

「貸して貸して」

如月から楽器を受け取ると、睦月は早速ポロロンポロロンと弦を弾き始めた。

「睦月ちゃん、楽器できるの?」

「んーん、適当」

適当な鼻歌を歌いながら弦を弾き続ける睦月。それはそれで微笑ましい光景だったが、楽器の奏でる音は少々歪な感じがした。

「やっぱり修理しないと駄目みたいね」

「うーん、でも楽器の修理って……明石さんたち出来るのかな」

「艀装とはまた違うものね」

泊地には工作艦明石や艀装の研究開発を行う技術部の面々がいるが、さすがに楽器は専門外のはずだ。

「せっかく拾ったものだけど、諦めるしかないわね」

「むむ……残念だけどやむを得ないにやしい」

そのとき、諦めて楽器を置こうとした睦月の肩に手を置く者がいた。

「諦めるのはまだ早いですよ」

眼鏡をキラリと光らせながら楽器を取ったのは、高速戦艦の艦娘――霧島だった。

「あら、霧島さん直せるの？」

「いえ、残念ながら私は打楽器専門なので弦楽器はサツパリです」

言われて、二人は脳裏にドラムを叩く霧島の姿を思い浮かべた。妙に様になっている。

「ですがお姉様たちは造詣が深かったはずです。掃除の後で二人のところに持ち込んでみましょう」

「おおー！」

「――なので、今はきちんと掃除に集中しましょうね」

「……あ、はい」

どうやら、遊んでいる二人を注意しに来たらしい。

にこやかな霧島の表情の裏に蒼白い炎のようなものを見て、二人は揃って敬礼するのだった。

「うん。これならどうにか直せると思うよ」

しばらく弦楽器を眺めていた比叡は、二人に向かって力強く頷いてみせた。

ここは金剛と比叡の部屋。金剛は不在だったが、比叡は部屋で暇を持て余していたようで、快く弦楽器を見てくれた。

「……結構楽器類多いんですね」

比叡が弦楽器を確認している間、睦月たちは部屋の様子をそれとなく見学していたのだが、割と沢山楽器が置かれているのが目についた。

「金剛お姉様が楽器好きなんだ。最初は『優雅なクラシックこそ至高デースー!』って言ってたんだけど、提督の影響で和楽器にハマって、そこから段々ジャンル問わずあらゆる楽器に手を出すようになって」「そういえば司令官……新さんは和楽器好きだったわね。そんなところからこんな影響が……」

「言われてみれば、たまに金剛さんたちゲリラライブしてるの見たことあるにゃしい」

さほど頻度は多くないが、金剛姉妹が揃って何かを演奏することがあった。あれはどうやら提督の影響によるものらしい。

「楽しいよー、睦月ちゃんたちもやってみたいんじやないかな」  
「正直楽器は有り余ってるから、必要だったら貸し出せると思うわよ。漂着物とか捨てられそうだったものを修理したのがほとんどだから、品質は保証できないけど」

「そういうわけだから、修理はお手の物なんだよね」

確かに部屋の楽器はどれも年季が入っていた。ところどころ外観に違和感のある個所も見受けられる。ただ、試しに使ってみると音はきちんと出た。

「と言っても睦月たち楽器なんて全然やったことないにゃしい」

「そうねえ。人間の学校ではリコーダーやるって聞くけど、ここじゃそんなに数揃えられないからってやってないし……」

「プロとしてやっていくわけでもなし、まずは適当に楽器を使うところから始めれば良いと思うわよ」

霧島からおそろしくぎっくりとしたアドバイスが出た。比叡もうんうんと頷いているので、金剛姉妹はそういうスタンスで音楽をやっているのかもしれない。

「何か好きな音楽とかあるなら、それを做ってみるのも良いかもしれないね」

霧島のアドバイスに戸惑う二人に、比叡が助け舟を出した。

「好きな音楽か……」

如月が手に取ったのは竹製の横笛だった。どことなく和楽器らしい感じがする。

試しに吹いてみると、高めの抜けるような音色が出た。

「おー、上手い上手い。如月ちゃん、和楽器得意だったっけ」

「ううん。前に新さんが吹いてのを見たことがあるだけ。好きな音楽かどうかはちよつと自信ないけれど——なんとなく印象に残っていたから」

普段あまり聴くことのない音色に引きずられたのか、如月は昔を懐かしんでいるようだった。その表情は嬉しそうでもあり、どことなく寂しそうでもある。

一方、睦月は三味線のようなものを引つ張ってきた。セットになっていた撥で弦を弾き「あーよいよいっ」と声を出す。ベンベンと音を奏でながら、適当に即興のものと思われる歌を歌い始めた。

明らかに適当にやっているのだが、不思議と様にはなっている。

「睦月ちゃん、楽しそうね。なんだか見てる方も楽しくなってくるわ」「そ、そうかにやー。……うん、音楽全然分かんないけど、こうやって楽器弾いて歌うのは気持ちいい感じするよ」

「その三味線でいいなら、しばらく貸してあげるよ」

二人の様子を見ていた比叡が、笑いながら言った。

「笛の方は金剛お姉様のだから私から貸すことは出来ないけど、作り方なら教えてあげられると思う。どうする？」

「……そうね。せっかくだし、やってみようかしら。手作りというもの、うちらしいといえばうちらしいし」

横笛を比叡に返しながら如月が頷く。

彼女の脳裏には、かつて司令官が笛を吹いていた光景が浮かんでくるのかもしれない。

それからしばらく経った日の昼下がり。

金剛姉妹が揃って紅茶を飲んでいると、どこからともなく和楽器の演奏が聞こえてきた。



正直、あまり全体としてはまとまっておらず、しつちやかめつちやかな感じではあるのだが――。

「なんだか、楽しそうに演奏している様子が浮かぶようです」

榛名のそんなコメントに、比叡と霧島は顔を見合わせて笑い合っていた。

盤上のベースボール（1）（第十七駆逐隊・アイオワ・サラトガ・瑞鶴・衣笠）

「試合がやりたいのう」

ある日、谷風とキャッチボールをしながら、浦風が恨めしそうにぼやいた。

「相手がいないんじゃない？」

ボールを返しながら谷風が応じる。

このS泊地には、浦風がキャプテンを務める野球部が存在している。一応メンバーは現時点で十二人いるのだが、いかんせん相手チームがないので試合とは無縁なのだった。チームを二つに分けられるほどの人数がいれば良いのだが、十二人では全然足りない。

「それは分かっどる……。分かっどるんじゃないけど……」

浦風が不満そうに口を尖らせながら返球する。

谷風には、彼女がこんな調子になっている理由が分かっていた。昨晩日本シリーズがあつたからだ。

ペナントレース終了から日本シリーズまでのこの期間は、浦風の野球熱が高まる時期なのである。毎年そうなのだろう。

「お隣のブインでも野球チーム作ってくれば対戦できるのになあ」

「あつちではバスケが流行ってるみたいだし仕方ない」

「バスケ……。羨ましいなあ、十人いれば試合になるんじゃないあ」

段々とやる気がなくなってきたらしい。とうとう浦風はキャッチボールを放棄して、その場でボールとグローブを使ったジャグリングを始めてしまった。

これはしばらく放っておくしかないか——谷風がそう思い始めたとき、横から「それなら」と声がした。

「それなら——グラウンドを使った野球盤試合を行うのはどう？」

磯風とキャッチボールをしていた浜風が、心なしか得意げに言った。

「野球盤試合？」

「そう。何度かテレビで見たけど……グラウンドを大きな野球盤に見立てて、チームごとに打ち合うの。で、ボールが行き着いた場所に書いてあった内容がそのまま打った結果になる。『2ヒット』のところに止まったら2ヒット、みたいなの」

「そうなる？と守備はいらんね。ランナーは？」

「出てなかったと思う。ピッチャーもいなかった。実際の選手はバッティングマシーンが投げた球を打っただけ」

「うーん、ちよつと物足りんけど……でも試合にはなるな」

浦風は少し逡巡したが、うん、と頷いて表情を明るくした。

「それじゃ、浜風の提案に乗ってやってみようか！」

そんなこんなで翌日、野球部のメンバーで空いているメンバーが泊地裏手の大広場に集まったのだった。

大広場は既に野球盤仕様に改良されている。と言っても、四方を網で囲んだり、白線でヒットマスを描いたりしたただけだが。

周囲には野球部メンバー以外にも非番の艦娘たちが何人か集まってきた。

「今日は初めてということなので、試合は三回までの簡素なものにしますね」

審判姿でそう告げたのは、教会のシスターである珠子だった。彼女は野球部の顧問ということになっている。そこまで詳しいわけではないが、野球のルールは一通り把握していた。

珠子の前に並んだのは、浦風・谷風・浜風・磯風・瑞鶴・衣笠・サラトガ・アイオワの八名である。

「メジャーリーガーの力、見せてあげるわ！」

「いや、私たち別にメジャーリーガーではないけどね」

気合を入れてホームラン宣言っぽいポーズを取るアイオワに、サラトガが控え目なツツコミを入れる。

サラトガの言う通り二人は別にメジャーリーガーでも何でもないが、野球は好きらしく割と積極的に練習に参加しに来るメンバーだった。今回の試合でも気合十分なようである。

「チーム分けはバランス考えて『浜風・磯風・衣笠・サラトガ』と『浦風・谷風・アイオワ・瑞鶴』で良いですか？」

「ええよええよ、それより早う試合やろう！」

浦風もすつかり試合が出来るということに興奮しているようだった。普段と比べると少々子どもっぽくなっている。

「分かりました。浦風さんがすつかりお待ちかねみたいなので始めましょう。——瑞鶴さん、お願いします！」

「はいはい」

珠子に呼びかけられて、マウンドに立っていた瑞鶴が応じた。彼女と衣笠はそれぞれ両チームのピッチャー役だ。昨日今日でバッテリーが用意できなかったのも、今回は普通にピッチャーを立てせることにしたのである。

「言つとくけど両チームとも、今日はどつちにも打たせるつもりはないからね。たつぷり泣かせてあげるわ！」

「ふっ、泣きを見るのはどちらかな」

そう言つて打席に入ったのは磯風だった。

「今日は全打席ホームランを打つと予告しよう」

「ほほーう。いいわよ、それなら一度でもホームラン打てたら間宮券一個あげるわ」

ギリリと磯風の目が光る。一方、瑞鶴の背後にも青白い炎が浮かび上がったような気がした。

瑞鶴が大きく振りかぶり、背中が見えるくらい身体を大きくひねった。

「おおつ、トルネード投法だアレ」

「ノモ!? ノモなの!？」

「瑞鶴さん、練習のときたまにやってみましたけど……できるんですよ  
うか」

谷風・アイオワ・浜風のコメントを吹き飛ばすかのような鋭い球が、瑞鶴の手から放たれた。

ズバンと綺麗な音を立てて、キャッチャー代わりの網に球が突き刺さる。

場の空気が——止まったような気がした。

「ボールですね」

無情な珠子の宣言。

それに、打席の磯風がニヤリと笑みを浮かべた。

「へいへーい、ピッチャービビってるー?」

「う、うるせー!」

顔を真っ赤にして、瑞鶴が地団駄を踏んだ。

「瑞鶴、落ち着いて! 普段通り投げれば大丈夫よ!」

「そ、そうよねサラトガ!」

「貴方がストライクゾーンに入れてくれないと話が進まないわ!」

「悪かったな——!?!」

応援なのか微妙な声援を受けて、瑞鶴は再び絶叫する。

「普通に投げればいいんで——しよ!」

今度は普通のオーバースローで投げる。

放たれた球は、確かにストライクゾーンに入っていた。

「ホーム、ランツ!」

しかし、その軌道を磯風は読んでいた。迷いなく振られたバットが、容赦なく球を打ち返す。

ただ、芯には当たらなかったらしい。瑞鶴の頭上を越えて、センター付近に飛んでいく。

その先には、アウトのエリアと2ヒットのエリアが並んでいた。

「アウト、アウトに落ちろ……っ」

浦風が呪いを込めるかのような声音で念じる。

それが功を奏したのか——球はアウトエリアで止まった。

「へいへーい、ホームランじゃないのー?」

先ほどの意趣返ししか、瑞鶴が磯風に挑発の言葉を返す。

「……瑞鶴」

「ん?」

「三回までに絶対お前のツインテールを刈り取ってやるからな……っ!」

「それはどう反応すればいいわけ——っ!?!」

次いで打席に立つのはサラトガだった。

「フフフ、私は堅実に行かせてもらうわね。そう——S泊地のイチローとは私のことよ！」

「アメリカ出身なら他に挙げられる名前ないのけ……？」

浦風の指摘に動じることなく、サラトガはバッターボックスでゆらゆらとバットと身体を動かし続ける。

「くっ……微妙に投げにくいわね……何のせいとは言わないけど！」

微妙に苛立ちを見せながら、瑞鶴が大きく振りかぶった。

「同じ空母仲間だからって遠慮はしないわよ——喰らえ恵まれし者！」

「恵ま——えっ!?!」

よく分からないままサラトガがバットを振る。

カーン、と良い音が響いた。

サラトガが打った打球が、大きく遠く飛んでいく。

その球は、広場を囲む網の中へと吸い込まれていった。

「——ホームランです！」

「おおっ……!」

「やりましたね、サラトガさん！ 大きい一発です！」

珠子の宣言に、磯風や浜風が歓声を上げる。

一方、マウンド上の瑞鶴はやや呆然とした様子で打球の飛んで行った方を眺めていた。

「……大丈夫？」

隣に控えていた衣笠が心配して声をかけると、瑞鶴は「ふっ」と悟ったような表情を浮かべた。

「大きいものを持つてる艦娘は、やっぱりでかい一発を持っていくのね……」

「超解釈にも程があるでしょ、それ」

そう言って、衣笠は心底嫌そうな顔を浮かべるのだった。

盤上のベースボール（2）（第十七駆逐隊・アイオワ・サラトガ・瑞鶴・衣笠）

その後、1回裏、2回、3回と試合は進んでいく。

両チームはそれぞれ多くのヒットを叩き出し、3回裏開始時点で10対7という点数を出していた。

この大量失点に、瑞鶴・衣笠のピッチャー二名はすっかりブルーになっっている。

「な、なぜだ……。衣笠さんの秘密兵器、大魔神並に落ちるフォークボールがあつさり打たれるなど……」

「いやそこまでは落ちてないし。っていうか三振ゼロってのがへこむわ」

「まあまあ、艦娘の皆さんは日頃の戦いで動体視力が優れてる子が多いですし……これは仕方ないのでは」

地面に「の」の字を書き始めかねない二人を見かねて、審判役の珠子がフォローを入れた。

一方、バッター陣はバカスカ打ててご満悦のようだった。

「芯に当たってパツカーンと飛んでいく様は気持ちいいわね！」

「そうじゃねえ。守備や走者も悪くないけど、やっぱうちは打つのが一番好きじゃ」

「谷風さんはズバーっと盗塁するの好きだから今回は物足りないねえ」

「そこ、ピッチャー陣の傷口に塩塗り付けないでください！」

ピピーツとホイッスルを鳴らしながらイエローカードを掲げる珠子に、浦風たちは「お口にチャック」のジェスチャーをした。

「楽しんでるのは結構だが、あと3点取らなければ我々の勝利だぞ、浦風」

と、そこに「ふふん」と勝ち誇った顔の磯風がやって来た。

「3点くらい余裕じゃ余裕」

「そう上手くいくかな……?」

と、そこで磯風の裾を引つ張りながら浜風が深刻そうな面持ちを浮かべた。

「磯風、その発言はフラグです。逆転されてしまいますよ！」

「そ、そういうものなのか？」

「そういうものです。迂闊な発言は慎んでください。貴方はナチュラルに地雷原を突っ走ろうとするところがあるのですから」

「う、うん……分かった、気を付けよう」

浜風に引きずられるようにして、磯風はベンチに戻っていった。

「相変わらず磯風は浜風に弱いねえ」

浦風が微笑ましげに言う。磯風は日常生活において浜風の世話になっっていることが多く、彼女相手には頭が上がらないところがあるようだった。

「とは言え、正直ちよっとピンチなのは確かだね」

珠子のフォローで立ち直った衣笠が投球練習をする様を見て、谷風が難しい顔をした。

「衣笠は尻上がりタイプのピッチャーじゃけえ、そろそろ暖まってきた頃合いかね」

「ノリに乗った衣笠はちよっと怖いわね」

浦風とアイオワも谷風に同意した。調子のよいときの衣笠相手だと、安定してヒットを取るのが非常に難しい。

衣笠は複数の変化球を駆使する技巧派タイプのピッチャーなのだが、変化球のキレは後半になればなるほど良くなっていく。おまけに変化球の種類も豊富なため、特定の球種に絞って打つのが困難だった。

「ま、ここは谷風さんがいっちょ景気の良いところを見せてやろうじゃないか」

「おっ、谷風！ 何か秘策があるんじゃないか？」

浦風の期待に満ちた眼差しに、谷風はグツと親指を立てて応えた。

「——ストライク、バッターアウトっ！」

それから一分後、無情な結果が出された。



「いやー、駄目だった!」

「あの自信満々な態度はなんだったんじや!」

「いや、自信のなさそうな顔してたらチャンスは転がってこないという谷風さんなりのポジティブシンキングというか」

「残念ながら勝利の女神はそれに応えてくれなかったようね……」

「なら、うちが勝利の女神になるしかないね!」

バッターボックスに入り、浦風は闘志を燃やしながらマウンド上の衣笠を見据えた。

先程までのブルーな雰囲気はどこへ行ったのか、今の衣笠は夜間突入作戦で指揮を執るときのような顔つきになっている。具体的には集中力が段違いの状態になっていた。

「いかん、衣笠完全にゾーン入ってる……!」

「気後れしたらその時点で負けよ、浦風!」

尻込みしそうになったところで、アイオワからの声援が届いた。

「そ、そうじゃ……。強敵との戦いならワクワクするところ。こういう緊張感が欲しくて試合をやりたいかったんじや!」

浦風が奮起したところで、衣笠がスリークオーターで第一球を放った。

瑞鶴に比べると速度は劣るが、変化球のキレと高い制球力でギリギリのところを突いてくる——バッターにとつては嫌なスタイルである。

球が間近に迫ったところで、浦風は振ろうとしていたバットをギリギリのところまで止めた。

「……ボール!」

衣笠の放った球は、浦風の近くで大きく弧を描き、ストライクゾーンから僅かに逸れたところに入った。

チームとしては追い詰められつつあるが、この打席での勝負は始まったばかりである。まだ慌てるような時間ではない。

「やる気満々でありつつ冷静さを失ってない……。やるね、浦風」

「衣笠も大したもんじや。さっきまであんなへこんでたのに、切り替えの良さは流石じやね」

両者の視線がバチバチとぶつかり合う。

やがて、衣笠が第二球を投げた。先程の球よりかなり速い。

速球につられて浦風がバットを振る。しかし、その球は浦風のバットに当たると直前のところで大きく下に逸れた。

「ストライク！」

「しまったあ〜！」

珠子の判定と浦風の悲鳴が重なった。

「浦風のペースになるかと思っただけ、そうはさせまいと衣笠が仕掛けた……というところかしら」

サラトガの分析にアイオワが頷いた。

「あの二人は試合の流れを作ることを重視するプレイスタイルだから、型にはまれば強い。ちようど今の衣笠みたいだね」

「そんな衣笠のペースを崩そうと浦風が仕掛けたけど、攻めきれずに反撃を喰らったということね」

「衣笠の変化球は嫌なところで曲がるからやり難いのよね」

などと米艦二人が解説役に徹する中、衣笠が第三球を放つ。

これに対し、浦風は目を大きく見開いた。一步引いて、ギリギリまで球を見極めるための体勢を取る。

「ヒットを打つことだけに集中したってわけだ！」

谷風が叫ぶのと同時に、衣笠の放った球が大きくカーブを描き始める。

それを見てから、浦風がバットを振るう。

間に合うか――。

誰もが息を呑んだ瞬間、コン、という音が響いた。

衣笠が投げた球が、浦風のバットによって宙に舞う。

球はふんわりとした軌道に乗って内野を越えていく。向かう先にあるのはアウトエリア、そしてその先にある2塁打エリアだ。

球が落ちる。アウトエリアだ。しかし落ちただけで、まだ止まっただけではない。

「いけっ、いけっ……！」

「いくな、いくなっ……！」

浦風と衣笠の言葉が聞こえているのか、球はまるで戸惑うようにうねうねと進んでいく。

やがて、球の勢いが完全に止まるかどうかというところで——風が吹いた。

「いやー、良い汗かいたね」

夕刻。寮の台所で夕食を作りながら、浦風がさっぱりした表情を浮かべて言った。

「随分と元気になったようで安心したわ」

その様子を見て浜風がクスクスと笑う。

「あれ、うちそんなに元気なかつた？」

「相当悶々としているように見えた」

「悶々って……」

「浦風は普段わがまま言わないんだから、たまにはわがまま言ってみてストレス発散した方が良いと思う」

「んー、そうかねえ」

浦風はそう言って火を止めた。煮込み料理の出来上がりである。

「んじや、これから毎週今回みたいなの形式で試合する？」

「それは勘弁。……月一回くらいなら付き合うけど」

静かに微笑む浜風に対して、浦風は満面の笑みで応じるのだった。

裏司令部の奇妙な仕事（深雪・電・木曾・天城・葛城）

「海上に未確認巨大生物が現れたというのは本当か」

薄暗い室内で、低い声が聞こえた。

「先ほど海上護衛任務に出ていた部隊から報告があった。嘘をつくような連中ではない。……本当のことと見て良いだろう」

「深海棲艦ではないのだな？」

「いつぞやの霧の艦隊ではないのか？」

「違う。これまで見たことのない個体だ。深海棲艦特有の気配もない。ただ——でかい」

「でかい？ どれくらいだ」

「……ええと、おそらく1kmくらいはある」

「デカ過ぎるだろ……」

「どうすんだ、そんなでかいの」

「生き物である以上始末する手はある」

「貴重な生体サンプルになるかもしれない。無力化して確保することはできんのか」

「そんなことを言っている場合か。民間人に被害が出たらどうする」

「……提督」

一番奥に座っている人影に、誰かが声をかけた。

「方針を決めねばなりません。後手に回れば被害は拡大するばかり。ご決断を」

「うむ……そうだな」

提督と呼ばれた影はゆっくりと頷いた。

そして――。

「……お前ら、何してんだ」

シャツとカーテンが開き、室内に光が入り込んでくる。

「うおっ、眩しっ」

「そりゃこんな薄暗い部屋にいたらそうだろうよ」

呆れたように言ったのは、この泊地の司令部のメンバー・重雷装巡洋艦の木曾だ。

「また司令部ごっこか？」

「うむ。苦しゅうない」

木曾に向かつて腕を組んで応対したのは深雪だった。

「何が苦しゅうないだ阿呆。勝手に作戦室使うな。これから大事な作戦会議があるんだ」

「ん？　なんか重要な案件でもあるのか？」

「ああ、まあな——」

木曾は若干言葉を濁した。こういうときは迂闊なことが言えない事情があるケースが多い。それを察して、深雪は他の駆逐艦仲間に「仕方ない、裏司令部解散だ！」と手を叩いた。

各々が残念そうに作戦室から出ていく。

「おい深雪。お前この後暇か」

深雪が作戦室から出ようとしたところで、木曾が声をかけてきた。

「特に予定はないけど」

「だったら悪いが一つ頼まれてくれないか、裏司令部代表さん」

「えー」

木曾に限ったことではないが、司令部のメンバーからの依頼は面倒ごとを相場が決まっている。この泊地ではもはや常識だ。

「間宮券三回分」

「用件を聞こうか」

「……お前のそういうところ、俺は嫌いじゃないぞ」

そうして、木曾は深雪に依頼内容を話し始めた。

「だけど、これを運んでどうするのです？」

木曾から依頼を受けて一時間後。

大量の開発資材を載せた荷車を押す深雪に、並んで歩く電が問いを投げかけた。

彼女も深雪がいうところの裏司令部の一員で、深雪に付き合う形で荷物を運んでいる。

「多分少し前に開発方法が判明した新型米艦載機が絡んでるんじゃないかな」

「米艦載機……。ああ、開発に大量の資材と装備が必要になるっていう」

「それぞれ。空母が夜間攻撃できるようになる……。って触れ込みで大盛り上がり。特に空母組や技術部なんかはその艦載機を是非欲しいうってんで開発しようと思気込んでる。一方で水雷屋とか戦艦組は資材に見合う効果が得られるか分からないってんで慎重になってるらしい」

「どちらの言い分も分かる気はするのです。……。司令部は方針を明確にしないのですか？」

「司令部内でも意見が真つ二つに割れてるって叢雲がぼやいてたな。だから宙に浮いてる形になる」

「……。そうなると、開発賛成派が強硬手段に出る可能性もありそうですね」

この泊地では、司令部が決定したことに逆らわない限り、各艦娘の自主性を尊重するという方針がある。つまり今回の場合、件の艦載機を強引に開発しても別段咎められることはないのだ。

「以前も開発強硬派が32号電探やら46cm三連装砲を大量生産したケースがあるからな、うちは。開発否定派はそれを防ぐため、必要な資材を一時的にどこか安全な場所に隠しておきたいんだろ」

「泊地内で仁義なき抗争が起きつつあるので……」

依頼してきた木曾や、資材を快く提供してくれた明石は開発否定派なのだろう。空母組や夕張・初春たち技術部メンバーはおそらく開発肯定派だから、今頃この資材を探し回っているかもしれない。

「——ふっ、ようやく見つけたわよ」

「その資材、お譲りいただきます」

と、深雪たちの前後から突如人影が飛び出してきた。

天城と葛城だ。前方を天城が、後方を葛城がそれぞれ塞ぐ形になっている。

「ちっ、もう来たか！」

「流石に動きが速いのです……！」

荷物を運びながらこの二人を撒くのは不可能だ。と言って、駆逐艦



心底残念そうに、天城は手を引つ込めた。

「では、少々強引に事を進めさせていただきます」

「いいぜ、どつちが勝っても恨みっこなしだ……！」

その場にいた全員が、臨戦態勢に入る。

ここに、開発資材をかけた熾烈な戦いが始まろうとしていた――。

「まあ、普通に考えて駆逐艦二人で空母二人に勝てるわけではないよな」  
それから数時間後。深雪と電は、二人揃って工廠に戻って来ていた。

視線の先には、新型の艦載機を完成させて喜ぶ天城たち開発賛成派と、がつくりうなだれる明石たち開発否定派がいる。

「ごめんね、大丈夫だった？」

葛城が若干申し訳なさそうに声をかけてきた。

「平気平気。多少の怪我ならすぐ直るし。そつちこそ大丈夫だったのか？」

「あ、あはは……」

葛城は電の渾身の一発をもらって敗北寸前まで追い詰められていた。

ただ、その怪我也あつさり直つたようで、今はピンピンしている。

「ま、作つちまつたもんは仕方ないし、今後はどう有効活用するかを考えないとな」

「開発資材ほとんどなくなって、明石さんが死んだ魚の目してるのです……」

「尊い犠牲だった。無駄にしてはいけない」

倒れ伏す明石に合掌する深雪。

こうして、裏司令部の任務は失敗に終わったが――S泊地はまた一つ強力な武器を手にしたのだった。



発熱日和（天津風・雪風・島風・長良・初風・時津風・明石）

ここ数日、泊地近辺では珍しく気温が激しく変化した。

そのせいで少し調子を崩してしまつたらしい。医療室の道代先生に診てもらおうと「風邪ね」と断定された。

「喉も真つ赤だし全体的に熱っぽいわ。薬出してあげるからしばらくは安静にしてなさい、天津風」

「はい、分かりました……」

「どうする、ここで休んでく？」

「いえ、部屋に戻って休もうかと思えます」

少し休んでいれば楽になる、という感じではなさそうだった。薬をもらつて早々に部屋へ戻つた方が良いだろう。

「艦艇だった頃は風邪なんて引かなかつただけだな……」

「でも故障したりして調子悪くすることはあつたでしょ。それと同じようなものよ」

はい、と飲み薬を渡された。

中を見ると粉薬が中心となつている。

「……錠剤はないんですか？」

「粉薬苦手？ でも悪いけど、今は錠剤ないのよ」

「うう、分かりました……」

ただでさえ調子が悪いのに、気分が余計に沈み込む。粉薬は口の中にあの苦味が広がるのが凄く苦手だった。

マスクをつけて部屋に戻る途中、寮の手前で雪風とぼったり出くわした。

「あれ、天津風。風邪ですか？」

「ええ、まあね……。雪風はどうしたの？」

雪風は第一艦隊所属で、普段はそちらの寮にいる。何か用事があつてこちらに来たのだろうか。

「実は陽炎姉さんから助っ人をかき集めてくるよう頼まれたのです

！」

「そういうことなら残念だけど、うちは今ほとんど人いないわよ。初風や時津風は私用で外出中だし、イタリアさんたちも演習に出てるはずだから」

「そうですか、なら仕方ないですね。次に行くことにします」

明るくそう言って転身する雪風。こういう切り替えの早さは見習いたいところだ。

「あ、こつちが片付いたら後でお見舞い行きますね！」

「別にいいわよ、多分寝てるかもしれないし……」

「それならそれで構いません。ではっ」

ぴゅーっと効果音をつけたくなるような足取りで雪風は駆け去っていった。元気そうで実に羨ましい。

雪風のように元気になるために、私は大人しく休むことにした。

それから一時間後。

なかなか寝付けずにいると、部屋の扉が控え目に叩かれた。

「……どうぞー」

「あ、起きてた」

扉を開けて入って来たのは島風だった。

「ちゃんと寝ないと治らないよ」

「分かってるわよ。ただ、寝ようとする寝られないものなのよね……」

風邪による不快感が眠気を上回っている。だからベッドの中に入り込んでも、なかなか落ち着かないのだった。

「しよーがないなあ。じゃ私が子守歌を歌ってあげよっか」

「いいわよ別に。島風の歌って賑やかな感じするから、子守歌っぽくないし」

「む。人の厚意を素直に受け入れれないとは。……ま、病人だし今日は大目に見てあげる」

「それはどーも」

「あ、そだ」

島風はごそごそとシヨルダーバッグから銀紙に包まれた何かを取り出した。

「これ、さつき間宮さんのところで作ってきたおにぎり。ホントはおかゆとかスープの方が良いと思ったんだけど、天津風いつ食べるか分からなかったし、私この後ちよつと用事があるから、いつでも食べられるものにしたんだ」

「……ありがとう」

弱っていると、こういう気遣いが身に染みる。食事についてはちよつど作らなければと思っていたところだった。普段は普通に料理できるが、風邪のときはどうしても気が滅入ってしまう。

「ちなみに具は？」

「下手なもの入れない方が良くかなと思って、塩おにぎりです！」

「オツケー。それでいいわ」

「うん。あと、これお茶ね」

そう言つて、島風はおにぎりの入った包みと魔法瓶をベッド脇の棚の上に置く。

「それじゃ、あんまり長居するのも悪いしそろそろ行くね。早く治さないと承知しないんだから」

「そうねー。善処するわ。私も長引かせたくはないし」

「ん。じゃお大事に！」

風のように去っていく島風。

今度何かお礼をしなければ。

そんなことを考えながら、おにぎりとお茶を堪能するのだった。

気づけば眠っていたらしい。

起きて横を見ると、雪風や陽炎姉さんたちの書置きがあった。どうやら寝ている間にお見舞いに来てくれていたらしい。

黒潮姉さんと親潮姉さんが収穫したという野菜のセットが、部屋の冷蔵庫に入っていた。

今夜はこれで鍋も悪くないかなー、と思っていたところで、再び部屋の扉が叩かれた。

「おつ、起きたみたいね」

そこにいたのは長良さんと、出かけていた初風・時津風だった。

「天津風、大丈夫？ 泊地に戻って来たところで雪風から話聞いて来たんだけど」

初風がスタスタと目の前にやって来て、こちらのおでこに手を当てる。

「うーん、まだ少し熱っぽいわね」

「大分楽になった感じはするんだけど」

「風邪は治りかけが危ないって言うからねー。無理しちゃ駄目だよ」

と、初風と時津風によって強制的にベッドへと放り込まれる。

「ま、そんなわけで天津風に無理はさせられないってことで、夕飯は私たちが作ろうと思います」

「うどんもあるよー」

どこから手に入れてきたのか、時津風がうどんの入った袋を掲げて見せた。

「陽炎たちが野菜持ってきたんだよね。それ使って鍋にしている？」

「あ、はい。すみません」

「いいのいいの。誰かを助け、誰かに助けられる者であれ——ってね」

長良さんは得意げにサムズアップしてみせた。

「それじゃ行くよ、二人とも。天津風は大人しく待っててね」

そう言って、三人は野菜を持って部屋から出て行った。寮の一階にある厨房に向かったのだろう。

「……ありがたいわね。本当に」

「そうそう。こういうとき助けてくれる相手は大事にしないとイケませんよ」

と、半ば開きっぱなしになっていた扉のところから声がした。明石さんだ。

「預かっていた連装砲くんのメンテが終わったので、返却がてらお見舞いに」

そう言って、明石さんは抱えていた連装砲くんを離した。

連装砲くんは足早にベッド脇まで来て、どことなく心配そうな表情

でこちらをじつと見つめてくる。

「ああ、うん。大丈夫よ、皆に良くしてもらってるから」

そうか、という風に頷き、連装砲くんはいつもの定位置——部屋のラックの専用スペースに戻っていった。

ただ、それとなくこちらに気遣うような視線を向けてきている気がする。

「私が体調不良も治れば良かったんですけどね。艦艇と人じゃ勝手が違うので」

「……こういう風になると、自分が前とは違う存在になったんだなって強く感じますね」

「そうですね。私たち艦娘は人間とは違うかもしれないけど——前みたいな艦艇というわけでもない。ある意味、不便になったとも言えます」

「はい。でも艦艇のままだったら、こんな風に皆にお見舞いに来てもらうこともなかったなって。……そう考えると、不便なのも悪いことばかりではないのかなって思います」

それに対し、明石さんは言葉ではなく——深い笑みで応えたのだった。

楽して儲けるにはそれなりの条件が要る（日向・伊勢）

「株というのは儲かるのだろうか」

急に仕事部屋へやって来た日向が、開口一番そんなことを言ってきた。

「……いきなりなんだ」

「なんだと言われても、言葉通りの意味だ。板部先生は株はやらないのか」

「やってそうに見えるか？」

「見えるから聞きに来たんだ」

ある種純粋な眼差しをこちらに向けてくる。

「期待に沿えず悪いが俺は株もFXも投資信託もやらない。定期預金と国債くらいだ」

「なんだ、意外と堅実なんだな」

「お前が普段どういう目で見ているかよく分かる発言だな」

泊地のシステム全般を担当するエンジニア兼艦娘たちの教師を務めているからか、俺のところにはこうした相談事がよく飛び込んでくる。こういう微妙に失礼な物言いもそろそろ慣れてきた。

「やってないからつまらんことを言わせてもらおうが、株で儲けられるのはセンスと情熱と元手を持つてる、一部の限られた人間だけだと思うぞ。ちよつと儲けたいって程度の考えならやめておけ」

「そうか、やはり駄目か。伊勢にも同じことを言われた」

そうだろう。身近な相手がいきなり株やらFXやら言い出したら警告したくなるのは分かる。

別にその手段を否定するわけではないが、向き不向きや勝者敗者により明確に出してしまう界限だとは思う。最初は儲けることよりも学習目的で始めた方が良くないだろうか。

その旨を日向に伝えると、日向はやや無念そうに頭を振った。

「それでは駄目だ。私はなるべく早いうちに金が欲しい」

「……おい、まさか借金してるとかじゃないだろうな」

この泊地や島に金貸し業者はいないが、今どき手段はいくらでもあ

る。金銭トラブルが起きているなら、状況を正確に把握しておく必要があった。

「いや、借金はしていない。……今はな」

「含みのある言い方やめろ、怖い。なんでそんな急に金が要るようになったんだ」

「……先日、インターネットを見ていたら1／1瑞雲プラモがオークションに出されていたんだ」

「はっ」

瑞雲。それは日向たちが使用する航空機の種類だ。

艦娘用の瑞雲は小型化されており、実際に乗り込めるのは妖精さんたちくらいである。だから『原寸大の瑞雲』というのはお目にかかったことがない。

「どうやら今年横須賀鎮守府がPR用に作成した瑞雲12機のうち何機かは民間の好事家の手に渡っていたらしいのだ。噂だけは随分前から聞いていて私も時折ネットで情報を探していたのだが、急に一昨日さる大手サービスのオークションに出されてな。出品者は変わり者だがマニアックなものを取り扱うことにかけて定評のある御仁だから、おそらくその瑞雲プラモは本物だと思う。この機会を逃したらいつチャンスが来るか分からないんだ、そのところは板部先生も分かってくれるだろう」

「……いや、うん。落ち着け」

日向は、声のトーンはいつもと同じなのに、妙に早口になっている。正直ちよつと怖い。

「どんな感じだ。ページ見せてくれ」

ブラウザを立ち上げて日向にマウスを差し出す。

日向は、無駄のない動きで該当ページまであつという間に移動してみせた。

そこに表示された金額を見て、頭が痛くなる。

「……残念だが諦めろ。この額は俺たち泊地メンバー全員分の月給合わせても足りない」

株やFXでも無理だ。少なくともこの瑞雲プラモの出品期間中に

この額を手に入れるのは——不可能に近い。

「やはり駄目か……」

一目で分かるくらいに落ち込みようだった。若干気の毒に思えてくる。

「金で手に入らないなら、いつそ自分たちで作るってのはどうだ。横須賀鎮守府は作ったんだろう?」

「材料・設計図・職人等はすべて大本営のフォローで揃えたらしい。うちにそういったフォローがあるとは思えないし、自力で全部集めるのは至難の業だろう」

普段艦娘が使用する瑞雲はあくまで艦娘用に作られたカスタマイズ版だ。オリジナルの瑞雲をベースにはいるが、サイズ以外にも細かい違いは沢山ある。そのため、艦娘用の瑞雲を作れるならオリジナルの瑞雲も作れるだろう——という理屈は通らない。

「……すまん、板部先生。邪魔をした」

すっかり意気消沈して出ていく日向の背中、まるで大切な家族を失ったかのような寂しさを感じさせるものだった。

「まー日向、横須賀がやってたPR——瑞雲の公開展示とかにも無茶苦茶行きたそうにしてたしね」

夕食を取りに間宮食堂に向いたところ、偶々伊勢と遭遇した。昼間の日向の件を話すと、伊勢は「やっぱりね」という感じで頷いたのだった。

「モデラーの心情は俺にはさっぱり分からん」

「日向の場合、モデラーともまた違うと思うんだけどね。あの子は多分、瑞雲に乗ってみたいんだよ」

「……乗る?」

「そう。飛ばなくてもね」

飛行機の操縦士になりたい。その感覚なら——分からないでもない。

「私たち艦娘は海上を移動することはできるけど、自分たちで空を飛ぶことはできないでしょ。偵察機や艦載機を扱えても、自ら空を駆け



回る感覚は味わえないからね。だから——空に憧れるんだ」

「伊勢もそうなのか？」

「まあね。加えて艦娘は、自分たちに縁が深いものを通して空を感じてみたいと思うものなんだ。我儘と言えば我儘だね」

困ったものだ、と伊勢は笑う。

「……空への憧れね。けど、ありやプラモだ。飛ばんよ」

「そこは日向も分かっているよ。ただ、かつて誰かが空に向かうとき見たであろう何かが、そこからなら見えるんじゃないか——なんて思っているんじゃないかな」

「——ふむ」

確かに、モデラーの心情とはまた少し違うものみたいだ。

言ってしまうば、それはある種の憧憬だろう。

かつて自分たちと縁のあった誰かが旅立った空に、思いを馳せているのだ。

ロマンチックなものである。

「伊勢」

「んー？」

「そういう感覚ってのは、お前や日向特有のものなのか？」

伊勢は「いいや、多分皆が持つてる」と答えて、面白そうに笑った。

「板部先生、何か思いついた？」

「ああ。楽しんで儲ける手段だ。上手くいくかは——まだ分からんけどな」

それから一カ月後。

泊地の片隅に、1／1の瑞雲プラモが設置されることになった。あ  
のときオークションに出されていた例のプラモである。

「……やれやれ。板部先生も人が悪い。無理だと言っておいて、しつかり落札するとは」

瑞雲を前にして、日向はいつもより興奮気味のようだった。柄にもなくこちらの脇を肘でつついてくる。

「伊勢の話を聞くまでは無理だと思ってたんだよ。……ま、礼を言う

なら泊地の皆に言うんだな」

「分かっているさ。……ちよ、ちよつと乗って見てもいいだろうか」

「いいんじゃないか。ただ他にも乗りたがってる子はいるだろうか  
ら、程々に切り上げろよ」

「無論だ」

日向が落ち着かない様子で瑞雲。プラモ目掛けて駆けていく。

「けど、よく足りたね。……出資者を募っても駄目だと思ってたけど」  
横にいた伊勢が感心したように言った。

そう。今回採った手段は別段真新しいものではない。落札するた  
めの資金をあちこち駆け回って集めただけだ。

「俺も最初は駄目で元々だと思ってたけど、意外と乗り気な奴も多  
かったぞ。ま、この泊地の出資者の分だけじゃ足りなかったから、ブ  
イン基地の方にも声かけることになったけどな。……お前が言った  
通り、空に憧れる艦娘が結構いたってことだろう」

憧れを持つてるのが日向だけだったら、到底無理だったろう。

皆が同じような夢を持っていたから出来た話だ。

「ま、おかげであるの瑞雲はブインとの共有財産だ。半年ごとに行つた  
り来たりってわけだな」

「ブインなら近いし、まあ大丈夫でしょ」

操縦席では、日向が笑みを浮かべながら遠い空を見上げていた。

今日も泊地は平和である。

はぐれ者の第一歩（利根・旗風・松風・朝風・春風）

S泊地の学び舎にある教室で、利根は渋い表情を浮かべていた。

この教室は普段教育担当者が艦娘に勉強を教えるために使われる。ただ、現在教室には艦娘たちだけでなく島の子どもたちも集まっている。おまけに教壇に立っているのは——利根なのだった。

……筑摩めが急用なぞ入れるからだ。

今日の元々の教育担当者は利根の妹である筑摩だった。だが、急用が入ったとかで急遽利根が代役を務めるはめになったのである。面倒ごとが嫌いな利根としては不本意極まりない事態だった。

艦娘だけが相手なら適当にあしらって済ませる手もあったが、島の子も来ているとなるとそうもいかない。S泊地は島民の協力があつて成り立っているため、無下に扱えば問題につながりかねないのである。

「ナノジャー、今日何やるのー?」

小学校低学年くらいの子が無邪気に手を挙げて質問してきた。

なぜか島の子どもたちの間で、利根は「ナノジャー」という本人としては謎としか言いようのない渾名をつけられている。

呼んでもいいと許可した覚えはないが、いくら訂正するよう注意しても暖簾に腕押しなので、今はもうスルーしていた。

「まずは算数じゃ。各自の学習内容に合わせて筑摩めが課題を用意してきたから、それを時間内に終わらせよ。分からないことがあれば吾輩に聞きにきて良いが——自分である程度考えてからにせよ。自ら考えずすぐ人に質問するようでは考える力が伸びずろくな大人にならないぞ」

質問攻めにされないようにという打算あつての言葉だが、半分くらいは本音でもあつた。

課題が書かれたプリントを配り終わると、教室の中はガヤガヤと一気に騒がしくなった。

講義形式の授業ではないので、私語は禁止されていない。他の人と相談しながらでも良いので、自分の課題を時間内にクリアする。それ

ができれば後は割と自由なのだった。

頭の良い子は他の子のフォローに回ったりすることも多く、そういうところからコミュニケーションの輪を広げる子もいるようだ。艦娘・島民の子どもたちの垣根はこの教室の中には存在しないので、自然と友人関係を築けるといわけだ。

「先生」

授業が始まってから十五分。

適当に教室内を歩き回りつつ子どもたちの様子を見ていた利根に、一人の少年が声をかけてきた。

「できました」

「ほう？」

質問に来たかと思ったが、どうやらもう課題を済ませたらしい。

受け取ったプリントを見ると、確かにいずれも解答が記載されていた。

内容は中学生がやるようなものだが、少年はどう見ても小学校中学年くらいにしか見えない。

……天才児というやつかのう。

ざっと見た感じだと解答はいずれも合っている。十五分でこの内容をすべて解くというのは、利根から見ても大したものだった。

「……ふむ。しつかりとした採点は次回までに済ませておくが、ぱつと見た感じだと問題なさそうじゃ」

「そうですか」

少年は無感動な様子で頷くと、そのままスタスタと教室から出て行ってしまった。

「ちえっ、相変わらずだなー、グスタフは」

「頭良いんだから教えて欲しいよねー」

そんな少年の様子を見ていた他の子どもたちが不満を口にする。

「なんじゃ、あやつ——グスタフはいつもあんな感じなのか」

「そうだよ。話しかけても『時間の無駄だ』とか言っただっか行っちゃうんだ」

「大人たちは褒めてるけど、私はちよつと苦手」

どうやら島民の子どもたちにとってグスタフ少年は「凄いいけどアウトロウ」という扱いらしかった。

「……少し心配ですね」

生徒として授業に参加していた旗風が声をかけてきた。

「お節介でも焼くつもりか？ ああいう手合いは下手に構おうとする  
と余計へそを曲げるぞ」

「そうなんですか？」

「……まあ、そうじゃと思う」

旗風の純粋な眼差しを避けつつ、利根は少し言葉を濁した。

「次の授業は図工じゃったな。なら、少し試してみるとするかの……」  
「？」

どことなく含みのある表情で頷く利根に、旗風は首を傾げるのだった。

算数の時間が終わると、利根はいくつかの工作道具を持って子どもたちと共に森の中へと向かっていった。その中には、いつの間にか戻って来ていたグスタフ少年も含まれている。

「利根さん、こんな森の奥で何をやろうというんだい？」

やや不満げに言ってきたのは松風だった。その横には朝風・春風・旗風もいる。彼女たちは他の子どもたちをまとめる班長のような役回りを任されていた。

「面倒が嫌いな利根さんにしては珍しいじゃないか、こんな風に外へ出るなんて」

「言っておくが松風。吾輩は面倒が嫌いなだけで、特別インドア派というわけではない。それに教室内で図工なんぞやったら後片付けが面倒ではないか」

そんなことを言っているうちに、利根たち一行は川までたどり着いた。

「よし、それではここで魚獲りをするぞ」

「……魚獲りですか？ なんだか変わった言い方ですね」

「旗風の疑問はもつともじやが、漁とか釣りと言って良いかちと微妙

な気がしたのでな。……ルールは簡単。班ごとに持ってきた工作道具とこの辺の素材を使って何か一つ道具を作り、それを使って魚を獲れ。凶工の時間じゃから道具なしで獲るのは反則じゃ。また、複数の道具を使うのも禁止とする。班ごとに一つじゃ」

利根の言ったことを理解したのか、子どもたちは班ごとに分かれた。

各班ごとに、それぞれまずは何を作るか作戦会議を開いている。

……グスタフめは旗風の班か。

見たところ、あからさまに距離を取ったりはしていないようだった。ただ、積極的に話し合いに参加しているようにも見えない。

やがて、各班は道具作りに着手し始めた。松風班は釣り竿、朝風班は銚、春風班は投網にしたらしい。

ただ、旗風班のみ何にするか決めかねているようだった。

「苦戦しておるようじゃな」

声をかけると、旗風は困ったような表情を浮かべた。

「なかなか案が出なくて」

「ふむ。グスタフよ、お主からは何かないのか」

話を振られて、グスタフは眉をピクリと動かした。

「僕は川の中に仕掛ける罫を作るのが良いと思う。ただ、それを言ったら皆が『作り方を知らない』と言ったので諦めた」

「諦める理由が分からんのう。お主が皆に教えてやれば良いではないか。お主は知っておるのだろうか」

「それは、そうだけど……」

グスタフと他の子どもたちの間に微妙な空気が流れていることは、利根も気づいていた。

普段偉そうにしているグスタフに教えを乞いたくないという反発心が子どもたちの中にあるのだろうか。グスタフの方も、普段相手にしていなかった子たちにどうやってものを教えれば良いのかという戸惑いを持っているようだった。

「……言っておくが、時間は有限じゃぞ。時間内に何も出来ませんでしたというのは、何よりも情けないことだと吾輩は思うがな」

それだけ言って、利根は旗風班のところから離れた。旗風班はそれからもしばらくは話し合いを続けていたようだったが——やがて、観念したかのように手を動かし始めるのだった。

その日、学び舎まで戻って来て子どもたちを帰らせると——旗風たちは一斉に机へと突っ伏した。

「つ、疲れました……。島の子どもたち、皆元気ですね……」

「そういえば旗風は今回が初めてだったわね。あいつら皆スタミナお化けだから、ペース配分違えると身が持たないわよ」

朝風がげんなりとした様子で妹にアドバイスを贈る。

そんな中、一人けろつとしていた春風が利根に「お疲れさまでした」とお茶を差し出す。

「図工の時間のアレは、狙ってやったのですか？」

「グスタフめのことか。まあ、何から何まで計算し尽くしたというわけではないがな。そこまでするのは面倒じゃし」

結局——旗風班は他の班と比べて、ほとんど魚を獲ることができなかった。

川に仕掛ける罟を作り始めたのが遅かったせいだ。十分に罟を作り切れず、中途半端な結果しか残せなかったのである。

ただ、図工の時間が終わったとき、グスタフ少年はかなり悔しそうな表情を浮かべていた。帰る時間になっても罟を完成させようとしていたくらいだ。

意外なことに、そんな彼のことを旗風班の子どもたちが手伝っていた。一緒に作業をしていて思うところがあつたのだろうか。

「ああいう奴はどこかしら負けず嫌いなどところがある。できない奴だと言われるのが一番我慢なんのよ。そういう奴は必要なことに対してきちんと努力する。コミュニケーションとて『必要だ』と判断したなら、きちんとするようになる。吾輩はその土台を用意したに過ぎん」

実際、これからグスタフ少年を取り巻く状況がどうなっていくのかは分からない。そこまでは利根の与り知らぬところだ。

「ふふ、利根さんはあの子の心情をよく理解されているんですね」

春風の意味深な笑みに、利根は嫌そうな顔を浮かべた。

「……春風。おぬし、さては誰ぞに何か要らぬことを吹き込まれたな？」

「さて、なんのことでしょう。それでは私は私はこれで」

利根の追及をさらりとかわして、春風はそそくさと去っていった。

他の三人は不思議そうにそのやり取りを見ていたが——やがて松風がポンと手を叩いた。

「もしかして、利根さんも昔はグスタフみたいなのはぐれ者だったのかな？」

「何それ。興味ある。ねえねえ、昔の話聞かせてよ」

「じゃかあしい！ 吾輩は面倒が嫌いなものじゃ！ さつさと解散せい、解散！」

興味津々な様子の子の三人の追及から逃れるように、利根は「解散！」と再三叫ぶのであった——。



過疎地は辛いよ（三隈・最上・熊野・鈴谷・青葉・夕張）

「この泊地にいながら流行に乗っていく方法ってないかしら」

ため息をこぼしながらそんなことを呟いたのは、最上型二番艦の艦娘・三隈だ。

「どうしたんだい、藪から棒に」

うどんをすすりながら返したのは一番艦の最上である。

「いえ、先日資料室でパソコンを使ってインターネットをいろいろ見てみたのだけど」

「ネットサーフィン、というやつですわね」

若干どや顔で補足したのは四番艦熊野だ。その隣には三番艦の鈴谷もいる。

今、最上型の四人は姉妹水入らずで昼食を取っているのだ。

「サーフィンをした覚えはないのだけど……」

「私もなぜそのように言うのかは不思議なのだけど、インターネットでいろいろなものを見て回ることをネットサーフィンというのだそ  
うよ?。」

「そうだったの。熊野は博識ね」

「お二人さーん、話が逸れてる逸れてる」

脱線しかかった流れを鈴谷が慌てて修正する。

「流行に乗っていききたいって話でしょ? でも三隈がそんなこと言い出すのって珍しいじゃん。あんまり流行とかそういうのに興味なさ  
そうな感じしたけど」

「そんなことはないわ。今年の流行語大賞とか漢字一文字とか欠かさずチェックしているもの。なになに大賞とかのニュースだつてよく  
見ているのよ」

それは流行に乗っているというのとはまたちよつと違うのでは  
……という言葉で鈴谷は飲み込んだ。また脱線しかねない。

「でも、ふと思ったの。この泊地では——そういう流行がまったく

入ってこないということに」

「それは仕方ないんじゃないかなあ。だってここ、控え目に言って田舎もいいところだし」

最上の回答はドライなものだったが、実際そうとしか言いようがなかった。

ソロモン諸島の首都ホニアラへ行くにも結構な時間を要するし、日本や台湾——オーストラリアにも気軽に行けるような距離ではない。コンビニなんてあるはずもなく、それどころか店らしい店は泊地内で独自に開かれているものくらいしか見ることがない。泊地の店はこの食堂・間宮や鳳翔の居酒屋、理髪店や日用雑貨店がせいぜいで、生活に必要なもの以外は全然ない。

本やゲームは取り寄せか出張時にまとめ買いするしかない。お洒落をしたければ自作した方が早いという場所である。

「ここで流行に乗りりたいなら、ここを一大都市まで発展させて人や流行を呼び込むくらいしないと無理だよ」

「何十年かかるか分かったもんじゃないね……。成功率も恐ろしく低そうだし」

「この泊地はこの泊地で独自の文化を築いていけば良いのではなくて？ ほら、江戸時代の日本みたいに」

「むう……」

あまり乗り気ではなさそうな三人に、三隈はやや不満げな様子を見せたが——その場ではそれ以上話を蒸し返さなかった。

「ふむふむ、それで私のところに来たというわけですか」

翌日、三隈は資料室で青葉と向き合っていた。

「青葉はいろいろな情報を取り扱っているから、流行にも詳しいでしょう？ この泊地が流行に取り残されないような方法って何かないかと思って」

「うーん。率直に言って最上さんたちと同様なかなか難しいという見解ですが……。それで済ませてしまっってはせつかく頼ってきてくれた三隈さんに申し訳ないですしね。同郷のよしみでもありますし、もう

少し考えてみましょう」

青葉の言葉に三隈はぱつと顔を輝かせた。

「ただ、一つ疑問なのですが三隈さんは具体的に何をしたいんです？

流行と言ってもジャンルは様々でしょう」

「ジャンル……。そうね、私が興味あるのはドラマや映画かしら」

「今時ならインターネットで配信されてるものも多いですよね。……

あ、でもここだと回線速度遅すぎて動画コンテンツは実用に耐えない  
んでしたね」

動画系コンテンツを見ようとしても、すぐに「読み込み中」と表示  
されて再生が中断してしまう。それが泊地の現状だった。

これはインフラ面によるところが大きいので、泊地のシステム担当  
者に頼んでもどうにもならないだろう。

「時折インターネットで流行りのドラマや映画のあらすじやキャッチ  
フレーズを見て、とても面白そうなのがあるのだけど、実際にそれ  
を見るのが敵わない——ということが何度もあって」

「ブルーレイやDVDが出るまでにはタイムラグがありますしねえ。  
こつちまで取り寄せるとなると更に時間がかかりますし。青葉も昨  
年ブームを巻き起こした映画観たかったんですけど、未だ観れてない  
んですよ」

んー、と青葉は首を捻りながら考えを巡らせていた。

インターネットは無理。記録媒体で見れるようになるのも時間が  
かかる。当然電波なんかも入らない。正直、お手上げと言ってもいい  
状況である。

「……自前で映画館を建てるとつていうのも上映権どうするんだって問  
題があるしなー。せめて購入したのをダウンロードできれば再生は  
スムーズにできると思うんだけど……」

「いくつかそういうサービスはあるわよ」

と、そこで急に第三者の声があった。

三隈と青葉が声の主に視線を移す。そこにいたのは、機械工学に関  
する本に目を通していた夕張だった。

「ダウンロードしてオフラインでも視聴できるようにして欲しいって

「いう要望は結構あるみたいで、そういうのに対応してるのサービスは探すと結構出てくるわ。非対応のサービスもあるみたいだけどね。オフライン対応するなら悪用されないようコンテンツにガードかけないといけないから、多分コストがかさむんだと思うけど」

「ほほう、夕張さん詳しいですね」

「まあね。たまにアニメとかそうやってダウンロードして見たりすることもあるし」

「そういえば夕張はアニメ鑑賞が趣味だった。今どきのアニメもそうやってチェックしているということなのだろう。」

「夕張、良ければ三隈にそういったサービスのこと教えていただけないかしら」

「いいよー。ジャンルは違えどエンタメを愛する者同士。こうやって同好の土が増えていくのは私としても嬉しいしね！」

「……ふむ。では青葉も後学のために……」

「わいわいと盛り上がりながら、三人は資料室にあった共用パソコンの電源をつけるのだった——。」

「くっ……どうなってんだこりゃあ」

「数日後、泊地のシステム担当である板部——彼は人間のスタッフである——は頭を抱えていた。」

「ネットワークが妙に遅いと思い調べてみたところ、ここ最近のトラフィック量がこれまでと比べて急増していた。」

「普通のテキストベースのサイトすら数秒待たないと開けない。酷いときはタイムアウトすることもある。」

「泊地の各所から苦情が来ているが、通信量の増加は簡単に解消できるものではない。」

「流れからすると外部からのDOS攻撃って感じじゃなさそうだし、泊地の誰かがアホみたいな量のデータ取ろうとしているな……。1人や2人じゃねえ。何か所も同時にやってやがる……。IPアドレスから……これは多分、動画サービスか……？」

「通信データを解析しながら、板部は眉間にしわを寄せた。」

「仕方ない。帯域制限かけて……あといくらかアクセス制限かけとくか。これじや通常の業務に支障が出るしな」

恨んでくれるな、と呟きながらキーを叩く。

その瞬間、大量に流れていた通信はパタリと止まった。

後日。

快適なインターネットを使用するため、と題したチラシが泊地の各寮に届けられた。

そこにはネット利用に関する泊地独自の規則やら制限やらが載っており、各所から大ブーイングを浴びたという。

更にそこから回線増強運動が起こり、泊地の資産管理を行う大淀の頭を悩ませることになるのだが——それはまた別の話である。

力と集中力が必要なもの（雷・電・夕雲・卷雲）

「掃除よ！」

玄関の戸を開けると、ジャージ姿の雷がいた。

「なんじゃ、突然」

「そろそろ年末に向けて掃除をする季節でしょ？ 特に神社は忙しいだろうし、今のうちに掃除しないとー！」

「まあ、それはそうなんだが」

急な来訪者に戸惑っていると、雷の後ろからひよっこりと電が顔を出した。

「急にごめんなさいなのです。ちょうど今日予定が空いたので……」

「お前さんたち、自分たちのところの掃除はいいのかわ」

「私たちの部屋は早朝のうちにバッチリ済ませてきたわ！」

「雷ちゃんが普段から掃除してくれてるから、あまり手間がかからなかったのです」

「やだもー。そんなことないわよ」

電の捕捉に、雷は照れたような表情を浮かべて手をひらひらと振っていた。こういうところはまだまだ子どもである。

「それに尼子のお爺ちゃんだけだといろいろ大変でしょ？ 掃除って結構力いるんだから」

「人を年寄り扱いするでないわ。とは言え、助かるのは確かだ。せつかくだしご厚意に甘えるとするか」

昔に比べると腰を痛めやすくなっているし、長時間力を使うような作業をすると調子が悪くなってしまう。

年齢の割には頑健な方だと思っではいるが、さすがにもう無理が過ぎる年齢ではない。

「あら、そういうことなら私たちも手伝いましょうか」

と、今度は後ろから声がした。振り返ると、通路の奥から夕雲と巻雲がひよっこりと顔を覗かせている。

「お前さんたちはいつの間に来たんだ……」

入れた覚えは一切ない。玄関以外にも出入口はいくつかあるので、

大方そこから入り込んだのだろうか。

「秋雲さんと長波さんを探しに。でも急ぎの用件ではないので、お掃除するなら私たちも手伝いますよ。ね、巻雲さん」

「はい。巻雲の雑巾がけはちよつとしたプロレベルですよ！」

雑巾がけにもプロ・アマの垣根があるとは知らなかった。今度から巻雲のことは雑巾プロと呼ぶことにしようか。

「……今またなんかよからぬことを考えてませんでしたか、神主さん」  
「気のせいじゃろ。ではわしも着替えてくるかの。掃除するなら汚れてもいい恰好でなければな」

巻雲の追及を避けるため、早々に自室へと退散することにした。

「汚れが全然取れないのです……」

台所まわりを雑巾で吹いている電がぼやいていた。

無理もない。台所まわりはよほど目立つ汚れ以外は年末の大掃除のときくらいしか掃除しない。

そのため、この時期はカビや油汚れがあちこちに点在する状態になっているのだった。

「尼子さんはもつとマメに掃除をするべきなのです。清潔な台所で作った料理の方が美味しいですよっ！」

「娘にもよくそう言って叱られた覚えがあるが、この年になつてもマメなことできんし、もう無理じゃろ」

「すぐく前向きな駄目人間っぶり……！」

何気に失礼なコメントだった。もつとも否定はできない。

「油污れはこいつを使うと落ちやすいぞ」

重曹を溶かしてペースト状にしたものを渡してやる。

「カビに関しては無理に拭き取ろうとせんでいい。カビキラーかけてしばらく放置だ。時間置いたら後はわしがやっておく」

「おお……。尼子さん、結構詳しいのです」

「伊達に長生きはしとらんからな」

もつとも、この辺の知識は完全に本やテレビの受け売りだ。

いかに楽して大掃除を乗り切るか——という点に少し興味を持つ

て調べたことがあったのである。

それを言うと電から再び駄目人間認定されそうなので、そこは黙っておくことにした。

夕雲と卷雲は神社の表まわりを掃除してくれていた。

心なしか神社全体がピカピカになっていているように見える。

「あら尼子さん」

こちらに気づいたのか、屋根の上から夕雲が声をかけてきた。

「大丈夫か」

「ええ。私たち艦娘なら、これくらいの高さから落ちてもどうってことはないですよ」

羨ましい。おそらくわしなら致命傷だ。

そういう事情も相まって、屋根に関しては全然掃除していなかった。

「そういえば、こんなものがありましたけど」

「ん？」

「小さい玉みたいです」

「こっちに投げてみる」

夕雲が手にしていたものを落としてきた。それを取ろうとしたが、失敗して落としてしまう。

途端、その小さな玉は勢いよく上に飛び跳ねた。

「ああ——こいつはスーパーボールだな」

再び落ちてきたものを掴んで、近くに寄ってきていた卷雲に見せてやる。

「スーパーボール？」

「とにかく凄く跳ねるボールだ。昔一時期流行ってたんだよなあ。なんでそれがここにあるのかは分からんが」

「遠征先の市場で誰かが買って来たんじゃないですかね。で、ここで遊んでるうちに屋根の上に行っちゃったんですよ」

「朧か秋雲辺りかねえ」

ほれ、と卷雲に渡す。



卷雲は最初慎重にスーパーボールを地面に落としてみせる。ボールは勢いよく飛んで、再び卷雲のところに落ちてきた。

「おお、凄いですね。本当によく跳ねます」

気をよくしたのか、今度は勢いよく地面へと叩きつける。

「ばっ、よさんか——！」

注意しようとしたが、時すでに遅し。

スーパーボールは卷雲の期待に応えるかのように跳ね——屋根の上から様子を見ていた夕雲の顔面に直撃した。

「あっ」

卷雲の顔が一気に真っ青になる。

夕雲は顔を両手で押さえていた。そのせいで表情が見えない。

「え、えつと……夕雲姉さん。今のはわざとではないというか……ね、ねえ尼子さん！　って、いない!？」

戸惑う卷雲の声が遠くから聞こえる。

この後の展開など見えている。夕雲は普段優しいが、過ぎたやんちやには厳しいところがあるのだ。

あの場に残っていてもは卷雲によって夕雲の折檻に巻き込まれかねない。そんなわけでわしはクールに去ることにしたのである。

「あ、尼子さんの裏切り者——！」

雷は室内の掃除をしていた。

「あ、尼子さん。さつき卷雲の悲鳴が聞こえた気がするけど、何かあったの？」

「卷雲は好奇心の犠牲になったんじゃない？」

「？」

雷は、よく分かっていない様子で首を傾げた。

「まあいいわ。この辺りの部屋、高いところを中心に掃除はしておいだから。あとは雑巾がけして掃除機かければだいたいオツケーだと思っわよ」

「すまん。高いところの掃除はやはり大変だから、やってくれて助かる」

ちなみに雷は脇に脚立を抱えていた。高所の掃除はこれを使って行ったのだろう。

「あ、そうそう。箆笥の横の隙間に落ちてたけど、これ尼子さんの？」  
「……………うん？」

雷が差し出してきたのは、かなり古い写真だった。  
覚えはある。

「こりやわしと家内だな」

「へえ！ 尼子さん、若いときは男前だったのね」

「若干引つかかる言い方だのう。今でも男前じやろうが」

「はいはい。奥さんはとても綺麗な人ね。飾り気がなくて清楚な感じ……………」

雷はまじまじと写真に見入っていた。若い自分と家内をじっくりと見られるというのは、なんだか落ち着かないものである。

「ねえねえ、他には昔の写真あったりしないの？」

「あるにはあるが……………」

「お掃除終わったら見てもいい？」

「……………」

なんとなく気恥ずかしいが、こうキラキラとした目で頼まれると、孫にせがまれているようで嫌とは言い難い。

「分かった分かった。終わったらアルバムでもなんでも見せてやるわい」

「約束よ！ さーて、それじゃ仕上げ頑張るわ！」

気合を入れて雑巾がけを始める雷。

これは掃除の後が大変になるパターンになりそうである。

「まあ、観念するしかないか」

押し入れや箆笥の中を整理しながら——ふと、昔家族と大掃除をしたときのことを思い返す。

子どもたちはもう家を出ているし、家内はどうに鬼籍に入っている。だから、こういう感覚は懐かしかった。

「尼子さん、なんだか楽しそうね」

雷がこちらを見て笑いながら言った。

「……さてな」

素直に認めるのも癪なので、ぼかした回答をする。

ただ——確かに、悪くはないと思った。

「雷」

「ん？」

「来年もまた頼んでいいか」

「——ええ。雷に任せなさい！」

雷は腕をまくって、満面の笑みを浮かべるのだった。

## 決戦、おでん会！（朝潮型）

年の暮れ。S泊地の一角にある寮の食堂では、長いテーブルの上にカセットコンロが置かれていた。

コンロの上には鍋。その中では、ぐつぐつとおでんが煮えていた。「それでは……今年もいろいろありましたか——お疲れさまでした。乾杯！」

「かんぱーい！」

一斉に皆の声が響き渡る。

ある者は早速酒を飲み、ある者は周囲との歓談を始め、ある者はおでんに手を伸ばす。

この寮に所属する艦隊のメンバーによる、遅めの忘年会だった。

「では私たちもいただきますしよう。大潮、分けるの手伝ってください」

「はい、お任せですよー！」

「あ、いいわよ朝潮姉さん。私が分けるって」

「いえ、朝雲と山雲は材料提供で頑張ってくれたので、今は座っていてください」

朝雲を制しながら、朝潮と大潮が立って他の皆の分のおでんを分けていく。

鍋の中で美味しくそうに煮えている大根や卵は、農業部である朝雲・山雲が育てたものだ。

また、コンニャクやしらすたきの材料も農業部からの提供である。

「山雲の野菜へのこだわりようは凄いつて萩風から聞いたわよ」

「そうなのよ。雨の日も風の日も必ず様子見に行くし、土にもこだわるとし、陽射しの強弱まで気にするくらい」

「満潮姉も朝雲姉も大袈裟よー。山雲は、ただ皆にスクスク育ってもらいたかっただけだからー」

朝潮型の西村艦隊組は、野菜談議でワイワイと盛り上がっていた。

一方、荒潮と霞はぐったりとした様子である。

「……二人とも、お疲れ？」

霞に聞かれて、荒潮は「そうねえ」と覇気のない声で応じた。

「最近は輸送船の護衛任務が多かったから。お肌にも悪いし困っちゃうわ……」

「年末進行ってやつなのかしらね。この時期は妙に忙しくなる傾向にある気がするわ……」

荒潮と霞は二人とも遠征帰りで、直接この忘年会に参加している。だからか、服も少し汚れていた。髪もパリパリになっているように見える。

「でも、朝潮と大潮は元気」

霞の指摘に、二人はぐつと言葉に詰まった。

元気に皆の分のおでんを分けている朝潮と大潮も、実は遠征帰りなのである。

「あの二人は——ガッツ二倍のスキル持ちなのよ」

「基礎訓練してた頃から体力が頭一つ抜けてたものね」

「大潮ちゃんに至っては、ランニング他の人より二周多く走ってたこともあったわね。『まだまだアゲアゲで行けそうだったので』って」

「朝潮姉さんは体力馬鹿というより精神が肉体を凌駕する系なのよね……。HPが0になっても活動し続けるみたいなの」

「人をゾンビみたいに言わないの」

はい、と霞におでんの器を渡しながら朝潮がツッコミを入れた。

朝潮型全員のところにおでんが行き渡る。「いただきます」と、全員が手を合わせた。

「あ、霞。そっちにあるみそ取ってくれない？」

「ん」

「ありがと。……やっぱりおでんにはみそよね」

霞から受け取ったみそをおでんにつけながら、相好を崩す満潮。

「そう？ つけるなら生姜醤油が一番じゃない？」

満潮の意見に異を唱える荒潮。

そこに、朝雲が更なる一石を投じた。

「え、普通からしじゃないの？」

三人の間に、微かな緊張感が走る。

きのこ・たけのこ論争に突入する寸前のような——そんな緊迫した

空気が周囲を覆う。

「いやいや朝雲。通ならみそよ。みその良さが分からない？」

「みそは味付け濃くて口の中に残る感じが苦手なのよ。……からしでさっぱりした風味にした方が断然美味しいじゃない？」

「さっぱりした辛味なら生姜醤油でも良いんじゃないかしら」

「おでんに醤油なんてマイナーでしょ」

「マイナーだからって馬鹿にするのは良くないと思うの」

いずれも口調は淡々としているが、口元の端がやや引きつっている。

何かあれば一気に爆発しかねない……。そんな雰囲気滲み出ていた。

「どうします、朝潮姉さん」

「任せなさい、大潮。ここは長女として、この朝潮が収めてみせます！」

胸を叩き、朝潮は腰を上げた。

「三人とも、味の好みで論争などしても虚しいですよ。調味料の好みは人それぞれ。みんな違ってみんないい。そういうものではないですか」

穏やかな表情で大きく腕を広げながら告げる朝潮。

しかし、事態は収束しなかった。

「朝潮姉、その器についてるのは？」

「えっ？……からしね」

朝雲が指し示した朝潮の器には、確かにおでんにつけるためのからしが乗っていた。

「なるほど、朝潮はからし派なのね。……だったら、悪いけどその意見に賛同するわけにはいかないわ」

「荒潮姉、朝潮姉だってからし派なんだしそろそろ降伏しない？」

「降伏？　なんで降伏しないといけないのかしら」

更に対立が激化した感すらある空気に、朝潮はオロオロしながら大潮の方を見た。

「ど、どうしよう大潮……」

「朝潮姉さん、相変わらず弱いなー」

「うう、交渉事はあまり得意じゃないんだから仕方ないじゃない……」

「まあ大潮も苦手なので気にすることないですよ！」

グツとサムズアップする大潮。

励ましになっっているのかいなのか何とも言い難いが、朝潮は「大潮……！」とその手を強く握り締めていた。

そんな微笑ましい光景とは裏腹に、満潮・荒潮・朝雲の論戦はヒートアップしつつあった。

顔全体がピクピクと怖い感じに動いているし、目元も笑っていない。

加えて言うなら、全員顔がいつの間にか真っ赤になっていた。

「変に玄人ぶって！ オーソドックスこそ正義なのよ！」

「何がオーソドックスかなんて人それぞれじゃない！ 調味料としてみれば味噌の方がむしろメジャーよ！」

「あらー、醤油を差し置いてメジャーなんて名乗らせないわよ」

言葉は激しくなっているが、勢いが感じられない。

若干ろれつが回らなくなっているように見える。

そんな三人の争いを見ながら、山雲と霰はマイペースにおでんを食べていた。

「——霰ちゃん、さつき三人のコップに何注いでたの〜？」

「焼酎」

さらっと言つてのける霰に、それを聞いていた朝潮と大潮はぎよつとした。

艦娘の年齢については諸々の理由から扱いがまだ明確になっていない。そのためアルコールを摂取すること自体は特に問題でも何でもないのだが、気づかぬうちにそれを仕込んでいた手際の良さは何か恐ろしいものがある。

「酒の席での喧嘩なら後には残りにくい。特に三人は弱いから、明日には全部忘れてる」

「おでんに何をつけるかで喧嘩するなんて、姉さんたちも物好きね〜」  
そういう山雲は何もつけずに食べていた。

「何かをつけないと食べられないなんて、邪道なのにく」

「……」

山雲の発言に冷や汗を垂らす朝潮。

「大潮。……今後朝潮型でおでんはやらないようにしましょうか」

「賛成です。少なくともあの四人は一緒にしない方が良いでしょうね……」

赤ら顔で口論する満潮・荒潮・朝雲。

黙々と食べ続ける山雲・霰。

周囲を気になげながら箸を進める朝潮・大潮。

平穏とは言い難いが——それぞれの持ち味が出た忘年会になった。

「……あれ、そういえば霞は？」

「さつき足柄さんが連れていってました」

大潮が指し示した先——少し離れたテーブルでは、妙高型・神風型が集まって大いに盛り上がっていた。

その中で、霞は酔った足柄の抱き枕状態になりながら「もう休みたい……」とぼやいていたという。



## 寝正月にご用心（加古・衣笠・青葉）

今は何日だっけと加古はカレンダーを見る。

三が日はとうに終わり、そろそろ正月ボケが許されなくなってくる頃合いだった。

「そろそろ起きないと古鷹に怒られるかなあ」

もそもそと布団から起き上がり、緩慢な動作で制服に着替えていく。

重巡洋艦や戦艦は燃費の関係上、輸送任務に携わることには滅多にない。時折発生する掃討作戦や大規模作戦のときくらいしか泊地を離れることはなかった。

だからと言って暇というわけではない。泊地運営に関する数多の仕事が存在するのである。

特に忙しいのは泊地の中心となっている司令部に属するメンバーだったが、他の面々にもそれぞれ仕事は割り振られていた。ずっと寝ているわけにもいかない。

「……ん？」

着替えの途中で、加古は違和感を覚えた。

お腹周りが少しきついのである。

「なーんか、嫌な予感がするな……」

嫌な予感が的中していないことを祈りつつ、加古はある場所へと向かうのだった。

その日の昼。

間宮でサンドイッチを食べる加古のところに、青葉と衣笠が姿を見せた。

「やつほー、加古。……あれ、今日は食欲ないの？」

「おや。いつもは丼もの大盛頼む加古にしては珍しいですね」

二人の言う通り、加古がサンドイッチだけで昼を済ませるのは珍しかった。

つい最近もおせちや雑煮・餅をたらふく食べて、姉妹艦の古鷹から

食べ過ぎを注意されていたくらいだ。

「い、いやー。そういう日もあるってことだよ。あたしの胃袋も常に全力全開ってわけじゃないんだ」

あはは、と乾いた笑みを浮かべつつ視線を逸らす加古。

そんな彼女の様子を訝しんだ青葉は、視線を加古のお腹に移した。

「……もしかして加古さん、少し太——」

「どわあっ！」

何かを言いかけた青葉の口を、加古が物凄い勢いで塞ぎにかかる。

もがもがと抵抗する青葉を押さえながら、加古は周囲を見渡した。

「迂闊なこと言うなよ！ 古鷹に聞かれたらどうすんだ！」

「つまり聞かれたらマズい状態になってるってことね……」

衣笠が加古のお腹を見る。確かにいつもより少しふくよかな気がする。

「典型的な正月太りってやつかな」

「うう……。気のせいだと思いたかった。体重計は無情だぜ……」

「あ、既に確認したんだ」

青葉を開放して、加古はがっくりと肩を落としてつつ席に戻った。

「でも古鷹にバレたらマズいって、もう気づかれてるんじゃないですか？」

「いや。古鷹はここ最近司令部室で寝泊まりしてるから多分気づかれてないはず。多分。……気づかれてない……よな……」

後半になるにつれて言葉がしぼんでいく。

古鷹は普段こそ優しいものの、一旦怒らせると結構怖い。加えてなかなか怒りを解いてくれない。

加古は先日も古鷹から食べ過ぎを注意されたばかりだから、もしこれで太ったことが発覚したらお説教コースは間違いなかった。

「古鷹にバレる前に痩せる方法ないかねえ……」

「そんな方法あったら衣笠さんも知りたいよ」

「青葉もその辺はとんと詳しくないですね」

青葉は普段から記事を書くためあちこち歩き回るので、自然とカロリーを消費する。だからか無駄な肉はほとんどついていない。

衣笠も青葉ほどではないが、割と運動をする方なのでそこまで太りやすい性質ではない。

加古は、仕事がないときは大抵寝ている。

「……生活スタイル直さないとうしろしようもないんじゃない？」

「そんなつ。寝る子は良く育つって言うじゃんか！」

「お腹は育つてますね」

「ぐはっ……」

衣笠と青葉からコンボを喰らって加古はお腹を押さえた。

距離感が近い間柄だからこそ容赦がない。

「長良とか神通に鍛えてもらえば？」

「そんな空恐ろしいことできるか」

長良や神通は訓練が趣味みたいなどころがある。

あの二人の訓練についていける者は、この泊地でもそう多くはない。

「まあドライなこと言うと、そんなさつと痩せる方法はないですね」  
「だよな……」

青葉の正論に加古は突っ伏した。

そのお腹がぐうぐと音を立てる。

「食べる量を減らすのはストレスにもなりますし、食べるものを低カロリーなものにするのはどうでしょう。そのうえで適度な運動を心掛けるとか」

「適度な運動ねえ。なんか良いのあるかな」

「キツイのだと三日坊主になる可能性高そうだしね」

「悪かったな。……いや、まあ多分そうなるだろうけど」

そんなことを話していると、顔にいろいろな模様が描かれた吹雪・扶桑・山城たちが入って来た。

「あ、青葉さん、衣笠さん、加古さん。こんにちは」

「ちはー」

「凄い墨だらけだね。羽根つきでもしてたの？」

「ええ。一進一退の攻防でついやり過ぎてしまった」

全員顔中罰ゲームで描かれた模様だらけだった。

よほど熱中していたのか、汗だくになっている。

「考えてみれば正月つていろいろやることあるよねー。羽根つきもそうだし、凧揚げとかカルタとか」

「それやれば良い運動になるってことないですかね」

青葉の提案に「正月遊びかあ」と加古は身体を起こした。

「まあ長良たちの訓練よりはずっと良いかな」

「凧揚げは第三艦隊寮の前で凧揚げ合戦やってみましたよ。コマ大会とかカルタやっているとこも確かあったと思います」

吹雪の説明を聞いて、衣笠は「よし！」と加古の手を引いて立ち上がった。

「こういうのはやると決めたらさっさと行動するに限る！ ほら、行くよ加古！」

「え、もう？」

「どうせ時間置いたら段々行く気なくなるでしょアンタ」

「……ま、まあそうかもしれない」

「ならすぐ行く！」

「へーい」

加古は頭を掻きながら、衣笠に引つ張られる形で立ち上がった。

「それじゃ青葉もお供しますかね。日頃の取材で鍛えてますし、簡単には負けませんよー」

「まずは凧揚げから行こうか。身体動かしつつ集中できるから、加古の目も覚めるでしょ」

「いや、一応もう起きてるから。寝ぼけてないって」

いつてらっしやーい、と見送る吹雪に別れを告げて、三人はワイワイと食堂を出て行くのであった。

翌朝。

司令部室の仕事が一段落ついて部屋に戻って来た古鷹が見たのは、普段通り布団で横になっている加古の姿だった。

「まったくもう、加古ったらまたこんな時間まで寝て……」

「い、いや……。起きてるぞー、古鷹」

布団の中からプルプルと震える腕を出しながら加古が声を出した。

「……大丈夫？　なんだか調子悪そうだけど」

「昨日ちよつとはしやぎ過ぎて、全身あちこちが筋肉痛になってる……」

あれから日が暮れるまで正月遊びであちこち動き回ったせいで、疲労が溜まってしまったらしい。

「今日は非番だからちよつと休ませて……ガクツ」

「自分でガクツて言った!?!」

古鷹のツツコミに応える気力もなく、加古の意識は深く沈んでいた。

彼女のダイエットが成功したかどうかは——定かではない。

急募・休日の過ごし方（阿武隈・鬼怒・初雪）

久しぶりの連休。

阿武隈と鬼怒は、揃って部屋の中でぼーっとしていた。

「ねえ阿武隈」

「んー？」

「呼んだだけ」

何十分かに一度、そんなやり取りをする。

それを何度か繰り返していくうちに、鬼怒がわなわなと震えだした。

「ぬわーっ！」

「な、なに!? どうしたの、鬼怒お姉ちゃん！」

「こ、このまま休日が終わってしまう！ 無為に！ 何もすることなく！ それで良いのか我が人生！」

何かに耐えかねたようにくねくねとベッドで奇怪な動きをしながら、鬼怒は頭を抱えていた。

「最近忙し過ぎたせいだ！ 仕事ばかりで日常を楽しむ心を失いつつあるうー！」

「お、落ち着いてよ。こういう休日の過ごし方も良いじゃん……」

「阿武隈！ あれを見なさい！」

と、いきなり鬼怒は阿武隈の頭を掴んで窓の方を向かせた。

窓から見えるのは沈みゆく夕陽。一日の終わりを感じさせる、少しばかり物悲しい空模様。

「……いやーっ！ なんか切なくなる！ あの茜色の空見て休日終わるんだって思ったら、今日ただ寝っ転がってただけってことを思い返したら、なんかいろいろ損した気分になるうー！」

「ははは、阿武隈も私の気持ちがあつたかー！」

そうして二人揃って苦悶すること数十秒。

やがて阿武隈たちは、電池が切れた家電が如く動かなくなったのだった――。

「疲れた状態でもできるような充実した休日の過ごし方……?」  
心底面倒くさそうに言われたことを復唱したのは、駆逐艦・初雪だった。

この泊地において快適なインドアライフ追及勢として、トップクラスの逸材である。

「そんなのただ寝てれば良いのでは」

「それだと夕方とか夜に一日振り返って凄く悶々としはない?」

「私は振り返らない主義なので」

初雪は、きつぱりと手を振って否定した。

ここは初雪の部屋。

連休二日目を有意義に過ごすため、阿武隈と鬼怒はその道のエキスパートに相談しに来たのだった。

「望月辺りはゲームとかで時間潰すみたいだけど、ああいうのはある程度継続してやらないと十分楽しめないものが多い」

「そういうのはあたしたち駄目そうだね」

「たまに時間できたらやるけど、夕張とか川内には遠く及ばないよ」

夕張はゲームはなんでもござれのオールマイティプレイヤー。

川内は一時期ホラーゲームにハマリ、そこからFPSにハマリ、更にそこから派生してアクションゲーム全般を嗜むようになった。

阿武隈と鬼怒はイージーモードで大衆向けのゲームをどうにかこうにかクリアできるくらいだ。

「対戦ものじゃなくてソロプレイ用のをやるって手もあるけど、そういうのは大抵かなりの時間を取られる」

「うーん、それじゃちよつと厳しいかも」

「個人用のテレビとハード持ってないかね」

泊地で個人用のテレビやゲームハードを持っているのは一部だけだ。

持っていない者は、それぞれの寮の共用スペースにあるものを使う。必然的にソロプレイ用のゲームはやりにくい。

「それじゃ読書とか」

「泊地にある漫画はもう全部読んじやったし……」

「活字は読んでると眠くなる」

「……」

いやあ、と照れ臭そうに言う軽巡二人に、初雪は改めて心底嫌そうな顔を向けた。

……充実した休日過ごしたいなら、まず自分を変えないと駄目なのは。

そう思ったが、口にはしない。

するのは本当にどうしようもなくなったときだけにしておく。それが初雪なりの処世術である。

「良いアイディアが浮かばない場合は、とにかく気づいたことをやってみる」

「気づいたこと？」

「その行動に意味があるかどうか考えるんじゃないやなくて、とにかくやってみる。意味があるか考えだすと、意味ないって答えに行き着いて結局やらなくなるだけだから」

「おお、なんか初雪ちゃん哲学的……」

感心する阿武隈に内心いろいろと不安を覚えつつも、初雪は部屋の中を適当に見回した。

何か使えるものはないかと視線を巡らす。そこで、あるものが目に留まった。

「例えば、これはいろいろ使える」

初雪が手にしたのはペンと紙だった。

「折り紙するもよし、お絵かき伝言ゲームするもよし、単純に絵を描くのもよし、弾き合いまするもよし。紙とペンは文明の基盤。これを発明した人は素晴らしい」

「な、なんか初雪ちゃんが生き生きと語りだした……っ!？」

「謎の拘りを感じる……」

「——ゴホン」

阿武隈たちに言われて恥ずかしくなったのか、初雪はわざとらしく咳払いをして紙を置いた。

「とりあえず、試しに似顔絵当てゲームからやろ」



「似顔絵当て？」

「そう。この泊地の誰かの似顔絵を描いて、それが誰か他二人が当てられたら勝ち」

初雪の説明に、阿武隈たちはそれぞれゴクリと息を呑んだ。

「似顔絵……鬼怒さん正直ちよつと自信ないなあ」

「あたしは割と自信あるよ。前秋雲ちゃんにも感心されたし」

「私は可もなく不可もなし。……とにかく、考えず行動すべし！」

初雪から紙とペンを押し付けられ、阿武隈と鬼怒はそれぞれ筆を走らせるのであった。

五分後。

三人はそれぞれ似顔絵を描き終えて、裏面にした状態で持っていた。

「それじゃ、言い出しっぺだし私から」

初雪が絵を見せた。

本人は可もなく不可もなしと言っていたが、実際は結構上手い。

少し外にハネた髪型、凹凸のはつきりしたボデイライン、少し色気のある表情。

「これ、陸奥さんだね」

「特徴出てるなー」

二人に褒められて、心なしか初雪は「むふー」と得意げな表情になっていた。

「秋雲と違って暇潰しに嗜むくらいだけど、たまに絵は描くから」

「それでこれだけ描けるなら十分凄い凄い。……んじゃ、次は鬼怒お姉ちゃんね」

「……これの後に出すの怖いなあ」

そう言つて鬼怒が差し出した絵を見て、阿武隈と初雪は硬直した。まず、全体のバランスがおかしい。

顔に対して身体が小さすぎる。デフォルメされているという感じにも見えないのは、身体は身体でバランスがおかしいからだ。

加えて言うと、髪や目といった特徴を表しやすいパーツが、どうに

も異様な形をしていた。

「……これは、下手だねえ……!」

「凄く感心した風に言わないでよっ! だから言ったじゃん、あんまり得意じゃないって!」

「正直ここまでは思ってた……。ごめん」

「謝らないですよ! かえって傷つくよ!」

頭を下げる初雪に、鬼怒は涙目でツツコミを入れた。

「く、くそう。それじゃ阿武隈はどうなのさ。えらく自信あったみたいだけど!」

「あたしは凄いやー」

ふふん、と阿武隈は自分の描いた似顔絵を二人の前に出した。

それは——個人の特徴をよく捉えている絵だった。

かなりデフォルメされているが、全体のバランスは良い。何かのマスケットキャラのようにも見える。

「……不思議な愛嬌があるね」

「でも……なんか微妙に見続けていると不安になるような」

「確かに」

「ふ、不安!?!」

二人の評価が想定外だったのか、阿武隈はショックを受けたようだった。

「な、なんで!? 可愛いでしょ!?!」

「うん。可愛い。可愛いんだけど、なんかこう……味のがある可愛さというか」

「上手く説明できないけど、なんだろう……。当代では評価されず後世になって評価されそうな感じというか」

「ええー」

不服そうに頬を膨らます阿武隈。

彼女としてはかなり自信があったらしい。

「ちなみに、これ私は翔鶴だと思う」

「あ、鬼怒も。それは分かるんだよね」

「むー。分かるってことは上手いってことじゃないの?」

阿武隈の言葉に、鬼怒と初雪が視線を逸らす。

「むー。それじゃもう一回！ 今度はもつと時間かけて、ちゃんと描くから！」

むきになった阿武隈の提案で、三人は再びペンを手に取る。

そんなことを繰り返すうちに、いつの間にか日は暮れていく。

三人がそのことに気づいたのは、泊地の半分以上の似顔絵を描き終えた頃のことだった。

龍田、逃げる（龍田・木曾・扶桑・伊19・伊168）

「どうすれば良いと思う……?」

心底困ったような表情で問いかけたのは、軽巡洋艦の艦娘・龍田だった。

彼女がこんな顔をするのは珍しい。普段は大抵微笑んでいる。

問いかけられたのは、元・軽巡洋艦の木曾だ。今は第二改装を終えて重雷装巡洋艦へと艦種を変えている。

木曾と龍田の付き合いは割と古い。龍田の姉妹艦である天龍を含めた三人は、ほぼ同時期にこの泊地へ着任している。

「どうするって言ったってな」

「そんな面倒臭そうな反応されると傷つくわ……」

「ええー」

木曾は心底面倒臭そうな声を上げた。

「天龍ちゃん、たまに『俺たちにも第二改装早く来ねーかな』って言うってたもの。楽しみにしてたはずよ」

「まあ、第二改装を嫌がるような艦娘はほとんどいないだろうな」

「でも、結果的に第二改装が来たのは私だけ。これじゃ天龍ちゃんに合わせる顔ないわ……」

憂い顔で溜息をつく龍田。

彼女の艤装は、先日までとは異なっていた。つい先ほど、工廠で第二改装を終えてきたところだという。

「きつと今の私を見たら天龍ちゃん、ショックを受けるか拗ねちゃうと思うの。それで気まずくなるのは嫌なのよ」

「いや、そんな子どもじゃないだろ天龍も」

「……木曾ちゃんの場合はどうだったの?」

「うちか?」

木曾の姉妹——球磨型軽巡洋艦は四人いる。そのうちの二人、北上と大井はかなり早い段階で第二改装を済ませていた。

少し遅れて木曾が第二改装を行い、つい最近次女である多摩が第二改装を行った。まだ長女である球磨は第二改装の研究が完成してい

ない。

「北上姉さんや大井姉さんは最初から第二改装の研究済んでたから、特に気まずくなるようなことはなかったな。羨ましいとは思ったが、それくらいだ。俺のときは——おめでとうと言いながらいろんなプロレス技をかけられた記憶が。あれはどう捉えれば良いのか今でもよく分からない」

「私も天龍ちゃんにプロレス技かけられれば良いのかしら……」  
「自分で言うのもなんだが、うちの姉妹はあんま参考にしない方が良いぞ。特殊過ぎる」

球磨型姉妹は、一部を除き適度な距離感を保ちつつ、比較的割り切った付き合いをしている。

意見が割れるようなことがあれば肉體言語で解決するので、尾を引くような姉妹喧嘩はしたことがなかった。

「どちらかという二人姉妹のところが参考になるんじゃないか？ 多人数だとあんま気にしないところが多いと思うぞ」

「二人姉妹……」

木曾に言われて、龍田は泊地内にいる様々な艦娘の顔を思い浮かべるのだった。

「それで私のところに相談しに来たと」

航空戦艦・扶桑は、湯呑を手にしながら頷いた。

龍田も隣に座って緑茶を呑んでいる。

扶桑型姉妹は扶桑・山城の二人だ。

現在は二人とも第二改装を終えているものの、扶桑の方が一カ月ほど早く改装を済ませていた。

「扶桑さんは、第二改装終えたとき山城さんと気まずくありませんでした？」

「申し訳なさは少し感じたけれど、改装終えてすぐに山城が駆けつけてくれたから、気まずくて顔を合わせられなかった、ということはないかったわね」

「そうですか……」

「案外、会ってみればすぐに解決するかもしれないわよ？　天龍、貴方のことを探しているみたいだったし」

扶桑は先ほど、龍田を探している天龍を見かけたそうだと。

そのとき扶桑は龍田の状況を知らなかったから、特に何も言わずにスルーしてしまったのだが。

「そうかもしれないけど……どうにも怖くて」

「その気持ちも、分からなくはないわ。二人姉妹だと、どうしてもね。喧嘩したりして一人になったときの心細さは……多分他の子にはなかなか分からないものだと思う」

「扶桑さんは、山城さんと喧嘩されたりするんですか？」

「あるわよ。結構細かいことで。大抵、二人揃って後悔するのよねえ」

扶桑は、頬に手を当てながら苦笑した。

「艦娘にとつての縁者は姉妹艦だけだから——そんな相手と喧嘩したりするのって、とても怖いよね。二人姉妹だと、唯一無二の縁者になるから、尚更」

扶桑の言葉に龍田は頷いた。

もし天龍に嫌われでもしたら、自分は一人ぼっちになってしまうのではないか——そんな不安がある。

泊地の人々や島の人々との付き合いもあるが、やはり姉妹艦というのは別格の存在なのだ。

そんな相手と気ますぐなるかもしれない、というのはどうにも怖い。

「でも、そんな相手からいつまでも逃げ続けるのも、それはそれで辛いと思わない？」

「……そうねえ」

このままずっと天龍から逃げ続けるわけにもいかない。

できれば気ますぐならない方法を見つけてから会いたかったが、木曾や扶桑と話しているうちに、そんな方法などありはしないのだということが分かって来た。

「ごめんね、扶桑さん。変なことを相談しちゃったわ」

「良いのよ。また何かあったら気軽に相談してね」

湯呑を膝に乗せて手を振る扶桑に別れを告げて、龍田は一人、天龍を探しに行くのだった。

探し始めたのは良いが、天龍はなかなか捕まらなかった。泊地の皆に尋ねると、返ってくるのは「少し前に会った」「龍田を探していた」という答えばかり。

結局、見つけれないまま日が暮れようとしていた。

泊地の片隅にあるベンチに腰を下ろしながら、龍田は憂鬱そうな眼差しを夕陽に向けていた。

「私が天龍ちゃんを避けていたから、罰が当たったのかしら……」

このままずっと会えなかったらどうしよう——そんな埒もない想像をしてしまいそうになる。

少し前までは会うことに不安を覚えていたはずなのに、今はまったく逆の心境だった。

「あれ、龍田なのね」

「本当だ。こんなところにいたんだ」

そんな風に声をかけてきたのは、潜水艦の伊19と伊168だった。

特に彼女たち自体に思うところはないが、龍田は艦艇だった頃の名残りか、潜水艦という艦種に苦手意識を持っていた。

嫌いというわけではないが、どうしても身構えてしまうところはある。そんな風では相手にも悪いと思い、これまではあまり親しく話をするようなことはなかった。

「あ、あらあ。……二人とも、どうかしたの？」

「どうかしたの、じゃないのね」

「龍田が全然捕まらないって、天龍がさつき間宮でやけ食いしてたよ」「ええー……」

全然見つからないかと思っていたのに、あっさりと見つけれられてしまった。

「あれは早く行って止めないと、天龍がプロレスラーになっちゃうのね」

「それはそれで格好良さそうだけど……いやいや。とりあえず、止めに行った方が良いと思うよ」

そうまま二人は立ち去ろうとする。

「……二人とも」

「ん？」

「なのね？」

龍田は思わず二人を呼び止めた。

ただ、なぜ呼び止めたのかは自分でもよく分かっていなかった。

「……その、ありがとうね」

よく分からないまま、とりあえずお礼を口にする。

そんな龍田を前にして、伊19と伊168はきよんとした表情を浮かべていた。

「龍田が……あの潜水艦にトラウマを持つてることでも有名な龍田が、お礼を言った!？」

「これは大事件なのね！ 何かが起こる前兆なの！」

「……そ、そんな風に言われてたの、私？」

伊19と伊168は何度も頷く。

「前に天龍から聞いてたのね。龍田は潜水艦についていろいろトラウマ持つてるって」

「潜水艦に対して距離を取るかもしれないけど、それは別に悪気があつてやつてるわけじゃないから勘弁してやつてくれって」

「……」

そんなことがあつたと初めて聞いて、龍田はしばし呆然とした後、「ぷっ」と吹き出し、お腹を抱えて笑い出す。

「だ、大丈夫……?？」

「ご、ごめんねえ。ただ、天龍ちゃんには敵わないあつて」

ひとしきり笑いきり、龍田の表情は清々しいものになった。

迷いや不安は、もうどこかへと晴れてしまったようだった。

「二人とも、本当にありがとうね。今度、私の奢りで何かご馳走するわ」

「わ、マジっ?？」



「イクは遠慮しないから、覚悟しておいた方が良いの！」  
約束を交わして二人と別れた後、龍田は間宮へと足を運ぶ。  
今は、早くこの姿を見て欲しかった。

お化けたちが行く（白露、村雨、時雨、夕立、涼風）

S泊地では、毎年艦隊別豆まき対抗戦が行われる。

人間を凌駕する身体能力を持つ艦娘が、全力で豆を投げ合う。見ている分には微笑ましいが、普通の人間が巻き込まれたら事故の元になりやすい。

そういう事情もあって、泊地に努めるスタッフはなるべく節分の日に出発しないようにしていた。

もつとも、それはあくまで日中の話。

夜にもなると対抗戦は終わりを迎えるので、各々普段通りの生活に戻る。

泊地でインフラ系の業務を任されている藤堂政虎も、外の空気を吸いに部屋から出てきた。

ここ最近では司令部からの依頼のせいで忙しい。息苦しい仕事部屋から出て、散歩してみたい気分だった。

「……ん？」

泊地の広場をぶらついていると、正面から誰かが歩いてくるのが見えた。

背格好からすると駆逐艦だろうか。そんなことを考えた政虎だったが、距離が近づくとつれて、相手の風貌が異様なものであることに気づいた。

白い着物に狐のお面。

手には番傘らしきものまで持っている。

そんな恰好の者たちが何人も連れだつて歩いていた。

「あ、藤堂さんだ」

先頭を歩いてきた狐面がこちらに気づいて歩みを止めた。

「その声、貴様白露型一番艦の白露かつ!？」

「なんかえらい説明口調だね」

言いながらお面を外す。その下の素顔は、確かに白露のものだった。

後ろにいた者たちも次々とお面を外していく。そこにいたのは、白

露型駆逐艦姉妹だった。

「一体全体なんだというのだ、その奇天烈な風貌は。コスプレ大会でも開かれるというのか？」

「ある意味それに近いかもしれないですね」

答えたのは三番艦の村雨である。

白露以上にしっかりとっていて、よく姉妹のまとめ役になっている子だ。

「藤堂さんは節分お化けってご存知ですか？」

「……フハハハ！ 知っているに決まってるだろう！」

政虎は口元を手で隠しながら大仰に笑ってみせた。

この男、仕事はできるのだが、どうにも話し方や性格やらに奇妙な点が多い。

「今答えるまでに間があつたよね」

「あれは多分知らないっぽい」

「シャーラップ！ この私に知らないことなどあろうものか！」

ひそひそ話をする二番艦・時雨と四番艦の夕立に向かって、政虎はびしっと指をさした。

「じゃあ節分お化けって何か説明できるよなあ？」

わざとらしく突っ込んできたのは、末の妹の涼風だった。

他の皆も期待半分面白半分の眼差しを政虎に向けてくる。

「……節分の時期に現れるお化けのことに決まっておろうが！ ちようど、そう、今の貴様たちのような恰好の！」

「あー……」

何とも言えない表情で、村雨が頭を振った。

「……もしかして違うのか？」

「節分お化けっていうのは、普段と違う恰好で寺社に参拝することを言うんですよ」

「厳密にはお化けじゃなくてもいいみたいだよ。まあ私たちはちよつと狐のお化けっぽいのにしたけど」

村雨と白露の説明を受けて、政虎の顔が赤くなった。

何に関しても自信満々な態度を取る男ではあるが、恥を知らぬわけ

ではない。

「くっ……この私としたことが……！」

「そんなメジャーな行事じゃないみたいだし、知らなくても別に問題ないと思うけど」

「私たちも提督に聞くまでは知らなかったしね」

よく見ると、周囲には白露たち以外にも奇妙な恰好をした者たちの姿がちらほらと見えた。

神風型の服を着こんだ吹雪型の面々、逆に吹雪型の服を着こんだ神風型の面々。

修験者のような恰好であぶなつかしい歩き方をしている島風。

巫女服姿の海外艦組に、シスター風の恰好をした陸奥。

なぜかロックバンド風の恰好をしている阿賀野型姉妹もいた。

「どいつもこいつも珍妙だな」

「普段しないような恰好をする、っていう行事だからね」

「新鮮な感じがするという言い方もできるっぽい」

時雨と夕立が自分の恰好を見下ろしながら言った。

夕立はどことなく今の恰好を気に入っているようだったが、時雨は今一つ自信がないようだった。

「……ふん、まあ珍妙ではあるが悪くはないだろう。そういうのを楽しむ行事なのだとすれば、もつと堂々と楽しむことだ」

「おおっ、藤堂さんがまともな大人みたいなこと言ってる！」

「やかましいぞ白露。私は変わり者かもしれないが、ちゃんと大人してるわ」

「藤堂さん、あんた変わり者って自覚はあったんだな……」

涼風の指摘をスルーして、政虎は「フン」と鼻息を鳴らし、その場を去ろうとした。

「そうだ、藤堂さん。せっかくだから仮装してみませんか？」

「……なに？」

恐る恐る政虎が振り返ると、そこにはいたずらっぽい笑みを浮かべた村雨がいた。

他の面々も、にやにやとした表情になっている。

「い、いや。私は遠慮しておこう」

「仮装しないと、鬼に気づかれて厄に見舞われますよ?」

「ほう、鬼を欺くための仮装なのか。まるでハロウィンだな。……はっ!」

政虎が妙なところで感心している間に、白露型の面々はすっかり彼を取り囲んでいた。

全員、じりじりと政虎に近づいていく。逃げ場はどこにもなかった。

「くっ……無駄に息の合った連携をしておって……!」

「それじゃ、藤堂さんも厄除けのために面白……コホン。普段しないような恰好を試してみましよう!」

「待て。貴様今何か言いかけたらう! わざとらしく訂正しただろう! 何の格好をさせるつもりだ!」

「大丈夫大丈夫。怖くないですよ」

「待て貴様ら、離せ、はーなーせー!」

喚く政虎を全員で担ぎ上げて連行する白露型一行。

泊地の夜空に政虎の悲鳴が響き渡ったが——そういうのは割とよくあることだったので、特に誰も助けるようなことはしなかった。

「おい村雨嬢」

「はいはい」

「なぜ私は鬼のコスプレをしているのだ」

「似合ってますよ?」

言われて、政虎は自分の姿を見下ろす。

どこかで見たような——黒を基調とした鬼の恰好だった。

否、これは鬼というか、まるでカミナリ様のような——。

「……もう一つ聞く。なぜ私はウクレレまで持たされているのだ」  
「弾けるかと思って」

村雨の返しに、政虎は苦い顔を浮かべながら適当にウクレレを弾き始める。

経験などほとんどないので、とても曲と呼べるような出来にならな

「い。  
……ダメだこりや！」

艦娘式海上野営（高雄・球磨・秋津洲・長波・子日・若葉）

大海原の中、島の影すら見えない場所で、日が暮れようとしていた。自分たちの泊地に戻るまで、まだ結構な時間がかかる。

「このまま夜間航行しても良いけど……」

高雄は後方を振り返る。

艦隊の面々の表情には疲労が見え隠れしていた。

既にかんりの時間航行を続けている。艦娘は人間よりも優れた身体能力を持っているが、それでも疲れるのは疲れるのだ。

「よし、ここをキャンプ地とするクマー！」

「つて、勝手に決めないでよ球磨」

高らかに宣言する球磨にツツコミを入れる高雄。

二人は泊地に着任したのがほぼ同時期ということもあって、艦型や艦隊の垣根を越えて親しくしていた。

「無駄だクマ。もう他の皆は万歳三唱してるクマ」

球磨が指し示した通り、他の四名は皆「よっしゃー」だの「やったー」だのと歓喜の声を上げている。

こうなつては、もう休む以外に手はない。

「あー、もう。仕方ないわね」

「安心しろ、実艦モードは球磨がやるクマ」

言うや否や、球磨は少し距離を取った。

球磨が意識を集中すると、彼女の周囲が蜃気楼のようにぼやけていく。

やがて、そこに艦艇としての軽巡洋艦・球磨が現れた。

「ほら、早く乗るクマ」

艦娘としての球磨の姿も甲板上にある。ただ、先ほどまで身に着けていた艦装はどこにもなかった。

実艦モードというのは、艦娘としての艦装の形態を実際の艦艇に変化させたものだ。

大量の荷物を搭載できたりするので輸送作戦では便利だが、図体が大きくなる分敵の攻撃が当たりやすくなるし、自分一人では操艦もまならないためスタッフが必須になるという厄介なデメリットもある。そのため普段使うことはまずない。

ただ、海上で休むときはこうして誰かが実艦になる。そうでないとゆっくりと身体を休ませられないからだ。

「大丈夫？」

「全然平気だクマ。球磨の鍛え方舐めちやいけないクマ」

ふふんと球磨は鼻を鳴らす。

この実艦モードへの形態変更はなかなか疲れる。そのため、あまり好んでやりたがる艦娘はいない。

もつとも、球磨は疲労している素振りを見せなかった。彼女自身が言う通り、鍛え方が違うのかもしれない。

球磨の甲板上に集まった一同は、揃って食卓を囲んでいた。

こういうときのために、一人はカセットコンロなんかを持ち込むようにしている。

艦娘としての任務は時間のかかるものが多い。いつでもどこでも自炊できるようにする準備は必要不可欠なものだ。

こういう道具一式を実艦の中に予め入れておけば良いのだが、そういう器用な真似はできない。実艦モードは、あくまでかつて艦艇だった頃の自分を再現するものだ。自由自在にコンバートできるものではない。装備として艦装に直結させたものだけが実艦モードに反映できる。

「インスタントも良いものだねえ」

「持ち運びやすいし味も良いしな」

子曰と長波がぐくりと喉を鳴らしながら、眼前のインスタント麺に手を伸ばす。

蓋を開けると、それまで中に詰め込まれていた熱気と香りが一斉に飛び出してきた。

「んー、たまらねえな！」



「今日はラーメン記念日だねえ」

「お前何でも記念日にしようとするよな」

そのとき、子日に向かって笑いかける長波のお腹が鳴った。

長波は少しぼつの悪そうな表情を浮かべて頭を掻く。

「ふふ、それじゃ伸びないけど球磨も腹減ったクマー」

「疲れちやいないけど球磨も腹減ったクマー」

全員で「いただきます」と声を揃える。

ずるずると、ラーメンをすすする音が波の音をかき消した。

「あつたかいねー」

「ずっと海上で風に当たり続けてたからな」

艦娘は艤装を身に着けて海上に直接接していれば気温の影響を抑えられるが、寒い・暑いという感覚はある。

その感覚は、船上に上ったことで一層強まっていた。

ここは普段いる南方海域よりもずっと北に位置する。そのせいで余計に寒く感じるのだった。

「お二人さん、こんなのあるよー」

ラーメンを堪能する二人にカップを差し出したのは秋津洲だった。

今回は二式大艇を活用する任務だったので、その使い手である彼女も外洋まで出ていたのである。

子日と長波がカップを覗き込むと、そこからは馴染みのある匂いが漂ってきた。

「おー、暖かいお茶ー」

「ありがとな、秋津洲さん！　こういう夜、ラーメンにお茶の組み合わせはたまらねえな」

「お安い御用かも。戦闘以外のことなら大抵できるからね！」

他のメンバーにも手早くカップを渡すと、秋津洲は流れるように寝袋を用意し始めた。

艦艇内部に入り込めば部屋にベッドもあるのだが、あまり中に入ると敵の奇襲があったときに咄嗟の対応ができないので、今回のように少人数の場合はまず利用しない。

「寒さに耐え忍びながらの寝袋……」

「泊地にある寝袋薄いからあんまり意味ない……」

「何も無いよりマシだクマ」

この後待ち受ける現実に想いを巡らせ、渋い顔を浮かべる三人。寝袋は泊地の艦娘全員に支給されているが、数を揃えるためかために低価格のものが選ばれており、お世辞にも品質が良いとは言い難かった。

「灯油ストーブや焚火台でも持ち込めたら良いのにね。艀装に詰め込めるようにできないか明石に相談してみようかしら」

「焚火台は薪がないからほとんど意味ないんじゃないかなあ」

溜息交じりに言う高雄に、子曰が首を傾げながら応じた。

「寒さに慣れるのも訓練の一つと思えばいい」

涼し気な顔で言ったのは、残りの一人である若葉だった。

もつとも、彼女も寒さのせいではんわりと顔を赤くしている。

「若葉は北方に縁が深いからそんなこと言えるんだろ。あたしは南方メインだったから寒さにや弱いんだよ」

「なんだ長波、キスカ組として情けないぞ」

「苦手なものは苦手なんだよ」

「ずずー、とお茶を飲み干しながら長波が立ち上がった。

「さて。食い終わったし、ただ待ってるだけじゃすぐに身体が冷えちゃう。軽く甲板ランニングしてくるわ」

そう言って、長波は駆け出しに行った。

それに触発されたのか、子曰と若葉もそそくさと食べて「子曰もー」

「訓練なら付き合うぞ」などと言いながら、長波の後に続いていった。

「若い子たちは元気ねえ」

「高雄。それ完全にロートルの発言クマ」

「……聞かなかったことにしてくれる？」

「良からうだクマ」

そこに、就寝の準備を終えた秋津洲が戻って来た。

腰を下ろして、一息つきながらお茶をすすする。

「一仕事終えた後の一杯は格別かも！」

「お疲れ様。夜間の見張りは私がやっておくから、秋津洲はあの子た

ちが落ち着いたら一緒に休んでて」

「分かったかもー」

息を吐いて、秋津洲は夜空を見上げた。

「おー、今日は綺麗に星が見えるかも」

「あら」

「クマー?」

秋津洲の言葉につられて、高雄と球磨が視線を空に向ける。

そこには、満天の星空が広がっていた。

「と言ってもあたし全然星のこと詳しくないから、何が何の星かは全然分からないかも」

「球磨も全然分からんクマ」

「……任せなさいと言いたいところだけど、残念ながら私もサツパリだわ」

揃ってため息をつく三人だったが、秋津洲はすぐに破顔一笑した。

「でも、名前分からなくても綺麗なものは綺麗かも!」

「良いこと言うクマー」

球磨の気の抜けた返答に、高雄が思わず笑みをこぼす。

見知らぬ星々の下、彼女たちの夜は更けていくのだった――。

不器用姉妹のバレンタイン（初春・雪風・霞・初霜）

「初霜がどんなお菓子を好むのか、ですか？」

ここは泊地の片隅にあるベンチ。

珍しく工廠から出てきた初春に突然聞かれて、雪風はオウム返しをしてしまった。

「どうしたんですか、突然」

「いや、なに。バレンタインが近いじやろう？ 昨年までわらは工

廠にこもりきりで、気づいたらバレンタインが終わっていたという感じだったのじゃが……いい加減今年はわらわからも何か贈ろうと思っただけじゃ」

初春は泊地に何人かいる技術部というものに所属している。

艦娘の艦装の改良を主な目的とする部だ。初春はその中でも特に研究熱心で、明石や夕張並に工廠へこもっていることが多い。

研究に没頭するあまり年中行事をスルーしてしまうことがある、というのによくあることだった。その辺りは雪風も初霜から聞いたことがある。

「それで妹たちに話を聞いたのじゃが……初霜だけはどうしても何が欲しいのか教えてくれなんだ。ずっと『私はいいいから、気にしないで』の一点張りでのう」

「なるほど。それで贈り物に困って、私のところに話を聞きに来たというわけですね」

「うむ。雪風は初霜とかなり親しい間柄じやろう。……ずっと工廠にこもってばかりのわらわなんかより、詳しいと思ってる」

初春は自嘲気味に笑った。

妹が何を好むのかということすら分からなかったのは、少々こたえたらしい。

「考えてみればわらは普段ほとんど姉らしいことなどしておらぬ気がする……。ふふ、本当に駄目な姉よ。なんだか今から気が重くなってきたぞ。初霜にどういう顔して会おうかのう」

「珍しくネガティブ思考になってますね。……これ食べて元気出して

ください」

雪風はポケットに入れていた塩飴を差し出した。

初春は噛み締めるように飴をゴリゴリと頬張る。

「初霜は物欲がないので、多分何を贈っても喜んでくれると思いますよ。贈る側の気持ちを重視する子なので」

「……何でも、と言われてもものう。その中でも好きとか嫌いとかあるであろう?」

「ないはずはないんですけど、そういうところをなかなか見せてくれないですよ」

雪風はこれまでの初霜とのやり取りを思い返してみた。しかし、彼女がそういう好悪の感情を見せたことはほとんどない。

あるとしたら、冤罪に対する嫌悪感と、思うような結果を出せなかった自分への怒りくらいだ。今回の参考にはなりそうもない。

……というか、姉妹からのプレゼントなんて問答無用で喜色満面だと思えますけどね。

隣で頭を捻り続ける初春を見ながら、雪風はそんな風に思うのだった。

「それであたしのところに相談に来たってわけね」

若干呆れたような声をあげたのは霞だった。

彼女も雪風と同様、初霜が姉妹艦以外で特に親しくしている相手の一人である。

「あたし、今忙しいんだけど……」

霞はフリフリの可愛らしいエプロンに三角巾を装着していた。

完全に調理スタイルである。それもそのはず、ここは霞が所属している艦隊の寮の台所だった。

そんな彼女の周囲には、カカオの香りが漂っている。

「チョコ作りかえ?」

「そうよ。たくさん作らなきゃいけないから大変なの」

「霞は泊地の皆に配る分用意してるんですよ」

「ほう……。それは素直に感心してしまうのう」

初春と雪風から尊敬の眼差しを向けられて、霞は顔を赤くしながらそっぽを向いた。恥ずかしいらしい。

「でも、これだと確かに今は手が離せなさそうですね。朝霜や潮に聞きに行きましようか」

「そうじやのう。邪魔をしても悪い」

それじゃ、と立ち去ろうとする二人の背中に、霞は思わず「ちよつと」と声をかけてしまった。

「ん、どうした霞よ」

「……え、いや、えーと。……そう。初春は、そもそも今から贈り物の準備とかして間に合うの?」

「む?」

霞の口から咄嗟に出た問いかけに、初春は首を傾げた。

「お菓子なら間宮で買えば良いのでは?」

「間宮はこの時期争奪戦激しくなるから、事前予約制にしてるのよ。予約してないならその分はないわね」

「……なんと!」

初春は衝撃で仰け反りそうになりながら叫んだ。

工廠にこもることが多いからか、彼女は意外と泊地の暗黙のルールに疎い。

「そういうえば最初のバレンタイン凄かったですもんね。提督にチョコあげようとする子が思いの外多くて、間宮がパンクして、争奪戦が実際に起きて……。提督本人は一切それに気づいてなかったっていうのも凄いですけど」

「そんなことがあったのか……。わらわ全然知らなかったぞ……」

「ま、そういうことだからバレンタインに贈り物するなら一カ月くらい前から準備しないと駄目なのよ」

ちなみに泊地の近くだと、間宮以外にお菓子を扱うような店はない。

探せば持っている人はいるだろうが、それを貰ってバレンタインに贈るのはいろいろと間違っている。さすがにそれは初春も理解していた。

「……仕方ないわねえ。あたしのチョコの材料、少し分けてあげるわ」  
「おお、良いのか!？」

「この状況見て放っておけるほど薄情じゃないわよ。……ちなみに作り方は分かるの?」

「自慢ではないが調理はサツパリなのじゃ……」

人差し指を突き合わせながら、初春は気恥ずかしそうに言った。

「はあ……分かったわよ。作り方教えてあげる。その代わりに、ちゃんと作りなさいよ?」

「うむ。作るくらいは自分でやらねば、胸を張って妹たちの前に出られぬわ」

気合を入れる初春に、霞はやや不安そうな表情を浮かべる。

一方で雪風は、どこか微笑ましそうにそんな二人の様子を眺めていた。

……そういえば、前も似たようなことがありましたっけ。

以前、バレンタインの時期に初霜が『相談に乗って欲しい』と言ってきたことがあった。

『今時は異性として好きな人以外にもチョコあげたりするらしいけど、姉さんたちにあげるのって変じゃないかな』

『日頃いつも助けてもらってるから、お礼がしたくて』

『一人だと不安なのよ……。ね、ねえ雪風。一緒に作らない?』

どこか自信なさそうな初霜に、雪風は長時間付き合わされた。

傍から見ている分には心配する要素など全然なさそうなのだが――

――どうもこの姉妹、割と自分に自信がないらしい。

あまり似ているところの見当たらない姉妹だが、意外な共通点があるものだ。

「どうした雪風。さつきからニヤニヤして」

初春から怪訝そうに尋ねられて、雪風は「なんでもないですよー」と笑ってごまかした。

「作るなら初霜の好みに合わせて輪形陣チココにしましょう。雪風もお手伝いします」

「輪形陣チココ……?」

「変な感じにして材料無駄にしないでよ」

「分かってますってー」

霞の牽制を笑って流す雪風。

二人に挟まれながら悪戦苦闘する初春。

三人の奮闘は、その日の夜近くまで続いたという――。

その年の二月十四日、珍しいことに、初春は一日工廠に顔を出さなかった。

翌日顔を見せたときの表情からすると――良い一日を過ごしたものと思われる。



## 思い出は掃除の手を止める（白雪・叢雲）

その日、白雪は泊地の執務室で掃除をしていた。もうじき大規模な作戦が始まる。泊地の艦娘も大部分が出撃することになっていた。

普段執務室を使っている提督や司令部の面々は、作戦が行われる地点へと先行していた。だから今は白雪しかいない。

提督は普段から整理整頓しているらしく、机のまわりは綺麗に片付いていた。

ただ、提督の机以外はかなり散らかっている。意外と執務室は人の出入りが激しいし、仕事の幅も結構広い。だからか、ファイルがきちんと並べられていなかったり、出しっぱなしの印刷物が机にまばらな状態で積み重なっていたりする。

「忙しいのは分かるけど、これで執務に支障出ないのかな……」

白雪は、思わずそうひとりごちてしまった。

中身を確認する必要もあるので、書類の整理整頓は見た目以上にハードである。

本来なら担当者たちがすべきだが、皆作戦のため出まわっているので仕方がない。

「まあ、今日私が手が空いたのもあって自主的に申し出たことだし、あんまり愚痴を言っても仕方ないよね……」

片付けは大変だが、書類を見るとこれまでの事跡を思い出したりもできる。

そういうのが、白雪は割と嫌いではなかった。

「これは……こっちの方かな」

ファイルの中身を整えて、棚の然るべき場所に納める。

そのとき、棚の上の方から埃の塊が落ちてきた。

「……整理整頓の前に、まずは棚を綺麗にした方が良くかも」

白雪は自室からマスクとはたき、それに雑巾を取ってきて、棚の中身を一旦出すことにした。

部屋はますます散らかることになるが、たまには棚の中身も掃除し

ておかないと、汚れが溜まる一方である。

「この汚れ具合、大掃除のときに掃除しなかったのね……。というか、どれくらい掃除してなかったのかな。すごい埃」

マスクがなかったら間違いなく咳き込んでいただろう。

時間をかけてゆつくりと丹念に掃除をする。

そうして一通り綺麗にしたところで、先ほど柵から出したファイルを元の場所に戻していく。

「……あら？」

ふと手にしたファイルに、白雪の視線が止まった。

そのファイルの表には、短く『日誌く二〇一三年』とだけ書かれたシールが貼られている。

二〇一三年といえば、この泊地ができた年だ。

どんなことが書かれているのだろう。

白雪は、ファイルを開いてみることにした。

く二〇一三年 九月三十日く

今更という気もするが、日誌をつけてみることにした。

飽き性の私がどれくらいこの日誌を続けられるかは分からないが、こういう記録も後々役立つかもしれないので、やれるところまでやってみる所存である。

この泊地は計画的に作られたものではなく、深海棲艦によるソロモン諸島の窮状を、兎にも角にもどうにかせねばと作ったものだ。設備も人手もまだまだ足りない。助けようとしていた島の人々には、むしろ助けられてばかりである。

一応、艦娘の拠点である。艦娘についての説明は、この日誌を見るような人にとってはおそらく不要だろう。

一応と書いたのは、ここが拠点として十分に機能しているか自信がないためである。艦娘は皆頑張ってくれている。それこそ命懸けで。それに応えられるよう、泊地の充実化については私の方で頑張らねばならない。

まずは人が欲しい。島の人を除くと、ここには私しか人間がいな

い。間宮や明石はサポートに徹してくれているが、それでも戦っている艦娘のフォローを十分にできているとは言えない。

できれば艦娘の心身もケアしてくれるような医者。それに明石のサポートをしてくれるような職人。インフラを任せられるような建築技術者も欲しい。

やることは多い。皆が最高のコンディションで戦えるように、そして戦いがないときは穏やかな日々を過ごせるよう、泊地を作っていないかねばならない。

門外漢も良いところだが、やりがいはある。

いつかこの日誌を見て「やってやったぞ」と言えるよう、やってみるとしよう。

初日はとりとめのない内容だったが、そこからは事務的な内容がひたすら続いていた。

続けられるか心配、というようなことが書いてあったが、結局その日誌は——書き手が泊地を去るまで続いていた。

そこに、扉をノックする音がした。

入って来たのは、泊地最初の艦娘・叢雲だ。

「あら、白雪。掃除の途中？」

「うん。叢雲ちゃんはまだ出発してなかったの？」

「残留組率いて先行組と合流しなきゃいけないからね。さっきまで仮眠してたのよ」

「あ。……出発って何時だっけ」

「あと三時間ね」

叢雲の言葉に、白雪は周囲を見渡した。

掃除のためとは言え、最初よりも散らかり具合は酷くなっている。

「……私も手伝うから、終わらせましょ」

「ごめんね。これ見てたらしい」

と、日誌を掲げてみせる。

「ああ、それ。そこまで面白いものでもなかったでしょ」

「うーん。まあ娯楽作品じゃないし、面白いかどうかで言われるとそ

うでもないけど……。でも、懐かしい気持ちにはなったよ」

「白雪も泊地発足当初からいたものね。いろいろ思い出すことあった？」

「そうだね。……いろいろあったこと、思い出したよ」

手を動かしながら、白雪は叢雲といろいろなことを語り合った。

それは、深海棲艦との戦いにおけることだったり、泊地で過ごした日常のことだったり、出会った人々のことだったり。

「だいたい四年半か。よく続いているわね、ここも」

「何度か潰れかけたしね……」

「提督も何度も変わってるものね。おかげでいろんなタイプの提督がいるってことが分かったけど」

「そうだねえ。お父さんみたいな人、姉妹みたいな子、捉えどころのない人、厳しくて優しいお婆ちゃんみたいな人——それに、提督以外にもいろんな人にもあったよね」

「昔、艦艇だった頃も人間のことは見ていたけど——関わったのは艦娘になってからだから、いろいろと新鮮だったわね。もうすっかり慣れちゃったけど」

肩を竦める叢雲を見て、白雪の表情は自然と綻んだ。

「良い人も嫌な人もいっぱいいたね」

「ええ」

「……守らないとね」

「——そうね」

やがて、散らかっていたファイルや印刷物が綺麗に片付いた。

「……叢雲ちゃんも、もし深海棲艦との戦いが終わったら、どうするの？」

一仕事終えて背中を伸ばす叢雲に、白雪はふと尋ねた。

普通の人間になることもできるし、役目を終えて軍艦の魂の元に還るということもできる。

この泊地を背負いながら戦い続けてきた妹がどういう道を取るのか、今、聞いておかなければならないという気がしたのだ。

「正直、あんまりきちんとは考えてないわ」

姿勢を改めて、叢雲は少し申し訳なさそうに言った。

「でも、人間として生きていこうとは思ってる。戦うこと以外にも、できることはいっぱいあるって、もう知っちゃったしね」

「……そっか」

どこか安堵したように、白雪は息をついた。

「そういう白雪はどうなの？」

「私？ 私は——」

白雪は何かを言おうとして、言葉に詰まり、結局何も言えないまま黙って笑った。

「考えてみれば、私も考えてなかった」

「仕方ないわね。……だったら、二人で一緒にやりたいこと探すってのはどう？ 世界は広いし、多分私たちがまだ知らないこともたくさんある。そういうものを探しに行くっていうのは」

叢雲の提案に、白雪は少し意外そうな顔をした。

誘われるとは思っていなかったのだ。

ただ、意外だったというだけで、嫌なわけではなかった。

「——そうだね。考えておこうかな。けど、そういうお誘いは吹雪ちゃんにもしてあげないと、吹雪ちゃん落ち込んじゃうよ？」

「あー。そうね。吹雪にも聞いてみましょうか。……それなら、初雪と深雪にも声かけた方が良いわよね？」

「うん。今度の作戦が終わったら聞いてみよう」

そうして、どちらともなく時計を見た。

そろそろ出発の準備を始めなければならない。

「……それじゃ、行こうか」

「ええ。今回もよろしく頼むわよ、白雪」

「もちろん」

二人で拳を打ち付け合いながら、夕陽が差し込む執務室を後にする。

また、ここに戻ってくるために。

## 倉廩満ちて礼節を知れ（鬼怒・那智）

これは、昔日のこと。

泊地がまだ軌道に乗り始めて間もない頃のことである。

「あー、もう。疲れたーっ！」

そう言っただけで後ろに倒れ込んだのは、軽巡洋艦の艦娘・鬼怒だった。その両手にはトンカチや釘が握られている。

彼女の正面には、大分形が整ってきた木造住宅がそびえ立っていた。

形が整ってきたと言っても、まだ骨組み部分ができつつあるという状態だ。

完成にはまだまだ時間がかかる。

ただ、ここに至るまでの間、木材の加工や地盤作りを散々やって来たので、鬼怒を始めとするメンバーは疲労していた。

肉体的な疲労はさほどでもない。艦娘は人間を凌駕する身体能力を持つているし、休憩はきちんと入っているからだ。

問題は、精神的な疲労の方である。

「確かに。……そもそも、我々艦娘の本分は戦うことにある。こんなところで木材や土地相手に悪戦苦闘することになろうとは」

同意しつつ不満を口にしたのは重巡洋艦の艦娘・那智だ。

彼女はどちらかというところ軍人気質なところがあって、言葉にした通り戦うことに誇りを見出すタイプだった。

しかし、この泊地に着任してからというもの、訓練以外はこのようにインフラ仕事ばかりをさせられている。

「いつまでこんな仕事やればいいんだろう」

「さてな。提督が『もういい』と言うまでではないか」

「……いつになったらそんな日が来るんだろうねえ」

はあ、と溜息が零れ落ちる。

他の皆も、口にごそしないものの不満を感じているようだった。作業の手はしよっちゅう止まるようになっていく。

「——なんだ、てんで進んでねえじゃねえか」

そこに、闊達な声が響き渡った。

鬼怒や那智、周囲の艦娘たちの視線が声の主に集中する。

そこにいたのは、小柄で精悍な顔つきの老人だった。

年の割には頑健そうな身体つきをしている。小柄とは言え、その辺の大人なら問答無用で張り倒せそうなオーラを感じさせる。

老人の名は丹羽一徹。泊地の提督が本土から呼び寄せたインフラ担当者である。

「しけた面していると仕事振りまでしけちまうぞ。なんだ、そんなに不満かい」

「……不満と言えば不満だ」

「なんで鬼怒たちがこんなことしないといけないのさー！」

皆を代表して二人が一徹老に向き合う。

一徹はギロリと二人を一瞥すると、ハアと大きく息を吐いた。

「他に人手がないんだから仕方ないってことだ。そいつは提督さんだって俺だって説明したろうが」

「理屈では分かっているが、我々はインフラ事業を営むために艦娘としての生を受けたわけではない」

「そうだそうだー！」

「必要であれば本土から臨時のスタッフを呼ぶという手もあるのではないか？」

「そうだそうだー！」

「鬼怒はうるせえな少し静かにしろい」

一徹に威嚇されて鬼怒は口を閉じた。この老人は何か逆らい難しい雰囲気を持っている。

元々は大工の棟梁だったという。ただ、その真偽はよく分からない。一徹はあまり過去を語らなかつた。

「那智よお、つまりお前さんは戦いをしたいというわけか？」

「騒乱を望むわけではないが、我々の本分は戦いにあると思っっている。あまり戦いと関係のないことをしたいという気はせんな。この時間を訓練に割り当てたいというのが正直なところだ」

まだ泊地は発足してそこまで経っていない。必然的に所属してい

る艦娘の練度もあまり高くなかった。

これでは深海棲艦との戦いで後れを取ってしまう可能性がある。那智はそれを危惧しているのだった。

「那智。んじゃ一つ聞くが、戦いに必要なのはなんだ」

「……指揮官と兵士、勝つための装備と作戦。そんなところか」

「足りないな。日本ではよく言うだろう。腹が減っては戦はできぬつてよ」

一徹が言うのとほぼ同じタイミングで、鬼怒のお腹がぐうぐうと鳴った。

周囲に何とも言い難い難い空気が漂う。

「食事に関しては間宮を中心になんとかやっている」

「ギリギリの状態だろう。食材を保存する場所だつてちゃんと用意されてない。調理場だつて間に合わせのもんだ。間宮はお前らに見せないだろうが、相当無理をしてるんだぜ」

「……それは本当か？」

「嘘言つてどうなるよ」

一徹の言葉に、周囲の艦娘が互いに顔を見合わせた。

この中で調理担当の間宮の世話になっていない者はいない。

「お前らは艦娘だ。昔と違って艦艇じゃない。半分は人間だ。人間なら戦うために腹を満たさなきゃならねえ。疲れを癒さなきゃいけない。衣食住を整えなきゃ十分に戦えねえ。なら、今お前らがやってるのは——戦いのための準備だ」

一徹はそう言つて破顔した。

「準備不足で負けたくねえだろ。なら訓練よりも何よりも、ここをきちんとお前らの家として作らなきゃいけない。そう思えば、もうちよつとやる気出るんじゃねえか？」

その言葉に反論する者はいなかった。

那智も鬼怒も他の皆も——表情を引き締めて、手を動かし始める。それを満足げに見ながら、一徹は各所の点検に移るのだった。



## レイテ沖からの帰路（赤城・加賀・三隈）

レイテ島とソロモン諸島を結ぶ海路。

S泊地の面々を乗せた船団は、ゆつくりとそこを進んでいた。聞こえるのは波の音ばかり。

船団には多くの艦娘やスタッフが乗っていたが、艦娘の大半は皆死んだように眠っていた。

未曾有の規模で行われたレイテ沖海戦——そこで死力を出し尽くした後である。

戦線に出て無傷だった者はほとんどおらず、出ていない者も後方支援で体力の限界を迎えていた。

「……今、深海棲艦に襲われたらひとたまりもないわね」  
「不吉なことと言わないでくださいよ加賀さん」

船団の護衛役として見張りにあたっていた加賀の呟きに、赤城が苦笑いを浮かべた。

二人も戦列に加わっていたので疲労していたが、それを顔に出すことはなかった。

後輩の奮闘を目にして良い恰好をしたくなつたのだろうと赤城は推測していたが、口にはしない。しても加賀は否定するだろう。

「泊地では飛龍や蒼龍、鳳翔さんたちが待っているでしょうし、きちんと皆を送り届けないと」

「……当然その『皆』の中には赤城さん自身も含まれているのよね？」  
「え、ええ。大丈夫ですって」

加賀に釘を刺されて赤城がたじろいだ。

以前、赤城は自分自身を省みず戦いに臨もうとした前科がある。戦果が挙げられるのであれば、自分自身の命を省みない。そういうところが赤城にはあった。

大分改善されているが、人の本質というものはそう簡単に変わるものではない。

今も赤城はときどきそういう危うさを垣間見せることがあった。

もつとも——本質は変わらなくとも、釘を刺す誰かが周囲にいるな

ら抑えは効く。

「……けど、良かったわ。こうして皆無事で」

「そうですね。瑞鶴も翔鶴もどこか晴れやかな顔をしていました。武蔵も——あの戦いに参加していた皆も、清々しい表情を見せてくれました」

かつて艦娘だった彼女たちが艦艇だった頃、今回と似たようなシチュエーションでレイテ沖海戦が行われた。

作戦が成功する見込みなどほとんどない。成功したとしても、戦局を好転させるには至らない。そんな凄惨極まる戦いだった。

そんな絶望的な戦況の中、多くの艦が沈み、数多の人命が失われた。今回は違う。勝てば希望が見える戦いだった。

難局ではあったが——どうにか深海棲艦を退けることに成功した。

「お二人も、とても良い表情をされていますよ」

そこに、最上型の二番艦である三隈がやって来た。

瑞雲で周囲の様子を見張っていたらしい。「異常はありませんでした」と簡単な報告をしてきた。

「……そんな顔をしているように見える？」

「ええ、とても」

三隈は、陽気なものを感じさせる笑みをたたえながら頷く。

「私たちは、かつてのレイテ沖海戦に参加することも叶いませんでしたから。……今回共にあの子たちと肩を並べて戦えた、あの子たちの重荷と一緒に持つことができた、そうして一緒に危険を乗り越えられた。それが顔に出ているのかもしれないですね」

赤城の言葉に、加賀は若干照れくさそうな顔を浮かべて視線を逸らした。

そうかもしれないが、素直にそうだと認めたくない——といったところだろう。

「三隈さんたちのところはとうですか？」

「モガミンは満潮ちゃんたちと一緒に夢の国へ旅立ってました。鈴谷と熊野は二日酔いでダウンしているようです」

「おや。あの二人がそこまで飲むのは珍しいですね」

「昨日は栗田艦隊のメンバーで集まって祝杯をあげたそうですね……。高雄さんや妙高さんですら潰れていますわ」

堅物で有名な高雄や真面目な妙高がそれでは、他のメンバーの現状も知れたものだった。

「……けど、昨晩はそこまで騒いでいるような感じはしませんでした  
が」

「どんちゃん騒ぎをするような感じではなかったようです。皆、静かに飲んでいたとか。ただ、暗い感じでもなくて——なんででしょうね。何かを偲んでいるような、そんな雰囲気の会合だったようですわ」

皆、往時の苦しさ、それを乗り越えた喜びを噛み締めていたのかもしれない。

「……そういうのも、悪くはないわね」

加賀がポツリと言った。

彼女や赤城も、何年前か前、自身が沈んだミッドウェー海戦と似た状況の作戦に参加したことがある。

作戦を終えた直後、胸に去来した思いは——何とも形容しがたいものがあつた。

苦くて、温かい。あえて言うならそんなところだろうか。

「もしかすると、深海棲艦が現れて、私たち艦娘が生まれてきたのは——  
」“そういうの”を得るためなのかもしれないね」

ふと、赤城がそんなことを口にした。

「今回、深海棲艦たちの陣容はかつてないものでした。昨年の夏の大遠征の折も相当な軍勢がいたと聞いていますが、それは欧州に行くまでの広い範囲に展開していたというもので、今回とは事情が異なります。この海域にこれだけの深海棲艦が集結したのは、何か意味があるのだという気がします」

「……一部の深海棲艦は、こちらを試すような言動を取っていたそうですね」

深海棲艦の多くは、人間や艦娘に対する敵対心をむき出しにして襲い掛かってくる。

しかし、秋に交戦した姫クラスの深海棲艦や、先日遭遇した何体か

の深海棲艦は——こちらの進軍を止めるために敵対行動を取っているような節が見受けられた。

そして、レイテ沖海戦の最奥にいた瑞鶴と瓜二つの深海棲艦は、悲痛な叫びを上げながらこちらと砲火を交えた。

深海棲艦は艦娘と表裏一体の存在ではないか。

そういう話は随分と前から出ていた。ここ数年ではより顕著にそれが現れるようになってきた感もある。

「軍艦は国を守るために戦った。戦うことで、他国の人を沈めた。それはどちらも嘘ではありません。あの戦いは意義のあったものだと思っていますが——それが何から何まで正しいものだとも思いません。そういう相反する面が、艦娘・深海棲艦という形で現れている。そういう考えも、ありなのではないでしょうか」

「レイテ沖海戦では多くの艦が沈んだ。……その負の側面があったからこそ、深海棲艦があんなに現れたと?」

「推測ですけどね。……私は、深海棲艦も何か救いを求めて現れているのではないかと、そう思うことがあるのです。それに応える形で私たちが現れた。結果的に我々は砲火を交える関係になったわけですが——それによって、私たちが生きたあの時代のことを、世界が改めて思い出すようになっていく」

赤城はどこか遠い目をしている。

加賀も三隈も、赤城がそこまで自分たちや深海棲艦のことを考えているとは思っていなかった。

「もし深海棲艦が現れていなかったら、もしかするとあの時代のこととは人々の中で風化していったかもしれません。あるいは歪められてしまっていたかもしれぬ。……そうなれば、いつまで経っても沈んだ者たちに救いは訪れない」

「……それで深海棲艦が声を上げたのだと、仮にそうだととしても、現実として深海棲艦は今を生きている人々を害しているわ。それは防がなければ」

「そうですね。私たち艦娘はそのためにいます」

加賀の言葉に、赤城は頷いた。

「ただ、いつまでも砲口を向け合っているだけではこの戦いは終わりません。きつと、どれだけ倒しても深海棲艦は現れる。……そろそろ私たちは、人類は、深海棲艦とは何なのか、どうすればこの戦いを終わらせられるのか——それをもう一度考えてみなければならぬのかもしれない」

そのとき、三隈が「あ」と小さく声を上げた。

「見えてきました、泊地です！ 埠頭には間宮さんたちが見えます」「やつとですか。やれやれ、これで少し羽を伸ばせそうです。畑の様子も見ておかないといけませんね」

先程までの様子はどこへやら、赤城は普段の調子に戻ったようだった。

急な変化に戸惑う加賀に、彼女は少しいたずらっぽく笑ってみせた。

「二人とも。泊地に戻ったら、少し贅沢に間宮さんのところでジャンボパフェをいただきましょう。私がおごります」

「え？」

「いいんですか？」

「いいんです。日々のこともこれから先のことも、まずは腹ごしらえをしないと満足にできませんから」

他の皆には内緒ですよ。

そう言って、赤城は人差し指を口の前で立てて見せるのだった。

アイオワをさがせ（神風・春風・親潮・日振・大東・アイオワ）

昼下がり。

神風は、同期である春風・親潮と三人、泊地の中庭でのんびりとお茶を飲んでいた。

「最近はいろいろとバタバタしてたから、こうやってゆっくりできるのも久しぶりね」

「そうですね。と言っても、大分燃料等を使い込んでしまったようなので、しばらくはまた護衛任務で稼がないといけませんけど」

「親潮は真面目ねえ。今はこうやって自然の中に溶け込むように、何もかも忘れてまったりしないと。ほら、春風を見てみなさい」

「わあ」

春風は周囲の緑と同化しているかのような溶け込みっぷりだった。

音を立てず、しずしずとお茶を飲む様子は、絵画の中の人のようにも見える。

「春風の佇まいは、なんとというか『禅』な感じがしますね！」

「お褒めにあずかり光栄です」

「……悪い意味ではないのは分かるけど、誉め言葉としては分かるんだが分からないんだか微妙なチョイスね」

そうツツコミながら、神風もゆっくりとお茶を楽しんでいた。

「こういう静かな時間が、ずっと続けばいいのにね」

「……神風姉様。それは、所謂『ふらぐ』というものでは」

「なにそれ？」

「漣さんが仰っていました。それはお約束のようなものだ——」

と、春風が告げたところで、おい、と誰かが駆けてくるのが見えた。

小柄な体躯の二人組。どちらもあまり見慣れない顔である。

確か——最近着任したばかりの、日振・大東だった。

「神風さんだよな？ それと、春風さんに、親潮さん」

「ええ。あなたは確か大東だったわね」

「おう。いやー、探してたんだ。いや、正確に言うとなんか別のヤツなんだけど」

「す、すみません。大東がいきなり失礼を……。大東、ちゃんと先輩には敬語使わないと駄目だよ！」

快活に話しかけてくる大東に、控え目な感じの日振。随分と対照的な二人だった。

「別に話し方は気にしてないからいいわよ。艦種や元々の艦の竣工日・進水日順とか、泊地に着任した順とか、長幼の序を言い出したらややこしいことになるし」

「なんていうか、貫禄あって自然と敬語になっちゃう人とかはいますけどね」

そう言いながら、親潮は何人かの顔を思い浮かべているようだった。

おおよその察しはつくが、今は別にそれが本題ではない。

「誰かをお探しのですか？」

春風が尋ねると、日振と大東は揃って大きく頷いた。

「実は、何人かの方に誘われてかくれんぼをやってたんです」

「けど、時間が過ぎても一人だけ全然見つけられなくてさ。戻ってくる気配もないから、皆で探してんだよ」

「なるほど。けど、それでなんで私たちを？」

「いなくなったの、アイオワさんなんです」

日振の言葉に、神風たちは揃って「あー」と頭を抱えた。

アイオワ。神風たちと同期の、米国出身の戦艦娘だ。

テンション高そうな雰囲気ながら、意外とシビアな価値観の持ち主なのだが——たまに天然っぷりを発揮して、周囲を混乱させることもある。そういう艦娘だった。

この泊地のアイオワは、よく作戦行動等で神風と組んで行動することが多かった。

私生活でもかなり親しくしている。だからか、アイオワ関連で何かあったときは神風に話が来ることが多い。

「かくれんぼもやるからには全力で——って感じで隠れて、その間待ってるのに疲れて眠りこけてるとか、そんなところね」

「よく分かるな」

「ありがとう、嬉しくはないけど」

仕方ないと観念し、神風はすくつと立ち上がった。

「アイオワを探すわよ！ 神風探検隊、ついてらっしゃい！」

「おー！」

「お、おー……っ」

「私たちも……ですよね」

「そうですね。親潮さん、頑張りましょう」

各自、やる気はまばらなれど——神風探検隊は、こうして発足したのであった。

かくれんぼの範囲は泊地の敷地内限定とのことだった。

とは言え、この泊地もそれなりの広さを誇る。闇雲に探すのは自殺行為だ。

アイオワが隠れそうな場所を重点的に見て回るのが良いだろう。

そんなわけで、まずは寮にあるアイオワの自室にやって来た。

ここはアイオワと同じく米国出身の艦娘・サラトガとの相部屋なのだ、サラトガは日振たちとは別行動でアイオワ搜索中らしい。

「ここにいますか？」

「アイツの思考は結構堅実なのよ。突拍子もない場所を隠れ場所を選ぶことはないと思う」

日振の質問に答えながら、神風はベッドの下やクローゼットの中をチェックしていた。

だが、いずれの場所にもアイオワの姿はない。

「アメリカ出身だから銃とか飾ってあるかと思ったけど、特にそういうのはないんだな」

「大東さん、それはかなり偏見が入っているのでは……」

「そういえばアイオワさん、誰も日本刀飾ってないって言って以前ガツカリしてましたね」



「その後、臯月とかに後で見せてもらってテンション上がったけどね」

異文化コミュニケーションはなかなか難しいものだ。

続いて、今度は泊地内にあるバーにやって来た。

泊地内でギャンブルが公認されている場所だが、それとは別にマスターの出すお酒目当てで来る者も多い。

「おや、皆さんお揃いで」

カウンターのの中からマスターが丁寧にお辞儀をしてきた。

人間のスタッフで、過去の経歴は一切不明だが、篤実な人柄で周囲の信頼を得ている不思議な人物である。

各地を放浪していたらしく、古今東西様々な料理やお酒を提供してくれる。

「マスター、アイオワ来なかった？　かくれんぼしてたらしいんだけど、終わっても帰ってこないんだって」

「本日はお越しになられていませんね。今日のお客様は御覧の通りです」

そう告げるマスターの前には、カウンターに突っ伏して豪快に酔い潰れているポーラの姿があった。

彼女も神風たちの同期で、アイオワのこともよく知っているはずなのだが――。

「この調子じゃポーラから話聞きだすのは無理ね」

「後でザラさん呼んでおきましょうか……」

「そうしていただけると助かります」

マスターに別れを告げて外に出る。

他にアイオワが行きそうな場所を何点か探してみたが、一向に見つかる気配はなかった。

「あーもう、どこ行ったのよ……」

半ば諦めかけたそのとき、神風の携帯が鳴った。

げんなりした表情を浮かべながら電話に出た神風だったが、その表情はすぐに生気を取り戻した。

「……え、そうなの？　分かった、ありがとう」

電話を切ると、神風は苦笑いを浮かべながら一同に告げる。  
「見つかったみたいよ、アイオワ」

一行がやって来たのは、神風の部屋だった。  
勝手知ったる自分の部屋なので、神風は躊躇なく扉を開けた。  
そこには、神風のベッドの上で寝息を立てるアイオワの姿があった。

朝風が神風を尋ねに来たときは、既にこの状態だったらしい。

「まさかこっちにいるとはね……」

溜息をついて、神風はアイオワの身体を揺さぶった。

「アイオワ、さっさと起きなさいってば！ もうすぐ日が暮れるわよ！」

「……んう？」

寝ぼけ眼のアイオワが、ゆっくりと身体を起こした。

ぼんやりと周囲を見回して、少しずつ状況を理解したらしい。

「オー、ソーリイ！ 春の陽気に負けて、すっかり寝入っちゃってたわ！」

「そんなことだろうと思ったわよ。けど、なんで私の部屋に？」

神風に尋ねられると、アイオワは若干照れたように頬を掻いた。

「かくれんぼにはサラも参加してたから、普段私が行きそうなところはチェックされてると思ったのよ。だから、ちよっと神風にかくまってもらおうと……」

「そしたら私が不在だった、と。それで待ってるうちに眠くなってきたってことね」

「面目次第もゴザイマセン」

アイオワがしゅんと項垂れる。

だが、日振や大東は笑ってそれを許した。

「今日一日、泊地のいろいろなところを神風さんたちと見て回れて、それはそれで楽しかったのよ」

「そうそう。それに眠気には勝てないよなー！ あたいも今日みたいな日に部屋いたら、多分寝ちやってたよ」

日振たちがそう言う以上、神風たちもアイオワを特に責めるつもりはなかった。

「せっかくだし、サラトガたちとも合流してこのまま夕食にしない？」

「そうですね。朝風さんたちも呼びましようか」

「ポーラさんも大丈夫そうだったら呼んでみましよう」

春風と親潮の提案に、一同が頷く。

ゆっくりはできない夕餉になりそうだったが——それはそれで、良いものになりそうだった。

儉約はつらいよ（佐渡・対馬・松輪・ガンビアⅡベイ・磯風・浜風）

はあ、と大きな溜息が零れ落ちる。

「祭り、楽しみにしてたのになー」

ぼやいたのは、海防艦・佐渡だった。

レイテ沖海戦の最中に着任し、それから海戦が終わるまで前線基地にいたので、泊地に来たのはつい最近である。

「仕方ないわ、儉約令が出てるんだもの」

そう言つて佐渡を宥めたのは、同型艦の対馬だった。

二人とも海防艦故に小柄な体躯の持ち主だが、対馬の方は妙な落ち着きがあつて、所作も大人びている。

一方の佐渡はというと、元氣な腕白っ子そのままと言つた感じである。

対馬が口にした儉約令とは、つい先日泊地の司令部から出された臨時の命令だった。

どうも先のレイテ沖海戦で、泊地の資源があらかた吹っ飛んでしまつたらしい。

おまけに、今は諸事情あつて拠点の改築・増築を進めているところで、レクリエーションに回せる経費はびた一文ない有り様だという。

泊地では時折祭りをすると聞かされていたのだが、この布告によつて、大規模な祭りは当面すべて中止に決まつた。

祭り好きな佐渡としては、残念無念なのである。

「なんだよ、つつしーは平氣なのか？」

「あつたらあつたで楽しむけど、ないならしないで別に……」

「ノリ悪いなー！ まつは佐渡様の悲しみ、分かるよなっ」

「えっ……あ、うん」

急に話を振られて曖昧に頷いたのは、同型艦の松輪である。

元氣な佐渡、マイペースな対馬と比べると、どこことなくオドオドした印象の子だった。

「えっと、おやつとかも減るのは、残念だと思う」

ただ相槌を打つただけだと悪いと思ったのか、松輪は慌てて言葉を付け足した。

それに反応を示したのは対馬の方だった。

「そうね。おやつを減らされるのは辛いわ……」

「そこには嫌なのか。まあ、二人とも甘いもん大好きだもんなー」

佐渡はそちらにはあまり関心がないようだった。どこことなく他人事のようなのである。

「ガンビアさんはどう思う？」

「んー？」

最後尾に控えていた護衛空母——ガンビア・ベイは、質問を受けて、首を傾げながら唸り始めた。

ちなみに、現在四人は泊地近海の警備中である。

「ないのは物資で、個人資産は問題ないんだよね。おやつとかなら、他所で買ってくるのは？」

「品揃えが豊富な市場で一番近いのってどこだっけ……」

「ホニアラ市じゃない？」

「遠すぎるー！」

うがー、と呻く佐渡。

ちよつと散歩ついでに、という感じで行ける距離ではない。

「……でも、皆そう考えて我慢してるかもしれない」

「ん、なんだよっつしー。何か面白いこと考えついたのか？」

「ええ。私たちが運送業をするの」

「ほほーうっ？」

儲け話の匂いを感じ取り、佐渡が悪い笑みを浮かべる。

フフフと笑い合う佐渡と対馬を見て、松輪とガンビア・ベイは「大丈夫かなあ」と不安そうに顔を見合わせるのだった。

対馬の思いついたプランというのは、さほど特別なものではない。

泊地内で「おやつもつと買いたいけど、遠くまで行くのはちよつと……」という艦娘たちを探し、買い物代行する、というものだった。

当然手間賃はいただく。それが対馬の狙いでもあった。

「ちよつと面倒だけど……手間賃の分、もつとおやつが買える」

「それだけだと運送業ってか、ただのお使いじゃないか？」

「そうね。それだけだと。だから、注文数に応じて割引したりするの。あと一緒に注文してくれる人紹介したら紹介手数料を……」

「対馬ちゃん、ちよつと笑みが怖い……」

そんなわけで、佐渡と対馬、そして成り行き上巻き込まれる形になった松輪とガンビア・ベイの四人は、泊地内で聞き取り調査を行った。

割とおやつを望む声は多かった。懐具合の問題で依頼を断念する者もいたが、最終的には結構な数のクライアントが揃った。

「結構な額が集まったな……」

買い物をしてくるという性質上、クライアントからは前払いで料金を預かっている。

現在、佐渡の手には大量の硬化や紙幣が集まっていた。

「……」

「佐渡ちゃん」

「お、おう？」

「預かっておくね」

何か危険な予感がしたのか、珍しく松輪が有無を言わさぬ調子で佐渡からお金を取った。

松輪は改めて周囲を見て、半分をガンビア・ベイに渡す。

「お金は私とガンビアさんで預かっておくから……」

「分かったよ。正直、魔が差してなんか買っちゃまいそうな気がするしな」

「……何気なく松輪ちゃんから佐渡と同レベルに見られていることが判明して、私は悲しい」

よよよと泣き崩れる対馬。ただ、どうにもその反応は嘘っぽかった。

「し、信用してないわけじゃないよ？　ただ、佐渡ちゃん以外で分担してたら、佐渡ちゃんだけ仲間外れにしてるみたいになっちゃうと思っ

「だから……」

「気にしなくていいぞー、まつ。これつつしーのいつもの冗談だ」  
「バレた？ オロオロする松輪ちゃん、可愛いから、つい」

佐渡に指摘されると、対馬はけろつと元通りの表情に戻った。

「でも、このメンバーでホニアラ市まで行けるかな……」

ふと、ガンビア・ベイが今更な疑問を投げかけた。

戦闘力に乏しい海防艦三人と、量産型の軽空母一人。潜水艦相手ならドンと来いと言える布陣だが、水上艦の敵艦隊に遭遇したらひとたまりもない気がする。

「そうか、そこちゃんと考えてなかったぜ」

「普段は敵の水雷戦隊と遭遇するくらいって聞くけど……それでも、私たちにとっては十分な脅威ね」

「分け前は減るけど、誰か用心棒を雇うしかないか」

「でも、ここで用心棒買って出てくれる人って誰かしら」

対馬の問いに、全員が首を傾げた。

奇しくも、ここに集まったのは泊地に来て日が浅い艦娘たちばかり。

「こういう話に乗ってくれそうな人、と言われても全然ピンと来ない。」

「そもそも用心棒務まるくらい強い人じゃないと駄目よね」

「誰が強いんだここ」

「やっぱり戦艦・空母の人たちとか……？」

「戦艦・空母は出撃許可出ないと泊地から出られないって聞いたよ。ほら、資源の消費が激しいから」

「げっ、そうか……。そもそもそこから話が始まったんだったな」

どうするか、と四人揃って頭を働かせる。

しかし、省エネかつこういうのに付き合ってくれる強い人、となるかどうかともパツと思ひ浮かばない。

「——どうやらお困りのようだなー」

そこに、突如凜とした声が響き渡る。

四人が声のした方に視線を向けると、そこには黒髪ロングの少女

と、銀髪ショートの少女がいた。

「……何してんだ、磯風・浜風」

「なんだ、反応が悪いな佐渡よ。困っているようだから声をかけたというのに」

不服そうに磯風が口を尖らせた。

磯風・浜風は陽炎型駆逐艦の艦娘だ。駆逐艦は海防艦ほどではないが小型の艦種になる。省エネ戦力の筆頭と言っている。

「もしかして、手伝ってくれるの？」

「その通りだ、ガンビア・ベイよ。ちょうど我々は新しい改装の試運転中でな」

「明石から数日間この艦装を使ってみてくれと頼まれていて、どうしたものかと考えていたところなんです」

見ると、確かに二人の艦装は普段と少し違っているようだった。

「けど、駆逐艦と海防艦、軽空母だけで大丈夫でしょうか」

「心配いりませんよ、松輪」

「うむ。別に自惚れているつもりはないが、特に問題ないだろう。この泊地には英雄と言うほどの者はいないが、弱卒もない」

「えー、本当にい？」

良いことを言った風な磯風に対し、容赦ない疑問を投げかける佐渡。

「疑うなら見てみるか、私たちの力を。もしホニアラ市に行けず戻ってくるようになったら、私と浜風の取り分は返上する」

「えっ、磯風……？」

「おう、面白い！ なら見せてもらおうじゃねえか、陽炎型駆逐艦の――十七駆の実力を！」

「え、ちよつと……」

間に立つ浜風をスルーして、佐渡と磯風はトントン拍子に話を進めていく。

「浜風も、大変なんだね」

どこことなく浜風の立ち位置に共感するものがあつたのか、ガンビア・ベイは何度も頷いた。



浜風はそれに対し何かを言いかけて、結局やめた。不毛な気がしたのである。

「よし、では行くぞ皆の者！ この磯風についてくるがいい！」

「あ、指揮するのは佐渡様だぞ！ 勝手に行くなー！」

駆け出していく磯風と、それを追う佐渡。

二人は、あつという間に他の四人の視界から消えていく。

そんな二人に遅れまいと、他の四人も慌てて後に続いたのだった。

以下、今回の後日談。

何度か危うい場面はあったものの、一行はどうかホニアラ市まで無事に辿り着いた。

しかし、泊地の面々が所望するだけの量のおかしはそもそもホニアラ市にもなく——四人の儲けは、労力に比してとても小さなものになってしまったのかなんとか。

桜に合うお味はどれ？（タシユケント・ジャーヴィス・千代田・千歳）

春。この時期、S泊地では花見をする習慣があった。

見るのももちろん桜の木である。

何年前か前、花見をしたいという要望が上がった。それに応えるため、わざわざ買い取った桜である。

少し前まで行われていた大海戦で泊地の資源は著しく消耗した。

そのため、例年のように泊地全体で大掛かりな催しをする余力はない。

それでも有志は集まり、いくつかのグループに分かれて花見を決行する運びとなった。

「どうしたものかな」

そんな桜の木の下で、腕を組んでなにやら考え込んでいる艦娘が一人。

先の大海戦で着任したばかりのタシユケントである。

「そんなに深く考えなくても、ピーンと来たので良いんじゃない？」

タシユケントの隣にいた金髪の愛らしい少女——ジャーヴィスが人差し指を立てながら言った。

彼女もタシユケントと同じく、先の大海戦で着任した艦娘である。

「そうは言うけどね、ジャーヴィス。祖国の威信がかかっているんだ。手は抜けない」

「うーん。でも結局好みの問題もあるし、出してみないと何とも言えないと思うけどなー」

「——何か困りごと？」

二人の会話が聞こえたのか、通りかかった軽空母の千代田が声をかけてきた。

へべれけになった姉の千歳を背負っている。夜通し飲んでいた姉の回収をしているところらしい。

「あつ、千代田！ グッモーニン！」

「やあ千代田。大変そうだね」

「まあね……。で、どうかしたの？ タシユケントは随分と悩んでるみたいだったけど」

「まあね。ちよつとした課題を抱えていて、それにどう臨もうか迷ってるんだ」

「ふうん。良かったら聞くけど」

背負うのに疲れたのか、千代田は千歳を桜の木の下で寝かせた。

千歳は起きているのかいないのか、楽しそうな笑みを浮かべながらぶつぶつと何かを呟いている。

「実はあたしらは同じ花見グループなんだけど、海外出身のメンバーが多くてね。せっかくだから各国の料理を持ち寄ってみようという話になったんだ」

「へえ、華やかで良いじゃない」

「華やか……まあそうかもかもしれないけど。作る側としては何を作れば良いのか迷うんだよね。特にあたしたちは艦娘になって日が浅いから、料理なんて経験が全然足りてない。選択を間違えると残念な結果になりかねないんだ」

タシユケントは深刻そうに拳を握り締める。

真面目な子だなあ、と千代田は感心した。

この泊地は日常生活に関しては緩い考えの持ち主の方が多い。花見に持ち寄るものなんて適当で良いという者が大半だろう。

「不安があるならガングートに頼めば良いんじゃないの？」

「頼もうとはしたんだが、良い機会だからお前の実力を見せてやれ、と放り出される形になってしまったね。ヴェールヌイにも協力を要請しようとしたんだが、面白そうだから今回は第三者に徹しよう、と」

千代田には、ガングートの意図はなんとなく分かった。タシユケントが泊地に馴染めるよう、自分で頑張ってみてほしいのだろう。

ヴェールヌイこと響については、深く考えても仕方がない。言葉通り『面白そうだから』と捉えておけば良い。

「あ、占守は？ あの子もそっちの国に縁があつたでしょ、確か」

「料理がサツパリらしい。メインディッシュは他の人が持つてくるだ

ろうから自分は団子を持参する、と」

タシケントは頭を抱えてため息をついた。

同郷に縁がある艦娘たちの誰一人として頼れないのだ。無理もない。

「そもそもロシアの方ではお花見の文化ってあるんだっけ？」

「あたしも直接行ったことあるわけじゃないから知識だけになるけど、最近じゃ日本から運ばれた桜を見る人たちがいるみたいだよ。日本みたいに花を見ながら食事をするというのは、そこまで一般的ではないみたいだけどね」

「となると、こういうときの定番みたいなのはないわけか」

「定番がないならタシケントの好きなもの持っていけばいいって言ってるだけどネ」

ジャーヴィスの言葉にタシケントが唸った。

答えがいつまで経っても出ないし、そろそろ妥協点を探すべきかと考えているのだろう。

「ジャーヴィスは何持っていくの？」

「あたしはローストビーフ……にしたかったんだけど、肉がないから、フィッシュパイにするわ!」

「フィッシュパイ……」

その言葉を聞いて、千代田とタシケントの脳裏に浮かんだのは、魚の頭が突き出た奇怪なパイだった。

それはフィッシュパイの一種であり、イギリスにおいては伝統的な由緒あるパイなのだが——二人はそういう知識を持ち合わせてはいない。

「……無難にスコーンとかにしない？」

「スコーン? いいけど、他の人と被っちゃうんじゃない? ウォースパイトもアークも金剛もいるし」

「なるほど。今回のグループ分けは散らすんじゃないやなくて国ごとにまとめる方針なのね……」

そのとき、意識があるのかわからないのかはつきりしない千歳が、

「ウォツカ……エール……」

と口にした。

「まあ、宴会だしアルコールという手もあるか……」

「いやいやいや、やめときなさい。多分あんたたちのグループポーションでしょ。そんなもの出したら收拾つかなくなるわよ!」

「彼女か。そんなに酷いのかい?」

「今の千歳お姉なんか目じゃないわ」

えへへ、と幸せそうに涎を垂らしながら、千歳は寝返りを打った。

さっきのは寝言だったのかもしれない。少なくとも、まともな意識があるようには見えなかった。

「ビールで思い出したけど、マーマイトなんか良いかもしれないわ!」

と、ジャーヴィスが明るい声を上げた。

「マーマイト? 聞いたことないわね」

「ビールの副産物で作られるものよ。ここってビール自作してるんでしょ? もしかしたら作れるかもしれない!」

「マーマイト……どこかで聞いた気がするんだよな」

明るいジャーヴィスとは対照的に、タシユケントは若干不吉そうな顔つきを浮かべていた。

「ちよつと癖はあるけど、好きな人は好きになれると思うわ。イギリスではメジャーなのよ」

「ふうん。日本でいうところの納豆みたいなものかしら」

「そうそう、そんな感じ!」

ジャーヴィスは屈託のない笑みを浮かべて頷いた。

「あたしはどうするかな。どうせ? み助がいるならおつまみ系という手もありそうだし、オイルサーディンにでもするか」

「オイルサーディン……それも聞いたことないわね」

「いわしを塩水に漬けた後、オイルで煮込んだものだよ。ウオツカのおつまみに良いんだ。この辺でいわしが獲れるかどうかは分からないけど、なければ他の魚でもまあ問題ないだろう」

つまみに良い、という言葉聞いて千歳がピクピクと反応する。

意識は不確かながら、酒に関する話題だということは分かっているらしかった。

「……もし良ければレシピ教えてくれない？ 二人の準備、手伝ってあげるからさ」

「良いのかい？」

「ええ。なんか千歳お姉がちよつと興味持つてるみたいだし、作り方覚えておいた方が良さそう」

肩を竦めながら言う千代田に、タシユケントとジャーヴィスは苦労人の影を見た気がした。

以下、今回の後日談。

タシユケントやジャーヴィスたちのグループは国際色豊かな料理が振る舞われ、他のグループにはない独特な宴会の様相を呈した。

ポーラやリットリオ、ガングートら呑み助勢にはタシユケントのオイルサーデインが好評だった。

一方、ジャーヴィスの振る舞ったマーマイト料理は凄まじい惨状を引き起こしたが、その過程で呑み助勢の酔いを醒ましたところから、一部の艦娘からは「呑み助に対する気つけ薬」として重宝されるようになったという。

よみずいランドに行こう！（鬼怒・山城・北上・藤波・酒匂・アークロイヤル）

レイテ沖での大海戦が終結してしばらく経った頃、羽田空港に六人の艦娘が到着した。

鬼怒・山城・北上・藤波・酒匂・アークロイヤル——いずれも遙々S泊地からやって来た面々である。

「いやー、東京も随分久しぶりだねえ！ 前来たのはいつだったかな」「鬼怒、それはバスの中で考えれば良いのではないか。あまり悠長にしているほど時間はないぞ」

アークロイヤルに促されて、一行は案内を確認しながら新宿行きのバスへと乗り込んだ。

今回、彼女たちは横須賀鎮守府からイベントに招待されていた。そのイベントの開始時刻まで、あまり余裕がない。

「よみずいランド……どんなところなんだろう」

コンビニで買ったおにぎりを頬張りながら、藤波が酒匂へと問いを投げかけた。

よみずいランドというのは、今回イベントが開かれるテーマパークである。

どういう縁があつたのかは分からないが、横須賀鎮守府は今回とあるテーマパークとコラボし、期間限定でそのテーマパークをよみずいランドなるものに改装してしまったのだという。

「テーマパークって言うくらいだし、いっぱい遊ぶところあるんじゃない？」

「時間があまりないのが惜しい、かな。とんぼ返りなんて残念」

「来ただけでもラッキーなんじゃないのー？」

不服そうな藤波の頬を突ついていたのは北上だった。

今回、横須賀鎮守府が用意してくれた招待枠は六人分だけだった。

滅多に行けない東京への遠征である。S泊地の中でも希望者は殺到した。

ここにいる六名は、クジで選ばれたラッキーガール揃いなのである。

「ラッキー……日向や最上に凄く恨めしそうな目で睨まれたのだけど、私はラッキーと言えるのかしら……」

北上の言葉に反応し、物憂げな表情を浮かべたのは山城だ。

レイテの海戦を経て以前よりは前向きな面を見せるようになったが、運というワードに反応してしまうところは変わっていない。

今回のよみずいランドはテーマが「瑞雲」になっているため、瑞雲愛好家である日向や最上は特に行きたがっていた。落ちたときの落胆っぷりは、三隈曰く「映画の山場でショックな事実を知らされた主人公みたい」とのこと。

「まあまあ。皆にはこれをお土産にすれば良いんだよ！」

鬼怒が首から下げているカメラを持ち上げて言った。磯波から預かったものらしい。

他にはアークロイヤルが青葉から預かったカメラを持っていた。

「私はあまりこういうのをやったことがないのだが、上手くできるだろうか」

「大丈夫大丈夫、てきとーにやれば良いんだよ」

あつはつは、と気の抜ける調子で北上がアークロイヤルの肩を叩く。

バスは、新宿に到着しようとしていた。

「思っていたよりも静かなところだねえ」

新宿経由でよみずいランドの最寄り駅に到着した途端、酒匂が周囲を見渡してそんなことを言った。

確かに、東京というイメージに反して、この辺りは割とのかな感じがあった。

羽田・新宿を経由してきただけに余計そういうイメージを持ってしまふのだろう。

「電車があるだけうちより都会でしょ」

「それを言ったら私ら何も言えなくなるよ山城っち」



S 泊地近辺はそもそも交通機関が存在しない。

店もほとんどない。泊地の外にある一番近い民家は、しばらく歩いた先にある集落まで行かないとない。

言ってしまうえば田舎の極致みたいなところである。

「ほら、そんなこと言ってるんで早く行こうよ。ここからだと言ったらがあるんだってさ」

「ゴンドラ……存在は知っているが、乗るのは初めてだな」

アークロイヤルが少しばかりワクワクした様子で言った。

あまり感情を表に出すタイプではないのだが、ある程度親しくなると、表情が細かいところでコロコロ変わるのが分かってくる。

ゴンドラは前方・後方にそれぞれ二人程乗れる構造になっていた。

アークロイヤルと相席になったのは藤波だったが、乗るや否や、アークロイヤルはカメラをあちこちに向けて「むう」と悩まし気な声を出していた。

「藤波。ここの写真もやはり撮るべきだろうか」

「デジカメだし電池あるならいくら撮っても良いんじゃない？」

「そうか。……まあ、そうだな！」

藤波の同意を得て勇気づけられたのか、若干日向のような口ぶりで頷いて、アークロイヤルはゴンドラから見える風景を収めながらシャッターを何度も切り始めた。

……あー、これ、ずっと撮りたかったんだなー。

と、アークロイヤルの様子を微笑ましく見守っているうちに、よみずいランドが近づいてきた。

近づくにつれて盛り上がっている様子が音で伝わってくる。周囲の風景はのどかそうなどころも多いが、各所に視線を向けると人が集まっているポイントがいくつもあるのが分かった。

ゴンドラから降りると、すぐ近くによみずいランドへの出入り口があった。

「いらっしやいなのです……あー！」

入園券を買おうと鬼怒が販売所に顔を出すと、そこにいたのは暁型駆逐艦の電だった。

S泊地の電ではない。おそらく横須賀鎮守府の電だろう。

「艦娘さんですね。お話は司令官から伺ってるのです」

「おお。一目でよく分かったね」

「そこは、艦娘ですから！」

どこことなく得意げに電が胸を張る。

鬼怒たち一行は全員が普段とまるで違う装いをしていた。衣装だけでなく髪型も変えており、ぱつと見誰か分からないような変装っぷりである。

艦娘の存在は大分広く浸透しているので、騒ぎにならないようにと変装したのだが、それも同じ艦娘相手だと通用しないらしい。

「皆さんが招待されているイベント会場は奥のホールです。開園時間までにホール前の広場に集まってください、なのです」

「了解。ありがと！」

電から全員分のチケットを受け取ってゲートをくぐる。

初めて足を踏み入れるテーマパークという空間に、一同は思わず足を止めた。

観覧車。ジェットコースター。それ以外にも、見たことのないアトラクションがあちこちに展開している。

「……イベント参加するのやめて、遊んで回らない？」

「後でバレたら問題になるわよ」

「ぴゅー……山城さん、真面目なんだー」

酒匂が口を尖らせた。

残念ながら、スケジュールの関係上アトラクションをのんびり楽しむだけの時間的余裕はない。

「あ、物販やってるらしいから寄ってっていい？ 泊地の皆からも買えたら買ってきてって頼まれてて」

「いいよ、藤波ちゃん。物販やってる建物、すぐそこにあるみたいだし」

園の入り口付近にある建物。

入園券と一緒に電から渡されたガイドマップによると、そこで横須賀鎮守府特性の艦娘グッズが販売されているらしい。

「……艦娘が艦娘グッズ買う絵面ってすごいシユールだよね」

「ある意味これまで以上に艦娘だとバレたくない場所だな」

北上の意見にアークロイヤルが頷く。

しかし、それは杞憂に終わった。

建物に入った一行が見たのは、S泊地のメンバーを総動員してもできないような長蛇の列だったのである。

幾度も折り返しながら伸びるその行列は、すべて物販の待ち行列だった。

「……これは無理だね」

「うん。確実にイベントに遅れるね」

揃って引きつった笑みを浮かべる一行。

そのとき、物販のスタツフと鬼怒の目が合った。

スタツフは由良だった。おそらく電同様横須賀鎮守府の由良なのだろう。

俊敏な動きで、助けを求めるかのようなサインを送ってくる。

それに対し鬼怒は、すまねえ俺には行かなきゃならないところがあるんだ、というサインを送り、踵を返した。

「鬼怒、今何してたの?」

「S泊地長良型秘伝のサインを送ったのさ、山城さん」

「……それ伝わってたのかしら」

後方から由良の恨めしそうな視線を感じながら、鬼怒は逃げるようにその場を後にした。

魔の物販エリアを抜けると、今度はプールエリアが広がっていた。

この日は春にしては陽射しが強めだったので、涼しいこのエリアで休憩している人の影がちらほらと見える。

「なんか流れるプール、めっちゃ人集まってるね」

藤波が左手のエリアに視線を向けながら言った。

「なんでも艦娘のイラストがプリントされたバルーンが設置されてるみたいだよ」

酒匂がスマホを片手に情報を調べていた。

バルーンの周辺には、スマホで写真を撮ろうとする人々が何人かいる。

「ほう、あれは……撮るべきなのか？」

「止めはしないけど、なんか自分のグラビアを自分で撮るみたいなのにならない？」

「あ、沖ちゃんがあらぶってる」

藤波の言葉通り、沖波バルーンが強風によって激しく揺れ動いていた。

しかし、バランス調整機能が働いているのか、どれだけ強い風が吹いても元の姿勢に戻ろうとする。

「うちの沖ちゃんよりバランス感覚良いのでは……」

「それ本人に言ったら多分膨れるからやめときなよ？」

北上が藤波にそんなことを言っている一方、反対側のエリアでは山城が静かに興奮していた。

「これが、横須賀の用意した1／1瑞雲……そのオリジナル！」

以前、横須賀鎮守府はPR用と称して1／1瑞雲を12機制作した。

そのうちの1機は紆余曲折を経てS泊地とお隣の基地で共同購入したのだが、ここに設置されているのは12機の中の大元になった1機らしい。他の11機はこれをベースに作られたレプリカだという説もあった。

「やっぱり出来違うの？」

「全然、全然違うわ。酒匂も瑞雲の扱いに慣れてくればその違いが分かるようになるはずよ」

「ぴ、ぴゃー……っ？」

静かに鬼気迫る様子を見せる山城に、酒匂は若干後ずさりした。

日向や最上ほどではないが、なんだかんだ山城も瑞雲好きの一人なのである。

「あっちには1／20日向もいるね」

「なんで1／20姉様じゃないのかしら……」

「バランスの問題だと思うよ」

「そんなのどうとでもなるでしょう。海外から人気なのよ、姉様！」  
「お、おう……」

熱い扶桑推しに、鬼怒までもが後ずさった。

どうもこのエリアに足を踏み入れてから、山城は静かにヒートアップしているようだった。

「と、とりあえず写真撮っておこうか。横須賀鎮守府の力作だし！」

「そうね。あ、私が撮ってあげても良いわよ鬼怒。瑞雲と……一応、日向のことなら、私が一番詳しいでしょうし」

撮りたいんだなこやつめ——そう口に仕掛けた鬼怒だったが、それを言うともまた面倒なことになりそうだったので、大人しくカメラを渡す。

カメラを手にした山城は、いつになく真剣な面持ちで瑞雲と日向の撮影を始めるのだった。

そうこうしている間にイベント開始の時間が迫って来た。

一行は慌てて会場前の広場に向かう。

途中、スタンプラリーに興じる人々の行列やカフェで休む人々の姿が目に入った。

家族連れの人もいれば、友人同士で来ている人、カップルで来ている人もいた。

緑色の瑞雲とプリントされた法被を着こんでいる人もいる。まるでイベントのスタッフのようだった。

「皆楽しそうだね」

「まだ平和になったってわけじゃないのにねえ」

酒匂の言葉に、北上が苦笑いを浮かべた。

先のレイテ海戦で深海棲艦の勢いを削いだのは事実だ。しかし、それで深海棲艦に関する問題が解消されたわけではない。

艦娘の戦いは、今も続いている。

「良いじゃない。平和なんてそもそも束の間のもなんだし。その束の間を楽しめるなら、十分な贅沢よ」

「素晴らしい。山城は前向きなのだな」

「素直な前向きさとは言い難い気もするけど……」

感心するアークロイヤルにツツコミを入れる藤波。

そんなやり取りをする一行を見て、なんだかんだ皆も楽しんでいるじゃんかねえ、と一人ほっこりする。

広場に到着すると、既に大勢の人が待機していた。

横須賀鎮守府の艦娘が開催するスペシャルステージ。

それを見に来た人々である。

「……昔は艦娘否定派も大勢いたって言うけど」

「今もいるらしいよ、藤波っち。けど、横須賀の広報活動のおかげで、中立派から肯定派に流れる人が増えてきてるんだって」

「そういう点で我々は横須賀に足向けて寝られないな。うちの泊地からでは広報などやりようもない。横須賀に任せきりだ」

近くにあつたバンジージャンプから落ちる人を見ながら、アークロイヤルが静かに言った。

——と、そんなアークロイヤルの肩を、後ろから叩く者がいた。

「こんにちは、S泊地の皆さん」

横須賀鎮守府の赤城だった。

最強と名高い横須賀鎮守府の面々、その中でも空母組の指揮官として辣腕を振るう最優の空母の一人だ。

そんな赤城が、につこりと——少々見る者を不安にさせるような笑顔を浮かべて、酒匂の肩をがっちりと掴んでいる。

「あ、あの。赤城さん……?」

「すみません。本日のスペシャルステージで出る予定だったうちのガンビア・ベイがちよっと迷子になっているようで」

「……えーと」

「アークさん、お借りして良いでしょうか。いえ、そんなに難しいことはしないので大丈夫ですよ」

尋ねるような口調だったが、どこことなく有無を言わせない雰囲気漂わせている。

どうも横須賀のガンビア・ベイ不在は、それなりの緊急事態らしかった。

「ま、待て。なぜガンビア・ベイの代理が私なのだ！ 他の者でも……」

他の五人を見るアークロイヤルだったが、全員、視線を逸らした。アークの悲痛な声に応える者はいない。

「ちよつと英語を使った挨拶をする段取りがありました。イギリスとアメリカという違いはありますが……良い発音、できるでしょう？」

「そ、それはできるが……」

「ではよろしくお願いしますね！」

「の、Noooooッ！」

ネイティブっぽい発音で悲鳴を上げながら引きずられていくアークロイヤル。

五人は、それを敬礼しながら見送るのだった――。

以下、今回の後日談。

急遽イベントに駆り出されたアークロイヤルは、イベントステージで横須賀の面々からの無茶振りにあたふたしながら一生懸命対応した。

ときどき個性的な対応を取ることもあったが、その懸命な様が観客の心を掴んだのか、一躍大人気になったという。

また、イベント後に行われた音頭大会では山城が異様にキレの良い動きを見せ、周囲の人間に「あの子艦娘じゃね？」とバレかけて一騒動起こりかけたそうである。

S 泊地業務日誌（長門・吹雪・加古・蒼龍・あきつ丸・伊58・酒匂）

〔20×年11月14日〕

担当：長門

1. 提督出立

本日提督が大規模作戦に参加するため泊地を出立。

泊地の防備や再建のため必要最低限の戦力を率いての参加になるため、些か心許ない陣容である。

そんな心情が面に出てしまっていたのか、提督から心配すると言われてしまった。

なお、出立メンバーの能代から阿賀野のことをよろしくと頼まれた。

今日は業務が忙しいので様子を見に行けなかったが、明日は訓練にでも誘ってみたいと思う。

2. 泊地再建事業進捗報告

本日午後に建材が届いたため、後回しになっていた司令部棟の建築によりやく着手できる。

設計は件の建築士が既に済ませているので組み立てるだけだが、ここに来て一部の艦娘から追加要望が出ている。

なんでも美容室やエステが欲しいらしい。司令部棟に置く必要性はあるのだろうか。

図面の修正についてあの建築士と相談せねばなるまい。プライドの高そうな男なので、一悶着起きないか不安である。

3. 海底ケーブル設置作業進捗報告

伊19が作業艦の護衛中、タコを見つけて獲ってきたとのこと。

龍驤がたこ焼きパーティだと騒いでいたが、うちにタコ焼き機はない。どうするつもりなのだろう。

もしやるのだとすれば、参加するのもやぶさかではない。



〔20×年11月15日〕

担当：吹雪

1. 叢雲ちゃん病欠

日頃の無理が祟ったようで、今日は叢雲ちゃんがダウン。私が代わりに司令部詰めになりました。

普段からかなり無理して頑張ってるから、これも良い機会だと思つてゆっくり休んで欲しいです。

提督の前では弱いところを見せたくないみたいなので、提督が出かけたことで少し気が緩んだのかもしれませんが。

2. 腕相撲大会

今日は泊地の再建作業を手伝いに来てくれた島の人たちを交えて、腕相撲大会をやりました。

優勝したのは翔鶴さん。おしとやかさうなのに凄いパワーでした。あんまり怒らせないよう注意したいと思います。

対戦相手のリチャードさん、肩外れてたようにも見えたけど大丈夫なのか、ちよつと心配です。

3. 泊地再建事業進捗報告

長門さんと建築士の藤堂さんが難しい顔で話し込んでいました。

長門さんが提案した修正案について、藤堂さんと意見がぶつかったちよつとみたいです。

ただ、互いに妥協点をどうにか見つけられたみたいで、最後は二人揃って間宮さんのアイスを食べながら談笑してました。

もしかして間宮さんのアイスには人を落ち着かせる効果があるのでしょうか。

4. 海底ケーブル設置作業進捗報告

最近働き詰めで伊58さんから休暇申請がありました。

特別手当出すから頑張つてと瑞鳳さんが交渉していたはずなんです。途中で瑞鳳さんまで休みたいと言い出す事態に。

「休ませないと作業効率が悪くなる」という明石さんの言葉で、結局今回は申請を受理することになりました。

明石さんが言うと言得力が凄い……。

〔20×年11月16日〕

担当：加古

1. 古鷹病欠

今日は古鷹が風邪引いたんであたしが代理。

司令部つてのは無理ばかりしてるな。そういうのは良くない。あたしを見習ってきちんと休むべきさ。

真つ当な意見だと思っただけで、皆に言っても反応が鈍い。なんでだ。

2. 泊地再建事業進捗報告

よく分かんないけど多分問題ないはず。

「特にあたし何も言われてないし、知らせがないのは元気な証拠ってことだよな。うん。」

3. 海底ケーブル設置作業進捗報告

海底ケーブルつていうのは、海底に設置するケーブルなんだそう  
だ。

この泊地に安定した電力供給をしたり通信をするため必要らしくて、日本とかソロモン、他の国なんかの支援で設置中らしいぞ。

海底で作業するから、護衛とか諸々潜水艦が頑張ってるらしい。大変そうだなあ。

4. 鳥対策

赤城が案山子を作っていた。なんでも畑が鳥に荒らされるから、案山子を設置して置いておきたいんだと。

今思っただけで、島風とか天津風の連装砲くんちゃんに頼んで番してもらってるのは駄目かね。良い案じゃない？

5. 賞味期限注意

大鳳がお腹壊したらしい。寮にあった賞味期限切れの缶詰食べた  
せいだとか。

なんでそんなものが寮にあったんだろうな。とにかく賞味期限には要注意だ。寝かせ過ぎたものは良くないってことだな！

〔20×年11月17日〕

担当： 蒼龍

1. 日誌担当制度変更

これまでは司令部の人たちが担当してただけど、日誌書くのが大変らしいから、今日からしばらく他の人も担当することになったんだって。急に言われても何書けばいいか迷っちゃうな。

2. 泊地再建事業進捗報告

加古のこれは報告って言っつていいのかなー。

今日は司令部棟の設計に関する最終確認。

敵襲を受けたときのために地下シェルターを用意したいって意見が出たけど、藤堂さんの「いい加減着工する気はないのか」という意見で見送りに。シェルター、悪くないけど予算足りなさそうだしね……。

3. 秋の味覚

農業を教えてくれる二瓶さんがキノコをお土産に持ってきてくれた。

皆で鍋にして美味しく食べたんだけど、採り方教えてって頼んだら「素人が迂闊に手を出すとヤバいぞ」って止められた。

キノコはものによってはかなり危険なものもあるらしくて、判別が困難なものも多いんだって。

うーん、でも興味あるなあ。

〔20×年11月18日〕

担当： あきつ丸

○五時：起床

○六時：朝の訓練

○七時：間宮にて朝食（天龍殿と歓談したであります）

○八時～一時：泊地の復旧作業従事（卯月殿がいたずら仕掛けて怒られてたであります）

一二時：間宮にて昼食（ラーメンは良いものであります）

一三時～一八時：泊地の復旧作業従事（筋肉痛でへろへろであります）

す)

一九時：間宮にて夕食（ちよつと贅沢してカツどんをいただいたのであります！）

二〇時：入浴（湯上りにストレッチもしたであります）

二一時～二三時：三隈殿・ビスマルク殿と一緒に映画鑑賞（洋画も良いものがあります。アメコミヒーロー万歳！）

〇〇時：就寝

日誌ってこんな感じで良いのでしょうか……。

〔20×年11月19日〕

担当：伊58

1. 泊地再建事業進捗報告

着工開始。

既に五日の遅延が生じているためスケジュールの見直しが必要。提督に連絡したが、作戦行動中のため後日回答したいとのこと。作業について目立ったトラブルなし。

2. 海底ケーブル設置作業進捗報告

オンスケで対応できている。

ただ、あまり余裕のある状態ではない。不測の事態が起きた場合はリスケも必要になる。

作業員との関係性は良好。厳しい職務を遂行しているという連帯感のせいかもしれない。これは良いのだろうか。

3. 潜水艦

潜水艦の艦娘が半年以上着任していない。

元々潜水艦はそれなりに数が揃っていたはずなのに、艦娘になつている者は驚くほど少ない。

次の潜水艦娘が着任するのはいつだろうか。サボってないで出てこい。働け。休ませ

〔20×年11月20日〕

担当：酒匂

なんだかゴーヤが普段と全然雰囲気違う感じでびっくりしちやつ

た。

でも最後まで書き切れてないのは駄目だと思うよ。疲れて寝ちやつたのかな。これが寝落ち？

今日は、なんでか知らないけど阿賀野姉が長門さんから逃げ回つたのを見た。

最近阿賀野姉ぐったりしてたけど、どうかしたのかな。矢矧ちゃんに聞いたら「ほつところ」って。

うーん、気になるなあ。

でも今日一番のニュースは、司令から連絡があつたってことかな。作戦、無事に終わったみたい。いろいろあつたけど、皆無事だつて言つてた。よかつたよかつた。

まだやることあるから戻ってくるのは少し先らしいけど、なにかおみやげ買って来てくれるんだって。

なに買って来てくれるのか楽しみだなあ。

能代姉も帰って来るし、お疲れ様会やりたいな。

皆頑張つたし、美味しいものいっぱい食べて元気になつて欲しいね。

そこまで読み進めて、今日の日誌担当になつた涼月は、これを参考にしろと言つてきた木曾に一言告げた。

「これ、参考にならないのですが……」

「ああ。つまり、参考にしないでいいということだ。好きに書いていいぞ」

グツとサムズアップする木曾。

多種多様な形式・志向で書かれた日誌を前に、涼月はどうすればいいのかと、しばらく頭を悩ませるのだった――。

こどもの日・日独仏版（神風・リシユリユー・ビスマルク）

二〇一八年五月。

S 泊地は組織再編が一段落つき、新体制で動き出しつつあった。

新体制と言ってもそう大袈裟なものではない。ソロモン諸島の中央と東部に支部を設け、巡回船等を追加したくらいだ。

神風たちが新しく配属されたのは中央支部である。

ソロモン諸島の首都ホニアラのすぐ近く、フロリダ諸島。

そこに建てられたばかりの新しい建物の中で、神風はのんびりと資料に目を通していた。

「暇ねー」

支部を増やしたからと言って、普段の業務がさほど変わるわけではない。

慣れない点はあるものの、基本的にやってることはこれまでと同じである。

そのため特に忙しくなるわけでもなく——仕事を終えた神風は、一人暇潰しに支部の資料を読み漁っていた。

人によつては活字の量に辟易するのだろうが、神風はそういうのが苦になる性質ではなかった。

どちらかという好きな方である。

優雅にお茶をすすりながらページをめくる。

「最高に贅沢な暇潰しをしてしまっている気がするわ」

そのとき、ドアをノックしてフランスの艦娘・リシユリユーが入ってきた。

「神風。きつき定期連絡があったわ。金剛たちは明日ここに立ち寄るみたいよ」

「ありがと。予定通りってところね。……食べる？」

「いただくわ」

神風が差し出したクッキーを受け取って、リシユリユーも空いてい

る椅子に腰を下ろした。

「ところで神風。さつき金剛から聞いたのだけど」

「なに?」

「日本では、五月五日に鯉を吊るす風習があると聞いたのだけど……  
本当……?」

どこか恐ろしいものを見るかのような視線を向けてくるリシユリユーに、神風は「あー」と何かを察した。

おそらくリシユリユーの頭の中では、本物の鯉を捕まえて軒先にぶら下げておくような光景が広がっているのだろう。

「鯉の絵が描かれた吹き流しね」

「吹き流し……」

「布で出来た筒みたいなやつ」

「ああ、アレね。ええ、分かるわ。分かるわよ」

最初から全部知ってました、と言わんばかりの態度である。

おそらく知らなかったことを悟られまいとしているのだろうが、神風にはバレバレだった。

というか、リシユリユーのこういうハツタリは大抵の人に見透かされる。

「けど、なんで鯉?」

「確か中国の方に、鯉はやがて龍になるって伝承があったのよ。それで、五月五日のこどもの日に、子どもが健やかな成長を遂げてくれるよう、鯉を飾るようになった——と言われているわ。お前は龍になれ、という親の願いが込められているのよ」

「ドラゴン? ドラゴンみたいになるって良いことなのかしら。あとこどもの日って?」

「アジア圏じゃ龍になるっていうのは良い意味合いだったのよ。……こどもの日については、もしかして知らないの?」  
「……」

知らないと言いたくないのか、リシユリユーは固まってしまった。どうしたものかと神風が思案していると、ひよっこりとビスマルクが顔を出した。

話を聞くと、ビスマルクは「ああ」と頷いて、

「フランスにはそもそもその日がないのよ。リシユリユーが知らないのも当然と言えば当然ね」

「そうなんだ？」

「そうね。ええ、さすがに母国にないものは分からないわ」

少し視線を逸らしつつ笑うリシユリユー。

ただ、彼女が一瞬安堵の息を漏らしたのを、神風とビスマルクは見逃さなかった。

「……ドイツにはあるの？　こどもの日」

「うちはちよつとややこしいわよ。東西に分かれてた名残りで二つの見解があるわ」

「ああ、そういうのがあると大変そうね……」

「アメリカとかイギリスはそもそも存在しないって言うし」

さらりと説明するビスマルクに、リシユリユーが感心したような声を上げた。

「ビスマルク、詳しいわね」

「アンタも数年間いろんな国の面子の面倒ごとに付き合っただけで詳しくなるわよ……」

ハハ、と嬉しくなさそうに笑うビスマルク。

泊地に着任した海外艦のまとめ役としての経験から来る言葉である。

新しい国の艦が着任すると、どうしても過去のいざこざや文化・風習の違いでトラブルになりやすい。

そういうときよく駆り出されていたのがビスマルクなのである。立场上、各国のことに詳しくならざるを得ない。

「けど、子どもの成長を願う日ということだと、私たち艦娘にはあまり意味のない行事なのかしら」

「どうかしらね。艦娘だって艦娘やめれば成長するようになるし、艦娘のままでも成長しないわけじゃないわ。経験を培っていく以上見た目はともかく中身は変わるものでしょ」

「そうね。リシユリユーだって、ここに着任してから随分と成長した



でしよう?」

神風の意見にビスマルクが同調した。

「だいたい、祝われて悪い気分になる子なんてそうそういないでしょう。祝いたかったら祝えばいいのよ」

「そういえば、今度の巡回船には潜水艦隊や海防艦たちも同行してるんだったわね。松輪やルイーヅもいたんじゃない?」

神風の指摘にリシユリユーがピクリと反応を示した。

今名前の出た松輪やルイーヅは、リシユリユーと同時期に泊地へ着任した艦娘——言ってしまうえば彼女の同期である。

S泊地では、艦種問わず同期はまとめて新人訓練に放り込まれる。そのため強い連帯感で結ばれることが多い。

リシユリユーと松輪・ルイーヅは見た目こそ大人と子どもくらいの差があるが、ときどき一緒に休日を過ごしている仲だった。

「はーん。さてはアンタ、こどもの日の話を聞いて何かした方が良いかって迷ってるわね」

「べ、別に私があの子たちに何かする義理なんてないわ」

ビスマルクに突っ込まれて、リシユリユーが顔を逸らした。ただ、その顔はどことなく赤らんでいる。

「……そういえばでっかい布がいくつか余ってたわね。この拠点を作るとき雑に資材運び入れたから、割とそういうの多いのよ」

神風はそう言って立ち上がった。

「暇だし気分転換に何か絵を描いてみるのも良いかもね。でも一人だと半端なものしか作れなさそうだし、誰か手伝ってくれないかしら」

言いながら、ゆつくりと部屋を出て行こうとする。

「……手伝って欲しいなら、手伝ってあげても良いけど」

「私も手伝うわ。なんかリシユリユーだけだと不安だし」

「ど、どういう意味よビスマルク。言っておくけど、芸術においては一家言あるわよ私は!」

「選ぶセンスと作るセンスは別でしょうに」

軽口を叩きながら、二人は神風の後を追う。

神風はそんな二人のやり取りを聞きながら、大きく背中を伸ばすの

だった。

巡回中の松輪たちがそれを見つけたのは、フロリダ諸島が間近に迫りつつあるときだった。

「ルイージちゃん。見て、あれ」

「んー？」

松輪に呼ばれて海面に顔を出したルイージは、島の一角から見えるソレを見て首を傾げた。

「あれ、なに？」

「鯉のぼり——だと、思う、けど」

鯉のぼりの文化を理解している松輪も、それが鯉のぼりと言って良いのか自信がなかった。

よくある鯉のぼりの鯉もあるが、その下にはドラゴンと思しき絵が描かれた吹き流しもある。

更にその下には、魚なのか何なのかよく分からない謎の生命体が描かれたものもあった。

「ねえ松っちゃん。私鯉って実物みたことないんだけど、あんなにバラエティ豊かなものなの？」

「どうだろうね……」

その後、巡回メンバーの反応を見た製作者たちがどんな反応を示したかは——書かぬ方が良さそうである。

良いものを作るためには諦めないことが肝要である  
(ウォースパイト・明石・瑞鶴・夕張)

「新兵器を考案すべきだと思うのです」

工廠の一角で行われるS泊地技術部の定例会議。

その席で力強くそう宣言したのはウォースパイトだった。

「深海棲艦は進化し続けています。我々も現状の戦力に甘んじることなく、新たな力を作り出すべきです」

「既存兵装の改修だけでなく、新規兵装の開発を試みるべき、ということですか？」

明石がウォースパイトの真意を確認すると、彼女は力強く頷いてみせた。

「基地航空隊の実装によって、開きつつあった彼我の戦力差は大分縮まったと聞いています。また、米国から提供された技術を基にした夜間航空機の存在によって、空母の活躍の場は大きく広がったと言ってよいでしょう。『当たり前前にできること』というのは、常にアップデートしていかねばならないと思うのです」

「その発想は素晴らしいものだと思いますが」

明石の態度は煮え切らない。

ウォースパイトの言っていること自体は良い。

問題は、彼女が技術部の部員ではないのに今回突然会議に飛び入り参加してきたこと、そして何より彼女が『あの英国』の艦娘だということである。

時折「なぜそんなのを作った」と言いたくなるような珍兵器を生み出すことでお馴染みの英国。それがウォースパイトの中で脈々と息づいているのであれば、警戒するのは当然のことと言えた。

「そこで私はこんなものを考えました」

ウォースパイトは持っていたスケッチブックをデスクの上に広げた。

そこに描かれているのは、平べったい円形状のものである。

「なんだか、お掃除しそうな形状に見えますね」

「着想はそこから得たわ」

「あ、そうなんですな」

素直に認めるウォースパイトに、明石が何とも言えない表情で相槌を打つ。

他の拠点の明石であればここで食いつくのかもしれないが、このS泊地の明石は周囲に振り回されることが多い管理職ポジションなので、今一つノリが悪い。

その分、悪ノリしやすい他の技術部のメンバーは、ウォースパイトの発表に関心を示していた。

「それで、これは何をやるものなんだい？」

航巡代表の最上が尋ねると、ウォースパイトは待っていましたと言わんばかりに微笑んだ。

「これは海域内を動き回る自立式機雷よ」

「自立式機雷……」

ウォースパイトの説明を聞いて、技術部の面々はその機雷を思い浮かべた。

脳裏に浮かぶのは、海中を覚束ない様子でふわふわと緩やかに移動し、何かにぶつかって爆発する代物である。

「ちなみにそれ、作動条件はどうするの？」

当然の疑問を空母代表の瑞鶴が尋ねた。

機雷の作動条件は重要事項である。

「もちろん軽はずみに作動しないよう条件は厳しくするつもりよ。磁気や音響、水圧——それら複数の要素から判断して、深海棲艦だと判断した場合のみ作動するものにするわ」

「……一応補足しておきますが、現状深海棲艦と私たち艦娘を今挙げた要素で識別する術って見つかってないですよ」

「更に言うとう普通の艦船も区別つかないはずよ。自分で移動するような機雷だと前もって設置マップ用意することもできないし、万一民間船巻き込んだらまずくない？」

明石と瑞鶴の指摘に、ウォースパイトの表情がスツと醒めたものに

なった。

と言つても、それはほんの数秒のこと。すぐに「コホン」と咳払いをして、スケッチブックのページをめくる。

「私はこんなものも考えました」

「スルーしたのう」

初春の言葉もスルーして、ウォースパイトは続ける。

「次のアイディアはこれよ!」

スケッチブックに描かれているのは航空基地だった。

ただ、その航空基地には妙な点があつた。船の上に設置されているのである。

「これはなんだい?」

「移動式航空基地よ。現状、基地航空隊は極めて優秀な能力を発揮しているわ。ただ一点、航続距離の短さが欠点になることが多かった。それを解消するためには——海上を移動できる基地を用意すれば良い!」

「それもう陸上攻撃機を陸攻とは呼べなくなりそうじゃのう」

「それは些細なことよ。どうかしら瑞鶴、航空機を扱う貴方の見解を聞かせて欲しいわ」

話を振られて、瑞鶴は何とも困った表情を浮かべた。

ウォースパイトの言う通り、基地航空隊は基地の設置場所次第で敵まで届かないというケースがある。

それをどうにか改善したいというのはもったもなことだ。

「……本物の陸攻は艦攻とはサイズや運用が異なるから、こういう空母みたいなものを用意して使うのはナンセンスなのよね。それなら艦攻使えば良いわけだし。私たちの兵装については本物と少し事情が違うけど、足場が不安定になるのはマイナスになるし、基地を丸ごと沈められるリスクが出てくるのは無視できないと思うけど」

「では、こんなのはどうかしら」

ウォースパイトはさして動じることなくページをめくった。

そこに描かれているのは、異様に大きな弓だった。比較対象ということなのか、すぐ隣に「赤城の弓」とメモがついた弓が描かれている。

「陸攻の改善が難しいのであれば艦攻を強化すれば良い。弓を通して艦載機を扱う艦娘であれば、弓を強力なものにすることで射程距離等を伸ばせるのではないかしら」

「こんな大きいのを使えと……?」

「昔の日本には複数人で扱う弓があると聞いたことがあるわ」

「つまりコンビで使えと」

「一航戦・二航戦・五航戦ならできるのではないかしら」

ウォースパイトの発言は別に皮肉でも何でもなさそうだった。

素で出来ると思っっている表情をしている。

「別に弓を強化してもあんまり変わらないと思うけどな。龍驤さんたちみたいな術式で艦載機出すタイプの空母とか見てると」

「むう……。確かに龍驤たちは別に勢いよく艦載機を発射しているわけではないわね……」

議論を続けるウォースパイトと技術部の面々を見ながら、明石は隣で黙っていた夕張にこっさり耳打ちした。

「けど、どうしたのかしらウォースパイトさん。突然こんな風にあれこれと提案してくるなんて」

「あー……」

と、夕張は若干明後日の方向に視線を逸らした。

これは何か知っているなど、明石は夕張をじっと見据える。

その視線に根負けしたのか、夕張は両手を上げて降参のポーズをした。

「この前たまたま『ここが変だよ！ 珍兵器大辞典』つてのを見てたのよ」

「何その本」

「図書館になぜかあったのよねえ。摩耶に聞いてもいつ置いたか覚えてないって言ってたけど」

「……まあ、それは置いておくとして。それで?」

「読んでたところにウォースパイトが来て、表紙がパンジヤンドラムだったからか、食いついて来てねえ」

パンジャンドラムというのは、かつてイギリスが開発していたロケット推進型の陸上爆雷である。

上陸艇から発射し敵の防御設備を破壊するための装備だったが、いろいろと致命的な欠陥があつて開発中断となつた。

「まあ、その本気になるみたいだったから貸してあげたのよ」

「なんて残酷なことを……」

一生懸命様々なアイディアのプレゼンをするウォースパイトに、明石は同情の眼差しを向けた。

「……途中で止めようかと思つたけど、今の話聞いたら彼女の気の済むまでやらせてあげた方が良い気がしてきたわ」

「いっそ技術部に誘つてみる？」

「その場合アンタが責任持つて面倒見なさいよ」

明石に人差し指でおでこをぐりぐりされて、夕張は「あはは」と誤魔化すように笑つたのだった。

以下、今回の後日談。

結局その日のウォースパイトのアイディアはすべて不採用に終わった。

ただ、どこが駄目だったのか、どこを改善すれば良いのかを他の技術部メンバーと議論することにより、ウォースパイト自身の知見は磨かれることになった。

やがて技術部に参加したウォースパイトが開発した代物が思わぬ活躍をしたというが——それはまた別の話である。

趣味に没頭している人に質問をするときは覚悟しろ  
(涼風・イントレピッド・伊400)

「退屈だあア〜!」

ソロモン諸島海域を巡回するS泊地の艦艇——アルス・パウリナの甲板上で、大きく背中を伸ばしながら涼風が耐えかねたように叫んだ。

このアルス・パウリナはソロモン諸島全域を数日かけて巡回する船だ。元々はショートランド島付近を中心に活動していたS泊地の面々だったが、人数が増えてきたこともあり、範囲を広げて活動することにした。この巡回もその一環である。

しかし、不定期ではあるが元々ソロモン諸島全体の巡回は行っており、当該海域における深海棲艦の活動はほぼ鎮静化している。なのでこの巡回は割と暇なのだった。

「ハーイ、涼風。どうかしたの?」

涼風の叫びに対し、アルス・パウリナの外から声が返って来た。

船の外で警戒にあたっていたスカイママことイントレピッドだ。

米国の正規空母の艦娘で、先のレイテ大戦時に着任したばかりだ。しかし、米国出身の艦娘も大分増えてきたこと、まったく物怖じせず積極的にコミュニケーションを取ってくることから、まるで十年來の知己のように泊地へ馴染んでいた。

「いや、暇でき。姉貴たちとのトランプとかも飽きてきたし、釣りも飽きてきたし、なんというか、もつと没頭できるようなことないかなって」

「涼風は趣味とかないの?」

「いやー。大抵はいろんな奴と一緒に馬鹿やることが多いかな。けど巡回船だと面子が代わり映えしないから単調でさ」

「なるほど。なら一人で延々と没頭できるような趣味を探してみるのも良いかもしれないわね」

「うーん、どうだろう。あんまり性に合わないような気もするんだよ



な。釣りとかは釣れないと段々イライラしてくるし」

涼風にとつて釣りで楽しい瞬間というのは、誰かと競い合いながらやっているときだ。

一人で太公望よろしく釣り糸を垂らしているだけでは、どうにも張り合いがない。

「ママさんはなんかそういう趣味持つてるのかい？」

「私は宇宙に関する話題を調べるのが好きね。宇宙については今も新しい発見が日々生まれているし、人類が再び宇宙に羽ばたくための努力をしているニュースなんかを見ると、早く現状をどうにかしなきゃなってるわ」

「宇宙か。あたいにや難しいことは分かんないけど、そのうち行ってみたいなーと思うな」

「大事なのはそういう気持ちよ」

イントレピッドはそう言つてウインクした。

わざとらしさがなく自然体で愛嬌を振りまくので、イントレピッドのそういうしぐさには嫌味がない。

涼風はなんとなく照れ臭くなって頬をかいた。

「そういえばシオンが最近読書にハマってるって言つてたわね。話を聞いてみるのも良いんじゃない？」

「読書かー。あたい活字苦手なんだよな」

「シオンがハマってるの、コミックスかもしれないわよ？」

「なるほど。とりあえず行つてみるかな。サンキュー、ママさん！」

涼風は手を振つて船内へと入っていく。

その姿を見送りながら、イントレピッドはポツリと呟いた。

「私の愛称って、ママさんで決まりなのかしら……」

「面白い本？」

突然部屋を訪れた涼風の質問に、シオンこと伊400は首を傾げた。

「そうそう。ママさんから聞いたせ、最近読書にハマってるんだろ？」  
と言いながら涼風はシオンの私室を見たが、本らしきものは見当た

らない。

「本ならこの中だよ」

と、シオンは手にしていたタブレットを涼風に見せた。

電子書籍専用の端末だ。この中にデータを落とし込んでおけば、いつでもその書籍が読める。

「おー、なんか最新技術って感じするな」

「紙の本も捨て難いんだけど、こうやって外に出るときは手軽に持ち運べる電子書籍の方が便利だね」

「確かに、これ一個あれば何百冊でも持てるってんなら、無茶苦茶便利だなー！」

「あー、マンガとかだと何百冊は無理かも……」

「なんだ、そうなのか」

ぶー、と不満そうな涼風をなだめながら、シオンは端末を操作しつつ見せてみた。

「私が最近読んでは往年の名作系かな。明治から昭和前期にかけての小説とか、昭和中期頃までに出た漫画とか」

「あたいたちが言うのもなんだけど、ちよつと古くないか？」

「古いものだからってつまらないわけじゃないよ。むしろ一周回って斬新に感じるのもいっぱいあるし」

「そうなのか」

「そうそう。そもそも今ある作品だってそういう往年の名作の延長線上にあるわけで、時代を経るにつれていろいろ付けられたものがあるけど、大本の源流にある作品にそういうのはないから、ある意味とても純粹な部分前面に出てるとも言えるんだよね。ごちゃごちゃしてなくて読みやすい分とつきやすいとも言えるし。時代の違いから考え方の違いを感じることもあるけど、人間の本质はそこまで極端に変わらないから、そこはあんまり心配しなくていいかな。それからね——」

「ちよつと待った！ 待ってくれ！ 情報多過ぎてついていけねえ！」

本格的に語り始めたシオンに対し、涼風は悲鳴を上げた。

どうもシオンはスイッチが入ってしまったらしい。こうなると話が長くなるというのは、涼風も何人かの知人のおかげで理解している。

「と、とりあえずシオンおススメのやつ教えてくれよ。そしたらあたしも今度電子書籍でそれ買ってみるからよ」

「あ、いいよ。そろそろ私警戒担当の時間だし、端末貸してあげる」

「いいのか？」

「うん。こういうのは自分で選んでみないと分からないしね。あ、でも新規購入は駄目だよ」

「おう。人様の金勝手に使うような行儀の悪い真似はしねえさ」

合点承知のポーズで応える涼風に安心したのか、シオンは「じゃ、よろしくね」と端末を渡して部屋から出て行った。

残された涼風は、端末にダウンロードされている作品に目を通し始める。

「……へー、ふーん、ほー」

いろいろ並ぶコンテンツを前に、涼風の意識は徐々に端末の中へと引きずり込まれていくのだった――。

以下、今回の後日談。

涼風はその後も何度かシオンに端末を借りて、周囲が心配になるくらい大人しくなった。

更に、泊地に戻ると本土から電子書籍端末を取り寄せ、以後度々大人買いをするようになり、白露たちから心配されたという。

なお、涼風がそのとき何にハマっているかは彼女の言動からなんとなく察することが可能だったらしい。

「最近演習で涼風が妙な技名叫びながら攻撃してくるんだけど……」

いろいろと影響を受けやすいお年頃――その宿命であった。

摩耶様流離譚―ぼんやり編―（摩耶・伊8・鳥海）

ゆらゆらと、艦娘が海を漂っている。

「―はあ。たまには海水浴も悪くないな」

浮き輪でプカプカ。海に背をつけて空を見上げながら、摩耶が気持ちよさそうに言った。

S泊地では割と古参の重巡である。剛毅な性格だが、平時は姉妹の鳥海と並んで泊地内の図書館の管理を担当していた。

出撃するとき以外の大半の時間を図書館の中で過ごしているのだから、摩耶にとってこういう海水浴は良いリフレッシュの機会になるのだ。

「……って、反応なしかよ鳥海」

摩耶は姿勢を変えて鳥海を探した。

だが、一緒に海水浴をしていたはずの鳥海の姿がない。

摩耶がしばらくぼーっとしている間に、忽然と姿を消してしまった。

「どこ行っただんだ鳥海のやつ。潜ったのか……？」

「どうかしたんですか摩耶さん」

「おわっ!？」

突然近くから予期せぬ声が出たので、摩耶は驚いて姿勢を崩しそうになった。

だが、一瞬視界に入った姿を見て落ち着きを取り戻す。よく知っている相手だったからだ。

「な、なんだハチか……驚かすなよ」

「すみません。摩耶さんが困惑してそんな動きしてたので」

潜水艦の伊8だった。彼女も今は非番らしい。普段任務のときに着用しているものとは別の水着だった。

摩耶とはかなり性格の違う彼女だが、意外なところで読書好きという共通項があり、ときどき図書館で語り合うこともあった。

「鳥海がいなくなっちゃったんだよ。さっきまでいたと思ったんだが」

「鳥海さんは見かけませんでしたね。……というか、いなくなるの全

然気づかなかったんですか」

「し、仕方ないだろ。ぼーっとしてたんだよ。今日はなんつーか陽当たり良好で気持ちよかったし」

「摩耶さんオンオフ極端ですからねえ。オフになると無防備というか見てて心配になるといいうか」

「うるせーほっとけ！」

割とずけずけ言ってくる伊8に、摩耶は嫌そうな顔をしながら手を振った。

もつとも、本気で嫌なわけではない。これくらいの応酬はいつものことである。

「まいったな。完全にプライベートで来てるから艀装も通信機も何もねーし、連絡取れないぞ」

「はっちゃんも何も持ってきてきてないですね」

「仕方ねーな。拠点まで戻るか……」

「それしかないですね。結構時間かかりそうですが……」

「ん？」

伊8の発言に違和感を覚えた摩耶は、周囲をよく見渡した。

鳥海と二人で来たのは、拠点から少しだけ離れたところにあるポイントだ。戻るのはそこまで手間ではない。

しかし、今改めて見てみると、あるはずの鳥影がない。すぐそこに、拠点がある島が見えるはずなのに。

「……」

「どうかしたんですか。そんな『迷子になったのは鳥海じゃなくアタシの方だったー！』みたいな顔をして」

「凶星だよ悪かったな！」

やたらの確に心情を言い当ててくる伊8に、摩耶は半ば開き直って叫んだ。

「どうやらぼーっとしている間、波に流され続けてかなり沖合の方に来ていたらしい。」

「っていかお前はこんなところまで何しに来たんだよ」

「最近読書ばかりで運動不足だったので、たまには遠泳をと思っ」

「そ、そうか。真面目だな……」

「ふっ、それほどでも」

褒められて嬉しかったのか、伊8は少しだけ得意げな表情になって眼鏡をくいと持ち上げた。

「ちなみに、戻るのにどれくらいかかりそうだ？」

「ここまでゆったりペースで1時間くらいでしたね」

「マジか。どんだけぼーっとしてたんだアタシ……」

「寝てたんじやないですか？」

「言われてみれば前後の意識が若干曖昧な気もする」

バツの悪さを感じながらも、摩耶は伊8に先導してもらいながら拠点に戻ることにした。

今頃鳥海が摩耶の不在に気づいて大騒ぎになっているかもしれない。そのことを思うとやや気が重かった。

もったも、そういった気の重さは伊8と雑談していくうちになくなっていった。

最近読んだ本の話から始まり、その本のテーマに関する話題や作者、出版社の近況に移っていく。二人の会話はだいたいそういう流れだった。

「どこの出版社も最近は冒険しなくなりました。はっちゃんとしてはそこが大いに不服です」

「まあなあ。読者が不快に思うようなことは避けるって言っても、それで自粛自粛ってやってたら何もできなくなっちゃまうもんな」

「それもそうですし、人の興味を引くような題材ばかりなんですよ、最近。既に皆が関心持つてるものしかテーマになりません。新しい気づきを読者に提供する、それが書籍を供給する側の使命だと思うんです」

そんなことを話しているうちに、二人は島影が確認できるところまで到着した。

「やっと着いた。どんだけ流されてたんだよアタシ……」

「というか、改めて考えると臙装なしで眠りこけて溺れなかつたって凄いですよね。浮き輪あつたとは言え」

今更ながら、自分が相当危ない状態だったことに気づいたのか、摩耶の表情がにわかになんか青くなつた。

「……ちよつと待つてください、摩耶さん。何かいます」  
「何か？」

摩耶は注意深く近くに視線をはわせる。

確かに、何か摩耶と伊8のまわりをグルグルと回っている気配があつた。

「鮫とかじゃないだろうな。アタシら艦娘は人間よか頑丈だけど、さすがに艀装なしで鮫の相手なんかしたくないぞ」

「鮫映画は嫌いじゃないです」

「アタシはゾンビ映画派だなあ」

緊張感があるのかないのか微妙なやり取りだったが、二人は油断せず機を窺っていた。

艀装がない以上、できることと言えば全力で逃げるくらいである。

相手がこちらに対する動きを見せたら、全力で島まで泳ぎ抜く。それしか道はない。

そのとき、相手が動いた。

ひよつこりと、海面に顔を出したのだ。

「……亀？」

それは、どう見てもウミガメだった。

なにやら哲学者のような、奥深い眼差しをしている。

……娘たちよ。こんなところで何をしている。

とても問いかけて来そうな、賢者の風情があるウミガメだった。

「とりあえず、害意はないようですね」

「そうみたいだが……なんかじつとこつち見てるぞ」

そのままじつと見つめ合う摩耶たちとウミガメ。

やがて、そうしていることに飽きたのか、ウミガメはため息のようなものをついて海中に引つ込んでいった。

「……なんだったんでしょあね。あれ」

「分かん。分かんが……気になるな」

摩耶と伊8は僅かに視線を交わして頷き合う。

「追ってみますか」

「竜宮城に着くかもしれないしな」

「摩耶さんはロマンチストですねえ」

「ロマンは誰だって持つてるもんだろ。表に出すか出さないかの違いだけで」

「表に出す人のことをロマンチストって言うんですよ」

軽口を叩き合うと、二人は大きく息を吸って海中に潜り込んだ。

「なるほど。二人して深夜に戻って来たのはそういう理由なのね」

鳥海はゆつくりと頷いた。

ただ、そのこめかみには青筋が浮かび上がっている。

鳥海だけではない。周囲には、摩耶捜索に駆り出された何人かの艦娘やスタッフが勢揃いしていた。

「……いいいやー。なんというか、つい出来心だな。あの亀見たら誰だって気になると思うんだよ」

「そうかもしれないわね」

「……悪かったと思ってるんだぜ。本当にさ」

「そうかもしれないわね」

摩耶が口を開く度に鳥海の青筋が増えていく。

もう何も言わない方が良いのでは、と伊8が摩耶の脇腹を突いた。

「で、楽しいものは見れた?」

「お、おう。……あつ、いや、この件はまた今度、落ち着いてから話した方が良いんじゃないかなって思うんだけどよ」

「……そう。じゃあ、もう言い残すことはないわね?」

ボキ、と鳥海が拳を鳴らした。

後日、摩耶と伊8はそのときのことを「前後の記憶がはっきりしない」と振り返ったという。



## ある夏の出会い（長門・レ級）

戦艦レ級。

それは、鬼・姫クラスではない深海棲艦の中でも破格の力を誇る存在だった。

一隻で戦艦・空母・重雷装巡洋艦の特徴を併せ持っており、耐久性を除けば最悪の深海棲艦の一種とうたわれている。

そんな戦艦レ級が——なぜかS泊地の間宮で、美味しそうにご飯を食べていた。

「いやー、美味しいねえ。やっぱり食事というのは良いものだ!」

「そうか。随分と腹が減っていたんだな……」

半ば呆れ顔でその様子を見ていたのは長門だった。

話は一日前に遡る。

S泊地の司令部に、戦艦レ級の姿を見たという報告が入った。

報告を受けて、急遽搜索隊が編成された。放置しておけば大損害が生じる可能性があったからだ。

しかし搜索隊が発見したのは、筏の上で横になって力なく手を振ってくる、ちよつと変なレ級だった。

敵意はまったくくない。どちらかという弱り切っている様子だったレ級を見て、搜索隊はとりあえず泊地に連れ帰ることにした。

最近は人類と協調路線を取ろうとする深海棲艦も現れつつある。このレ級もそういう類かもしれない——という思いがあった。

「いやあ、助かったよ。一人でずっと旅してたんだけどねえ。しばらく陸地につけなかったし、魚も全然獲れないしでお腹減ってて。君たちが良い隣人で良かった」

「良い隣人——変わった言い回しだな」

「人間と艦娘、それに深海棲艦の総称だよ。仲間は身内、それ以外は隣人って呼んでる」

ご馳走様でした、とレ級は手を合わせる。

深海棲艦の食事を初めて見た長門は、存外行儀のよい振る舞いに少し感心した。

戦艦レ級と言えば深海棲艦の中でも、特に危険で粗暴なイメージがあった。

長門自身、何度か対峙したことがあるが、何度も痛い目を見た。しかし、今日の前にいるレ級からは、過去に対峙してきたレ級たちのような危険な雰囲気を感じない。

「そういうばここってどこだい？」

「言ってなかったか。ここはショートランド島にある泊地だ」

「——へえ。ここが」

レ級は興味深そうに辺りを睥睨した。

「なんだ、このことを知っているのか？」

「ああ、いや、うん。ここって最前線の一つだからねえ。深海棲艦の間でときどき話題に出るのさ」

レ級は背中を大きく伸ばし、少し寂しそうな顔を浮かべた。

「ここにいと泊地の人たちが落ち着けないみたいだね。お暇しようかな」

周囲には、レ級たちを注意深く観察する艦娘やスタッフたちの姿があった。

敵意はないらしい——ということは伝えてあるが、やはり皆容易には受け入れ難いのだろう。

「……すまん。気を悪くしたか」

「いやいや。行き倒れてたところを助けてもらっただけでも感謝しなくちゃね」

そう言っレ級が席を立ったとき、ちょうど食堂の扉が勢いよく開いた。

「おお、おったか！」

飛び込んできたのは、S泊地の技術部——兵装や装備の開発・改修を行う部門の面々だった。

その先頭に立っているのは初春型のネームシップ・初春である。

「そのレ級殿、もし時間があるならわわたちの研究に付き合ってくれぬか！」

「え、研究……？」

「うむ。深海棲艦の艦装がどんな感じが、当人の協力のもとで確かめてみたくての」

突然の申し出に、レ級は明らかに困惑していた。

どうすれば、という顔を長門に向けてくる。

「差し支えなければ付き合ってくださいませんか」

「まあ、僕としては別に良いけど」

頭をポリポリと掻きながらレ級は頷いた。

「おお、助かる。報酬はきちんと用意するぞ」

「なら美味しいのが良いな。長持ちして持ち運べそうなの」

「分かった分かった。わらわのちよいすに期待するが良いぞ」

扇を広げて初春は機嫌良さそうに笑う。

今まで出来なかつた研究が出来る、というのが嬉しいのだろう。

「——ふむ。そういうえばそなた、名前はあるのか？ レ級というのは人類側が勝手につけた名称じゃからな。協力してくれる相手にそういう呼び方をするのも気が引ける」

初春の言葉に、レ級は笑って応えた。

「僕の名前は『蝦夷<sup>えみし</sup>』だ。僕の兄者がつけてくれた、大事な名前さ」

レ級——もとい蝦夷は、技術部の研究に協力するためS泊地に逗留することになった。

最初のうちはその存在に警戒していた泊地の面々も、技術部に振り回されたり、美味しそうに食事を取る蝦夷の姿を見て、少しずつ警戒心を解いていった。

「へえ、蝦夷は旅をして回っているのか」

「どんなところを旅してきたのです？」

技術部から解放されて休憩中の蝦夷のところには、少しずつ艦娘がやって来るようになった。

皆、少なからず深海棲艦というものに興味があったのだ。

最初はただ敵としてしか見ていなかったが、何度も砲火を交えるうちに、何か自分たちに通じるものを感じるようになった、という子も多い。

「ロシアやヨーロッパには行つたつけな。アメリカはまだ行つたことないや」

「おお、ロシア。その辺の話、詳しく」

興奮気味に食いついて来たのは響である。

彼女はロシア（正確にはソ連）に縁がある艦娘だったから、その辺りは気になるのだろう。

「と言っても、僕ら深海棲艦は人のいる場所でのんびりとできないしねえ。とにかく寒かった。あと熊に何度か襲われたな」

「熊……野生の熊は怖いのです」

「うちの球磨もなかなかのものだよ」

「え、ここ熊いるの？」

——こんな風に、各地を放浪してきた蝦夷の体験談を聞いたがる子もいれば、戦艦レ級としての實力を見ようという者もいた。

「ということでもた勝負をしよう、蝦夷さん！」

「いや、もう勘弁してくれないか夕立……。僕は技術部のせいにくたなんだけど」

「気にしないでいいっばい！ 夕立も今泊地に戻ってきたばかりで疲れてるし、条件的にはイーブンっばい！」

「えええー……」

——と、心底嫌そうな顔を浮かべながら、対戦を希望する者に演習場へ担ぎ出されることもあった。

完全に打ち解けたとは言い切れないまでも、長期逗留することになったことで、少しずつ泊地の面々と蝦夷の距離は縮まりつつあった。

このまま蝦夷が泊地にずっと滞在するのではないか——そんな風に思う者も少なくない程だった。

夏の終わり頃。

ソロモン海東部で、戦艦レ級が民間船を襲ったという報告が入った。

蝦夷ではない。蝦夷はその日もずっと泊地で技術部や他の面々に

囲まれていた。

ただ、蝦夷ではないと分かっているとしても、同じ戦艦レ級がその危険性を知らしめる行動を示したことで、少し空気が変わった。

「——思ったより、長逗留になっちゃったねえ」

その日、長門は蝦夷によって呼びだされて昼食を共にしていた。

蝦夷はどことなく神妙な面持ちである。この後彼女が何を言うてくるか、長門はなんとなく予想がついていた。

「別に気にせずここにいっても良いんだぞ」

「そういうわけにもいかないさ。皆が気にしなくても、ここ以外の人はかは気にするだろう。あそこの泊地は戦艦レ級を匿っているぞって」

「ご馳走様、と蝦夷は手を合わせた。間宮さんのところに食器を運んで、頭を下げる。

「……それで、どこに行くんだ？」

「南下して地元に戻るよ。そろそろ兄者が心配してる頃だろうし」

「そうか。やれやれ、結局お前からは肝心な情報が聞き出せなかったな」

長門は苦笑した。

蝦夷から深海棲艦の情報をいろいろと引き出そうとしたのだが、出てきたのは既に分かっているようなことばかりだった。

あとは、蝦夷のパーソナルな情報くらいである。

「願わくば、お前とは戦場で会いたくないものだな。全力を出せそうにない」

「別に出してきてもいいよ。それでも僕が勝つだろうからねえ」

蝦夷は少し挑発じみた笑みを浮かべた。

実際、蝦夷は滞在中一度も本気の実力を見せてはいなかった。演習でもどこか力を抑えていた節がある、と長門は見ている。

「かもしれないな。……だが勝ち負けの問題ではないよ。私は友人相手に殺し合いはしたくない、と言いたいんだ」

「友人か。僕にはよく分からない概念だな。身内・隣人——それしか知らなかったし」

「だったら覚えておくとよい。良き隣人は友人になり得る。分からないようになったときは、この泊地のことを思い出してくれ」

「……そうか。——うん、そうすることにしよう」

蝦夷は、どこか神妙な面持ちで頷いた。

蝦夷が泊地を発つとき、見送りは長門一人だった。

出発するタイミングを触れ回ったわけではないし、こんなものだろう——と、蝦夷は幾ばくかの寂しさを覚えながら海に出た。

しかし、ある程度進んだところで、自分の名を呼ぶ声が聞こえた気がした。

振り返る。

そこには、技術部の面々や、蝦夷が言葉を交わした艦娘たちが大勢並んでいた。

皆、大きく手を振っている。

こういう形で見送られたことがない蝦夷は、どうすべきか分からなかったが——見様見真似で手を振り返した。

互いに姿が見えなくなるまで、手を振り続けた。

これは、敵対関係にあった艦娘と深海棲艦が交流を持った、ある一夏の、ただそれだけの話である。

南の島のスケートリンク（夕張・舞風・子日）

「何か涼しいことがしたい」

うだるような暑さの中、夕張が呻いた。

現在、S泊地の工場は冷房が壊れてしまったため絶賛休業中だった。

最近は装備のメンテナンスと改修以外特にやることなく、メンテナンスは各自で実施することもできるため、そこまで致命的な問題にはなっていない。

ただ、普段工場に詰めている面々は暇を持って余すことになった。

「涼しいことって言っても何ができるんだ。この南国で」

夕張に問いかけたのは工場長を務める伊東信二郎という壮年の男性だった。

普段は工場妖精たちと一緒に工場の管理をしているが、彼も今は暇人の一人である。

二人はやることもないまま、微妙に冷房が効いているような気のする寮のリビングで倒れていた。

「涼しい涼しい……納涼盆踊り大会」

「言葉ほど涼しくないぞ」

「流しそーめん大会」

「この前やったな」

「海水浴！」

「まあ、やりたきや止めないが……涼しいか？」

「いんや、生温い」

はあ、と夕張は情けないため息をついた。

「この暑さが耐えられないのよ……」

「ゲームでもやったらどうだ。好きなんだろうゲーム」

「今持ってるやつはどれもコンプしちゃったのよね……」

「ああ、そう」

伊東は物凄くどうでも良さそうに頷いた。

普段ならもう少し話が弾むのだが、二人とも熱で頭があまり働かな

くなっている。

そこに、荷物を背負った舞風と子曰が通りかかった。

「あらー、二人ともお出かけ？」

「あつ、夕張さんと伊東さん。こんにちはー！」

「こんにちはー！ 子曰たちはねえ、これからスケートしに行くんだよー」

「……スケート？」

夕張が目点を点にした。

ここは年中高温多湿のソロモン諸島。

おまけに、齒に衣着せぬ言い方をするなら田舎も田舎のド田舎である。

屋外スケートリンクなど望みようがないし、屋内スケートリンクもどこに行けばあるのやら、という土地だ。

そこでスケートなどという単語を聞いたら、夕張のような反応になるのもやむなしだろう。

ただ、夕張は熱さで機能停止しかけていた脳みそをどうにか稼働させて、別の可能性を見出した。

「はっはーん、ローラースケートね！」

「惜しいけどちよつと違うかな。ねー子曰」

「そうそう。子曰たちがやるのは、涼しいスケートなんだよ」

「……ほほう？」

夕張が上体をむっくりと起こした。

「その話、詳しく」

一行がやって来たのは、島の中央部——森の中を流れる川のほとりだった。

川が近く木陰があるからか、この辺りは泊地一帯よりも幾分涼しい。

この近くは川が若干広くなっている。

そこで滑って遊んでいる艦娘が、既に何人がいた。

「水上スケートって言えばいいのかしらね」



夕張は、出立前に明石から貰ったシューズを見ながら首を傾げた。このシューズは艦娘の艦装を改良したものらしい。

兵装はなく、主機の機能のみを取り付けた特注品とのこと。

艦娘は艦装を身に着けることで水上を滑走することができる。

しかし、艦装はなんだかんだで重いし、素材が素材だけあって夏場は熱い。

それを取っ払って、水上を滑走することだけに特化させたのがこのシューズなのだという。

「そういえばいつだったかフィギュアスケートがテレビとかで流行ってたっけ……」

「そのとき明石さんに頼んで作ってもらったんだよ」

「水上できめ細かな動きが出来るようになれば役に立つはずだって説得したんだよねー」

舞風と子日は慣れた手つきでシューズを着用すると、そのまま川の中に飛び込んでいった。

シューズのおかげか、二人の身体は川に沈むことなく水上に留まっている。

「……どうした、お前さんは行かないのか」

と、暇だからか引率も兼ねてついて来た伊東が声をかけてきた。

「い、いやー。ちよつと初めてだと緊張しちゃうじゃない?」

「そうか。どれ、じゃあ先に失礼するぞ」

「なぬっ?」

伊東は筋骨隆々の大柄な身体で、躊躇うことなく川に飛んだ。

意外にも、彼は綺麗に着地を決めて、すらーっと綺麗に滑って見える。

「わー、伊東さん上手だね!」

「これでも若い頃はスケート通いしてたことがあったからなあ。久々だが全然問題なさそうだ」

「……っていか人間が身に着けても効果あるの、このシューズ!」

夕張が驚きの声を上げると、伊東は「知らなかったのか」と意外そうな表情を浮かべた。

「艦娘以外のスタッフ——提督とか母艦のクルーとかが、いざというとき身一つで逃げられるように作られたって面もあるんだぞ、このシューズ。さつき子曰が言ったみたいない理由だけで予算通す程大淀は甘くない」

「っていうか伊東さん知ってたなら教えてよ！ 私全然知らなかったんだけど！」

「あー。そういうえば、当時は明石が技術部の面々には黙ってるって言ってたな。技術部に任せると予算度外視したヘンテコなもの作るからって」

「……くっ、否定できない……！」

もし今そういう企画が持ち込まれたら、絶対追加でオプション機能を二つか三つはつけたくなる。

自分のそういう性質を、夕張は十分に理解していた。

「それより夕張さん、早くおいでよ。一緒に滑ったら気持ちいいよー」

「そうそう。今日はスケート日和だよー」

「うっ……。わ、分かったわよ」

舞風と子曰に急かされて、夕張は覚悟を決めた。

息を大きく吸って、川に飛び込む。

着地した。

水には沈まない。シューズは効果を発揮したのだ。

しかし、次の瞬間夕張は盛大にこけた。

「……お前、艦娘なのに……」

伊東が何か憐憫の眼差しを向けてくる。

それに耐えかねて、夕張は慌てて釈明した。

「か、勝手が結構違うのよ！ 艀装がない分普段とバランス感覚違うんだもん！」

「でも他の艦娘皆滑ってるぞ」

「……み、皆結構常連だからね」

見かねた子曰がフォローした。

実際、ここにいる面々の技量は思っていたよりも高かった。

ただ滑っているだけでなく、スピンやイーグル、ジャンプをしてい

る子もいる。

「……舞風ちゃん。申し訳ないんだけど、少し練習に付き合ってもらって良いかしら」

「いーよ！ 滑り仲間が増えるのは嬉しいしね！」

「子日も手伝うよ！ これでも結構得意なんだから！」

二人の手を借りて、夕張はどうにか起き上がる。

「俺も練習付き合おうか？」

「いいの！ 伊東さんは後で見返す相手なんだから、ぎゃふんという練習でもしてて！」

「お、おう」

夕張の剣幕に押されて、伊東は大人しく奥の方へと退散していった。

「いつか絶対見返すんだから……見てなさいよ伊東信二郎……！」

「夕張さんが無茶苦茶燃えてる……」

「やる気満々だねえ」

夕張は当初の涼むという目的をすっかり忘れていたが——暑さも忘れていたので、これはこれで問題ないのかもしれない。暑さもなかった。

理由のないこともある（鬼怒・大井・北上・天龍）

「相談に乗って欲しい?」

間宮特製パスタを頬張りながら、鬼怒は珍しそうに正面の大井を見た。

「なによ、おかしい?」

「おかしいってわけじゃないけど、大井にしては珍しいかなーとは思った」

どちらかという大井は人の相談に乗るタイプだ。

大抵のことはそつなくこなしてしまうので、人に助けを求めるということがほとんどない。

「別に私、そんなにできる女じゃないわよ」

「えっ」

「なによその『こいつ全然自覚ないのか嫌味か嫌味なのか』みたいなリアクション」

「そこまで具体的なこと考えてないよっ!」

思わず鬼怒は身を乗り出してツツコミを入れた。

もつとも、大井は特に気にした風でもない。

「で、どしたの。北上絡み?」

「まあ、半分当たりね」

大井はよく姉妹艦であり重雷装巡洋艦仲間でもある北上とコンビを組んでいる。

休日も二人はよく一緒に過ごしており、しっかり者の大井がペースを乱される姿を目にすることも多かった。

「半分だけ?」

「もう半分は木曾なのよ」

「木曾? なに、姉妹喧嘩でもした?」

木曾は大井や北上の妹にあたる。また、二人と同様重雷装巡洋艦の艦娘だった。

ただし、木曾はあまり姉妹艦と行動を共にすることがない。

彼女は泊地の司令部務めで忙しいし、休みの日も静かに一人で過ご

すことを好んでいる節があった。

ただ、誘われれば滅多に断らない程度の付き合いの良さはあるし、特別誰かと険悪という噂も聞いたことはない。

「喧嘩じゃないけど……最近北上さん、木曾の真似をするようになってきたのよね」

「真似？」

「眼帯つけてみたり、マントつけてみたり、演習でやたら接近戦試みるようになったり」

「うわあ」

似合わない。

そう言いかけた鬼怒だったが、大井の視線が怖いので喉元まで出なかった言葉をかろうじて呑み込んだ。

「で、気になって木曾に心当たりがないか聞いてみたんだけど、知らないって言うのよね」

「北上には聞かなかったの？」

「聞けるわけじゃないでしょ。触れられたくない話だったらって思うと怖いじゃない」

「ええ……そういうもん？ 私だったら聞いちゃうけど」

「そこよ。鬼怒なら遠慮なく聞くでしょう」

だから、と大井は指を立てて言った。

「聞いて欲しいのよ、北上さんに」

北上は泊地の寮の裏手にいた。

なぜか、天龍と一緒に剣の素振りをしている。

「いや、何してんの？」

「あっはっはー」

鬼怒の問いかけに対し、北上はわざとらしい笑いで応えた。

大井に聞いていた通り眼帯を着けている。マントは素振りの邪魔になるからか、側に置いていた。

「いきなりやって来て『あたしもやってみるわー』って言い出してな。もしかしてオレの真似か？」

「いやー、木曾の真似」

「知ってた」

「ははっ、と天龍は肩を竦めてみせた。

「……でも、なんで木曾の真似してんの？」

「そうだな。そんな恰好から入るような真似して、何かあったのかよ？」

「んー？」

北上は手を止めて、考え込むような仕草をした。

どれくらいそうしていただろうか。

やがて彼女は、ポンと手を打った。

「特に理由は——ない！」

「ないの!？」

「ないのかよー！」

鬼怒と天龍のツツコミが北上に直撃する。

「ここはもつとこう、木曾の気持ちを理解してあげたくなつたから真似してみたとか」

「あるいは木曾と連携上手く取りたいからあいつの行動を研究してたとか、そういうオチがあるところだろー！」

「え、ないよ。そんないちいち行動に理由がないと駄目？」

あつげらかんと言う北上に、鬼怒と天龍は一気に脱力した。

確かに北上の言うことも一理あるのだが、気にしていた側としては何か理不尽なものを感じる。

「木曾の気持ちを理解するって、そんなんしなくても別に良いし。連携だつて別段問題なく取れてるしねー」

「……まあ、そうだけど。何かキツカケとかはあつたんじゃないの？」

「キツカケか。んー、この前時代劇観てから、近接戦闘に興味出てきたつてのはあるけど」

北上や大井はどちらかという中距離から敵の隙を突いて雷撃を叩きこむ戦法を得意としていた。

一方、木曾や天龍は敵の懐に飛び込み、至近距離から回避不能の一撃を繰り出す戦い方をする。

その際、敵の隙を作るために手にした獲物で格闘戦をすることもあった。

「お前、それ柳生十兵衛モノじゃないのか？」

「そうそう。木曾の部屋にあったんだよね。何が面白いんだろって試しに観てみたら意外と凄くてさー。格好良いよねえ、ああいう渋い感じの」

北上はそう言って、劇中で十兵衛がやっていたであろう動きを再現してみせた。

とは言え、やっているのは北上なので、どうにも渋い感じにはならないのだった――。

「ということ、特に深い理由はないみたいだったよ」

鬼怒が北上とのやり取りの顛末を報告すると、大井は思い切り溜息をついた。

「そういえばこの前観てたわね。ついでに言うと、木曾が柳生シリーズがないってぼやいてたわ……」

「借りパクしてたのか……。悪い姉だ」

「まあ、そこは後で言っておくわ」

悩みが杞憂に終わったことで、大井も肩の力が抜けたらしい。

お茶を飲んで表情を柔らかくした。

「妙なことになるなくて良かったわ。姉妹同士でいざこざが起きても困るしね」

「大井も大変だねえ」

「うちは姉さんたちも北上さんも木曾も、割と我が道を行くタイプなもの。私が気にしないとどうしようもないのよ」

「ああ……」

鬼怒は曖昧に頷いた。

実のところ、鬼怒は他の球磨型の姉妹が似たようなことを言っている場面には何度も遭遇したことがある。

似た者同士、ということなのかもしれなかった。

「まあ、何はともあれ一件落――」

着、と言おうとしたところで、鬼怒は正面の大井の向こう側にいる人影に気づいた。

そこにいたのはプリンツ・オイゲンやポーラ、ジャーヴィスやタシケントと言った海外艦たちである。

彼女たちは皆、眼帯を着けて刀を持っていた。

「これが日本のクールなスタイルなんだって！」

「サムライってやつですねえ。ポーラ知ってますよお〜」

「またつまらぬものを斬ってしまった……！」

「本当にこれ流行ってるのか？」

四人がやいのやいのと賑やかに通り過ぎていく様を見て、大井の表情が硬直した。

「……あれって」

「もしかすると、北上のやってるの見て流行りだしてるのかもねえ」

鬼怒の推測に、大井は頭を抱える。

「止めるべきかしら」

「別に害はなさそうだし良いんじゃない？」

「確かに害はなさそうだけど……」

「どうやら——大井の悩みは、まだ終わりではなさそうである。」

以下、今回の後日談。

その後、眼帯十刀スタイルは海外艦を中心に想像以上の賑わいを見せた。

ただ、流行るキツカケとなった北上自身は程なく飽きて普段のスタイルに戻ったという。

また、司令部として忙しい木曾はその流行りを「なんだあれ……」と不思議そうに眺めていた。

一方、同じようなスタイルの天龍は「元祖だ」と妙な人気を得て、なぜか何人かの弟子を取るようになったそうである。



山川論争（古鷹・加古・青葉・衣笠）

その日、間宮に顔を出すと、どんよりとした顔の古鷹が鎮座していた。

隣には衣笠がいて、どうにか古鷹を励まそうと奮闘している。

「どうしたんだ？」

声をかけると、衣笠はまるで救い主が現れたかのようにこちらを見た。

「板部先生。お昼ですか？」

「あ、ああ……。なんだ、妙にテンションの陰影がハッキリしてるな」「しーっ！」

古鷹のテンションの低さに触れるのは駄目らしい。

本人の前だから意味がない気もするのだが、衣笠は必死にこちらへ「それを言うな」というポーズをしてきた。

「んで、結局どうしたんだ。古鷹がそんな顔してるのは珍しいじゃないか」

間宮からラーメンを受け取って古鷹たちの正面に座る。

他にも席は空いていたが、一旦声をかけた以上避けるのは後味が悪かった。

「今度の休み、六戦隊の皆で遊びに行くことになったんです」

「ほう。そいつは良い話じゃないか」

古鷹はこの泊地の司令部の一員で、いつも忙しくしている。

休暇を取ること自体が稀で、以前同じ六戦隊の青葉が「古鷹とは全然予定が合わせられない」とぼやいていたことがあった。

「そうそう。せっかくの機会だし泊地から出て、少し遠出しようってことになったんだ」

「遠出って言っても、長期休暇でもなければ、行ける場所は限られるんじゃないのか？」

「うん。だから近場にしようってことになったんだけど——」

そこで衣笠は言葉を濁し、窺うように古鷹の方を見る。

「……近くの島の小山か川に行こうってことになったんです」

「良いんじゃないか。夏休みっぽい」

「私も最初はそう思ったんです。でも、意見がどうにも合わなくて」

「なんだ。割れたのか」

「はい。私は山が良いって主張したんですけど、加古は川の方が良いって……」

それは艦名の由来に基づく志向性なんだろうか——と言いたくなかったが、黙っておくことにした。

ここで茶々を入れるのは良くない。

「それで、喧嘩になってしまつて……」

「まあ、意見が分かれたつていうのはキツカケみたいなものだけどね」  
衣笠がフオローを入れた。

確かに、第三者に説明できる喧嘩の原因などというものは、キツカケもしくは後付けであることがほとんどだろう。

実際のところ、喧嘩と言うのは大抵が感情のかけ違いで起こるものだ。

「で、その休日はいつなんだ?」

「明日です」

「おお……」

道理で落ち込んでいるわけだ。

Xデーが近づいてきたことで、加古に対する苛立ちを、喧嘩別れしたままその日を迎えることの辛さが上回ったのだろう。

「……うーむ。流石にこれを放置しておくのは寝覚めが悪いな」

「何か妙案ある?」

「上手くいくかどうかは分からんが、やってみるさ」

さてどうしたものかと思案しつつ、表面上は自信たっぷりな顔で頷くのが良かった。

翌日。

俺と六戦隊の五人は、ショートランド島内の奥地にある川を目指して歩いていった。

「……」

「……」

古鷹と加古は今日顔ずつと口を利いていない。どうやらまだ雪解けはしていないようだった。

「いやー、絶好のピクニック日和ですねえ！」

「お前は元気だなー、青葉よ」

「せっかくの休暇なんですから、テンションアゲアゲでいきましょうよー！」

「大潮かお前は」

元々青葉は明るく振る舞うことが多いが、能天気というわけでもない。

暗い雰囲気をごうにかしようと思つての行動だろう。

実際、青葉と衣笠のおかげで少なからず空気は和らいでいる気がする。

そんな調子でしばらく進んでいくと、目的の川が見えた。

そこから更に上流に向かって進んでいく。

「おーい、加古」

「……ん？」

「昨日言つてたの、まだしばらく先か？」

「あ、ああ。そうだな」

一瞬古鷹の方を見て、加古は心持ち小さな声で答えた。

もつとも、古鷹の方は加古から距離を取っていたので気づいていないようだったが。

「なあ、板部先生」

「ん？」

「もしかして、古鷹にもう説明してるのか？」

「してない。そんな無粋なことするか。説明はお前がしろ」

そう告げると、加古は僅かに「ぐへえ」と言いたげな顔をした。更に進んでいくと、遠目に小屋らしきものが見えてくる。

他のメンバーより少し遅れて、古鷹もその小屋の存在に気づいたようだった。

「……こんなところに小屋って、変わってますね」

この辺りは島の集落からも少し離れている。

周囲に何があるわけでもなく、その小屋はポツンと建っているのだった。

「そうだなー、変わってるな。誰が建てたんだろうな」

わざとらしく間延びした口調で話しながら、加古の方を見る。

「あたしだよ」

「……加古が？」

古鷹が意外そうな表情を浮かべた。

この泊地は何もない辺境にある。そのためインフラまわりも自分たちで整えないといけない。

ただ、加古はどうにも肉体労働が面倒な性質らしく、そういう活動にあまり熱心に参加していなかった。

「……前に古鷹言ってたろ。静かな川辺でのんびり過ごしたいなって」

「そ、そうだったけ？」

「忘れてるのかよ……。いや、古鷹いつも忙しそうにしてるもんな。無理もないか」

はあ、と加古は観念したように息を吐いた。

「もしかして——それで、この小屋を？」

「ま、まあな。小さいしちよつと不格好だけど、何人かでのんびり休むくらいならできると思う」

気恥ずかしそうに言う加古に、青葉と衣笠が両脇から飛び掛かった。

「なんですかこのイケメン！ 相方のさり気ない望みを叶えるため人知れず頑張るとか、ちよつと嫉妬しちゃいますよー！」

「前もって相談してくれれば衣笠さんも手伝ったのにー。この薄情者め！」

うりうり、と両サイドから青葉・衣笠に揉みくちやにされて、加古は「ぐおおお」と苦悶の声を上げる。

「あれ、助けなくていいのか？」

古鷹に確認する。

彼女は、少し目元を潤ませながら笑って頭を振った。

「しばらく見てましよう」

「あ、あれ？ 古鷹、もしかしてまだ怒ってるー!？」

加古が焦りを表情に見せつつ叫ぶ。

それに対し、古鷹は少しだけいたずらっぽく笑って返した。

「怒ってないですよー、だ」

以下、今回の後日談。

例の小屋は「せっかくだし皆に使ってもらおうよ」という古鷹の申し出により、泊地メンバーの避暑地という扱いになった。

加古はやや複雑そうな表情を浮かべつつも「ま、古鷹がそういうなら良いか」と承諾。

これにより、小屋は休日のんびり過ごしたい艦娘の憩いの地になったという。

策士は一日にしてならず（サミュエル・B・ロバーツ）

「騙し合いに勝つ方法？」

ある日サムに呼び出されたサラトガは、相手の言葉を繰り返した。サムは大きく頷いて、グツと拳を握りしめながら悔しそうに語る。「最近、親睦を深めようところこの泊地のいろんなメンバーと集まって遊んでるんだけど」

「良いことじゃない」

「うん。ただ、最近全然勝てないんだ。騙し合いのゲームがトレンドでさ」

「別のゲームにしてもらおうのじゃ駄目なの？」

「負けっ放しで終わるのは何か嫌なんだよね」

意外と負けず嫌いなサミュエル・B・ロバーツ。

今年の春頃に着任したばかりの駆逐艦娘で、比較的新顔である。

「で、同郷の中だとサラならそういう知略戦とか得意そうだから、何かコツを教えてもらいたいなど」

同じ米国出身の艦娘だと、他にはアイオワ、ガンビア・ベイ、イントレピッドがいる。

しかし、アイオワは細々とした騙し合いは苦手そうで、ガンビア・ベイは騙されてそうな印象が強く、イントレピッドもドストレートな性分の持ち主なのでこういうのは不得手そうだった。

「うーん。そうねえ」

口元に指を当てながら悩ましげな表情を浮かべるサラトガ。

そこはかたなく大人っぽい仕草を真似てみるサムだったが、どうにも背伸びをしている感が拭えない。

「ならサム、私に対して何か言ってみて。それが本当か嘘か当ててみるわ」

「テストってわけだね。んー、どうしようかな」

と、そこで何かに気づいたようにサムはポケットからメモ帳を取り出し、紙片を一枚切り取ると、サラトガに見えないよう何かを書き込んだ。

その紙片を手で隠して、得意満面の表情でサラトガに問いかける。

「今私はここに……パンの絵を描きました。Yes or No?」

「No。何も書いてない、でしょ」

「えーッ!?!」

サムはショックを受けた。

実際、サムの手から出てきた紙片には何も書かれていない。

「なんで、なんで分かったの!?!」

「紙片に書き込もうとしてるとき、こっちにかなり見せつけるような感じだったから、っていうのが一つね。いかにも『描いてるぞー』っていう感じだったから、何かあるなって」

「お、おお……」

「もう一つは、パンの絵を描いてるって言うとき少しだけ何か考えてたでしょ。だから、本当は何も描いてなくて、今何を描いたことにしようか考えてるんだって、なんとなく分かったのよ」

「お、おみそれしました」

ははーつと平伏するサム。

どうもオイゲンあたりから変な影響を受けている節が見え隠れして、サラトガとしては少し心配になる。

「ともかく、一つ言えることがあるわ」

「なに?」

「サム。あなたは相手の裏をかくのに向いてない」

「な、なんだってーっ!」

面と向かって指摘されて、サムはショックを受けたらしい。

わなわなと震えたかと思えば、がっくりとその場に崩れ落ちる。

「うう、これでは鳥海へのリベンジが……」

どうやらサムが勝ちたいのは、泊地の中でも頭脳派寄りとされる鳥海らしい。

さすがに相手が悪いのでは、という言葉呑み込んで、サラトガは「うーん」と思考を巡らせた。

「鳥海は確かに頭も良いし騙し合いにも長けているかもしれないわね。でも、ある程度セオリーに則ったやり方を好むと摩耶から聞いた

ことがあるわ」

「セオリー？」

「相手を騙すときに奇抜な方法を使わないってことね。だから——」  
そう言って、サラトガは脳裏に思い浮かんだ鳥海対策方法をサムに伝授したのだった。

その日、サラトガはサムが参加しているという集まりに同席し、例の騙し合いゲームを観戦していた。

今日のゲームは「汝は人狼なりや？」と呼ばれるチーム対抗形式のゲームである。

村人・人狼チームに分かれ、人狼と思われるプレイヤーを処刑する昼、人狼が村人を襲撃する夜を繰り返し、どちらが多く生き残れるか競うゲームである。

現状、場に残っているプレイヤーは、サム、鳥海、藤波の三名だった。

人狼ゲームは村人の数が人狼以下になった時点で勝敗が決するもので、このうちの二人は村人ということになる。

「凄いですね。サムがここまで勝ち残るのは珍しいです」

「そうなの？」

「はい。なんかサラトガさんに秘訣を聞いたって言ってましたけど、どんなアドバイスしたんですか？」

一緒に観戦していたガンビア・ベイの問いかけに、サラトガは「まあ見ていれば分かると思うわよ」と返した。

現在は昼。

ここで人狼を当てて処刑できれば村人の勝ちが決まる。

一方、ここで外してしまうと夜に村人が処刑されて人狼の勝ちが決まる。

言ってしまうえば、ゲームの最終局面だった。

大抵の場合ここまで来るとおおよそ怪しいのが誰か分かってくるので、すんなりと終わってしまうケースも多いが、今回は少々ややこしいことになっていた。



村人の中には役職が割り振られる者が存在する。

役職にはそれぞれ能力があり、それを生かして人狼を特定するのである。

しかし、一つ特殊な役職として「狂人」というものがあつた。

狂人は村人という扱いながら、勝利条件が「人狼チームの勝利」になつていてという一風変わった役職である。

その狂人が、まだ場に残っている可能性があつた。

「サムさん」

と、そこで鳥海が手を挙げた。

サムと藤波の視線が鳥海に集まる。

「実は私、人狼なんです。狂人は貴方ですよ。藤波さんを投票で潰してしまいませんか？」

しれっと告げる鳥海に、サムと藤波の目が光つた。

狂人は勝利条件から人狼チームに属しているが、本人の条件としては村人と同じであり、誰が人狼か分からず、人狼からも認知されていない。

自らの正体を明かせば他の村人から警戒されてしまうので、狂人としての本分を全うできない。

しかし、残り三人で投票するというこの状況下であれば話は別だつた。

昼の処刑は多数決で行われる。ここで人狼と狂人が示し合わして村人に票を入れれば、確実に勝ちを拾うことができるのだった。

「——ちよつと待った！ サム、鳥海さんを信じちや駄目。人狼は私だから！」

藤波が鳥海の提案に待ったをかけた。

一方、サムは鳥海と藤波のやり取りを注意深く眺めている。

「あら。こうなると少し困りましたね。どちらが本当の人狼か、サムさんに当ててもらわないと」

「私だって、もちー！」

互いに人狼であることを主張する鳥海と藤波。

通常、人狼は正体を隠しながら夜のターンで隠密裏に村人を襲撃し

ていく。

ただ、今回のように自分たちの方が優位に立っているとみなせる場合、正体をカミングアウトすることもあった。

「これ、どういうことですかね……？」

「鳥海が本当に人狼で村人である藤波を嵌めようとしている可能性と、鳥海が実は村人で人狼の藤波を始末しようとしている可能性があるわね」

「村人なのに人狼を騙っちゃうんですか？」

「騙らなかつたら藤波が同じように人狼宣言してサムを味方につける可能性もあるでしょ。その可能性を見越して先手を打ったって可能性があるわね」

そこで、サムが二人を交互に見て静かに告げる。

「私——狂人じゃないんだけど」

観戦者たちの間でざわめきが広がる。

すっかりサムが狂人であることを前提に話が進んでいたから、皆がサムの発言に戸惑った。

それは、場に残っていた鳥海と藤波も例外ではない。

「狂人じゃ……」

「ない……？」

二人の言葉を受けて、サムは——少しおかしそうに笑った。

「あ、ゴメンゴメン。嘘。私狂人」

会場に「ええー」という声が広まる。

サムの嘘によって混乱する者も大勢出ているようだった。

ただ、そういった会場の動きの中で、サラトガはあることに気づいていた。

「でも今ので分かった。人狼は藤波だね！」

ビシッと藤波を指差してサムは宣言した。

鳥海の顔が少しだけ強張る。

「どういうことでしょうか？」

「だって今嘘って言ったとき、藤波凄く安心してたから」  
そう。

サムが前言を撤回したとき、藤波は大きく息を吐いて身体から力を抜いたのである。

サムが狂人だということが分かって、安心したのだった。

サムと藤波が鳥海に票を投じて、処刑が執行される。

その瞬間、ゲームマスターが人狼サイドの勝利を宣言した。

「……いや、今回の貴方はなかなか読めませんでしたね」

ゲーム終了後、鳥海はサムの健闘をそうやって称えた。

「サラにアドバイスもらったおかげだよ。私だけの力じゃまだまだ勝てなかったと思う」

「サラトガさんから？　もし差し支えなければ、どういうアドバイスだったか伺っても良いでしょうか」

「そう難しいことじゃないよ。まず、私は騙すのに向いてないから、騙そうとするんじゃないやなくて騙されないよう集中すること。……んで、もう一つは、騙すなら騙す相手を見極めること」

そう言ってサムは鳥海の側にいた藤波を見た。

「鳥海はポーカーフェイスだから反応見るのも難しそうだったけど、藤波はその点素直だから何か見えるかなと思ったんだ」

「くっ、反論できない……」

藤波は悔しそうに拳を握り締める。

ゲームには勝ったが、どことなく負けた気がしているようだった。

「まあまあ、藤波はそういう素直なところが良いと思うよ！」

「う、うるさい！　ほら、次のゲームやるよ！　今度は絶対上手く立ち回ってみせるんだから！」

そんな風にやり取りする二人を、鳥海や観戦席のサラトガたちは微笑ましげに見守るのだった。

## 弾けるものができました（鳳翔・加賀・神威）

その日、鳳翔は演習場で一人訓練に勤しむ加賀を目にした。

加賀は艦載機制御に集中している。

ただ、鳳翔の目には、艦載機の動きがどことなく粗っぽく見えた。

「加賀さん？」

「……鳳翔さんですか」

訓練が一段落ついたところで、鳳翔は加賀に声をかけた。

加賀にしては珍しく汗だくだった。普段はもう少し軽いところで切り上げている。

「珍しいですね。だいぶ訓練に力が入っているようでしたが」

「こんなものではまだまだ足りません。……もつと鍛えて練度を上げなければ、また置いていかれます」

ははあ、と鳳翔は心の中で頷いた。

現在、泊地の艦娘は結構な数が欧州に遠征中だった。

加賀としては、残留を命じられたのが不本意なのだろう。

……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～  
：：：：：：：：～  
じられてましたっけ。

欧州での出来事を蒼龍・飛龍に聞かされて、どことなく羨ましそうにしていたのを思い出す。

あなときは加賀の相手とも言うべき赤城も留守を務めていたが、今回はその赤城も欧州に出向いていた。

だから、余計に置いていかれた感が強いのかもしれない。

「でも加賀さん、遠征組と残留組の振り分けは練度で決められているわけではありませんし、あまり無理をして身体を壊しては本末転倒だと思いますよ」

「それは、まあ、確かに」

加賀は頬を搔いて鳳翔から視線を逸らした。

「どうも、訓練に勤しんでいたのは気分転換———というかストレス発散———によるところが大きいようである。」

練度で言えば加賀は泊地内でもトップ10に入る技量の持ち主で

ある。

無理な訓練は逆効果以外の何物でもない。

とは言え、近隣諸国からの依頼は水雷戦隊がこなすので、加賀や鳳翔は泊地待機中であり——端的に言うことや暇だった。

だから、訓練でもして気を紛らわせないと落ち着かないのだろう。

「あ、そうだ」

あることを思いついて、鳳翔はポンと手を叩いた。

「加賀さん。少し手伝ってもらいたいことがあるんですが、よろしいですか？」

「鳳翔さんの頼みでしたら」

空母の母たる鳳翔からの提案とあって、加賀は一も二もなく頷いた。

「映画祭……ですか？」

鳳翔から何をするのか聞かされて、加賀は少し意外そうな顔をした。

あまり鳳翔と映画の組み合わせがピンと来なかったせいである。

「あら、意外でしたか？ 私もときどき映画は観るんですよ」

「知りませんでした……。ちなみに、どういったものを？」

「往年の名作と言われるものが好みですね。あと、最近そういった名作をリメイクした映画もよく観ます。時代によって解釈や表現が変わったりしていて、その違いを探してみるのが結構好きなんですよ」  
思っていたよりがっつり観るタイプらしい。

鳳翔とは親しい加賀だったが、こういう一面については初めて知った。

「で、アクイラさん曰く『この時期イタリヤでは大掛かりな映画祭がある』とのこと、うちでもちよつとそれらしいことをしようという話になったんです。ただ、今回の欧州遠征で企画を進めていたイタリヤの皆さんが出払ってしまったので」

「なし崩し的に中止になってしまった、ということですね」

「ええ。ただ残念そうにしている子も多かったので、できる範囲でそ

れっほいことをしようかな……と」

そう言つて鳳翔がやつて来たのは、鳳翔が開いている小料理屋の厨房だった。

「映画のチョイスは夕張さんがやつてくれるそうなので、私たちは『映画を観ながら食べるもの』を用意しましょう」

「ふむ……そうになると、やはりアレですか」

「はい。ずばり、ポップコーンです！」

グツと拳を掲げてその名を叫ぶ鳳翔。

しかし、二人の動きはそこで止まってしまった。

「……ちなみに鳳翔さん。ポップコーンというものを、作ったことはありませんか？」

「ありません。……白状すると、食べたこともないんです」

「……私もです」

これについて、二人を責めるのは酷であろう。

なにしろ泊地があるショートランドは、泊地と村落以外ほとんど施設らしい施設がない。

映画館というものは、二人に限らず、泊地の艦娘にとって遠い存在だった。

ポップコーンというものに触れる機会も持ちようがなかったのである。

「二応、トウモロコシは用意してあります」

「二応……というと、何か問題があるんですか？」

「ええ。これを炒めればポップコーンになると思つて試してみたのですが」

と、鳳翔は厨房にあつた鍋の蓋を外した。

もわつと微妙な臭いが周囲に広がる。

鼻を摘まみながら加賀が鍋を覗き込むと、焦げ付いたトウモロコシのコーンが一面に広がっているのが見えた。

「これは……」

「ポップコーンとはとても言えませんよね……」

やり方がまずいのかと思つた鳳翔は、何度かリトライしてみたり、

泊地のスタッフに話を聞いてみたりしたのだが、なぜこうなってしまうのかは未だに分らないままだった。

スタッフは本土から来ている者がほとんどで、ポップコーンに触れたこともある人が大半だったが、皆自作してみたことはないらしく、何が問題なのかは皆目見当がつかないのだという。

「そうだ。インターネットで調べれば良いのではありませんか」

この泊地は辺境にあるが、本土との連絡を円滑に行うため回線が引かれている。

インターネットの叡智に頼れば、何が問題なのか掴めるかもしれない。

しかし、加賀の提案に鳳翔は頭を振った。

「実は、今インターネットは使えないらしいんです。なんでも機械の一部が駄目になってしまったらしく。取り寄せないと復旧が難しいらしく、九月末頃までかかりそうだと」

「それは災難な……」

そのとき加賀は、一部の艦娘がスマホを片手に何やら嘆いていたのを思い出した。

何があったのかと不思議に思っていたが、あれはインターネット障害による嘆きだったのだろう。

「で、万策尽きてしまったので気分転換に散歩をしていたところ加賀さんを見かけたので、声をかけてみたというわけです」

「事情は分かりました。しかしこういう手合いはそこまで得意というわけでもないのです、どこまで力になれるか……」

「なら、二人で考えてみましょう。一人では駄目でも、二人で知恵を出し合えば何か出てくるかもしれません」

鳳翔にそう言われると、加賀としては知恵を捻り出すしかなくなる。

……まったく。貴方はズルい人ね、鳳翔さん。

満更でもない心持ちでそんなことを思いながら、加賀は鳳翔と一緒にトウモロコシとにらめっこを始めるのだった。

「——さすがにこれ以上は、何も浮かびません」

「私もそろそろ限界が……」

丸一日試行錯誤したものの、ポップコーンは出来ていない。

知恵をこれでもかと思し尽くした二人は、既に真っ白になりかけていた。

「あれ、鳳翔さんお休みですかー?」

と、そこに神威が姿を見せた。

どうやら任務で外出していたらしく、あちこちが汚れている。

仕事終わりに一杯やろうと、鳳翔の店に顔を出したらしい。

「ああ、すみません神威さん。ちよつと立て込んで……」

「どうかしたんですか、加賀さんも一緒になって」

興味深そうに尋ねてくる神威に、鳳翔は今の状況を簡単に説明した。

話を聞いた神威は、厨房にあつたトウモロコシを見て若干気まずそうな顔になる。

「あの、鳳翔さん。言い難いんですけど、ポップコーンは爆裂種という種類のトウモロコシじゃないと上手くいきませんよ」

「——え?」

鳳翔と加賀は、二人揃って力の抜けた声を出した。

「つ、つまり……作り方の問題ではなく」

「素材の問題だったと——」

大量に出来上がった焦げだらけのコーンを見て——やがて、二人はぷつと思わず吹き出した。

最初は小さく、そして少しずつ二人の笑いは大きくなっていく。

神威はそんな二人に戸惑っていたが、二人があまりにおかしそうに笑うので、つられて笑ってしまった。

以下、今回の後日談。

「別にポップコーンじゃなくても良いですし、今回は別のやつにしましょう。爆裂種を今から用意するのでは時間がかかりますし」

神威からのアドバイスを受けて、鳳翔は映画のお供を急遽ホット



ドッグに変更。

無事に泊地映画祭は開催され、三人で作ったホットドッグは好評を得たという。

また、鳳翔・加賀という空母組の中心人物二人を救ったことにより、神威は空母組から一目置かれるようになったそうなの。

## 夢を見る泊地（岸波・鬼怒）

その日は、なんだかとても眠かった。

何をしていたのか今一つ思い出せない。

ぼんやりとする頭を抱えながら、岸波はゆっくりと身体を起こした。

「……………ここは、執務室……？」

着任間もない艦娘は、研修も兼ねて提督の秘書艦として執務室でしばらく働くことになっていた。

岸波もここ最近執務室通いが続いている。

「いえ、少し違うわね」

今岸波がいる部屋は、執務室と似ているようで少し違う。

間取り、窓から見える風景、そういった要素が少しだけずれていた。

「なんだろう、ここは」

周囲には誰もいない。

遠くから波の音が聞こえてくるくらい、他の音がしなかった。

扉を開けると、外に繋がっていた。

周囲を見渡す。

執務室と思っていたのは、小さな小屋だった。

岸波の知る執務室は司令部棟の中にある。こんな粗末な小屋ではない。

他にも、違和感はたくさんあった。

ポツポツと建物は建っているが、それは岸波が着任したS泊地のものではない。

S泊地の建物はもっとしっかりとした造りになっているし、数も多い。

今岸波の眼前に広がっているのは、集落を少し発展させたくらいの拠点だった。

「……………しかし、どうしたものかしら」

「ふっふっふ、お困りのようだね！」

と、そこで緊張感のない声が聞こえてきた。

声がしたのは屋根の上。

岸波が視線を転じると、そこには仁王立ちする軽巡洋艦・鬼怒の姿があった。

「……鬼怒さん？」

「そう、鬼怒さんです！　こんなところで会うとは奇遇だね！」

とうつ、と屋根から飛び降りて、鬼怒は華麗に着地を決めた。

「あの。ここって……泊地では、ないですよね？」

「泊地であつて泊地ではない。そういう摩訶不思議な場所なのじゃよ、岸波ちゃん」

なぜか仙人口調で答えると、鬼怒は小屋を改めて仰ぎ見た。

「この執務室も見るのが久しぶりだなあ」

「執務室なんですか、これ」

「そだよ。もつとも、四年以上前のものだけだね」

「……どういふことですか？」

混乱する岸波の頭をポンポンと叩きながら、鬼怒は順を追つて説明した。

「ここは泊地の夢の中。本当のところは分からないけど、私はそう呼んでる」

「泊地の夢——ですか」

「そう。この中はうちの泊地がこれまで辿ってきた思い出が詰まっている。泊地が昔のことを夢で見せて、私たちはその夢に入り込んでしまったってわけだね」

スラスラと説明する鬼怒に、岸波は当然の疑問を口にした。

「こういうことって、結構あるんですか？」

「そんなにしょっちゅうはないよ。たまにあるくらい。ついでに言うと、夢から覚めるとここでのことは忘れちゃうんだよね。また入り込んだときに思い出すの」

「なんだか、それこそ夢みたいな話ですね」

「だから夢なんじゃないかって思ってるんだよね。まあ、確かめようがないんだけどさ」

そうやって鬼怒は岸波の前を歩き出した。

「それじゃ、行こうか」

「行くって、どこにですか？」

「放っておいても夢はそのうち覚めるし、せつかくだからいろいろ案内しようと思ってるよ。……どうする？」

岸波は、少し考えてから頷いた。

覚めればもう見る事ができない光景。

それが今日の前にあるなら——見て回るのも悪くないと、そう思ったのだ。

最初に鬼怒が連れてきたのは、木造の学び舎だった。

現実の泊地にある学校と比べると、建物自体が随分と小さい。

教室一つと、事務室らしきものがあるだけだ。

不思議なことに、一歩中に足を踏み入れると、突如大勢の艦娘が岸波の前に現れた。

ただ、誰も岸波や鬼怒のことを気にする素振りを見せない。

姉である夕雲や巻雲がすぐ近くを通ったが、岸波のことを無視して通り過ぎて行ってしまふ。

「鬼怒さん、これは……？」

「ここであつた光景ってことだろうね。私たちが今見てるのは昔のものだから、私たちに気づくことはないんじゃないかな」

ふと岸波が教室の窓際を見ると、居眠りをしている鬼怒の姿があつた。

今とは制服が違うし、少しだけ顔立ちも異なつて見える。

「あれって」

「あ、あはは。見なかったことにしてくれない？」

「……駄目ですよ、居眠りは」

『——駄目だぞ、居眠りは』

岸波が今の鬼怒に注意するのと同じタイミングで、過去の鬼怒を誰かが注意していた。

車椅子の、白髪の男性だ。厳しそうでいて、どことなく優しくそうな

印象を与える顔立ちをしている。

過去の鬼怒は慌てて飛び起きると、緊張した面持ちで男性に向かってあれこれと言いつきを始めていた。

男性はそれを一通り聞き終えると、大きくため息をついて、『居眠りするくらい疲れているなら、ちゃんと自室で休め。こんなところで寝ていては風邪を引く』

と、鬼怒の頭をポンポンと叩き、他の子のところに行った。

「今の人は……」

「ああ、うちの最初の提督だよ。泊地に学び舎作った人でもあるんだ」  
S 泊地は何度か提督が変わっている。

着任して間もない岸波は、昔の提督についてほとんど知らなかった。

「学び舎……。私はまだ通ってませんが、艦娘として必要なことは研修や訓練で学べますよね。なぜ、学び舎を作ろうと思ったんですしう」

岸波の疑問に、鬼怒は在りし日の提督の姿を見ながら「うーん」と思いを巡らせた。

「多分、艦娘として以外の生き方を知って欲しかったんじゃないかな」  
「艦娘として以外の——ですか」

「別に提督は艦娘否定派だとか反戦派じゃなかったけど、皆にはいろんな可能性を知っておいて欲しい、ってよく言ってたから。もしかすると、深海棲艦との戦いが終わった後の、私たちの身の振り方を気にしてくれてたのかもね」

最初の提督は、何人かの艦娘に捕まって質問攻めにあっていた。困ったような表情をしながらも、一つ一つに真摯に応えている。なんとなく、父親、という言葉が岸波の脳裏に浮かんだ。

次に二人がやって来たのは、泊地の一角に居を構えている理髪店だった。

理髪店の存在は岸波も知っていたが、こうして来るのは初めてである。

「二〇一四年に一回泊地が大打撃受けて再建する必要が出来ただけ  
ど、その途中で要望がたくさん出て来てね。それでこの理髪店が作ら  
れたんだよ」

ここに来る途中、岸波は少しずつ風景が移り変わっていくのを感じ  
た。

この夢の中で時間が流れている、ということなのかもしれない。  
理髪店の中は、艦娘たちでいっぱいだった。

戦うことが生業ではあるが、それはそれとして身だしなみもしっか  
りしたいと思うのが人情というものである。

『せっかくだし新しい髪型に挑戦してみようと思うんだ』

『あたしは面倒だし今のままでいいや』

『やはり短くした方が戦いでは邪魔になりませんかね』

『束ねれば良いのではないのでしょうか。あまり戦い一辺倒で考えても  
——』

順番待ちをしている艦娘たちの表情は、皆明るい。

「この時期は提督交代や泊地復興で忙しかったから、娯楽が少なかつ  
たんだよねえ。皆お洒落もろくにできないような状態が続いてたん  
だ。だから理髪店作ってくれた提督には感謝だよ」

「ぎつきの提督とは違う方なんですネ。二代目はどんな方だったんで  
すか?」

「ん、そこにいるよ」

鬼怒が指し示したのは、艦娘たちの集団の一角。

よく見ると、その中心には岸波の知らない少女の姿があった。

なぜか、背後に回り込んだ瑞鳳によって髪型を弄られている。

『……瑞鳳。飽きないの、それ?』

『えー、飽きないわよう。提督は髪長いし、いろんな形にアレンジでき  
るもの』

『アレンジされないようバツサリ切ってもらおうかしら』

『ええー!?!』

少女の言葉にショックを受けた瑞鳳が、あれやこれやと言説を並べ  
立てて長髪の良さを説き始める。

少女はそれを面倒くさそうに、だが満更でもなさそうに聞いていた。

「随分、若い方だったんですね」

「でも優秀だったよ。戦術眼は確かだったし、指揮官としても頼りになった。個人的には、もうちよつと周囲に甘えてくれても良かったのになーと思うけど」

瑞鳳以外の艦娘たちからもいろいろと弄られているようで、少女は一人一人に対し律儀にツツコミを入れていた。

見た目の割に落ち着いた——物静かな印象の子だったが、暗さはあまり感じられない。

「愛されていたんですね」

「最初の提督の影響かな。どうも皆お節介焼きになってた感じもするねえ」

鬼怒はそう言っつて、少し照れ臭そうに笑った。

「あ、やっぱりいた」

図書館に入るなり、鬼怒は片隅を指し示した。

歴代提督案内ツアーみたいになってきたし、三代目と四代目も紹介してみよう。

そう言っつて鬼怒が真っ先に岸波を連れてきたのが、この図書館だった。

「あれが……三代目の提督ですか？」

鬼怒が指した先には、雑誌を顔に乗せてだらしなく寝息を立てている男がいる。

『提督っ！』

男の顔から雑誌を引き剥がし、叱責の声を上げる艦娘がいた。

防空駆逐艦の一人、照月だ。

『……ん、おお。照月がいるように見える』

『いるんです。まったく、こんなところでまたサボって！』

雑誌の下に隠されていた提督の顔は、包帯で覆われていた。まるでミイラのようなのである。

ただ、その風貌に反して、提督の口から出てくる言葉は何ともしようのないものだった。

『良いじゃないか別に。泊地はちゃんと回ってるだろう?』

『司令部の皆が回してるんです』

『うむ。結構結構重畳重畳——あだだだっ?!』

堪忍袋の緒が切れた照月に耳を引つ張り上げられて、提督はたまらず悲鳴を上げた。

初代・二代目に比べると、何とも情けない感じのする提督である。

「失礼ですが、あれでよく提督が務まりましたね……」

「そう思うでしょ。でも、あれで不思議と仕事は出来てたんだよね。下手すると歴代の提督で一番仕事早かつたんじゃないかな」

「……本当ですか?」

「ホントホント。泊地のネットワーク環境整備するよう決めたのもこの人だし、図書館に大量の書籍仕入れて拡充させたのもこの人だよ。情報を制する者が戦場を制する——なんて言ってたっけ」

鬼怒はそう言うが、岸波の目の前にあるのは、正座して照月の説教を聞いている包帯男という光景だった。

どうも、ぱつと見て凄さが分かるタイプの人ではないらしい。

「まあ、ものぐさなのも確かだからねえ。俺は面倒が嫌いなんだ、ともよく言ってた」

「性格には少々難があったということですね……」

ただ、照月と提督の間にある空気感は、そんなに険悪なものではなかった。

どこことなく、だらしない兄の背中を叩く妹のような構図にも見える。

などと岸波が思い始めた矢先、照月の隙を突いて提督が一目散に逃げ出した。

『あつ、提督!』

『ハハハハッ、悪いな照月! 俺はまだまだサボり足りないのだ!』

あと五分だけサボらせてもらおう!』

『もーっ!』



意外と俊敏な動きで逃走する提督を追って、照月も駆け出しして  
く。

そんな二人に『図書館では静かにしろー』と摩耶が形式的な注意を  
した。

「……なんというか、見ていて飽きない感じはしますね」  
「でしょ?」

最後にやって来たのは、泊地の片隅にある神社だった。  
ここには艦娘の元になった艦艇の御魂が祀られている。

艦娘の力の源とも言える、重要な施設だった。

普段ここは神主の老人が管理しているのだが、今神社にいるのは一  
人の老婆だけだった。

「ありや。尼子のお爺さんは留守のときだったみたいだね」

「あの、鬼怒さん。私はここに来るのは初めてなんですけど……普段お  
られるのは、あそこにいる方ではないんですか?」

「うん。普段いるのは悪戯好きの腕白爺さん。面白い人だから今度遊  
びに行ってみると良いよ。お菓子くれるし」

どことなく餌付けされているような台詞を漏らしつつ、鬼怒は縁側  
に腰を下ろしてお茶を飲んでいる老婆に近寄った。

「この人が四代目。つまり先代だね。とにかく鬼コーチとして有名  
で、私らもビシバシ鍛えられたというか……。凄い人なんだけど、怖  
くておっかなくてねえ」

『随分な言い草だねえ。また鍛え直してやろうかい』

と、不意に四代目が鬼怒を睨みつけた。

「げえっ、なんでこっちに気づいたの!?!」

『ふん、あたしを舐めるんじゃないよ。夢を見てる側か見られてる側  
かなんて些細なことさ』

「無茶苦茶なこと言ってる! 無茶苦茶なこと言ってるよこの人!」

ひいい、と震え始める鬼怒。もっとも、本気で恐れているわけでは  
ないようだった。

もしかすると、二人の間ではこれがお決まりのやり取りなのかもし

れない。

『そつちのアンタは、新しく着任した艦娘かい？』

「は、はい。夕雲型駆逐艦十五番艦、岸波と申します！」

『十五——ってことは朝霜の一個上か。夕雲型も大分増えてきたねえ』

四代目は表情を和らげて『そうかい』と何度か頷いてみせた。

『岸波。鬼怒と一緒にいろいろ回ってきたんだろう？ どうだった、この泊地は』

「は、はあ。いろいろな面が見られて良かったと思いますが……まだ、感想を言葉としてまとめるのは難しいです」

『成程。アンタはなかなか真面目そうな子だね』

四代目はお茶を置いて歩き始めた。

自然、岸波と鬼怒はその後に続く形になる。

『この泊地は、決して良いことばかりがあったわけじゃない。そもそも何度も提督が交代してるって時点で奇妙な拠点だ。いろいろあった。いろいろね』

四代目の言葉にどう反応すべきかと鬼怒を見ると、先程までの様子はどこへやら、神妙な面持ちになっていた。

『それでも、この泊地はよく昔のことを思い返すんだ。決まって楽しかったときの夢を見る。岸波、アンタこの夢で何か嫌なものを見たかい？』

言われてみると、どの光景も嫌な感じはしなかった。

「……皆、生き生きとしていました」

『そうかい。なら、この泊地は皆と過ごす日々を今も”良きもの”として見ているんだろうねえ』

辛いことも沢山あるが、良いことも沢山ある。

この日々もそう捨てたものではない——そういう思いが、この夢の源泉なのかもしれない。

「ですが、なぜ私たちがその夢の中に入り込んだんでしょう」

『さてねえ。泊地が存外寂しがり屋なのか、新しく来た子にここは良いところだとアピールしたかったのか。流石のあたしにも、それはと

んと分からないね』

やがて、四代目は足を止めた。

話に夢中で気づかなかったが、いつの間にか周囲は真っ白になっていた。

何も見えない。

何もない。

もう、夢は終わろうとしている。

『さて、今回はここまでみたいだ。次があるかどうかは分からないが、今度来たときは何か美味しいものでも馳走してやるよ』

「提督、私には？」

『心配しなくてもちゃんと用意するさ。あたしは依怙贖はしないからね』

そう言つて四代目は鬼怒の背中をバシッと叩く。

笑い合う二人を見ているうちに——周囲はますます白く染まっていった。

「おーい、岸波ちゃん」

身体を揺すられて、岸波の意識は少しずつ覚醒していく。

ぼんやりとする頭を抱えながら、岸波はゆっくりと身体を起こした。

「お、やっと起きたね」

「……鬼怒さん？」

「そうそう鬼怒さんだよ。はい、シエスタの時間はそろそろ終わりだからね」

時計を見ると、ちょうど昼休みが終わるかどうかという時間帯だった。

……ああ、そういうえば少し休もうと仮眠を取ろうとしてたんだっけ。

思っていた以上に深く寝入ってしまったからか、岸波の頭はなかなか動き出さなかった。

「えつと……鬼怒さんは、何か御用でしたか？」

「手伝いを頼まれてた作業の件、終わったから報告に来たんだよ」

「そうでしたか、失礼しました」

「いいよいいよ。ちょうどいい暖かさだし、眠くなるのも無理はないよねえ」

報告書を渡しながら、鬼怒は目を擦った。

「……いや、実はちよつと鬼怒も寝ちやつてね。あんまり人のこと言えないんだけど」

「そうだったんですね。ふふ、そういえば夢に鬼怒さんが出てきたような気がします」

「え、マジ?」

「ええ。内容はあまり思い出せませんが——楽しい夢だったような、そんな気がします」

来る者もいれば、去る者もいる。

しかし、泊地の日々は続いていく。

良いことばかりではないかもしれないが——その日々は、決して捨てたものではないはずだ。

神鷹の疑問（神鷹・大鷹・龍驤・鳳翔）

泊地が広々としている。

S泊地はソロモン諸島に複数の拠点を構えており、人員を分散させている。

だが、今この泊地本部が閑散としている理由は他にもあった。

「秋刀魚漁……？」

同じ軽空母かつ大鷹型である大鷹から説明を受けて、神鷹は首を傾げた。

北方海域と中部海域で毎年行われている秋刀魚漁に、泊地のメンバーのうち結構な数が出向いているらしい。

「漁業船護衛の一環なの。報酬として獲れた秋刀魚をお裾分けしてもらえるのよ」

先輩として妹分にしっかりと説明する大鷹。

しかし、説明を聞いた神鷹は不思議そうな顔をしていた。

「大鷹姉さん。その——なぜ秋刀魚なの？」

「え？」

神鷹からの思いがけない問いかけに、大鷹は箒を掃く手を止めた。

「漁業船の護衛というのは仕事だから分かるけど、なんで秋刀魚でそこまで盛り上がってるの？」

「……さ、秋刀魚は美味しいから」

「そこは私も否定しないけど、他にもこの時期旬の魚はあるでしょう？　なんで秋刀魚に特化してるのかなって」

神鷹の素朴な疑問に、大鷹は大きく心を揺さぶられていた。

言われてみれば、なぜそんなに秋刀魚一点特化なのかは分からない。

泊地の皆が当たり前のように「秋刀魚ヒヤッホー！」「秋刀魚ワツシヨイ！」と言っていたので、その空気に流されていた。

「そもそも北方海域や中部海域って結構行くの大変ですよ。この辺りで獲れる魚って、他になかったんでしょうか」

「うぐう?!」

神鷹に悪気はない。

ただ純粹に疑問を抱いているだけだ。

それだけに、神鷹の言葉は大鷹に突き刺さる。

その疑問が「ごもつとも」だからだ。

「た、大鷹姉さん？　大丈夫ですか、急に胸を押さえてうずくまつて

……医務の先生呼んできましようか!？」

「い、いいの神鷹さん。これは肉体的ダメージではないから……」

「そうなの？」

ダメージを与えた自覚のない神鷹がオロオロしていると、そこに大きな荷物を抱えた鳳翔と龍驤がやって来た。

荷物は、鳳翔が営む小料理屋で使う食材らしい。新鮮な魚特有の匂いが大鷹と神鷹の鼻腔をくすぐった。

「新鮮な魚……やっぱり、遠い秋刀魚より近場の魚が良いの……？」

「た、大鷹姉さん……!」

「なにしとるん君ら」

珍妙なやり取りを続ける二人に、思わず龍驤が突っ込んだ。

シヨックを受ける大鷹に代わって神鷹が事情を説明すると、龍驤は腕組みをして難しい顔を浮かべた。

「うーん、確かに秋刀魚にそこまで拘らないといけない理由は、特にないなあ」

「では私たちは何のために秋刀魚漁に力を入れているのでしょうか……？」

「んー、きつかけはよく分からんけど、今となつては皆楽しんでるみたいだし、それが理由つてことでええんちゃう？」

龍驤の回答は簡潔にして明瞭そのものだった。

隣にいた鳳翔もうんうんと頷いている。

「ちゃんとルールを決めて、他の方々の迷惑になつているわけでもなければ、やりたいからやる、というのでも良いと思えますよ」

「そうそう。きつかけだつてそんなもんかもしれんよ？　大本営の誰かが秋刀魚食いたい思つただけかもしれん」

「駄目とは言いませんけど、さすがにその理由だとちよつといろいろ

複雑な気もします」

「気持ちには分からんでもない」

龍驤は、そう言って神鷹の頭をポンポンと叩いた。

「けど、神鷹は面白いこと考えるなあ」

「そんなに変でしたか?」

「ああ、いや。秋刀魚じゃなくても良いんじゃないかってところや。考えてみればその通りやなーって」

「確かに、北方海域や中部海域の拠点ならともかく、うちがやるのは少々非効率的ですね」

なにせ数ある拠点の中でも最南端に位置する泊地である。

北方海域との往復はなかなか辛い。中部海域は距離こそ近い方だが、好戦的な深海棲艦の勢力が強いので危険度が高い。

「鳳翔、この辺りで獲れそうな魚ってなにがある?」

「やっぱりマグロとカツオね」

「んー、カツオは釣り同好会からしよっちゅうお裾分けしてもらってるしなあ。マグロ……マグロか……」

龍驤が渋い表情を浮かべて唸り始める。

「マグロだと、何か問題があるんですか?」

「んー、単純に漁が大変っちゅーのもあるけど、乱獲問題やら条約があるやらで、割と取り扱いが面倒なんよ」

「養殖事業を始めてみるとか、どうでしょう」

「発想は面白いけど、うちにそれやる余力があるとは思えんな……」

S泊地の経営状態は基本火の車状態である。

「秋刀魚漁に関してもいろいろな取り決めがなされた上で実施されていますからね。普段より思い切り獲れるので、盛り上がりやすい面があるのかもしれない」

「なるほど。簡単に説明できないものの、盛り上がっているのにはそれ相応の理由があるんですね……」

ふむふむと頷く神鷹。

どうも彼女は、知的好奇心が旺盛な性質らしい。

気になることについては、あれこれと考え込むところがあるよう

だった。

「そーいや神鷹。アンタんところは魚料理あんま食べないんやっけ？」

「あ、はい。日本やソロモン諸島に比べるとあまり食べないですね」

神鷹は改装空母であり、元々はドイツの客船だったという変わった経歴の持ち主だ。

改装されて初めて大鷹の妹分になったので、感覚的には義理の姉妹というものに近い。

「ドイツは海に面しているところが少ないので、こっちは盛んではないですね」

「なるほどなるほど。なら興味はあるか？」

「え？ あ、はい。そうですね。料理全般、興味あります」

「おー、そうかそうか。……なら、ちと実習してみん？」

そう言って龍驤は抱えていた荷物の蓋を開けた。

中には、先程も話題に上がっていたカツオが沢山入っている。

「さつきちようど仕入れてきたところだな。ちよつと数が多いから、鳳翔のところで多めに捌いて皆に振る舞おうと思ってたんよ」

「もし良ければご一緒にどうですか？ 見学だけでも構いませんよ」

龍驤と鳳翔からの提案に、神鷹は目を輝かせて頷いた。

「是非。鳳翔さんの腕前、間近で見たいです」

「あれ、うちはスルー？」

「あつ、いえ、そういうわけでは……」

「冗談や冗談。ま、うちそんなに料理振る舞ったりせんからなー。できるイメージ全然ないのも仕方ないわ」

からからと笑いながら、龍驤は側でまだショック状態にあった大鷹の背中をつついた。

「大鷹、あんたはどうするん？」

「ハッ——も、勿論ご一緒にします！ 少しお待ちを！」

大鷹は、自分と神鷹の箒を持って倉庫の方に駆けていく。

その背中を見送りながら、龍驤は少し呆れたような笑みを浮かべた。

「忙しいなあ、あんたの姉ちゃん」



「あはは……。でも、いつも気にかけてくれるんですよ」

「せやなあ。初めて着任した妹分だから、いろいろ気にかけてくるっちゅーもんやろ」

「私たちに妹分はいないけどね」

鳳翔の捕捉を、龍驤は「アホか」と笑い飛ばす。

「空母の艦娘は、うちからしたら皆妹分みたいなもんや」

「あら、私も？」

「鳳翔は別やな」

「……それはどう捉えれば良いのかしら」

「好きなようにどうぞ」

そんなやり取りをしているうちに、駆け足で大鷹が戻ってくる。

龍驤に先程の言葉の意味を問い詰めようとする鳳翔。

それを大鷹と神鷹が囲みながら、四人は賑々しく小料理屋へと足を向けるのだった――。

ハロウインの流儀く半端なイベントはつまらんだろ  
う（ローマ・ガングート・ネルソン・アイオワ・朝  
潮・荒潮）

毎年の秋、秋刀魚祭りで盛り上がる泊地だったが、その一方で少し  
ずつ浸透しつつあるもう一つの行事があった。

ハロウインである。

海外艦を中心に少しずつ広まっていったハロウインは、秋刀魚祭り  
ほど大々的でこそないものの、ちよつとした集まりができるくらいの  
認知度になっていた。

今年は少し本格的なイベントにしたい——そんな去年の話を現実  
のものとするため、その日、何人かの海外艦娘が集まっていた。

「話し合いの前に、一つ良いかしら」

主要メンバーが揃い、これから会議を始めようというときに、イタ  
リア艦娘のローマが手を挙げた。

「どうかしたのか、ローマ」

「ええ。ちよつと良くない話を聞いたものだから。これを見てちよう  
だい」

そう言つてローマはタブレット端末をテーブルの中央に置いた。

画面に映し出されているのはニュース記事である。

そこには「〇〇駅の惨事！ ハロウインに行われる乱痴気騒ぎ！」  
と書かれていた。

「こいつは、日本のハロウインのニュースみたいだな」

「どう思う、ガングート。日本人は、もしかしてハロウインを暴動か何  
かと勘違いしているのではないか、という懸念があるのだけど」

「大袈裟に考え過ぎだろう。この騒ぎがおかしいものだと思われてる  
からニュースになつてるんじゃないのか？」

「うーん……」

ガングートの見解にも一理あるが、それでもローマの不安は晴れな  
かった。

もし日本の艦娘たちがハロウィンについてとんでもない理解の仕方をしていた場合、イベントを開こうとしても問題が起きる可能性がある。

「それなら直接誰かに聞いてみればよからう。待っている、余が連れて来てやる」

煮え切らないローマに業を煮やしたのか、イギリス艦娘であるネルソンがすつと部屋から出て行った。

「なんだ、あいつ乗り気だな」

「ハロウィンは元々アイルランド・イギリスが本家本元だから、愛着があるんじゃないの？」

「そういうものか。私は正直馴染みが薄いから、あまりちゃんとした知識はないな。ちつこいのに『大人が子どもにお菓子を供給する日だよ』と教えられたくらいだが」

「結果のところだけ抽出して説明するとそうなるんでしょうけど、その認識はどうかしら……」

「なに、ちつこいのが真顔で冗談を言うのは私も十分理解している。そのまま真に受けているわけではないぞ」

ハツハツハと笑うガングート。

着任当初は近寄りがたい雰囲気を感じることもあったが、仲間に対しては近頃すつかり丸くなった。

そんなやり取りをしているうちに、ネルソンが「待たせたな！」と誰かを脇に抱えて戻ってきた。

「ど、どうも！ 朝潮型駆逐艦一番艦の朝潮です！」

「どうだ、真面目！ 徹の朝潮なら嘘偽りなく答えてくれるだろう」

緊張気味に挨拶する朝潮と得意げなネルソンを交互に見て、ローマは些か不安を覚えたが、話が進まなくなるのでひとまず流しておくことにした。

「——ハロウィンですか。仮装パーティをするものだど荒潮から聞いたことがあります！」

ハロウィンについて尋ねられた朝潮は、ネルソンが期待した通り嘘偽りのなさそうな回答をした。

ローマの期待に半分だけ応えたような回答である。

「……そう。やっぱりハロウィンがどういうものか、泊地全体にきちんと普及させないとダメってことね」

「うむ……。では説明を頼めるかローマ」

「え？」

いきなり話を振られて、ローマは素っ頓狂な声を上げてしまった。

「いや……。そこは本家本元のあなたが説明した方が良いんじゃないの？ そっちの国が発祥なんですよ？」

「発祥はそうかもしれないが、我が国はそこまで熱心にやってるわけではないぞ。ガイ・フォークス・ナイトの方が盛り上がっているしな」  
「えええ……」

「そんなわけで、ローマ、説明を頼むぞ」

突然梯子を外された格好になったローマは、周囲に助けを求めるような視線を投げかけた。

正直、ローマもそこまで知識に自信があるわけではない。

しかし、なんとなくこの場の空気からすると、間違いが許されなさそうな気がしてしまうのだ。

救いの手はないのかと思われたとき、一人の艦娘がおもむろに腰を上げた。

「お困りのようね、ローマ。なんならミーが説明するけど」

「ア、アイオワ……！ あなた説明できるの？」

「モチのロン！ 元祖はイギリスでも、本家は今やアメリカ！ 本家ハロウィンの担い手としてパーフェクトな説明をしてあげるわ！」

「戦闘以外で初めて頼もしいと思ったわ……。ありがとう、それじゃお願いね」

さり気なく出たローマの本音にアイオワは首を傾げそうになったが、とりあえずスルーしておくことにした。

「ハロウィンというのは、主に子どもたちが仮装をしてあちこちの家を回り『トリック・オア・トリート！』と宣言して、お菓子か悪戯の選択を迫るイベントなのよ。元々はアイルランドの方で年の移り変わりを祝うお祭りだったと聞いているわね。年の境目には死者が出

てくるから、その目を誤魔化すために仮装するようになったらしいわ」

スラスラと説明するアイオワに、その場の全員が感嘆の意を示した。

ただ一人、朝潮だけは若干腑に落ちない様子でいる。

「あの、アイオワさん。一つお聞きしても良いでしょうか？」

「なに？」

「それって、家の人からすると凄く迷惑なのではないでしょうか……？」

「なるほど、一理あるな」

朝潮の純朴な疑問にガングートが相槌を打つ。

予想外の問いかけだったのか、アイオワは少し困った顔になった。

「えーっと、それはそういうものだって決まってるから……。確か来られたら困るところは灯りを消しておけばよかったですよ？」

「回避策があるのですね。合意の上で、ということなら問題なさそうですね！」

「余からも質問を良いだろうか、アイオワ」

と、今度はネルソンが手を挙げた。

「なにかしら、ネルソン」

「提供するお菓子は提供する側が自由に選んで良いのか？」

「ブリディッシュなもの以外なら問題ないわ」

「おいなぜそこでうちの国を除外する」

「それは仕方ないでしょ……」

不服そうなネルソンに対し、ローマが心底嫌そうに言った。

この泊地でも少し前、マーマイトというイギリスにまつわる代物が悲しい事件を引き起こしている。

「……他にはないわね？」

「嗚呼、すまんアイオワ。私からも一つだけ」

と、ガングートがニヤリと悪戯っぽい笑みで問いかける。

「その悪戯ってのは、どこまでやっていいんだ？」

数日後のハロウィン当日。

泊地は、仮装をしている艦娘たちだらけになっていた。

海防艦や駆逐艦といった小さい艦娘たちは、仮装して戦艦・空母組を探し出し、トリック・オア・トリートをするようお達しがあつたのである。

魔女の格好をしてビシツと決めた朝潮は、同じ朝潮型の姉妹艦と一緒にハロウィンイベントに繰り出そうとしていた。

「それで朝潮。悪戯って、どこまでやっていいの?」

荒潮が、興味津々といった様子で尋ねた。

お菓子よりも悪戯の方をメインと捉えているのかもしれない。

そんな荒潮の質問に、朝潮はキリつとした眼差しで応える。

「艦装の使用は許可されています。実弾を使わなければある程度無茶をしても良いだろう——とのことでした!」

——後日、このイベントを主催した海外艦たちが泊地の司令部にこっぴどく叱られたの言うまでもない。

イモを焼く（風雲・リベツチオ・巻雲・マエストラーレ）

「なにか煙出てない？」

リベツチオが指し示した方向を見ると、確かにモクモクと煙が上がっている。

風雲は「んー、なんだろう」と顔をしかめた。

二人は訓練帰りで、これから間宮に行こうというところだった。正直かなり空腹だったが、万一火事だとしたら放ってはおけない。

「とりあえず見に行ってみようか」

「了解ー」

ビシツと敬礼をするリベツチオ。

彼女は訓練後でも元気だ。風雲の同期の中で、ある意味一番タフな艦娘である。

何事かと早足で駆け付けると、そこでは三人組が落ち葉を集めて焼いていた。

「なにしてんの、巻雲姉さん」

風雲は、そのうちの一人——巻雲に声をかけた。

巻雲は風雲と同じ夕雲型の艦娘である。

最近になって第二改装を終え、見た目は以前よりも少しだけ大人っぽくなった。

「あ、風雲。リベちゃんもこんには」

とは言え、中身はさほど変わっていない。

どこことなく子どもっぽい仕草で風雲たちに手を振ってくる。

「掃除をしていたら落ち葉がかなり集まったのよ。それで、せっかくだからヤキーモをしようって話になったの」

風雲の疑問に答えたのは、巻雲の隣にいたイタリアの艦娘——リベツチオの姉であるマエストラーレである。

リベツチオの同じくらいの背格好ながら、長女であるが故のしっかり者でいようとするところがあり、「イタリアの暁」と呼ばれたりする

こともある。

「ヤキーモ？ なにそれ」

「ふっふーん、リベ知らないの？ なら教えてあげる。ヤキーモって  
いうのはイモを焼くのよー！」

「イモ？ ジャガイモ？」

「そうそう」

「いえサツマイモですよ」

勘違いが蔓延する前に訂正したのは、泊地のスタッフである伊東珠子だった。

普段は教会の管理を任されているが、それ以外の泊地の雑用も引き受けてくれる年齢不詳の女性である。

「日本では秋に落ち葉を使って焼くのが一種の風物詩になっているんです」

「そうそう。それが言いたかったのよ、分かったリベ？」

「うん。分かったよー」

特にマエストラーレにツツコミを入れることなく頷くりべ。

バランスは取れているが、風雲としてはなにか据わりが悪い感じもする。

「せつかくですし、お二人も食べていきますか？」

「いえいえ、掃除手伝ったわけでもないですし、悪いですよ」

そう言って風雲は辞退しようとしたが、間髪入れずお腹の音がグウと盛大に鳴った。

「——いや、これは訓練帰りでちよつとアレなだけで」

「別に気になさらずとも良いですよ。サツマイモは十分ありますし」

「ならリベ食べたい！」

「……そ、そう。リベ、食べたいの？ 仕方ないわね。なら私も……」

「なんか二人とも、リベちゃんにペース握られてますねえ」

割と核心を突く巻雲の指摘に、風雲は何も言い返すことができな  
かった。

新聞紙の中からひよっこり顔を出したサツマイモに、四人が「おお



……」と感嘆の声を上げる。

風雲と巻雲も焼き芋の知識は持っていたが、こうして焼いて食べるのは初めての経験だった。

「これ皮剥かなくていいの？」

「はい。そのまま皮ごとガブツしちやつてください」

珠子に教えられた通り、そのまま一気にかぶりつくリベ。

口の中に熱々のサツマイモを入れて、その顔は一気に赤くなった。

「あふっ、あふっ……でも、おいひい！」

「まったく、そんな急に食べるからよ」

マエストラーレはリベツチオの様子を見て警戒したのか、少しずつ食べる作戦にしたようで、ちよつと口に入れては「はふっ」と声を上げている。

「噛んでいくうちにサツマイモの内側に溜まっていた甘味が出てくるわね。本当に美味しい」

「ん、秋の美味って感じですね。秋刀魚も良いけど、巻雲的には焼き芋とか山菜系とかも捨て難いです」

周囲には紅葉が広がっている。

元々この辺りにはなかった木で、少しずつ本土から取り寄せて植えていったものだ。

日本を忘れてしまいそうだ、という当時の提督の意見によるものらしい。

「はー。秋ですねえ」

「巻雲姉、少しおばちゃんっぽい」

「なんてこと言いやがりますか」

「大人っぽい？」

「言い換えたところで騙されませんよっ！」

頬を膨らませて機嫌を損ねたことをアピールする巻雲だったが、どうにも怖くない。

「んー、でもこういうの食べると、リベ的にはジャガイモも焼いてみたくなるなあ」

サツマイモを食べ終えてから、リベはまだ物足りないのか、お腹を

押しさえながらそんなことを言った。

「確かに、ジャガバターとか食べたくなってくるわね……」

「あら、それなら取ってきましようか」

「あるんですか、珠子さん」

風雲に向かって親指を立てると、珠子は駆け足でどこかへと去っていく。

やがて、四人が残ったサツマイモを食べながら談笑していると、なにやら大きなリュックサックを背負った珠子が戻ってきた。

「お待たせしました」

「珠子さん、そのリュックサックは？」

五人で食べる分のジャガイモの入れ物にしては、あまりに大きい。

珠子はいたずらっぽく笑うと、リュックサックからいろいろなもの取り出した。

テント。

キャンプ用のミニコンロ。

アウトドア用のチェア。

「こうして皆で外にいるのってキャンプっぽいな、と思ったら、ちょうど良いのがあったので持ってきてきちやいました」

「わー、キャンプだキャンプ！」

ノリノリでテントを張る珠子とリベツチオ。

それにつられて、他の三人も「これ必要？」と思いつつ準備を手伝うのだった。

その日の暮れ。

なかなか戻ってこない巻雲と風雲の様子を見るため、修羅場中の秋雲に断りを入れて、夕雲は寮の外に出た。

辺りが暗くなりつつある中、夕雲が見たのは、中庭に集う謎の集団だった。

駆逐艦、軽巡、重巡——他にも様々な艦種の艦娘たちが集まっている。

艦娘以外にも、泊地のスタッフたちも何人かいるようだった。

「あ、夕雲姉さん」

足元の方から声をかけられて、夕雲は視線を下げる。

そこには、お腹を抱えて倒れ込む巻雲や風雲たちの姿があった。

「巻雲さんたち、ここにいたんですか。……あの、この集まりは？」

「いや、なんか焼き芋からのキャンプごっこしてたら、皆次々と集まってきた」

「皆どんどん食べ物とかキャンプ道具とか持ち寄って来るから、際限がなくなり……」

食べ過ぎたのか、巻雲たちのお腹はやや膨れていた。

「もう。体重増えても知りませんよ？」

「あ、あううう……それは困ります」

「せっかく訓練して体重減らせたと思ったのに……不覚だったわ」

「秋のサチ……恐るべし……」

「うー、私は長女なんだから、みつともない姿を見せるわけには……」

呻く四人を尻目に、他の集まった面々はバーベキュー大会を初めて盛り上がっていた。

既にあちこちからアルコールの匂いが漂ってきている。飲み始めている艦娘もいるらしい。

「ああっ、もう食べられないはずなのに匂いのせいか食べたくなくなる……」

秋の幸は恐ろしい。

それを身をもって知ることになった風雲たちなのであった――。

心地よい香りの誘い（皐月・ゴトランド・長月）

十二月。

日本に比べると季節の移り変わりが分かり難いソロモン諸島だったが、この時期になると年末に向けて何かと慌ただしくなるため、否応なく「十二月になった」ということを皆が感じることになる。

所謂、年末進行というやつだった。

「あー……」

「うう……」

「眠い……」

その日、間宮食堂は疲労のこもった声で埋め尽くされていた。

軽巡洋艦や駆逐艦娘たちは、船団護衛依頼が急増して休みが激減している。

他の艦娘たちも、泊地内の雑務や深海棲艦との戦いが忙しく、休めない者が増えてきていた。

「皆相当疲れてるな……」

ラーメンをすすりながら、泊地のスタッフである板部は周囲の惨状に頭を抱えた。

「板部先生は割と平気そうだね？」

正面でハンバーガーを頬張りながら皐月が感心したように言った。彼女も普段と比べると元気がない。バーガーを食べるスピードも半分くらいになっている。

「慣れただけだ。慣れん方が良いぞ。残業時間をカウントするのがアホらしくなるくらいになったら、仮病でも何でも使って休みを取るべき。そういうことを学べる職場にいたことがあるだけだ」

「ああ、ブラック企業ってやつだね……」

「ここは全然マシな方だが、深海棲艦が元気になってくるとどうしようもないのが辛いところだな」

放置しておけば、近隣の生活どころか自分たちの生活も脅かされることになる。

対処するため動かざるを得ないのだ。こればかりは調整のしょう

もないので、どうにもならない。

「疲労を減らせないなら、減った分だけ回復させていくというのはどう？」

隣にいたゴトランドが、得意げに指を立てて提案してきた。

最近着任したスウエーデンの艦娘である。

「回復って言ってもな……どうするんだ。温泉なんて用意できないだろうし、マツサージチェアは数揃えられないだろうから争奪戦になるぞ。エナジードリンクも頼り過ぎは厳禁だ。飲み過ぎは却って良くない」

「なんだか苦い経験があるみたいね……」

真に迫る板部の言葉に、ゴトランドと皐月は乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

「そうじゃなくって。アロマよアロマ」

「アロマ？ アロマセラピーってやつ？」

「そう、それよ皐月！」

そう言つてゴトランドは卓の上に小瓶を取り出した。

そこからは、ほのかに良い香りが漂ってくる。

「わあ、良い香りだね」

「おっふう……なんだこの感覚。俺の人生には無縁だと思つていた何かが鼻腔から入り込んでくる……」

「反応が怖いわよ板部先生」

「ほっとけ」

慣れない感覚に変な声を上げてしまった板部だったが、咳払いをして居住まいを正すと、小瓶を改めて手に取つてみた。

「だが、なるほど。こいつは良いかもしれんな。アロマって植物から作れるんだろう？」

「そうよ。最近興味があつていろいろと調べてるの。この泊地はいろんなもの育ててるし、周囲にも自然に育つてるのが沢山あるからいろんなアロマが作れると思う」

「そこまで金かかるわけでもないし、ある程度量産もできる——つてことなら司令部の許可も下りるかもしれないな。効果のほどは正直

まだ分からんが、今の感じだと決して馬鹿にはできないんじゃないかって思うぞ」

「身体的な疲労もそうだけど、ストレスにも効くらしいのよ。仕事で忙しいときとか、結構良いんじゃない？」

そう言つて、ゴトランドは小瓶を板部の鼻先に近づけた。

「あふうん」

「……板部先生」

「そんな目で見えるな臯月よ。大人は、いつだって疲れてるんだ。癒されることに慣れていないだけなんだぞ」

若干気色悪そうな視線を向けてくる臯月に、板部は精一杯取り繕つて答えるのだった。

ゴトランドの申請は司令部にも受け入れられ、少しずつS泊地の各所でアロマオイルが置かれるようになっていった。

ほのかに漂う良い香りのおかげで、泊地の雰囲気は大分柔らかいものになった。

「おや、板部先生ではないか。ごきげんよう」

「お、板部先生だ」

書類を抱えて泊地内の廊下を歩いていた板部は、臯月と長月と出くわした。

「おう、二人とも元気そうだな。……というかごきげんようって、どうしたんだ長月。そういうキャラだったか？」

「なんだ、そんなにおかしいか？」

「そういう挨拶は、なんというか……ほら、暁とか熊野がやりそうなやつだろ」

「……」

先程の自分の立ち振る舞いを振り返ったのか、長月はやや神妙な面持ちになった。

「アロマの影響かもね。長月に限った話じゃなくて、どこかしら皆なんか上品になってきてる気がする」

「匂いでそこまで変わるか？」

「そういう板部先生だって、ほら」

と、皐月は板部の顔を指差した。

「普段は多少なりとも無精髭あるのに、今日はつんつるてんじゃん」

「んん……？　はっ。言われてみればー！」

自分の顎に触れてみて、いつもと違う感覚に気づいた板部は、さっきの長月と同じように神妙な面持ちになった。

「油断するとキャラがぶれるとは……恐ろしいな、アロマ」

「ああ。下手すると皆のキャラが変わって、この泊地がお嬢様学校みたいになつてしまうかもしれない……」

「いやいやいや」

それはないでしょ、と手を振る皐月の言葉は届いてないのか、板部と長月は揃って深刻そうな顔でわなわなと震える。

「あ、三人ともどうしたの？」

そこに、何かトレイのようなものを抱えたゴトランドがやって来た。

「やあ、ゴトランド。アロマのおかげで、最近はずつきり眠れるようになったよ」

「あらそう。それは良かったわ！　そうそう、今新しいのをいくつか試作してみたんだけど……」

ゴトランドの持っていたトレイの中には、いくつかの小瓶が入っていた。

それを目にした板部と長月はゴクリと息を呑む。

「こ、これは嗅いでも大丈夫なやつか……？」

「え？　ええ。もちろん大丈夫よ。変なのは入れてないから」

「では、失礼して……」

小瓶の一つを手には、長月はゆっくりと香りを堪能する。

「どうだ、長月……？」

「ああ。これは——良いものだな」

そう言っつて小瓶を元の位置に戻すと、長月は側に腰を下ろしてゆっくりと頭を垂れる。

「……………え？　長月……」

「どうしたのかしら、長月」

心配そうに長月の様子を窺う二人に、皐月が肩を竦めた。

「多分寝たんだと思うよ」

「え、どこで？」

「気持ち良過ぎて、眠りに誘われた——つてところかもね」

確かに、長月は小さく寝息を立てていた。

「かなり疲れてたってことか。さつき様子がおかしかったのも、そのせいだったのかね」

「かもね。長月つてば、あんまり疲れてても表に出そうとしないところあるから。もつと甘えても良いのに」

よっこらせ、と長月を背負いながら皐月が言う。

普段の言動は子どもっぽいところがあるものの、こういうところは姉なのだった。

「それじゃねー」

「おう。皐月も無理はするなよ」

長月を背負った皐月を見送ると、板部はちらりとゴトランドの持っている小瓶を見た。

「ゴトランド。俺も一つ良いか？」

「ええ、どうぞ」

板部も最近は寝不足で悩まされていた。

寝ようとしても寝付けない。そういう夜が多くなった。脳が休んでくれないのである。

「んじゃ、失礼して……」

適当に一つ手にして匂いを嗅ぐ。

すると、とても晴れ晴れとした爽やかな気持ちになり——目が冴えてくるのを感じた。

「……あれ。これなんだ。眠くならないぞ」

「あ、うん。それはさつき長月が嗅いだのと違って、眠気に負けないようにするとき用のだから」

「——あ、そうなの」

結局、板部が眠れたのはそれから二十時間後のことだったという。



## 戦場と日常の喧騒（福江・ガングート・占守）

二〇一九年、元旦。

S泊地は、いつになく騒々しい正月を迎えることになった。

「怪我人は医務室へ！ 艦装を自分でメンテできない子は所属と所有者名を明記したうえで工廠に預けてくださいーい！」

「手が空いてる人は手を貸してください！ 司令部に行つて、人手が足りてないところを確認して行動するようお願いします！」

「無理はするなよー！ 余裕がない奴は大人しく休んどけ！ これ以上倒れられたら却つて迷惑だからなー！」

あちこちで指示を出す声が飛び交っている。

昨年の一二月半ばを過ぎた頃、パプアニューギニア・ソロモン諸島等を含む近隣一带に、深海棲艦の軍勢が押し寄せてきた。

この動きを察した大本営は急遽応援を送り込み、現地のメンバーと共同で防衛戦を実施。

敵軍の総指揮官と思しき個体を撃破したのは、つい昨晚のことだった。

それから数時間しか経っていない。

時刻は零時を回り、年も変わっていたが、ブイン・ショートランドはまだ戦後の喧騒の中にあつた。

「せっかくの年越しだっていうのに、なんだか随分と落ち着きのない感じになつたな」

周囲の様子を見渡して、海防艦・福江はどことなく残念そうに言った。

頼まれていた仕事が一段落ついて、小休止しているところである。

今回彼女に出撃の機会はなかったが、本拠地の目と鼻の先まで敵が迫っていただけに、とても忙しい日々を送っていた。

彼女に限らず、ブイン・ショートランドの艦娘は気の休まる暇もなかった。少し離れたところから援軍にかけていたラバウルも同様だろう。

「だが、年が変わる前にケリがついたんだ。上々と言っていいだろう」

「ん、ガングート。それにしむしゆしゆか」

ガングートと占守。二人は北方に縁を持つ艦娘だ。

戦艦と海防艦というあまり接点のなさそうな艦種だが、時折一緒に行動していることがある。

「その呼び方意地でも貫き通すつもりやしゆね……」

しむしゆしゆしゆという長い呼び名に、占守は辟易したような反応を示す。

もつとも、福江には占守がなぜそんな反応をするのかよく分かっていなかった。

「タシユケントが地味に怯えてたぞ。『あたしもいつかタシユシユシユとか呼ばれないかな』と」

「駄目なのか？」

「いや。今度呼んでやれ。そして反応を教えてください」

悪戯っぽく笑いながらガングートが福江の頭をポンポンと叩いた。

「二人も休みか」

「そうっす。やつと一息つけるっしゆよー」

「まだ騒がしいが、少しずつ騒がしさの中から緊張感が消えつつある。殺気立ったまま年を越さずに済むだけありがたいと思うべきなんだろうな」

「上層部はまだ大変そうみたいっすけどね」

現在、ブイン・ショートランドの司令部には増援に來た各拠点の首脳陣が詰めている。

戦いは終わったが、彼らの仕事はまだ山のように残っているはずだった。

「戦後処理がこれから始まるわけだしな……。パパアニューギニアもソロモン諸島も、普段通りの生活に戻るまでには時間かかるんだろうか」

「いや、そうでもないんじゃないか。どっちも深海棲艦に攻め込まれるのは初めてではないだろうし、備えもしてあったと聞いているぞ」「人間とは逞しいものなんだな……」

ショートランド泊地にもソロモン諸島から避難してきた人々が滞

在しているが、彼らの表情はさほど暗いものではなかった。

「ま、こういう場所だからな。日常と戦場は紙一重。常在戦場かつ常在日常の精神でやっていくだけだ。だから、あまり心配はいらんだろう」

ガングートは「ちよいと失礼」と電子タバコを取り出して吸い始めた。

戦場にあるときは鬼神の如き様相を見せるが、今の彼女の姿は日常の中のそれである。

「あ、そうだ。福江、さつきあつちで鳳翔さんが年越しそば配ってたすよ。一緒に貰いに行くっしゅー!」

「年越しそば? そんな場合なのか?」

「良いんじゃないか。とどころで食べてる奴の姿見るし」

ガングートの言う通り、状況が落ち着いてきたからか、年越しそばらしきものを食べている人の姿が見える。

似たような姿の艦娘たちが集まって食べているのも見えた。基本的に一つの拠点に同じ艦娘は所属できないので、珍しい光景と言える。複数の拠点の艦娘が集まっているからこそ見られるものだった。

「ある意味、例年以上に盛り上がる良い年越しとも言えそうだな。今年はソロモン諸島各地に拠点を分散させたのもあって、少し寂しい年越しになるかも、と思ったが」

「なるほど。そういう捉え方もあるのか」

「ああ。……あ、年越しそば貰うなら私の分も頼むぞ」

「えー、自分で取りに行くっしゅよー」

「老骨はいたわれ、若人。ほれ、小遣いやるから」

「ここは買収されておくっしゅ」

「変わり身早いな!」

思わずツッコんでから、福江は思わず笑ってしまった。

ガングートの言う通り、なんだかすっかり日常が帰ってきたような気がしたのだ。

「よーし、福江隊員。行くっすよー。クナたちも見つけ次第仲間に加えるっしゅー!」

「はいはい。その方があたしも楽になるだろうからな」

二人は配給エリアに駆けていく。

殺伐としていたざわつきは、少しずつ祭りの喧騒へと変わりつつあった。

各地の艦娘や人々が集まり、戦勝と互いの無事を祝し合う。

その様子を眺めながら、ガングートは隠し持っていたウオツカを煽った。

「——ああ。こういう年越しも、悪くはないな」

## はじめてのオフ会（浜波・藤波・早波）

オンラインとオフライン。

それは表裏一体の関係性にある。

オンラインの世界では、普段と違うキャラクターになることができる。

年齢。性別。性格。様々な別側面の自分をさらけ出せる場。それがオンラインである。

しかし、そこにいるのは紛れもなくオフラインに存在する人間だった。

それが問題になることは、通常ほとんどない。当人が、オン・オフの切り替えさえできていれば良い話だからだ。

ただ、極一部で問題になるケースもある。

「ど、どどど……どうしよう……」

か細い声で頭を抱えながらベッドの上で何度も寝返りをうつ艦娘が一人。

夕雲型駆逐艦の一人、浜波だった。

「普段こんнадし、会って話せるか不安だし、もうこのままボーイコットした方が良くもしいれない……でもそうしたらオンでも……あうううう」

「あー、もう浜ちゃんさつきからうるっさあいッ！」

懊悩する浜波に堪りかねたのか、同室の藤波がとうとう抗議の叫びを発した。

姉妹の叫びに驚いた浜波は、びくつと身体を硬直させて恐る恐る藤波の顔を窺う。

「ご、ごめん。うるさかった……?」

「ポリュームは低かったけど延々とノイズが走り続けるような感じだったよー！」

「隣の部屋の会話が聞こえるか聞こえないかくらいのポリュームでずっと聞こえてくるような感じだったよー」

藤波と一緒にあって答えたのは、先日着任したばかりの夕雲型・早

波だった。

藤波とは双子のような関係性ということもあつてか、何かと藤波にべつたりな子である。

今も、泊地にある学び舎での勉強について、藤波にあれこれと聞いていたところなのだった。

「で、何をそんなに悩んでたの？」

「そ、その……今度、オフ会、することになって……」

「乙改？」

「来るといいねー。って違う！」

早波のボケにツツコミを入れてから、藤波は大きいため息をついた。

「そういえばこの前言ってたね。浜ちゃんがやってるゲームで知り合った人たちと会うって」

「うん……」

「その何が問題なの？」

「げ、ゲーム中とリアルだと、あたし、全然キャラが違うから……ど、どうしようって」

オドオドする浜波を見て、早波は首を傾げた。

ゲーム中の浜波というのを見たことがないので、どう違うのかが想像つかないのである。

「あー。早ちゃん。良いものを見せてあげよう」

そう言って藤波はスマホを取り出し、泊地のポータルサイトを開いてみせた。

泊地のイントラネット上にある様々なページに繋がるポータルサイトである。

藤波はゲームカテゴリを選択し、ゲーム同好会なるページを開いた。

そこには、泊地内で行われたゲーム同好会の活動内容が記録されていた。

プレイ動画もいくつか公開されている。そのうちの一つを藤波は再生した。

戦略シミュレーションゲームの実況動画である。

実況と言っても生声ではなく、加工されたものだ。

ゲーム同好会は皆ハンドルネームを用いて覆面で活動をしている。

『いや、織田を選んでおいてその体たらくはないでしょー!』

『仕方ないだろ、武田の勢力拡大が早過ぎるんだよ。今作ちよつと轟  
肩され過ぎだろ』

『東国は仲良く潰し合っってくださいねー。こっちはのんびり大友い  
ただきます』

『島津とかいう安牌を選んだのが何か言ってますよ』

『誰か四国に触れてくれない? もうすぐ河野家が統一するんだけど  
!』

『もうすぐ毛利食べ終わるから待ってて』

『来るな! 北九州なり畿内なり行つてろ! あ、南九州はこっちが  
貰うので手を出さないでくださいな』

『あらあら。奥州忘れないでね?』

実況はかなり盛り上がっているようだった。割とトークは殴り合  
い気味である。

意外と人気もあるようで、結構な再生数を叩きだしている。

「ちなみに今のメンバーの中に浜ちゃんがいます」

「え、全然分かんなかったよ……」

「まあ、それくらいオンとオフでキャラ違うんだよね。浜ちゃん」

肝心の浜波はというと、自分が参加している実況動画を目の前で再  
生されたことにより、顔が真っ赤になっていた。

「これまで、ゲーム同好会の人たちと会ったことってないの?」

「全員この泊地の誰かだろうから、顔を合わせたことはあるかもしれ  
ない。でも、ゲーム同好会として会うのは——」

「こ、今回が……はじめて……。誰が誰か、全然分かんなくて」

それは難儀しそうだ、と早波は問題の重さをようやく理解した。

「ゲームやってるときと同じノリで行けば良いってことはないの?」

「意識して切り替えられるわけじゃなくて……いつの間になつてると  
いうか。コントローラー持ってたとか、キーボード打つてるとき

「はちよつと勇氣出る、けど」

「ならそういうの持っていこうよ」

「不審者だよ、それ」

常にゲームコントローラーやキーボードを手にしながら行動する妹を想像して、藤波は待ったをかけた。

泊地内で行われるオフ会だから、見知らぬ他人に不審がられる心配はない。

その代わり、泊地内で一気に妙な噂が飛び交うことになりかねない。

それはある意味、見知らぬ誰かに奇異の目で見られる以上の危険を孕んでいる。

「す、スマホとかなら不自然じゃなくない……？」

「わざわざオフで集まらずとスマホ見てるってどうかと思うけど」

藤波の指摘に浜波は「うぐっ」と胸を押さえた。

きちんと対面してトークをする。そのことを想像して、より気が重くなつたらしい。

「あ、それならあたしとお姉ちゃんがこっそりついていくよ」

「えっ？」

「で、何かあればフォローするから」

「え、いや、早ちゃん？」

「ほ、本当……？ あ、ありがと、はーちゃん！」

いや私はまだ行くとは言っていない——と言いたげな藤波の意向はスルーされたまま、なぜか当日藤波と早波もついていくという流れが出来上がりつつあった。

浜波が一気に表情を明るくしたのを見ると、藤波としても「いや行かないけど？」とは言い難い。

「どーんと任せておいて！ ね、お姉ちゃん！」

「う、うん……」

早波に問われた藤波は、曖昧な返事をするしかないのだった。



かくしてオフ会当日。

藤波と早波は、浜波に先駆けてオフ会の集合場所である中庭付近にやって来ていた。

「誰が来るんだろうね。あたしもまだ会ってない人多いから、どんな人が来るか興味あるなあ」

「……」

楽しい早波とは対照的に、藤波は早くも表情を引き締めていた。

なぜなら、待ち合わせ場所と思われる一角にいたのは、藤波が日頃から世話になっている重巡洋艦・鳥海だったからである。

確かに鳥海の部屋にはゲーム機があった。だが、なんとなく藤波はそれが同室の摩耶のものだと思い込んでいた。

「……考えてみればゲーム実況って、ゲームプレイしながらトークもするわけだし、結構頭の回転早くないといけないよね。そういう意味じゃ鳥海さんは意外とピツタリというか……」

「あ、お姉ちゃん。また誰か来たよ」

「……な、なにイツ!？」

次いでそこに現れたのはアークロイヤルだった。

英国が誇る空母の艦娘である。普段あまり接する機会はないが、ゲームを嗜んでいそうなイメージはあまりなかった。

「い、意外な大物が続くなあ。浜ちゃん大丈夫かな」

「あ、能代さんも来た」

「直属の上官来ちゃった——!」

軽巡洋艦・能代。

藤波や浜波たちが第二水雷戦隊に所属していたときの旗艦で、ある意味一番頭が上がらない人でもある。

更に何人かの艦娘たちが集まってきたが、いずれも軽巡以上のメンバーばかりで、駆逐艦や海防艦といった浜波と同クラスの艦娘は一向に現れない。

「まずい。これじゃ浜ちゃん確実に委縮する……!　っていうか私も正直あのメンバー相手じゃどう立ち回れば良いか分からない!」

「あ、お姉ちゃん。あそこ」

早波が指し示した先には、木陰に隠れてゲーム同好会の面々を窺う浜波の姿があった。

完全に出るタイミングを失った顔をしている。

「くっ……自爆覚悟で助っ人に行かなきゃダメか……!?!」

藤波が覚悟を決めようとしたそのとき、ある人物が背中から激突し、浜波は身体を大きく前に突き飛ばされる格好になった。

「ごめーん！ スロウリイになると思ってたスピード出し過ぎたー！」

そう言っただけで浜波を助け起こしたのは駆逐艦・島風だった。

ゲーム同好会の視線は、派手に現れた島風と、彼女に支えられて起き上がった浜波に集まっている。

「そんなわけでハンドルネーム・グッドスピード見参です！ 多分こっちはハヌマーンだよね！」

「え、え、あ、うん……」

「遠征長引いて遅れるところだったんだよ。提督にも困ったものだよねー」

浜波をナチュラルに牽引しながらゲーム同好会の輪に入っていく島風。

艦艇時代に縁があったこともあり、浜波も島風相手なら比較的抵抗なく話げできた。

「あ、あの、しまちゃん。ありがとう」

「え？ 何か御礼言われるようなことした？ あ、この前のあれ？」

ゲーム同好会のメンバーたちと、先日行われた実況のときの話で盛り上がり始める。

最初は島風に相槌を打つばかりだった浜波も、他のメンバーに話しかけられて、少しずつ自分からトークを展開していくようになった。

「……どうやらあたしたちの出番はなさそうだねえ」

「島風に感謝だね」

待ち合わせ場所から離れていく一行を見送りながら、藤波は少しだけ寂しそうな表情を浮かべた。

浜波が、夕雲型以外の集団の中で楽しそうにしているからかもしれない。

そういう姿は、これまであまり見たことがなかった。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「——いや、なんでもない。よーし、それじゃ私たちもどこか遊びに行こうか。せっかくのオフなんだし」

「わ、やったあ！」

嬉しそうな声を上げる早波に笑みを向けながら、藤波はその場を後にしたのだった。

S泊地企画会議の風景（叢雲・木曾・加賀・瑞鳳・捉  
捉・伊8・速吸）

S泊地の司令部室。

そこは、提督を支える司令部の面々が日頃の業務をこなすために設けられた一室である。

重要な案件は提督まで持ち込まれることが多いが、日々の雑務については大抵こちらで片付けられる。

司令部は各艦種から代表者として選ばれた艦娘たちで構成されている。

司令部室には彼女たちの業務用デスクと、来客対応のエリア、そしてミーティング用のエリアがあった。

「それでは、本日の定例会議を始めたいと思います。今日の司会は私、捉捉が務めます！ 議事録は瑞鳳さんです！」

「はい。クロストークは控えてね、まとめるの大変だから」

現在、ミーティングエリアには司令部のメンバーが集まっていた。

週に一度行われる定例会のためである。この定例会では、司会・議事録担当は毎回交替で行われていた。

「捉捉ちゃん。古鷹さんと長門さんは？」

尋ねたのは特殊艦から選出された速吸だった。

流れるような動きで各メンバーにお茶を配っている。

メンバーごとの好みに合わせて茶種や熱さが調整されており、司令部のミーティングに欠かせないと言われていた。

「お二人は別件で不在です。報告書については預かってますので、私の方で代読しますね」

「毎度思うけど、捉捉はしっかりしてるわねえ」

速吸から貰ったお茶をすすりながら、駆逐艦・叢雲は感心したように言った。

艦種別に集まっているため、司令部の中では海防艦の捉捉に次いで小柄なのだが、妙に貫禄が漂っている。

「司令部に誘って正解だったろう?」

「そうね。木曾の審美眼は確かだったわ」

海防艦が増え始めた頃、誰を司令部のメンバーにするかが議題として持ち上がったことがあった。

司令部メンバーの選定基準はあまりハッキリしていない。

これだと思ふ人材がいれば直接声をかけることもあるし、艦種ごとに選挙形式で選んだこともあった。

択捉の場合、木曾の推挙でメンバー入りが決まったという経緯がある。

「お二人とも、雑談は後でお願いします」

「お、おう」

「了解了解」

ビシツと択捉に注意されて、木曾と叢雲は笑みを浮かべながらも口を閉じた。

択捉の司会のもと、会議は滞りなく進んでいく。

毎週同じメンバーで開かれている会議だけあって、全員どう進めれば良いかは心得ている。

議題は広範に渡るものの、各メンバーともに泊地運営経験が長いので、大抵のことは過去のケースを元に手早く対応できた。

「――では、次に泊地内からの要望についてですが、同じような要望が何件か来ていますので、そちらを取り上げたいと思います」

「お、珍しいな。同じような要望?」

木曾に対して頷くと、択捉はホワイトボードに大きく「せつ分」と議題を記した。

「当泊地では毎年節分の時期に豆まき対抗戦を実施していますが、その内容について見直して欲しいという意見が届いています」

「あら。毎年盛り上がっていると思っていたのだけど」

不思議そうに首をかしげたのは、正規空母から選出された加賀だった。

「確かに盛り上がってはいました。ただ、今回寄せられた要望では『そろそろマンネリ』『飽きてきた』との声が……」

「まあ、もう五回やってるわけですしね。最初期からいるメンバーからは、そういう意見があっても不思議ではないです」

そうコメントしたのは潜水艦・伊8である。

「伝統行事みたいなものだし、こういうのは続けていくことに意味があるんじゃないかしら」

「叢雲、それはちよつと考え方が硬いぞ。伝統つてのも少しずつ時代に即して在り様は変わっていくもんだ」

「木曾さんの言うことも一理あります。そもそも、節分自体は伝統行事ですが、豆まき対抗戦は別に伝統行事でもないですし」

木曾と伊8の指摘に、叢雲も「ううむ」と頷かざるを得なかった。

「そういうのとは別の観点でも『変えて欲しい』という意見が届いてますね」

「どういう意見ですか?」

「主に人間のスタッフさんからのご意見です。『危ないから勘弁してくれ』と」

「あー……」

速吸をはじめとして、その場にいた全員が消極的な賛同の意を示した。

「豆まき対抗戦は、鬼役を決めて鬼に対して艦娘が豆を投げる催しである。」

艦娘は普通の人間よりも数段高い身体能力を有しているので、彼女たちが全力で豆を投げ合うと、それなりに危険なのだった。

過去には流れ弾を受けて軽傷を負ったスタッフもいるくらいである。

「今までもそれとなくそういう気配はあったけど」

「泊地の規模拡大でスタッフさんも増えましたからね。そういう声がハッキリ出てくるようになった、と」

「さすがに見直さざるを得ないようね」

とは言え、どう見直すかが問題だった。

現状の豆まき対抗戦は、艦種による有利不利があまり出ないようそれなりに考えて取り決めた内容になっている。

これに替わるものを考えるのは、結構な難問だった。

「専用のバトルフィールドを用意してそつちでやるとか……」

「それ、多分大淀に却下されると思うなあ」

木曾の案を、瑞鳳がやんわりと抑えた。

大淀は軽巡ではなく特別枠として司令部に席を置いている。

今回は休暇ということと不在だったが、もしこの場にいたら「そんな予算ありませんよ」と一蹴していたことだろう。

泊地の金庫番は鬼より厳しいのである。

「そもそも対抗戦なんてやらなくても良いのでは？」

伊8が物憂げに言った。

実際、そう考えて参加を辞退する艦娘も一定数存在する。

「うーん。しかし毎年楽しみにしてる連中もそれなりの数いるからな」

「自由参加形式で、何かしらは残していきたいところではあるわね」

木曾と加賀が行事存続に賛意を示すと、他のメンバーもそれに頷いた。

積極的に廃止したがっている者はいないらしい。伊8も「それなら考えましょう」と頷いた。

「――閃きました」

全員でうんうん唸ること数分。

静かに手を挙げたのは加賀だった。

「豆に拘るからいけないのです。節分に食べるものはいろいろあります」

「ふむふむ」

「なので、毎年異なる食べ物を一つ選び、これの大食い競争を実施すれば――！」

「却下」

グツと拳を振り上げて力説する加賀の提案を、叢雲は問答無用で切り捨てた。

「……なぜ？」

「大食い競争なんてことになったら作る量えらいことになるでしょ。」

予算もかさむし」

「艦種別の有利不利も出ますね。戦艦や空母が有利になってしまいます」

叢雲と速吸の指摘に、加賀は「くっ……！」と悔しげな表情を浮かべながらも引き下がった。

「まあ、豆にこだわらないってのは良いかもな」

「何か思いついたんですか、木曾さん」

「ああ。択捉、こいつは単純な話だ。豆以外を使えば良い。例えば逃げる鬼を捕まえて、恵方巻を無理矢理口に突っ込むとか——」

「絵面が危険よう」

「窒息の可能性もあるので駄目です」

木曾の思い付きは瑞鳳と伊8によつて即座に却下された。

木曾は「何がそんなに駄目なんだ……!?!」とシヨックを受けていたが、他のメンバーの賛同を得られないことに気づくと、渋々案を引っ込める。

「そうだ。あれなんかどうかしら。豆を一つずつ箸で搦んで隣の器に移していくやつ。あれで制限時間以内に一番多く移せた人の勝ちってやつ。安全だし費用もかからないし艦種による有利不利もないしで、条件クリアしてると思わない?」

叢雲のアイディアに、司令部一同はしばし沈黙した。

確かにこれまで問題とされていた事柄はクリアされている。

しかし。

しかし、である。

「地味過ぎるだろ」

「見てる方は飽きそうです」

「それ、盛り上がる?」

「行事としては華に欠けますね」

「視聴率取れなさそうですね」

それは、皆で盛り上がるためのイベントとしてあまりに致命的だった。

「な、なによ。というか視聴率は関係ないでしょ!?!」



「む、叢雲さん……。わ、私は良いと思います……。よ……。？」  
「……」

択捉のフォローが却って叢雲の心を抉り取り、彼女は静かに机へと倒れ伏した。

「……やや強引ですが、豆と豆知識をかけてクイズ大会をする、とか」と、そこで伊8がやや控えめに案を出した。

確かに節分と直接は関係ない。しかし、元々やっていた豆まき対抗戦も、節分と直接関係している催しではない。豆・鬼という要素を利用しただけだ。

そういう意味では、豆知識合戦というのはそこまで無理のある案ではない。

「雑学系にすれば、比較的誰でも楽しめそうだし、少しルールを工夫すればいけそうか」

「そうですね。私としては異論ありません」

木曾や加賀が賛意を示すと、他のメンバーも頷いていく。

ただ一人、速吸だけは悩んでいるようだった。

「あの、それ、問題はどうかやって用意するんです？」

「……そこは、ほら、教員として頑張ってる香取・鹿島に頼むとか」

泊地には、艦娘や泊地近辺に暮らす人々が通う学び舎がある。

香取や鹿島はそこで教員として活躍しているのだった。問題作成はお手の物のはずである。

しかし、速吸は力強く頭を振った。

「それは無理です。香取さんたちは学び舎の方で手一杯ですし……」

「全然余裕なさそうな感じ？」

「最近の翼が得られるドリンクを箱買いしてるくらい忙しいみたいですよ」

「お、おお……」

言われてみれば、と司令部の面々は香取たちの顔を思い浮かべた。

最近の彼女たちは、確かにいつも疲れたような表情だったような気がしてくる。

「今度有休を使うよう促しておいて」

「分かりました、叢雲さん」

思いがけず出てきた課題を片付けつつ、一同はカレンダーを見る。  
節分までもうあまり日がない。

「……我々で用意するのかなさそうですね」

「問題作成って他人が思うよりずっと難しいっていうけど」

「それでもやるしかないでしょう——」

諦観。そして、その後に来る静かな熱意。

司令部は、今、密かに燃え上がりつつあった——。

「本州へ行きたいかーッ！」

「おーッ！」

節分の日。

豆知識合戦の会場は、新たな試みに盛り上がる艦娘たちの熱気に包まれていた。

その裏側で静かに燃え尽きている面々がいることを、大半の人々は知らない。

狐日和（風雲・峯雲・ジョンストン・日進・早波）

その日、夕雲型駆逐艦の風雲は新人研修を行っていた。

S泊地もなんだかんだで最前線の拠点である。

訓練を怠れば深海棲艦との戦いで沈みかねない。

そのため、新人たちは教官役を務める艦娘の下、厳しい基礎訓練を積むことになるのだった。

「はい、今日はここまで。お疲れ様！」

風雲の宣言と同時に、峯雲たち新人は一斉に倒れ込んだ。

もつとも、伏したままではなく、すぐに上体は起こしている。

体力はそれなりについてきているようだった。

「風雲も訓練厳しいわね……もつと手加減してくれても良いじゃない」

「それじゃ訓練にならないでしょ、ジョンストン。まだ余裕あるなら追加コースいっとく？」

「ジョンちゃん、風雲お姉ちゃんにはあれこれ言わない方が効果的だよ」

うへえ、と嫌そうな反応を示すジョンストンに、横から早波がこつそりとアドバイスをした。

もつとも、風雲にも聞こえている辺り、ほとんどこつそりの意味がない。

一方、峯雲は若干俯きがちだった。

溜息をつきながら地面に何かよく分からないものを描いている。

「……どうしたの、峯雲」

「そつとしておいてください、風雲さん。私は今落ち込んでいます。全然戦果があげられないのです……」

「全体の動きを見る限り、特別悪いようには見えなかったけど。峯雲はどちらかというアシストの動き方だから、自分でも出来てるかどうか分かり難いだけじゃない？」

「だと良いのですが……」

はあ、と重ねて息を吐く。

おっとりした性格であまり戦を好む性質ではない。

だからか、峯雲は戦闘訓練において自己評価が低くなりがちな傾向があった。

どうしたものかと風雲が頭をかいていると、側にいた最後の新人――日進が「おい」と水平線の彼方を指差した。

「なんかおるぞ。あれ誰じゃ?」

「ん、どこ?」

「あー、なにかいるわね」

早波、ジョンストンが手で双眼鏡を形作り遠方を見やる。

それでよく見えるとも思えないのだが、風雲もつられてそちらを注視してみた。

小舟が一隻。

大海を渡るにはあまりに頼りなさそうな船が、こちらに向かってゆっくりと進んでくる。

そのちっぽけな乗り物は、乗り手のオールが動力源らしかった。

乗っているのは、小柄な少女である。

「……艦娘かなにか?」

「でも見たことないタイプだね」

「けったいじじゃのお」

「……」

いじいじしていた峯雲も皆の声になったのか、面を上げる。

見えたのは、駆逐艦と軽巡の間くらいの背格好の少女だった。

少女の漕ぐ船は、特に何事もなく泊地近くの浜辺に辿り着いた。

整った顔立ちではあるが、日本人のようにも西洋人のようにも見える不思議が雰囲気少女だった。

「こんにちは。貴方たちこの艦娘?」

「え、ええ。そうです」

謎めいた少女に声をかけられて、風雲はやや困惑気味に答えた。

少女はにこやかな笑みを浮かべると、さっと風雲の手を取って握手をしてきた。

「私はフォックス。艦娘たちにインタビューしながら各地を巡ってい

るフリージャーナリストよ」

フリージャーナリスト。

テレビ等でたまに見かける肩書きの持ち主を前に、風雲や峯雲たちは「おお〜」と謎の関心を示した。

「い、インタビューっていうと?」

「艦娘たちの生活の実態を知りたいのよ。それをきちんと世の中に広めて、人間と艦娘の相互理解を深めさせたい。それが私の野望というわけ」

それで、とフォックスは風雲に顔を近づけた。

息がかかるほどの至近距離である。風雲は咄嗟のことに思考が固まってしまった。

「是非、貴方にインタビューしてみたいのだけど。今お時間良いかしら?」

一応司令部に連絡したところ、機密情報出さないなら問題からよろしく——と体よく来客対応を押し付けられてしまった。

そんなわけで、風雲は新人たちと共に急な来客フォックスの相手をするはめになっている。

フォックスは拠点の特徴も知りたいらしく、各所を案内しながらインタビューを受けることになった。

「えーと、ここが工廠ですね。中に入れることはできませんが、私たちの艦装はここで開発やメンテしてます」

「そこそこの大きさね。そういえば他のところでも風雲の子には会ったけど、貴方の艦装はなんだか少し違う?」

「ああ、先日第二改装を済ませたので。その影響かもしれないね」

艦娘個々の特性を前面に押し出す第二改装。

風雲はつい先日、それを終えたばかりである。

新人たちの教官役に立候補したのも、自分自身を鍛え直して新しい艦装に馴染ませたかったという理由があったのだった。

「優秀なのね」

「どちらかというと地味な方でしたよ。同期は江風とか照月とか、い

ろいろ個性的なのがいたので……」

「もしかして、風雲さんも私と同じような感じだったんですか？」

「どこことなく嬉しそうに語りかけてきたのは峯雲だった。」

風雲は当時を振り返り、その頃の自分と今の峯雲を様々な角度から比較してみた。

アシスト役という点は似ている。

ただ、風雲がよくアシストしていたのは突っ込みたがりの江風だ。

必然、風雲も前の方にガンガン出ていく形になる。峯雲にそういう芸当は難しい気がした。

一方、峯雲のように細やかなアシストは、少なくとも当時の風雲にはまるでできていなかった。

「……まあ、似ている部分もなくはないけど、そうでない部分もなきにしもあらず……？」

「歯に物が挟まったような言い方ね」

「風雲の新人時代についてもっと聞いてみたい気がするのう」

「今は来客対応中ですよ。……すみません、フォックスさん。どうにも騒がしくて」

ジョンストンや日進に絡まれながら謝罪する風雲を見て、フォックスはそこそこおかしそうに笑った。

「仲が良いのね」

「改めて問われると些か自信はないですが——」

昔の話を聞かせると迫る四人を抑えながら、風雲はフォックスに応える。

「——戦場に出れば背中を預ける仲間ですから、信頼できる関係性は築きたいと思ってますよ」

その途端、四人の動きがピタッと止まる。

突然訪れた沈黙に風雲が「な、なに？」と困惑顔を浮かべると、早波がぼそつと呟いた。

「そういうとこだよ風雲お姉ちゃん」

「いや、なにが!？」

「日本の艦娘、当たり前のように恥ずかしい台詞を使う、と」

「ジョンストン、一括りにするでない。あれは風雲のあいだでんてーというやつじゃからの」

「わ、私には村雨さんが……」

「あ、あんたら！ 好き勝手なことやってんじやない！」

顔を真っ赤にした風雲が怒りを見せると、四人は一斉に距離を取った。

どうも風雲は若干遊ばれているように見える。

「信頼関係の構築は、これからの課題と言ったところかしら」

「今のでかなり自信がなくなりました」

やや疲れたような目で、風雲はそう応じるのだった。

その後も各地を回りながらのインタビュ―は続いた。

普段の生活のこと。

深海棲艦との戦いのこと。

周辺住民との関係のこと。

国家との関係のこと。

正直風雲の手に余るような質問もあったのだが、分からない、と答えるとフォックスはそれ以上追及して来なかった。

「……フォックスさんは、なんでこういう仕事をしてるんですか？」

インタビュ―を受ける側が質問するのはルール違反かもしれない、と思いつつ、風雲はその疑問を口にした。

悪い人間ではなさそうだが、この来訪者はいろいろと不思議なところが多い。

「一言で言ってしまうと、艦娘と人間の関係性が気になったからよ」

「関係性——ですか」

「ええ。強い信頼関係で結ばれているケースもあれば、拭い難い不信感で隔たれているケースもある。深海棲艦の存在があるから表面上は仲良くやってる風に見せているけど、実際はどうなのだろう。理解し合っているフリをしているだけ。あるいは、理解し合っていると勘違いしているだけなんじやないか。そういう齟齬があるなら、埋めていくのに力添えするのも面白そうだなって」

そう語るフォックスが、風雲にはどこか羨ましそうな顔をしているように見えた。

振り返ってみると、先程風雲が「信頼関係」について答えたときも、同じような表情だったような気がしてくる。

「フォックスさんは、信頼できる人はいるんですか？　理解し合えていると思えている人は、いるんですか？」

「いたとも言えるし、いなかったとも言える。いるとも言えるし、いないとも言える。……ま、よく分かんないからこういうことをしているのかもしれないわね」

煙に巻くような答えを述べると、フォックスはおもむろに風雲たちに手で形作ったマイクを差し出してみせた。

「貴方たちはどう？　提督のことは、泊地のスタッフのことは、周辺住民は、貴方たちが守っている人間たちのことは——好き？」

思いがけない質問に、風雲たちは皆で顔を見合わせた。

やがて、彼女たちは一つの答えを口にする。

それを聞いたフリージャーナリストは、満足そうな表情を浮かべたのだった。

一通りインタビューを終えると、フォックスはそのまま泊地を離れることを風雲たちに告げた。

「もう行っちゃうんですか？　もうちょつとしたら私の同期、さつき話した江風とか照月とかも来ますけど」

「ごめんなさいね。早めに行っておきたい場所があるのよ」

どこことなく困った風に頬を掻きながら、フォックスは風雲たちに名刺を差し出した。

そこには、氏名と連絡先——そして竹筒から顔を覗かせる、少しいたずらっ子のような顔つきの狐のロゴが描かれている。

「ほう、管狐か」

「ええ、フォックスというのはペンネームでね。その由来なのよ」

またなにか面白そうなネタがあったら連絡ちょうだい——そう言ってフォックスは荒波の中、再び旅立っていった。



「変わった子だったわね」

「結局あんなボロ船でどうやってここまで来たのかサツパリ理解できんかったしねえ」

ジョンストンや日進が首を傾げる中、一人峯雲は意を決したような顔つきになっていた。

「風雲さん」

「ん？」

「私、訓練の点数のことばかり気にしてて、誰のために戦おうとしているのか——それを忘れそうになっていました」

フォックスのインタビューを受けてみて、自分の役割をいろいろ考えたのだろう。

峯雲は、先程よりも大分サツパリした顔つきになっていた。

「その調子なら大丈夫そうね」

「はいっ」

「——なら、その感覚を忘れないうちに追加メニューいつとく？」

風雲のナイスな提案に、四人は揃って頭を振った。

それはそれは見事な連係プレーだったと、後に風雲は語ったそうである。

艦娘カート（矢矧・陸奥・愛宕・佐渡・若葉・あきつ丸）

S泊地から少し離れたところで、辺境に似つかわしくない駆動音が鳴り響いていた。

音は五つ。いずれもゴーカートのエンジンによるものだ。

先頭に行くのは陸奥の愛機『悪路王』。

名前のせいで初見は勘違いされやすいが、性能は他のメンバーの愛機と同じである。

ただ、乗り手の陸奥自身はオフロードでの走りも得意としていた。

「——やるわね！」

「負けないわよー」

その陸奥の背後にピッタリとついているのは、愛機『普賢』を駆る愛宕だ。

陸奥を風除けに使って、ゴール寸前で追い抜こうという算段なのだろう。

二番手ながら焦りは見えず、むしろ余裕を感じさせる走りだった。

次いで佐渡・若葉・あきつ丸が続く。

後続集団三名は抜きつ抜かれつのデッドヒートだ。

実力は伯仲しており、勝負がどう転がるか見えていてもまったく読めない。

「ゴーカート部は、こんな感じ」

「結構皆楽しそうにやってるのね。コースもなんだか本格的」

そんなレースを見ているのは、ゴーカート部顧問を務める小野小道と、ふらりとサーキットを訪れていた矢矧だった。

今日、矢矧は非番だった。

姉妹との予定もなかったもので、ときどきやっている島の探索に乗り出していたところ、ゴーカート部の活動を目にしたのである。

「存在は知ってたし、このコースも前から知ってはいたけど、活動を見るのは初めてなのよね」

「皆ある程度予定組んで活動するから……そこまで活動日数は多くないのよ」

そう説明する小道は、泊地のスタッフの一人だ。

普段は美容室を開いているのだが、どちらかというとな内向的な性格で、普段の挙動も緩慢な方だ。

あまりゴーカートと縁があるようには見えないが、紛うことなきゴーカート部顧問である。

「興味があるなら……試走してみる？」

「そうね、面白そうだし。でもカートはあるの？」

「来客用のカート……『無銘』がちゃんとあるわ」

もしかしてゴーカート部では必ずカートに名前をつける習わしでもあるのだろうか。

そんなことを考えながら、矢矧は小道に案内されてカートが格納されているエリアに足を踏み入れた。

カートを整備するためのものなのだろう。様々な機器があちこちに設置されている。

ちよつとした工廠のようだった。

「思ってたより充実してそうね。大淀が許可したの？」

「ええ。大半は……部員の自費とか、工廠のおやつさんの伝手とかで」  
「なるほど。泊地からはそこまでお金出してないのね」

貧乏泊地の予算管理担当である大淀が許可するくらいだ。

資金面についてはほぼ部独自でやっているのかもしれない。

来客用のカートは奥の方にあった。

しっかりと手入れはされているようで、見た目はかなり綺麗だった。

そこに、レースを終えた陸奥たちが戻ってくる。

「おっ、矢矧の姐さんじゃんか」

「見学か？」

佐渡と若葉がカートに乗ったまま声をかけてきた。

二人のカートは陸奥たちのものに比べると一回り小さい。

体格に合わせてサイズを変えているのだろう。さすがに陸奥と佐

渡が同サイズというのは無理がある。

「おつ、試走されるのでありますか」

「ええ、そうしようと思っただころ」

「なら、私がエスコートしてあげよっか？」

そう申し出たのは愛宕だった。

佐渡や若葉から「愛宕だけズルい」という声があがるが、そちらは陸奥が宥めている。

さすがに試走するのに何人も併走するのは厳しい。一人か二人くらいが限界だろう。

「じゃあ……愛宕とあきつ丸でお願い。先導上手そうだから」

「えー、そりやないぜ監督！」

「我々ももう少し走りたいぞ」

「二人はすぐ勝負に走るから駄目」

「あらあら。私は？」

「陸奥も愛宕とセットだとすぐ熱くなるからNG」

意外ときつちり監督をやっている。

普段とは違う小道の姿に、矢矧は少しばかり新鮮なものを覚えた。

シートに腰を下ろし、アクセルとブレーキの位置を確認。

ハンドルを手にすると、今まで感じたことのない高揚感が一瞬湧き上がってくるのを感じた。

「ふっふっふ、良いでしょう」

矢矧の変化に気づいたのか、愛宕がニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「場所柄もあって我々は普段車を使わないでありますからな！　こういう機会でもない、アクセルを踏み込んだり、ハンドルを回したりする感覚は味わえないであります」

「そうそう。横須賀とか呉だったらまた違ったんでしようけど、ここ島だし、車道という車道もないものねえ」

「……なるほど。随分力を入れていらっしゃるんですけど、少しその理由が分かった気がするわ」

「なんの。まだこれからであります」

フツと笑うあきつ丸。

そんな三人の側に立った小道が、手に小さな旗を持っていた。

「それじゃ……これ降ろしたらスタートね」

「フライングはご法度だから気を付けてね」

「最初は気楽にやるでありますよ」

それじゃスタート、と気の抜けた声と共に小道が旗を降ろす。

アクセルを踏み込むと、拍子抜けするくらいアツサリとカートは動き出した。

思った以上に少し踏むだけで良いらしい。矢矧を乗せた『無銘』は、徐々に加速していった。

「最初は安全運転を心掛けた方が良いわよ」

矢矧の少し前に行く愛宕とあきつ丸が、手本を見せるかのようにコーナーを曲がる。

矢矧もそれに続く形で、ブレーキを踏みつつハンドルを切った。

「お、おお。なんかこの感覚——いいわね！」

定められたコースで綺麗にコーナーを曲がる。

言葉にすると単純だが、実際にそれが上手くと妙にテンションが上がる。

そこからはしばらくストレートに道が伸びる。

アクセルを思い切って踏み込むと、『無銘』は矢矧の意思に応えるかのように加速していった。

そんな調子で一周、二周、三周と周回を続けるうちに、矢矧もおおよその感覚は掴めてきた。

実際に走ってみることで、コースを身体で覚えたのである。

「ここは——こうね！」

慣れてくると欲が出てくるもので、コーナーをより内側で、より速く曲がりたくなってくる。

ストレートの道も、ギリギリまで速度を落とさず行きたくなる。

そんな矢矧の変化を見て、愛宕とあきつ丸は互いに視線を交わして頷いた。

「それじゃ、少し本気でいってみましようか？」

「ええ、是非とも！」

ノリノリになってきた矢矧は、愛宕たちの提案に一も二もなく頷いた。

今なら結構良い勝負ができる気がする。

そんな予感に胸を躍らせながら。

「あ、甘かった……」

試走を終えた矢矧は、『無銘』に乗りながら天を仰いだ。

結果は惨敗。目立ったミスはしていなかったと思うのだが、愛宕やあきつ丸には徐々に引き離され、その差を埋めきれないままゴールを迎えることになってしまった。

「流石に経験値の差が大きかったというところね」

観戦していた陸奥がタオルとドリンクを持ってきてくれた。

矢矧自身気づいていなかったが、いつの間にか結構な汗をかいていたらしい。

もらったドリンクを飲むのがやめられず、一口で全部飲み切ってしまった。

「車体性能は基本同じなはずなのに……」

「だからこそ経験の差が出てくるのよ。むしろ初めてにしては上出来だったと思うわ」

「そうそう。佐渡様なんて最初の頃はコースアウトもザラだったからな！」

「あれは、見ている側が不安だったな……」

乗り始めたばかりの頃の佐渡のことを思い出したのか、若葉やあきつ丸が苦い表情を浮かべる。

どうやら相当危なっかしかったらしい。

「それで……どうだった……？」

カートを降りた矢矧に、小道がボソボソと尋ねてくる。

「ええ、面白かったわ。またときどき乗りたいくらい」

そう言った瞬間、矢矧を囲む空気が微妙にギラついたものになっ

た。

具体的に言うところ——獲物を逃がすまいとする狩猟者の雰囲気になった。

「あら、あらあら。それなら入部するのはどうかしら？」

「そうね。矢矧も来て六人体制になれば、ほら、二人乗りカート三チームでの対抗戦とかもできるかもしれないもの」

「そうでありますな。最近予算繰りも厳しくマンネリ気味になっていたので、新しいメンバーは大歓迎であります！」

「そうだな。金がないんだ、この部は……」

「なーなー矢矧の姐さん、入ろうぜー！」

純粹に誘ってくる者。

いろいろと正直に内情をぶちまける者。

様々なスタイルで取り囲んでくる一同に囲まれて、矢矧は「もしかして迂闊なこと言ったかな」と自分の言葉を振り返るのだった——。

「でも……普通に入部してくれたのね」

「お金の使い道ないので。ここ……」

入部届を小道に渡しつつ、矢矧は若干物寂しげな眼差しを遠くに向けたという。

その足で走り行く（長良・鬼怒・ゴトランド）

長良の朝は早い。

予定がない日でも、基本的には陽が昇る前に起床する。

手早く着替えて洗顔と歯磨きを済ませると、泊地の周辺を走る。

走りながら目にする日の出が、長良は好きだった。

聞こえるのは波の音と、ハツハツ、という自分の呼吸くらいである。

それらはどちらも自分自身と一体になって感じられたので、走っているときはとても静かだと思えた。

「なぜ走るんだ？」

昔、たまたま朝のランニングのときに遭遇した提督に聞かれたことがある。

そのときは、どのように答えたか。思い出そうとしたが、もう何年も前のことだったので、上手く思い出せなかった。

拠点が見えてくると、長良はほんの少しだけ残念だと胸中でぼやく。

まだ走れるのだが、拠点に戻ったら終わりにする、と決めているのだ。

「あ、長良姉。もう終わったんだ？」

ゴールまで辿り着くと、ジャージ姿の鬼怒がおはようと声をかけてきた。

いつの頃からだろうか。この妹も、長良と同じように走るようになった。

もつとも、長良のように日課にしているほどではないようで、気分次第で止める日もある。

そんな調子だから、特に一緒に走る約束をしているわけでもない。各々が好きに走るだけである。

「こっちはコースが泊地に比べると短いから、なんか物足りないんだよね」

「あー、分かる。もうちょっとコース整備してみる？」

長良たちが今いるのは、S泊地本部ではない。



ソロモン諸島の東部の島にある東部支部だ。

東部支部と、首都ホニアラに近い中央支部は、ショートランド島にある本部と比べると、設備がまだまだ物足りない。

よく言えば自然多め。悪く言うところが開発されていないところが多いのだった。

「うーん、流石にそれは簡単にはできないよ。ある程度予算と人手がないと」

「となると無理か。趣味にお金回すほうちに余裕はなさそうだもんね」

そんなことを二人で話していると、菜園のための道具を持ったゴトランドが姿を見せた。

「おはよう、二人とも」

「あ、おはよっす」

「おはよう。精油の材料作り？」

「ええ、そんなとこ」

ゴトランドは最近アロマに凝っていて、精油も自作していた。

お互い朝早くから活動するので、同じ拠点にいると長良とは顔を合わせるが多い。

「じゃ、私も行ってくるねー！」

そう言っただけで駆け出していく鬼怒を見送っていると、ゴトランドが微笑みながら尋ねてきた。

「ねえ、二人はなんで走るの？」

「え？」

「いや、純粹になんでだろうなーって思っただけ」

先程浮かんだ思いが出が、再び脳裏をよぎる。

しかし、あのとき提督になんと答えたのか、さっぱり思い出せなかった。

「うーん、言葉にするのは難しいなあ」

「そうなの？」

「うん。……ああ、そうだ」

あのとき提督に言った言葉を、そのとき長良はようやく思い出し

た。

「ゴトランドも走ってみなよ。そうすれば分かるかもしれない」

何度か、どこかに走り去っていく長良の後ろ姿を見送ったことがある。

彼女がランニングを日課としていることは聞き知っていたので、あやってるな、と思ったのだが、同時に一抹の不安があった。

ゴトランドはスウエーデンの艦娘である。

スウエーデンには、こんな噂があった。

かつてスウエーデンで開かれたオリンピックには、日本の陸上選手も参加していたという。

しかし、その陸上選手はマラソンの最中行方不明になってしまったというのだ。

その後、その日本人がどうなったのか、ゴトランドは知らなかった。

本当か嘘か分からないような噂ばかりが流れていたのだ。

だから、長良の後ろ姿に少しだけ不安を感じたのである。

そんな長良が、今ゴトランドの前を走っている。

彼女の足は早い。ゴトランドも運動神経にはそれなりに自信はあったが、さすがに毎日走っている長良には敵わなかった。

油断していると、すぐに引き離されそうである。

……走れば分かるかも、とは言われたけど。

今のところ、息苦しいばかりで面白味を感じる余裕はない。

見えるのも長良の後ろ姿だけだ。引き離されまいと、必死にそこを見続けることしかできない。

そんなとき、どこからか鬼怒の歌い声が聞こえてきた。

どうやら折り返し地点から戻ってくるころらしい。

上機嫌で何やら民謡らしいものを歌う鬼怒は、ゴトランドに気づくと、陽気に手を振りながら拠点の方に戻っていった。

「鬼怒は走りながら歌うのが好きみたいなんだよね。あんまり上手くないけど」

「長良は歌わないのね」

「私はただ走るだけの方が性に合ってるかな」

言いながら、長良は走りながら大きく腕を広げてみせる。

「普段私たちちって艦装で海を駆けるでしょ？ あれはあれで身体使うんだけど、こういう風に手足を全部思いのままに動かすのが、なんか良いんだよね」

「私がそれを理解するには、しばらく訓練が必要になりそう……」

「あ、慣れないうちは無理しちゃ駄目だよ？」

労わるように長良はゴトランドと併走し始めた。

軽く肩を叩いた長良に頷き、再び前を向いて走り始める。

「——あ」

長良が横に移ったことで、見える光景が広くなった。

海。

浜辺。

森。

明るくなり始めた空。

「こういうの見ながら走っていると、どこまでも行けそうな気がしてくるんだよね」

艦娘は、深海棲艦と戦うのが使命である。

しかしこうして走っていると、頭の中が空っぽになって、使命のことなど忘れてしまいそうな気がした。

自分の両足だけで、全然違うところに行けそうな、そんな感覚に見舞われる。

「……それは、少しだけ分かるかな」

「ん」

ゴトランドの声が聞こえたのかどうかは分からない。

ただ、長良は満足そうな表情を浮かべると、再びペースを少しずつ上げ始めた。

「待ちなさい——ってばー！」

本当にどこまでも行ってしまうような長良を見逃すまいと、ゴトランドも速度を上げて食らいつく。

風が強く吹いている。

全身でそれを浴びると、気持ちが悪かった。

走り終えて拠点に戻ったとき、ゴトランドは力尽きてその場に倒れてしまった。

ただ、その顔はとても満足そうなものだった。

それからは、ときどき朝走る影が一つ増えたそうである。

リングの意味（荒潮・満潮・天龍・龍田・名取・五十鈴）

ある日のこと。

荒潮と満潮が間宮でスイーツを食べていると、機嫌の良さそうな天龍・龍田・五十鈴・名取が入ってきた。

「なにか良いことでもあったのかしら〜？」

「さあ」

四人の様子に興味を持った荒潮とは対照的に、満潮は素っ気ない反応を示した。

今は目の前のスイーツに集中したいのだ。彼女にとっては、久々の贅沢なのである。

「もう。食い気ばかりねえ」

「放っておいてちょうだい」

二人がそんなやり取りをしていると、天龍たちがすぐ近くに席を下ろした。

五十鈴が「あら」と二人の食べているスイーツを目にして目を輝かせる。

「そのメニュー復活したんだ？」

「ええ。一日限定みたいですけど」

「ならそれ頼みましょうか」

異議はないようで、四人のところにもスイーツが運ばれてくる。

なんとなく話しかけやすい雰囲気できたからか、荒潮は龍田の隣に寄っていった。

「なにかあったんですか？」

「あら、分かる？」

龍田は「フフ」と微笑むと、ポケットの中から小さな指輪を取り出した。

それに合わせて、天龍はさっと、名取は遠慮がちに同じ指輪を出してみせる。

「あら、カツコカリの」

「ええ。ようやく出来たのよ」

「ここまで長かったな」

「形式的なものとは言え、やっぱり緊張したよ……」

嬉しそうな龍田、感慨深そうな天龍、安堵の息を吐く名取。

反応は違っていたが、皆喜んでいることに変わりはないようだった。

ケツコンカツコカリ。

提督と艦娘は『契約』によって繋がっており、提督から得られる霊力によって艦娘は戦う力を得る。

ケツコンカツコカリとは、その霊力のパスを強化し、単純な契約で得られるよりも強力な強さを得る儀式の俗称だった。

「それで、愛の告白みたいなのはあったんですか？」

「な、なかったよ。というか三人同時に渡されるのにそんなことになつたら修羅場だし……」

「ま、世の中には全員に愛をうたうタイプの提督もいるみたいだけど」「本当にいるのかよ。都市伝説の類なんじゃ……」

五十鈴の話に天龍が疑わしそうな表情を浮かべる。

ケツコンカツコカリは指輪を提督から艦娘に贈るプロセスを必要とする。

そのため、愛の告白のような意味合いを持つ拠点もあるらしい。

もつとも、S泊地では初代提督の頃からそういう色気のある話とは無縁だった。

契約強化に足る練度を持つとみなされた艦娘たちには、片っ端から指輪が贈られる。

今では、泊地にいる半数以上が指輪を持つようになっていた。

「で、三人は指輪どこに飾るの？」

五十鈴が興味深そうに尋ねた。

「指にはめるんじゃないんですか？」

「そういう人もいるけど、お洒落な飾り方してる人もいっぱいいるのよ」

そう言つて五十鈴は髪の毛を少しかき上げてみせた。

普段は隠れているが、右の耳にイヤリングがついている。

「あ、それ指輪ですか？」

「少し細工してイヤリング風にしてみたのよ」

五十鈴がカツコカリしたのは相当前のことだ。

今回は三人の付き添い役としてついていったのである。

「他にはどういうパターンがあったっけ？」

「んー、叢雲は首飾りにつけてたわね。古鷹は右手の小指にはめてた。

皐月とかは刀にストラップとしてつけてたっけ」

「お、皐月案良いな。俺もそれにするか」

天龍はいつも愛刀を肌身離さず持ち歩いている。

それにつけておけば失くす心配もなさそうだった。

「アンタたちのところも朝潮・大潮・霞はカツコカリしてたでしょ。三人はどうしてたの？」

「あら、そういえばどうしてたかしら？」

身近過ぎて意識していなかったのか、荒潮がいくら頭をひねつても、三人が普段指輪をどのように扱っていたかが出てこない。

そのとき、話に参加していなかったおかげでスイーツを早々と完食した満潮が、ハンカチで口元を拭きながら、

「朝潮姉さんは親指に、大潮姉さんは髪留めにつけて使ってる。霞は叢雲と同じで首飾りだった」

スラスラと答える満潮に、周囲から「おお」と声上がる。

「姉妹のこと、よく見てるんだね」

「それにしたってそれだけスラスラ出てくるのは凄いわね」

名取や龍田が感心する一方、五十鈴は「ほーう？」と悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「そういえば、荒潮もそうだけど、満潮も結構練度良い感じのところに来てるみたいね？」

「……そ、それが？」

「実は姉妹艦がカツコカリする度に、内心自分のときはどんなだろう、指輪どうしよう、って考えてたんじゃないかなーとか」

「そ、そんなわけないでしょ!？」

五十鈴の推測を満潮は即座に否定した。

ただ、否定の仕方がまずかった。

顔を真っ赤にして早口で否定しても、説得力というものに欠けてしまふ。

「……満潮姉さん。もしかしてさっきの素っ気ない反応は、興味あることを隠そうと——」

「うっさい！ それ以上言うの禁止！」

荒潮の口に人差し指を押し当てて黙らせる。

「そっかー。早く満潮ちゃんも指輪貰えると良いね」

「もしかすると満潮ちゃんのお辞儀をしながらは愛の告白つきかもしれないわね」

「ぐぬぬ……あー、もう馬鹿ばっかり！ 私帰る！」

スイーツの皿を手に、満潮は席を離れて足早に去ってしまった。

あらあら、と荒潮は四人にお辞儀をしてそれを追いかけていく。

なんだかんだ、いつの間にか彼女もスイーツは完食していた。

「からかい過ぎじゃねえか？」

二人を見送りながら、天龍が苦言を呈する。

「そうかしら？ 私たちだって、それくらいのこととは考えたわよ。ね、名取？」

「え、あ……うん。ちょっと、ドキドキはしたかな」

龍田に促されて、名取はやや気恥ずかしそうに頷いた。

「ま、皆そんなもんでしょ。形式的とは言えケツコンなんて名前ついてるんだし、指輪もらうわけだし」

「なんだ。五十鈴もドキドキしたつてののか？」

「いやいやいや。私お富士さんのときだったし——」

そこから始まる、ケツコンカッコカリの四方山話。

そこにどんな意味を持たせるかは提督と艦娘次第。

だが、そこに至るまでの過程で育まれた絆が代え難いものであることに、変わりはない。



センスが足りない！（卯月・弥生・朝霜・涼風・深雪）

卯月が部屋に戻ると、弥生がなにやらパソコンをじっと見つめていた。

普段から仏頂面な弥生だが、今はことのほか表情が硬い。まるでフランスパンのようだと思い、卯月は少しお腹が減った。

「やつよいー… なにしてるぴよん？」

お腹が鳴らないよう腹に力を入れながら、卯月は弥生の後ろからパソコンの画面を覗き込んだ。

映し出されていたのは、多種多様な服のリスト。

弥生が見ていたのは、ファッション系の通販サイトだった。

「お給金溜まってきたから… なにか買おうかなって」

「ふーん。弥生なら何着ても似合いそうぴよん。迷う必要ないんじゃない？」

「ん…でも、こういうのは迷うのも含めて楽しいから」

改めて見ると、弥生の表情は確かに硬いが、眉間にしわがよつていない。

割と弥生は怒ってるとき特徴が出やすいのだ。今は全然怒っていない。ただ真剣なだけなのだろう。

「うーちゃんにはよく分からない感覚だぴよん」

「こういうのは、人それぞれだから」

「そういうものぴよん？」

「ん」

しかし、分からなくとも問題ないと言われると、逆に興味が出てくる。

卯月は弥生の頭越しに画面をしばらく見つめていた。

爽やかな色合いの服、ほんのりとした明るさを感じさせる服、少し大人っぽい感じのする服。

多種多様な服を弥生が着ている様を思い浮かべながら、卯月はポンと手を叩いた。

「そうぴよん！ 弥生の服、うーちゃんが選んであげるぴよん！」

「え」

卯月の善意100%の提案に、しかし弥生は苦い反応を示した。眉間にしわがよっている。

「いいよ」

「遠慮しなくて良いぴよん」

「遠慮じゃなくて……」

「じゃあなんだぴよん?」

卯月に問われ、弥生は若干言い難そうに視線を逸らした。

しかし、卯月が引かない様子を見せるので、やむなしといった様子で口を開く。

「だって卯月——センスないから——」

センスないから——。

センスないから。

「これ酷いと思うぴよん!」

それから少し経った頃。

ソロモン諸島巡回船の甲板上で、卯月はプリプリと怒りを露わにしていた。

話を聞いていたのは、卯月とよくつるんでいる深雪・涼風・朝霜である。

一通り事情を聞いた三人は、しかし一様に何とも言い難い表情を浮かべていた。

「あれ、賛同ゼロぴよん?」

「いや、だってなあ」

頭をかきながら朝霜は躊躇いがちに言った。

「実際、お前センスないだろ」

「あ、朝霜よ、お前もか——ぴよん!」

賛意を得られないとは思っていなかったらしく、卯月は割と本気でショックを受けていた。

「なあ、卯月」

「なんだぴよん、涼風」

「お前、ときどき着てる文字入りのTシャツ、あれどう思ってるんだ？」

「イカスぴよん」

「駄目だお前センスねえよ」

「なんでだぴよん！」

容赦なく袈裟斬りにかかってきた涼風に、卯月は納得がいけないという風に詰め寄った。

「あれをイカスと思ってるのは少数だつての！ 一般的にあればクソダサに分類される代物だ！」

「せめてダサかわいって言ってやれよ」

「フオローになってないぴよん！」

横合いから声を挟んだ朝霜にも悔しそうな眼差しを向ける卯月。

そんな彼女の肩に手を置いたのは深雪だった。

「諦めろ、卯月。この深雪様、お前の気持ちは分かるぜ——あたしもセンスないからな。悔しいよなあ」

「なんか味方っぽいこと言ってるけど結局うーちゃんのファッションセンスは肯定してくれないぴよん!？」

「まずは自覚することが大事ってことだな」

ケラケラと笑う朝霜は、結構なお洒落さんである。

爽やかで動きやすそうな方向性に偏りがちではあるが、朝霜の私服はなんとというかサマになっているのだ。

「朝霜は結構センスあるよなあ。見習いたいもんだぜ」

「お前だつて結構良い感じの私服多いじゃん」

「いや、うちは村雨の姉貴とか海風の姉貴がそういうのうるさいからな……」

涼風も割と私服のセンスは良い。

姉たちの影響だと本人は言っているが、そんな姉の指導を受けた結果、彼女自身のセンスもかなり鍛えられている。

「うちはお洒落に無頓着な姉妹多いんだよな」

はあ、と深雪がため息をつく。

吹雪型の面々は、ファッションへの関心が薄かったり、儉約家で服

をあまり持っていないなかったり、別の趣味にお金をかけるタイプが多い。そのため、姉妹艦の会話でファッションが取り上げられることはほとんどなかった。

「くつ、この面子に賛同が得られなかったばかりか明暗がくつきり分かれるとは——なんか屈辱だぴよん」

「お前今やけに小難しい言い回ししたな……」

妙なところに感心する涼風をスルーし、卯月は巡回船の行く先を見据えた。

彼方には、ソロモン諸島の首都・ホニアラが見える。

何度も深海棲艦に侵攻され、陥落しては復活することから、不死鳥都市という良いのか悪いのか判断に困るような渾名がつけられている都市である。

ソロモン諸島の中では、群を抜いて都会でもある。

S泊地のメンバーにとっての都会とは、即ちホニアラのことだった。

「あそこでうーちゃんのセンスを見せてやるぴよん……」

「おい意地張るなよ」

「服買うならあたいらが見てやるって」

「袂を分かった連中のアドバイスは受けないぴよん！」

ふんす、と鼻息を荒げる卯月に、朝霜と涼風はお手上げのポーズを取った。

「なあ、卯月よ」

そんな卯月に待ったをかけたのは深雪だった。

「別にファッションセンスなんかなくても良いじゃねーか。あたしもないけど、そこまで気にしてないぞ?」

「……」

「卯月だって、今までは別に気にした素振り見せてなかっただろ?」

深雪にそう言われて、卯月は拗ねたように踵を蹴った。

「——別にうーちゃんだって、そこまでファッションセンスが欲しいわけじゃないぴよん」

「なら、なんでそんな怒ってるんだ?」

「……弥生に服買ってあげようとしただけなのに、あんな反応されたら納得いかないぴよん」

ああ、と三人の中で腑に落ちるものがあつた。

結局のところ、卯月は弥生の反応に不貞腐れていただけなのだ。

ファッションセンスは、そのきっかけに過ぎない。

「だったらさ、朝霜たちのアドバイスでも何でも借りて、弥生があつと驚くようなもののお土産に買って行ってやろうぜ」

「それじゃ意味ないぴよん」

「あるある。アドバイス聞いてでもなんでも、最後に卯月が判断したなら、そりゃ卯月の決めたものだ」

深雪にそう諭されて、ようやく卯月は不承不承頷くのだった。

以下、今回の後日談。

弥生へのお土産を買って戻った卯月を待っていたのは、「うづき」と大きくプリントされたTシャツを手にした弥生だった。

「——弥生、これは何ぴよん？」

「……この前の、悪かったと思って。ああいうのは、自分が良いと思つたものを着れば良いから。……だから、卯月が好きそうな作つておいた」

プレゼント交換をして、無事仲直りをする二人。

それを遠くで見守りながら、やれやれと肩を竦める三人組。

更に後日、交換し合った服を着て仲良く出かける二人の姿があつたとか。

## 軽巡コミュニティセッション（神通・大淀）

「すみません、もう一度お伺いしても？」

S泊地にある鳳翔の居酒屋。

そこには、一日の業務を終えた艦娘たちが集う。

日頃の疲れを癒したり、他の艦娘との交流を深める場として、ここは大きな役割を果たしていた。

その片隅で、軽巡洋艦の艦娘・大淀は困惑顔を浮かべていた。

対面に座っているのは、同じく軽巡洋艦の神通である。

「……その、駆逐艦の子ともう少し仲良くするにはどうすれば良いのかと」

今日の午後、大淀は司令部室を訪れた神通に「相談があるので今夜付き合って欲しい」と誘われた。

そのときの神通は特に変わった様子もなかったし、大淀としても今日特に用事があるわけではなかったので、二つ返事で誘いを受けることにしたのである。

しかし、今日の前にいる神通はやけに暗い表情をしていた。

神通は大人しめの性格ではあるが、意外と暗い表情を見せることは少ない。

「——その。駆逐艦の子となかトラブルでも？」

最近の泊地内における出来事を脳裏に列挙しながら、大淀はどうか言葉を捻り出した。

神通は高い練度を誇る軽巡洋艦としてよく戦線や訓練に出てもらっている。

かなり厳しいと評判ではあるが、それが無意味なスパルタっぷりではないと皆に伝わっているからか、不平不満が噴出したことはなかった。

「いえ、トラブルはないんです。皆、とても良く言うことを聞いてくれます」

「なら良いじゃないですか」

「ええ、それはそうなんですけど……」

神通はどこか自信なさげに視線を落とす。

「……この前、那珂ちゃんや能代さんたちが駆逐艦の子と遊んでいるところに遭遇しまして」

「はあ」

「ちょうどそのときは休暇中だったので、私も交流を深めるため参加しようとしたんです」

「良いことじゃないですか」

「そしたら、どうも駆逐艦の子たちの挙動が鈍くなって」

「……」

ああ、と大淀は内心頷いた。

駆逐艦にとつて軽巡洋艦は戦時体制時における直接の上官になる。

平時やプライベートでそういう垣根はないというのが本泊地の基本方針だが、戦時体制のときの関係性から切り替えられない子も少ない。

要するに、その駆逐艦たちは神通を前にして部下のように接してしまっただろう。

それで動きがぎこちなくなってしまったのだ。

「まあ、戦時や訓練時の印象が残ってしまっただけでしようし、そこまで気にしなくても——」

「ええ、姉さんにもそう言われました。でも、那珂ちゃんや能代さんには自然体だったのに、私が入った途端錆びついたブリキロボみたいな動きになったのを見えてしまうと、どうにも……」

自分と同じような立ち位置のはずの那珂・能代とどうしても比較してしまう、ということらしい。

確かにそれは複雑な思いになるだろうな、と大淀は内心苦笑した。

「ですが、なぜ私に相談を？」

「大淀さんも駆逐艦の子たちと仲良くされているのを見かけるので……」

「ああ、まあ、そうですね」

実艦としてはかつての大戦後期に多くの駆逐艦と行動を共にした経歴がある。

また、艦娘としては提督補佐という立場上多くの艦娘と接する機会がある。

そのためか、大淀は軽巡の中でも特に幅広いコミュニケーション関係を築き上げていた。

「なにかコツとかつてあるんでしようか？」

「コツと言われても——うーん、なんででしょう」

結局のところ、コミュニケーションとは日々のやり取りの積み重ねである。

神通が今まで築き上げてきた「畏怖すべき上官」というのも、コミュニケーションが結実した形のひとつと言える。

それをなかつたことにして、急に駆逐艦と仲良くする方法というのは、容易に思い浮かばない。

とは言え、神通の「駆逐艦ともっと交流を深めたい」という想いを無碍にすることもできない。

大淀は悩んだ。

悩んだ末に、発想を変えることにした。

「——神通さん。こういうのはどうでしょう」

大淀の出したアイディアに、神通は真剣な面持ちで何度も頷く。そうして、その日の夜は暮れていくのであった——。

神通が大淀に相談を持ち掛けてから約半年。

大淀は泊地の片隅にある部屋の扉を叩いた。

「大淀です。今よろしいでしょうか」

「はい、どうぞ」

扉を開けると、そこにはジャージ姿の神通がいた。

否、神通だけではない。同じような格好をした夕立・山風・夕雲・電・文月と、多くの駆逐艦娘が揃っていた。

「盛況みたいですね、書道部」

「おかげさまで」

神通は穏やかな笑みを返す。半年前、悩みを打ち明けたときの暗さは見えない。



駆逐艦たちは大淀に会釈すると、筆を手に紙へと視線を戻す。  
明るく賑やかという風ではないが、皆真剣に取り組んでいる様子が  
伝わってきた。

「大淀さんにアドバイスをいただいた通りでしたね」

「大したことは言っていないですよ」

神通の性格を考えると、那珂や能代のようなコミュニケーション方  
法を目指しても上手くいかないだろう。

そう考えた大淀は、神通の持ち味を生かせるようなコミュニケー  
ションの場を作ってはどうかと提案したのだった。

そこで、神通は元々趣味として嗜んでいた書道の部を設立。

最初はなかなか人が集まらなかったが、怖いもの知らずの夕立が興  
味本位で入部したのをきっかけに、多くの人が部に入入りするよう  
になった。

「部長としての評判も良いって噂ですよ」

「あら、そうなんですか?」

元々人にものを教えるのは神通の得意とするところである。

明確な目標に向かって進もうという人にとって、神通という指南役  
は頼りがいがあるのだろう。

「最近、ときどき活動の後にお茶をすることも増えまして。前より  
少しだけ気軽に話せるようになった気がするんです」

そう語る神通の表情は楽しげだった。

普段の「二水戦旗艦」というイメージからは程遠い。

これもまた、神通という艦娘の一面なのだろう。

「……あ、そういう日はどうしたんですか?」

「ああ、忘れるところでした」

そう言って大淀は手にしていたファイルを神通に渡す。

そこには、書道部の予算に関する資料が入っていた。

あちこちに、大淀がつけた×印がついている。

「……駄目ですか?」

「はい。ここに記載された予算に収まるよう、再考をお願いします」

「……駄目ですか?」

「若干困った顔してもダメです」

自身の訴えを鉄の笑顔で退ける大淀に、神通はがつくりと肩を落としました。

幅広くコミュニケーションを取るということは、特定の誰かに肩入れしにくくなるということでもある。

そんな大淀の苦勞を察しつつも、神通は内心（ケチんぼ……）と思わずにはいられないのだった。

不確かな言葉の形（夕立・山風・海風・神通）

ハッキリと物事を表現するのが苦手だった。どこか、曖昧に捉えてしまうところがある。

悩みというほど日常に支障をきたしているわけではないが、心のどこかでずつと引つかかっていた。

そのことを夕立が自覚したのは、S泊地の司令部棟にある二十一箇条の掛け軸を目にしたときだった。

泊地で生活する者たちに向けて初代提督が遺した訓戒——と言えば大仰に聞こえるが、実際は心構えのようなものである。

もつとも、初代提督は言葉こそ遺したが、実際に文字に起こすことはなかった。これを書き残したのは二代目の提督である。

「字、上手いっばい」

楷書体で書かれた条文は、力強く、そして美しかった。

夕立は条文のうちいくつかを、初代提督の口から直接聞いたことがある。

しかし、眼前の掛け軸を通して見ると、そのときとはまるで違う印象を受けた。

「……夕立姉？」

そこに偶然通りかかった山風が声をかけても、夕立は反応しなかった。

掛け軸に夢中で気づいていないのだ。

夕立の服の裾をツンツンとする山風だったが、気づいてもらえないので、仕方なく夕立と並んで掛け軸を眺める。

どれくらいそうしていただろうか。

近くにあった置時計が十七時の到来を告げる。

ハッと我に返った夕立は、すぐ隣に山風がいることに今更ながら気づき、思わずビクツと身を硬くした。

「ほわっ!? や、山風？」

「うん。……やつと気づいた」

「ゴメンゴメン、声かけてくれれば良かったのに」

「かけたよ、もう」

むくれる山風を宥めながら、夕立は司令部棟を出た。

陽が暮れつつある。潮の匂いを感じながら、夕立は山風と並んで歩いた。

「夕立姉、なんであんなに掛け軸夢中になって見てたの？」

「んー、自分でもよく分からないっば——」

ぽい、と言いかけたところで夕立は口をつぐんだ。

なんとなく、言いたくないような気がしたのだ。

「なんか、言いたいことをハッキリと書いてあるのが凄いなと思ったんだ」

「そうなんだ」

「うん。あたしは、そういうのあんまり得意じゃないから」

「ん……ちよつと、分かるかも」

夕立と山風は姉妹艦だが、性格は随分と違う。

オーブンで怖いもの知らずな夕立と、引っ込み思案な山風は、正反對の気質の持ち主と言っても良いかもしれない。

しかし、言いたいことがハッキリ言えない、という点は同じだった。「自分の言葉をああやってビシツと表現できるって、凄く格好良いよねえ」

「うん。格好良い……」

「……ちよつとトライしてみる？」

夕立は指先で宙になにかを描くような仕草をしてみせた。

「トライするって、なにを？」

「んー、そうねえ」

夕立の頭に、やがて一つの答えが思い浮かぶ。

「まずは——お互いで交換日記とか！」

「うーん、これはちよつと」

夕立・山風からノートを見せてもらった海風は、困った顔でそれを閉じた。

「心を鬼にしていますけど、交換日記なのに内容が薄いです」

「やっぱり?」

「薄々、感づいてはいたけど……」

思うように交換日記の筆が進まず、海風に相談したのだが、やはりこの日記の内容は問題があるようだった。

なにせ姉妹艦同士。日頃からよく顔を合わせるし、会話も多い。そうになると、改めて交換日記で書くことがないのである。

「うーん、イケると思ったのに」

「企画段階でこうなることを予想しておいてください」

「ぐうの音も出ない」

その場でへたれる夕立と山風。

そんな二人を見て、海風は頭を悩ませた。

相談に乗った以上、現状をバツサリと斬って終わり、というわけにはいかない。

改善策を探さなければならぬ。海風は、そういう責任感が強かった。

「自己表現の方法ならいろいろありますよ。絵でも文章でも」

「できそうな気がしないんだよねえ」

「ねえ」

「せめてもうちよつとやる気を見せてくれませんか」

そんな二人に溜息をつきつつ、海風は何かないかと考えを巡らせた。

一つ、有効かどうかは分からないが、何かのキツカケになりそうなものに思い至る。

「そういえば、神通さんが書道部を作ると言っていました」

「書道?」

「ええ。ビシッと自己表現できるかどうかは分かりませんが、まずは話を聞きに行ってみてはどうでしょう」

「そうしよつか、山風」

「うん」

先程までのへたれ具合はどこへやら、夕立は颯爽と立ち上がった。気が乗ればすぐに行動する。

そんな姉のフットワークの軽さに感心しながら、海風は二人を見送るのだった。

書道部はまだ正式に発足していないらしく、活動拠点と言えるような場所はない。

そのため、夕立たちは神通の私室を訪れていた。

神通と言えば、長良と並び訓練が厳しいと評判の軽巡洋艦である。駆逐艦にとって軽巡洋艦は、戦時における直接の上官だった。

そのため、神通の私室というのは、駆逐艦にとって二重の意味で訪れにくい場所と言える。

ただ、夕立は神通の訓練に平然と付き合う珍しい駆逐艦だった。

元々怖いもの知らずな面もあるためか、大半の駆逐艦が緊張しながら叩くであろう神通の部屋の扉を、躊躇なくコンコンと叩く。

「神通さん」

「はい、どうぞ」

部屋に入ると、ベッドの中で眠りにについている川内と、私服姿の神通の姿があった。

「あら、山風さんも一緒でしたか。どうされました？」

訪問者への対応は柔らかで落ち着いている。

知らない人が見たら、これが華の二水戦の旗艦として知られる神通だとは思えない。

夕立と山風は、自分たちが今抱えている悩みを神通に語った。

神通は二人の話を聞き終えると、しばし沈思し、机から墨と紙、筆を取り出した。

「少しお待ちください」

そう言って神通は静かに墨を磨り始める。

やがて墨を磨り終えると、紙と筆と併せて二人に渡した。

「なんでもいいので、今心に浮かんでいる文字を書いてみてください」「練習してないけど、いいの?」

「はい。まずはお試しという事です。特に批評を加えるような真似もしませんので、自由にどうぞ」

神通と川内の机を借りて、夕立たちは紙と向き合う。

筆を手にしたままあれこれと思考を巡らせるが、なかなか良い字が浮かばない。

「難しく考えなくても良いですよ。思い付きで良いのです。好きなもの、今日見たもの、やりたいと思っっていること。なんでも良いのです」  
神通に諭されて、夕立と山風は顔を見合わせた。

「——うん。決めた」

「あたしも」

そこからは早かった。

夕立は大胆な筆さばきで豪快に、山風はゆつくりと丁寧な、それぞれが思い浮かべた字を書き切る。

「書けたよ、神通さん」

「なるほど」

二人が書いた字をそれぞれ見比べて、神通は満足そうに頷いた。

批評はしないという宣言通り、特に内容についてのコメントはない。

「書いてみてどうでしたか？」

「……なんか、不思議な感じ。絵とも手紙とかとも違う。たった一文字だけど、凄く集中して書いたからか、特別感ある」

「あたしは、ゆつくり考えながらこうやって書くの、嫌いじゃない」

両者の感想を聞いて、神通の表情がかすかに晴れやかなものになる。

「私も、筆を手紙と向き合う時間は好きですよ。そして、書道で扱うのは文章とはまた少し違うものだとも思っています」

「神通さんも？」

「ええ。普段上手く言葉にできないことも、書を通してであれば表現できます。そこから、自分の新しい一面が垣間見えることもありますし、傍から見ている以上に新鮮で刺激的ですよ」

道具一式をしまいながら、神通は書道の良さを流暢に語る。

そして最後に、二人が一文字を書いた紙をそれぞれに持たせた。

「その字は、きつと何かの記念になるでしょうから持ち帰ってください」

い。そして、また書きたいと思ったら、書道部の門を叩いてください」  
神通に見送られて、夕立と山風は自分たちの部屋へと戻っていく。  
「……改めてみると、ちよつと照れ臭い気もする。江風とか、からかっ  
てきそう」

「そしたら、今度は江風の字も書いてあげれば良いっぽい！」

心の中に生じたしこりが取れたのか、夕立の表情は晴れやかなもの  
になっている。

それぞれの字を書いた紙を大事に抱えながら、少女二人は温かな泊  
地の中を行くのだった。



右も左も分からないけど（秋津洲・漣）

四月を迎えて間もない頃の昼下がり。

秋津洲は五十人ほどの集団を引き連れて、泊地内を案内して回っていた。

「で、ここが皆さんの当面の住居になるところね」

新築の寮を秋津洲が指し示すと、集団の中の何人かは「はい」と元氣よく応える。

彼らは、S泊地にやって来たインターン生である。

S泊地は軍事組織ではなく企業として活動を行っている。

そこに所属するスタッフや艦娘たちは、全員正社員という扱いになつていた。

これまで泊地の正社員は、艦娘の場合着任時に、その他のスタッフの場合適宜スカウトして採用する形式を採ってきた。

だが、今回は違う。業務に関する経験の有無を問わず採用する方針を採った。

ただ、業務内容がいろいろと特殊なので、まずはインターンからということになつている。

……だからか、皆なんとなく初々しい感じかも。

採用されたスタッフは男女半々くらいの比率で、国籍もまばらだった。

ただ一つ共通しているのは、全員にフレッシュさがあるということである。

「それじゃあ次は——」

と秋津洲が新しい場所に行こうとしたとき、遠くから砲声が聞こえてきた。

スタッフたちは一斉に身体をビクツと震わせて、恐ろし気に音のした方角を眺める。

「あの、秋津洲さん。あれは——」

「ああ、あれは砲撃訓練だよ」

「さ、昨今は演習や訓練もVR空間で行うものと聞いていましたけど」

「できるけど、VRとリアルじゃやっぱりちよつと違うからね。定期的にリアルでの訓練もするようになってるんだ」

敵襲だったら警報がすぐ鳴るから砲声だけなら気にしなくて良いと言つても、スタッフたちはどこか落ち着かない様子である。

深海棲艦が出現してから早数年。世界各地で砲声が轟くようになったとは言え、ここまでそれが身近な職場はないだろう。

「あの、秋津洲さん。あれは……？」

スタッフの一人がなにかに気づいたらしく、少し離れたところにある建物を指し示した。

そこでは、何人かの艦娘たちが作業着姿で建物に張り付いている。

「あれは——多分この前の大雨で傷んだところを手入れしてるんじゃないかな。ここではそういうの全部自分たちでやらないと駄目だからね」

「そういうものですか」

「だって業者の人氣軽に呼べないし」

泊地近辺はそれなりに開発されているが、結局のところS泊地は境界も境界。

シテイのシの字もないような場所である。

基本的に、ここでは自分たちのことは自分たちでやらないといけないのだ。

「それは業務内容に含まれるんですか？」

「ううん、含まれないよ」

秋津洲がそう言うと、全員一様に安堵の表情を浮かべる。

それを曇らせるのは忍びないなあ、と思いつつ、秋津洲は捕捉を入れた。

「ただ、さつきも言ったけど業者の人は呼べないから、問題が起きたときは自分たちでやるか、泊地のインフラ部に対応を依頼することになるんだ。でもインフラ部は忙しくていつもてんてこ舞いだから、依頼しても対応してくれるまではかなり時間かかるかも」

「……つまり、自分たちでも出来るようになっておかないと、いろいろと困ることになるってことでしょうか」

「うん」

事もなげに頷く秋津洲に、候補生たちは皆揃って不安そうな顔を見せるのだった。

とんでもないところに来てしまったかもしれない。

そんな不安を胸に抱えたまま、葛山比奈は自分に割り当てられた部屋で横になっていた。

「憧れの艦娘と一緒に働けるのは嬉しいけど——」

比奈がここにやって来た動機は、かつて艦娘に自分の家族を救ってもらったことがあるからだだった。

そのとき言葉を交わした艦娘に憧れて、艦娘を支援できるような仕事をしたいと希望した結果、ここを紹介されたのである。

ただ、通常業務に加えて日常生活の雑務もこなさなければならぬように、想像の倍以上は大変そうだということを痛感した。

仕事ができるだけでは駄目なのだ。ここでは生きていくための力を身に着ける必要がある。

はたして自分にできるだろうか。

正式に採用される前に、帰ってしまおうか——そんな思いが胸をよぎる。

そのとき、窓の外でなにか物音が聞こえた。

「……な、なに？」

今日一日驚きつ放しだったからか、比奈はすっかり疑心暗鬼になりながら、恐る恐る窓の外を覗き見た。

そこにいたのは、小さな艦娘だった。

駆逐艦だろうか。抱えていた野菜を落としてしまったらしく、慌ててそれを拾い集めると、危なっかしい足取りで歩いていく。

彼女の体格からすると、抱えている野菜の数は多過ぎて、どうにも不安定だ。

「あ、あのう」

思わず声をかけてしまったことを後悔するが、時すでに遅し。

呼びかけられて、小柄な艦娘は比奈のいる方を振り向いていた。

「へえ、お姉さんインターン生なんだ」

小柄な艦娘——漣は物珍しそうに比奈をじろじろと見る。

「あの、なにか変でしようか……?」

「いやいや。変じゃないと思うよ。むしろ今までのスタッフの方が変なんだろうなーと思う次第」

「そうなんですか?」

「元々どこかしらで実績上げてうちにスカウトされて来たような人たちだからね。曲者だらけなのでござる」

「は、はあ」

「だから、矛盾してるようだけど——普通なのが変というか」

あはは、と漣は面白そうに笑う。

「それにしてもすまぬでござるなあ、荷物持ってもらって」

「いえいえ。これくらいならお安い御用です」

漣が抱えていた野菜の半分近くを抱えながら、比奈はふと疑問に思う。

「この野菜も、皆さんが育てられたんですか?」

「んー、皆というか農業部が育てたやつ。私は今日非番だから、お手伝い」

「本当に、なんでも自分たちでやるんですねえ」

「……もしかして不安?」

感心する比奈の横顔をじっと見つめながら、漣は疑問を口にした。

比奈自身は気づいていなかったが、今もその表情には不安の色が表れている。

「まあ、ええ、はい。……皆さんは、深海棲艦と戦ったり、専門のスキルを持っていて、それに加えて自活能力まである。そんな人たちと一緒にになって、お仕事できるのかなって思っちゃいますね」

「大丈夫大丈夫。経験不問で募集してたんでしょ? なら比奈ちゃんたちに最初からそこまで難しいことは求めてないって」

「比奈ちゃん……?」

突然の渾名に戸惑う比奈をスルーして、漣はそのまま続けた。

「やらなきやいけない課題に対して、自分なりに考えて行動する。成功したらなんで成功したかを、失敗したらなんで失敗したかを考える。失敗続きで心が折れたら、ゆっくり休んで折れたのをまた繋ぎ直す。それを繰り返して経験値積めるくらいの継続力があれば、あとはまあ追々でなんとかなるでござるよ」

「そういうものでしょうか」  
「多分ね」

バランスを取るためか、漣は「よっ」と声を上げて野菜を抱え直す。そうして漣はくるりと比奈に向き直り、にっこりと笑みを浮かべた。

「はい、到着。ここが目的地」

「あ、もう着いたんですね」

すっかり漣の話に聞き入っていた比奈は、その建物を見上げた。

そこは、昼間秋津洲に案内された間宮という名の食堂である。

「あれ、葛山さんも一緒？」

と、食堂からひよつこりと秋津洲が顔を覗かせた。

「野菜運ぶのを手伝ってもらったのでござる」

「漣ちゃん、最近は侍口調がトレンドかも？」

「そろそろ飽きてきた気もする」

「ええ……」

秋津洲は比奈から野菜を受け取ると、改めて御礼を言った。

「助かったかも。最近はやることが増えて人の手がいつも不足しがちだから」

「いえいえ、これくらいでしたらいつでも」

「本当にありがとうございます！ あ、そうだ。ちよつと待ってて」

秋津洲は駆け足で食堂の奥まで行くと、なにかを持って戻ってきた。

「はい、これが今回の報酬！」

秋津洲に渡された紙包みの中を見てみると、そこにはあられが入っていた。

「これ、貰っちゃって良いんですか？」

「どうぞどうぞ。何かしてもらったら御礼するのは当然のことかも！」

「気にせず貰って良いと思うよ。ここでは日常茶飯事だし。報恩の精神ってやつだね」

そう言いつつ、漣も秋津洲から同じあられを受け取っていた。

「お揃いですな」

漣が紙包みをひらひらと見せてくる。

ただ荷物を運ぶのを手伝っただけだが、今回、比奈は憧れの艦娘と同等の働きをしたとも言える。

そのことに思い至って、比奈はじんわりと温かいものを感じた。

まだ分らないことだらけだが、少しずつこういうことを積み重ねていけば良いというなら、どうにかなるかもしれない。

他の人たちに追いつくのは時間がかかるだろう。

それでも、自分がここでやっていくことはできるような気がしてきました。

「……なんだか、少しだけやれそうな気がしてきました。これ、大事にします！」

「いや、そこはさっさと食べて欲しいかも!?!」

「比奈ちゃん、なかなか弄りがいがあるやうなキャラしてるな……」

家宝のように恭しくあられを掲げる比奈に、秋津洲は一抹の不安を、漣はある種の期待をするのだった――。

混ぜて混ぜて目が回る（北上・隼鷹・飛鷹・大井・日向）

「へえ、お札新しいのに変わるんだー」

カウンター席で新聞を見ながら、北上が気の抜けた感想を口にした。

ここは泊地の一角にあるバー。マスターと呼ばれる男性が取り仕切る、憩いの場の一つである。

「渋沢さんかー。うんうん聞いたことある気がする。へえ、そうなんだねえ」

「あんまり実感わかないな。うちだと日本の通貨使わないし」

北上の隣でそんな味気ないコメントをしたのは隼鷹である。

彼女の言う通り、ここS泊地では日本の通貨は使われない。

泊地はソロモン諸島内にあるため、ソロモン諸島ドルが基本通貨になっている。

もつとも、泊地近辺にストアと呼べるようなものはないため、こちらでも滅多なことでは使われない。

泊地内では交換券や電子通貨ですべて済まされてしまう。

そのため、遠い日本でのお札刷新と言われてもピンと来ないのだった。

「隼鷹は味気ないなー。ただでさえ変化に乏しい環境なんだから、こういういろんなことに目を向けてみようよー」

「その理屈は分かるけど、実感わかないのは仕方ないだろ？ 北上はどうなんだよ」

「まあ、あたしも実感ゼロなんだけどね」

「ほれみる」

「とは言え――」

と、隼鷹の横で飲んでいた飛鷹が気怠そうにグラスを揺らしながら呟く。

「確かにここって変化ないのよねえ。世の中の動きに取り残されてい

るといふか。この前の改元の時も」

「こつちじや元号使う機会あまりないからねえ。さすがに『昭和も遠くなりにけり』くらい感慨は持ったけど」

「あたしなんか大正だよ」

「よっ、大将！」

酔っ払っているからか、流れるように隼鷹がダジャレを飛ばす。

北上はそれを受けて半笑いのまま肩を竦めてみせた。

そんな二人を呆れたように眺めながら、飛鷹が溜息をついた。

「なにか刺激が欲しくなるのよねえ。いや、深海棲艦との戦いみたいなリスキーな刺激はまっぴらだけど」

「——刺激と言えるかどうかは分かりませんが」

と、そこでマスターが口を開いた。

寡黙な人物だが、口下手ではない。

「皆さんはカクテルをよく飲まれますし、自作してみるといふのはいかがでしょう」

「お、シェイクする？ シェイクしちゃう？」

北上がシェイカーを振る動きを真似しながら得意げな表情を浮かべる。

マスターは微笑みながら「それもありませんが」と軌道修正をした。

「まずはビルドという方法からやってみることをお勧めします。シンブルながら奥深いですよ」

「ビルド？」

疑問符を浮かべる三人に、マスターは慣れた手つきでメジャーカップとグラスを取り出した。

最初に氷を入れて、これですかね、と二種類の材料を取り出し、それぞれメジャーカップに入れてからグラスに注ぐ。

それからジュースを注いで、最後にバースプーンを取り出し、ゆっくりと優しい手つきでグラスの中身を混ぜ始めた。

「ああ、マスターがときどきやってるやつだ」

材料をグラスに注いで混ぜる。

それがビルドと呼ばれるカクテル作成の手法だった。



「……つて、混ぜるだけ?」

「混ぜるだけと言っても難しいものですよ。混ぜ過ぎても駄目ですし、炭酸を使う場合は気泡を壊さないように気を付ける必要もあります」

どうぞ、とマスターは三人にカクテルを差し出す。

シンプルな作り方ではあるが、それで味が落ちるといふようなことはなかった。

「なるほど、確かにこれならあたしらでも簡単に作れそうだ」

「けど、なんで急にカクテル作りを?」

「飲み過ぎて迷惑かけて出禁とか?」

「いやいや、私も隼鷹もそこまで悪酔いはしてない——と思うけど。ここでは」

「ここでは?」

北上の追及に飛鷹は目を逸らした。

たまに隼鷹と二人で部屋飲みして凄まじいことになるのは、一応二人だけの秘密ということになっている。

「いえ、この泊地の支部にはまだバーがないものですから。支部ごとにバーテンダーを雇う余裕はないでしょうし、少しでも作れる人が増えていた方が良くと思います」

「あー、確かにね」

S泊地はショートランド島にある本部の他に、ソロモン諸島中央部と東部にそれぞれ支部を増設している。

当初に比べれば開発は進んできたが、生活に必要なものに限った話で、娯楽系の施設はまだまだ不足している状態だった。

「向こうにいるとここの味が恋しくなるもんねえ」

「そう言っていたけると作り手冥利に尽きます」

北上の言葉に、マスターは穏やかな笑みを浮かべた。

「もし自作に興味があるのでしたら、私のレシピノートをお送りしますよ」

「そうだねえ。物は試しつてことで、ちよつとやってみようかな」

「お、北上やる気じゃん。あたしもちよつとやってみようかな」

「隼鷹だけに任せたら際限なく作って飲み続けそうだし、監督するって意味で私も勉強しておこうかしら」

それぞれやる気を見せる三人に、マスターはレシピのデータと材料調達ルートの情報を送ることを約束する。

その日、三人はカクテルを作るマスターの一挙一動を、興味深そうに注視し続けるのだった。

それから少し日が経った頃。

三人が、東部担当として支部に移った翌日のこと。

「ん、大井。どうした？」

朝の体操をしていた日向は、よろよろと寮から出てきた大井に声をかけた。

「どうにも調子が悪そうだったからだ。」

「ああ、日向さん……。いえ、ちよつと眠れなくて」

「昨日は北上がこっちに來たばかりだから、話が盛り上がって夜更かしでもしたのか？」

「それもあるんですけど……」

「——ん？」

大井は鼻を摘まんでいた。

彼女の身体からは、どことなく芳醇な香りが漂ってくる。

決して悪い匂いではないが、結構鼻にくる。

「……これは、カクテルか？　なんだ、酒盛りでもしていたのか、珍しい」

「いえ、私はそんなには。ただ北上さんが、最近カクテルの自作に凝っているらしくて、昨日も結構な量を——」

そこに、フラフラとした足取りで飛鷹が顔を見せる。

「……どうやら、そつちも似たような状態だったみたいね」

大井の様子を見て察したのだろう。

飛鷹は二日酔いなのか、頭を抑えながら呻いていた。

彼女からも、カクテルの香りが漂ってくる。

「どうも納得のいく味にならなくて、何度もリトライしちゃうのよね

……」

「北上さんも同じような感じだったわ。真面目にやってるから止めるに止められないのよね……」

「マスターには、まず酔わないコツを聞いておくべきだったかも……」  
ううう、と下を向きながらボソボソと喋り続ける二人。

この調子だと、北上と隼鷹は部屋でダウンしていることだろう、と日向は嫌な汗をかいた。

「……伊勢もハマりそうだし、それとなく気を付けておかねばな」

日向の懸念が現実のものとなるのは、それから数日後のことだったという。

## 活気の集う場所

神奈川県横浜市南東部には、八景島と呼ばれる人工島が存在する。今、そこに遙か南の島からの来客が足を踏み入れていた。

「や、やっと着きました……」

到着早々、疲れ切った声を出したのは秋月である。

空港からここまで電車でやって来たのだが、混雑が酷くて、常に押し潰されていたのだ。

いくら艦娘が人間より高い身体能力を持つていようと、あの密集地獄はきつい。

「これだから都会は苦手デース……」

うへえ、とげんなりした顔で秋月の後から出てきたのは金剛だった。

彼女たちは普段、田舎も田舎の辺境の島に暮らしている。

こういう大混雑はほとんど経験していないため、耐性がないのだった。

「姉さんたち、すっかりダウンしてますね」

「すぐに回復すると思いますよ。二人ともタフですから」

秋月と金剛に続いて駅から出てきたのは、涼月と榛名である。今回、S泊地は横須賀鎮守府に招待される形でここまで来た。

予定が空いている者たちの中から抽選で選ばれたのが、この四人だった。

さすがに駅から出ると人口密度は大幅に緩和される。

開放感に包まれながら、秋月と金剛は思い切り背を伸ばした。

「んー、でも良い場所ネ！ できれば貸し切りで来たかったところだけど」

「多分、施設の方に行ったらまた混んでるんでしょうね」

「ははは、そう嫌がらないでよ」

先行きを案じる二人に「やあ」と声をかけてきた者がいる。

「——伊勢さん！」

「こうして顔を合わせるのは久しぶりだね、榛名」

S泊地の伊勢とは別の——横須賀鎮守府に所属している伊勢である。

顔を合わせるのは有事のときくらいだが、榛名とはときどきメールで連絡を取り合う仲だった。

「こちらとしては千客万来でホクホクといったところだからね。混雑上等ってわけよ」

「期間限定の施設開放——うん、良い試みだとは思うネ」

金剛が汗を拭きながら、施設に向かって歩いていく人の波を見やっ

た。

八景島には著名なレジャー施設があった。

しかし、深海棲艦の侵攻が始まって以降、湾岸沿いの設備は襲撃の恐れありということ、あまり人が寄りつかなくなり、当分の間は閉鎖する、というところまで追い込まれてしまったのである。

これを横須賀鎮守府の協力で一時的に復活させよう、というのが今回の試みなのである。

「安全さえ確保できれば、あそこはいろいろな設備が整った良い施設だからね。人は集まると思ってたよ」

「伊勢さんたちがかなり力を入れていた、と吹雪さんから聞きました」

「あ、そうなの？ 吹雪もお喋りだなあ。秋月、他に何か聞いた？」

「ボルシチがおススメだよ」

期待感溢れる眼差しを向けてくる秋月に、伊勢は若干困ったような笑みを浮かべた。

「あー。ボルシチね」

「なにか問題が？」

「いや、うん。……まあ、ずっとここにいってもなんだし、とりあえず案内するよ」

歯切れの悪い伊勢に先導され、四人は大橋を渡り、施設へと向かっていった。

「今の待ち時間は、三時間ほどの見込みです」

「えっ……」

スタッフから告げられた無情な言葉に、秋月の瞳から光が消えた。施設に入つて道なりに進んだ場所。

そこで遭遇した行列——ボルシチ待ちの列を見て「これなんの列ですか」と尋ねたのが、秋月の悲劇の始まりだった。

「ここに並んでる人たち、全部ボルシチ待ちなんですか……？」

「そうなりますね」

「えっと、ずっと並んでないと……駄目、ですよ……」

「それは、まあ、はい」

スタッフとのやり取りを終えて金剛たちの元に戻ってきた秋月は、どこことなく闇を感じさせる雰囲気をもとつていた。

「姉さん、大丈夫？」

「はい。秋月は大丈夫です」

「あの、それ私の台詞……」

「秋月は大丈夫です。行きましょう」

ゆらりと幽鬼のような足取りで進んでいく秋月の背中を見ながら、金剛たちは困つたような表情を浮かべた。

「秋月さん、とても楽しみにしてましたからね」

「私もこんなに混雑してるとは思いませんでした」

どこまでも続いてそうな列を眺めながら、涼月が素直な感想をこぼした。

「特典つけたのがまずかったかもねえ」

「特典？」

「うちの鎮守府で人気ある子のグッズを少々」

「伊勢さん、商売つ気出し過ぎです」

榛名に突っ込まれて、伊勢は「いやーまいったよ」と実に嬉しそうな顔を見せてみた。

どう見てもまっぴら顔には見えない。

「というか、行列だらけですね」

「それだけ、この施設の再開を楽しみにしていた人が多かったんでしょうね」

施設にはアトラクションが沢山あるのだが、どこも人が多く、何に

乗るにしても三十分以上は待つことになりそうだった。

人の多さに圧倒される涼月の肩に、榛名がそつと手を乗せた。

「これも横須賀鎮守府の努力の賜物ってことネー？」

「自分で言うのもなんだけど、そうだと思ってるよ。いや、うちだけの働きじゃないけどね」

施設には、老若男女問わず様々な人々の姿があった。

共通しているのは、皆が楽し気にしているという点である。

延々と続く行列にもめげず、近くにいる人々と談笑している者。

一人パンフやスマホを見ながら、どう回ろうかと計画を練る者。

近くの椅子に腰かけて、のんびりとクレープを食べる者。

「——平和ネ」

「うん、平和。実のところ、海外の拠点の艦娘を招待したのは、この風景を見てもらいたかったからなんだよね」

海外にいと、どうしても日本国内の状況には疎くなる。

そんな遠い地の艦娘に、自分たちの活動が人々のためになっていることを知ってもらいたかった、と伊勢は語った。

「内地の平和は、そっちの功績だと思うケド」

「私たちだけで維持できる平和じゃないよ。海外の拠点が踏ん張ってくれるからこそ、こういう催しもできたんだ」

「そう言ってもらえると、嬉しいです」

伊勢の言葉に榛名が笑みを浮かべる。

そこに、ふらふらと先行していた秋月が、幼子を連れて戻ってきた。

「姉さん、その子は？」

「それが、どうも迷子みたいで……」

四歳か五歳くらいの子だ。

どうやら、この混雑の中で親とはぐれてしまったらしい。

「どうしましょう、姉様」

「言わずもがなネー。まずはこの子を助けるところから始めマース！」

金剛の宣言に、榛名たちが一斉に頷いた。

秋月も、瞳に光が戻っている。ボルシチのショックよりも、困った

人を見過ごせないという想いの方が強いのだろう。

……親が見つかったら、スタッフ用のボルシチでもお裾分けしてあげようかな。

手分けして親の搜索に動き出すS泊地の面々を見ながら、伊勢はそんなことを思う。

束の間の復活を遂げた施設は、大勢の来客に恵まれ、昼夜問わず活況を呈した。

その結果を受けて、横須賀鎮守府は時折同施設とイベントを開くようになったという。



## 知らぬ母親（龍驤・子曰・初霜）

「母親？」

突然の来訪者が放った問いかけに、龍驤は疑問符を浮かべた。

S 泊地の中庭にあるベンチの一角。

気持ちの良い快晴の下、龍驤は久々の休日に読書を楽しんでいた。

そこに突然現れて、母親とはいかなる存在か、という問いかけを投げてきたのは子曰と初霜だった。

「藪から棒にどうしたん？」

「二人で今日は『母の日だね』って話になったんですけど」

「子曰たち、よく考えたらお母さんの人いないし、どういうのかなーって」

艦娘には艦霊ベースの者や人間ベースの者がいる。

人間ベースの艦娘は元々人間なので、両親が存在する。

ただ、艦霊ベースの艦娘にそういう存在はいない。

軍艦の御魂の分霊を艦装に降ろして受肉させた存在なので、人間でいうところの『親』がないのだ。

子曰と初霜は、艦霊ベースの艦娘である。

ただ、それは龍驤も同じだった。

「いや、うちもそういうのおらんからよく分からんなー。……というか、なんでうちに聞こうと思ったん？」

「空母だから」

「……一応止めたんですが」

臆面もなく言い切る子曰と、やや申し訳なさそうな初霜。

ここに来るまでの間、どういうやり取りがあったのか、想像がつくようだった。

「なんとなくのイメージはあるんですが、考えてみたらそれが合ってるかどうかって確認したことがないですし」

「うちの常識古い可能性あるからなあ」

なにせここは本州から遠く離れた辺境の地。そもそも異国の地である。

最近の日本の家庭の在り様など、ほとんど入ってこない。

「やっぱり人間だった子に聞いてみた方が良いですかね」

「いや、それも止めておいた方がええんちゃうかな。いろいろ事情あって艦娘になった子も多いやろうし、迂闊な質問して地雷踏み抜くことになつたら目も当てられん」

「あ、そうですね。すみません、配慮が足りませんでした」

「いや、まあうちが気にし過ぎなのかもしれないけど」

しかし母の日か、と龍驤は『母親』というものに思いを巡らせる。

「父親みたいな存在ならおつたけど」

「お富士さんも、お母さんというのとはちよつと違いましたもんね」

「あの婆さんはなー。年齢的には母親っちゅうか婆様やし、年齢取っ払って考えてみても母親というか師匠って感じで」

お富士さんというのは、以前この泊地で提督を務めていた老婦人のことである。

自他ともに厳しい人だったが、どこか飄々としたところもあり、畏れられつつも敬われていた。

「しかし、これまであまり真面目に考えてこんかったけど、一度気にすると確かに気になるな」

「でしょ?」

「んー、けどなあ。これ誰に聞くのがええんやろ」

そのとき、中庭の外縁部にジャージ姿の女性が姿を見せた。

最近よく泊地内を走っている姿を見る。少し前に正式に配属された新人スタッフの女性だった。

「あ、比奈ちゃんだ。おーい」

子曰が呼びかけると、比奈と呼ばれた女性は会釈しながら三人のところへ駆け寄ってきた。

「こんにちは。皆さんお集まりでどうされたんですか?」

「暇潰しのガールズトークや。……という冗談は置いておいて」

龍驤は比奈を注視した。

じつと見られて落ち着かないのか、比奈は首を傾げながらそわそわ

としている。

「比奈ちゃん、君はお母さんでござ健在？」

「え、はい。普通に生きてますー！」

「普通にか。それはええね」

質問してみるには最適の相手かもしれない。

龍驤は子曰たちの抱いた疑問を比奈に説明してみせた。

「なるほど。母親というのがどういうものか知りたい、と」

「そうそう。君のお母さんってどんな人なん？」

「母ですか。うーん、改めて聞かれると表現に困りますね」

比奈は割と気の利くところがある。

龍驤たちの質問の主旨から、単に自分の母親のキャラクターを説明するだけでは駄目だろう、と考えを巡らせていた。

とは言え、母親にもいろいろいる。

理想の母親像というのも、人によって変わってくるだろう。

「うちの母は……そうですね。炊事洗濯は苦手な人でした。そういうのはだいたい父がやっていましたね」

「へえ、そうなんだ。そういうのってお母さんがやるものだと思っただ」

子曰が意外そうに言う。

彼女たちが思い描く家庭のイメージは、彼女たちが実艦だった頃のもの色が濃く反映されている。

なので、共働きしたり旦那が家事をしたりする家庭像があまり浮かばないのかもしれない。

「うちの母は病院勤めで、家にいる時間があまりなかったんですよ。いつの間にか戻って来ていて、いつの間にか出勤してる」

「寂しくなかったの？」

「子どもの頃は少し寂しかったですね。でも父はいつも家にいて構ってくれたので、そこまで気になるわけでもなかったというか」

ただ、母が家にいるときは、いないときよりも家が明るかった。

父や兄弟たちも、皆嬉しそうな顔をしていたように思う。

比奈がそう告げると、龍驤は「なるほどなあ」と頷いてみせた。

「昔でいうところの『良妻賢母』のイメージはちよい古くなったけど、根っこのところは変わらんね」

「根っこのところ、ですか？」

「せやせや。父親がいると家が引き締まる。母親がいると皆が安心する。そういうことと違うん？」

龍驤の説明が合っているかどうか、比奈には判断ができなかった。当てはまらない家庭も多いだろう。

ただ、自分のところの家はそうだったと言えなくもない。

「そう——ですね。少なくとも、私はそう思います」

うんうんそうだろうと龍驤が頷き、子曰と初霜が「なるほどなー」と感心する。

「うちでいうと誰だろうね？」

「やっぱり鳳翔さんでしょうか」

「あんまあいつの前でそれ言わん方がええで。あれで結構気にしいやから」

良妻賢母の代表格のように語られる鳳翔だったが、艦歴上はそこまですで年長というわけでもない。

最初の空母という経歴、そしてその性格からお母んと評判ではあるが、本人としては「私子どもいないんですけど……」とやや複雑な想いを持っているようだった。

「じゃあ陸奥さんとか金剛さん？」

「香取先生とか筑摩さんもそんな感じしますね」

泊地で誰が一番母親らしいのか。

そんな子曰と初霜のトークを眺める比奈に、龍驤は「比奈ちゃん」と声をかける。

「あ、はい。なんででしょう？」

「余計なお節介かもしれないけど、ちゃんとお母んには連絡入れるんやで」

遠い異国の地で働く娘のことなら、親は心配しているだろう——。

比奈には、そんな風に気を回す龍驤が、どこことなく故郷の母に重なって見えた。

## 昼下がりのうどん定食（白雪・磯波・ウォースパイト・吹雪）

特に深い理由はないのだが、うどんを食べたい気分だった。

「ごめんね。ちようど今切らしてて」

間宮食堂に行ってみたが、材料がないとのことだった。

確認してみたが、次に材料が届くのは三日後らしい。

ここの立地を考えると十分早い方だし不満はないのだが、それはそれとして、今、うどんを食べたい気分なのである。

寮に戻り、台所を漁ってみる。

台所に置いてある食材は基本的に共用だった。

個人のものにはシールを貼っておく。シールがないものは好きに使って良い。

しかし、うどんはどこにも見当たらなかった。

そばならある。しかし、今食べたいのはうどんなのだ。

「白雪ちゃん、どうしたの？」

どうすべきか思索していると、偶々通りかかったのか、磯波が声をかけてきた。

「なんだか数日前見かけて気になってた商品を買に行ったら売り切れだったみたいなの顔してるけど」

「磯波ちゃん、なんでそんなに表現が的確なの」

「あ、本当にそういう状況だったんだ」

磯波も割と適当に言ったらしく、的を射た表現だったことに自分で驚いていた。

「うどんが食べたいの」

「おうどんかあ」

「でも間宮にもないし、ここにもないのよ」

白雪の視線は、引っ張り出してきた小麦粉に注がれている。

「手打ちうどん作ろうかな」

「作ったことあるの？」

「ないけど、作り方は知ってるよ」

発言だけ見ると心許ないが、言っているのが白雪だからか、妙な安心感があった。

「それなら私も作ろうかな。ちようどお腹空いてたし」

「じゃ、二人分ね。……あ、でも分量はちよつと自信ないな。少し多めにしておこつか」

白雪がボウルを取り出して、塩・水・小麦粉を適当に入れてこね続ける。

一緒にこねるわけにもいかず、磯波はうどんの具を準備することにした。

「山菜が結構余ってるから、山菜うどんにする？」

「うん、あと卵も乗せたいね」

「卵は——うん、あるある。最後に乗せようか」

話しながらも、磯波は大根を取り出してすりおろし始める。

そうしていると、台所にウォースパイトが顔を見せた。

「あら、二人とも何をしているのかしら」

「あ、ウォースパイトさん」

「うどんを作ってるんです」

生地をこねる白雪と大根をすりおろす磯波を見て、ウォースパイトは感心したように頷いた。

「生地から作るなんて凝っているわね。よければ私もご一緒に良いかしら」

「勿論。あ、でも生地ちよつと増やさないと駄目かな」

元々二人分と見込んで作り始めたのだ。

ウォースパイトの分も含めるとなると、やや少なくなってしまう恐れがある。

「ならおにぎりを作ればいいわ。おにぎりとセットなら、うどんは多少少なくても問題ないでしょう」

「それなら大丈夫そうですね、ウォースパイトさん、おにぎり作れるんですか？」

「ええ、金剛に教えてもらったからパーフェクトよ」

寮の共用炊飯器の中身はしっかりと入っていた。

ウォースパイトはラップを広げて、そこにご飯を乗せていく。

「具は……昆布と鮭があるから、これで良いかしら」

「そうですね。……もしかして結構おにぎり食べてます?」

「ええ。意外だったかしら」

「なんとなく同じ携帯食だとサンドウィッチ派かと」

「ふふ、どちらも好きよ。ちなみにおにぎりが一番好きなのはツナね」

このS泊地はソロモン諸島にあるが、構成員の多くは日本に縁があるので、和食が食卓に並ぶことも多い。

ウォースパイトたち海外の艦娘も、そういう拠点で生活していくうちに、食文化に馴染んできたということなのだろう。

ウォースパイトの言葉に嘘はない。

具をご飯の上に乗せると、ラップ越しに丸めて、そこから少しずつ形を整えていく。

それなりに慣れた手つきで、傍から見てもこれが初めてではないことが分かる腕前だった。

その間にも、磯波はキノコやネギを切っていく。

白雪は生地を寝かせている間、ウォースパイトと並んでおにぎり作りを手伝った。

しばらく寝かせた生地を三人で交互に踏み、その後またしばらく寝かせて、最後に棒で平たく伸ばす。

「こうして見ると、しっかりうどんになってる……!」

「ちゃんとできたみたいで良かった」

「あら、初めてだったの?」

慣れた風に見えたから意外だった、とウォースパイトは素直な感想を口にした。

「それじゃ、切りますね」

麵切り包丁はないので、普通の包丁で丁寧に切っていく。

「なんだか芸術的なまでに等間隔で切っていくわね」

「白雪ちゃん、こういう作業は凄く得意なんですよ」

やがて、綺麗に切り揃えられたうどんが出来上がる。

つゆは既に磯波が仕上げていたので、あとは茹でて具を入れれば出来上がりである。

ただ。

「適当に入れたからか、少し多かったみたいだね……」

「おにぎりなくても良かったかもしれないね。ウォースパイトさん、少し多めでも食べられますか？」

磯波に聞かれて、ウォースパイトはやや困ったようにお腹をさすった。

「最近ちよつと控えるようにしてたから、前より小食気味で」

「——どうしたの、三人揃って」

三人が頭を悩ませていると、台所の外に一人の少女が現れた。

遠征から帰ってきたばかりなのだろう。やや服が汚れていた。

少し疲れ気味のようにも見える。

「吹雪ちゃん。今帰ってきたところ？」

「うん。これからお風呂入って寝ようかと——ああ、でもその前に何か適当なの食べないと」

ぐう、と吹雪のお腹が盛大に鳴る。

それを聞いて、三人は顔を見合わせて頷くのだった。

「なんだかご馳走になるだけだと悪い気がするなあ」

うどんをすすりながら吹雪が申し訳なさそうに白雪たちを見る。

「いいのいいの。作り過ぎてこっちも困ってたんだし」

「そうそう。遠慮しなくて良いよ」

「どうしてもお返しがしたいなら、私、今度は吹雪の手料理をご馳走になつてみたいわね」

コシのあるうどんの食感。

それを彩る大量の山菜。

セットでつけられた食べやすいサイズの温かいおにぎり。

簡素ではあるが、充実した内容だった。

「うーん、そんなに美味しいものは作れないですよ？　そこまで得意というわけじゃないですし」



「でも苦手ってわけでもないよね。何度か一緒にお菓子作ったじゃない」

「あら、実は結構いけるのかしら。ならスコーンをお願いできるかしら」

「ハードル上げないでくださいよー」

和やかな昼下がりの食卓。

S 泊地でたまにある光景の一つだった。

## とある鎮守府の奇妙な話

猛暑である。

南国に位置するS泊地は年中高温多湿の環境にあるが、今日はまた格段に暑い。

「そんなわけで涼しくなるよう怖い話をしようと思う」

厳めしい表情でか細く告げたのは鈴谷だった。

両隣には沖波と高波、正面には熊野と長波・朝霜がいる。

「怪談って言えば夏の風物詩だからねえ」

「で、でも私は特に話せるようなことないかも、です……」

「ああ、いいよいいよ。怪談しようっていうの思いつきだし。ネタある人だけで全然オツケー」

恐縮する高波に、鈴谷は「気にするな」と手をひらひら振ってみせた。

そんな中、真つ先に手を挙げたのは朝霜だった。

「んじゃ、あたいからいつてみようかね」

「ノリノリですわね。何か自信のあるネタでも持っているの?」

「まーな。と言ってもあたい自身が見聞きしたネタじゃあないんだけど」

それは、朝霜がこの泊地に来る前にいた鎮守府での話らしい――。

あたいが元々いた鎮守府は、いろいろあつて急遽設立した曰く付きの鎮守府さ。

最初の頃は廃校を営舎として利用していたらしい。あたいが着任した頃も残ってたっけ。今はどうだろうな。

廃校。ベタだろう?

表向きは近くの別の学校と合併して、生徒はそっちの方に移ったつて言われてたみたいだけど――まあ、実際はどうもそういう単純な話だけじゃなさそうだって噂があつてさ。

その学校、呪われてたらしいんだよ。

阿呆くさいと思うかい?

でもさ、艦娘なんてのがこの世にいるんだから、幽霊だとか呪いだとかだつて十分あり得ると思わないか？

深海棲艦だつて、ある意味一種のお化けみたいなものだろう？

まあ、それを言ったら艦娘も似たり寄ったりなんだろうけど——。話を戻そう。

呪いとやらが具体的に何を指し示すのかは誰も知らなかった。

ただ、その学校では不審死を遂げる教員や生徒が出ていたらしくて、そういうところから広まった噂なんだろう、と鎮守府の皆は言っていた。

で、物好きな、その不審死について調べてた奴もいてさ。うん、新聞にも残っていたそうだけ。

地方紙の隅っこに、一度きり。そういうパターンが多かつたんだそう。

妙な話だよな。人が死んでるのに、なんか「あまり騒ぎ立てるな」みたいな扱いされてる。

とは言えそれ以上は調べることもできない。

興味本位で警察とかに当時のことを聞くわけにもいかなかったし。当然、廃校になったときに、当時の学校の資料なんかは全部処分されてたからな。

お手上げつてやつさ。

けど、妙な縁というのはあるもんでね。

鎮守府のスタッフに、当時のことを知ってる人がいたんだよ。

地元暮らしで採用されたスタッフ。廃校の元生徒だつたらしい。

その人が言うには、呪いだなんだつてのは噂に尾ひれがついて回っただけだろうつて。

廃校になつたのは普通に統合された結果で、廃校になるまでは生徒も教員も普通に通つてた——ありふれた学校だつたらしい。

ただ、不審死を遂げた人がいたのは事実で、当時はちよつとした騒ぎだつたそう。

なんでも、死んだ人たちには一つの共通項があつたらしい。

なんだと思う？

……ああ、なんかここまで来て話すべきか少し悩んじゃうな。  
もったいぶるなって？

うーん、なら言うけど、あとで文句言わないでくれよ？

不審死を遂げた人たちは、夜間に集まって怪談をしていたらしいんだ。

……嫌そうな顔すんなよな。だから言ったんだよ。もうやめないからな？

怪談倶楽部っていう、同好会みたいなのがあって、そのメンバーと友達と、顧問の先生。

結構賑やかそうだよな。実際、結構盛り上がったらしいぜ？

動く石像。トイレの花子さん。追いかけてくる人体模型。人を喰らう体育倉庫。人を呼ぶ自殺スポット。音楽室の生きた肖像画。

そんなよくある怪談話で、ひとしきり盛り上がったんだそうだよ。

そのとき語られたのは六つの怪談。これは生徒たちが語ったんだそうだよ。先生たちはただ聞いてるだけだったそうだよ。

で、あと一つあれば七不思議になるのにな——って誰かが言い出したらしい。

そんなの別にこだわらなくても良さそうなものだけど、参加した生徒たちはすっかり盛り上がり上がったままってな。

その場で、七番目の怪奇を創作しちまったんだ。

しかも、その内容がまたえらく物騒なものだな。

夜に学校で怪奇を語る者は、怪奇に成り果てるであろう——ってな。

で、その場は何事もなく解散。

生徒たちはその夜のことを楽しい思い出にして、翌日から再び学生生活に戻った。

けど、一週間くらいした頃だったかな。

そのときの一人が、いなくなったんだよ。

親御さんから学校に連絡があって、教員は一生懸命搜索したらしい。

で、学校の中庭に石像があったらしいんだけど、その石像の下の地

面が少しおかしいって誰かが気づいた。

どうも、何か掘り返して埋めたように見えるってな。

しかも石像の手元は、なんだか分からないが赤黒いものが付着している。

気味悪いなあと思いながら皆がそこを掘り返すと——出てきたわけだ。そいつが。

勿論、生きちゃいない。けど、地面の下に埋められたせいで死んだわけでもなさそうだった。

頭部を硬い何かで殴られたのが致命傷だったそうだけ。

それを皮切りに、被害者は少しずつ増えていった。

二人目はトイレで。三人目は廊下で。四人目は体育倉庫で。五人目は飛び降りだ。

長波姉は気づいたみたいだな。

そうそう。この人たちの死因、怪談話で出てきたものばかりなんだよ。

残った一人も気づいた。自分が語った音楽室には決して近づくまいと誓ったそうだけ。

音楽の授業はサボった。先生に怒られようと家族に叱られようと、決まっていた徹底ぶりだ。

その甲斐があつたと言うべきなのか——六人目の犠牲者は、そいつじゃなくて、怪談話のときに立ち会った顧問の先生だった。

その先生は別に音楽担当ってわけじゃなかったらしいんだが、音楽室で、突然心臓麻痺を起こして亡くなつたらしい。

そうして一人生き残つたそいつは、罪を告白するように、あたいらにこの話を聞かせた——ってわけさ。

そこで朝霜の話は終わった。

話をじつと聞き入っていた周囲の面々は、すっかり表情を青くしている。

「それって、本当の話なんですか？」

「怪談話をしてた連中が不審死を遂げた……ってのはマジだけ。少な

くともそいつはそう言った」

「怪談話の怪談というのは想像してなかったよ……。朝霜つてば、恐ろしい隠し玉いきなりぶっこんで来るんだから」

「……で、続ける?」

長波の問いに、頷く者はいなかった。

「じゅ、十分冷えたかもです……」

「そうだねえ。これ以上話すと私たちも不審死を遂げかねないし、今日はこれくらいにしておこっか」

自然と解散ムードになる鈴谷たち。

その中であつて、一人黙りこくつていた沖波が、朝霜の側に寄つてきてコツソリと尋ねた。

「……ねえ、朝霜」

「ん?」

「結局、現実のものになったのは六つだけだったの?」

沖波の問いかけに、朝霜は表情を硬直させた。

その反応を見て、沖波はもう一步踏み込む。

「その人、呪いの噂を否定してたのよね。でも、さっきの話を聞く限りだと、不審死は呪いそのものに見える。……七つ目って、なかったの? その話って、本当にさっきの——」

「沖波姉」

そこで、朝霜は沖波の口到人差し指を押し当てた。

「この話は、ここで終わりさ」

朝霜が元々いた鎮守府は、既がない。

事の顛末を語ったというスタツフが今どうなったかを確認する術も、既に失われている。

「それとも——続けたいのかい?」

猛暑の中、いやに冷たい風が、沖波の頬を撫でた。

旅をする日記帳（プリンツⅡオイゲン・朝雲・山雲・酒匂）

その日、オイゲンは暇を持て余して泊地内を散策していた。

最近、泊地は月一回の有給消化を義務付けるようになった。

それを失念していて、月末に慌てて取得。その結果出来上がったのは、何の予定もない休日だった。

プランも何もないので、誰かを誘って何かをするというのも難しい。

それでやむなく、一人泊地内を当てもなく歩き回っているのだった。

「うーん、流石にそうそう新しい発見はないよねえ」

オイゲンが現在いるのはS泊地の中央支部である。

ショートランド島にある本部と比べると規模も小さく、多少歩けばすぐに一周できてしまう。

小さめの拠点ということもあって、正午前に早くもオイゲンの散策は終わろうとしていた。

どうしたものか——と舎に戻ってきたところで、玄関の脇のところに何かが落ちていることに気づいた。

「なんだろう、これ。日記帳？」

市販の日記帳のようだったが、持ち主の名前は書かれていない。

ただ、新品というには些か使い込まれているようで、少し汚れが見て取れた。

「誰かが落としていったのかな」

とは言え、名前が確認できないのでは届けようがない。

中を見れば誰のものか分かるかもしれないが、勝手に見て怒られないかどうか気がなった。

日記帳を持ったままオイゲンがそわそわしていると、外から誰かが戻ってきた。

「あれ、オイゲン。そんなところで突っ立ってどうしたのよ」

声をかけてきたのは、オイゲンの同期である朝雲だった。妹の山雲も一緒である。

「あ、二人とも。丁度良かった、これ誰のか分かる？」

オイゲンから差し出された日記帳を手にとると、朝雲は「ああ」と頷いてみせた。

「これ、リレー帳じゃない」

「……リレー帳？」

「そうそう。正式名称はよく知らないけど、皆そう読んでるのよね」

見てみなさいよ、と朝雲は躊躇いなくノートを開いてオイゲンに差し出した。

遠慮がちに中を覗いてみると、そこには様々な内容の記事があった。

普通の日記のように、日々の出来事を綴っているのは由良。

新聞記事のような構成の内容にしているのは、青葉——ではなく衣笠だった。

やたら達筆そうな筆書きなのは、おそらく神通なのだろうが、字が崩れているので、オイゲンは正確な読み取りができなかった。

イケメン風の長門が描かれているページもあった。秋雲とサインされている。

「いろんな人が書いてるんだ」

「形式も自由。交換日記ならぬリレー日記……といったところね」

「山雲もねー。前に書いたことあるんだよ」

見ると、確かに山雲の名前が書かれたページがあった。

そこには、泊地本部で山雲が育てている野菜の飼育状況が書かれている。

簡単なイラストも描かれていた。どうやら一緒に野菜を育てている艦娘——おそらく萩風辺りを描いているようだった。なんとも微笑ましくなるページである。

「でも、なんでこういうのがあるんだろう？」

「元々はお富士さんが企画したものらしいわよ。泊地もかなり人が増えたから、普段なかなか交流する機会のない人たちもいるだろうし、



そういう人たちが交流するキツカケにでもなれば——って」

お富士さんというのは、以前泊地の提督を務めていたお婆さんのことだ。

厳しいことで有名で、オイゲンも何度か雷を落とされたことがある。

ただ、その厳しきは常に相手をより良い方向へ導こうという意味から出ているものだった。

「ねえねえ、これって私が書いても良いのかな」

「別に良いんじゃない？ 特に記入者に制限設けるようなルールはないはずだし」

「気が向いたら書いてねー、次に適当な人に渡すんだよ」

随分と緩いルールで運用されているらしかった。

だからこそ、こんなところに置き忘れられていたのだろうか。

「これまで書かれた内容見るだけでも結構時間潰せて面白いわよ。艦娘だけじゃなくて、スタッフの人たちも書いてたりするし」

「へえ。楽しみだなあ。ちようどやることなくて暇だったんだよ」

「あら、暇だったの？」

そいつは良かった、と朝雲は手を叩いた。

「日記も良いけど、その前にちよつと畑仕事手伝ってくれない？」

「今回種をいくつか持ってきたから、ここの畑を少し広げたいの」

そのときようやくオイゲンは、二人が農作業用の格好をしていることに気づいた。

どうやら作業の途中だったらしい。

「いいいいいよー。情けは人の為ならずってやつだね！」

「正しく覚えているのか偶々合ってたのかどっちかしらね……」

「あ、朝雲酷いなあ！ 私だって何年も日本語に触れてるし、そうそう角を違えることはないよー！」

「……お門違いって言いたいの？」

「そう、それ！」

「オイゲンさんの言語学習過程が気になるわね」

何気に辛辣とも取れそうな発言をする山雲にハテナマークを浮か

べながら、オイゲンは準備を整えるべく、リレー帳を片手に部屋へと戻って行くのであった。

オイゲンがリレー帳を拾ってから一週間後。

泊地本部に戻ってきたオイゲンが歩いていると、背後から「ぴゃー」と何者かに抱き着かれた。

「な、何奴でござるう!？」

「ふっふっふー、良いではないか良いではないかー」

わざとらしい反応を示すオイゲンに抱き着いているのは、普段からよく一緒にいることが多い酒匂だった。

同じドイツの艦娘を除くと、一番親しい間柄の相手と言えるかもしれない。

「むむ、その手に持っているものは……!」

「ん、酒匂これ知ってるの?」

「——なんだっけ、それ?」

知らなかったらしい。最初のリアクションは特に意味のないものだったようだ。

確かに、酒匂の書いた記事と思しきものは見当たらなかった。酒匂の姉である阿賀野は何やら珍妙なものを書いていたようだが、オイゲンにはそれがなんなのかサッパリ分からなかった。

試しに酒匂にその部分を見せると、やはり分からなかったのか、頭に疑問符を浮かべていた。

「阿賀野お姉ちゃんは、いろいろと独特だからねえ」

それは酒匂も同じじゃないかなあ、と思うオイゲンだったが、あえてツツコミは入れなかった。

割と空気を読むこともあるのである。

「面白そうだし、酒匂も書いてみようかな」

オイゲンから一通りリレー帳の話聞いて、酒匂も興味を持ったらしい。

「そう? 丁度良かった。次、誰に回そうかで悩んでたんだ」

きつと自分の前の人もそうやって迷った挙句、あそこに置いていっ

たのかもしれない。

自分の前に記事を書いていた艦娘の名前を思い浮かべながら、オイゲンは一人頷いてみせた。

「でも、こういうのも面白いね。秘密じゃないけど、なんだか秘密を共有してるみたいで」

そう言いながらページを開こうとすると酒匂を、オイゲンはそつと制止した。

「酒匂、見るのは部屋に戻ってからでお願い」

「え、なんで？」

「いや……なんか改めて考えると、自分の書いたこと見られるのが、なんか気恥ずかしいというか」

「そういうものなんだ」

リレー帳を抱えて動きを止める酒匂。

オイゲンの警戒心の混じった眼差しが若干緩んだ瞬間、酒匂は素早くノートを開いてみせた。

「あーっ、駄目！ 駄目だってばー！ 返して！」

「ぴゃー！ と言われると気になるんだもん！」

リレー帳を片手に駆けまわる酒匂と、それを追いかけるオイゲン。

後日。その様子を見ていたとある戦艦によって、その一部始終がリレー帳に書かれることになり、オイゲンが意外と恥ずかしがり屋という情報が泊地に広まることになったのだが——それはまた別の話である。

そろそろ寝ないと（最上・三隈・ルイージ・伊58）

これは、湿気の酷い夜の話。

「今日はいろいろあつて疲れたねえ」

「数日分は動いた気がしますわ……」

最上と三隈は、へとへとになりながらも夕食と入浴を済ませ、やつとの思いで部屋まで戻ってきた。

普段は身だしなみに気を遣う三隈だったが、今はボサボサになった自分の髪を見ても「明日整えますわ」と先送りにするくらい疲れている。

「明日も早いですし、今日はもう寝た方が良くわね」

「そうだねー。……ああ、明日のこと考えたくない。なんで明日は休日じゃないんだあ」

頭を抱えながらベッドに倒れ伏す最上。

現実是非情なものだ。疲労困憊だろうとなんだろうと、勤務日は遠慮なく容赦なくズカズカと近づいてくる。

「愚痴っても仕方ないですよ、もがみん。三隈はもう寝ますわ。もがみんも早く寝た方が良いでしょう」

「んー」

いつの間にか夜着に着替えていた三隈は、すつとベッドに入り込んだ。

それから一分も経たないうちに、上品な寝息が聞こえてくる。もう寝たらしい。

「よっぽど疲れてたんだな、三隈」

疲れ、という言葉を口にした途端、最上は凄まじい倦怠感に襲われた。

身体が先程までの数倍は重くなった気がする。

「ボクも人のこと言えないか。さっさと寝よう……」

のろのろと着替え、電気を消してベッドに入り込む。

今はただ、明日に備えて休むことだけを考えよう――。

「おかしい」

思わず疑問が口から出てしまった。

あれから一時間。

相変わらず疲労は残っているのだが、なぜか眠れない。

今日はいつも以上にジメジメしているからだろうか、と汗を拭う。

S泊地があるソロモン諸島は年中高温多湿に見舞われているが、今日は特にひどい気がする。

「ドライでもつけてみるかな……」

三隈と折半で購入したエアコンで、ドライをオンにする。

少しずつだが、湿気のひどきはマシになってきたような気がした。

「よし、これで寝られるだろ……」

おやすみ、と横になって目を閉じる。

「おかしい」

湿気は改善できたはずなのだが、今度は身体のあちこちがむず痒くなってきた。

それが気になって、どうにも眠れない。

「虫でも入り込んだかなあ」

暗闇の中を注視してみるが、虫の気配はない。

となると、単純に自分の身体の問題と考えるべきだろう。

「困ったな。なにかで気を紛らわせるか……?」

そこでふと、先日購入したばかりの電子コミックがあることを思い出す。

手持ちのタブレットをベッドの中でつけて、三隈を起こさないよう注意しながらコミックに目を通す。

「あ、これも新刊出てる。電子書籍は予約したのすぐ忘れちゃうんだよね」

最初に思い浮かべていたのは一冊だけだったが、いざ端末を開いてみると、新刊は五つもあった。

それ以前に積んでいたものも四冊くらいある。

「……寝落ちするまで適当に読めばいいかな。うん、読んでるうちに

眠くなってくるよね」

「そう自分に言い聞かせながら、最上は一冊目の表紙をタップした――」

「うん。そんな気はしてたんだ」

三冊読み終えた辺りで、流石に本を読む手を止めた。  
むず痒さは消えた。

そして、脳が活性化した。

端的に言うと、眠気はますます遠のいた。

時刻は既に午前二時。

早めに休もうとベッドに入ったのが十時頃だから、もう四時間経過したことになる。

明日は――というか今日は六時くらいに起きないとまずい。

「よし、もう寝る。寝ることに集中するぞっ」

自分に言い聞かせて、再び目を閉じる。

湿気はない。むず痒さもない。

今なら眠れるはずだった。

「……眠くならないな」

時間を確認する。二時十分。少し焦りが募る。

「いや、余計なことは考えるな最上。今は寝ることだけ考えるんだ……!」

目を閉じて、身体を動かすまいと丸くなる。

無心。余計なことを考えまいと、無の境地を目指す。

聞こえてくるのは、自分の呼吸音くらい。

このままいけば、眠れるはずだった。

「ううん……ぼ、ボンジョールノオ……」

そのとき、聞こえてしまった。

対面で眠っている、三隈の寝言。

小さな、本当に小さな――よほど耳を澄ませなければ聞き逃してしまいうくらいの寝言である。

ただ、最上には聞こえてしまった。

眠るため、己の中から余計なものすべてを削ぎ落そうと集中していたが故に。

(……ボンジョルノって、何語だっけ?)

集中していた風船の如き最上の意識に、三隈の寝言は針のように突き刺さった。

己を無にしていたが故に、外部からの刺激に対する抵抗がなくなっ  
てしまっていたのである。

(ボンジョルノって挨拶、よくしてくるのは……あれ、誰だっけ。いや、よく聞いているんだけど。どれが誰か、出てこない……!)

ボンジョルノ。

グーテンモーゲン。

チャオ。

誰だったか——と必死に考えた結果、一人の艦娘のことを思い出  
す。

「そうだ、ルイージだ!」

しかし、そこで更なる疑問が最上の意識を侵食する。

「待った。ルイージは各国を渡り歩いてきた艦歴の持ち主だ……だから挨拶はいろんな国の言葉を使う。ボンジョルノもグーテンモーゲンもチャオも別々の国の挨拶だったはず……」

となると、ボンジョルノは結局どこの言葉なのか。

そもそもあの子はどこの国を渡り歩いてきたんだったか——。

「つて、これじゃ寝られないよーっ!」

集中が完全に途切れてしまい、頭の中がカオスなことになってい  
く。

時刻は二時半。

最上は一人、強大な敵を前に、打ちひしがれるのだった——。

翌日。

夜勤上がりの潜水艦隊が朝食を取ろうと間宮に向かっていると、目  
の下に大きなクマを作った最上と、それを支えながら歩く三隈の姿が  
あった。

「どうしたんでち？ 最上すこぶる調子悪そうだけど」

「風邪でも引いたー？」

心配そうに声をかける伊58とルイージを見て、最上は一瞬身体を硬直させた。

「ルイージ……」

「なーに？」

「ボンジョルノって、何語？」

「え、イタリア語だけど……」

突然何を言っているんだろう、と思いつつ、ルイージは最上の疑問に応える。

それを受けて、最上の目から僅かに涙が零れ落ちた。

「そうか——ありがとう」

グツとサムズアップしながら去っていく最上と三隈。

それを見送るルイージたちは、皆訳が分からず首をかしげていた。

「なんだったんだろう？」

「さあ……」

さっぱり理解できない。

ただ、今の最上の後ろ姿を見ると、心なしか朝日がいつもより重く見える気がするのだった——。



虫の心を理解するためには（ジョンストン・舞風・大和）

不快な羽音を耳にして、思わずジョンストンは顔をしかめた。

視線を巡らせると、前方左手に小さな虫がいた。こちらからつかず離れず、隙を窺うかのように同じ場所を飛び回っている。

「——ていつ」

その虫を叩き潰そうと、両手を素早く伸ばし、パァンと打つ。

しかし、掌には何も無い。ジョンストンの未熟っぷりを嘲笑うかのように、虫はジョンストンの周囲をグルグルと飛んでいる。

「この……！」

てい、てい、と虫を叩こうとするものの、その手には何も捉えられない。

なにかカラクリでもあるのではないか。そう思わせるような回避テクである。

「なにしてんのー？ ダンス？」

四苦八苦するジョンストンに、一人の艦娘が声をかけてきた。

日本の駆逐艦——舞風だ。

「だ、ダンスじゃないわよ！ さつきから、私の周りを虫が、うろちよろして！」

話しながらも、ジョンストンは懸命に虫を叩こうと奮戦している。

しかし悲しいかな、あと僅かというところでその手は虫を逃してしまっていた。

「あー。最近虫増えてきたもんねえ」

まいったまいった、と言いながら舞風は自然な動作でジョンストンの近くの宙で手を打ち合わせた。

「え？」

「はい。叩いておいたよ」

広げられた舞風の手には、確かに潰れた虫の残骸がある。

そのまま手を洗いに行こうとする舞風だったが、ジョンストンがそ

の腕を掴んで止めた。

「今の、どうやったの？」

「ん？ 虫叩いただけだよ」

「なにかコツでも？」

「コツっていうほどのものでもないけど、なんとなくここに来そうだなって場所を叩いただけで」

それじゃーね、と舞風は駆け足で行ってしまおう。早く手を洗いたかったのだろう。

愕然とその後ろ姿を見送りながら、ジョンストンは自らの綺麗な手を眺めるのだった。

「虫の動きの捉え方を教えて欲しい——ですか？」

数日後。

突如ジョンストンの訪問を受けた大和は、彼女からの依頼に困惑した表情を浮かべた。

「ええ。最近虫にやたらと噛まれるようになったから、どうにかしたくて」

「それは大変ですね……。でも、なんで私なんでしょう」

話の流れからすると舞風に頼むのが自然ではないか。

そう問いかけると、ジョンストンは「もちろん頼んだわ」と告げた。

「けど、舞風は『あたしは磯風に教わったから、磯風に聞いた方が良いでしょう』って」

「それで、磯風さんは？」

『自分が教えても良いが、武の真髓を掴むのであればやはり大和か武蔵が適任だろう』って」

なんだか磯風のところで話がかなり飛躍しているような気がしたが、わざわざ自分を訪ねてきたジョンストンを帰すのも忍びないと思いい、大和はそのツツコミをあえて呑み込んだ。

「けど虫ですか。うーん、なかなか説明が難しいですね」

「ちなみに大和は虫の動き読めるの？」

「ええ、できなくはないですよ」

試してみましようか、と二人は部屋から出て泊地裏手に広がる森に足を踏み入れた。

この辺りは自然だらけで、そこら中に虫がいる。

ジョンストンは虫が苦手なのか、周囲をかなり警戒していた。

「あ、いましたね」

「どっ？」

「ここですよ」

そう言いながら、大和は手にしていた割箸でひよいと飛んでいた虫を挟み込んだ。

その早業に、ジョンストンは目を輝かせる。

「それ聞いたことあるわ！ 確か武蔵も似たようなことできるのよね！」

「その『武蔵』は多分私の妹じゃなくて宮本さんのことだと思えますけど……いえ、多分うちの武蔵もできるとは思いますがね」

大和が箸を用いたのは、単純に手を汚したくないからだだった。

箸を開くと、挟まれていた虫は再びどこかへと飛んでいく。

「でも、よく虫の場所が分かったわね？」

「いるかもしれないと思って視覚・聴覚を研ぎ澄ませたからですよ。普段だったらもつと接近されなきゃ分からないと思います」

「……研ぎ澄ませせても分からない場合はどうすれば良いのかしら」  
「多分、ジョンストンさんは『虫の音』に慣れていないんじゃないでしょうか。耳で聞こえていても、識別できなければ脳が意識しないものですし」

大和の指摘に、ジョンストンは成程と頷いた。

そもそもジョンストンは虫が、その羽音が大嫌いなのである。

見たくない・聞きたくないと無意識に忌避しているから、識別しにくくなっているのかもしれない。

「虫の動きを捉えるためには、まず苦手意識を克服して、きちんと識別できるようにならないとダメなことね」

「幸いここには虫がたくさんいますし、慣れるにはうつつつけの場所だと思います。私も付き合いますので頑張ってみましょう」

日本が世界に誇る大和型にこう言われては、ジョンストンも覚悟を決めるしかない。

肌が粟立つのを感じながら、ジョンストンは大和と共に、森の奥へと足を進めるのだった。

それから更に数日後。

泊地内を散策していた舞風は、疲れ切った様子でベンチに身を預けているジョンストンの姿を見つけた。

「あ、ジョン！ どうだった、虫退治できるようになった？」

「……虫？」

どことなく虚ろな眼差しのジョンストン。

そんな彼女の頭上に、蚊が一匹飛んできた。

あ、と舞風が気づいたときには、ジョンストンが箸でその蚊を挟んでいた。

目にもとまらぬ早業である。動いたという気配すらなかった。

「すごいねー！ この前とは全然違う……つて、ジョン？」

舞風の称賛の言葉が届いていないのか、ジョンストンはじつと箸に囚われた虫を見ている。

やがて、ほのかに笑みを浮かべると「森へお帰り」と解き放った。

「え？ 逃がしちゃうの？」

「うん。だって、可哀想じゃない」

「え、え？」

先日からの変わり様に舞風が困惑していると、その肩をそつと誰かが叩いた。

大和である。

「大和さん。ジョンは……どうしちゃったんですか？」

「虫を捕まえるため、虫の軌道を正確に読み取れるよう、苦手意識を克服しようとしたんです」

「……いや、克服はできてるみたいだけど」

苦手どころか、慈愛の精神を発揮しているように見える。

「ジョンストンさん、どうもかなり真面目な性格らしくて。苦手なも

のを克服しようと自分に言い聞かせ続けたみたいで、気づいたらあんな感じに……」

「中途半端ができない性質なのか……」

ジョンストンは疲れ切っているのか、再びベンチに背中を預けてぼんやりとしている。

「まあ、多分一時的なものだと思うので」

「それ希望的観測入ってませんか？」

「……アイオワさんたちに怒られたらどうしましようか」

不安そうな表情を浮かべる大和と共に、舞風はじつとジョンストンの様子を窺うことしかできないのだった――。

ジョンストンのこの状態は数日で治り、大和はアイオワたちアメリカ艦娘から怒られずに済んだ。

ただ、それと同時に虫の動きを読むスキルも半減し、ジョンストンは再び虫に苛々する日を過ごすことになったという。

## S 泊地人事評価（択捉・加賀・瑞鳳・古鷹）

S 泊地は、表向き民間企業ということになっている。

内実は日本やソロモン諸島、その他周辺諸国による影響下にある軍事組織だが、公務員というわけではない。

あまり経営状況に余裕はないが、毎年二回のボーナスはきっちり支払われていた。

そして、ボーナスに合わせて行われるのが——人事評価である。

「そろそろ今年も人事評価を進めなければいけないわね」

物憂げな顔で加賀が溜息をついた。

隣に座っている古鷹も気が重そうな顔をしている。

「人を評価するのって、何度やっても大変ですよね……」

「人事・給与にも影響が出るものね。評価する私たちにとっても他人事ではないわ」

一生懸命働いても正当に評価されなければ従業員のモチベーションは下がるし、不適切な人事をすればその人の真価が発揮できなくなることもある。組織をより良いものにするため、適切な人事は必須と言えた。

ただ、人の評価というものは難しい。

業務上、目に見える成果をあげる機会に恵まれない者もいる。

やる気があっても現在の業務と相性が悪い者もいる。

いくつかの視点で見えていかなければ、人を評価するということではできない。

「人事担当がもう少し増やせれば良いんだけどね」

瑞鳳が人事に関するデータを眺めながらぼやいた。

S 泊地も、今はかなりの大所帯になっている。全員分の評価をするのは、並大抵の苦勞ではない。

「人事課設立した方が良いんじゃないでしょうか」

「そうね。今度真面目に検討してみましよう」

択捉の提案に、加賀をはじめとする各員が頷いた。

元々彼女たち司令部は、外部組織との交渉や島民との親善、泊地内

の諸々の統括をしなければならぬ等、かなり忙しい。

それに加えてこの時期は人事評価もせねばならず、全員が憂鬱そうな表情を浮かべていた。

「データは結構集まってるし、少しずつ手を付けていった方が良さかね」

「どれくらい着てるものなんですか？」

「んー、general チャンネルに送っておいたよ」

司令部が使用しているコミュニケーションツールの共通チャンネルに、瑞鳳が URL を貼り付けていた。

それをクリックすると、泊地の各艦隊から届けられた人事評価に関する報告書やアンケートが開かれる。

択捉は興味深そうに海防艦の報告書をクリックしようとした。

しかし、いざ開こうとすると「権限がありません」というメッセージが表示される。

「あ、あ、あ」

「あ、自分と同じ艦種・艦隊のデータは見られないようになってるのよう。ほら、評価に私情が入らないように」

「そういうところは徹底してるんですね」

「身近な人あまりそういうの見られたくないって意見も出てたからねー」

「そういうものですか」

「各メンバーがつけている他己評価なら見られるよ」

古鷹に教えられて、択捉は恐る恐る「択捉の評価」というファイルを開こうとした。

顔を強張らせ、かすかに腕を震わせながらマウスをクリックする。

意欲的に勤務に取り組んでいる：平均4.5

積極的に新しいスキルの獲得に励んでいる：平均4

泊地以外の人（顧客等）とのコミュニケーションが取れている：平均3

泊地内のメンバーとのコミュニケーションが取れている：平均4

周囲に気を配り、他のメンバーのモチベーション向上に一役買つて

いる：平均3

艦娘としての訓練を十分に行っている：平均4.5

備品を適切に取り扱っている：平均4.5

泊地の経営状況等を考慮する等、広い視野を持って活動している：

平均3.5

……

項目ごとの他己評価（5点満点）を眺めながら、択捉は少しずつスクロールバーを下げていく。

評価点というのは、割とそこまで衝撃は受けない。点数という規格に収められた評価だからかもしれない。

問題は、最下部にある「一言コメント」である。

ゴクリと喉を鳴らして、択捉は最下部までバーを下げた。

一言コメント：

特になし

特になし

特になし

特にありません

「……これはどう受け取れば良いんでしょう」

「んー？」

がっかりした様子の択捉のところに古鷹と瑞鳳が集まる。

択捉のディスプレイを覗き込んだ二人は、「ああ」とさして気にした様子も見せず「ここはこんなものだよ」と告げた。

「皆もこの報告書を書くの、結構面倒に思ってるみたいで……。加古とか、まともにコメントしたことなかったような」

「そもそも毎回書くようなことってそんななものね。しっかりとコメントつけてくれる人もいるけど」

「嘆かわしいことね。身近なところからの証言がなければ評価も難しいというのに」

カタカタとキーボードを打ちながら、加賀は人事評価の現状を愚痴った。

一言コメントは、普段接する機会の多い人から見た被評価者の姿を



司令部が掴むための重要な証言なのである。

これがあるのとないののでは、評価のしやすさがかなり違ってくる。

「加賀さんはちゃんとコメントしてそうですね」

「ええ、もちろん。司令部のメンバーは基本的にそうしていると思っているけれど」

「まあ、そこで手を抜くとあとあと困るの自分たちだもんねえ」

瑞鳳が大きく背を伸ばす。

「ちよつと休憩にしようか」

その様子を見て古鷹が提案する。

反対する者はいなかった。

「それじゃ、私向こうでお菓子取ってくるね。提督がこの前お土産を持ってきてくれたから——」

「あ、それなら私も手伝います」

古鷹と択捉が連れ立って出ていく。

残された加賀と瑞鳳は、キーボードをひとしきり打ち終えて——  
ディスプレイをまじまじと見つめる。

「……」

「……」

両者は互いに無言で視線を交わし合う。

沈黙に耐え切れず、先に口を開いたのは加賀だった。

「あなたも、お節介をするのね」

「身近なところからのコメントがあった方が評価しやすいもんね。……でも加賀さん、随分と長文だけど、もしかしてさつき択捉ちゃんがかっかりしてたときからずっと……」

「余計な詮索はしないことね。私の烈風隊をあなたのプラモデルの棚に向かわせるわよ」

加賀の目は本気だった。

こいつは黙っておいた方が良さそうだと、瑞鳳は口のチャックを閉じるジェスチャーをする。

戻ってきた択捉が匿名の一言コメント2件に気づくのは、それから

しばらく経ってからのことだったという。

歩む道は分かれても（海風・山風・江風・涼風）

六月も半ばを過ぎた頃、S泊地の工廠に向かう四つの人影があった。

「いやー、ついに海風の姉貴も第二改装か」

感慨深そうにそう言ったのは、白露型駆逐艦姉妹の末っ子、涼風だった。

「ちょうどハワイから戻ったタイミングだと、なんだか戦勝祝いみたいだな」

「あはは。私、今回はそんな出番なかったから、そういう感じはしないけどね」

照れ臭そうに頬をかく海風。

彼女たちは、先日までハワイで大規模な海戦に臨んでいた。

その帰路にて、海風の第二改装が可能になったという連絡を受けたのである。

「なんだっていいじゃんか。どんな改装になるかだぜ、気になるのは」  
「江風の姉貴みたく黒マント羽織るのかな。あれ格好良いよなあ、あたしも早く第二改装欲しいねえ」

「私にはちよつと合わない気もするけど……」

隣を歩く妹・江風の格好を見ながら、海風は同じ格好の時分を想像してみた。

江風の第二改装は所謂格好良いタイプのもので、さっぱりした性格の江風だからこそ似合うような気がしてしまう。

「山風の姉貴はどう思う？」

「……別に、どんなのでも良い。海風姉は、海風姉だし」

「まあ、そりゃそうだけだよー。こういうのは想像するのが楽しいとこだろ？」

「そういうもの……？」

涼風に疑わしげな眼差しを向ける山風。

普段から涼風のペースに巻き込まれてあたふたさせられることが多いからか、どうも最近は警戒気味のようだった。

そんな、いつも通りの話をしていくうちに工廠に到着する。

ここには常勤の工廠長と、一足先に戻った明石がいるはずだった。

「失礼します」

嚴重なセキユリテイロックを解除しながら中に入る。

すると、そこには海風にとって意外な人物が待ち受けていた。

「——お、ようやく来たか」

作業着に身を包んだ、工廠長よりも若干若い中年男性。

彼は、S泊地のスタッフではない。見覚えのない顔に涼風がきよとんとした表情を浮かべ、山風は警戒したのか海風の後ろに隠れてしまふ。

「え——お、お父さん？」

「……お父さん？」

男性を見て海風が発した言葉に、涼風と山風は意外そうな表情を浮かべた。

艦娘には、艦装に艦の御魂が憑依して顕現するタイプと、人間の身体に艦の御魂を降ろすタイプがいる。

海風は後者だった。つまるところ、元々人間で、普通に家族がいるのである。

ただ、涼風も山風も、海風から人間としての家族の話聞いたことはほとんどなかった。

「え、なんでここにいるの？ 仕事は？」

「はっはっは。横須賀鎮守府に希望を出して、ちゃんと仕事としてこっちに来ている。出張扱いというわけだ。心配は要らんぞー！」

「そうなんだ。……いや、っていうか来るなら来るで予め連絡ちようだよー！」

「なんだ、急に来たら駄目だったか？」

「別に、駄目ってわけじゃないけど」

急に始まった父子の会話に、涼風たちはぼかんとするほかない。

そんな彼女たちの様子に気づいたのか、海風の父は「おっと挨拶が遅れた」と頭をかいた。

「私は上田という。普段は横須賀鎮守府で整備員として働いている。

山風と涼風だね。うみ……海風からいろいろと聞いているよ」

「お、おう……」

「どうも……」

「江風も、久しぶりだな」

「ちつす」

江風は過去に何度か上田と会ったことがある。だからか、涼風や山風ほどは驚いていなかった。

「出張つてことは、海風の姉貴の第二改装絡み？」

「相変わらず察しがいいな。第二改装は艦娘の特質を踏まえて細かい調整をしていく必要がある。それなら親である私以上に適任はいないだろう」

「親バカだねえ」

「放つておいてくれ」

父親がここに来た目的を知って、海風は大きくため息をついた。

「そんなことのために、わざわざここまで来なくても良いのに……。お母さんたちだって反対したんじゃないの？」

「いや？ お土産いっぱい持たせてくれたぞ」

ほれ、と上田は脇に置いていた巨大な鞆を開けて見せた。

中には大量の野菜とお菓子が入っている。

「皆で食べてくれ。うちのカミさんの実家で育てた野菜だ。ウマイぞ」

「そうだった。お母さんお父さんと同じタイプの人だった……」

「海風の姉貴も損な性分だねえ。素直に喜べば良いじゃんかさ」

「それは——」

海風はなにかを言いかけて口をつぐんだ。

その直前に、涼風と山風の方を見たが——それに気づいたのは江風だけだった。

第二改装を実施する海風を工廠に残し、江風たちは食堂に向かっていた。

道中、話題になるのは海風の家族のことである。

「でも、びつくりした……海風姉のお父さん」

「だなー。普段全然そんな話してなかったし」

「悪い人じゃなさそうだったけど」

「お土産どっさりくれたしな！」

三人はそれぞれ、上田が持ってきた大量のお土産を運んでいた。

食堂に持つて行って、どうするか間宮と相談するためだ。

「お前、土産もらったからって信用するのか？ そのうち悪い大人に騙されないか、姉ちゃん心配になってくるぞ」

「なんだよー。っていうか海風の姉貴は知ってたんだな、海風の姉貴の家族のこと」

「別にあたしだって聞き出そうとして聞き出したわけじゃないよ。たまたま、たまたまさ」

海風がそう言うのと、山風は不思議そうに小首を傾げた。

「でも、なんでだろう」

「ン？」

「なんで海風姉、今まで話さなかったんだろう。私たち、何年もずっと一緒にいるのに、ほとんど家族の話、聞いたことない」

少し不服そうな、寂しそうな声。

ずっと一緒だったはずなのに隠し事をされていたような感覚が、山風の胸中をざわつかせていた。

「——多分、ここでは『海風』として生きてるからだろうさ」

工廠に視線を向けながら、海風が言った。

「元人間の艦娘はそういうところが結構複雑なんだよ。中には記憶が残っていないようなものもあるけど、残ってる場合、人間としての自分と艦娘としての自分を持つことになる。それは時として並立させるのが難しくなることもある——ってことさ」

「難しいこと言われてもよく分からねえぞ」

「……海風の姉貴には、弟や妹がいる。人間としての海風の姉貴の弟妹はそっちだ。あたしらは違う。こう言えば分かるか？」

海風の言葉が腑に落ちたのか、涼風と山風の表情が曇る。

二人は人間ベースの艦娘ではない。人間の家族はいない。

涼風や山風にとって、家族はこの泊地の白露型だった。

そんな家族が、一面では赤の他人とも言える——そんな事実は、あまり愉快な事実ではない。

「勿論海風の姉貴はそんな薄情なこと考えてないと思うけど、家族の話をするればあたしらがそういう風に受け取ってしまう可能性は十分ある。だから——姉貴は普段家族の話をしないようにしてたんだらうよ」

駆逐艦・海風としての自分も、海風の姉妹も、彼女にとって偽りではない。

だからこそ、いたずらに傷つけまいと気を使っていたのだろう。

「……もし、深海棲艦との戦いが終わったら。海風の姉貴が艦娘続ける理由はなくなるわけだし——あたしらとは赤の他人ってことになっちまうのかな」

涼風が、どこか不安そうに言葉を紡ぐ。

しかし、江風はそんな妹のおでこをデコピンで思い切り弾いた。

「馬鹿なこと言ってるんじゃないよ、涼風。海風の姉貴が艦娘やめたとして、それであたしらの関係が消えるか？ あたしらの知ってる姉貴は、そんな情のない人じゃねえだろ？」

「それは、そうだけど——」  
「改装終わって姉貴が戻ってきたら、笑って出迎えてやりや良いんだよ」

涼風たちの不安を笑い飛ばすように江風が語る。

「久々にあつちの家族と会ってどうだった、他の家族の話も聞かせてくれてな。どっちも海風の姉貴にとっては家族なんだって、あたしらがそれを認められれば、自然と姉貴もいろいろ話してくれるようになるだらうさ」

上田、明石、工廠長らの尽力によって、海風の第二改装は一段落ついた。

艀装の試運転を終えて、海風は上田と二人で工廠を出る。

「……すまなかったな、いきなり押しかけて」

泊地を歩きながら、上田はぽつりと呟いた。

「どうしたの、急に」

「いや、なんだかこの山風と涼風を驚かせてしまったみたいだったしな。『海風』として暮らしてるところに俺が来たから、もしかしたら邪魔をってしまったんじゃないかと思って」

「それは、お父さんが悪いんじゃないよ。もう何年も一緒にいるんだし、山風たちにも——皆にも家族のこと、ちゃんと話しておくべきだったんだと思う。『海風』であろうと意識するあまり、ここでは昔のことを出しちゃ駄目なんだって考えてたから」

「……確かに、今のお前は『海風』だ。そうあろうとするのは間違っちゃいない」

上田は頭をかきながら、「だけど」と続ける。

「艦娘としての『海風』だけじゃない。父さんや母さんの娘としてのお前も、お前なんだ。どっちもお前だ。使い分ける必要はあるかもしれないが、捨てる必要はない。少なくとも、俺たちは今だってお前のことを大事な家族だと思ってる」

照れ臭いのだろう。

上田は海風から視線を逸らし、暮れゆく空を見上げながら、そう口にした。

「だけど、あの子たちだってそれは同じかもしれない。だから、大変かもしれないけど、どっちも大事にしなさい」

「……うん」

茜色の泊地に行く親子の前には、三人の艦娘が待っていた。

待ちきれず駆け出してくる者。それに引きずられるようについていく者。あとからゆっくり歩いてくる者。

それを見て、上田はどこか安堵したような、それでいて少し寂しそうな表情を浮かべるのだった。



閉ざされた場所にて（翔鶴・大鳳・アクイラ）

なにかが窓に当たる音で目が覚めた。

ぼんやりした頭で外を見ると、物凄い量の雨が降っている。

雨がフィルターになって、外の景色がはつきり見えなくなるような有様だった。

「瑞鶴——はまだ寝ているのね」

相部屋で生活する妹は、まだ深い眠りの中にいるようだった。

時計を見ると、今は午前五時。もう一度寝直すには少々微妙な時間帯である。

部屋の中はムシムシするので、着替えてロビーに出ることにした。そこでのんびり読書でもしながら、朝食時になるまで過ごせば良い。

そう思っていたのだが、いざロビーに行くと、そこには先客がいた。雨ばかりが見える窓の外を、ぼんやりと眺めている。

「大鳳？」

声をかけると、大鳳はこちらに振り返った。

「ああ、翔鶴。おはよう、早いよね」

「ええ、雨の音で起きてしまっただけ」

「私も。天気予報を見てみたけど、今日一日止む様子はないみたいね」  
そう言っただけで大鳳はスマホの天気予報アプリの画面を見せた。

翔鶴が今日の天気を見ると、スマホが小さく震える。どうやらメールが着たららしい。

翔鶴のポケットにあるスマホも同じタイミングで反応を見せた。

「司令部からね。今日は雨風が酷くて危険だから、不要不急の外出は禁止だっただけ」

「この調子なら仕方ないわね」

となると、今日の予定は軒並みキャンセルということになる。

改めて部屋に戻って寝直しても良いかもしれないが、大鳳と話したことで目が冴えて来てしまった。

「……畑の様子でも見に行った方が良いかしら」

「大鳳。それは危険なフラグだから駄目よ。不要不急の外出は禁止でしょう?」

「うう、なにか気になってしまふのよね……」

この泊地は僻地ということもあってか、できるだけ自給自足をすることを基本方針にしている。

そのため艦娘たちは非番のとき農業や土木作業をよく行っていた。だからだろうか、こういうとき畑の様子がどうしても気になってしまふ。

大鳳の気を紛らわすため、翔鶴はロビーにあるテレビをつけた。

以前はDVD等を見るくらい使い道しかなかったが、最近はいんターネットを介してオンデマンドサービスで各種映像番組を見られるようになっていた。かつては速度問題で泣かされる者も多かったが、度重なる嘆願が功を奏したのか、最近ではほぼ問題なく利用できるくらいには改善されていた。

大鳳が好きそうなスパイアクションものを選んで流し始めると、大鳳の視線はそちらに向かうようになった。

「普段から世の中から半ば隔離されているようなところがあるけど、こうして寮から出られなくなると、より一層そういうのを強く感じるわね」

「そうね。こうやってインターネットが繋がってるだけ、大分良くなるんだけど」

「世の中のトレンドも分からないし、深海棲艦との戦いが終わったとして、きちんと生活していけるか不安なところはあるわ」

早朝だからか雨だからか、大鳳のテンションは下降気味のようだった。

無理もないと思う。翔鶴自身、今日はいつもより気分が揚がらない。

だらだらとテレビを見ながら、ときどき窓の外の様子を窺うが、雨足はますます強くなるばかりだった。

それどころか、徐々に雷まで鳴り始める。

「ピツツア……」

と、そこに寝ぼけまなこのアキラが姿を現した。  
部屋着に着替えてはいるが、髪の毛は寝ぐせだらけで、正直寮の外には出せないような状態である。

「アキラ、おはよう。どうしたの？」

「……ピッツア？」

「私はピッツアじゃないわ翔鶴よ」

ぺちぺちと頬を叩くと、アキラはようやく意識を覚醒させたらしい。  
い。

「おはよう。あら、私なんでロビーに着たのかしら」

「多分お腹でも空いてたんじゃない？」

「そういえば小腹が空いているような……翔鶴凄いわね、エスパ？」

あれだけピッツアピッツアと言っていれば誰だって分かる。

そうツツコミたい衝動を抑えながら、翔鶴は「そろそろ朝食にしましょうか」と台所に向かうことにした。

他に献立も思い浮かばなかったので、簡単なピザトーストを用意して三人で食べながら朝を過ごす。

テレビは展開が佳境に入りつつあり、主人公のスパイが敵勢力と本格的にやり合う段階になっていた。

「ひゃあ！ 危ない！」

大鳳は黙々と見るタイプだったが、アキラはリアクションが激しい。  
い。

隣にいとたまに抱き着かれるようなこともある。

最初のうちはリアクションの大きさに戸惑うこともあったが、寮で共同生活を始めてから数年、既にすっかり慣れつつあった。

「え、今の娘さん？ 娘さんよね。大丈夫かしら……」

「今日のピザトースト、風味がいつもと違うけど美味しいわね」

あたふたするアキラとは対照的に、大鳳は至ってマイペースに観  
続けている。

どうやらピザトーストを食べるうちに気分を持ち直してきたらしい。少しずつどんよりした空気が払拭されてきている。

スパイ映画が終わる頃には、巡洋艦や駆逐艦の子たちも起きてきた。

それぞれ朝食を取ったり、ロビーでだらつと過ごしたりしている。テレビでゲームをやりたいという駆逐艦たちに席を譲り、翔鶴たちはロビーの一角にあるソファアーに腰を下ろす。

「改めて見ると、うちってこんなに人がいたのね」

ロビーに揃ったメンバーを見て、大鳳がどこか感慨深そうに言った。

S泊地はいくつかの艦隊に分かれており、艦隊ごとに寮が設けられている。

今ロビーに集まっているのは一艦隊の三分の一程度だが、それでも結構な人数だった。

「雨でやることないから皆ここに集まったのかしら」

「普段は皆外出していることが多いし、これだけの人数が寮で待機しているのはなかなかないかもね」

空気はじめつとしているし、空は薄暗い。

けれど、ある意味ロビーは、いつになく華やかになっているとも言える。

「たまには、こういう日があっても良いかもしれないわね」

翔鶴の呟きに、大鳳とアクイラは小さく頷くのだった。

日々は続いていく（鬼怒・由良・コロラド・陽炎）

ここ最近、S泊地のあちこちで工事の音が響いている。

二〇一四年に再建してから早五年。限られた条件の中で建てられた建築物は、ところどころ傷んできていた。

そのため、泊地全体をリフォームしようという話になったのである。

「しっかしもう五年も経つのか。早いねえ」

「泊地ができたのは更に一年前。六年間——あつという間ね」

雨風の影響でぐらついた柱を補強・交換しながら、鬼怒と由良は往時のことを思い返していた。

二〇一三年に創設されたこの泊地は、二〇一四年に一度壊滅しかけた。

大部分の建物が深海棲艦の襲撃で破壊され、その後艦娘やスタッフが一丸となって再建に勤しんだのである。

「その頃は今みたいにネットが十分に繋がっていたわけでもないんでしょう?」

トンカチで釘を打ち付けながら、コロラドが問いかけてきた。

「ケーブルがこの辺りの海まで来てなかったからね。それに、パソコンやテレビだってほとんどおじやندだったし」

「今にして思うと、あの頃って軽いサバイバル生活してたわよね。私たち……」

当時の苦勞を思い、由良がげんなりとした表情を浮かべる。

「あれはあれで結構楽しかったけどなー」

「鬼怒はタフな艦娘なのね」

「いやー、それほどでも」

付け替えた柱の安定感を確認しながら、鬼怒は照れ臭そうに笑った。

「六年となると、赤ん坊は小学生に、小学生は中学生に、中学生は大学生になるくらい経ってるってことかー」

「鬼怒。そういう具体的な例え出されると地味に心が痛むんだけど」

「いいじゃん、私ら年取らないんだし」

「それはそうなんだけど……」

理屈と感情は別物ということなのだろう。

由良に同調するかのようによくコロラドも頷いた。

「女性に年齢のことを聞いてはいけません。艦娘にはもっと聞いてはいけません。そういう諺があると聞いたことがあるわ」

「それ、誰から聞いたの？」

「オイゲンだけど」

「日本語の解釈ミスだけでなくアレンジまで始めたか……」

鬼怒と由良の脳裏に、海外艦の間で妙な影響力を持つドイツ重巡の「てへっ」という笑顔が浮かび上がる。

「私たちは年取らないですけど、まわりの人たち見ると月日が経ったなーと思うことはありませんね」

会話に加わって来たのは、近くで別の柱の補強をしていた陽炎だった。

陽炎は、この島で暮らす人々のところによく顔を出している。だからか、島中に顔見知りがいるのだった。

「実際、赤ん坊だった子がもううちの学び舎に来るようになったりとか、私たちと同じくらいの年だった子が結婚したりとかっていうのも見かけますよ」

「結婚……え、結婚……？」

「私はまだそういうの意識したことないですけど、さすがに自分と同年代だった子からそれ聞かされたときは時間の流れを感じましたねー。近いうちに子ども見せられる可能性もあるわけ」

「それは、さすがにちよつと複雑な気持ちになるわね」

人間と艦娘の時間の流れの違いを、否が応でも感じてしまう。

祝福するにしても、なんだか妙な感覚を抱いてしまうだろう。

「このまま深海棲艦との戦いが何十年も続いたら、自分と同年代だった子の孫とかにも年齢追いつかれる可能性があるわけね」

コロラドの言葉に、一同はその光景を想像して、なんとも言えない気分陥った。

「そうになったらそうなったで仕方ない気もするけど、なるべく早めに戦いを終わらせたいところね」

「年を取るようになって自分かー。あんまり想像つかないな」

「そうですか？ 鬼怒さんは割と想像つきやすい方だと思いますけど」

陽炎の言葉に、鬼怒は「えー、そう？」と首を傾げたが、由良は力強く頷いていた。

「鬼怒はなんとなく保育士さんとかやってそうなイメージあるわ」

「保育士？ 別に嫌じゃないけど、なんで？」

「賑やかそうな場所の中心にいるイメージがあるのよね」

「そういうイメージかー」

雑談を交えながら、柱のチェックを終えると、鬼怒は腰を下ろして水筒に手を付けた。

「おー、休憩中か？」

そこに、手提げ袋を片手に一人の男が入ってきた。

泊地のスタッフ、板部である。

「あら、ミスター板部、どうかしたの？」

「昼飯食いに行ったら間宮から配達を頼まれてな。今、あちこちにこいつを配ってるところだ」

板部が四人に差し出したのは、小さな銀のカップ。

中身は、プルっとした白いもの——牛乳プリンである。

「村の方から牛乳の差し入れがあったらしくくてな。最近皆働き詰めだろうからと、間宮と伊良湖で作ってみたんだそうだ」

「マミーヤ特製のプリン！ 私、まだここに来てから食べたことないのよ」

「そうかそうか。ならば是非食ってみな。絶品だぞ」

板部から受け取った牛乳プリンを少しだけすくい、口に差し込む。

次の瞬間、コロラドの表情は歓喜の色に染まった。

「冷たくて、甘さもちょうどよくて、とても美味しいわ。この食感もたまらないわね！」

「今度間宮たちに会ったらその感想を直接言ってやるといい。喜ぶ

ぞ」

鬼怒たちも、待ちきれないといった感じでプリンを口に運ぶ。肉體労働の後のご褒美としては、これ以上ないもののように思えた。

その間、板部は修復が進んだ室内の様子を見て感慨深そうに息を漏らした。

「結構進んだんだな。どうだ、大分良くなってきたか」

「うん。これならまた何年かは戦えると思うよ」

「……何年かは戦える、か」

板部は四人の姿を見て、柔らかな笑みを浮かべた。

「そんなになる前に、この戦いが終わると良いんだけどな」

「お、板部さんもそう思う？」

「当たり前だろ。今だって悪いことばかりじゃないが——常日頃からお前たちは戦場と隣り合わせの生活だからな」

鬼怒たちも、泊地のリフォームに専心しているわけではない。

深海棲艦たちの脅威は、すぐそこにある。

だから、いつも海に出る。身命を賭して、この海の平和を勝ち取るうとしているのだ。

「俺が生きてるうちに、お前たちが戦いのない日常を過ごす光景を見てみたいもんだ。……よろしく頼むぞ？」

そう言って、板部はひらひらと手を振って出ていった。

おそらく、まだまだ回らなければならぬところが沢山あるのだろう。

「……頑張らないといけないわね」

板部の背中を見送りながら、由良が言った。

鬼怒・陽炎・コロラドも頷き、立ち上がった。

「さーて、それじゃあとひと踏ん張り！ ここの工事もあとちよつと！ 気張って行こー！」

「おーっ！」

泊地の日常は、特別なことがあるわけでもなく、同じようなことの



繰り返しである。

絶賛する程素晴らしいものでもないし、忌み嫌うほど悪いものでもない。

ただ、少しずつ進んでいく。変わっていくものがある。

いつかは——終わりがくるのだろう。

だからこそ、彼女たちは今日という日を力いっぱい過ごしていく。より良い明日に繋げていくために。

それが、南の彼方、南端泊地であるS泊地の日常風景である。

戦艦たちの忘年会（扶桑・日向・山城・伊勢・長門・陸奥）

二〇一九年、暮れ。

深海棲艦との広域のかつ大規模な戦いも一段落つき、S泊地の面々はホニアラ市で思い思いにくつろいでいた。

深海棲艦による襲撃で荒廃した市街の復旧。

それが、ここ最近の彼女たちの日課だった。

だが、それも年末年始は一休み。

提督から「一月三日までは全員休め」の命令を受けた艦娘たちは、それぞれ年越しのときを楽しんでいた。

「——というわけで、今回もお疲れ様」

市内にあるバーの一角に、六人の艦娘が集まっていた。

長門・陸奥・扶桑・山城・伊勢・日向の六名である。

陸奥の音頭に合わせて、全員は「乾杯」と杯を打ち合う。

「今更だけど、意外と珍しい組み合わせよね、この六人って」

「まず長門があまりこういう場に顔を出さないものね」

揃った顔触れに対する山城のコメントに、陸奥が長門の脇をつつきながら応じた。

「良いんじゃない？ 日本戦艦チームで集まるっていうのも」

「私はアンタたちと飲んでるのが少し複雑な気分よ、伊勢」

「そうつれないこと言わないでよ、ね・え・さ・ま」

「ぞくつときた。今、ぞくつと来たわ……！」

艦艇だった頃の扱いの差からか、山城はどこか伊勢・日向に対するコンプレックスが拭いきれずにいるようだった。

もつとも、以前に比べればかなり改善されている。今のような軽口の応酬も、前はとてもできなかっただろう。

「……そういえば、日本戦艦チームといえば、金剛たちや大和たちはどうしたの？」

「大和たちは夕雲型に、金剛たちは海外艦チームに持っていかれてし

まった。海外艦チームは、今度入ってきたメンバーを交えた多国籍交流会なるものをやるそうだ」

山城は安堵するような吐息をこぼす。

「呼ばれなくて良かったわ。私、何を話せばいいか分からないもの……」

「あら。海外艦の間では貴方と扶桑、凄い人気なのに」

「どうせ艦橋が珍しいからって言うんでしょ」

陸奥の言葉に唇を尖らせる山城だったが、長門はそれを笑って否定した。

「いや、お前たちの奮戦ぶりを知っている口振りだったぞ」

「西村艦隊の誰かから聞いたのかもしれないわね」

「……そ、それはそれで恥ずかしくなるから、嫌んだけど」

「お、山城照れてる」

「うっさい黙りなさい伊勢」

和気あいあいと酒を飲みながら語り合う四人。

一方、片隅に座っている扶桑と日向は、互いに黙ったまま静かに飲んでいた。

「……」

ちらりと二人の様子を見て、山城が目線で伊勢に「話を振れ」と訴える。

やれやれ、と頭をかきながら、伊勢は二人に改めて杯を向けた。

「二人とも、今回はお疲れ様。ダバオ沖では長門たちと揃って、獅子奮迅の働きしたそうじゃない」

「ええ、まあ……」

「そうだな、うん……」

どこことなく気まずそうに頷く二人。

先日、深海棲艦との間で開かれたダバオ沖海戦において、扶桑と日向は航空戦力の要として長門たちを支援した。

そんな二人の存在を厄介だと思ったのか、深海棲艦の攻撃は両者に集中。日向が直撃を喰らいそうになったところで扶桑が庇い、重傷を負うことになったのである。

今はこうして回復しているが、戦闘行為はまだ禁じられている。

常人に比べると傷の治りが早い艦娘だが、それでもしばらくは絶対安静にしなければならぬほどの怪我だったのだ。

そんな傷を負った扶桑に対し、日向は「私など庇うからこうなるんだ」と非難の言葉を向けたらしい。

そのせいか、二人の間には終始微妙な空気が漂っている。

(忘年会という名目で集めたのは、失敗だっただろうか)

長門がそんな不安を抱いたとき、山城が「はああ」と大きく息を吐きだした。

心なしか顔が赤くなっている。どうやら、早くも既に酔いが回っているようだった。

「姉様」

「な、なあに？」

「日向に言いたいことがあるなら、言ってみればいいんです。庇った姉様に文句つけるなんて、何様よ何様！」

「む」

山城の剣幕に、日向は若干たじろいだ。

そんな妹の横腹をつつきながら、伊勢も口を挟む。

「いやいや。日向はきつと扶桑に無茶をして欲しくなかったんだろう。別に扶桑の想いまでは非難してないと思うよ？　ね、どうなのさ

日向」

「いや、それは……」

「なによ、言いたいことがあるならハッキリ言いなさいよ」

からかうような伊勢と酔った山城に囲まれて、日向は珍しく助けを求めるような視線を長門たちに向けてきた。

「観念して素直に思いの丈言った方が良いと思うぞ、うん」

「そうそう。今更遠慮するような相手はいないでしょ、この場には」

「くっ、味方がいない……！」

やがて観念したのか、日向は両手で降参のポーズを取った。

この場に白い旗があれば振っていたことだろう。

「分かった。悪かった、扶桑。あのときは気が動転していたんだ。言

い過ぎた」

「いえ、いいのよ。私こそ、無茶してごめんなさい」

「……まあ、今後ともあまり無茶はして欲しくないところだが」  
「身体がね」

勝手に動いてしまったのだと、扶桑は語った。

天を覆いつくすような敵の艦載機。

味方を守るべく、日向は一步前に出た。

後は頼むと、扶桑に託すような視線を投げかけて。

「そんな日向の姿を見たら、なんだか山城のことを思い出してしまつて」

「私……ですか？」

「ええ。まあ、実際にそういうことになってしまったのは、あのときも私の方なのだけど」

あのとときというのが何を指すのか、この場に集まった者は全員が分かっていた。

艦艇だった頃の、レイテのことだ。

「不思議なものね。自分が沈むのは、意外と怖くないの。でも、山城が沈む姿は絶対に見たくない。……不思議ね、あときはそれと同じ想いを日向にも持ったのよ」

「……少し運命の歯車が違っていれば、お前たちは姉妹だった。そういう思いが生じるのは当然なのかもしれない」

伊勢・日向は元々扶桑型として誕生するはずだった艦だ。

そういう来歴が、艦娘となったあともどこかで残っているのかもしれないなかった。

「……まあ、そういうのはどうでもいいが」

日向は酒杯を片手に、扶桑へと差し出した。

「頼むから無茶はしないでくれ。私だって、……扶桑が沈む姿は見たくない」

「そうね。互いに、気をつけましょう」

仲直りの乾杯。

それを見届けた伊勢が、にまにまと笑いながら長門にこっそりと耳

打ちする。

「今、日向、ね……って言いかけてたねえ」

「そこは弄ってやるな。多分泣くぞ」

「それはそれで見てみたいような」

「怖い姉だな、お前は」

呆れ顔の長門に、ふふふと笑う伊勢。

酔って日向に絡む山城と、それを止める扶桑。

そんな五人を見守りながら、陸奥は一人静かに微笑む。

「いろいろあったけど——今年も良い終わりを迎えられるそうね」

顔は見えずとも（北上・大井・間宮・伊良湖・旗風）

世界中で感染症が大流行している。

その影響は、南方の地にあるS泊地にも及んでいた。

艦娘とて病気にはなるし、万一本人が無事でも周囲に感染させてしまう可能性がある。

それに、艦娘は依頼があれば世界の海を駆け回るのだ。感染症を運んでしまうリスクは常に抱えている。

それ故に、かなりの規模で広がりつつある感染症対策は徹底して行う必要があった。

S泊地の上層部はこういうことにおいてかなり細かい。

艦娘・人間問わず、泊地で勤務する者はマスク着用必須。

泊地外の人間との接触は司令部が許可しない限り原則禁止。

オンラインで実施できることは基本オンラインで済ませる。

工場勤務や食事処といった施設は衛生管理を徹底する。

必要なものは申請すれば司令部で一通り用意する。

そんな方針を早々に打ち立てて、泊地内に布告したのであった――

「暑い……」

マスクを着用した北上が、げんなりした顔で間宮食堂までやって来た。

この南方の地の夏、マスク着用の義務付けは罰ゲームに近いものがある。

体方面への影響を考慮してか、出撃中はマスク着脱自由になるので、出撃した方がましだという声もちらほらと出てきていた。

最近は深海棲艦の動きも落ち着いているので、接敵の危険性も低い。息苦しい泊地から出たいということなのだろう。

「つて、まだ営業再開してないんだ」

間宮食堂は、衛生対策が十分な状態になるまで休みになっていた。

そろそろ再開しているのではと淡い期待を抱いて来たのだが、無駄

足になってしまったらしい。

「ん？」

去り際に未練がましく窓の中をちらりと見ると、そこには何人かの艦娘の姿があった。

その中には、北上の相方である大井の姿もある。

「大井っち、なにしてんだろ」

「開店準備を手伝ってもらってるんですよ」

少し離れたところで荷物を運んでいた間宮が声をかけてきた。

どうも独り言を聞かれてしまったらしい。

「お店の中に仕切りを設けたり、ウイルス対策のためのコーティングをしたり。私と伊良湖ちゃんだけだと大変だろうからって、何人かの方が手伝いを名乗り出てくれて」

「へー、それで大井っちも名乗り出たんだ。さすがだねえ」

大井は厳しい言動でコワイ人だと思われがちだし、実際にコワイところもあるのだが、一方で面倒見の良い部分もある。

困っている人がいれば「仕方ないわね」と文句を言いながらも、助力を惜しまない。それが大井という艦娘だった。

「それじゃ、私も手伝うかなー」

大井が手伝っているのを知りながらこのまま帰るのはさすがに気まずい。

北上はやる気があるのかないかよく分からないテンションで腕まくりをすると、早速間宮食堂に入っていった。

「前が見えない」

食堂の席に仕切りを設け、試しに座ってみた大井は、開口一番不満げにそう漏らした。

正面の席には北上が座っている——はずである。しかし、見えるのは北上の頭頂部くらいで、顔は全然見えない。

「まあ、安全性を考えたら仕方ないんじゃないかなー」

「それは分かっています。分かっていますけど……!」

口惜しそうに頭を振る大井。



そこに、一緒に開店準備を手伝っていた旗風がそつと鉛筆と紙を差し出してきた。

「……えつと、旗風。これでなにをすればいいの?」

「昔の貴人は、顔が見えない相手とは主に文でやり取りしていたと言います」

「つまり、これで正面の北上さんとやり取りしろと……?」

「普段やらないことでしょうし、どきどきすると思いませんか?」

「いや、それはどうかしら」

確かに自分たちは少し前の時代にルーツを持つ存在だが、旗風が言っているのはもつと遠い古代の文化だろう。

そういえば、先日仕事で一緒になった春風が「最近妹が平安時代に凝っております」と言っていた。

「まあまあ、試しにやってみたらいいんじゃないかな」

「うーん……」

どこか気乗りしない様子で、大井は「今日は手伝ってくれてありがとうございます」と書いた手紙を仕切りの隙間から北上に差し出した。

それから一分も経たないうちに、今度は北上から文が差し出された。

『今度一緒に食べに来ようねー』

特になんてことのない文言である。

しかし、それが文として顔の見えない相手から差し出されたことで、大井の中に妙な高揚感が生まれていた。

『またパフェが食べたいです』

『美味しかったよね』

『北上さんはなにか一番好きですか?』

『ここのは全部美味しいからなあ、決められないよ』

『私も全部好きです』

『大井っち、筆が乗ってきたねー』

気づけば、何往復も文のやり取りを繰り返していた。文を書くスピードも、徐々に上がってきている。

ハツと横を見ると、微笑ましげにそのやり取りを見守る旗風や伊良湖の姿がある。

なにか言い訳をしようかと思ったが、言えば言うほどドツボにハマる予感しかない。

大井は、大人しく観念することにした。

「大井さん、文とペン常設するようにはましようか？」

笑顔の伊良湖に尋ねられて、大井は視線を逸らしながら「い、いいんじゃない？」と声を震わせるのだった。

## 霧の海の探偵さん（ジェーナス他）

クリスマス間近の頃、S泊地の面々はイギリス近くの海上で日々を過ごしていた。

先日まで行われていた大規模な輸送作戦を終えて、各国首脳陣はロンドンで今後の方針についての会議を進めている。

ソロモン諸島を代表するS泊地の提督もその会議に参加しているので、艦娘たちは待機を命じられているのであった。

「せっかくのロンドンなのに、都市に入れないのはつまらないわ」

船室で面白くなさそうに机へ突っ伏しているのは、S泊地に属する艦娘・ジェーナスだった。

イギリスの駆逐艦の艦娘ではあるが、普段はソロモン諸島にいてロンドンには随分と久々である。

しかし、今年は世界的な病が流行っている。艦娘も病気にはかかるので、大事を取って都市への出入りはある程度制限されることになっていた。

「それは仕方ないって納得できるけど、なんでちゃっかりジャーヴィスは提督についていってるのよ」

ジェーナスの不満の原因はそこにあった。姉妹艦であるジャーヴィスは、いつの間にか会議に参加する提督のお供に加わっていたのである。呑気な顔して「お土産買ってくるねー！」などと saying いたが、そういう問題ではないのだ。

そんなとき、扉をノックする音が聞こえた。

ジャーヴィスならいちいちノックなどせず一気に開け放っているだろう。彼女が戻って来たというわけではなさそうだった。

「はい、どちらさまー？」

扉を開けると、そこにいたのはドイツの艦娘、レーベとマックスだった。どちらもS泊地に属している同僚である。

同じ駆逐艦の艦娘同士、普段からそれなりに交流はある。レーベとはよくスポーツをする仲でもあった。

二人はどことなく困った様子で、手にしていた紙を見せながら「こ

れ、見なかった？」と尋ねてきた。

紙に描かれているのは、ウイスキーの瓶である。

「ううん、見てないわ。これがどうかしたの？」

「なんでも、今回の戦勝祝いでことでザラが買って来たみたいなんだ。皆で飲もうって言ってたけど」

「まあ、ポーラへのご褒美なんでしょうね。かなり高級で、滅多に買えないものらしいわ」

「へえ。どれくらいするの？」

「……聞かない方が良くないかしら」

どことなく憂鬱そうな顔色で、マックスが視線を逸らす。

普段からポーカークーフェイスなマックスにしては、割と感情が表に出ている。それだけ困っているのだろう。

「それが、なくなっちゃったってこと？」

「うん。昨日はザラが買い出し担当だったんだけど、出かける前にはあったはずなのに、戻ってきたらなくなってたんだって」

「ポーラが勝手に飲んじゃったんじゃないの？」

酒を前にと駄目になる艦娘は何人かいるが、ポーラはその筆頭格だった。

美味しそうな高級ウイスキーを前にしたら、自制心が大破してしまふということも十分あり得る。

「僕らもそう思ったんだけど……実は、ポーラには完璧なアライバイがあったのよ」

「完璧な？」

「そのとき、ポーラはザラと一緒に買い出しに行ってたの。だからザラの留守中になにかするのは不可能」

そうなる、途端に心当たりがなくなる。

「だからこうして地道に聞き込みしてるんだ。ザラたちだけだと大変だろうからって」

「なるほどね。そういうことなら私も協力するわ。ちようど退屈していたところだし」

そう言うと、ジェーナスは素早くコートを着込んで帽子をかぶり、

どこからともなく虫眼鏡を取り出した。

「失せもの探しは探偵の仕事。この名探偵、ジェーナス・ホームズに任せなさい！」

名探偵と助手二人は、船内を練り歩いた。

隙間や物陰らしきものがあれば、すかさず虫眼鏡で覗き込む。

誰かの姿を認めれば、逃さず捕まえ尋問する。

そんな調子でほぼ船内を一周したのだが——正直なところ、成果はサツパリだった。

「うう……全然見つからないじゃないの」

「こうなると船外に持ち出された可能性もありそうね。今、ローマは出かけているみたいだけど……」

「今日は待機予定って聞いてたけどね。でも、まあ」

ジェーナスとレーベは微妙な表情を浮かべた。

ローマはイタリアの艦娘で、性格はかなり真面目な方だ。他人のウイスキーを勝手に持ち出すとは考えにくい。

「どう、見つかった？」

とりあえずザラたちに報告をしようと、ジェーナスたちは調理室にやって来た。

元々はここの棚にウイスキーを置いていたようで、ザラたちはこの周囲を探していたのである。

「全然駄目です……」

ジェーナスたちの問いかけに応えたのは、ショックですっかり元気を失っているポーラだった。

ザラもその隣で困り果てている。

「サツパリ見つからないの。誰かが間違えて入れたんじゃないかって冷蔵庫とかも見てみたんだけど」

「どこにもありません。ポーラのウイスキー……」

「皆の、だからね」

しつかりと釘をさすザラだったが、その声がポーラに届いているかは怪しいところだった。

「……ん？」

そのとき、ジエーナスは柵近くの床に少し染みが出来ていることに気が付いた。

近づいて匂いを嗅いでみると、ほのかにウイスキーのような香りが漂っている。

「ねえ、誰かここでウイスキーこぼした？」

「え？ ううん、私たちが戻ってきてからはそんなことなかったけど」「ふうん……」

これまで得た情報に、この染みを付け加えてみる。

ジエーナスの中に、一つの仮説が出来つつあった。

「……もしかしたらだけど、ウイスキーの行方、分かるかもしれないわ！」

「えっ!？」

その場にいた者たちの視線がジエーナスに集まる。

皆に見られて少し仮説に自信がなくなったジエーナスだったが、言った以上は披露してやろうと、思い切って口を開く。

「この染みはきつとウイスキーがこぼれた跡よ。匂いが残ってるから、そこまで前のことじゃない。ザラたちが戻ってくる少し前の頃だと思うわ」

「うう、全然気づきませんでした」

「多分、ウイスキーを探すことに集中してたせいじゃないかしら。あとポーラからお酒の匂いするから、こっちの匂いが分かり難かったのもあるかも」

なぜ既に酒の匂いを漂わせているのかは気にしないことにした。

水を飲むように酒を飲む。それがポーラという艦娘なのである。

「でもジエーナス。それだと例のウイスキーは」

「ええ。駄目になっちゃった可能性が高い」

レーベの問いにジエーナスが頷く。

それとほぼ同じタイミングで、マックスは調理室の脇にあったゴミ袋を皆に向かって掲げてみせた。

「もしかしたらと思っただけで見てみたけど、瓶のカケラみたいなのが入っ

てたわ」

「おおぅ……私のお酒がああ」

「皆の、だからね」

がつくりとうなだれるポーラと、残念そうな表情を浮かべるザラ。しかし、そんな二人にジェーナスは「多分、なんとかなると思うわ」と告げた。

それはどういう意味か——と、一同がジェーナスに問いかけようとしたとき。

皆の視線に、調理室をこつそりと覗き込む一人の艦娘の姿が映り込んだ。

「ええと、その」

その艦娘——ローマは、とても気まずそうにウイスキーの瓶を掲げてみせた。

「これで、いいのかしら」

ラベルに記されている銘柄は、レーベたちが持ってきた紙に描かれたものと同じだった。

ローマが棚からものを出そうとしたとき、偶然船が大きく揺れて、ウイスキーが落ちてしまった。

それが、この事件の発端だったらしい。

慌ててローマは後始末をしたが、割れてしまったウイスキーはどうにもならない。

持ち主もサツパリ見当がつかなかったので、誰に何をどう言えばいいかも分からなかった。

ならば、同じものを買ってきて補填しておくしかない。

早く動かなければ、同じものが売り切れてしまうかもしれない。

そう考えて、そそくさと外出許可証をもぎ取って、ロンドンを駆け回って来たのだという。

「そこまでしなくても良かったのに」

「いえ。偶然とは言え私がウイスキーを駄目にしてしまったことに変わりはないわ。責任はちゃんと取るべきよ」

真面目か。

その場にいた全員が胸中で同じ感想を抱いた。

「ジェーナスが言ってた『多分大丈夫』って言うのは、これを見越してたの?」

「うん。状況からするとこの場にいたのはローマくらいしか考えられなかったし、ローマだとすれば出かける理由は弁償のためだろうなって見当がついたから」

「なるほど……ジェーナス、あなた意外と頭良いのね」

「マックス、今何気なく失礼なこと言わなかった?」

「ザラやローマたちは、お金は払う、いや払わなくて良い等のやり取りを繰り返していた。」

「そろそろ止めるべきか——というところで、騒がしい足音が聞こえてくる。」

「皆ー、ただいまー!」

提督と一緒に会議に出っていたジャーヴィスだった。どうやら今しがた戻って来たらしい。

その両手には、沢山の荷物を抱えていた。

「おかえり、ジャーヴィス」

「あれ、どうしたのジェーナス。そんなホームズみたいな恰好して」

「ふふん、あとで聞かせてあげるわ。私の名推理をね……!」

得意げに語るジェーナスだったが、哀しいかなジャーヴィスはあまり興味を示してくれなかった。

それより、と荷物を掲げて一同に眩い笑顔を向ける。

「ダーリンからの差し入れ! あとで球磨と多摩もいろいろ持って帰ってくるわ!」

「えらく豪勢ね。どうかしたの、それ?」

「なに言ってるの、ジェーナス。クリスマスパーティーよ! クリスマスパーティー!」

「そういえば、と誰かが声を上げる。」

明日はクリスマスだ。ここ最近では戦いや船上暮らしが長引いていたので、すっかり忘れていた。



「この御時勢だから皆で集まったりはできないけど、他の船とかソロモンの方とはオンラインで映像繋げるんだって。戦勝祝いも兼ねて盛大なパーティをするんだって、ダーリン言ってたわ！」

「おお、良いですね良いですね。いっぱいお酒が飲みそうです！」

イエーイとハイタッチをするジャーヴィスとポーラ。

先程までの事件の余韻は、綺麗さっぱり消えてなくなった。

「それじゃ、球磨・多摩が戻ってきたら私たちも準備進めましょうか」「イエー！」

いろいろあった一年間だったが、S泊地は健在である。

まだまだ深海棲艦との戦いは終わらないが、きつと来年もどうにかなるだろう。

そんな予感を抱きながら、彼女たちはクリスマスを迎えようとしていた。